秋田県文化財調査報告書第173集

国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

―― 上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡 ――

秋田県埋蔵文化財センター

1988・3

秋田県教育委員会

国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

―― 上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡 ――

1988・3

秋田県教育委員会

序

本県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されております。

秋田県教育委員会では、文化財保護の立場から開発事業者側と協議し、鋭意その保護に努めております。

このほど、秋田県土木部により計画されている国道103号大館南バイパス建設事業の工事施行に先立って、事前に計画路線内の埋蔵文化財の分布調査で判明している上ノ山Ⅰ遺跡と上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代前期の竪穴住居跡群や、多量の土器、石器が発見されました。中でも鋒形石器と呼ばれる大型の磨製石器は全国で2例目の発見となりました。

本書は、この発掘調査の成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財保護への御理解と大館・北秋田地方の郷土の歴史解明に御活用いただければ幸いです。

最後に、この調査に御協力いただきました秋田県土木部、北秋田土木事務所、大館市教育委員会はじめ関係機関各位、並びに調査及び本書作成に御協力いただきました関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月25日

秋田県教育委員会
教育長　斎　藤　　長

例　　言

1　本書は、県土木部北秋田土木事務所が昭和55年度より国の補助事業として進めてきた国道改良工事（国道103号大館南バイパス）の昭和62年度事業実施に伴い、計画路線内にかかり消滅する上ノ山Ⅰ遺跡と上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査記録である。

2　本書で報告する2遺跡の立地する仮称上ノ山台地上には、昭和49年から昭和51年に3次にわたり発掘調査された上ノ山遺跡が所在する。この調査成果を収載した昭和54年3月刊行の『大館市史』第1巻では、上ノ山遺跡第1次調査区から第3次調査区として記述されているが、昭和51年3月刊行の『秋田県遺跡地図』や昭和61年3月刊行の『本道端遺跡発掘調査報告書』では、上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・上ノ山Ⅲ遺跡と記載されている。

本書の上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡とは別地区（別遺跡）であり、大館市史編さん係の認識である「上ノ山遺跡」の第4・第5次調査区にあたる。

3　調査は、秋田県埋蔵文化財センターが上ノ山Ⅰ遺跡を昭和62年7月22日から同年12月21日まで、上の山Ⅱ遺跡を昭和62年7月6日から8月24日まで実施した。

4　本書に掲載した地形図は、国土地理院発行5万分の1「大館」「大葛」「鷹巣」「米内沢」「碇ケ関」図幅、大館市教育委員会から提供された2千5百分の1「大館市都市計画図」（昭和55年10月）である。

遺跡付近の航空写真は、県土木部北秋田土木事務所から提供された昭和55年5月撮影の密着焼付写真を部分複写したものである。

5　上ノ山Ⅰ遺跡の竪穴住居跡と沢状地形の実測と写真撮影の一部には、シン航空写真株式会社考案のケーブル・リフティングシステムを採用した。

6　両遺跡から出土した石器類の石質は、秋田大学教育学部　白石建雄助教授に鑑定をお願いした。

7　2遺跡の発掘調査・資料整理に際し、次の諸氏・諸機関から御教示を賜わった。記して謝意を表する。

秋元信夫（鹿角市教育委員会主任）　荒川保徳（大館史遊会々長）　板橋範芳（大館市企画室主任）　遠藤正夫（青森県埋蔵文化財調査センター主幹）　熊谷常正（岩手県立博物館専門学芸員）　小林達雄（國學院大学文学部教授）　坂本洋一（青森県埋蔵文化財調査センター主事）菅原幹雄（北鹿新聞社文化部記者）　田村　栄（秋田県文化財保護指導員）　冨樫泰時（秋田県教育庁文化課学芸主事）中川重紀〔㈶岩手県文化振興事業

団埋蔵文化財センター文化財専門調査員〕　成田滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター主査）鷲谷　豊（郷土史家）　村越　潔（弘前大学育学部教授）　大館市教育委員会大館市企画室市史編さん係　秋田県立大館鳳鳴高等学校　応用地質株式会社地盤工学研究所歴史環境部

8　本書の執筆は、桜田と小畑が次のように分担した。

はじめに…桜田　自然的環境…桜田　歴史的環境…小畑

〔上ノ山Ⅰ遺跡〕

第1章…桜田　第2章第1節・第2節1…桜田　第2節2(1)…小畑　(2)…桜田

第3章遺構等について……小畑　遺物について　前・中期の土器……桜田　後・晩・弥生時代の土器…小畑　土製品…桜田　石器…小畑　石製品…桜田

〔上の山Ⅱ遺跡〕……小畑

凡　　例

1　竪穴住居跡の柱穴に付した数字は、床面からの深さを表わす。（単位cm）

2　各遺構に付している略記号は次の通りである。

SI……竪穴住居跡　SK……土坑　SKI……竪穴遺構

SKF……フラスコ状（袋状）土坑　SL……沢状地形　ST……捨て場

3　上ノ山Ⅰ遺跡から出土した土器のうち、縄文時代前期の円筒土器下層式土器a類～d類は円筒下層a式土器～d式土器、縄文時代中期の円筒土器上層式土器a～d類は円筒上層a式土器～d式土器と略記する。

4　上ノ山Ⅰ遺跡の土層説明中「シラス」とあるのは鳥越軽石質火山灰層とその再堆積物を指す。

5　各遺物に対してある略記号は次の通りである。

RP……土器・土製品　RQ……石器・石製品　S……礫

6　遺跡の土層の色調の記載は「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用したが、色相・明度／彩度の表記を省略したものがある。

7　石器実測図中、スクリーントーンの部分はくぼみ石のくぼんだ箇所を示す。

8　写真図版の出土土器に付している番号は、実測図の番号である。

目　　次

序
例　言 …… ii
凡　例 …… iii

はじめに …… 1
　発掘調査に至るまで …… 1
　調査の組織と構成 …… 2
遺跡の立地と環境 …… 2
　自然的環境 …… 2
　歴史的環境 …… 4

上ノ山Ⅰ遺跡 …… 11
　第1章　発掘調査の概要 …… 12
　　第1節　調査の方法 …… 13
　　1　調査区の設定 …… 13
　　2　発掘調査方法 …… 13
　　第2節　調査経過 …… 14
　第2章　調査の記録 …… 17
　　第1節　遺跡の土層 …… 17
　　第2節　検出遺構と遺物 …… 19
　　1　上位面検出の遺構と遺物 …… 19
　　(1)　土坑・フラスコ状（袋状）土坑 …… 19
　　(2)　埋設土器 …… 22
　　(3)　捨て場 …… 31
　　①　沢 No. 1 …… 31
　　②　沢 No. 2 …… 51
　　③　沢 No. 3（竪穴住居跡） …… 62
　　④　縄文時代後期から弥生時代の遺物 …… 88
　　2　下位面検出の遺構と遺物 …… 88

(1) 第Ⅰ層～第Ⅲ層検出の遺構と遺物 …… 88
① 竪穴住居跡 …… 88
② 竪穴遺構 …… 88
③ 土坑・フラスコ状（袋状）土坑 …… 100
④ 土器捨て場 …… 110
⑤ 各層出土の遺物 …… 110
(2) 第Ⅳ層～第Ⅷ層検出の遺構と遺物 …… 136
① 竪穴住居跡 …… 136
② 竪穴遺構 …… 161
③ 各層出土の遺物 …… 163
第3章 まとめ …… 189
遺跡と遺構について
遺物について
土器
土製品
石器
石製品

上ノ山Ⅱ遺跡 …… 193
第1章 発掘調査の概要 …… 195
第1節 調査の方法 …… 195
1 調査区の設定 …… 195
2 発掘調査方法 …… 195
第2節 調査経過 …… 195
第2章 調査の記録 …… 197
第1節 遺跡の土層 …… 197
第2節 検出遺構と遺物 …… 197
1 遺構について …… 198
2 遺物散布区域と遺物について …… 200
第3章 まとめ …… 208

は　じ　め　に

発掘調査に至るまで

県土木部秋田土木事務所は、国道103号線の大館市内における交通混雑の緩和を目指し、昭和55年度より国の補助事業として大館市山館を起点とし、大館市根下戸を終点とする延長7,677 mの国道改良工事（国道103号大館南バイパス）を計画し、各種調査及び用地買収を進めていた。ところが、各種調査及び大館市へのヒアリングの結果、計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることが判明し、この事実確認と今後の対応について県教育委員会に調査と指導の依頼があった〔昭和60年4月25日付　北土一320　土木部北秋田土木事務所長から教育庁文化課長あて「国道改良工事（国道103号線大館南バイパス）に伴う埋蔵文化財の調査について（依頼）」〕。

県教育委員会では、昭和60年10月8日、9日の2日間調査を実施する旨回答した〔昭和60年9月20日付　秋教文課発第400号　教育庁文化課長から土木部北秋田土木事務所長あて「国道改良工事に伴う埋蔵文化財の調査について（回答）」〕。

教育庁文化課冨樫泰時学芸主事が調査した結果、埋蔵文化財包蔵地及び包蔵地と推測されるのは6地域であり、今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果記録保存の必要なものについては発掘調査を実施すべきことを回答した〔昭和60年10月19日付　秋教文課収第83号　教育庁文化課長から土木部北秋田土木事務所長あて「国道103号大館南バイパスの埋蔵文化財の調査結果について（回答）」〕。

昭和61年6月9日から6月18日まで、用地買収の終了している上ノ山Ⅰ・Ⅱ、餌釣、山王岱の4地域の範囲確認調査を県埋蔵文化財センターが実施した。(註1) この結果、昭和62年度の事業実施に伴い、埋蔵文化財センターが上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡、山王岱遺跡の発掘調査を実施することとなった。

註1　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第155集1987（昭和62年）

調査の組織と構成

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　桜田　隆（秋田県埋蔵文化財センター文化財主任　上ノ山Ⅰ遺跡主担当）
小畑　巌　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事　上ノ山Ⅱ遺跡主担当）
船木義勝　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事　上ノ山Ⅰ遺跡担当）
小林　克　（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事　上ノ山Ⅰ遺跡担当）
武藤祐浩　（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事　上ノ山Ⅰ遺跡担当）

総務担当者　加藤　進　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）

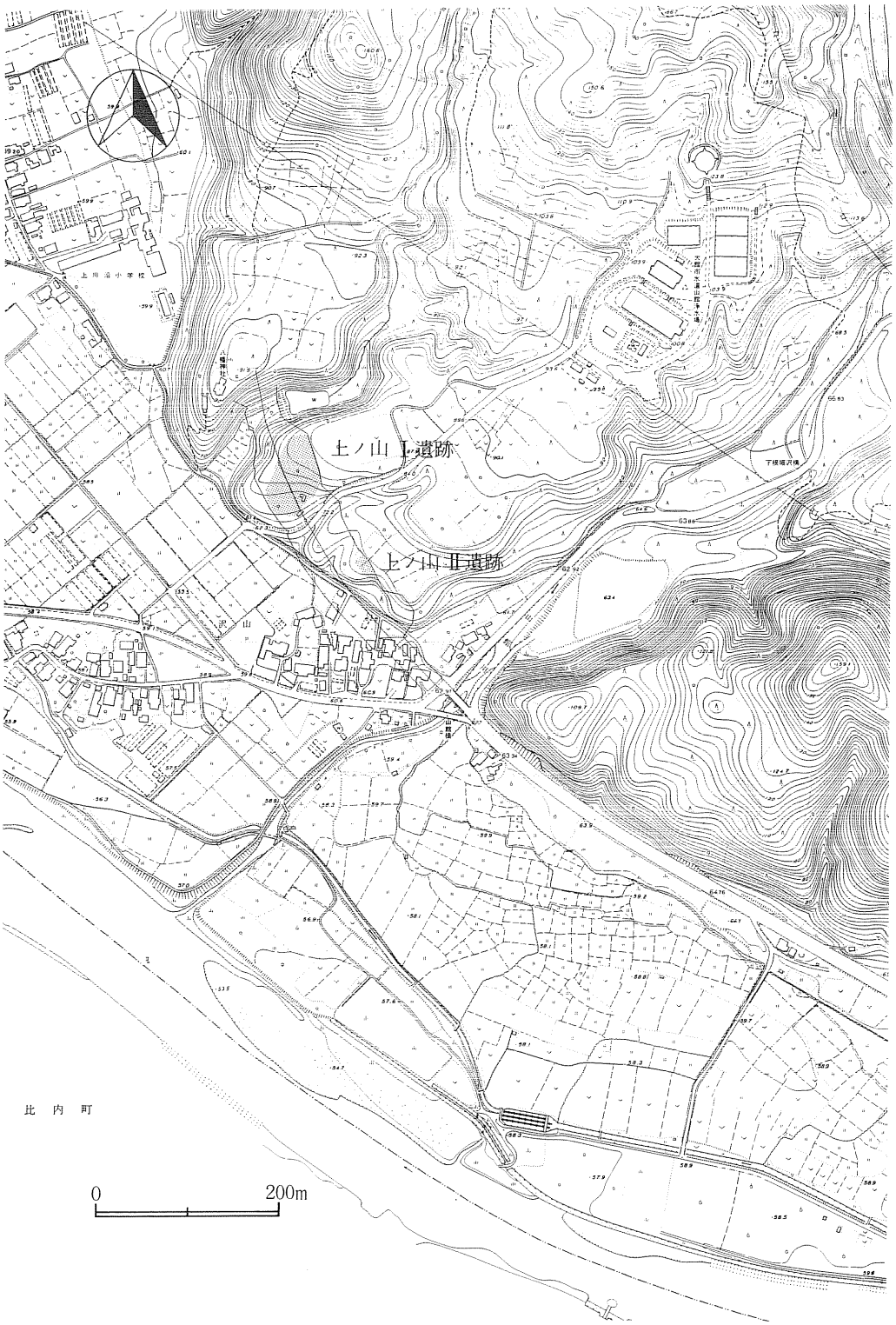
調査協力機関　土木部北秋田土木事務所　大館市教育委員会　大館市企画室市史編さん係　応用地質株式会社地盤工学研究所歴史環境部

遺　跡　の　立　地　と　環　境

自然的環境（第１図、図版１）

秋田県北部中央に位置する大館盆地は、奥羽脊梁山地の西縁の新第三紀、中新世のグリータフ地域に位置する。この構造性の山間盆地と接する四周の山地は、一大断層によって画されていて、東よりの山地は海抜 500 m内外の高度をもち、早壮年期の地貌を呈する。西側山地は海抜高度 200 ～ 300 mを呈する。四周の山地の水系は、盆地を東西に流れる米代川に注ぎ、長木川はこの北を平行に流下してさらに北より注ぐ下内川の水を合して大館市街地ののる台地西端で米代川に合流する。北では長木川、南では米代川に合流するそれぞれの支川は殆んど直交しており、それらの大部分は適従河流の性格が観察される。

上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡は、鹿角市松の木付近から大館市十二所付近までの長さ約 15 km、幅 1.5 km の所謂十二所先行谷低地と呼ばれる峡隘部を米代川が西流し、大館盆地に流入するが、この流入部の盆地東縁の標高 77 ～ 90 mで南東方向に張り出す台地上に位置する。この台地は、鳥越軽石質火山灰層が堆積した所謂鳥越段丘面が、背後の山塊から流下する水に侵蝕あるいは雪蝕されて開析をうけたものである。米代川との間に広がる沖積低地との北高は 18 ～ 30 mである。台地上面には、２段の平坦面が形成されている。



第1図　遺跡の位置

歴史的環境（第2図、第1表）

上ノ山Ⅰ遺跡、上ノ山Ⅱ遺跡のある台地は、豊富な沢水による侵食を受け、また大館市の施設に通じる道路などにより分断されているが、本来はひとつの大きな台地である。現在この台地の下には、畑作園芸を主とする山館や餌釣の集落があり、台地上にもホップ畑、りんご園などが散在している。ここでは上ノ山Ⅰ、上ノ山Ⅱ遺跡が営まれた縄文時代を中心に、大館・北秋田のやや広い地域における時間の流れを概観してみる。

まず、先土器時代の生活の痕跡はこれまで知られていなかったが、大型のナイフ型石器が採集されていたことが昭和61年に判明した。出土地点は、大館市松木の高館平遺跡（84）で、ナイフ型石器の長さは20㎝をこえる。

縄文時代早期の遺跡は、野沢岱C（7）、鳶ケ長根Ⅲ（8）、鳶ケ長根Ⅳ（9）、横沢（14）の4遺跡が知られ、貝殻文土器が出土している。前期以降晩期にかけては遺跡数の増加が著しく、主なものに上ノ山遺跡第1次調査区～第3次調査区（2、3、4）、山館遺跡（5）、本道端遺跡（6）、池内B遺跡（37）、塚の下遺跡（43）、芋掘沢遺跡（48）、福館・橋桁野遺跡（58）、下茂屋遺跡（72）、赤川遺跡（73）、藤株遺跡（80）の各遺跡が知られる。上ノ山遺跡第1次～第3次および山館遺跡は、上ノ山Ⅰ、上ノ山Ⅱ遺跡の所在する同一台地上にあり、これらは同一の遺跡として把握されるものである。（第3図・第4図）。下茂屋遺跡は、円筒下層a式土器に先行するとされる茂屋下岱式土器群と名づけられた一群の土器を出土している。同様の土器は、芋掘沢遺跡、福館、橋桁野遺跡、餅田屋敷添遺跡（49）、池内B遺跡、上ノ山遺跡第1次調査区などでも出土例が知られるものの、土器群としての型式内容、分布圏など不明な部分が多い。なお、芋掘沢遺跡では、甕棺として利用された円筒下層d式土器が出土している。本道端遺跡は、前期末葉から中期末葉にかけての集落跡として知られ、後期の遺跡では、アスファルトで目を表現した土偶が出土した塚の下遺跡がある。晩期では、上ノ山遺跡第2次調査区・第3次調査区、鳶ケ長根Ⅲ遺跡、藤株遺跡などがある。

弥生時代に入ると、鳶ケ長根Ⅳ遺跡、柏木遺跡（69）などが知られる。縄文時代中期にも集落が営まれた柏木遺跡からは、続縄文期の土壙墓と小坂X式に近似した土器が出土している。

古代では、上ノ山遺跡第2次調査区で竪穴住居跡を検出しているほか、池内A遺跡（36）、大館野遺跡（52）などがあり、池内A遺跡では竪穴住居跡埋土中から十和田火山の降下火山灰が検出され、該期の編年研究のうえから注目された。大館野遺跡では、製鉄遺構を含む集落跡が検出され、遺物としては須恵器の大甕が目を引く。

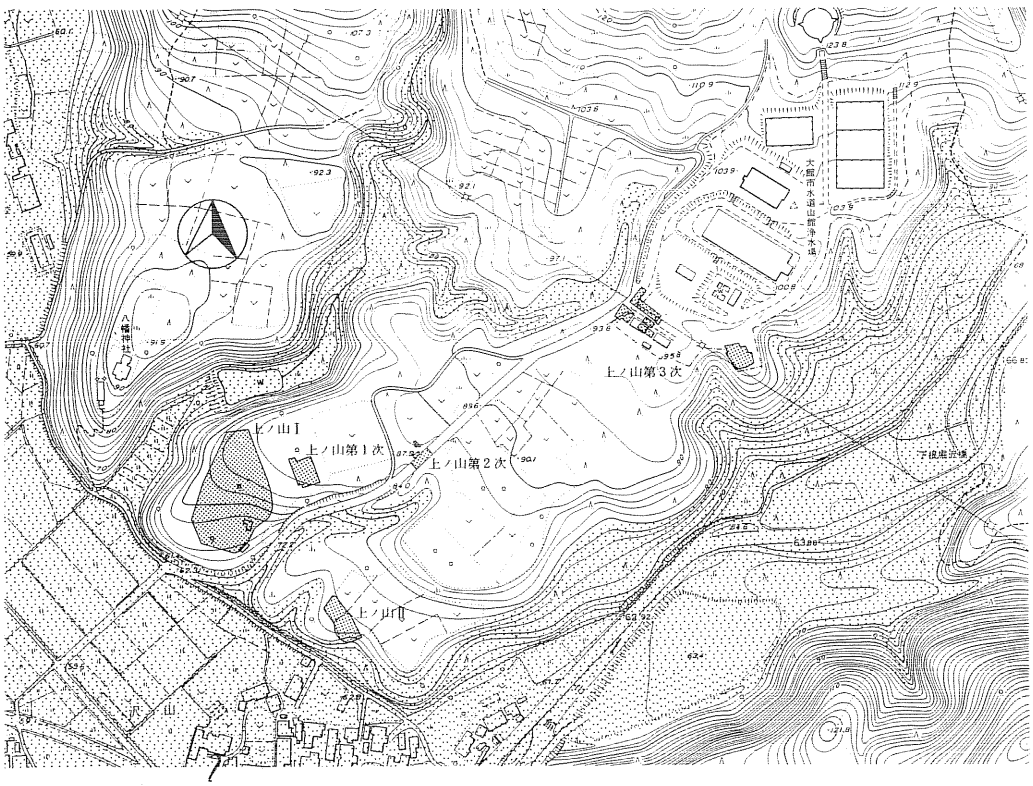
中世以降では、真館（16）、片山館コ遺跡（47）、矢立廃寺ほか多数の城館が知られる。片山館コ遺跡は、南北ふたつの郭からなる連郭式城館とされ、土塁や空堀、竪穴、掘立柱建物跡な

第２図　周辺の遺跡（Ａは上ノ山Ⅰ遺跡，Ｂは上ノ山Ⅱ遺跡）

第1表　周辺の主な遺跡一覧表

遺跡名	時期	遺跡名	時期
1 山館	中世	43 塚の下遺跡	縄文（後期）
2 上ノ山遺跡（第1次）	縄文（前・中期）	44 長根山公園遺跡	縄文（晩期）
3 上ノ山遺跡（第2次）	縄文（晩期）	45 大館城	中世～近世
4 上ノ山遺跡（第3次）	縄文（中・晩期）	46 土飛山遺跡	中世
5 山館遺跡	縄文（前・晩期）	47 片山館コ遺跡	中世
6 本道端遺跡	縄文（前・中期）	48 芋掘沢遺跡	縄文（前・中期）
7 野沢岱C遺跡	縄文（早・前期）	49 餅田屋敷添遺跡	縄文（前期）
8 鳶ケ長根Ⅲ遺跡	縄文（早・晩期）	50 矢立廃寺	平安～中世
9 鳶ケ長根Ⅳ遺跡	縄文（早・後期）	51 中羽立遺跡	縄文（中・後期）
10 萩峠B遺跡	縄文（後期）、中世	52 大館野遺跡	古代
11 萩峠A遺跡	縄文（前期）	53 釈迦湖底遺跡	縄文（前・中・後・晩期）
12 長岡城	中世	54 繋沢遺跡	縄文（前・中期）
13 大岱遺跡	縄文（前期）、平安	55 本郷下遺跡	縄文（晩期）
14 横沢遺跡	縄文（早・中・後期）、平安	56 大森遺跡	縄文（前期）
15 袖ノ沢遺跡	縄文、平安	57 七ッ館	中世
16 真館	中世	58 福館・橋桁野遺跡	縄文（前・中期）
17 宿内中岱遺跡	縄文（前・中期）	59 花岡城	中世
18 十狐城	中世	60 女目館	中世
19 大日堂前遺跡	縄文（中・後・晩期）、平安～中世	61 釈迦内館	中世
20 中野城	中世	62 松木遺跡	縄文（前期）
21 長内沢遺跡	縄文（前期）	63 沼館	中世
22 小堤遺跡	縄文（前期）	64 赤石沢遺跡	縄文（中・後・晩期）
23 谷地中館	平安～中世	65 押館	中世
24 細越遺跡	中世	66 下川沿遺跡	縄文
25 畑沢遺跡	縄文（晩期）	67 向家下館	中世
26 一通遺跡	縄文（晩期）	68 山田館	中世
27 新田館	平安末～中世	69 柏木遺跡	縄文（中期）、続縄文
28 本宮館	中世	70 鳴滝遺跡	縄文（中・後期）
29 前田館	中世	71 越山館	中世
30 杉沢館	中世	72 下茂屋遺跡	縄文（前期）
31 薬師袋遺跡	古代	73 赤川遺跡	縄文（前期）
32 大披館	中世	74 中仕田遺跡	縄文（前期）
33 櫃崎館	中世	75 糠沢遺跡	縄文（中期）
34 餌釣館	中世	76 碇遺跡	縄文（中期）
35 萩の台遺跡	縄文（中期）	77 館平館	中世
36 池内A遺跡	古代	78 下大沢遺跡	縄文（中期）
37 池内B遺跡	縄文（前・中・後期）	79 高森岱遺跡	縄文（前・中期）
38 小館花遺跡	縄文（後・晩期）	80 藤株遺跡	縄文（晩期）
39 小館花館	中世	81 小森遺跡	縄文（晩期）
40 太平山遺跡	縄文（晩期）	82 山の上Ⅱ遺跡	縄文（中期）
41 大茂内遺跡	縄文（晩期）	83 妹尾館	中世
42 茂内遺跡	縄文（前期）	84 高館平遺跡	先土器

どが検出されている。



第3図　仮称上ノ山台地上の各調査区位置図

参考文献

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』　1976（昭和51年）

大館市史編さん委員会　『大館市史』　第1巻　1979（昭和54年）

秋田県教育委員会　『塚の下遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第61集　1979（昭和54年）

秋田県立大館鳳鳴高校社会部　『茂屋下岱式土器群』　1971（昭和46年）

秋田県立大館鳳鳴高校社会部　『赤川遺跡』　1968（昭和43年）1969（昭和44年）

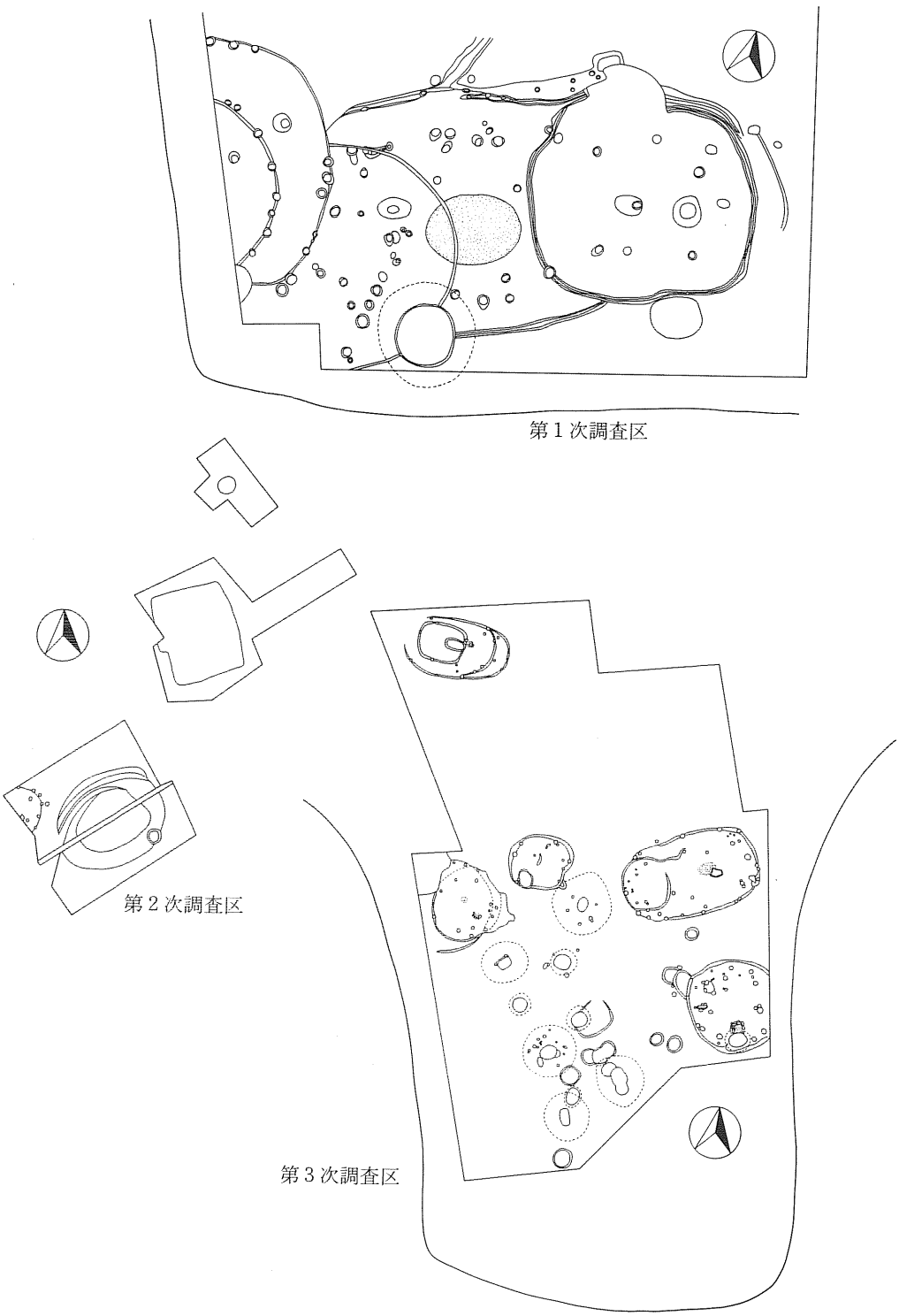
秋田県立大館桂高校社会部　『池内発掘』　1972（昭和47年）

大館市広報　『大館の歴史散歩　遺跡と遺物⑧』（昭和61年11月16日号）

秋田県教育委員会　『国道103号線バイパス工事関連遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集　1981（昭和56年）

比内町教育委員会　『真館緊急調査報告書』　1973（昭和48年）

大館市教育委員会　『矢立廃寺発掘調査報告書』　1987（昭和62年）



第４図　上ノ山遺跡第１次～第３次調査区　遺構配置図　（大館市史編さん委員会提供）

秋田県教育委員会　『藤株遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第 85 集　1981（昭和 56 年）
大館市教育委員会　『芋掘沢遺跡発掘調査報告書』　1972（昭和 47 年）
比内町教育委員会　『本道端遺跡』　1986（昭和 61 年）

上ノ山Ⅰ遺跡

遺跡略号	2KNYⅠ
所在地	秋田県大館市山館字上ノ山56―1外
調査期間	昭和62年7月22日～12月21日
調査面積	3,810㎡
調査担当者	桜田　隆　　小畑　巌　　船木　義勝 小林　克　　武藤祐浩

第1章　発掘調査の概要

第1節　　調査の方法

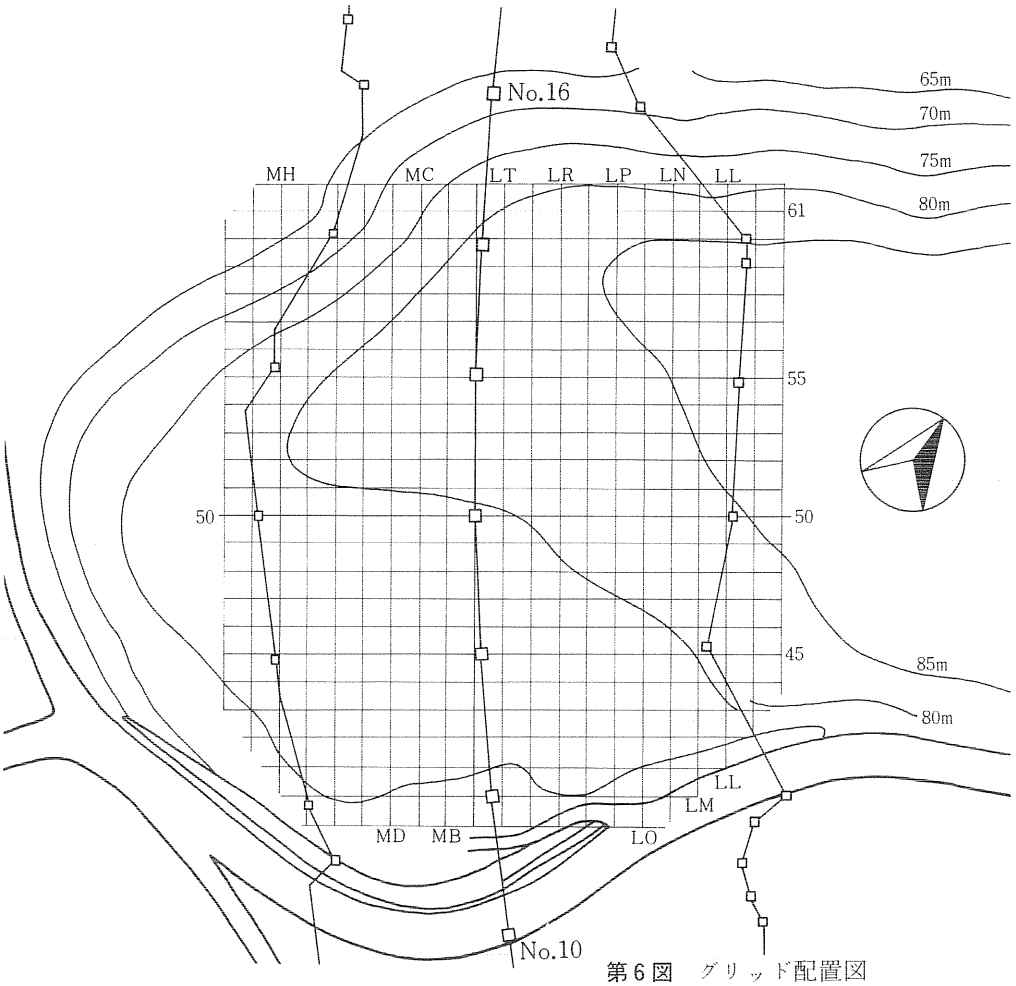
1　調査区の設定　（第6図）

昭和61年6月16日から18日までの3日間にわたり、バイパス用地内において範囲確認調査を実施した結果、台地上から縄文時代前期の土器、石器、弥生時代の土器が出土した他、時代不明の円形を呈する土坑が1基検出された（第5図）。調査対象区域は南半分の下位平坦面と、それより一段高い上位平坦面と緩斜面とに分かれる。以前、リンゴ園であったが用地買収後伐採され、草地となっていた。

北秋田土木事務所が打設した中心杭No.14を仮基準点とし、南側に20ｍ離れて打設されている中心杭No.13とを結ぶ基準線を設定した。この基準線と直交する基準線を設定し、調査対象区

第5図　範囲確認調査トレンチ配置図

域に４ｍ×４ｍの方眼（グリッド）をつくるように杭を打設した。グリッド杭打設後、グリッド呼称を（Ｘ・Ｙ）の方法で表示する関係から、中心杭№13を基準交点（MA・50）と決め南北方向（Ｙ軸）に２桁のアラビア数字（46～65）、東西方向（Ｘ軸）に２文字のアルファベット（LL～LT、MA～MG）を付し、両者を組み合わせてグリッド名とした。各グリッドは南東隅部の杭の（Ｘ・Ｙ）で表示している。なお、グリッドＹ軸はＮ―35°―Ｅを計測する。



第６図　グリッド配置図

２　発掘調査方法

前年６月の範囲確認調査前に、地元の土建業者によりバイパス建設予定地となっている当台地の西側・南側及び北側で不法な土砂採取が行われ、北西側法面に竪穴住居跡とフラスコ状土坑の断面が検出されたことと、調査区北半分の上位平坦面の東側隣地で昭和49年に大館市史編さん委員会が、市史編さん事業として上ノ山遺跡第１次調査を実施し、縄文時代前期から中期にかけての竪穴住居跡５軒、フラスコ状土坑１基、土坑墓１基が検出されていること、及び

範囲確認調査で中心杭に沿って設定されたトレンチ（本調査でＡトレンチと呼称する）の断面観察により縄文時代前期の遺物包含層が確認されていることから、縄文時代の竪穴住居跡とフラスコ状土坑及びそれらに伴う遺物の他、土器の廃棄された〝捨て場〟等の検出が予想された。また、米代川流域の縄文時代前期の土器群については未解明な点が多いため、遺構内での出土状況と共伴関係、包含層における新旧関係・共伴関係を明らかにする必要から礫を含む全遺物の原位置を記録することとした。

記録の方法は、平板測量、遣り方測量、写真測量のいずれかあるいはそれらの組み合せにより、1／20の平面図に土器の小破片と石器・礫は点を、完形あるいはそれに近い土器は外形を記録し、遺物番号・層位・レベルを記入した。

写真による記録は、小型・中型カメラを使用し、モノクロとカラースライド（一部ネガカラーも含む）による。

第2節　調査経過

7月6日に北秋田郡比内町横沢遺跡から発掘器材を搬入したが、発掘調査で掘り出されると予想される2,800㎥の排土の捨て場が確保できないため、排土地が確保できた上ノ山Ⅱ遺跡の発掘調査を開始し、上ノ山Ⅰ遺跡はバイパス用地内に捨て場を造成してから開始することとなった。7月22日から背丈を上回る草を刈り払い、調査を開始した。7月27日に刈り取った草を調査区域外へ運搬し、危険区域及び隣地との境界の内側0.1～1.5ｍにトラロープを張り巡らし注意を喚起することにした。

7月29日から前年の範囲確認調査時に設定されたトレンチの清掃を行ったところ、各トレンチとも地山面まで達していないことが判明したため、各トレンチに便宜上Ａ～Ｉまでの名を付して粗掘りを行った。この結果、Ａ～Ｃトレンチは地山面まで160㎝前後（地点により200㎝）、Ｄ～Ｆトレンチも80～140㎝あり、上層に大湯浮石が堆積していた。Ｆトレンチでは弥生土器片が出土した。西側崖面に平行するようにＧトレンチを新たに設定し、粗掘りを行ったところ、大湯浮石が凹レンズ状に堆積しているのが確認された。Ａ～Ｃトレンチでは、縄文時代前期の土器片の他、石錘・半円状扁平打製石器等が多く出土した。

8月1日からＡトレンチとＧトレンチの間（Ａトレンチ西側下部平坦面）の表土除去を開始した。Ｇトレンチの北東側、緩斜面下方の黒褐色土上に軽石・砂をあたかも敷いたような区域があり、土器片が集中出土した。

8月3日に掘り下げていたＩトレンチで地山と思われるシラス中から深鉢形土器2個体が出土したが湧水激しく、以下の掘り下げを中止する。8月4日に土捨て場の完工検査が終了した

ので、一時的に調査区内に盛土していた排土を土捨て場に運搬した。

8月9日から8月16日まで現場作業を休止した。

8月18日からＡトレンチ西側にグリッド杭の打設を開始した。Ａトレンチ西側の53～58ライン間の第Ⅱ層の粗掘りを行ったが、遺物の出土量が多く、半円状扁平打製石器と石錘が目につく。また、指頭圧痕を付す隆帯の巡る土器片も出土した。8月20日Ａトレンチ西側の46～52ラインでは遺物の出土が激減することから第Ⅱ層における遺物出土状況は、斜面下方にあたる53～58ラインが主となっていることがわかった。

8月25日Ａトレンチ西側下部平坦面のⅢ層上面における遺物の出土状況を写真撮影・実測図化した。Ｇトレンチを掘り下げ、西側壁面での層位確認・プラン確認を行ったが、複雑な様相を呈しており、結論を見い出せなかった。

8月28日Ａトレンチ西側壁の土層堆積状態の実測を開始した。物理探査（電磁波利用）による埋蔵文化財調査を行っている応用地質株式会社の阿部勝彦主査が来跡し、協議の結果9月17日・18日に物理探査試験を実施することにした。

8月31日大館地方が37℃の猛暑となり、作業能率が低下したが、Ａトレンチ北東側の上位平坦面の表土除去を開始する。地山面がすぐ確認できるので馬の背状の平坦面が東西に続いていると思われた。9月5日LL 63の第Ⅱ層中から縄文時代中期の深鉢形土器が1個体直立状態で出土したが、指示ミスのため掘りすぎて原形をとどめていなかった。Ａトレンチ北側緩斜面のMA～MB、54～58ラインに沢状の掘り込みがあり、土器片、石器・礫が多く出土したので実測後収納した。9月9日ME 53・54、MA 55～57の遺物集中区域では黒褐色土中とその下の2次堆積の軽石が混入する黄褐色土層からも出土することがわかった。

9月12日Ａトレンチ東側の下位平坦面の粗掘りを開始する。9月16日Ａトレンチ東側の上位平坦面（57ライン以北）にグリッド杭を打設した。

9月17日・18日の2日間、応用地質株式会社地盤工学研究所歴史環境部の協力により西側下位平坦面と東側上位平坦面で地下レーダー探査実験を行った。現場で解析した仮探査結果では、西側下位平坦面に住居跡の床面の可能性が高い多くの凹型反射体が分布しており、東側上位平坦面では人工的に開削した可能性のある帯状に電磁波の透過性が特に高い範囲が2カ所あることがわかった。北鹿新聞社記者が取材に来跡した。

9月22日東側平坦面でプラン確認作業を行い、58～61ラインで帯状の落ち込み（後に沢No.1と命名）を検出した。この落ち込みは、Ａトレンチ西側緩斜面の沢状落ち込みに続くことが判明した。また、大湯浮石が堆積しているのが認められた。9月24日この沢No.1を写真撮影後、東西1本、南北3本の土層観察用ベルトを設定して掘り下げを開始する。LN 59の大湯浮石層の直下の層中から赤色に塗布された土器1点、LP 59の大湯浮石層から2層下で円筒上

層式土器2個体分が出土した。

9月28日沢No.1 のLR 60の大湯浮石層下60㎝のシラス中から赤色に塗布された土器が1個体分出土した。9月30日沢No.1 の掘り下げが概ね終了したので土層観察ベルトでの分層作業に入るが、最深200㎝なので難渋する。西側下位平坦面でMCラインとMEラインに土層観察用ベルトを設定する。

10月2日沢No.1 のLL～LSラインまでを完掘したので遺物の実測と収納を開始した。沢No.1 は遺物の捨て場として使われたらしいが、出土状態と分布範囲からLN—LQ、LS南側—LR、LS—MCの3つのブロックに分けることができた。

10月13日沢No.1 の沢尻部分（MA～MC）ではシラス層下に酸下鉄分が多いシラス層が認められ遺物量が多い。しかし湧水が多く作業に支障をきたした。10月16日LP・LQラインの斜面で沢No.2 を検出した。沢尻付近の埋土であるシラス層は酸化鉄分の多いシラス層と互層になっているが、ほぼ水平に堆積している。これは沢尻より南側に障壁があった可能性を示していると思われた。10月27日LN 54・55の斜面で新たに沢No.3 を検出した。平面プランからは沢尻部が狭すぎるため竪穴住居跡かとも思われた。埋土中から横倒し押し潰された状態の円筒下層式土器が多数出土しており、プラン全域に広がる様相を見せた。

11月5日船木学芸主事が調査に参加し地形測量を開始した。11月10日東側上位平坦面でプランが確認されていた土坑の精査を開始した。フラスコ状（袋状）土坑がほとんどで、うち1基の埋土中から縄文時代晩期の鉢形土器1個体が倒立して出土した。

11月19日粉雪が舞い、地面が凍結しはじめた。11月21日雷雨、11月24・25日猛吹雪となり、現場は一面15～20㎝の積雪となる。除雪しながら西側下位平坦面の土坑精査、沢No.1、沢No.3 の精査、東側下位平坦面の掘り下げが続けられた。

11月30日武藤学芸主事、小林文化財主事が調査に参加し、西側下位平坦面のプラン確認・精査に従事した。12月1日沢No.3 の遺物出土状況を写真撮影・実測し、収納を開始した。また、SI 03竪穴住居跡、SK 01竪穴遺構の完掘状況を写真撮影した。12月3日SK 02竪穴遺構、フラスコ状（袋状）土坑の完掘状況を写真撮影した。

12月5日SI 05竪穴住居精査開始。12月9日SI 06竪穴住居の精査を開始し、沢No.2 の完掘状況を写真撮影（実測用写真も撮影）した。12月10日SI 07竪穴住居跡の精査を開始した。SI 08・14竪穴住居跡のプランを確認した。沢No.3 の完掘状況・実測用写真を撮影した。

12月12日SI 08・14両竪穴住居跡の精査を開始した。SI 07・11・12竪穴住居跡のプラン確認を行った。12月14日SI 07・11・12竪穴住居跡の精査を開始した。

12月17日吹雪の中で遺構精査と沢No.1 の遺物実測・収納を続けた。夕方、板橋範芳氏・田村栄氏らと大館・北秋田地方の縄文時代前期の土器様相について意見交換したが、円筒下層

a・b式土器、茂屋下岱式土器群についての認識が微妙に異なり、当該期土器分類・編年の難しさを改めて認識した。

12月18日SI 06竪穴住居跡の西側にSI 13竪穴住居跡が確認されたが両竪穴住居跡の地山にあたる第Ⅵ層中から2点の鋒形石器(註)が出土した。埋納されたものかどうか確認作業を行ったが、明確にはできなかった。出土遺物と不要になった発掘器材を埋蔵文化財センターへ搬送した。

12月19日SI 06～08、11～14竪穴住居跡の実測用の写真撮影を行った。沢No.1のLS―MA間の遺物実測・収納作業が終了した。

12月21日吹雪の中、発掘器材・文具・出土遺物を埋蔵文化財センターに搬送し、発掘調査を終了した。

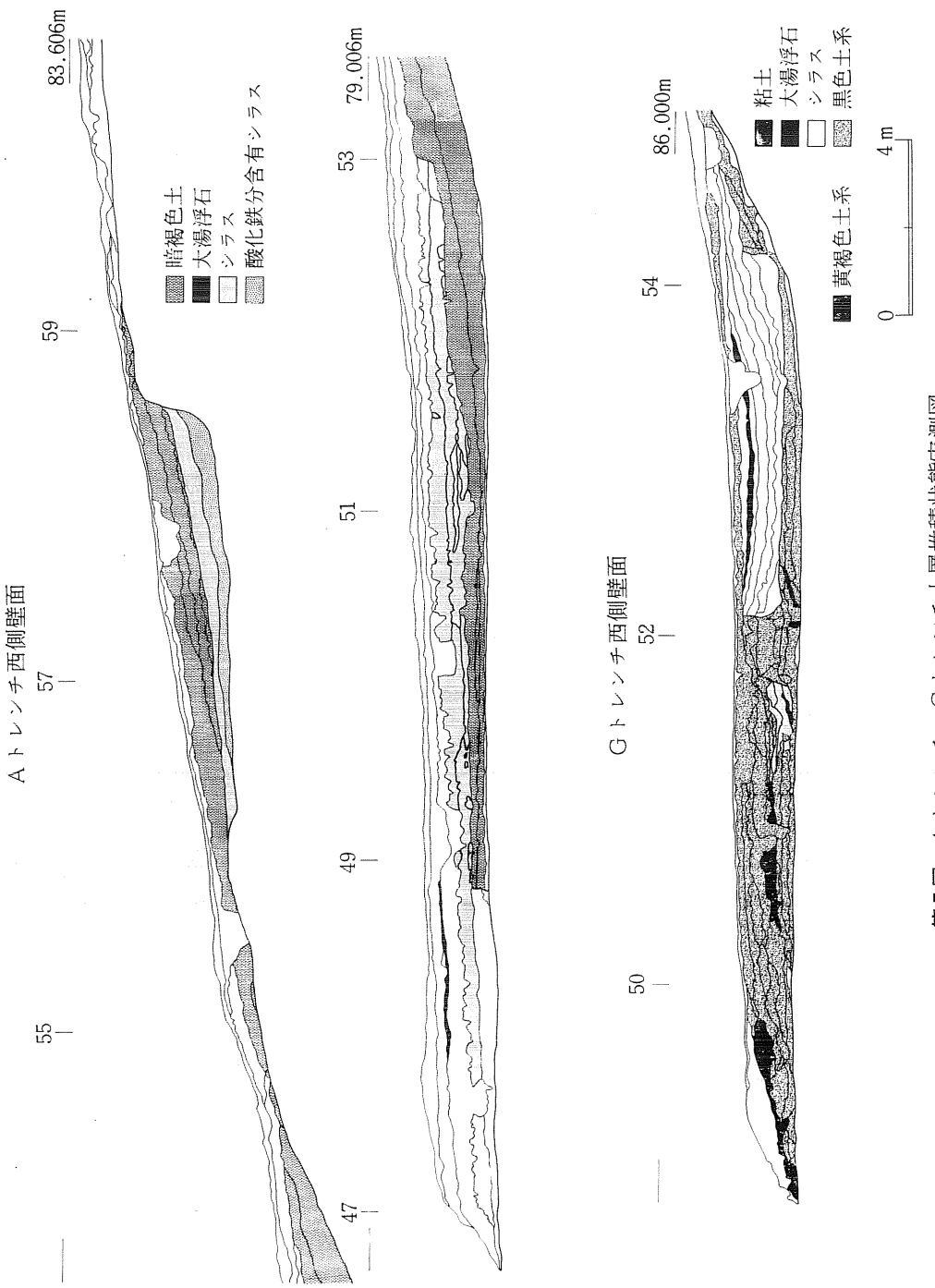
註　当該遺物が出土した際、利器か祭器か明確でないということから矛形石製品という名称を付していたが、岩手県立博物館の熊谷常正氏から、岩手県気仙郡住田町上有住二度成木沢の遺跡から同様の石器が出土しており、柴田常恵氏が大正13年に鋒形石器としてスケッチと写真撮影していることの御教示をいただいた。本遺跡出土の当該遺物について、以後鋒形石器という名称を用いることにする。

第２章　調査の記録

第１節　遺跡の土層（第７図）

本遺跡の発掘調査中に設定した土層観察用ベルトは、遺構と沢状地形を除くと、調査区中央を略南―北に設定されたＡトレンチの西側壁面、調査区西側に設定されたＧトレンチの西側壁面，MCライン、MEラインの４本である。このうちメーンセクションとしてＡトレンチの西側壁面の土層堆積を観察し、遺跡の標準土層とした。

第Ⅰ層	黒色～黒褐色土	層厚15～30㎝	耕作土で風乾すると白っぽくなる。
第Ⅱ層	黒色～黒褐色土	層厚10～30㎝	大湯浮石粒が若干混入する。
第Ⅲ層	黒褐色土	層厚15～30㎝	シラス（軽石粒）が疎入する。
第Ⅳ層	再堆積シラス	層厚20～60㎝	部分的にシラスが分解し、軽石層と砂層に分かれているのがみられる。
第Ⅴ層	黒褐色～暗褐色土	層厚10～20㎝	シラス（軽石粒）が密に混入する。
第Ⅵ層	黒色～黒褐色土	層厚10～20㎝	シラス（軽石粒）が疎に混入する。
第Ⅶ層	暗褐色土	層厚10～15㎝	強粘性。



第７図　Ａトレンチ・Ｇトレンチ土層堆積状態実測図

第Ⅱ層と第Ⅲ層の境目に局部的に層厚５～８㎝の大湯浮石層が挟在する。また第Ⅶ層と地山面の間にも局部的に強粘性の黒色土（層厚５～10㎝）が挟在する。

この標準土層は、第Ⅰ～第Ⅲ層の黒褐色土帯、第Ⅳ層のシラス帯、第Ⅴ～第Ⅶ（一部Ⅷ）層の黒色～暗褐色土帯の３大区別区分できる。

この３大別区分層と遺構の検出状況との関係をみると、SI 05～SI 12 竪穴住居跡はシラス帯に覆われており、SI 03 竪穴住居跡・SKI 04 竪穴遺構はシラス中に、SKI 01・02 竪穴遺構と SK 01～SK 20 土坑はシラス上位の黒褐色土に構築されている。

第２節　検出遺構と遺物

１　上位面検出の遺構と遺物

(1)　土坑・フラスコ状（袋状）土坑　（第９図～第12図、図版８）

上位面で検出したた土坑・フラスコ状（袋状）土坑は10基であるが、うち９基は沢 No.2 東～北側に集中していた。このうち８基がフラスコ状（袋状）を呈する。

SK101 土坑

LN 58 で検出し南側に SKF 107 袋状土坑が隣接する。開口部長径径 112 ㎝、同短径 87 ㎝、底部長径 108 ㎝、短径 90 ㎝の略円形プランを呈する深さ 31 ㎝の袋状土坑の北東側に、長軸 84 ㎝・短軸 77 ㎝の半楕円形プランを呈する深さ 18 ㎝の掘り込みが結合した形態の土坑である。埋土に軽石粒の混入が多い。遺物は出土しなかった。

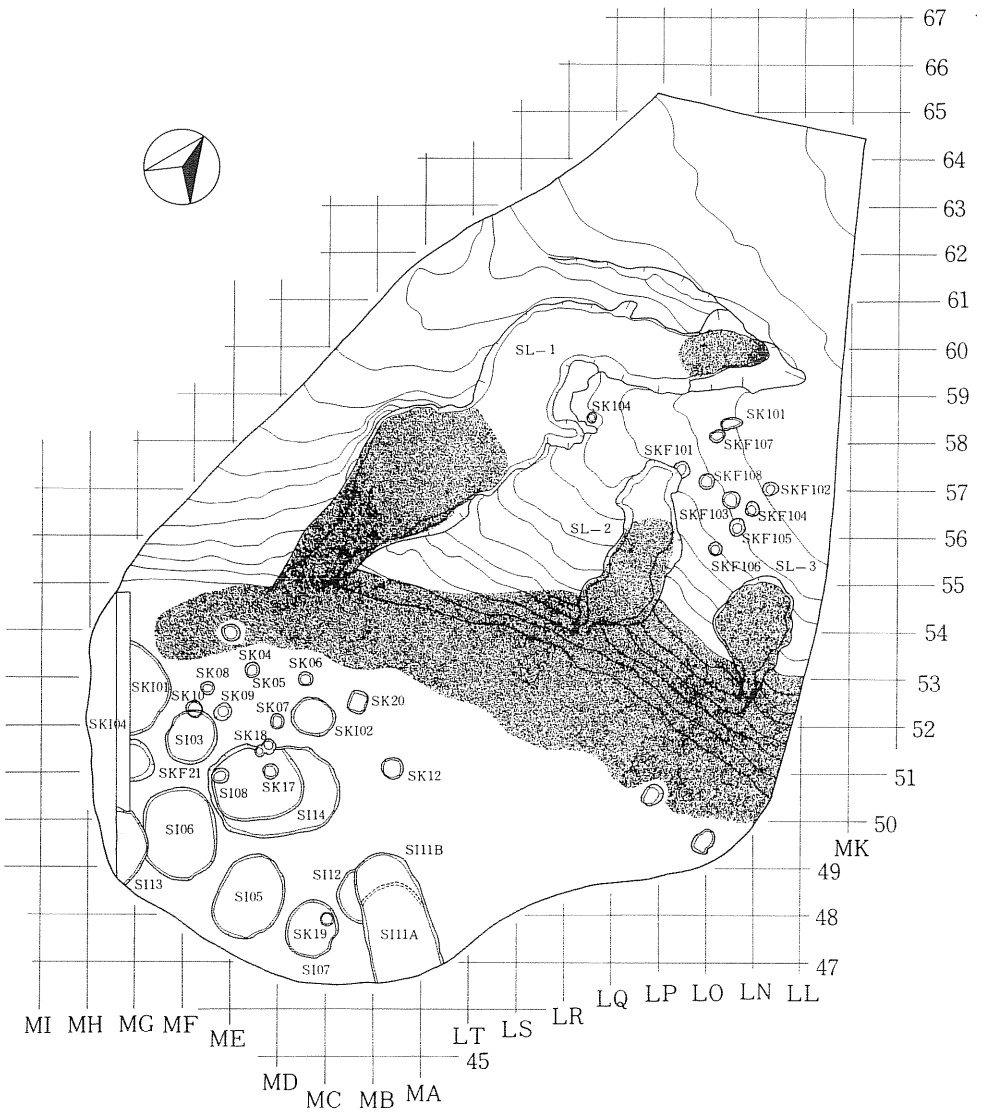
SK104 土坑

沢 No.1 に隣接して LQ 58 で検出した。開口部長径85㎝、同短径80㎝、底部長径94㎝、同短径78㎝の略円形プランを呈する深さ40㎝の土坑である。断面形が若干袋状を呈するが、土圧によるものと考えられた。埋土は６層に分けられたが軽石粒の混入が多い。遺物は出土しなかった。

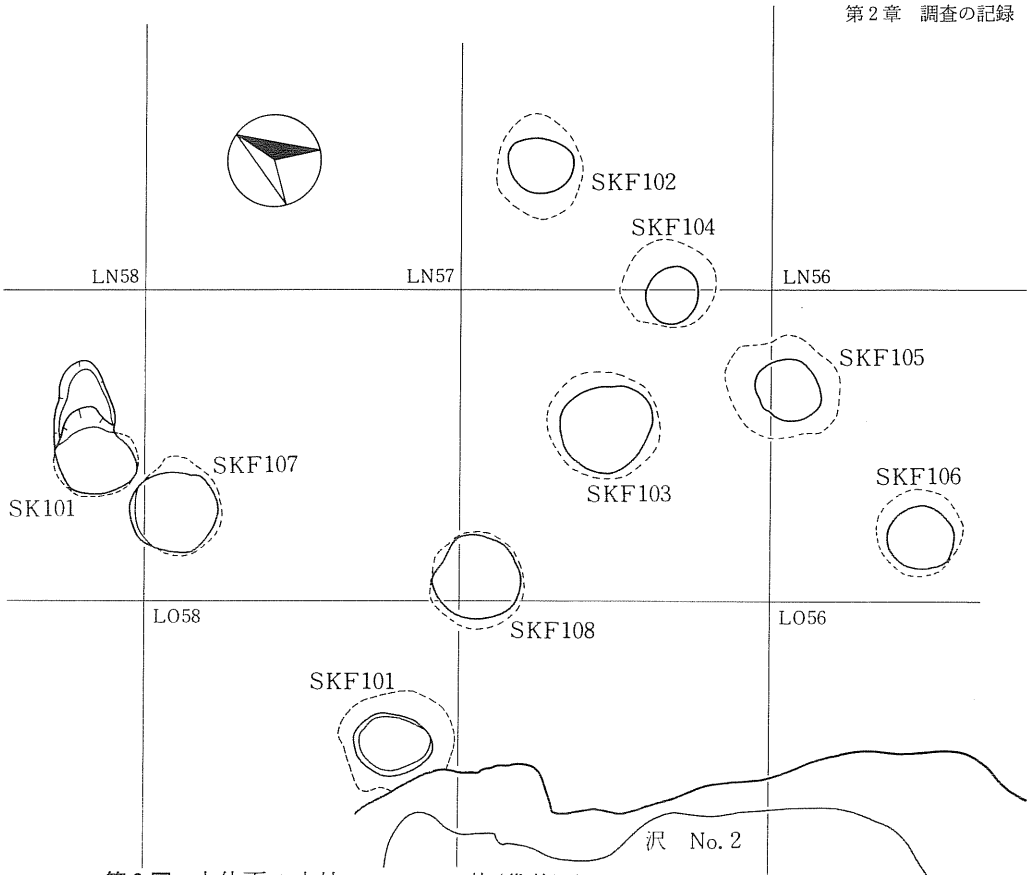
SKF101 フラスコ状土坑

沢 No.2 と重複して LD 57 で検出したが、沢 No.2 の埋没後に沢の埋土をも掘り込んで構築したことを確認した。開口部長径100㎝、同短径79㎝、底部長径146㎝、同短径128㎝、深さ59㎝をはかり、開口部から７㎝下方にくびれ部を有するフラスコ状土坑である。埋土は４層に分けられたが、軽石粒をわずかに混入している。埋土の４層上半から縄文時代晩期の鉢形土器１個体（RP１）が倒立状態で出土した。また底面近くから土器片（RP２）と礫１点が出土した（図版40）

鉢形土器は、口径 15.3 ㎝、器高 10.6 ㎝、底径 5.4 ㎝をはかる。短い口縁が外折し、頸部から肩部にかけて「く」の字形に屈曲する器形で、頸部２条の沈線を巡らし、肩部に粘土紐貼付よ


67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
45
MK
MI MH MG MF ME MD MC MB MA
LT LS LR LQ LP LO LN LL
SL−1
SL−2
SL−3
SK104
SK101
SKF107
SKF101
SKF108
SKF102
SKF103
SKF104
SKF105
SKF106
SK04
SK08
SK05
SK06
SKI01
SK10
SK09
SK07
SK20
SKI04
SKI02
SI03
SK18
SKF21
SK17
SI08
SK12
SI14
SI06
SI11B
SI12
SI13
SI05
SK19
SI11A
SI07

第８図　遺構配置図



第9図　上位面の土坑，フラスコ状(袋状)土坑配置図　(SK104を除く)

る装飾を施している。口唇部に刻み目があり、体部はRL縄文を施文する。

SKF102 袋状土坑

LM 56 検出した。開口部長径 87 ㎝、同短径 72 ㎝、底部長径 138 ㎝、同短径 109 ㎝、深さ 52 ㎝の袋状土坑である。開口部の平面形は略円形であるが、底部は楕円形を呈する。埋土は 7 層に分けられたが、軽石粒を多く混入している。埋土中から石槍 1 点を中央に穿孔されている円形岩版 1 点が出土したが、土器は出土しなかった。

石槍は、長さ 9 ㎝、最大幅 3.2 ㎝、最大厚 1.6 ㎝をはかる。頁岩製で重量 51 g である。

円形岩版は、長径 10.4 ㎝、短径 10.2 ㎝、最大厚 1.3 ㎝をはかるが、縁辺の部が欠損する。ほぼ中央部に径 1 ㎝の貫通孔があり、表裏とも細かい擦痕が全面に認められる。凝灰岩製。

SKF103 袋状土坑

LN 56 で検出した。開口部長径 124 ㎝、同短径 111 ㎝、底部長径 150 ㎝、同短径 137 ㎝の略円形プランを呈する深さ 57 ㎝の袋状土坑である。埋土は 8 層に分けられるが軽石粒を多く混入する。遺物は埋土中から礫 1 点のみである。

SKF104 袋状土坑

LM 56 ・LN 56 にまたがり検出した。開口部長径 78 ㎝、同短径 69 ㎝、部長径 127 ㎝、同短径 118 ㎝の略円形プランを呈する深さ 43 ㎝の袋状土坑である。埋土は 7 層に分けられるが、シラスの分解した砂がみられる。遺物は出土しなかった。

SKF105 袋状土坑

LN 55 ・ 56 にまたがり検出した。開口部長径 90 ㎝、同短径 76 ㎝、部長径 155 ㎝、同短径 134 ㎝、深さ 98 ㎝をはかる。底面プランは不整であるが、上位平坦面で検出した土坑の中では最も深い袋状土坑である。埋土は 11 層に分けられるが、軽石塊・粒を多く混入する。埋土中から半円状扁平打製石器 1 点が出土したが土器は出土しなかった。

半円状扁平打補石器は、長さ 16.9 ㎝、最大幅 12.7 ㎝、厚さ 2.2 ㎝をはかる。一面は周縁打ち欠き、面は短辺 2 面のみ打ち欠いている。安山岩製で重量 718 g である。

SKF106 袋状土坑

LN 55 の斜面に検出した。開口部長径 88 ㎝、同短径 84 ㎝、底部長径 84 ㎝、底部長径 113 ㎝、同短径 107 ㎝の略円形プランを呈する深さ 50 ㎝の土坑である。埋土は 6 層に分けられるが軽石粒を多く混入している。遺物は出土しなかった。

SKF107 袋状土坑

LN 57 ・ 58 にまたがり検出した。開口部長径 115 ㎝、同短径 102 ㎝、底部長径 128 ㎝、同短径 111 ㎝、 深さ 31 ㎝の袋状土坑である。 埋土は 6 層に分けられるが軽石粒を多く混入している。遺物は出土しなかった。

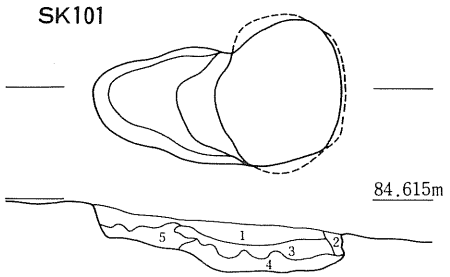
SKF108 袋状土坑

LO 57 杭直下に検出した。開口部長径 111 ㎝、同短径 109 ㎝、底部長径 125 ㎝、同短径 120 ㎝の略円形プランを呈する深さ 52 ㎝の袋状土坑である。埋土は 8 層に分けられるが軽石粒を多く混入している。遺物は出土しなかった。

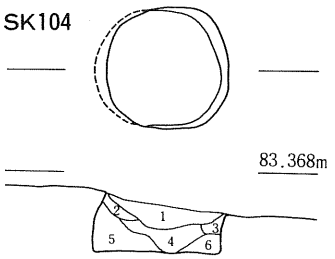
(2) 埋設土器 （第 13 図）

上位平坦面の LN 62 の第Ⅱ層掘り下げ中に出土した。口縁部の大部分を欠失するが、ほぼ直立状態で埋設されていた。平・断面の図化や周囲の掘り込み等を確認しないまま収納してしまうミスがあったため詳細は不明であるが、土器内部に径 15 ㎝程の円礫が 1 点出土した。

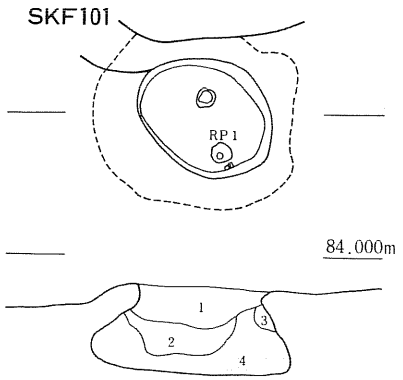
土器は、円筒形を呈し、一部欠失しているが口縁に 4 個の突起をもち、口縁と頸部に太い隆帯を 1 条ずつ巡らし、突起部下で 2 本の隆帯を U 字形の隆帯が結んで口頸部文様帯を区画している。隆帯上は RLR 複節縄文で飾り、区画内は LRL 複節縄文が上・下に 3 条ずつ横方向に押圧され、内部を同原体で鋸歯状に押圧施文している。胴部は LR・RL の羽状縄文が施文されている。現高 39.5 ㎝、底径 12.5 ㎝で胎土に砂粒を混入する。焼成は良好で、器内はよくみがかれている。



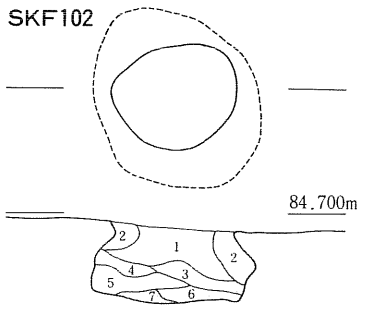
1．黒褐色土（10YR3/1）軽石粒・塊を少量混入する。
2．褐色土（10YR5/4）軟質。
3．黒褐色土（10YR3/2）軽石塊を若干混入する。
4．黒褐色土（10YR2/2）軽石粒・塊を多量に混入する。
5．黄橙色土（10YR8/8）砂質軽石。



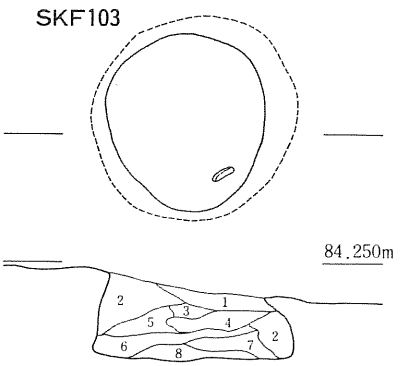
1．黒褐色土（10YR2/2）軽石粒（φ２～10）を混入する。
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）軽石粒・塊を混入する。
3．にぶい黄褐色土（10YR5/4）軽石粒が多量に混入する。
4．黒褐色土（10YR3/1）軽石粒・塊を混入する。
5．にぶい黄褐色土（10YR5/4）軽石粒が多量に混入する。
6．暗褐色土（10YR3/3）軽石粒・塊を混入する。



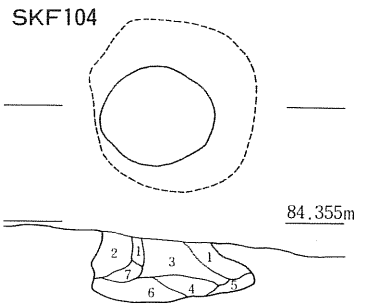
1．黒色土（10YR2/1）軟質，径５㎜以下の軽石粒を少量同じく径５㎜以下の礫を若干量含む。
2．黒褐色土（10YR2/3）軟質，軽石粒ごく僅かに含まれる。
3．黒褐色土（10YR2/2）軟質，孔隙多い。径１㎜前後の軽石粒若干含まれる。
4．黒色土（10YR2/1）軟質，軽石粒をごく僅かに含む。



1．黒褐色土（10YR2/2）φ５～20㎜の軽石粒，塊を粗に混入する。
2．暗褐色土（10YR2/3）軽石粒を多量に混入する。
3．黒褐色土（10YR3/2）軽石粒・塊がブロック状に混入する。
4．黒褐色土（10YR3/2）軽石粒が粗に混入する。
5．にぶい黄褐色土（10YR4/4）軽石粒を多量に混入する。
6．明黄褐色土（10YR6/6）地山の再堆積土。
7．黄橙色土（10YR7/8）地山の再堆積土。



1．黒褐色土（10YR2/2）軽石粒・塊を粗に混入する。
2．褐色土（10YR5/4）シラス分解砂と軽石粒・塊を多量に混入する。
3．黒褐色土（10YR3/2）軽石粒を多量に混入する。
4．黒褐色土（10YR2/2）軽石粒・塊を粗に混入する。
5．明黄褐色土（10YR6/6）軽石塊が多量に混入する。
6．黒褐色土（10YR3/1）軽石粒・塊を多量に混入する。
7．黒褐色土（10YR2/3）軽石粒・塊を多く混入する。
8．黒色土（10YR2/2）

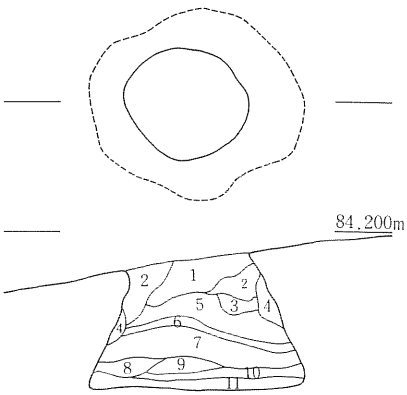


1．暗褐色土（10YR3/3）軽石粒・塊を少量混入する。
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）軽石粒塊を多量に混入する。
3．黒褐色土（10YR2/2）軽石塊（φ30～20㎜）と軽石粒を粗に混入する。
4．灰黄褐色土（10YR4/2）シラス分解砂が少量混入する。
5．明黄褐色土（10YR6/4）軽石粒が多量に混入する。
6．にぶい黄橙色砂（10YR7/3）シラス分解砂
7．黒褐色土（10YR2/2）

0　2 m

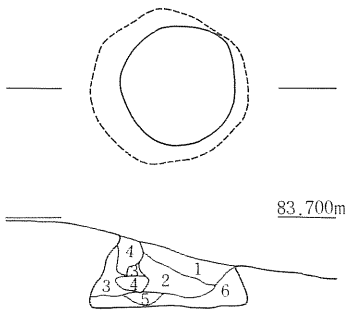
第10図　上位面検出土坑・フラスコ状（袋状）土坑実測図（１）

SKF105



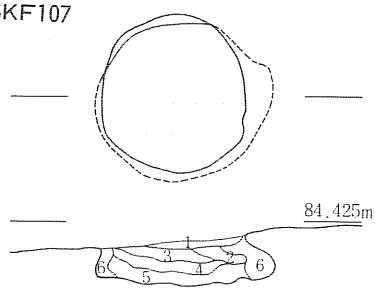
1．黒褐色土（10YR 2/3）軟質，径10mm前後の軽石塊を若干含む。
（10YR 3/3）
2．暗褐色土（10YR 3/3）軟質，径40mm前後の軽石塊，径5mm以下の軽石粒を多量に含む。
3．黒褐色土（10YR 2/3）径10～5mmの軽石塊を若干混入する。
4．褐色土（10YR 5/4）軟質，壁面の崩落した小さな土・細かな軽石およびシルトからなる。
5．黒褐色土（10YR 2/3）堅く締っている。径10mm以下の軽石塊・粒を少量混入する。
6．暗褐色土（10YR 3/3）堅く締っている。径10mm以下の軽石塊・粒を少量混入する。
7．黒褐色土（10YR 2/3）軟質，径10mm以下の軽石塊・粒を少量混入する。
8．黒褐色土（10YR 2/3）軟質，径5mm以下の軽石粒を僅かに混入する。部分的に異色土（酸化物かのブロックを含む。
9．暗褐色土（10YR 3/4）比較的締っている。径5mm以下の軽石粒を若干混入する。
10．暗褐色土（10YR 3/4）軟質，径5mm以下の軽石粒を若干混入する。
11．にぶい黄橙色土（10YR 7/3）軟質，シラス質。

SKF106



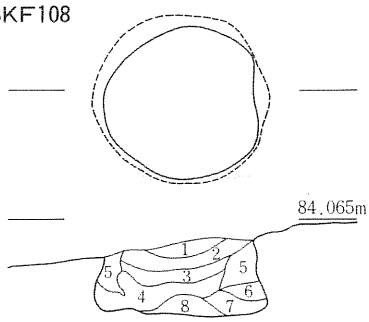
1．黒褐色土（10YR 2/3）軟質，軽石粒を少量混入する。
2．黒褐色土（10YR 3/2）軟質，軽石粒・塊を若干混入する。
3．暗褐色土（10YR 3/3）極めて軟質，軽石粒・塊が多量に混入する。
4．黄褐色土（10YR 5/6）堅く締っている。軽石粒・塊から成る。
5．黒褐色土（10YR 3/2）粘質，軽石粒が少量混入される。
6．黒褐色土（10YR 2/3）やや軟質，軽石粒・塊が若干量含まれる。

SKF107



1．黒褐色土（10YR 2/2）軽石粒を僅かに混入する。
2．黒褐色土（10YR 3/2）粘質，軽石粒を若干混入する。
3．黒褐色土（10YR 2/3）軽石粒・塊を多量に混入する。
4．黒褐色土（10YR 2/2）軽石塊を若干混入する。
5．黒褐色土（10YR 2/2）軽石粒・塊を少量混入する。
6．にぶい黄褐色土（10YR 5/3）軟質，軽石粒を多く混入する。

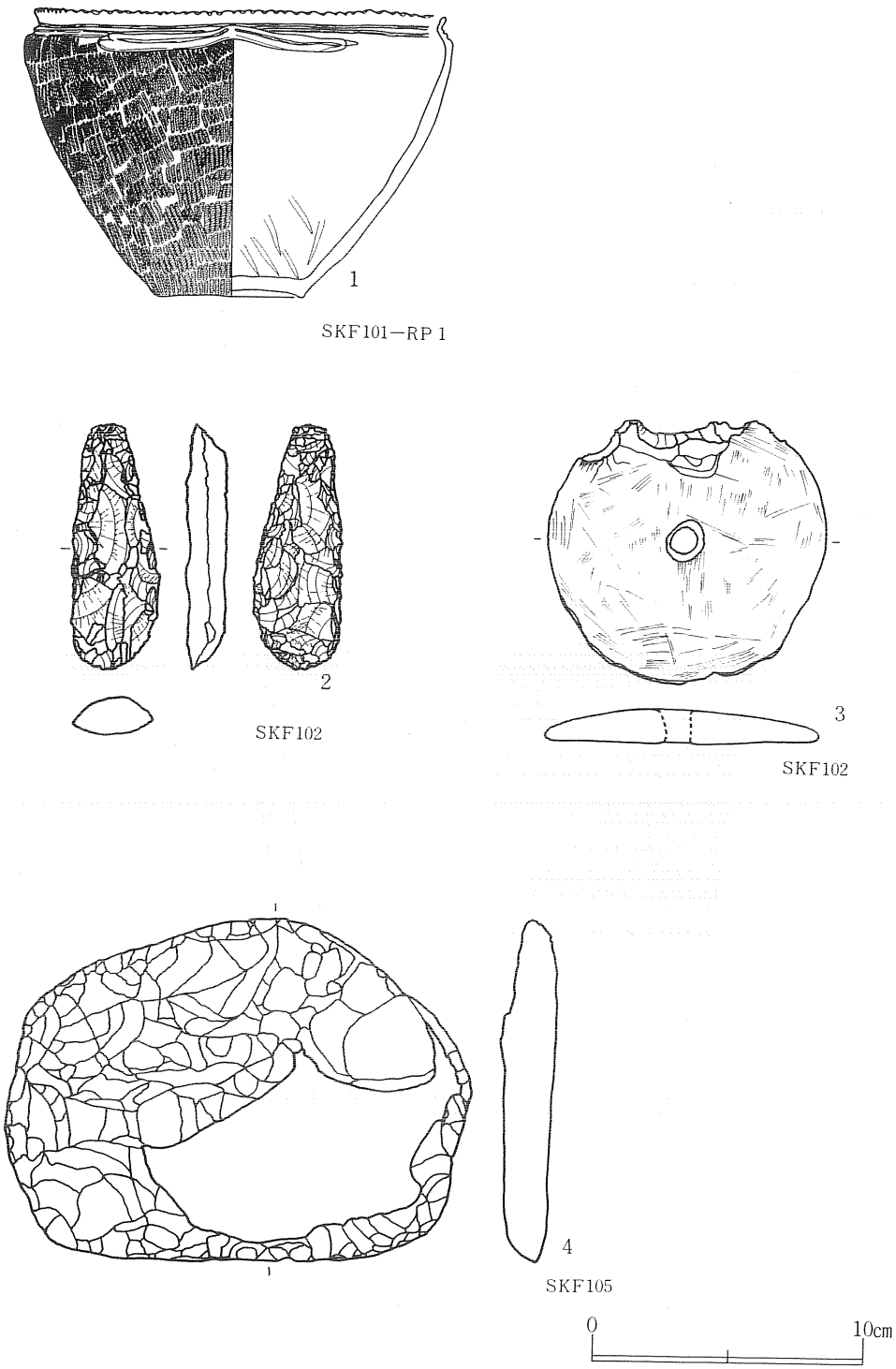
SKF108



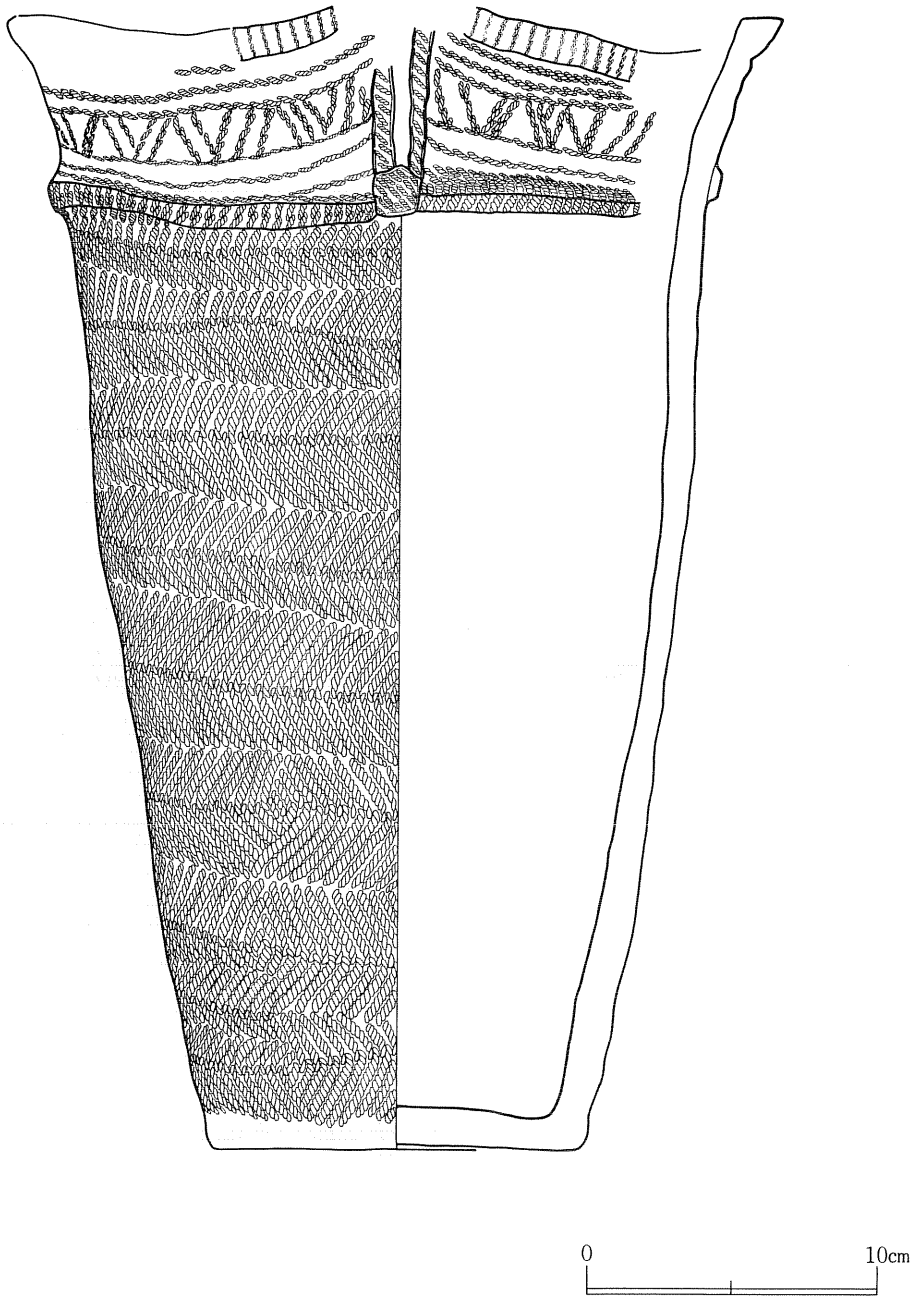
1．黒褐色土（10YR 2/2）軽石粒・塊を粗に混入する。
2．黒褐色土（10YR 3/2）軽石粒を粗に混入する。
3．暗褐色土（10YR 3/3）軽石塊を粗に混入する。
4．黒褐色土（10YR 3/1）軽石粒を混入する。
5．褐色土（10YR 4/4）軽石粒・塊を多量に混入する。
6．明黄褐色土（10YR 6/4）軽石粒を多量に混入する。
7．明黄褐色土（10YR 6/6）地山の再堆積土。
8．にぶい黄褐色土（10YR 5/3）軽石粒・塊を多量に混入する。

0　2 m

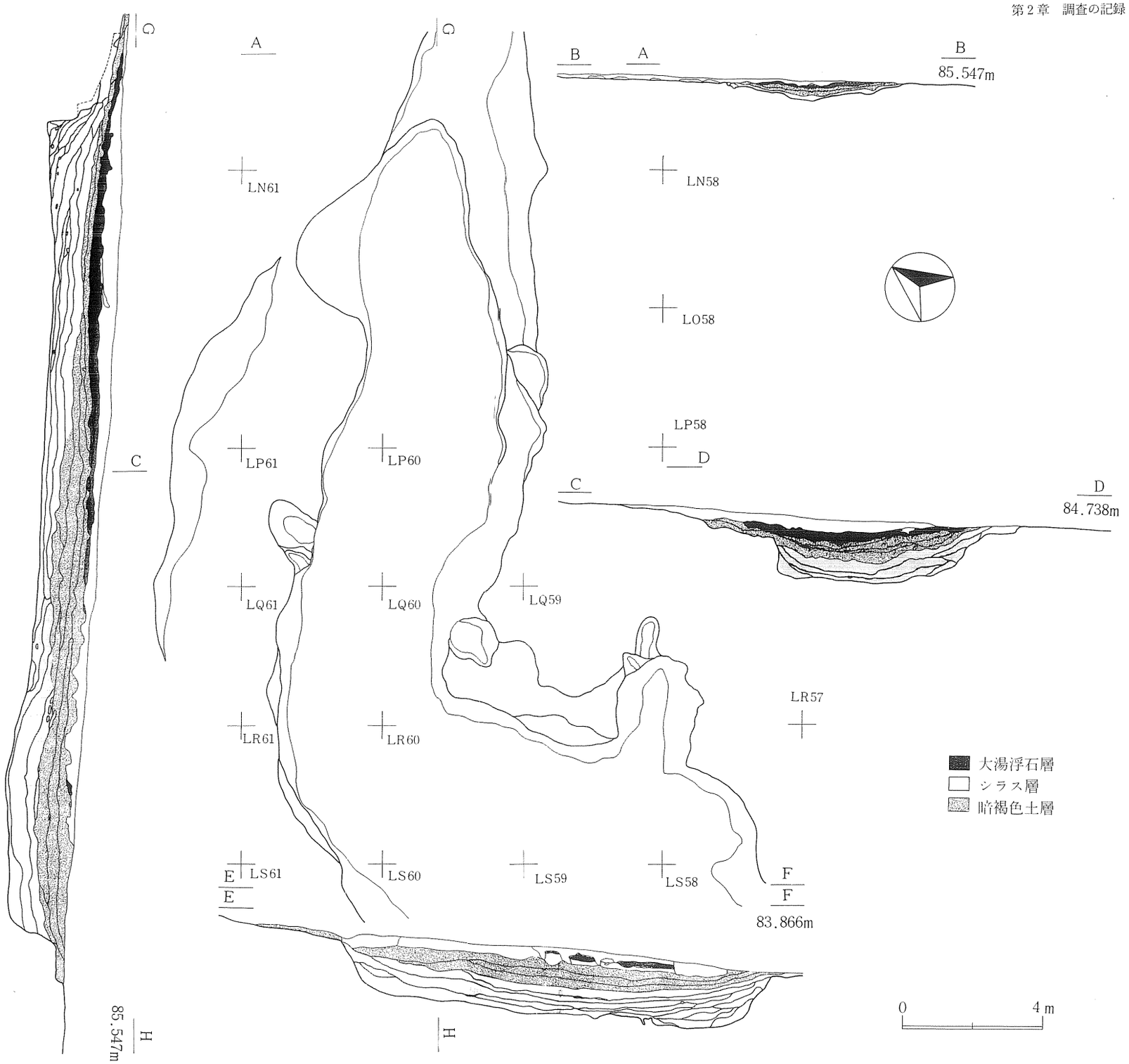
第11図　上位面検出フラスコ状（袋状）土坑実測図（2）



第12図　上位面検出フラスコ状（袋状）土坑出土遺物実測図



第13図　埋設土器実測図



第14図　沢　No. 1　LM～LS間土層堆積状態実測図

第15図　沢　No. 1　LS～MD間遺物出土状況図

(3) 捨て場

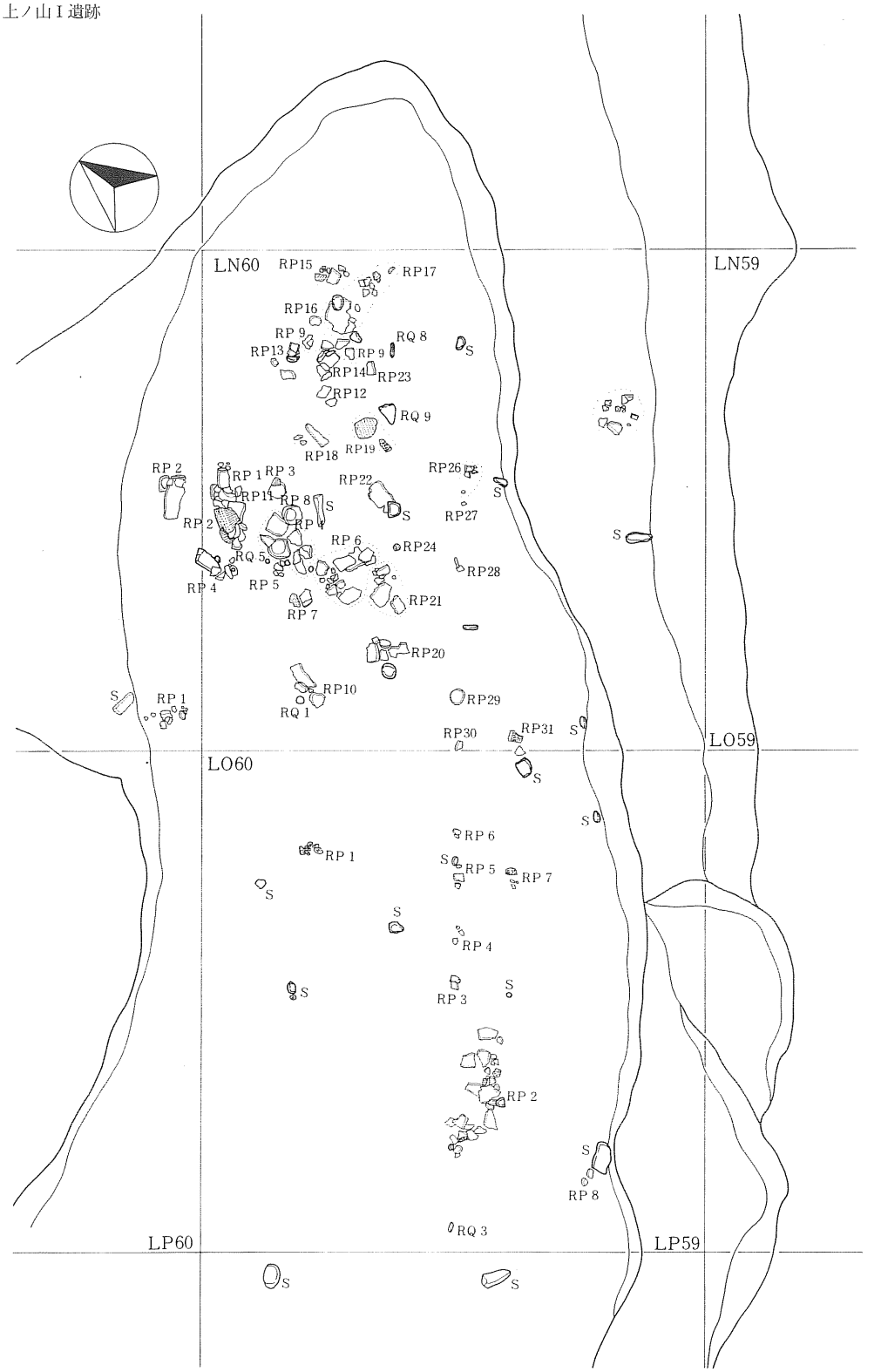
上位面と斜面に侵食・開析された３か所の沢状地形には、多量の遺物が出土し、また上位の平坦面から続く斜面下方に帯状に遺物が集中している区域も検出された。本項では３箇所の沢状地形と出土遺物について述べる。

① 沢№1（第14図～第32図、図版３～７、26～31、55～57）

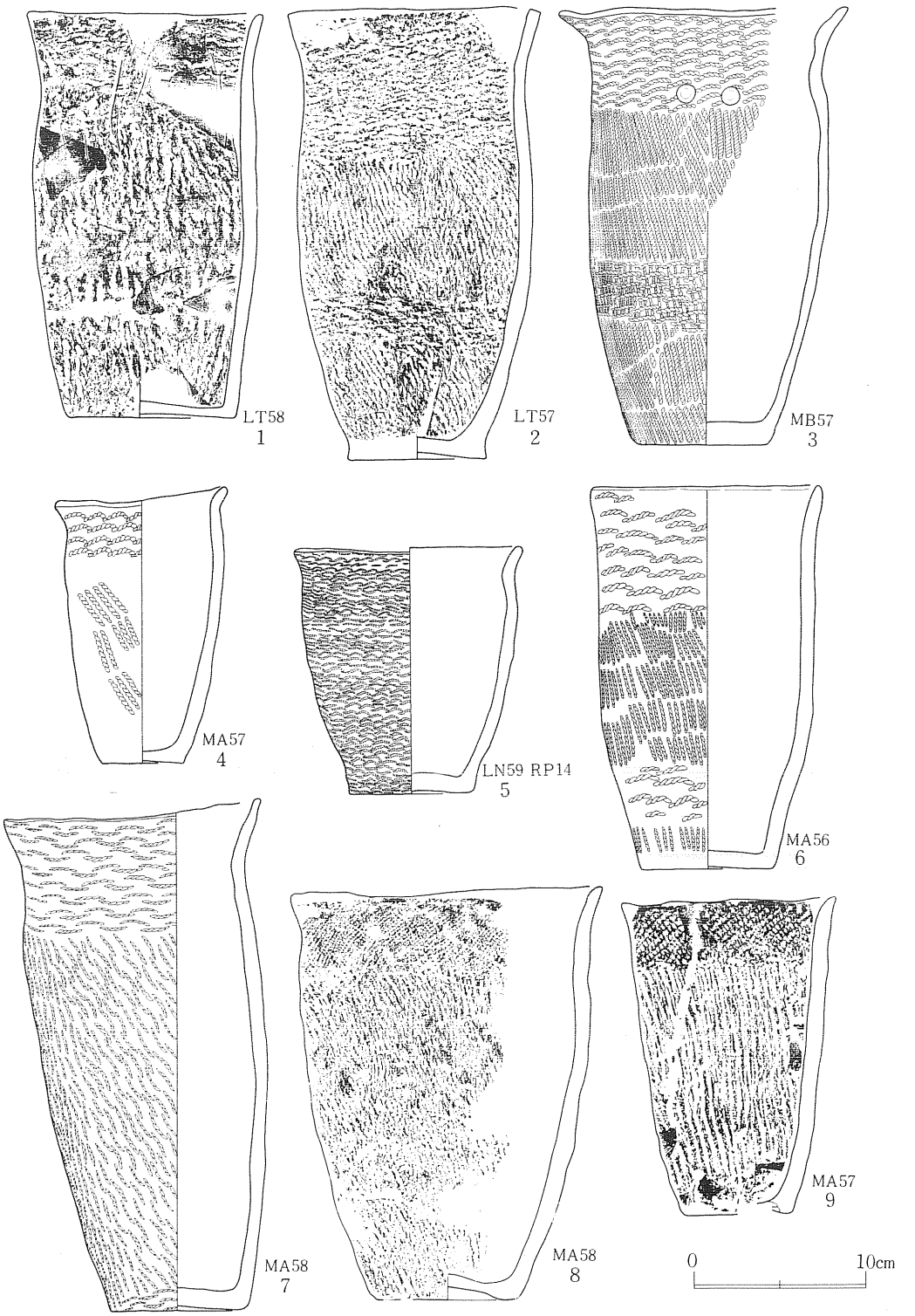
LM 59、LN 58～60、LD 58～60、LP 58～60、LQ 57～60、LR 57～60、LR 57～60、LS 56～60、LT 56～59、MA 55～58、MB 54～57、MC 54～56で検出した。調査前の現況地形からは全く予想できず、プラン確認後もしばらくは北側に対峙する中世城館の山館跡に関連する遺構ではないかと考えていた。地下レーダー探査の結果でも人工開削による遺構の可能性が指摘されていた。

精査が進むにつれて、これが人工的掘削によるものではなく、自然営力による開析であることがわかった。

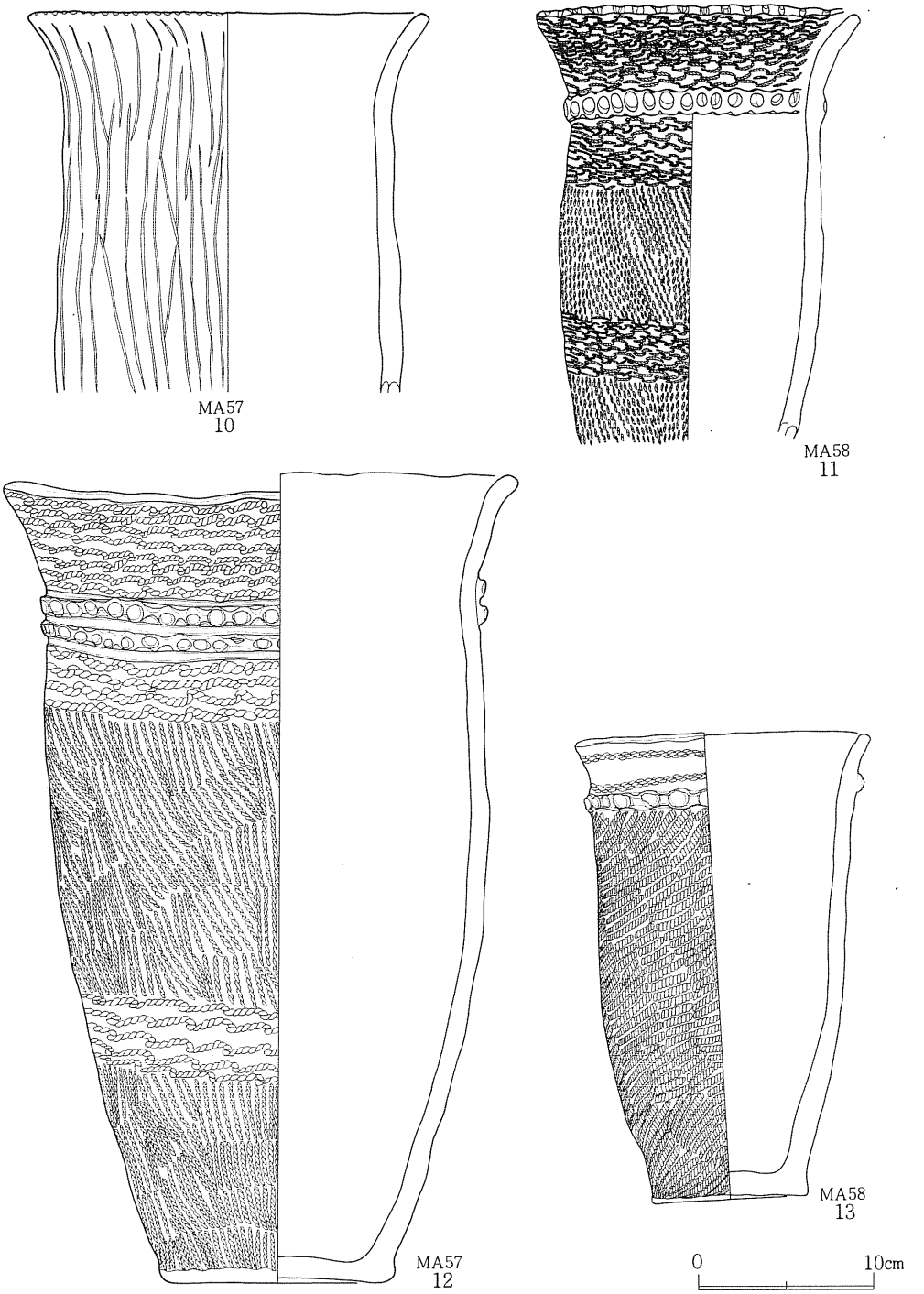
長さ49.4ｍ、幅5.5ｍ～11ｍ、深さ1.6～2.2ｍをはかるが、Ｌ字形に曲折している。埋土は、上位から黒褐～暗褐色土層（Ⅰ）、大湯浮石層（Ⅱ）、黒褐～暗褐色土層（Ⅲ）、シラス層（Ⅳ）、酸化鉄分含有シラス層（Ⅴ）に大別できる。遺物は、平面分布でみると、LN―LO区画、LS―MC区画の２区域に集中するが、LN―LO区画が縄文時代前期後半のものが主体をなすのに対し、LS―MC区画では、縄文時代前期前半のものが主体をなしている。垂直分布でみると、上位の黒褐～暗褐色土層中からは弥生時代の土器が出土している。大湯浮石を挟在して下位の黒褐～暗褐色土層からは、縄文時代中期の土器や弥生土器が、シラス層中からは、縄文時代前期後半の土器、酸化鉱分含有シラス層中からは、縄文時代前期前半の土器の出土が多い。



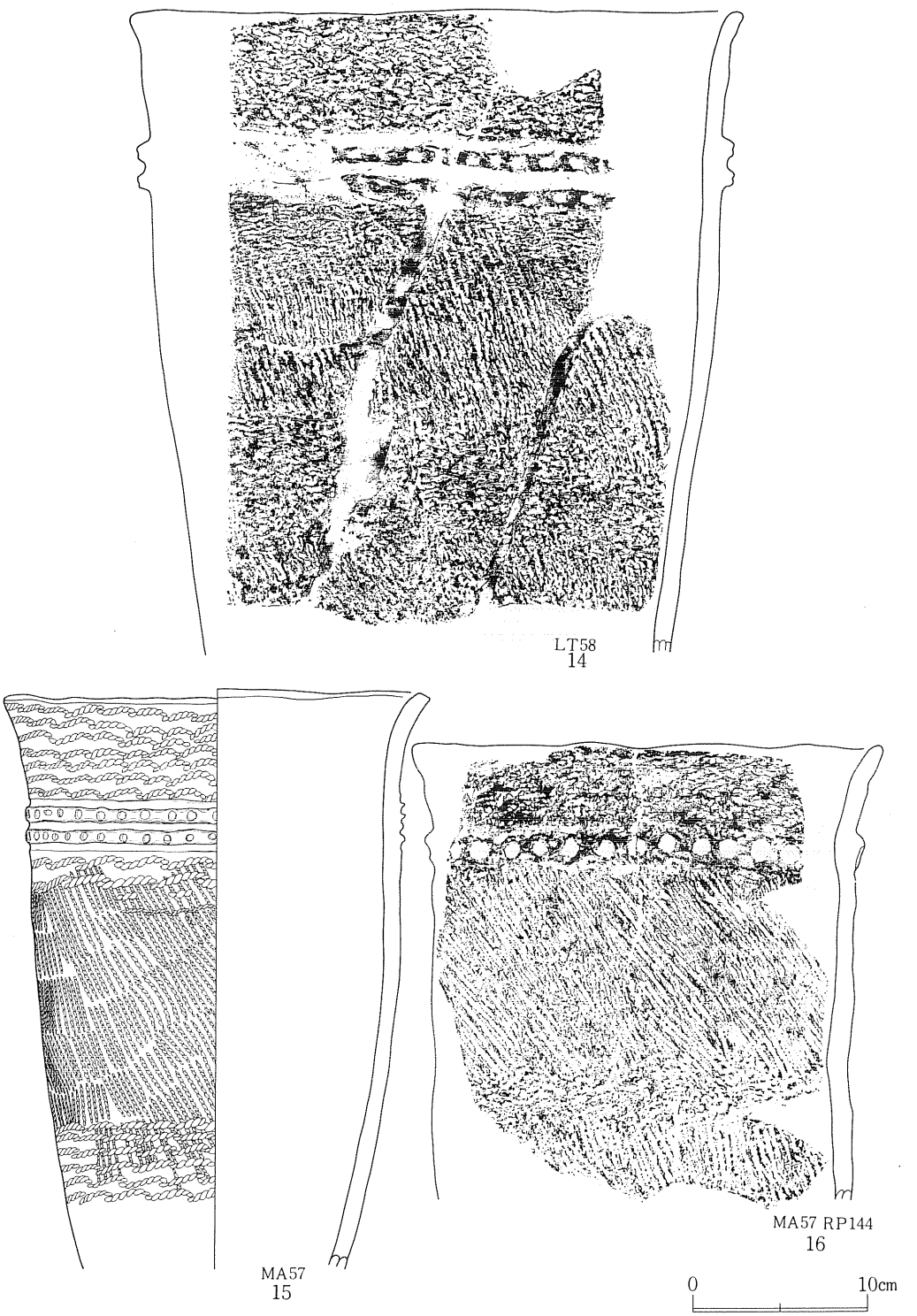
第16図　沢　No. 1　沢底部遺物出土状態実測図



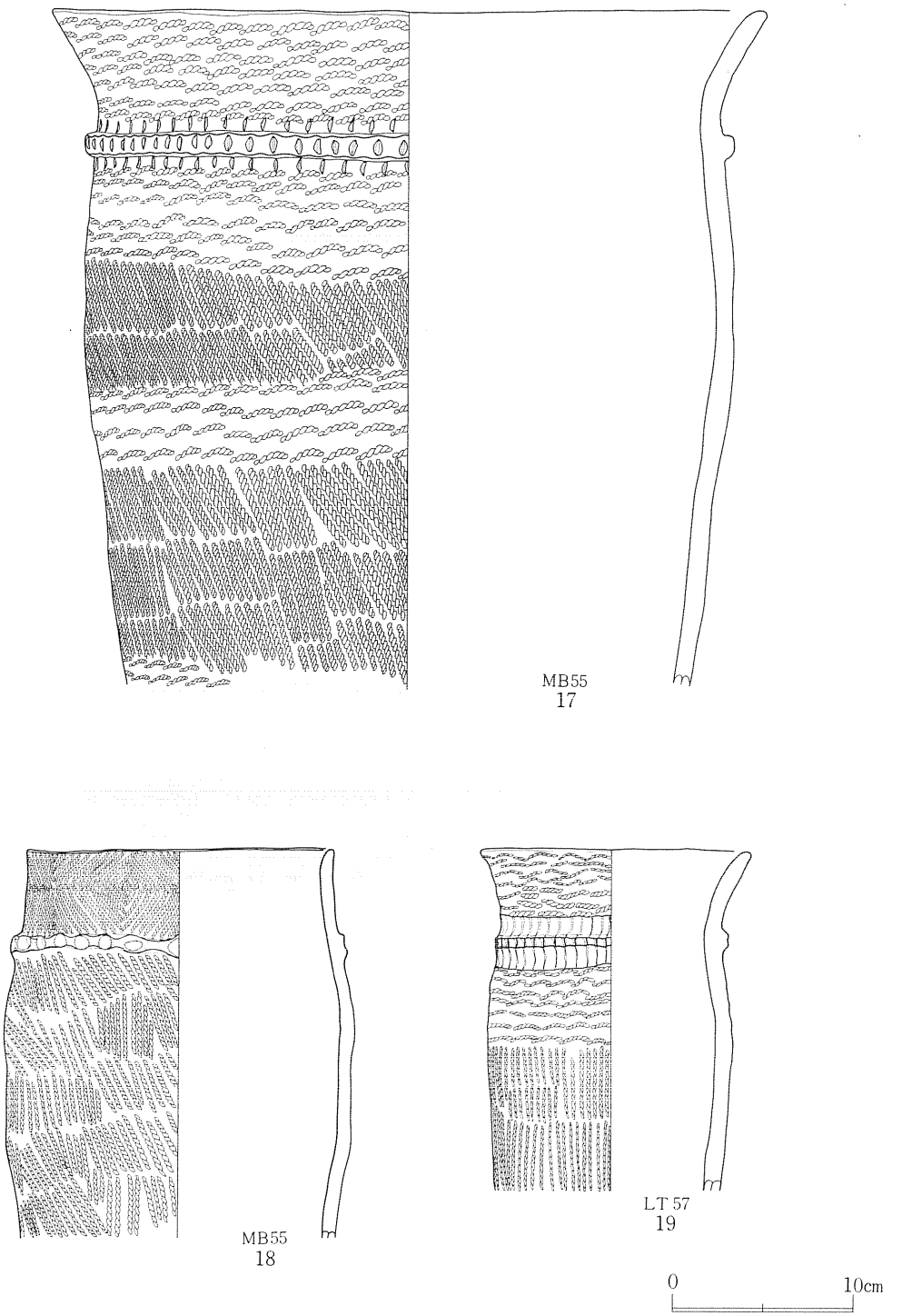
第17図　沢　No. 1　出土土器実測・拓影図（1）



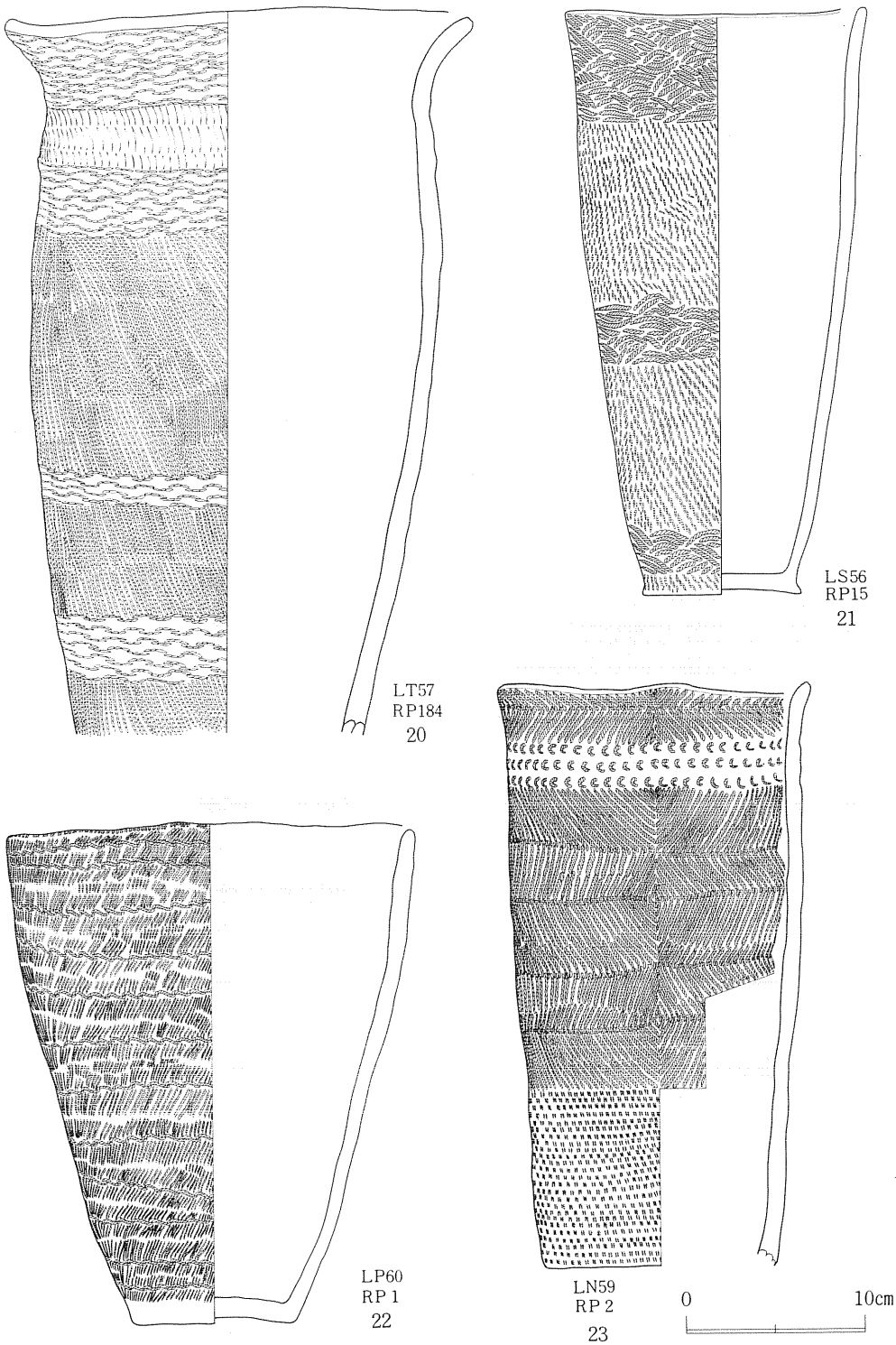
第18図　沢　No. 1　出土土器実測図（2）



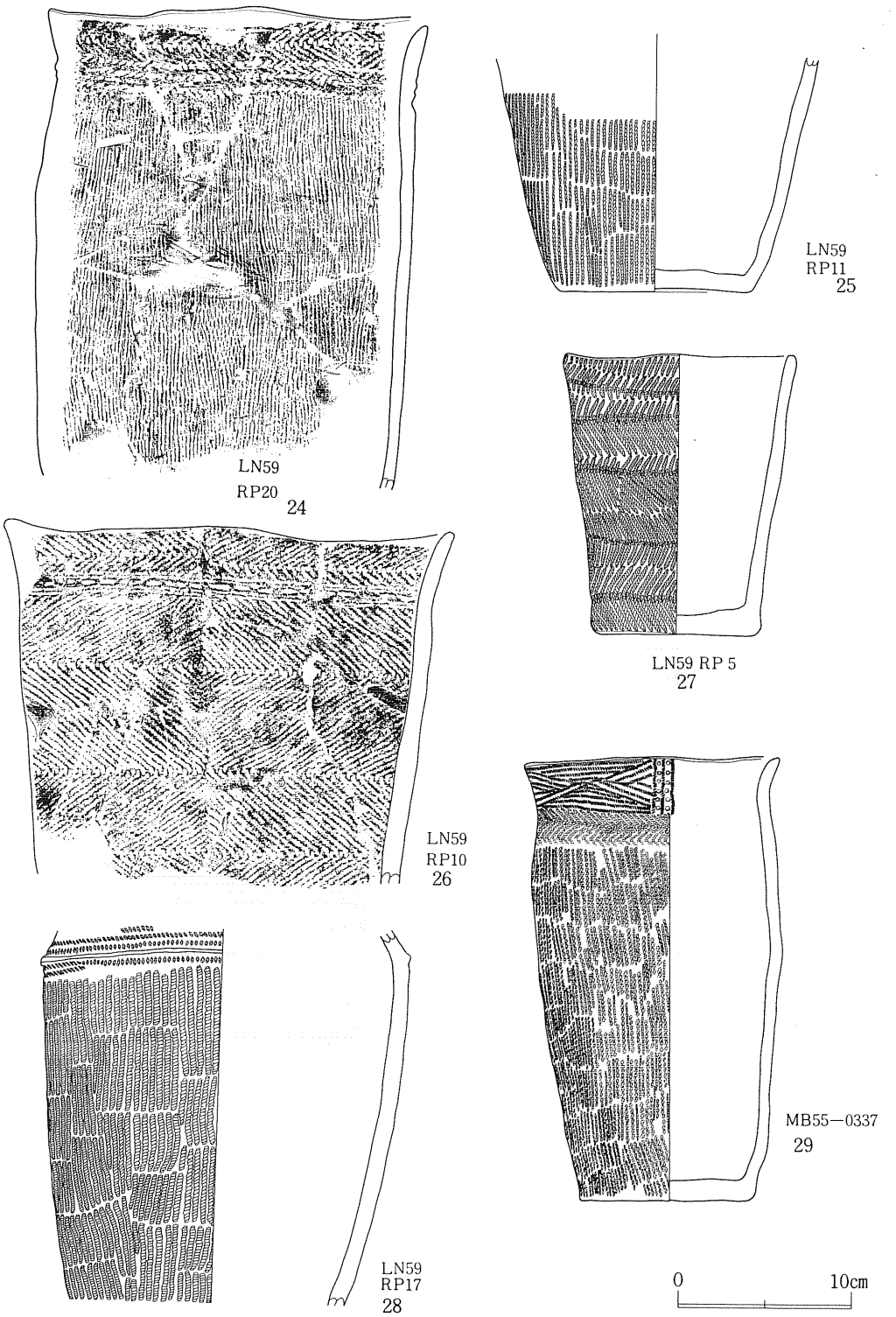
第19図　沢　No. 1　出土土器実測・拓影図（３）



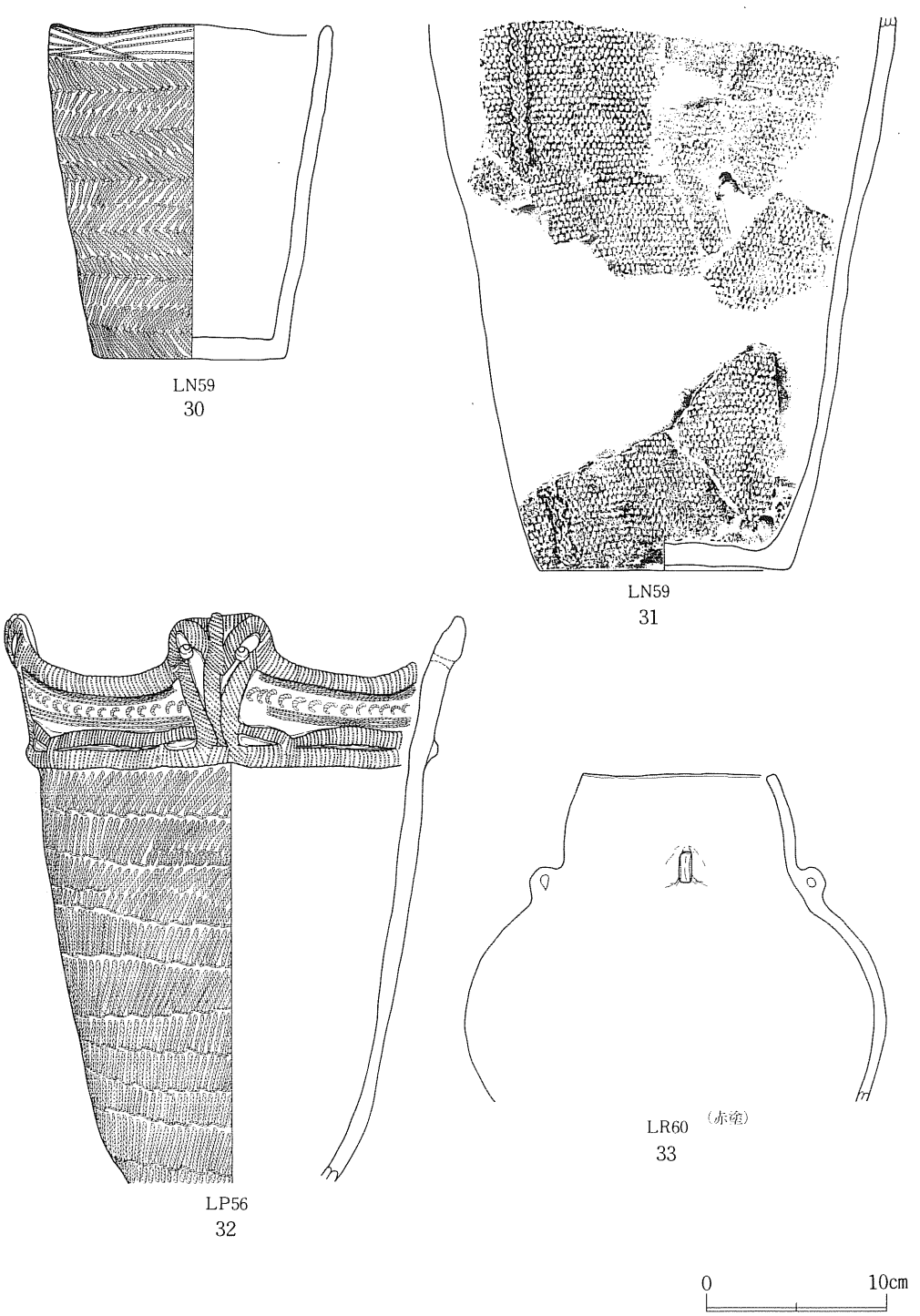
第20図　沢　No. 1　出土土器実測・拓影図（4）



第21図　沢　No. 1　出土土器実測図（５）

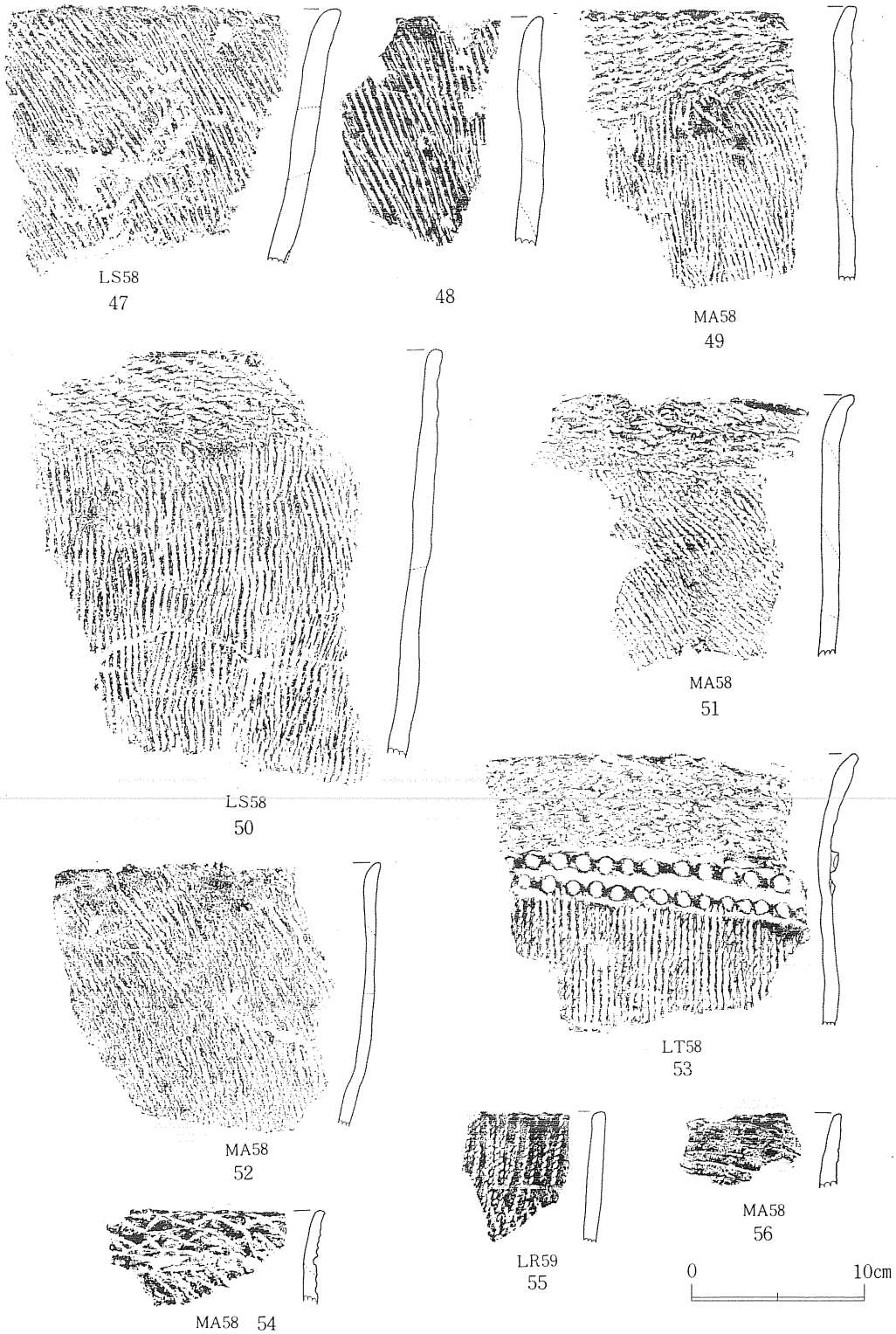


第22図　沢　No. 1　出土土器実測・拓影図（6）（シラス層）

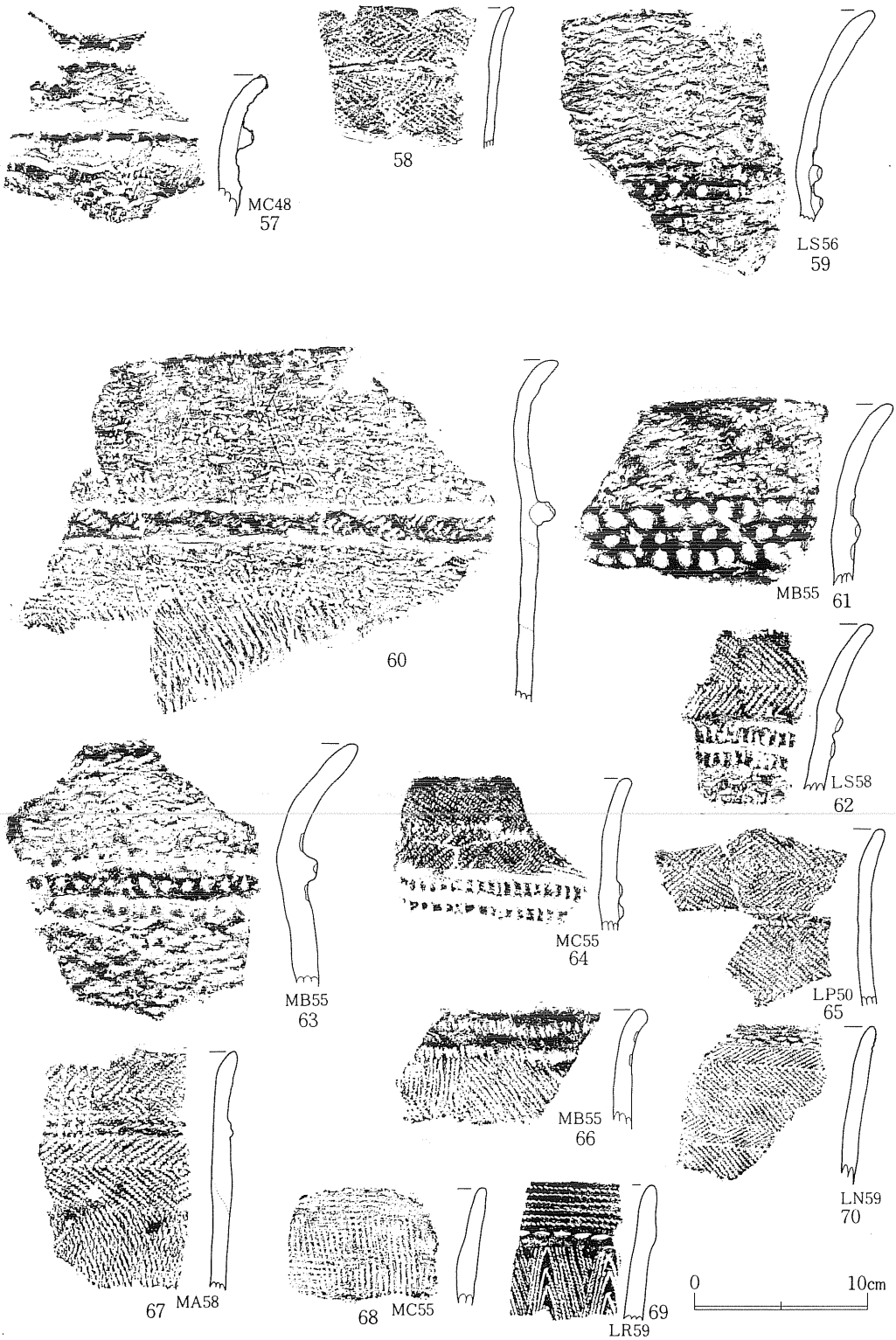


第23図　沢　No. 1　出土土器実測・拓影図（７）

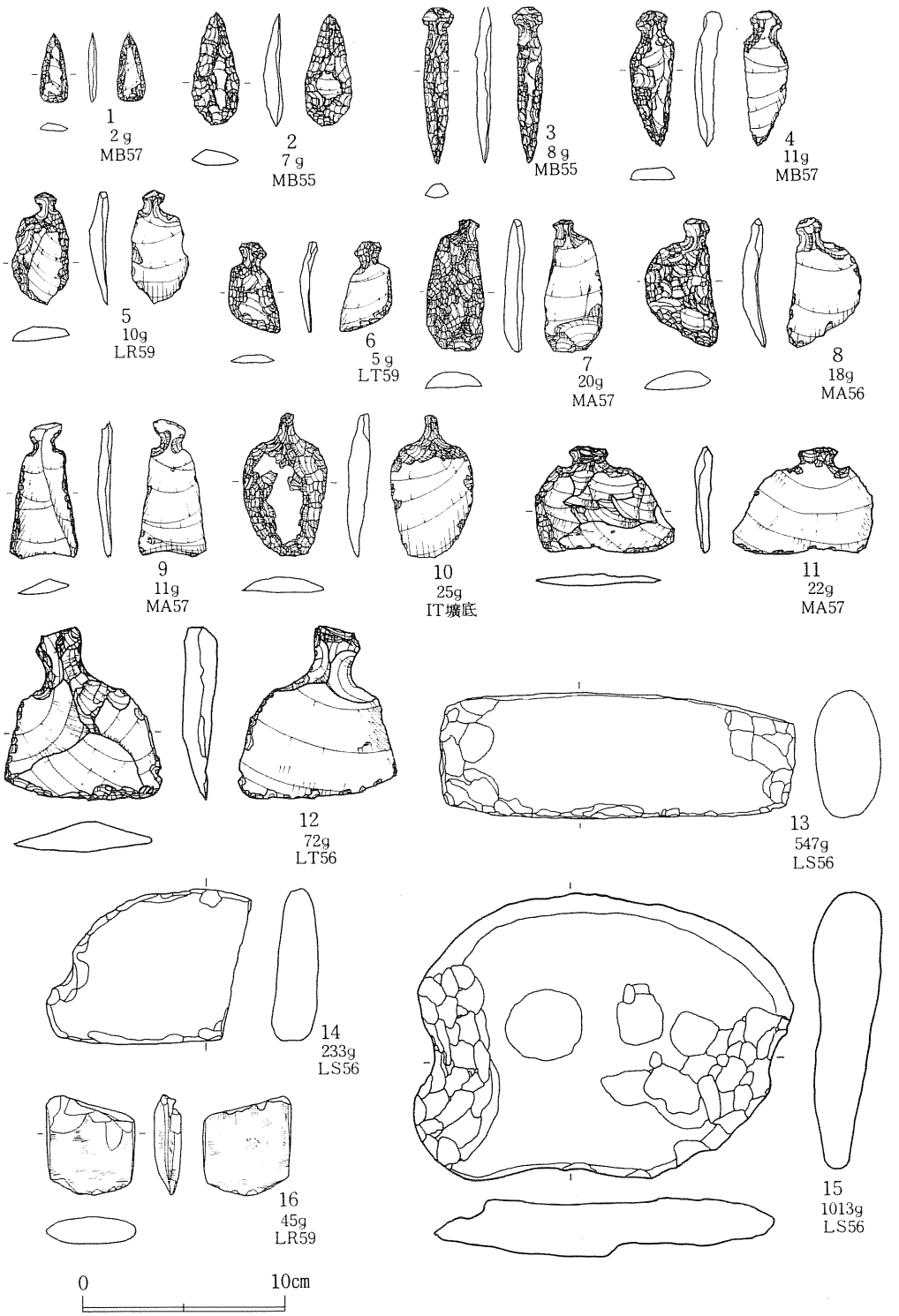
第24図　沢　No.1　出土土器拓影図（8）（鉄分含有シラス層）



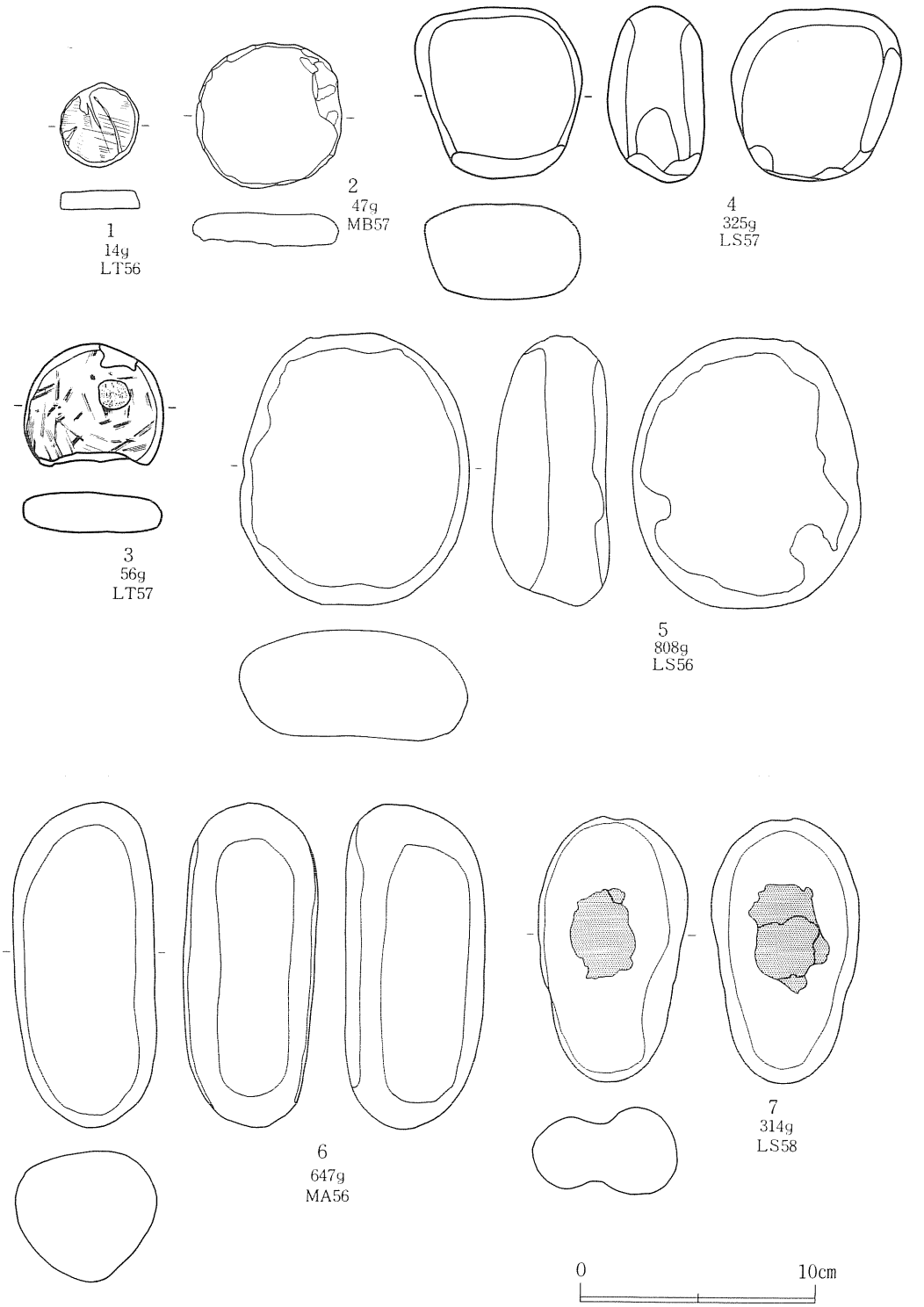
第25図　沢　No. 1　出土土器拓影図（９）（シラス層）



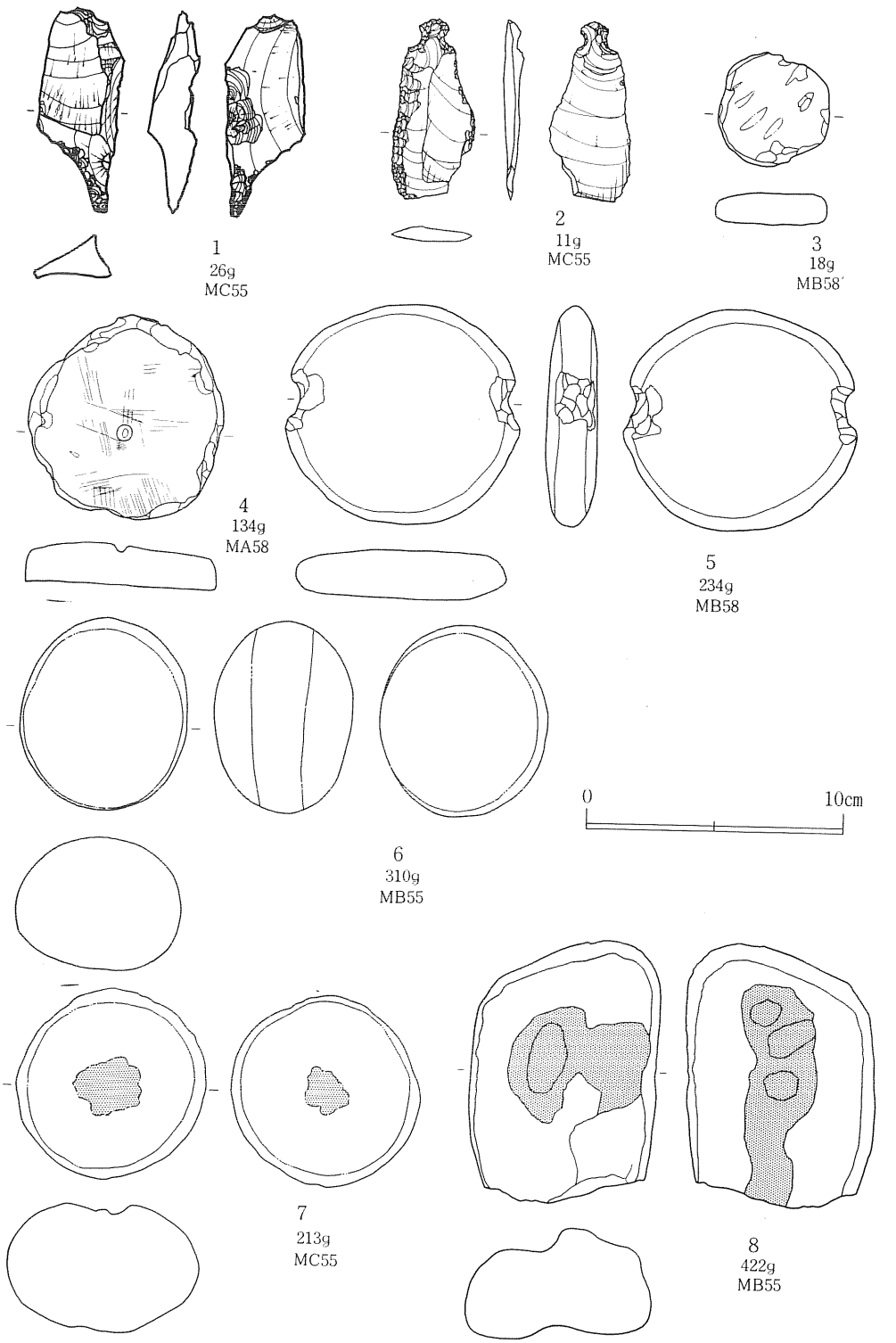
第26図　沢　No. 1　出土土器拓影図(10)（シラス層）



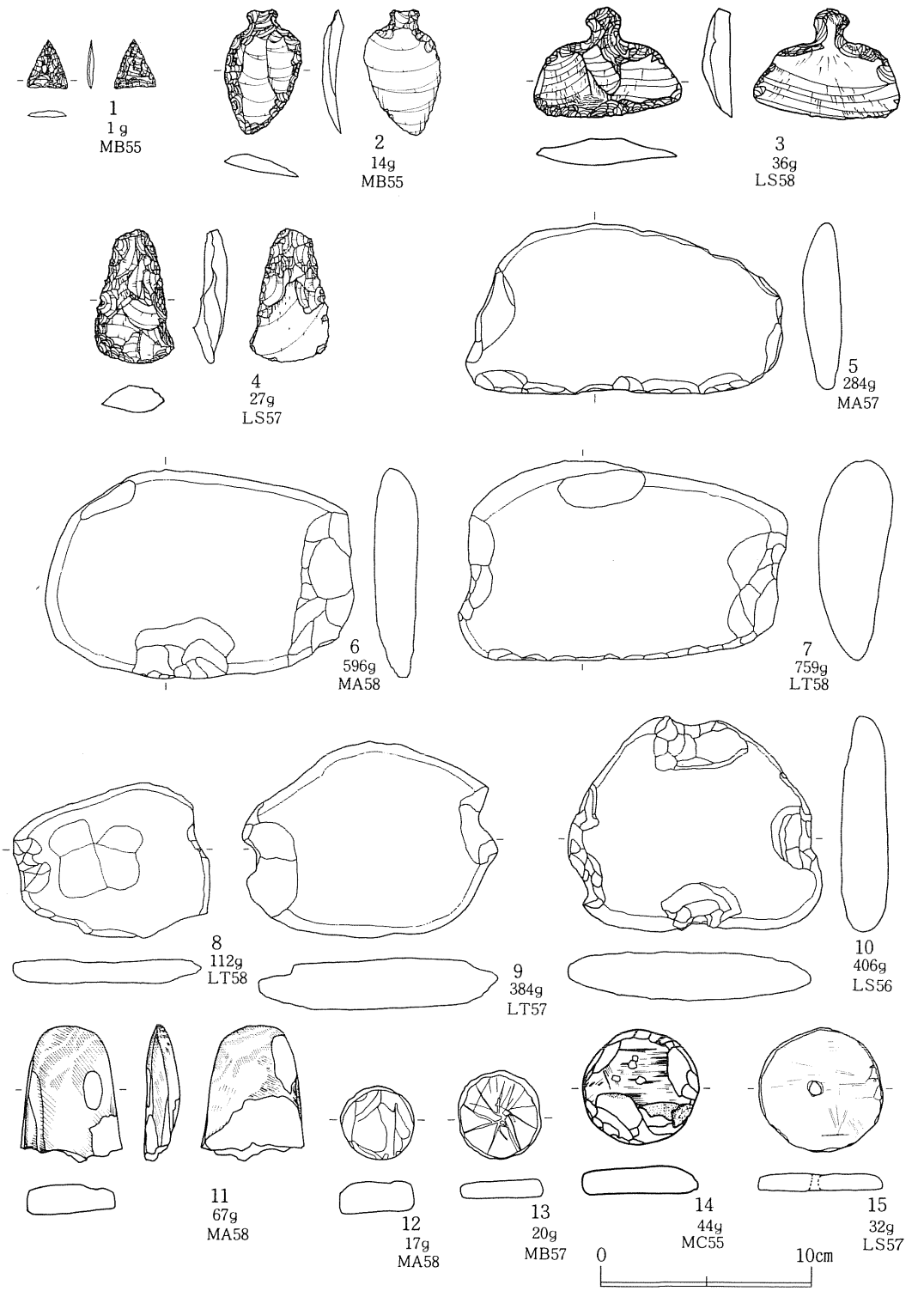
第27図　沢　No.１　出土石器実測図（１）



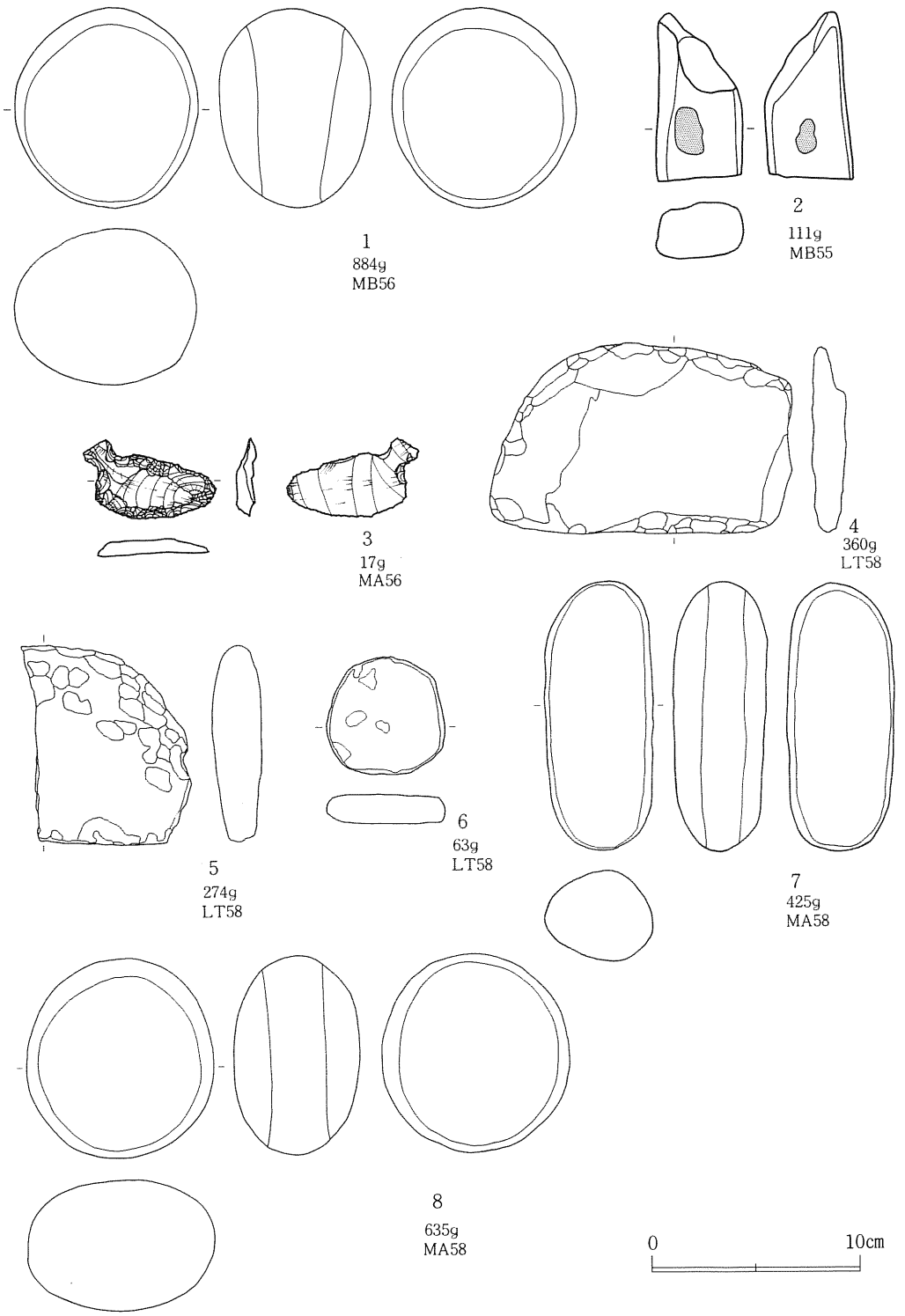
第28図　沢　No.1　出土石器実測図(2)



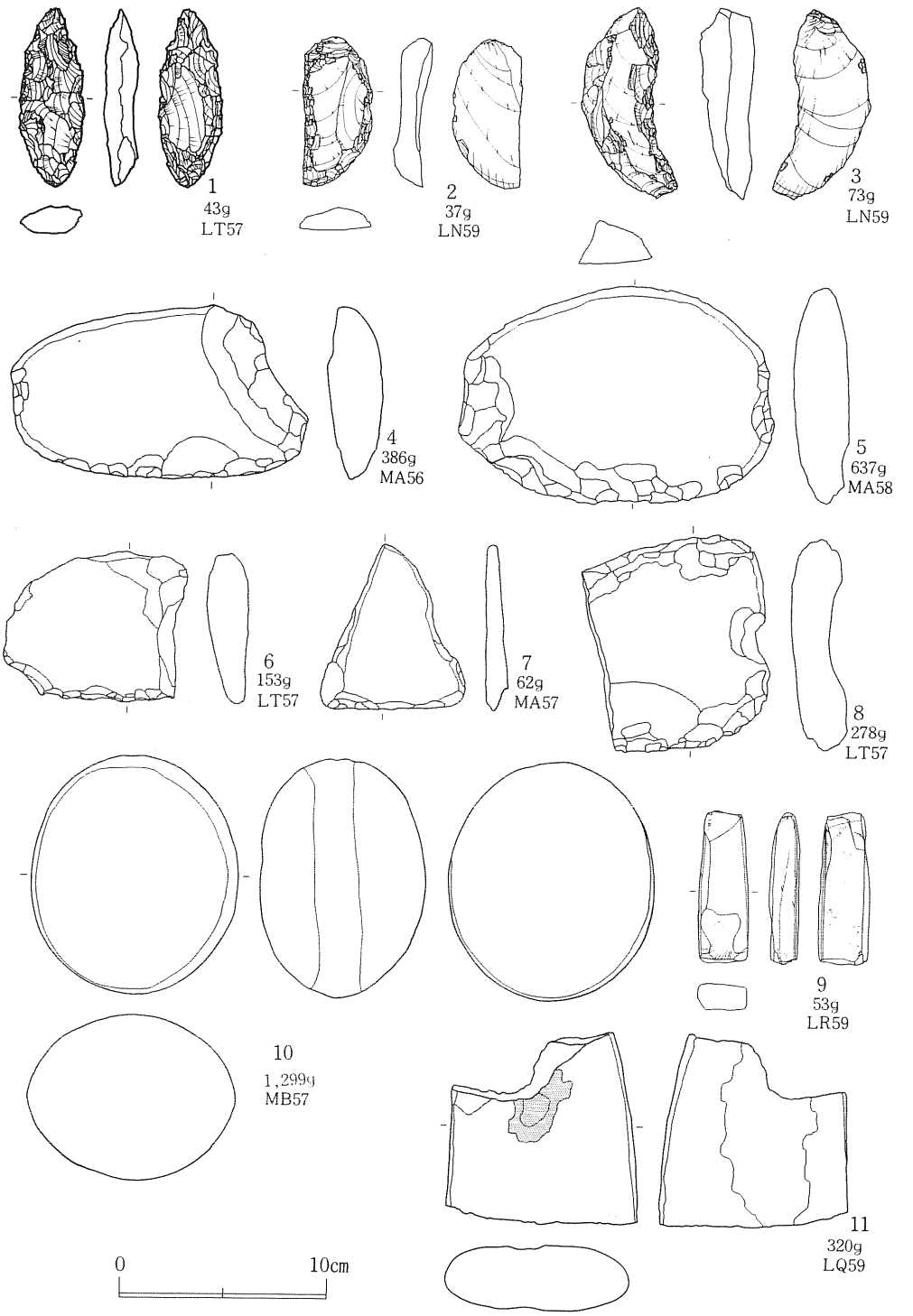
第29図　沢　No. 1　黒色土層出土石器実測図



第30図　沢　No.1　シラス層出土石器実測図(1)



第31図　沢　No.１　シラス層出土石器実測図（２），沢　No.１　黒褐色土層出土石器実測図



第32図　沢　No. 1　最下層出土石器実測図

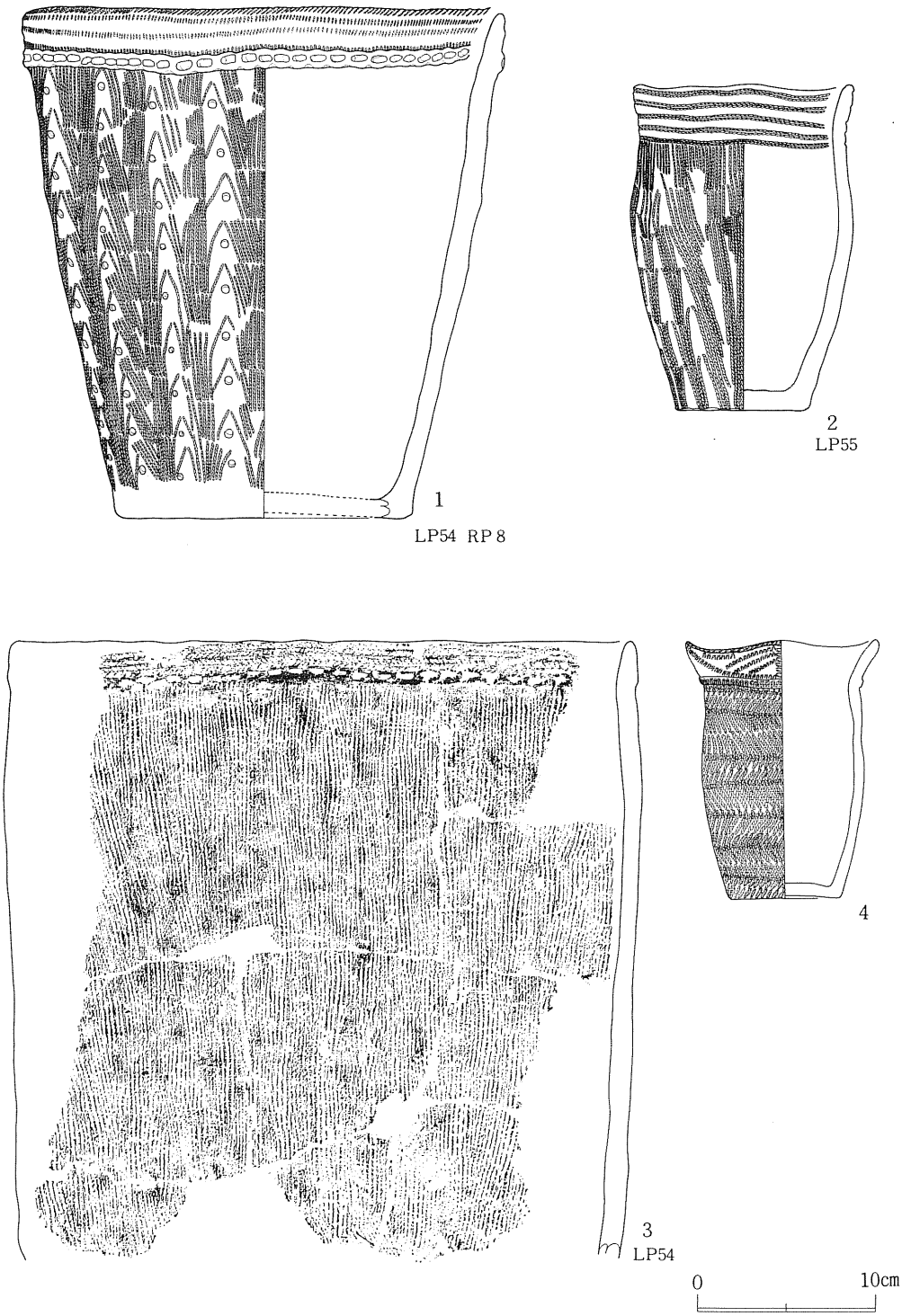
第33図　沢　No.２　実測図（遺物は主として最下層出土）

②　沢 №２（第33図～第43図、図版９・10・31・32、57・58）

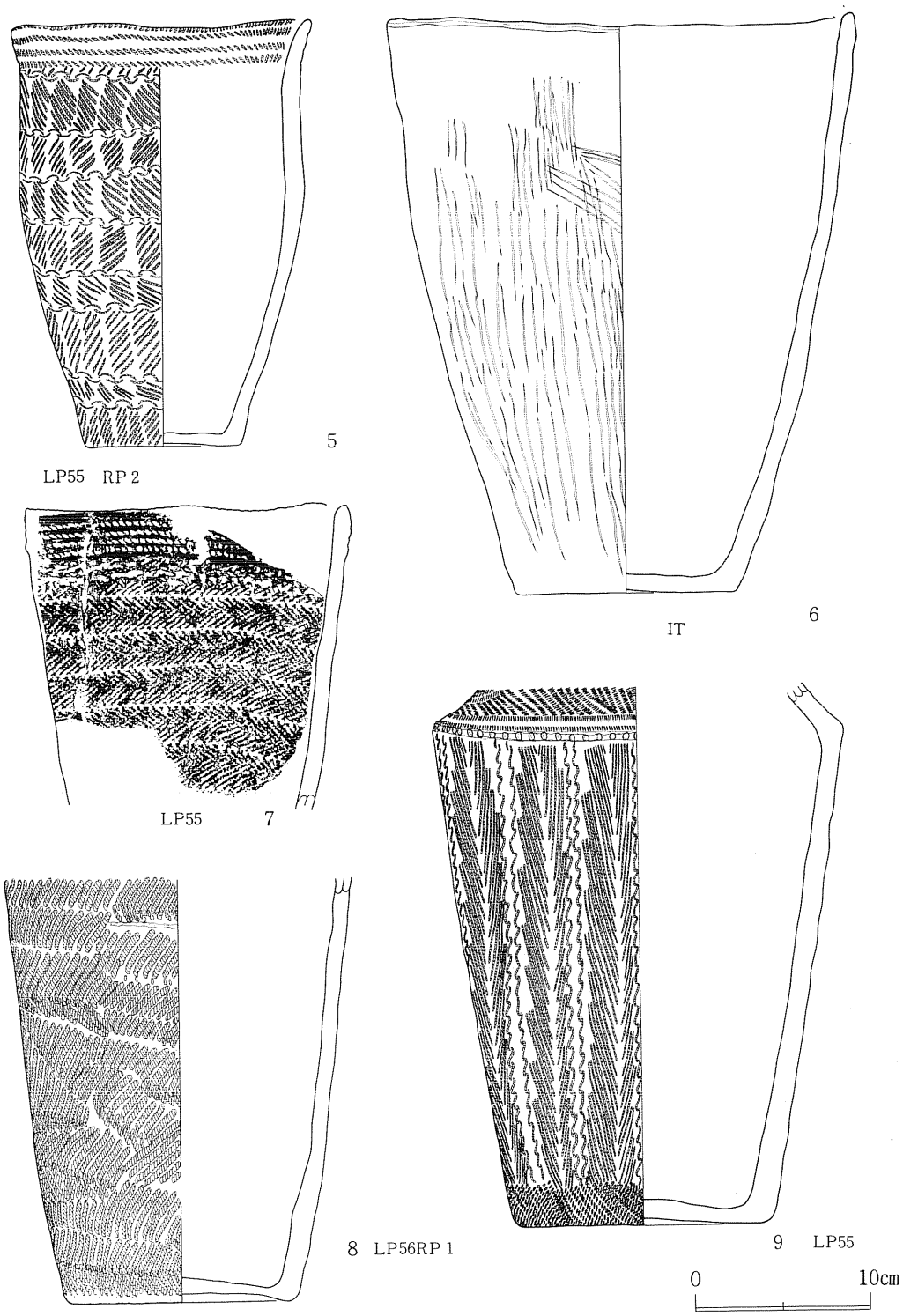
LD 54 ～ 57、LP 53 ～ 57、LQ 53 ～ 55 の斜面で検出した。地山である鳥越軽石質火山灰層（所謂シラス層）が侵食・開析されてできたものである。長さ 16.0 ㎝、最大幅 5.3 m、最深 4.1 mをはかる。埋土は、上位から黒褐色土層（Ⅰ）、シラス層（Ⅱ）、黒褐～暗褐色土層（Ⅲ）の３層に大別され、LP 57 杭の打設されている斜面上方から沢尻にあたる LQ 54 杭側に落ち込むように傾斜堆積しているが、シラス層のみ、中央部から沢尻部にかけて、ごく薄い酸化鉄分含有のシラス層と 10 数枚の互層をなして水平に堆積していた。このシラス層の水平堆積は、沢尻部側に何らかの障壁がかかって存在したことを示している。

遺物は、沢中央部から沢尻部にかけて各埋土中から多量に出土し、沢下方の遺物包含層に連続している。原地形が斜面であり、そこに開析された沢に遺物が投・廃棄あるいは流入した状況であることから各大別層位中の遺物も早期～中期の幅広い時期の所産のものが混在している。遺物収納は各大別層位毎に行っているが、底面に存する遺物については、最下層という名称で収納した。

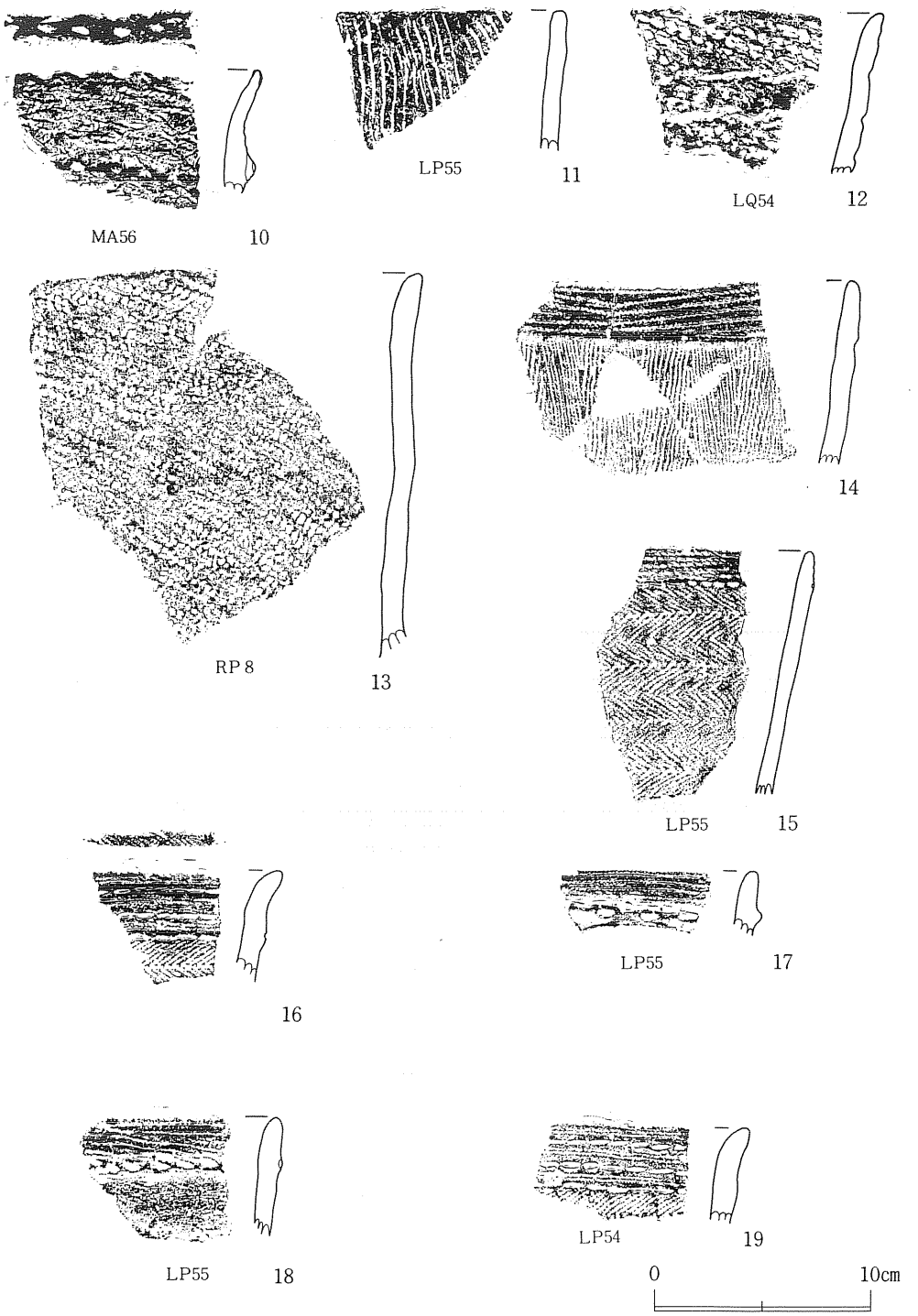
最下層では、木目状撚糸文を施文した前期の深鉢形土器や、多くの石錘・半円状扁平打製石器、石皿、すり石が出土し、シラス層上面では中期の深鉢形土器や石槍が出土した。



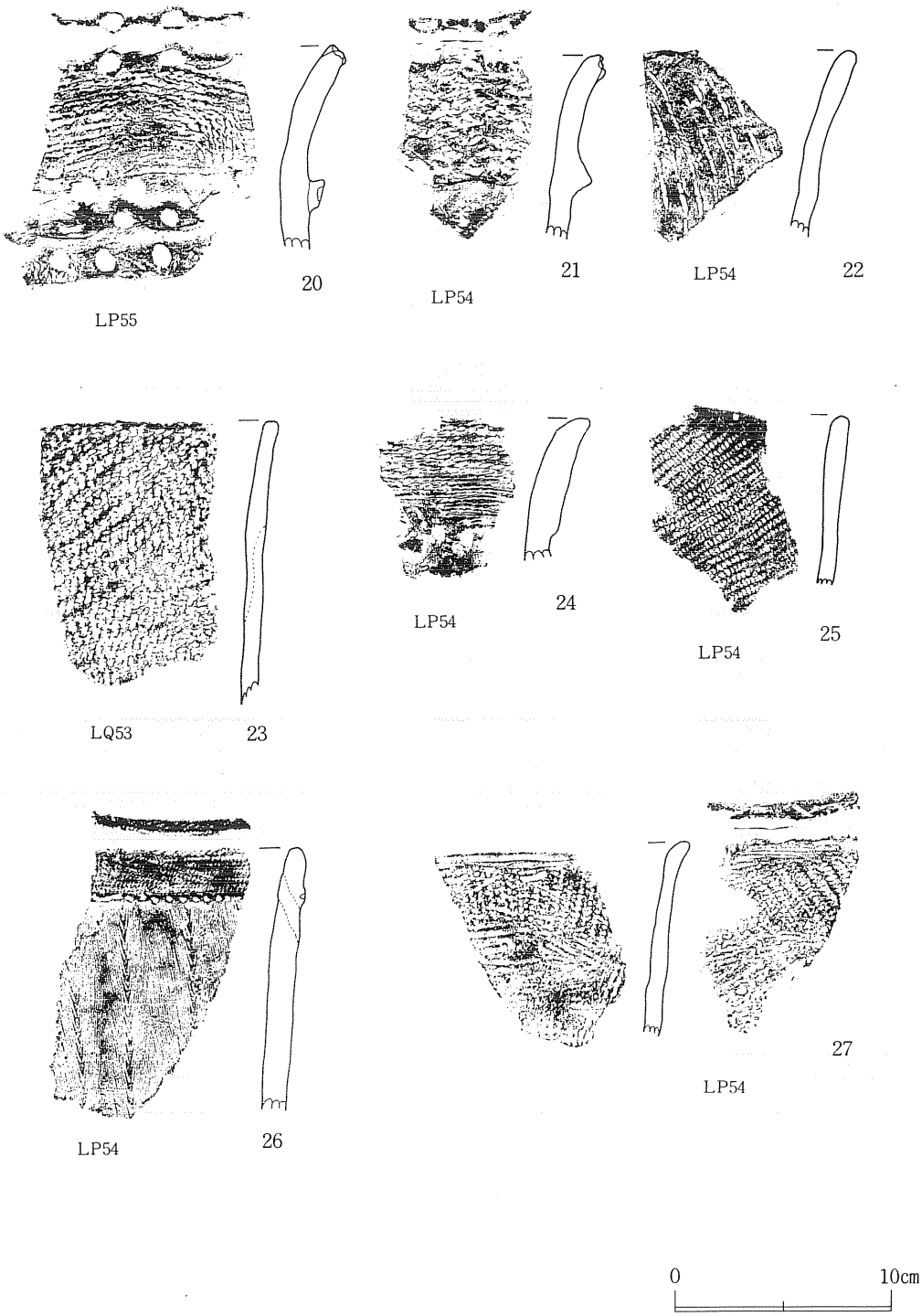
第34図　沢　No. 2　最下層出土土器実測・拓影図（1）



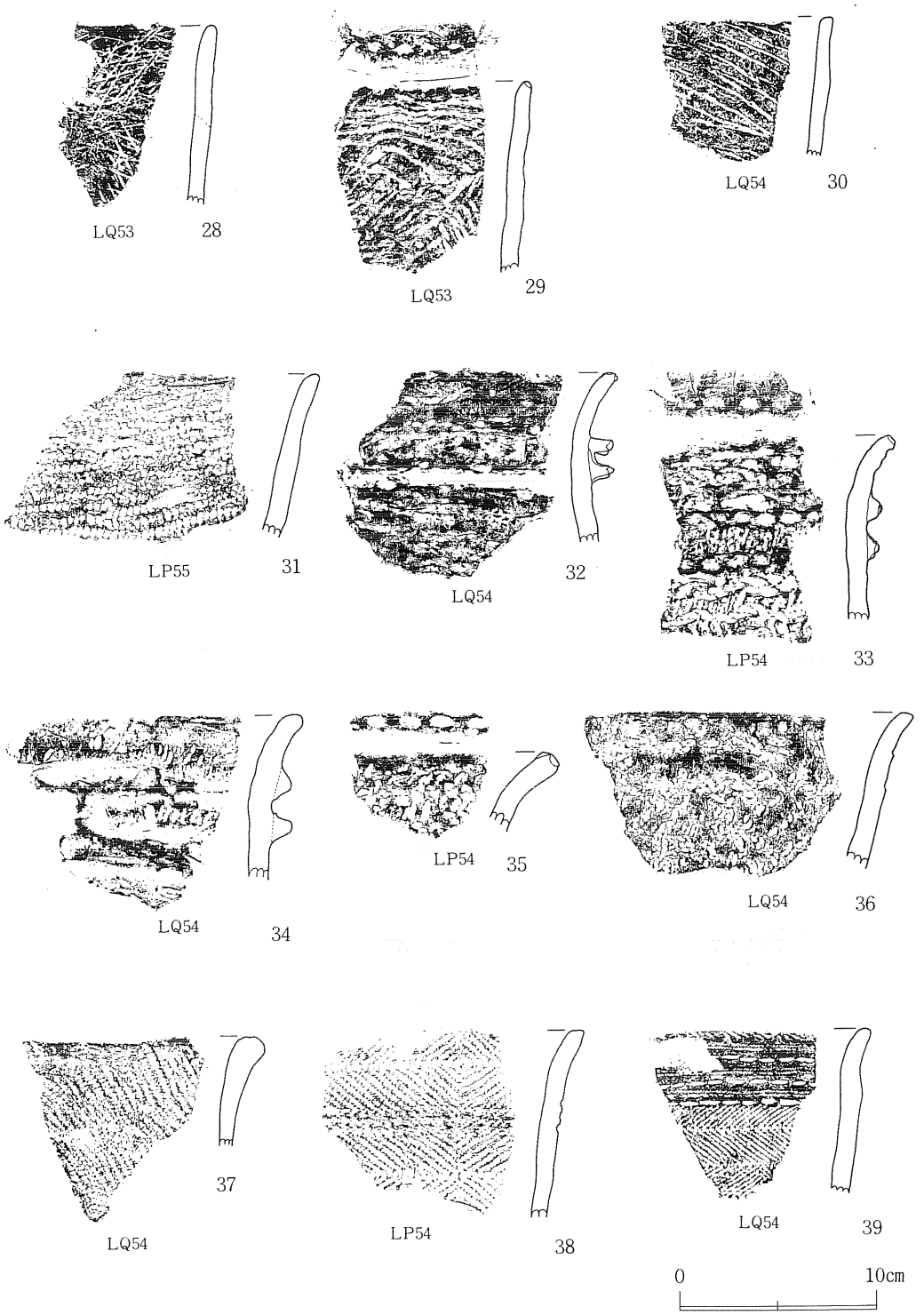
第35図　沢　No.２　最下層出土土器実測・拓影図（２）



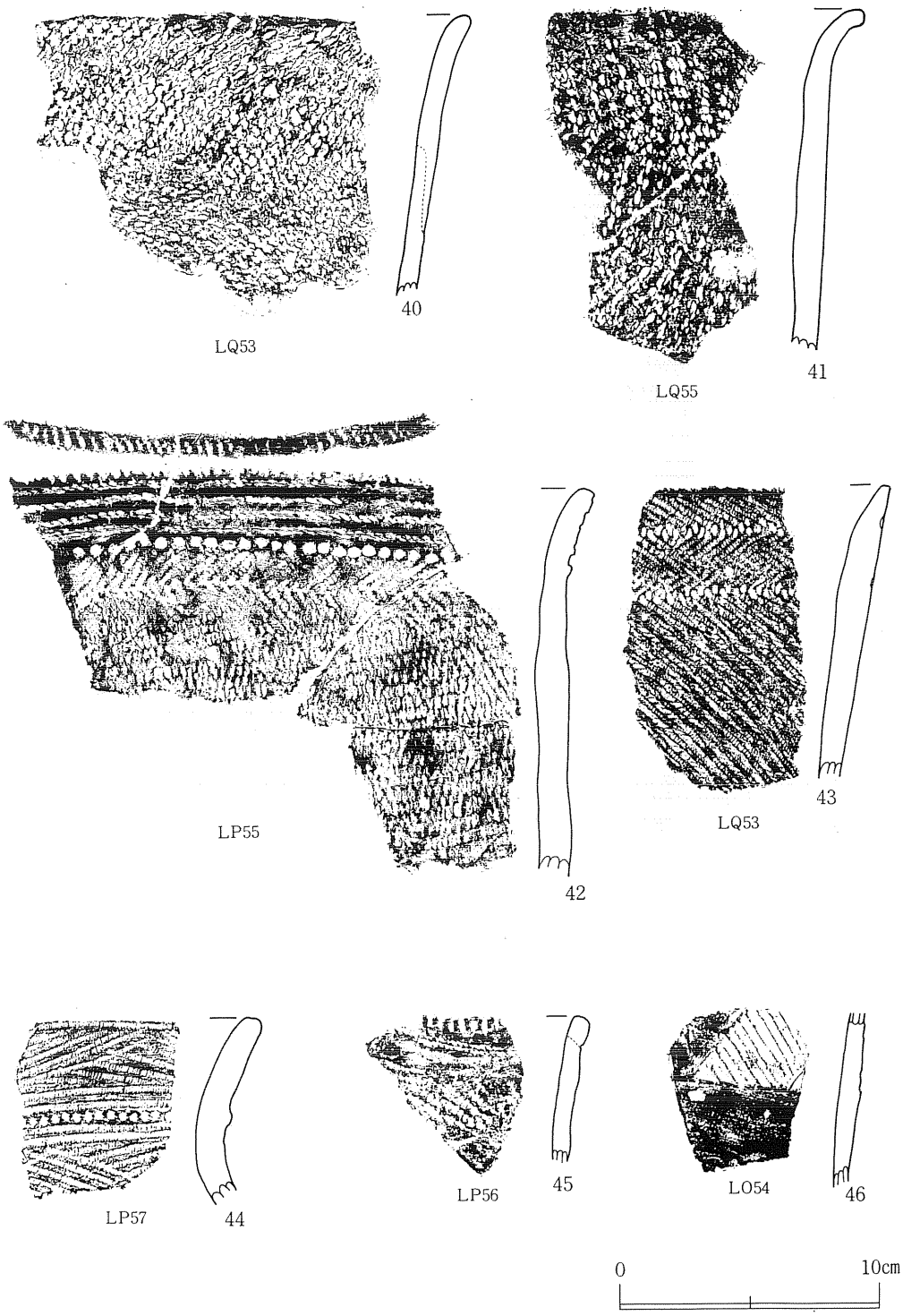
第36図　沢　No. 2　最下層出土土器拓影図（3）



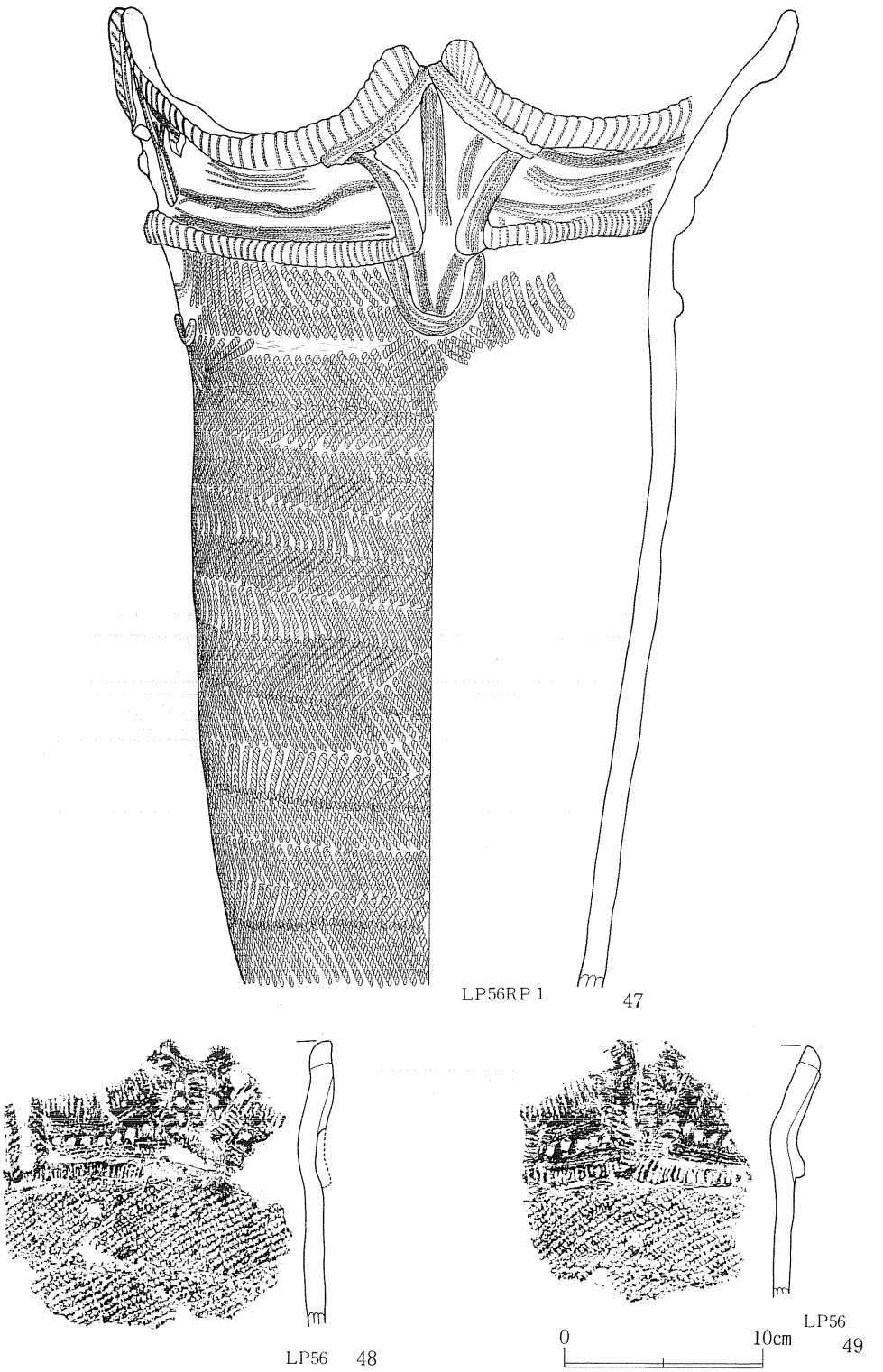
第37図　沢　No. 2　シラス層出土土器拓影図（４）



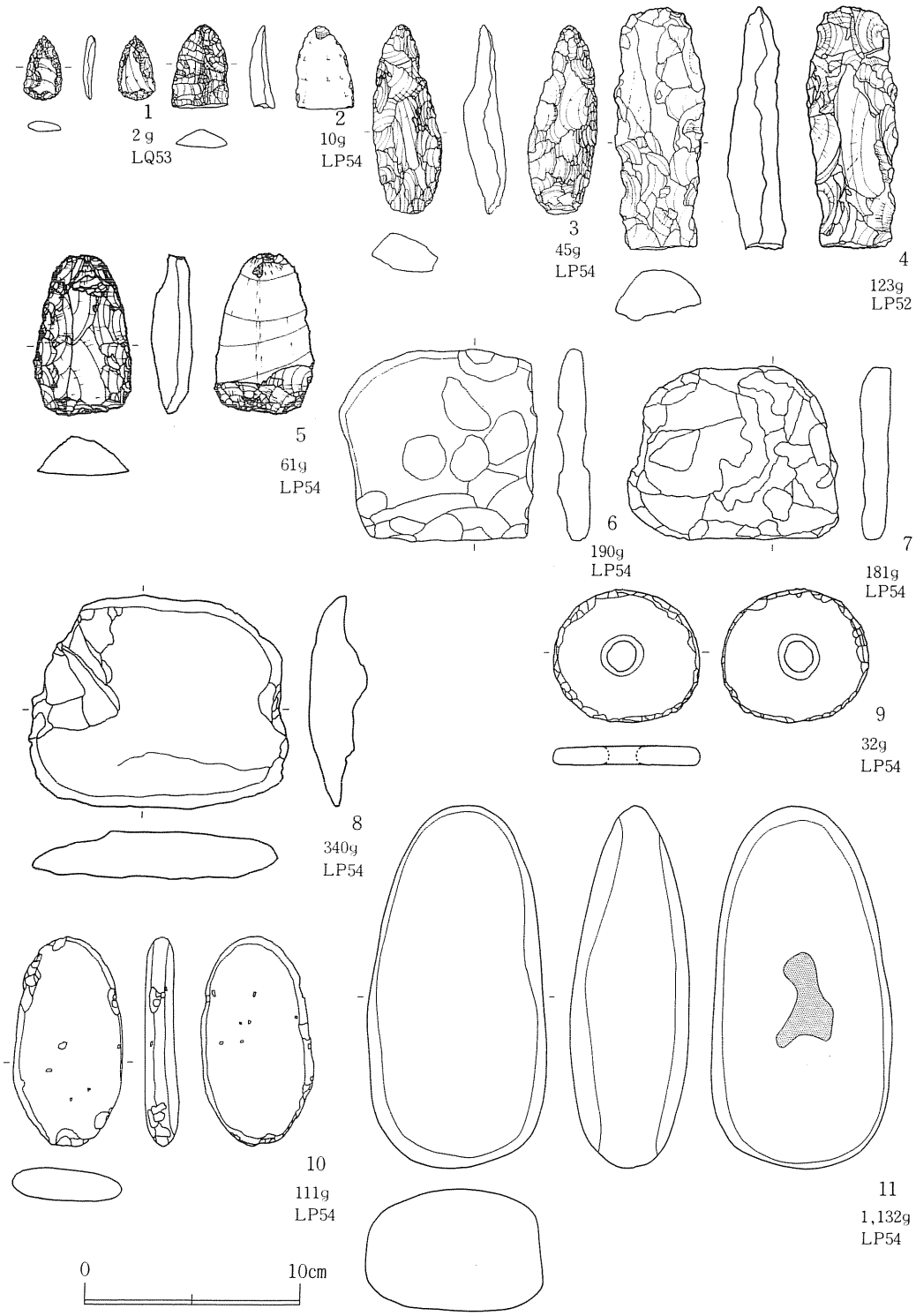
第38図　沢　No. 2　黒褐色土（大別Ⅲ層）出土土器拓影図（5）



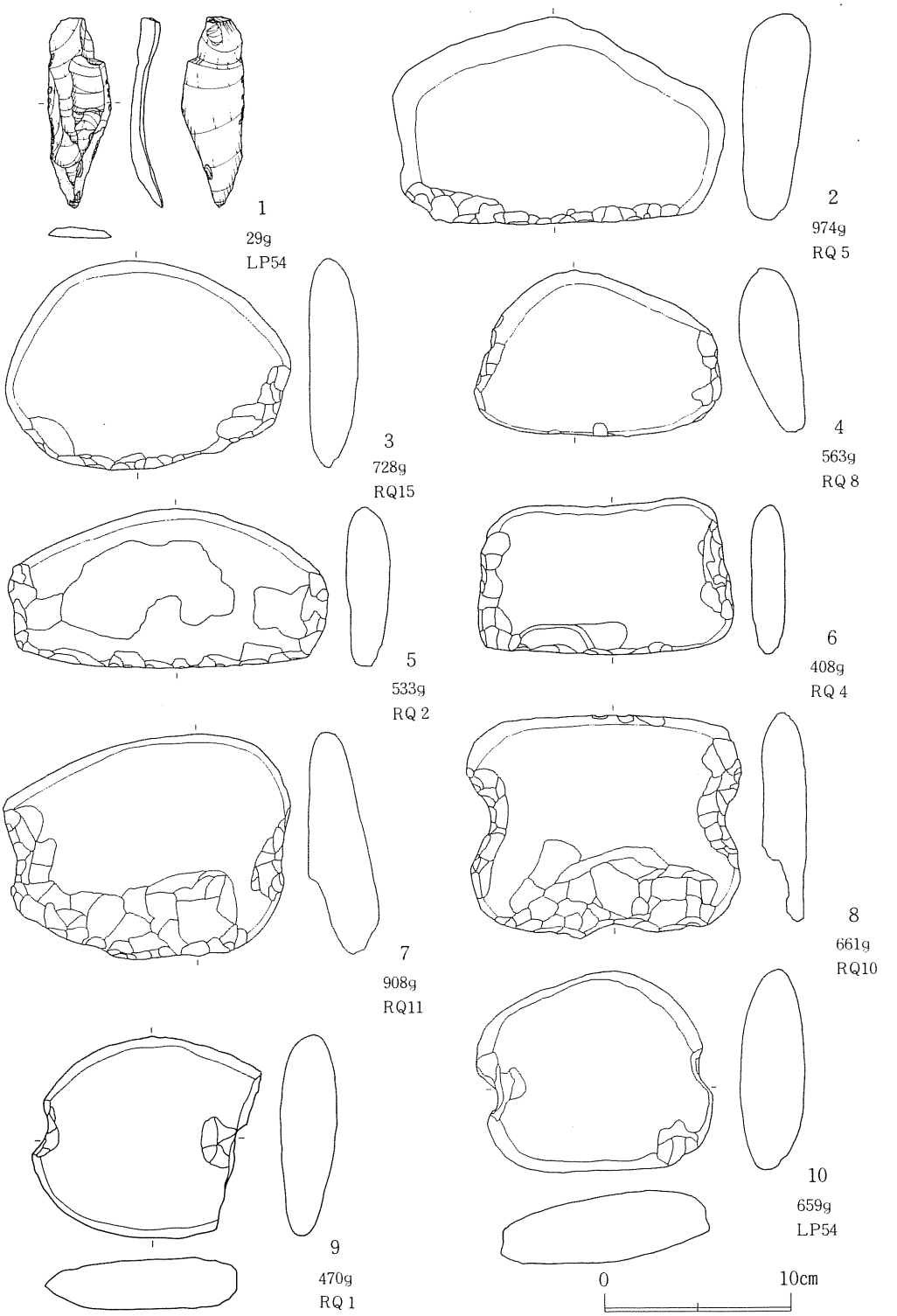
第39図　沢　No. 2　暗褐～黒褐色土層（大別Ⅲ層）出土土器拓影図（６）



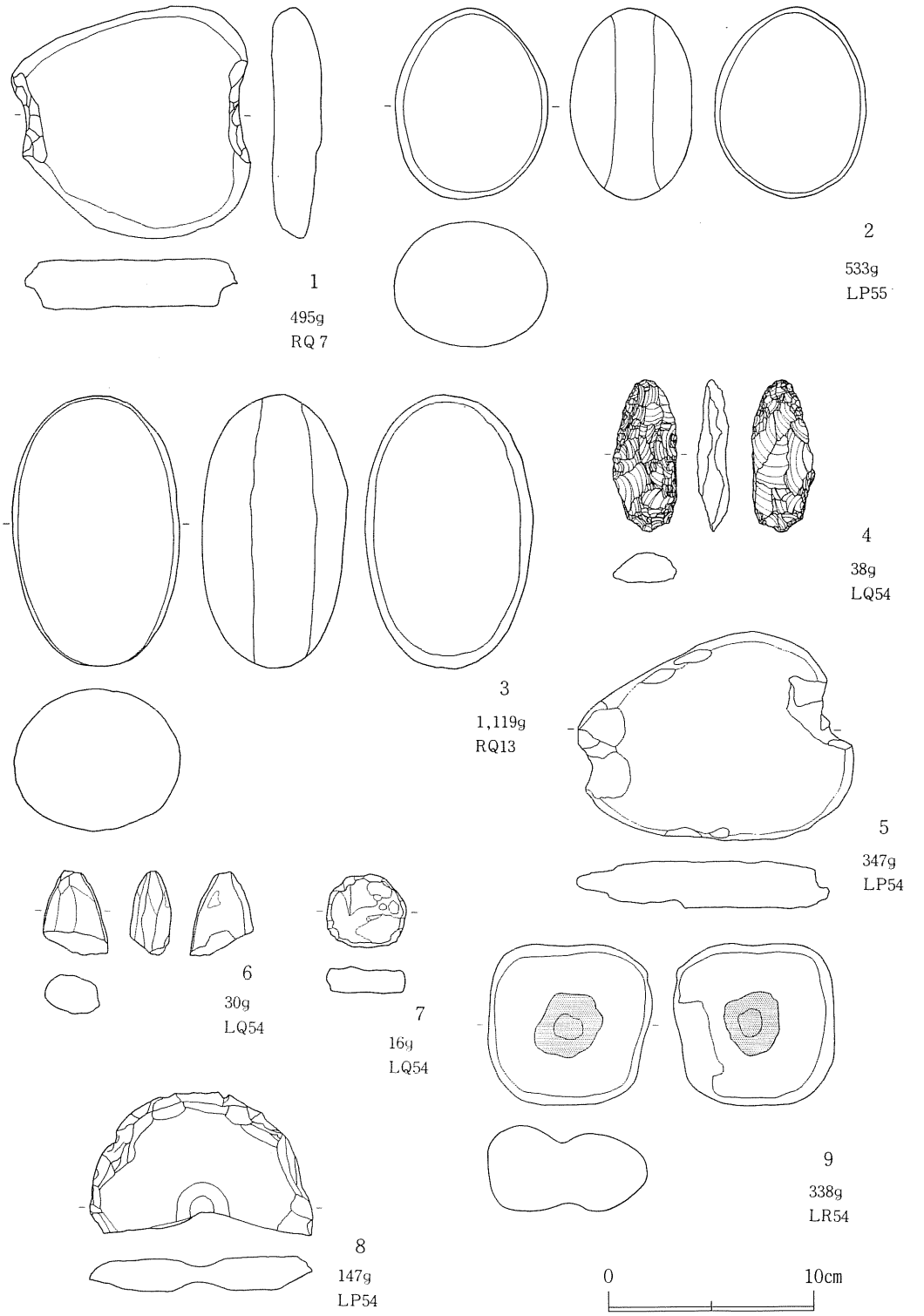
第40図　沢　No. 2　暗褐色土層（大別Ⅰ層）出土土器実測・拓影図（7）



第41図　沢　No. 2　シラス層出土石器実測図，黒色土層出土石器実測図



第42図　沢　No. 2　最下層出土石器実測図（1）



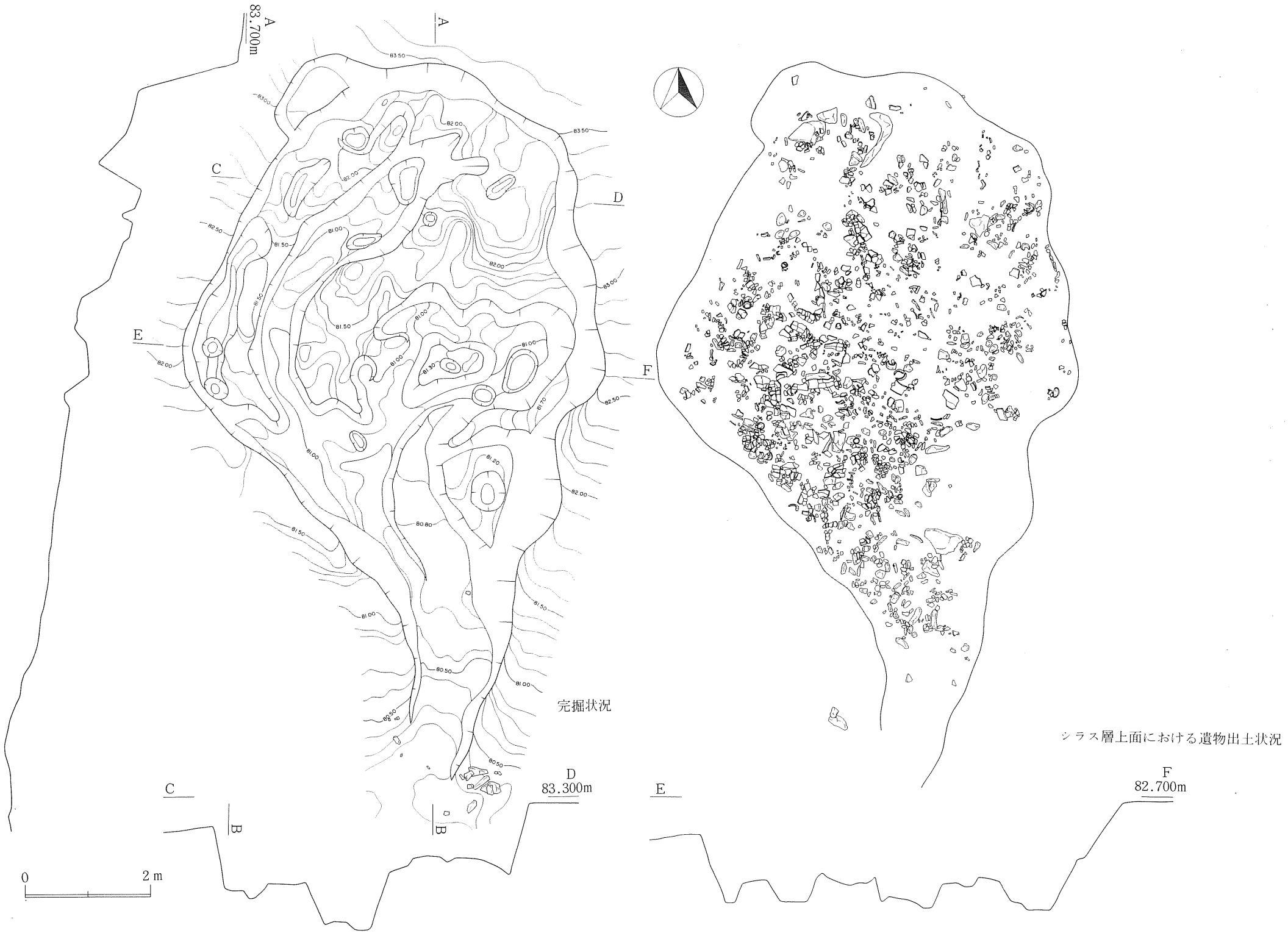
第43図　沢　No. 2　最下層出土石器実測図（２）黒褐色土層出土石器実測図

③　沢№3（竪穴住居跡）（第44図～　第67図、図版11～15、33～39、59～63）

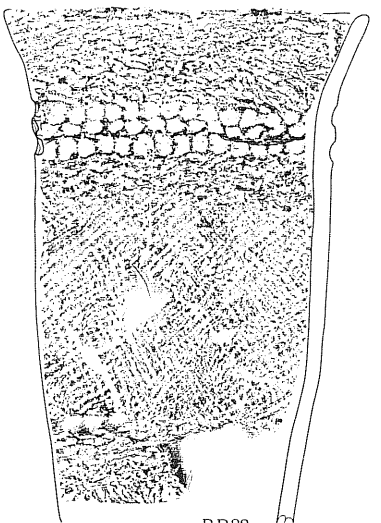
LM 52～54、LN 51～54の斜面で検出した。長さ11.6 m、最大幅6.6 m、最深3.5 mをはかるが土圧のためか側壁がオーバーハングしていた。

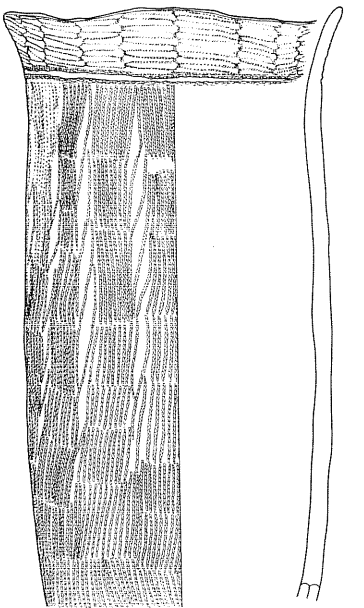
当初、地山のシラス層が侵食・開析されてできた自然営力による沢状地形と考えていたが、完掘したところ、シラスの盛り上がりや柱穴痕らしいピットが検出されたので、斜面に掘り込まれた竪穴住居が廃棄されたあと、地下水の侵食、雪蝕等により床面が開析されて凹凸の激しい底面を呈するようになったと解釈した。

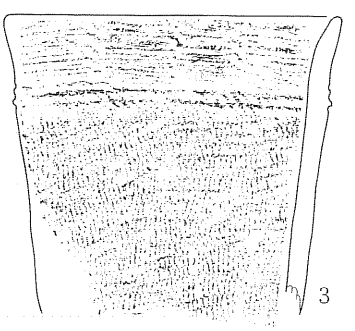
埋土は、上位に暗褐～黒褐色土が若干堆積するが、以下はシラスの再堆積層である。ほぼ全面に土器が20～60㎝の厚さで堆積しており、石器類も多量に出土した。土器は縄文時代前期の円筒下層式土器が主体をなし、完形品が直立、倒立あるいは押し潰されたように横倒しになって出土している。また、岩偶も1点出土している。

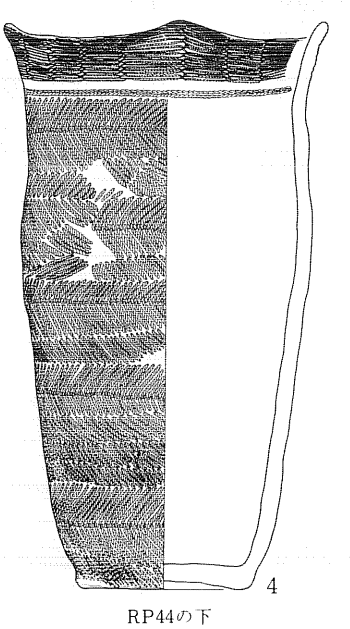


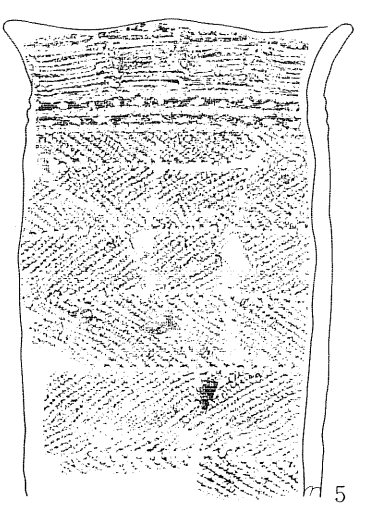
第44図　沢　No. 3　実測図

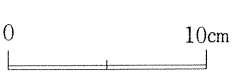




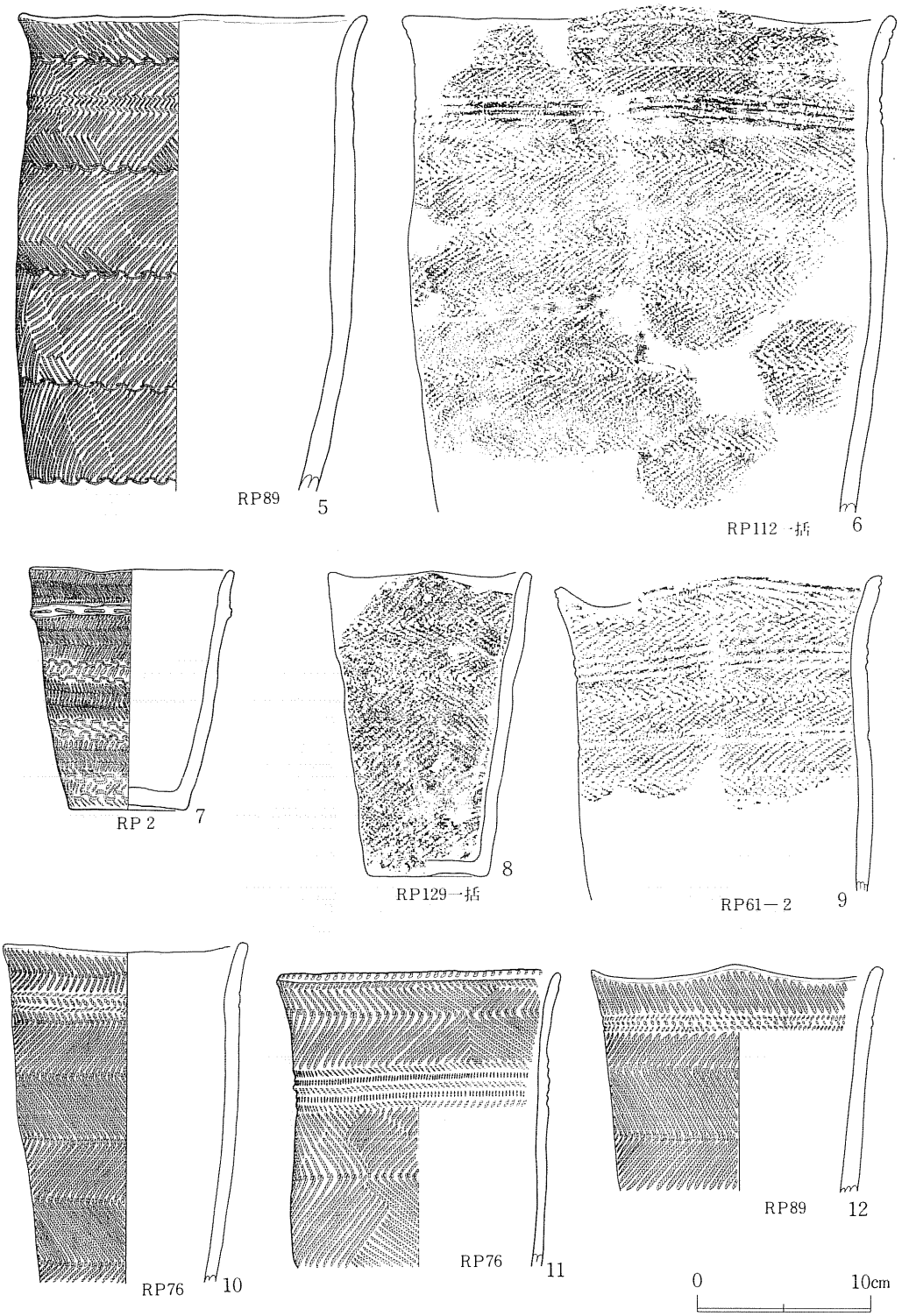




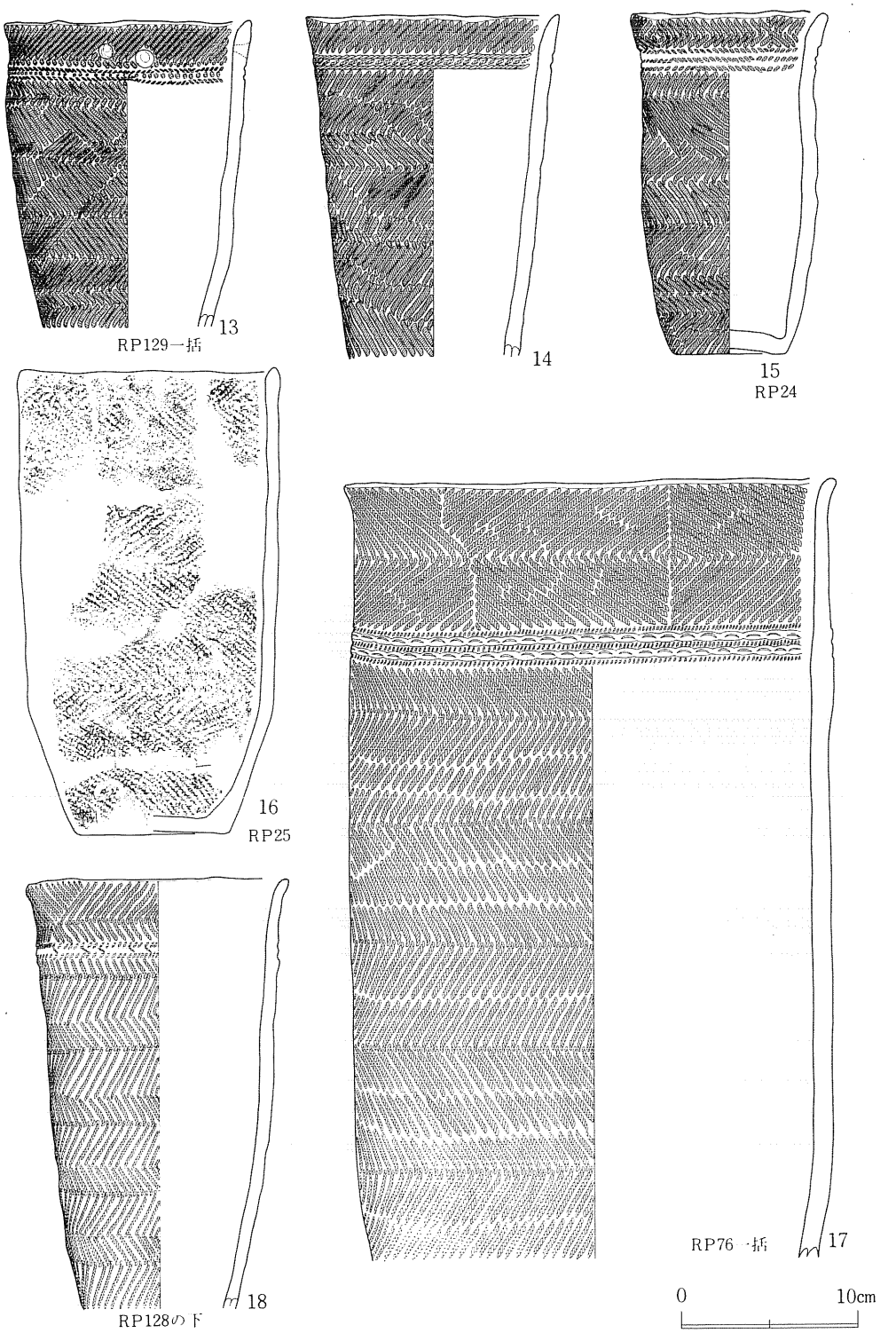




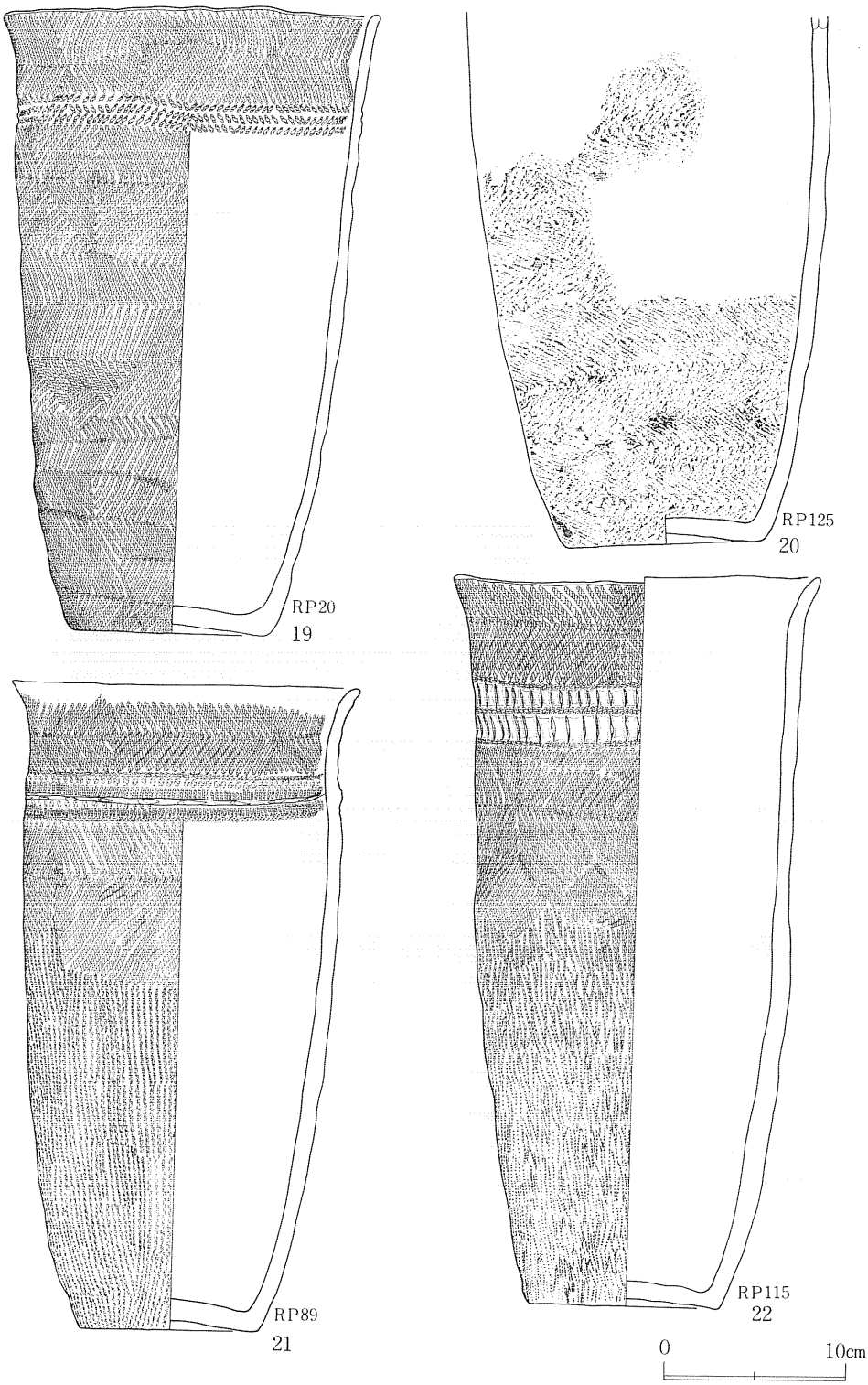
第45図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（1）



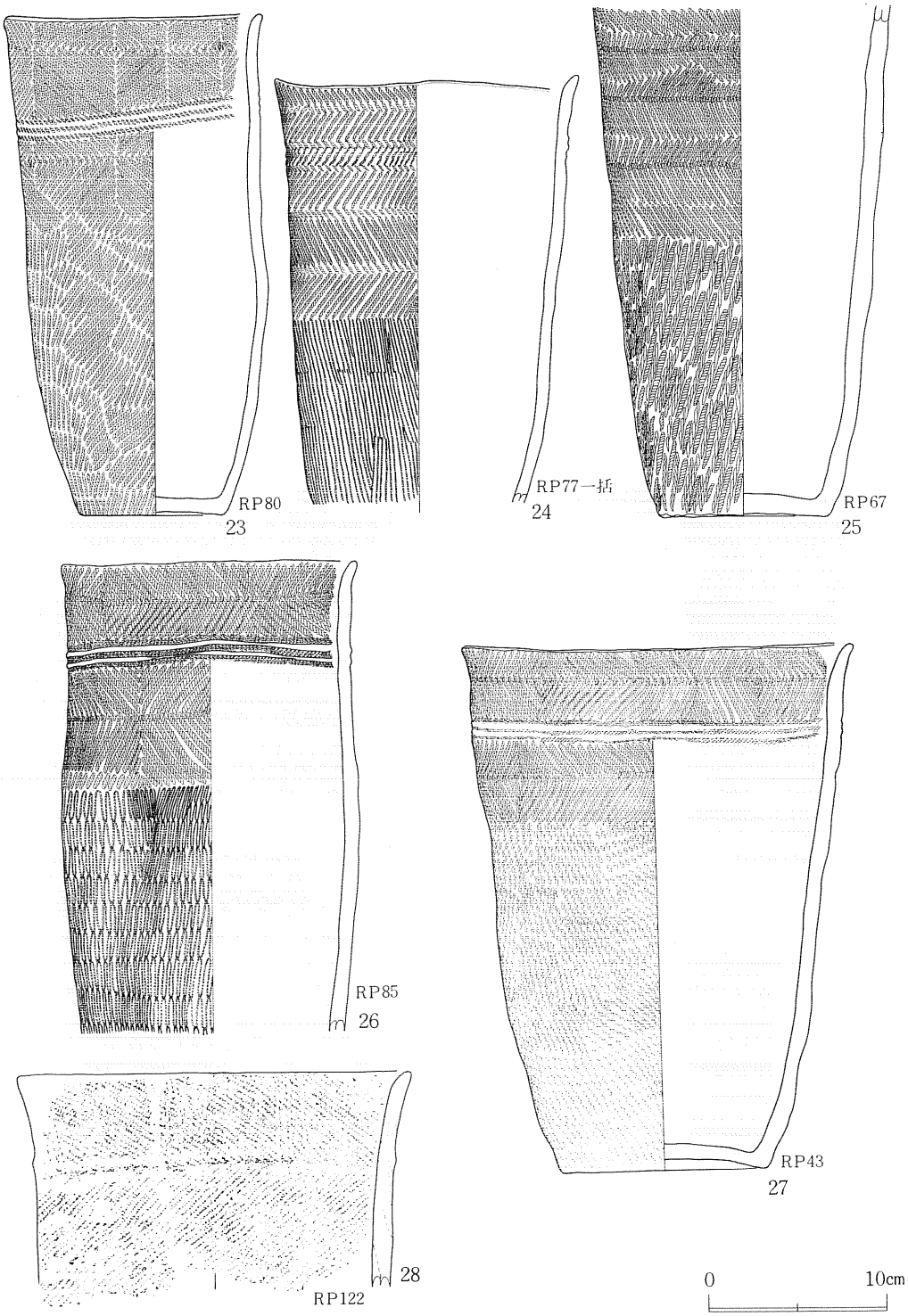
第46図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（2）



第47図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（３）

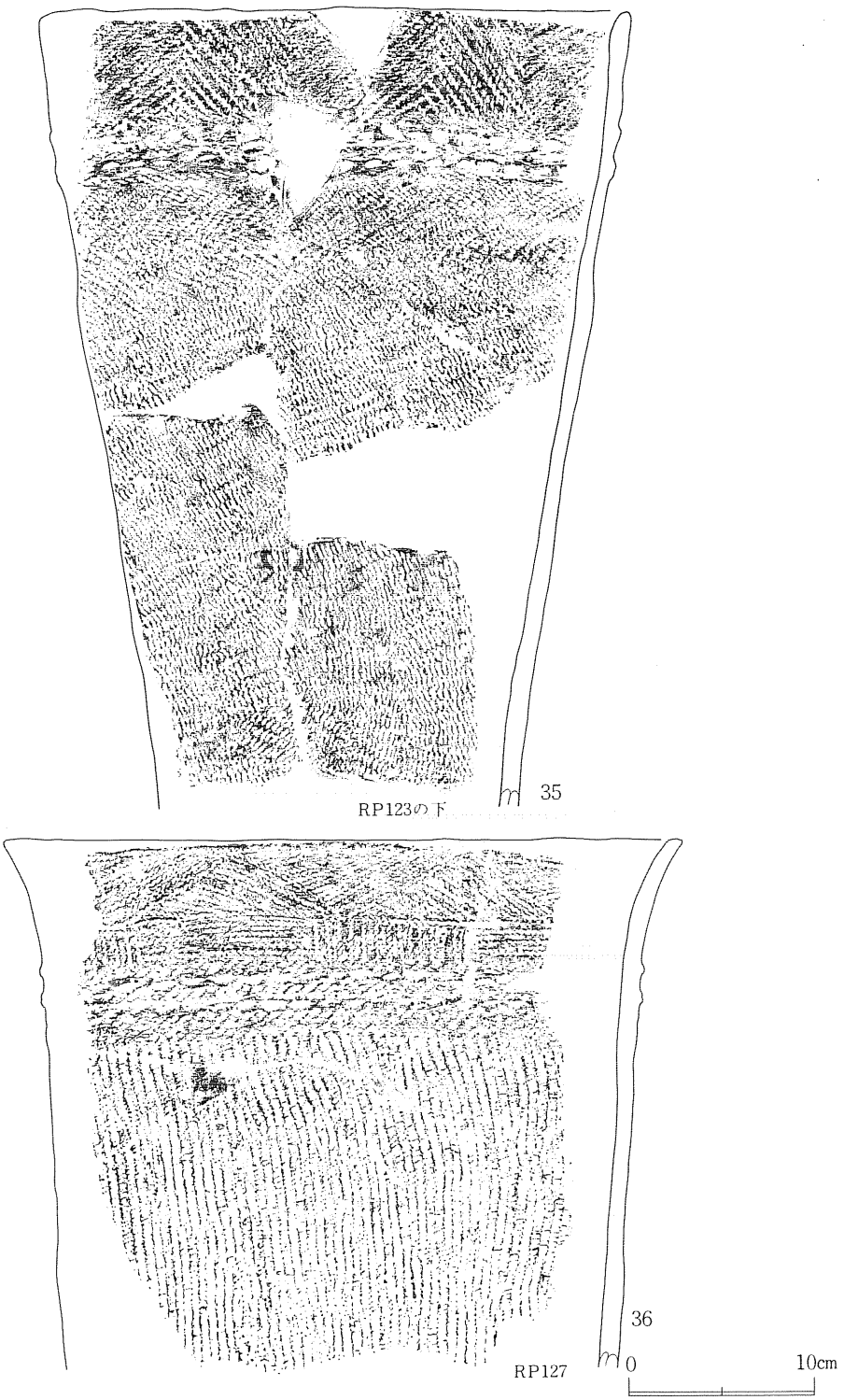


第48図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（4）

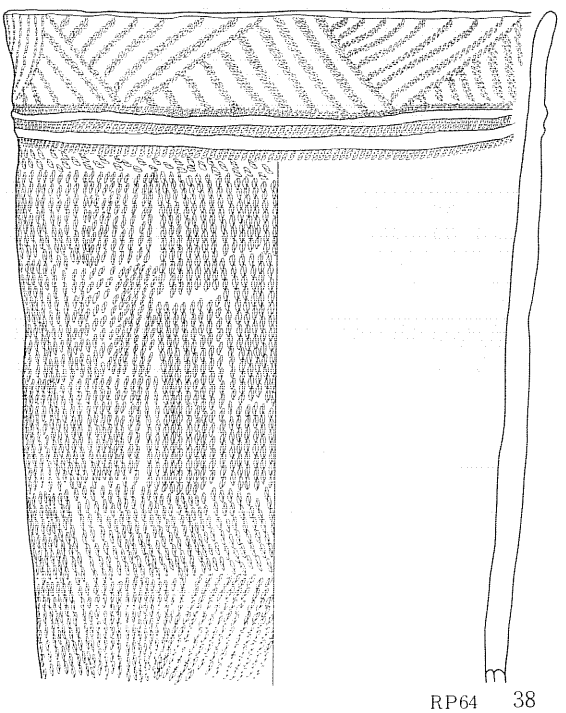


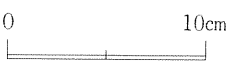
第49図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（5）

第50図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（6）

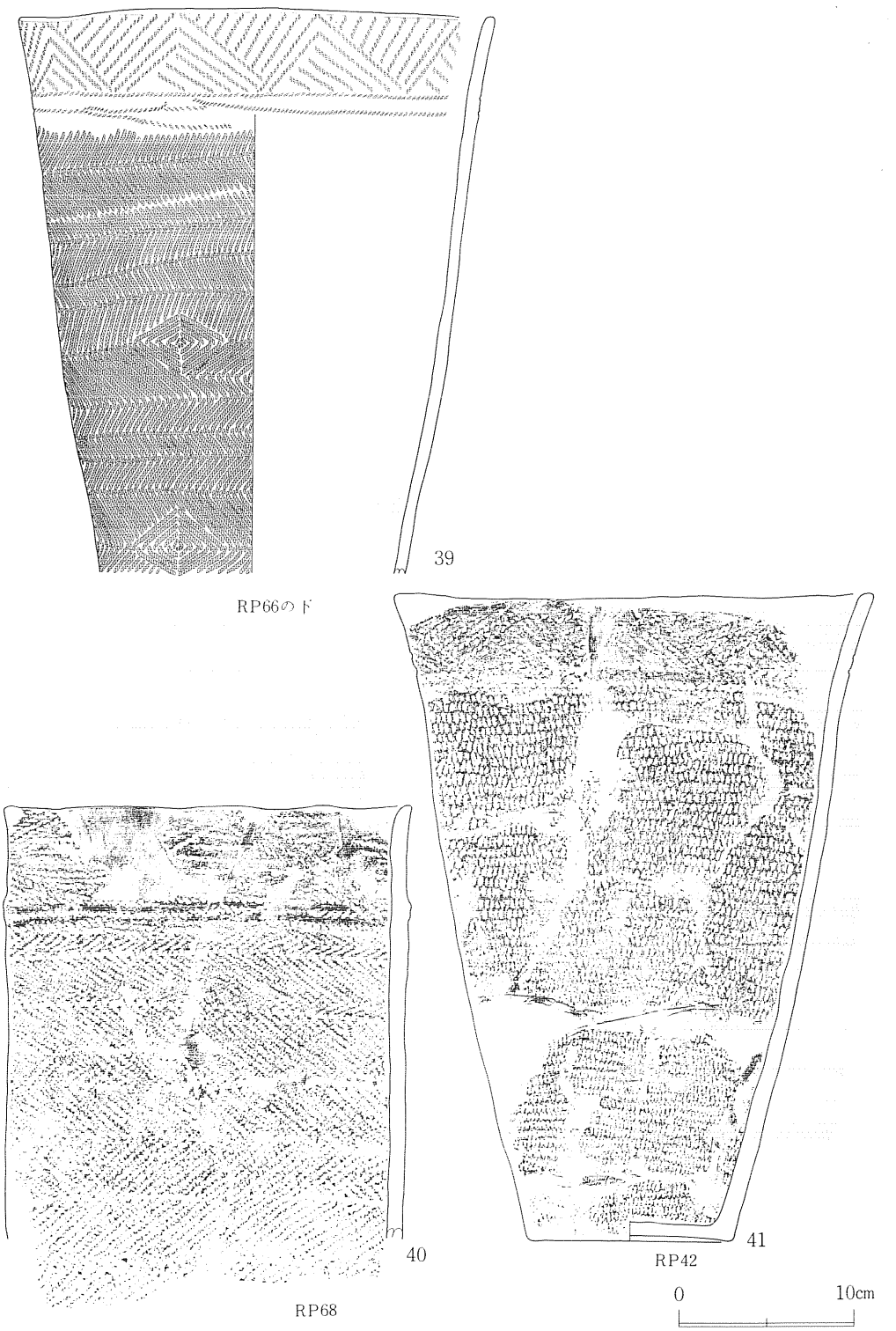


第51図　沢　No. 3　出土土器拓影図（７）

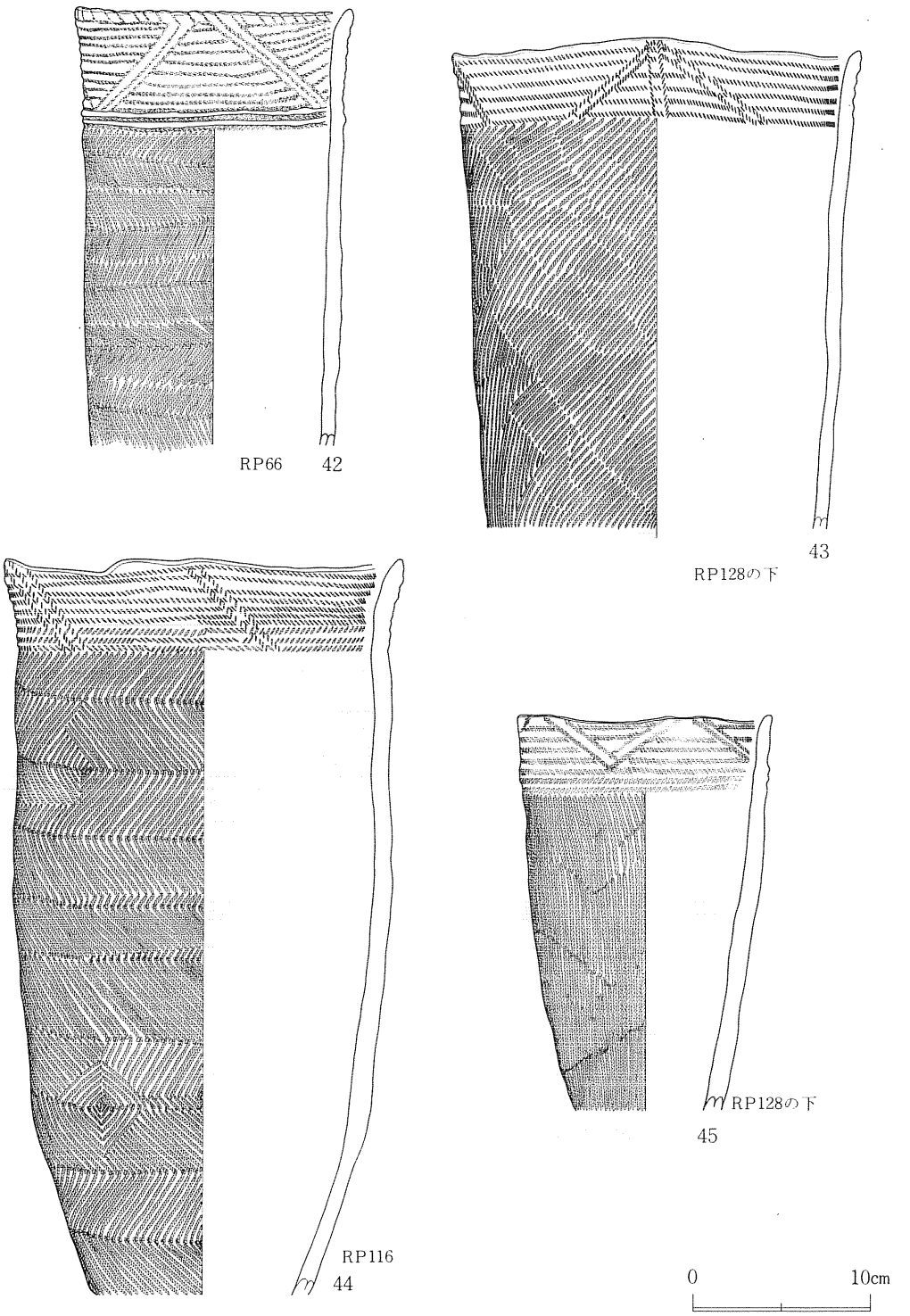




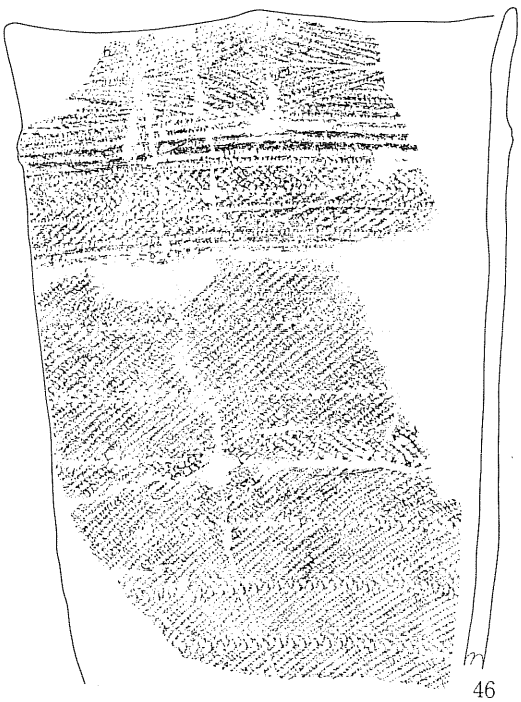
第52図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図（8）



第53図　沢　No.３　出土土器実測・拓影図（９）

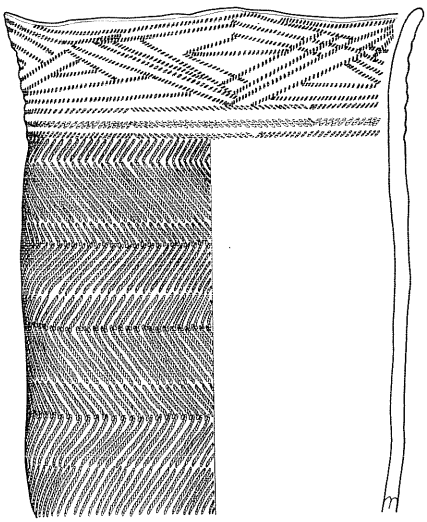


第54図　沢　No. 3　出土土器実測図(10)



46

RP63の下

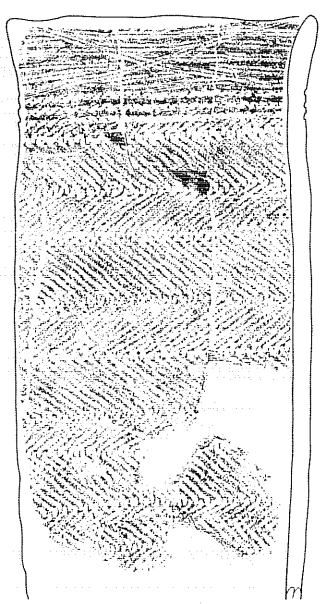


47

RP80一括

48

RP44

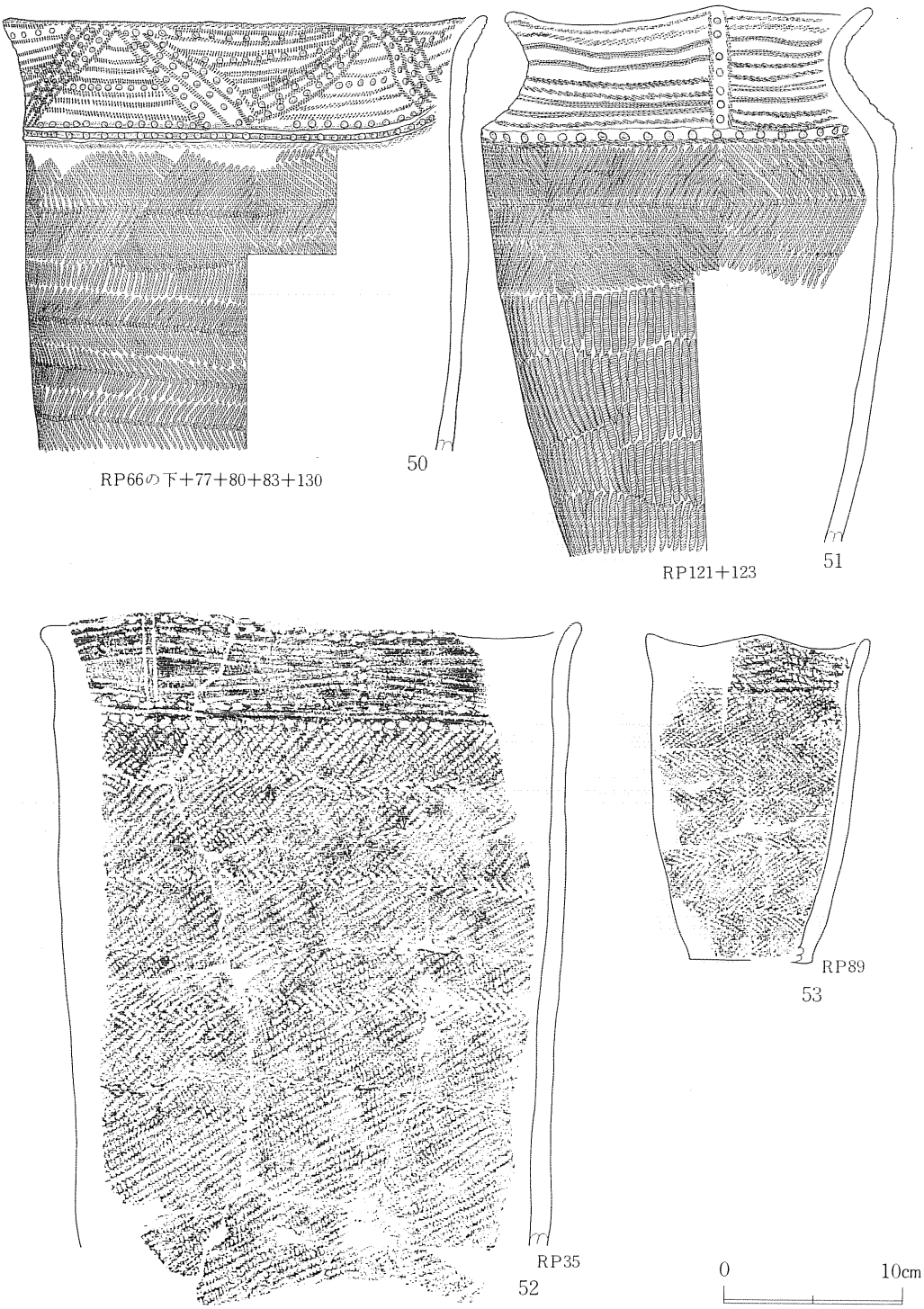


49

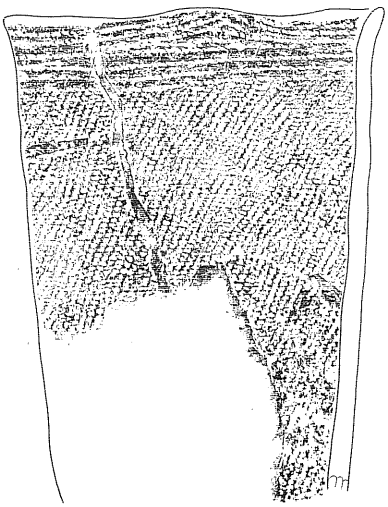
RP129一括

0　10cm

第55図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図(11)

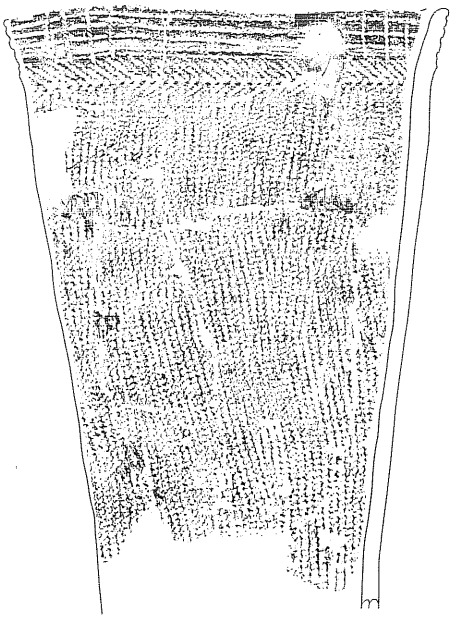


第56図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図(12)



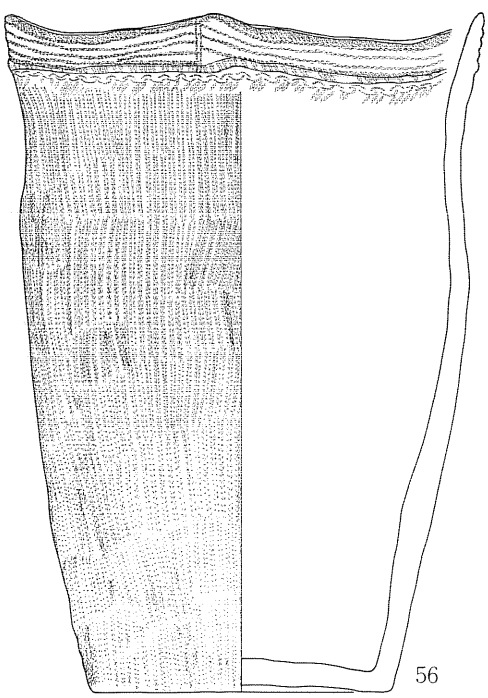
54

RP61の１



55

RP34

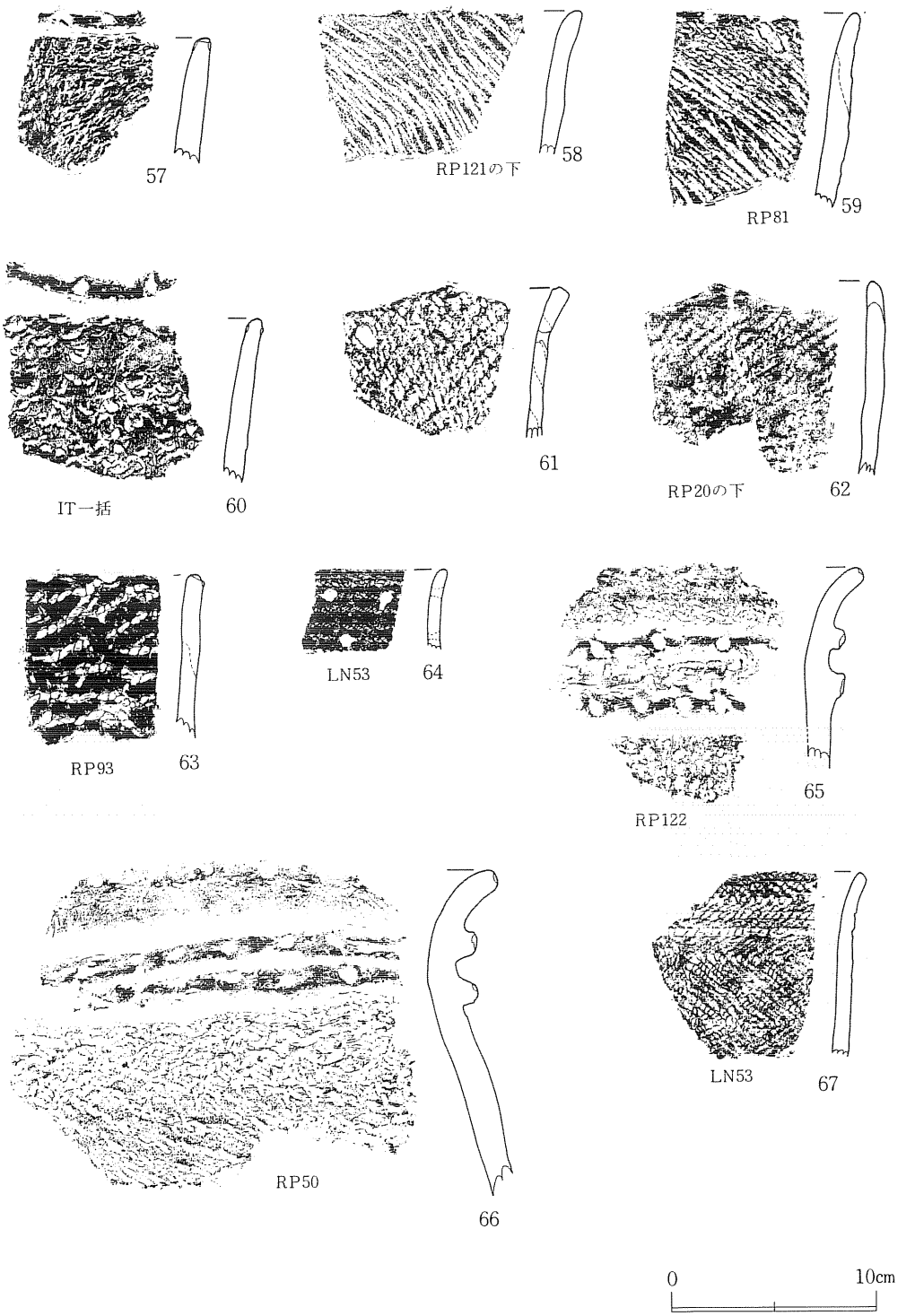


56

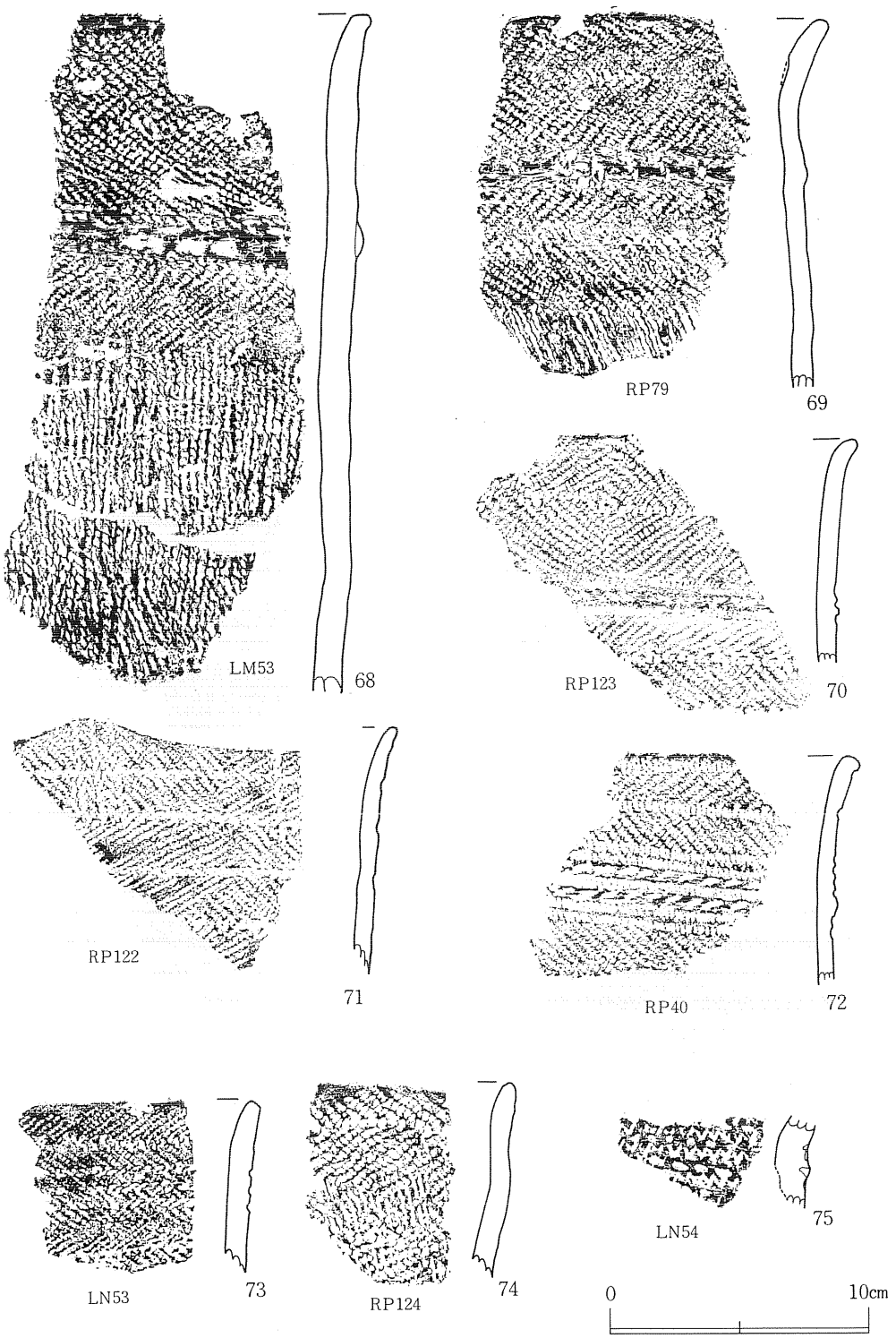
RP200

0　　10cm

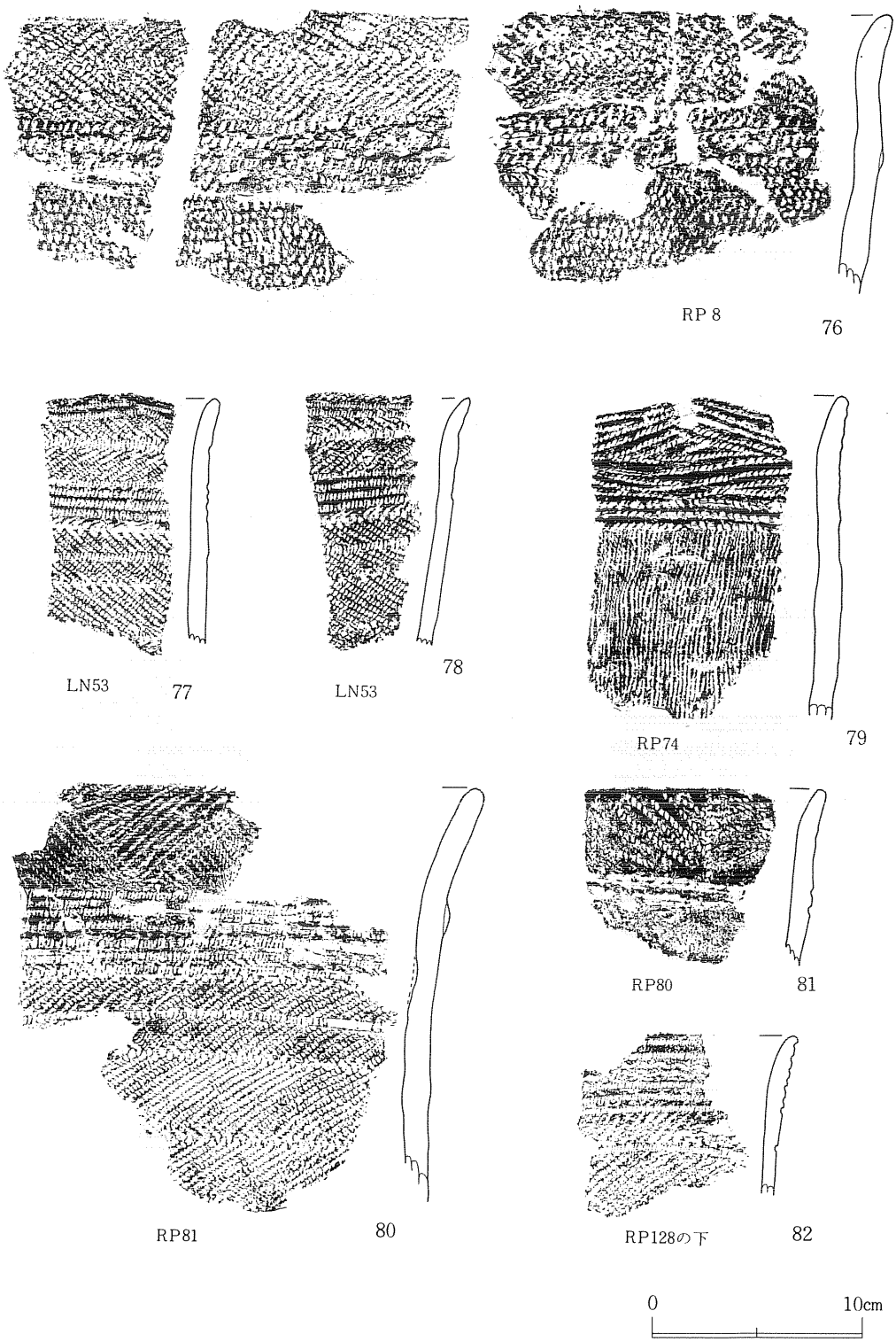
第57図　沢　No. 3　出土土器実測・拓影図(13)



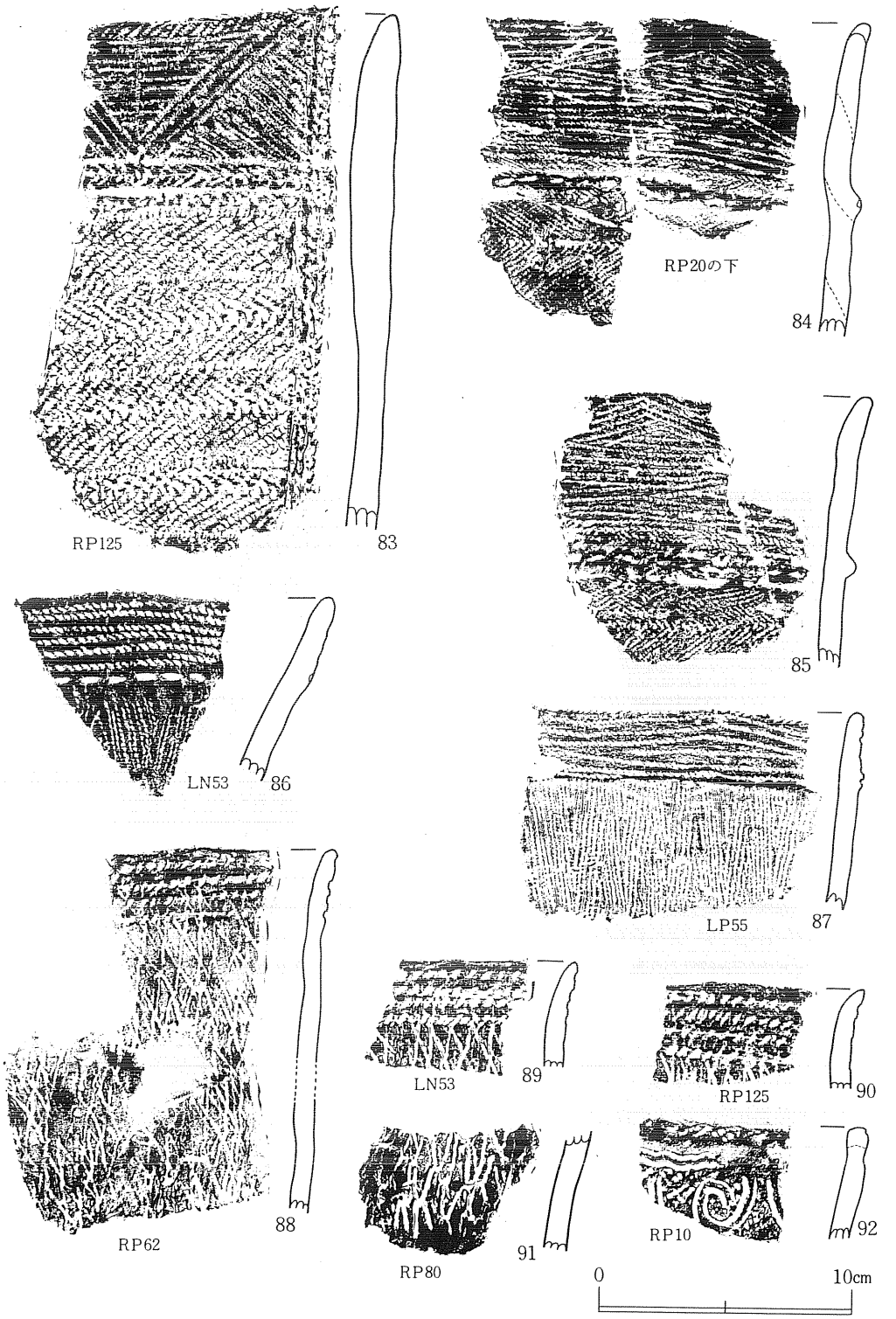
第58図　沢　No. 3　出土土器拓影図(14)



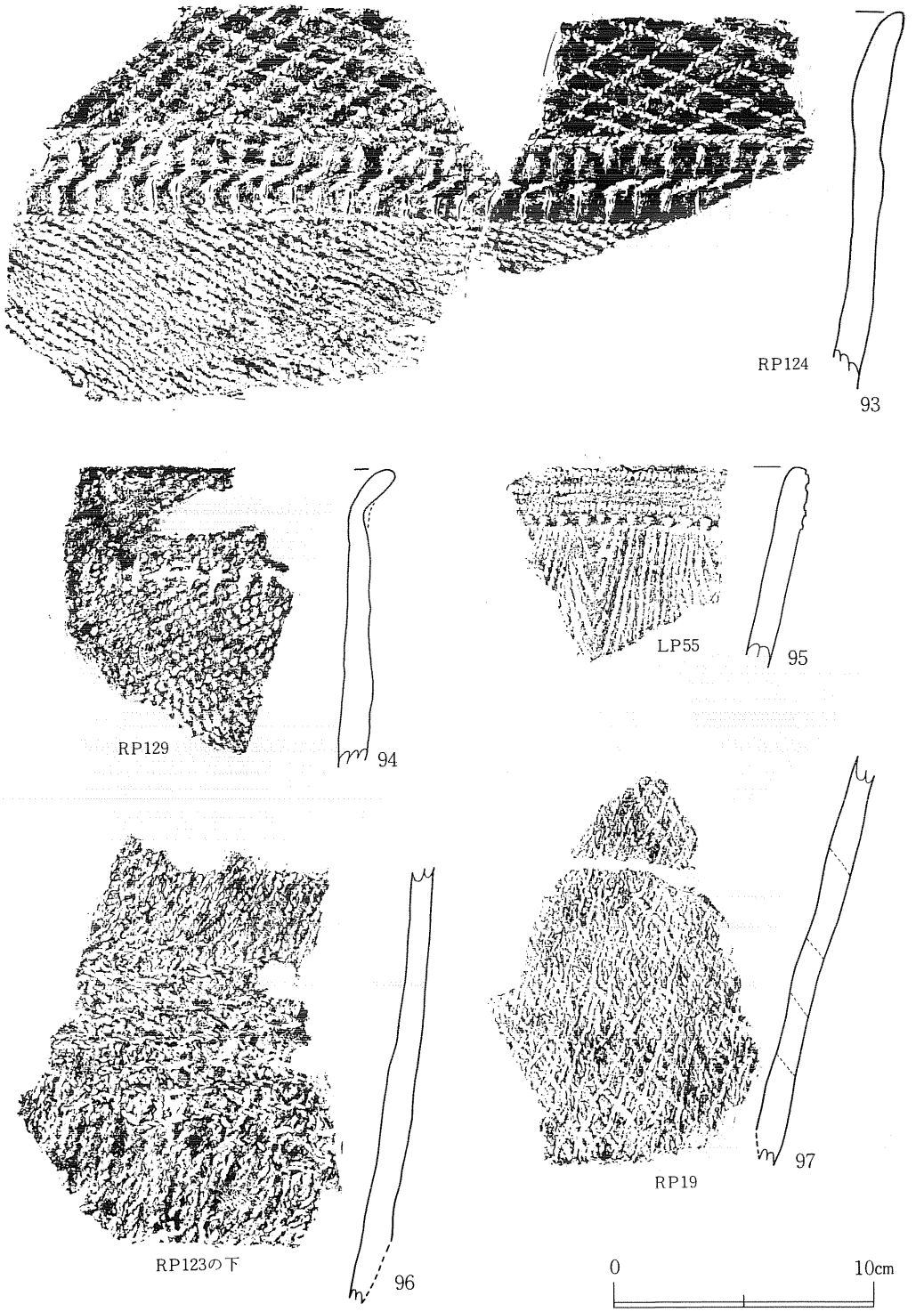
第59図　沢　No. 3　出土土器拓影図(15)



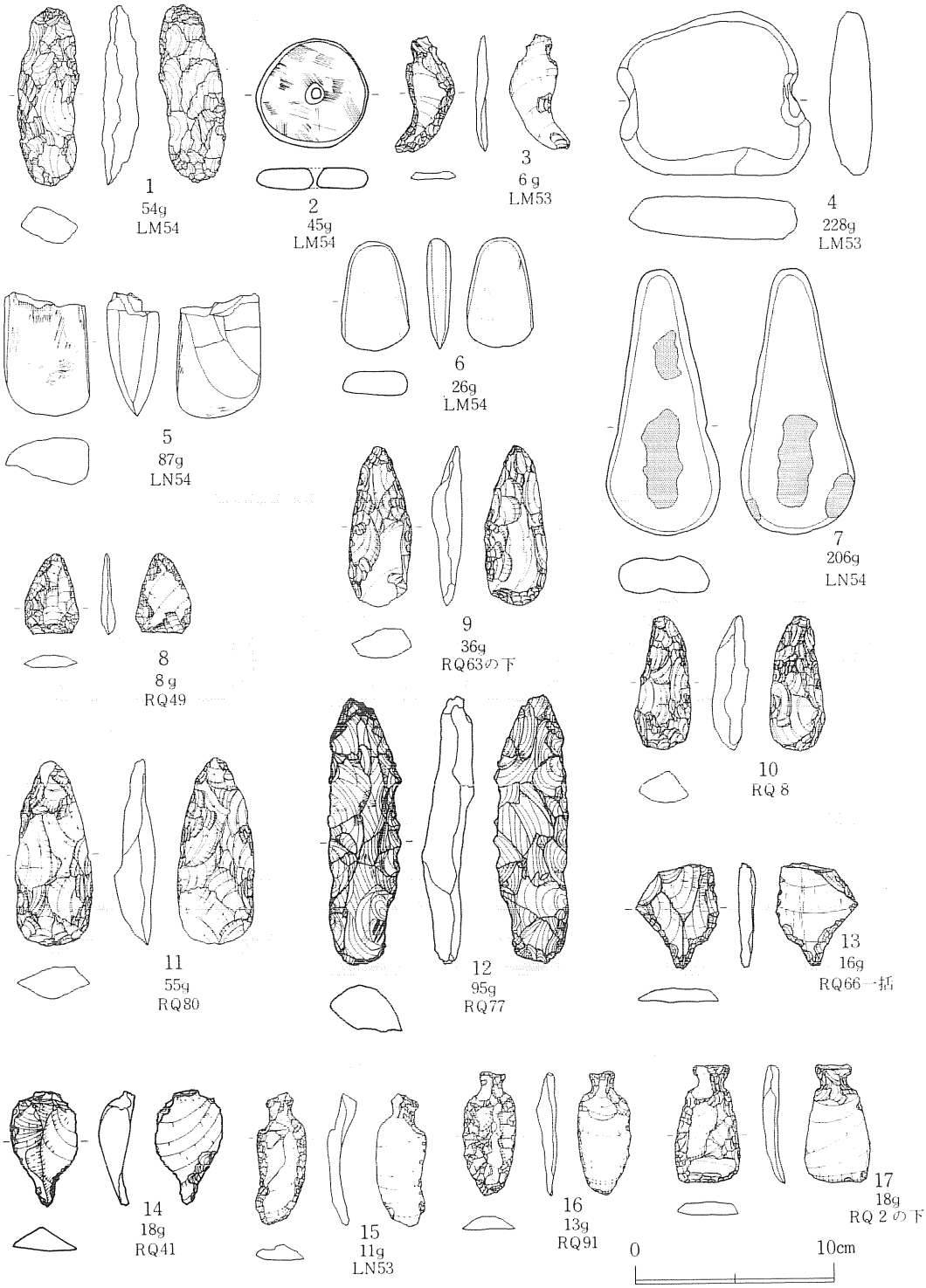
第60図　沢　No. 3　出土土器拓影図(16)



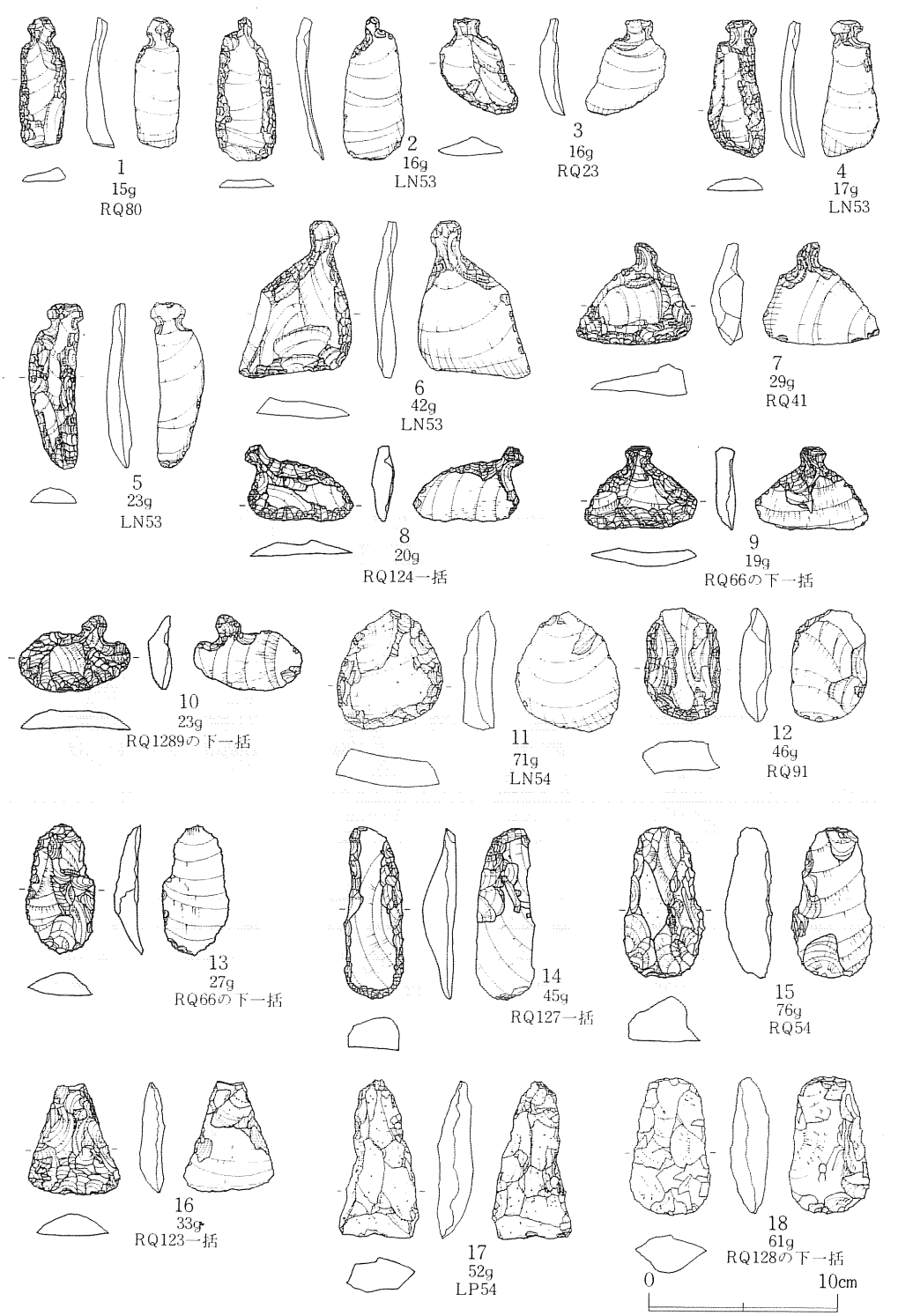
第61図　沢　No. 3　出土土器拓影図(17)



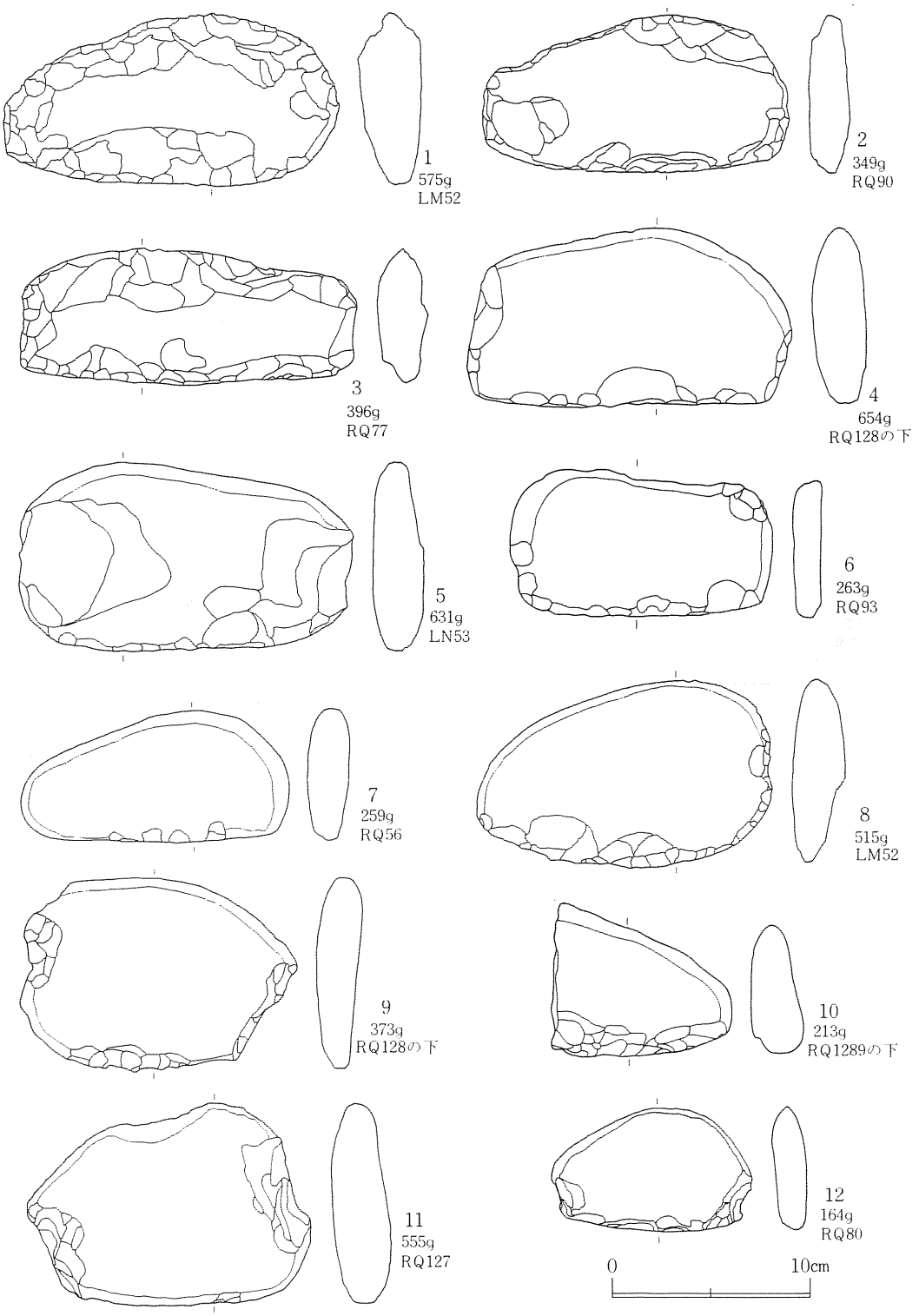
第62図　沢　No. 3　出土土器拓影図(18)



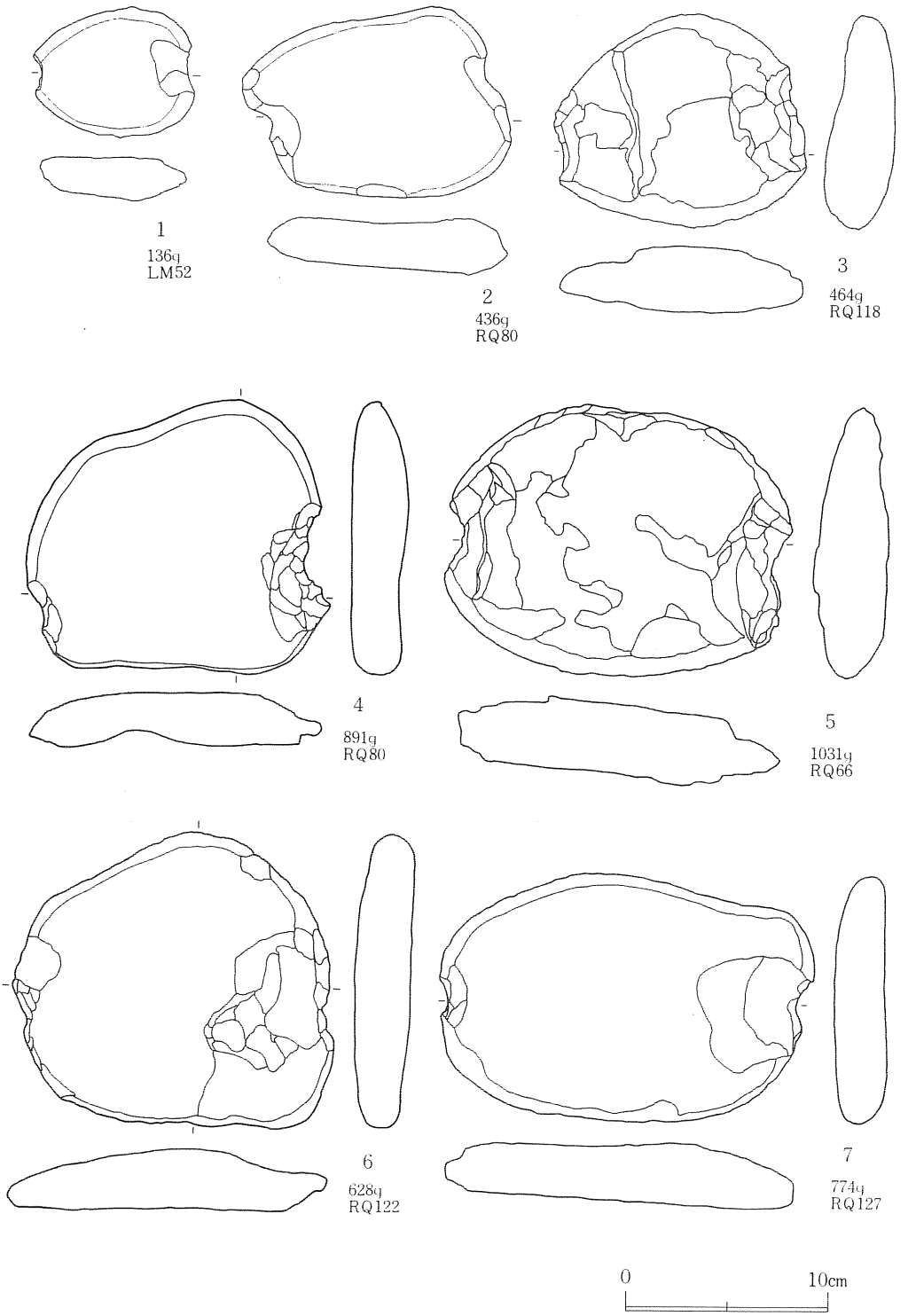
第63図　沢　No. 3　出土石器実測図（1）



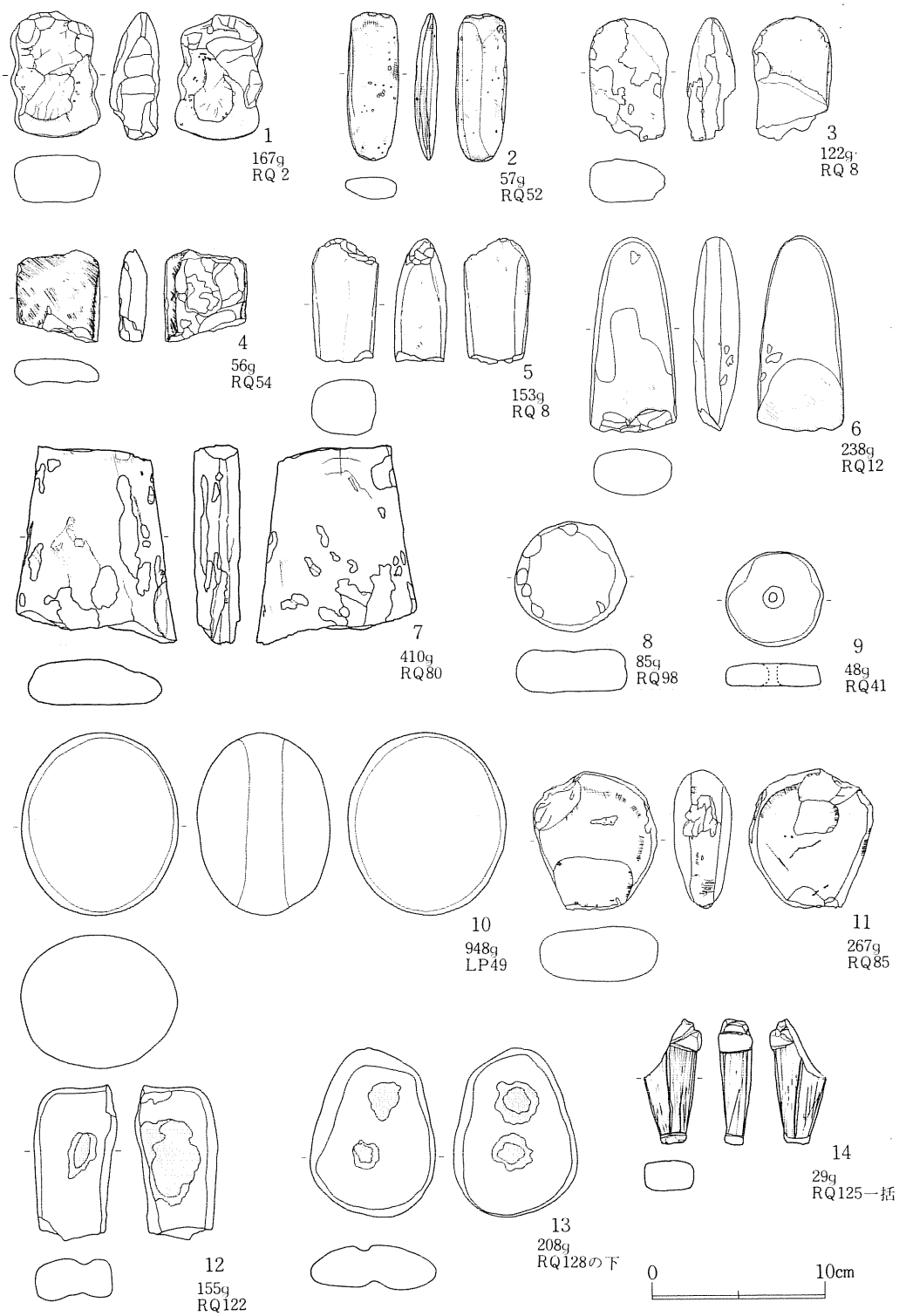
第64図　沢　No. 3　出土石器実測図（2）



第65図　沢　No. 3　出土石器実測図（3）



第66図　沢　No. 3　出土石器実測図（4）



第67図　沢　No. 3　出土石器・石製品実測図（５）

④縄文時代後期から弥生時代の遺物（第68図）

この時期の遺物は、ほとんどが上位面と、上位面から下位面に傾斜している斜面上から検出された。1は、縄文後期初頭に位置づけられるであろう。2～5は同一個体で、口縁部文様帯に羊歯状文し、体部に細かな斜縄文を施す。縄文晩期大洞BC式に比定される。6は内、外両面に細かなヘラミガキを施す。無文の壺形土器頸部であろう。7は、小形の鉢土器につく脚部であろう。脚部は少し丸く膨らみ、端部が外方に開く。赤色に塗彩されている。以上は、縄文晩期の土器である。8、11は、体部の上方がいく分内傾する鉢形土器である。頸部に無文帯を有し、口縁部内面に1条の沈線が巡る。10は、浅鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、外面に4条、内面に2条の沈線文が施される。9は、ほぼ直立する頸部から口縁部が屈折して外傾する長頸甕である。口縁部に山形突起を有し、その端部外面には縦長の刻目文が並列する。頸部には断面に丸みのある平行沈線文があり、その下位は無文となる。口縁部内面には山形に沿う沈線文と、屈折部を横位にめぐる沈線文とが施されている。両面とも煤が付着している。12は、頸部がほぼ直立し、肩部が張り出す甕形土器である。内、外両面にハケメ調整を施し、外面では頸部に縄文、口縁部と肩部にそれぞれ1条、3条の平行沈線文を施文する。内面のハケメは横位で、この後にヘラミガキを加えている。13は、内傾する鉢形土器体部上半である。縦位の縄文の上に平行沈線文と波状工字文が描かれる。18は、外傾する体部で、鉢形土器かと考えられる。2条の沈線が斜行、横走して施文されている。高坏体部である。工字文の縄文施文部を無文部が交互に入り組む文様を描く。施文手順は、縄文によって工字状のモチーフを描き、その後沈線を施し、さらに無文部にヘラミガキを施している。胎土に金雲母を含む。15は、複合口縁を有する甕形土器である。口縁部に横位の縄文、その下位に3条の平行沈線文を施す。2、17～19は甕形土器の体部破片である。17～19は同一個体で、外面に縄文、内面にヘラミガキを施している。

2　下位面検出の遺構と遺物

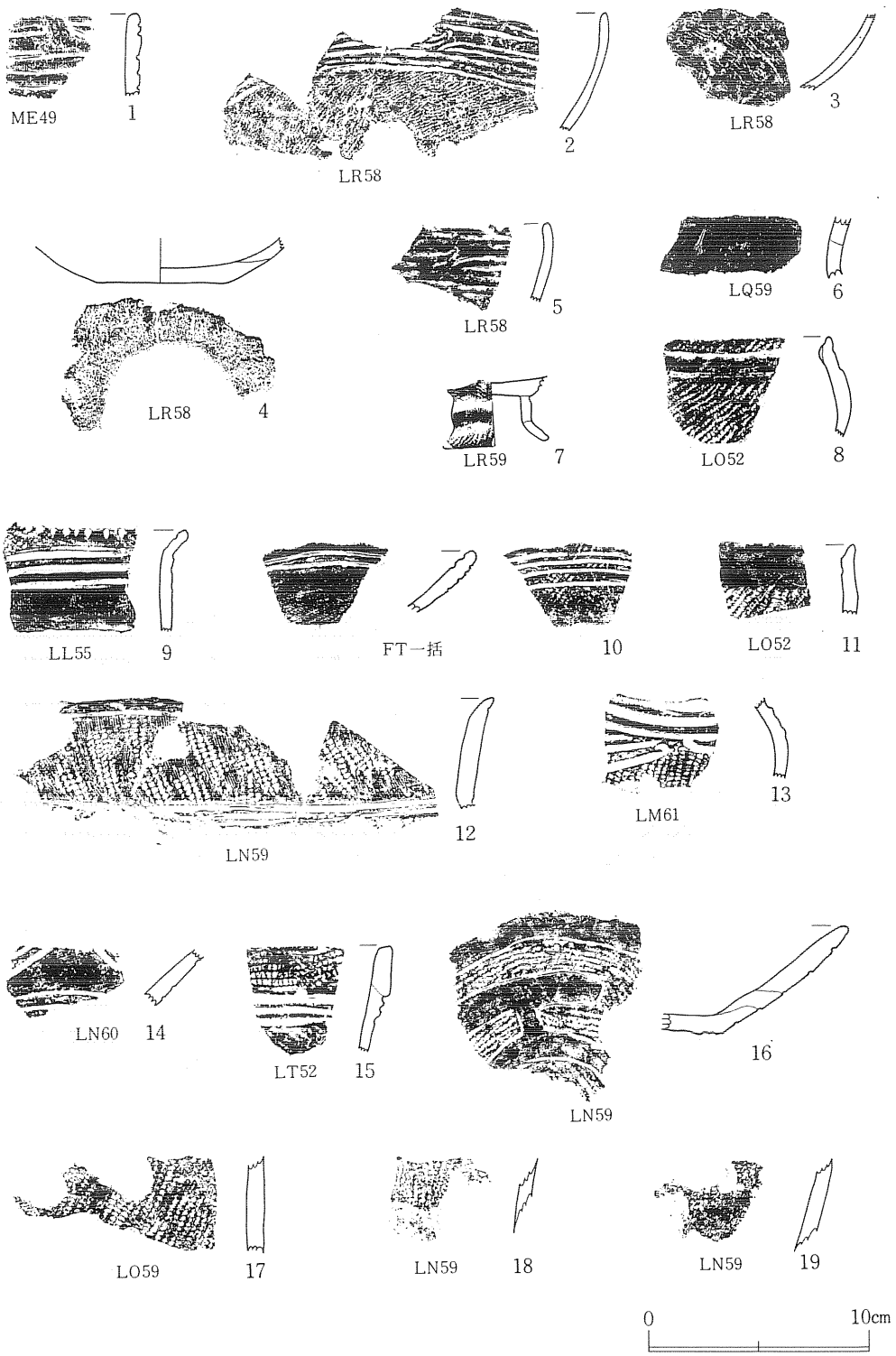
(1)　第Ⅰ層～第Ⅲ層検出の遺構と遺物

第Ⅰ層から第Ⅲ層で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、土坑15基、フラスコ状土坑1基を数える。そのほか第Ⅱ層中のME53、54グリッドを中心とする遺物の集中範囲が検出された。さらに、上位面から下位面に傾斜している斜面とその下方に遺物の捨て場が東西に帯状に検出された。

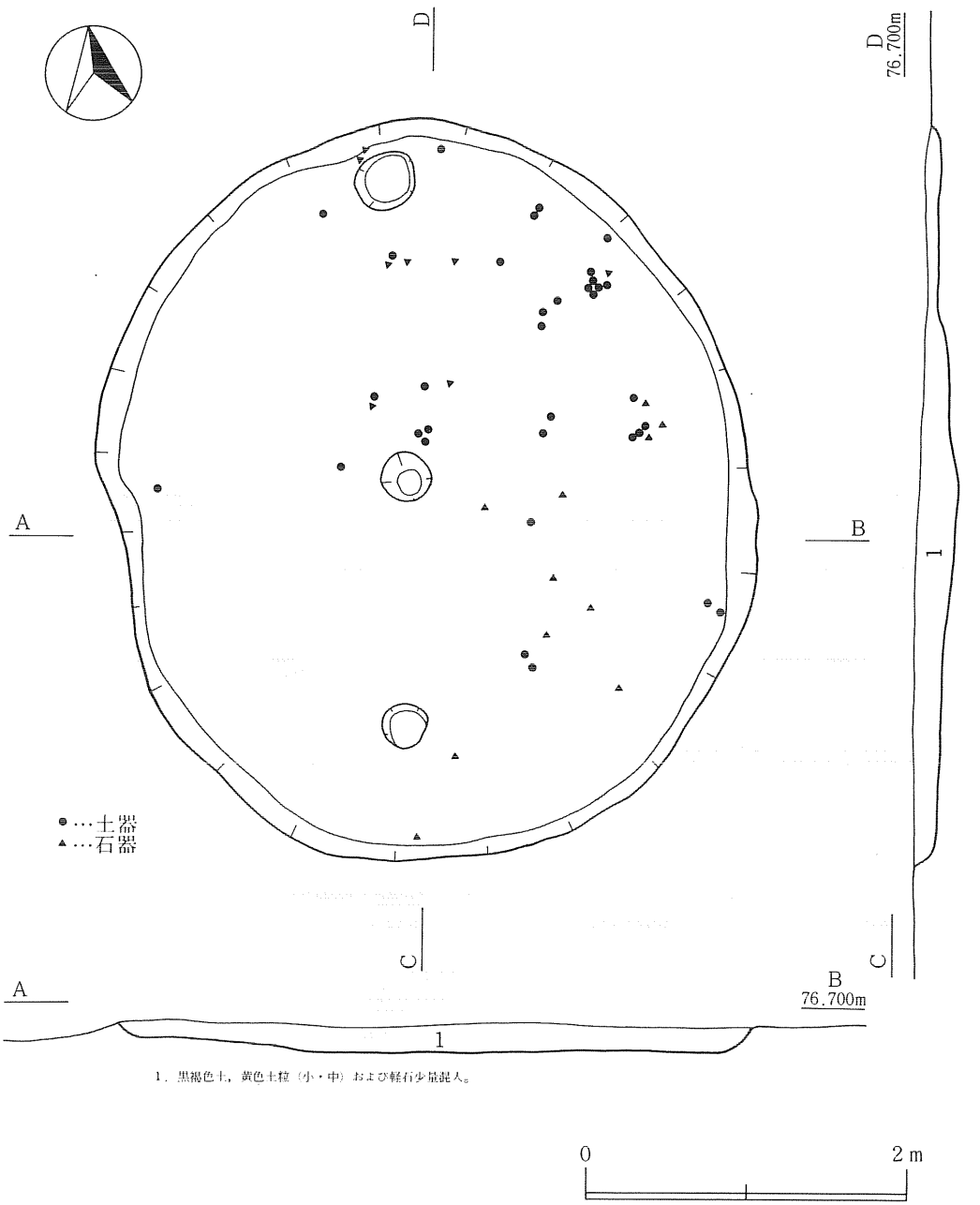
①竪穴住居跡

SI03 竪穴住居跡　（第69図・第70図、第77図、図版16）

第Ⅲ層のシラス層上面で、黒褐色の楕円形プランが確認された。規模は、長軸467㎝短軸396

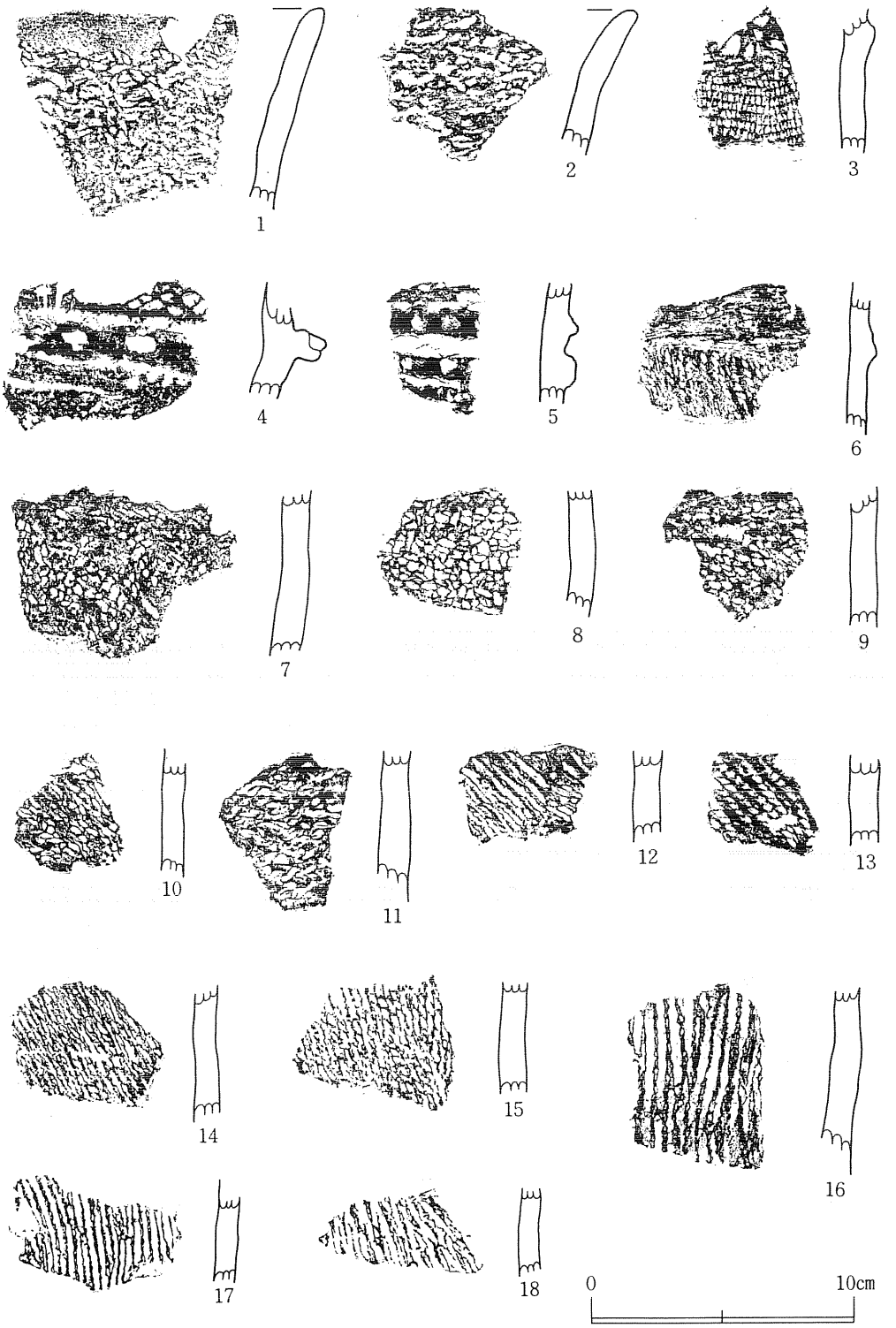


第68図　縄文時代後期～弥生時代の土器拓影図



1．黒褐色土，黄色土粒（小・中）および軽石少量混入。

第69図　SI03竪穴住居跡実測図



第70図　SI03竪穴住居跡出土土器拓影図

cmを測る。床面までの深さは、10～30 cmであった。柱穴は、3本検出された。柱穴配置は、住居長軸方向の一直線上に並び、住居ほぼ中央に1本、それと対称になるように他の2本が壁近くに配されている。中央の柱穴の床面からの深さは19 cm、他の2本は46～50 cmを測る。貯蔵穴、炉跡は検出されなかった。埋土は、黄色土粒、軽石を含む黒褐色土である。遺物は、縄文土器片、石器が出土した。縄文土器は、口縁部と胴部の破片で占められ、床面からやや浮いた状態で出土しているものが多い。1、2は口縁下綾絡文が施文され、4、5は口縁部と胴部を区画する隆帯上に指頭圧痕文が見られる。胴部は、綾絡文とやや太い縄を用いた撚糸文が施文される。石器は、くぼみ石とすり石が出土した。

②竪穴遺構

SKI01 竪穴遺構　（第71図～第73図・第77図、図版17）

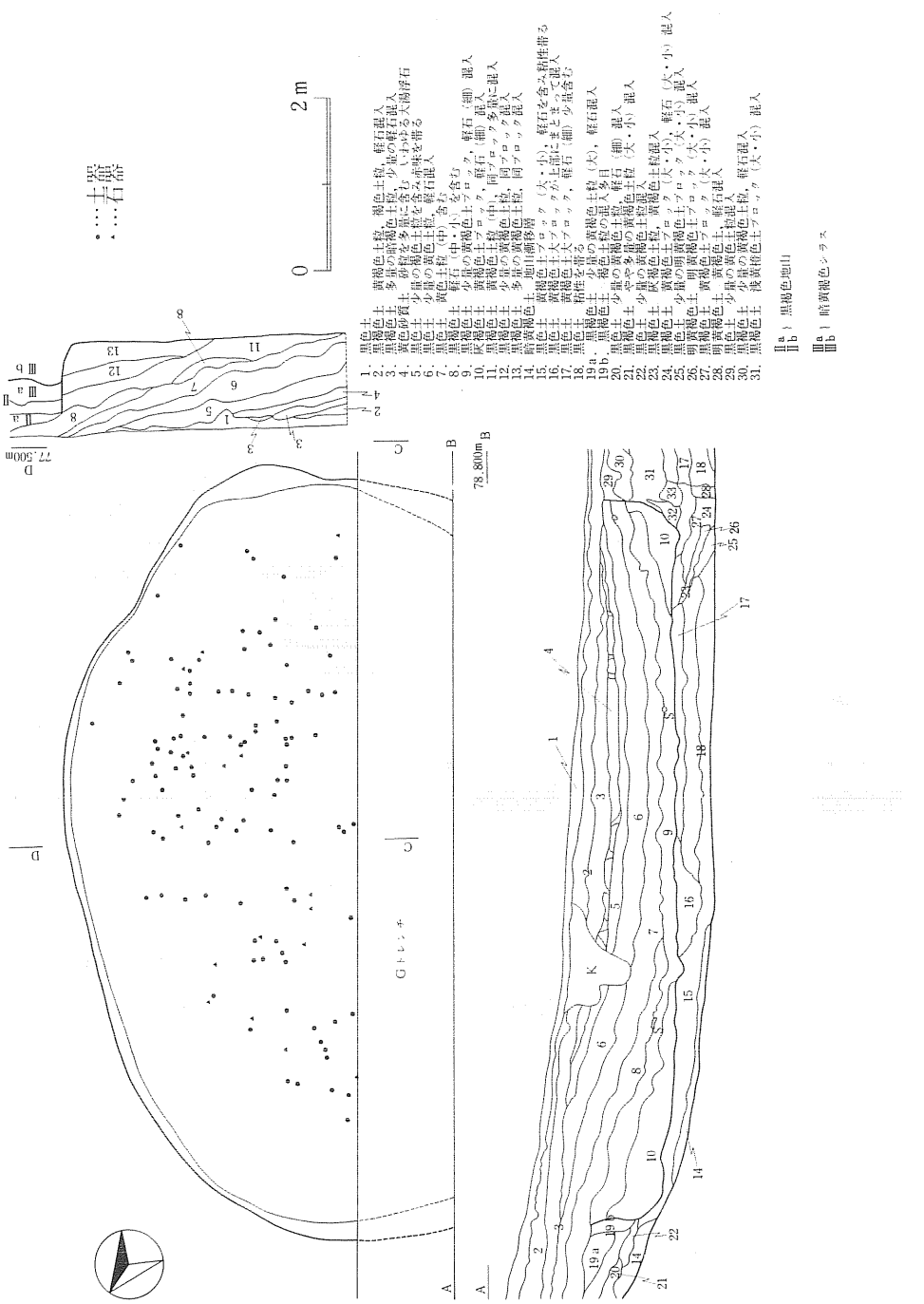
本遺構の存在は、調査区西側の露頭で黒色の落ち込みが観察されたことから、範囲確認調査の段階から予想されていた。調査区西端近くに設定したGトレンチにより、その正確な位置と規模が明らかになった。平面形は楕円形と推定され、長軸907 cm、短軸（推定）676 cmを測る。北西側斜面から流れ込んだ黒色土まで掘り下げ床面としている。精査の結果、踏みかためられたような良くしまった面は観察されず、柱穴、炉跡なども検出されなかった。埋土は、上面に大湯浮石のレンズ状の堆積が観察されたが、北西斜面から流入したと思われる黄色土粒、軽石を含む黒色土を主体とする遺物は土器片と石器で、土器片は口縁部、胴部、底部それぞれ出土したが、復元できるまでに至らなかった。文様は、綾絡文と撚糸文によって占められる。石器は石匙と半円状偏平打製石器が出土している。

SKI02 竪穴遺構　（第74図～第77図、図版17）

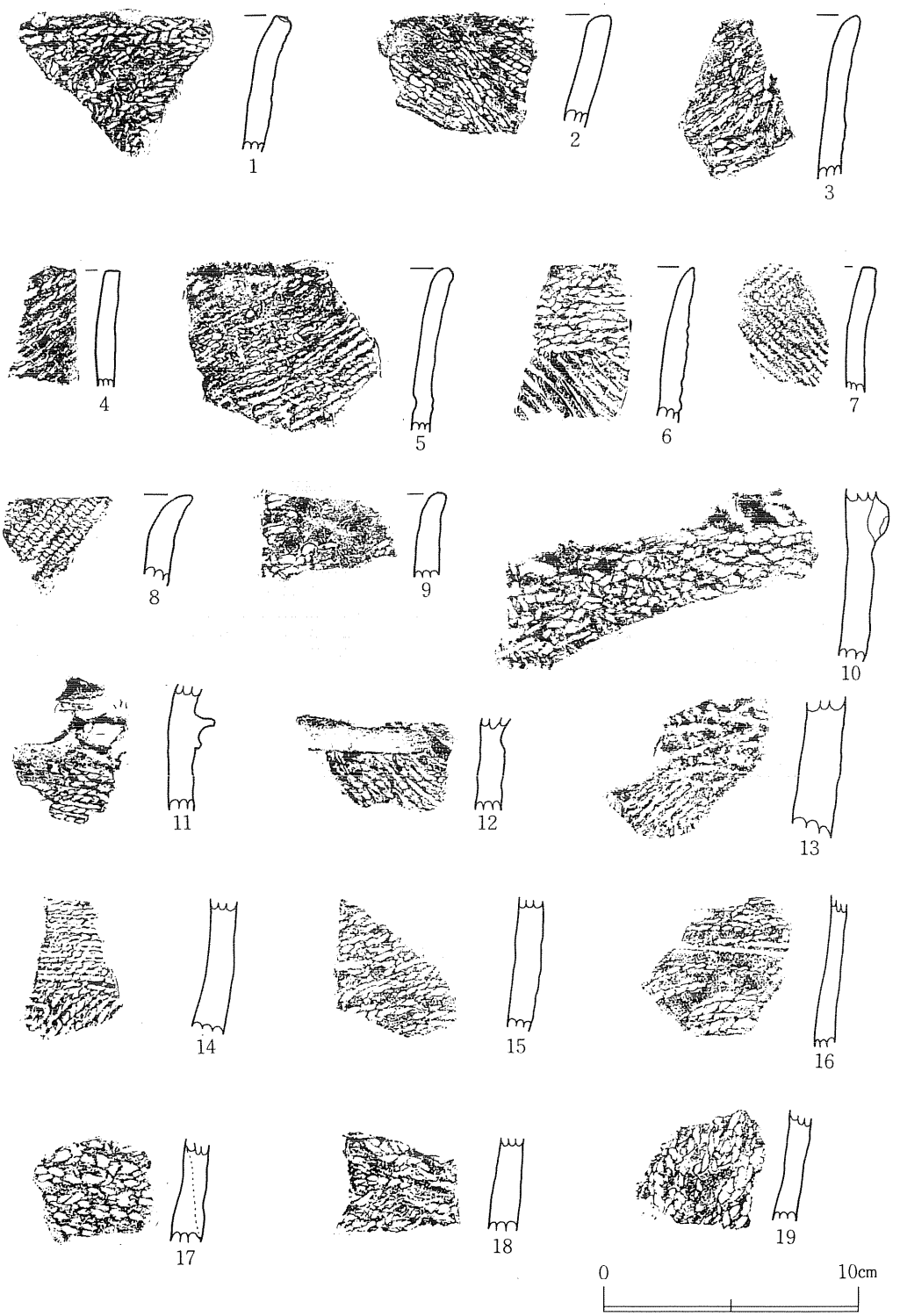
本遺構は、第Ⅲ層シラス中でプラン確認された。規模は、長軸366 cm、短軸324 cmを測る。第Ⅴ層の黒色土をわずかに掘り込んで床としている。確認面から床面までの深さは、60 cm前後を測る。床面精算の結果、柱穴または炉跡は検出されなかった。遺物は、土器片と石器が出土した。土器片は、綾絡文と撚糸文が施文され、6は内面条痕文、7は隆帯上に指頭によるものと思われる押圧痕があり、内面は綾絡文が施されている。石器は、半円状偏平打製石器（5、6）たたき石（7）、くぼみ石（8）が出土している。

③土坑・フラスコ状土坑　（図版18）

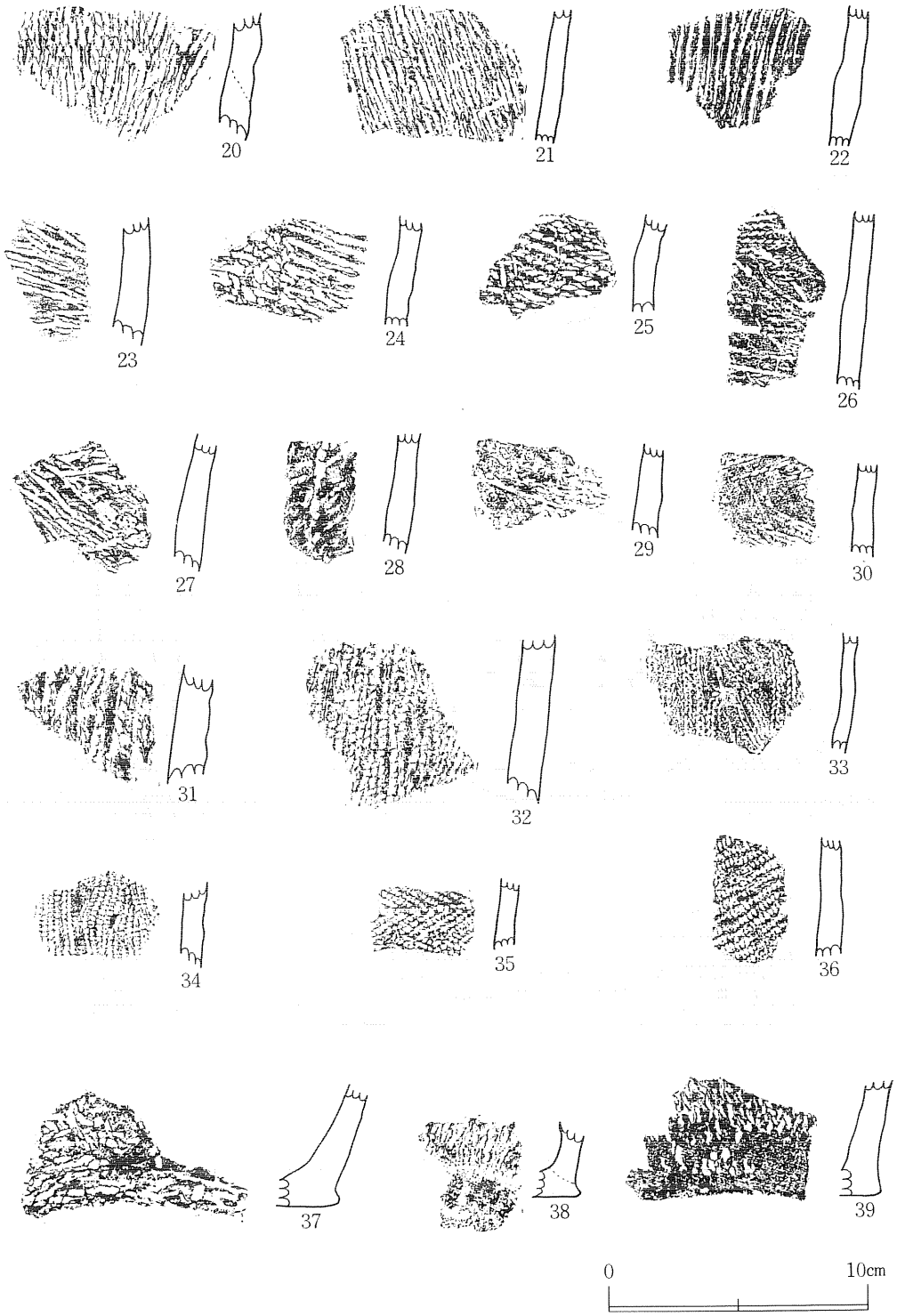
フラスコ状土坑を含む土坑は、第Ⅲ層上面または第Ⅲ層中でプラン確認された。実際の掘り込み面は、それよりも上面であったことは容易に想像される。土坑の総数は16基を数える。うち円形プランのもの10基、楕円形プランのもの3基、方形プランのもの2基を数える。フラス



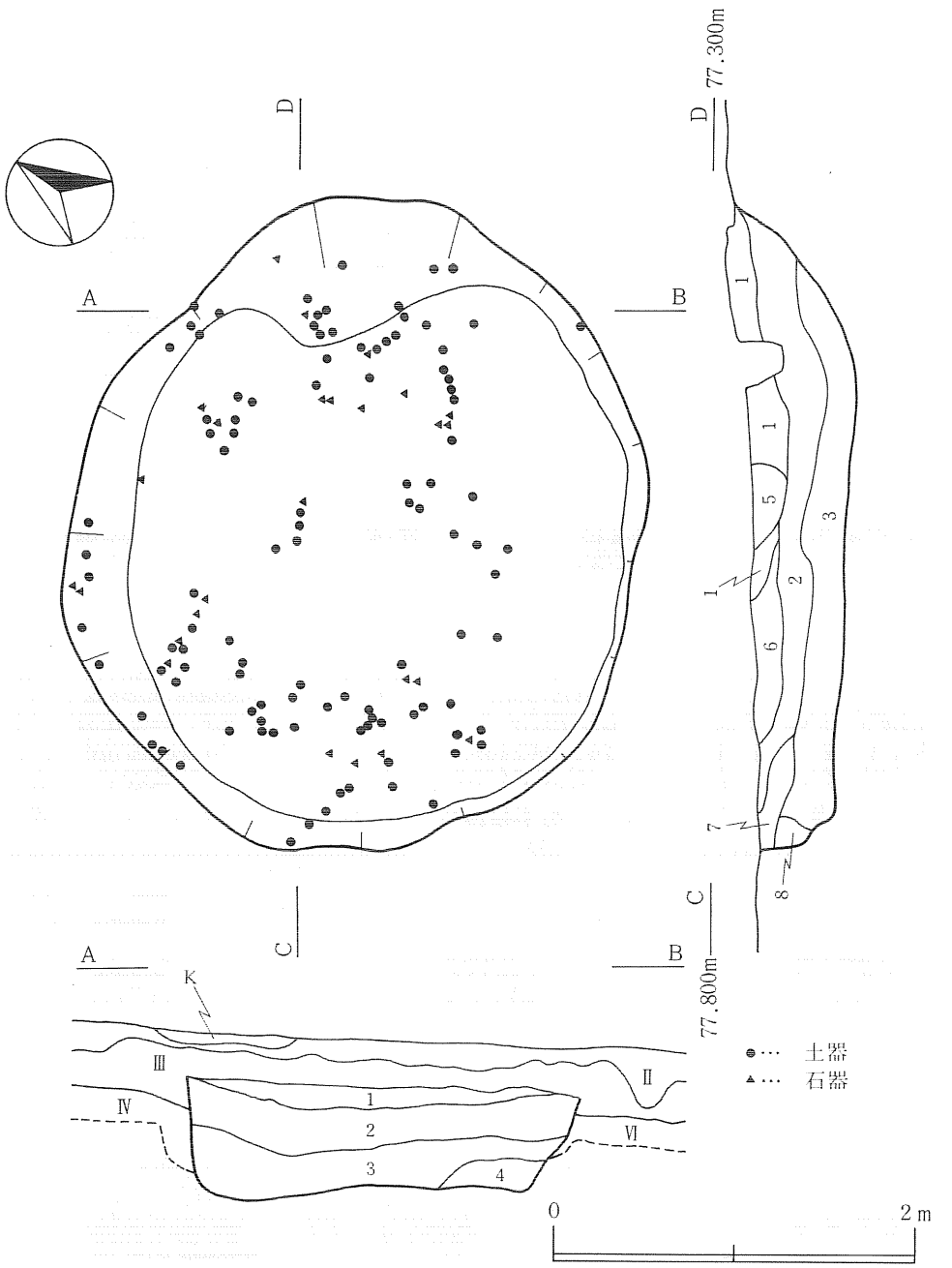
第71図　SKI01竪穴遺構実測図



第72図　SKI01竪穴遺構出土土器拓影図（1）

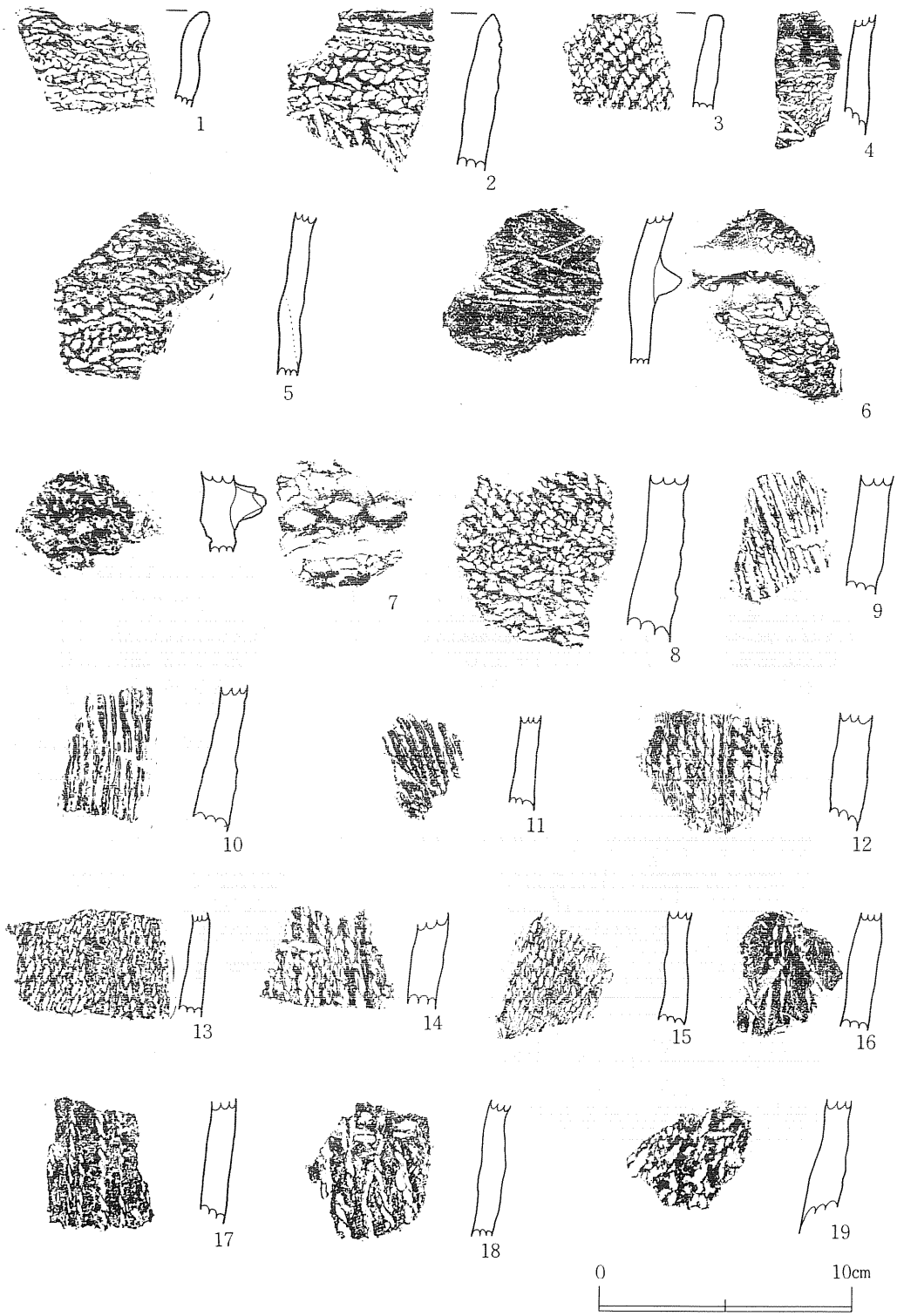


第73図　SKI01竪穴遺構出土土器拓影図（２）

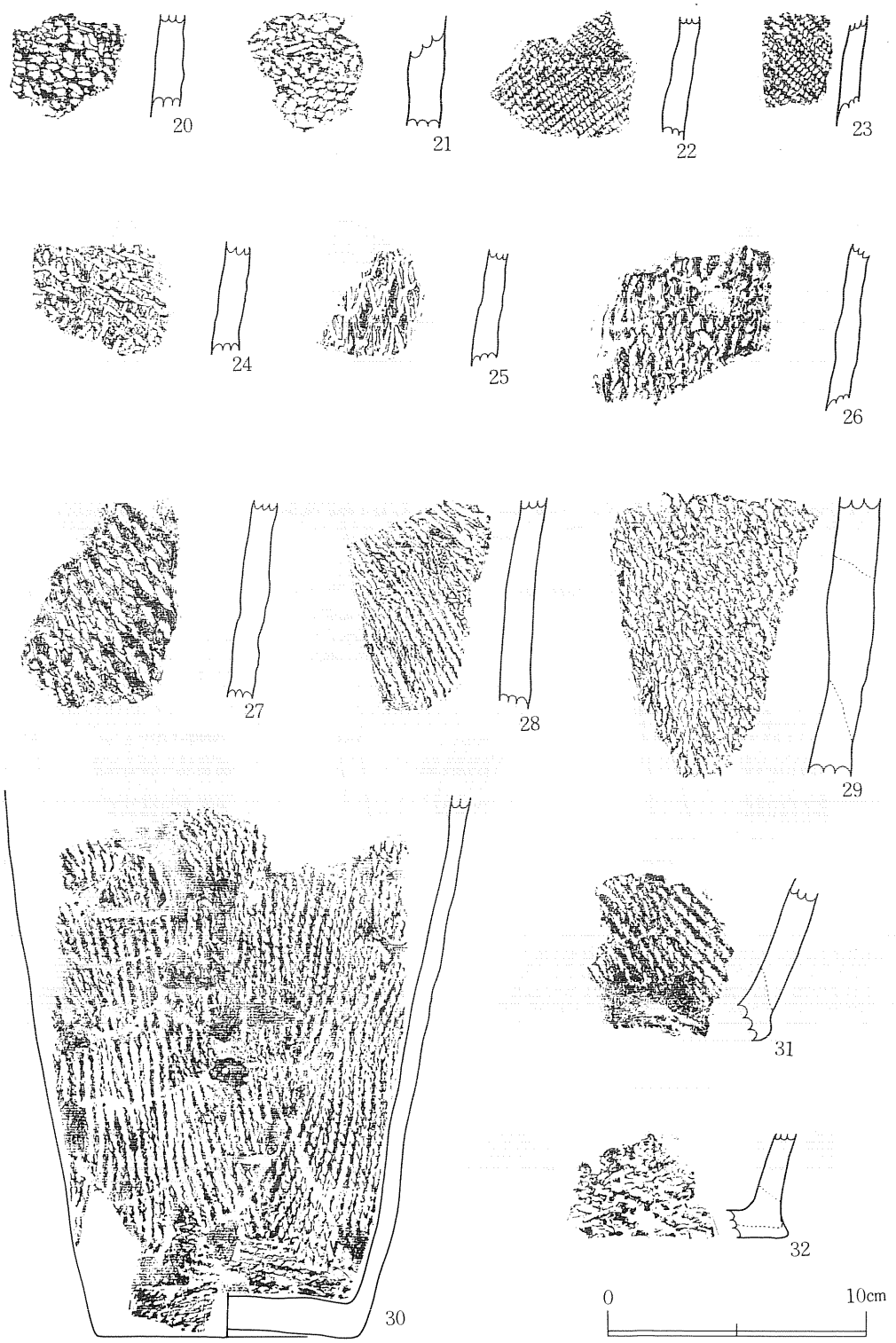


1．暗黄褐色土　黄色土粒（中），黄褐色土粒（中，小）多量に混入
2．黒褐色土　黄色土粒（中，小），黄色土ブロック，黄褐色土粒多量に混入
3．黒褐色土　2層よりやや明るい色調を帯る
4．暗黄褐色土　黄色土粒（中，小），黄褐色土粒（細）混入
5．灰白色砂
6．黒褐色土　炭化物少量混入
7．黒褐色土　黄褐色土粒少量混入
8．暗黄褐色土　灰褐色粘土粒，黄褐色土粒少量混入

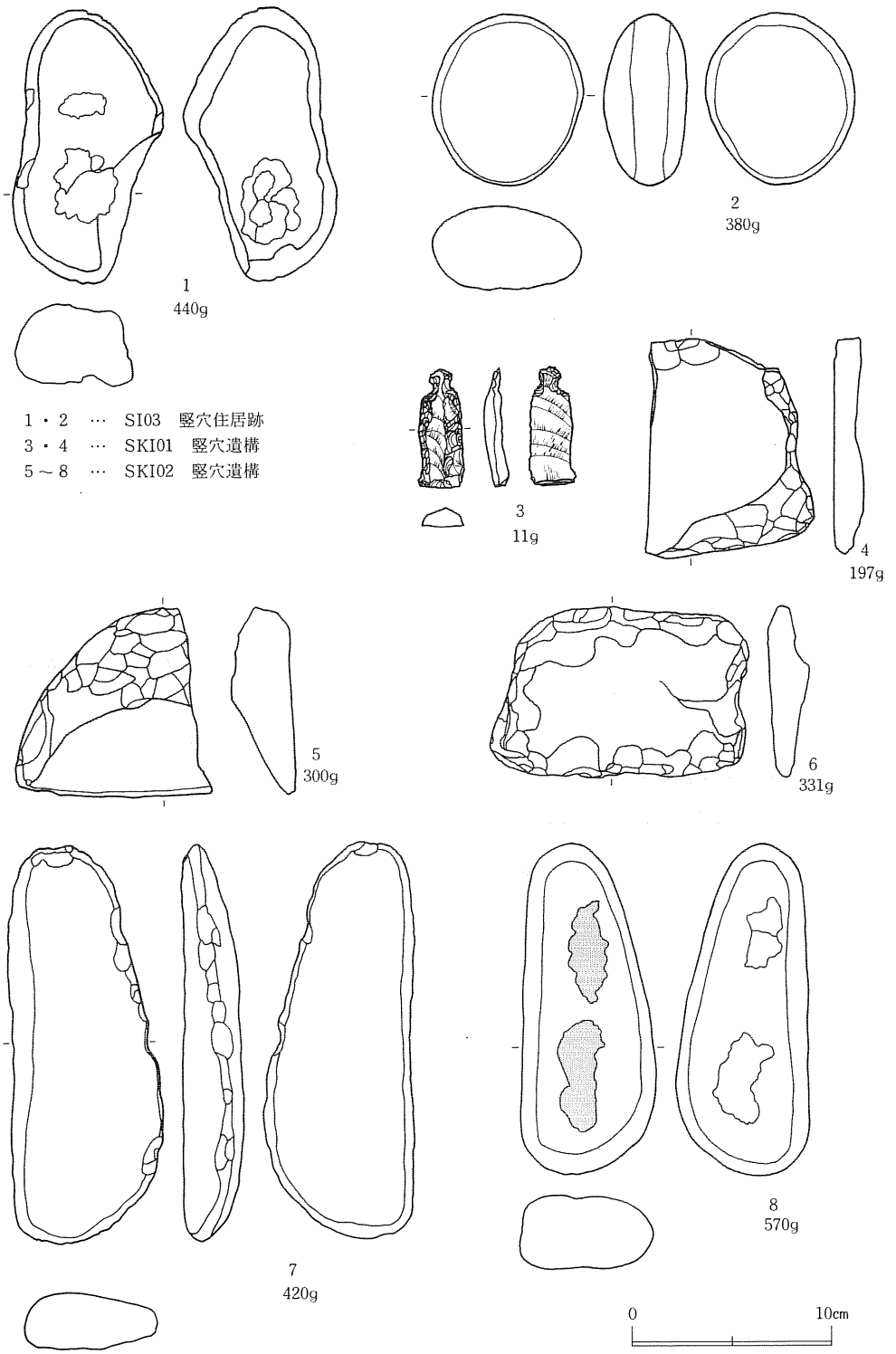
第74図　SKI02竪穴遺構実測図



第75図　SKI02竪穴遺構出土土器拓影図（１）



第76図　SKI02竪穴遺構出土土器拓影図（２）



1・2　…　SI03　竪穴住居跡
3・4　…　SKI01　竪穴遺構
5～8　…　SKI02　竪穴遺構

第77図　SI03竪穴住居跡　SKI01・02竪穴遺構出土石器実測図

コ状土坑は、下位面では1基のみ検出された。

SK04 土坑 （第78図、第82図・第83図、図版19）

ME 54 グリッド杭を中心とした範囲で検出された。平面形は楕円形で、118 cm× 138 cmの規模を測る。底面はほぼ円形で97 cm× 104 cm、深さは47 cmである。埋土は・黄褐色土粒、砂粒混入黒色系の土を主体とする。出土遺物は、ほとんどが土器片で占められ、石器は32の剝片を利用した石錐が出土している。土器片の文様は、綾絡文または撚糸文が主体をなす。隆帯を有するものには多少のバリエーションがあり、隆帯上に指頭圧痕文を施すもの（9）、刻目文を施すもの（12）がある。さらに隆帯の上下に指頭圧痕文が施文される（8）。11は、凸部と凹部に刻目文が施文される。

SK05 土坑 （第78図、第84図、図版19）

MD 52 グリッド内で検出された。平面形は円形である。底面は若干の凸凹が見られる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、途中から上方に開く。規模は、直径110 ～ 115 cm、深さ50 ～ 54 cmを測る。埋土は、黄色土粒、軽石を含む黒色系の土を主体とする。遺物は、綾絡文または撚糸文が施文された土器片が出土した。

SK06 土坑 （第78図、第84図）

SK 05 の北東約6 mの MC 52 グリッド内に位置する。平面形は円形で、南側に小さな段を有する。直径109 ～ 115 cm、深さ18 ～ 25 cmの規模をもつ。底面はほぼ平坦である。埋土は、黄褐色土粒軽石を含む黒色系の土を主体とするが、一部に灰褐色土粒が観察された。遺物は、撚糸文が施文された土器片が出土した。

SK07 土坑 （第78図、第84図、図版19）

MD 52 グリッド杭を中心とする範囲に位置する。平面形は円形で、直径108 ～ 115 cm、深さ55 ～ 65 cmの規模を有する。埋土は、壁面の剝落と思われる暗褐色土が壁際に見られるほか、黒色系の土を主体とする。遺物は、8が口縁部のやや外側にひらく器形で、文様は綾絡文が施文されている。また口唇端には、指頭による痕文が施されている。

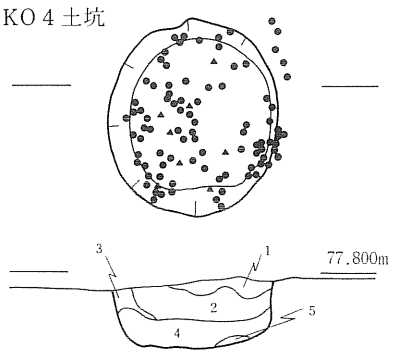
SK08 土坑 （第78図、第84図、図版19）

ME 52 グリッド内に位置する。平面形は楕円形で、94 × 110 cmの規模をもつ。深さは35 ～ 38 cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外側に張り出しぎみに立ち上がる。埋土は、黄褐色土粒軽石を含む黒色系の土を主体とする。遺物は、撚糸文等が施文された土器片が出土した。

SK09 土坑 （第79図、第84図、図版19）

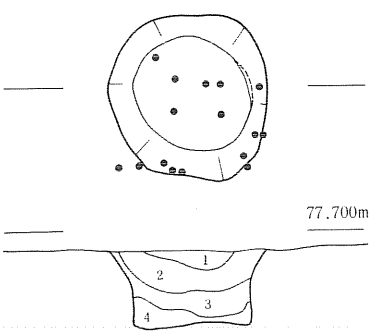
SK 08 の東側約2 mの ME 2 mの ME 52 グリッド内に位置する。126 × 142 cmの楕円形で、深さは52 ～ 55 cmを測る。南西側に小さな段を有する。底面は、平坦でなく丸底に近い形態をなし、北側の壁中段は外側に張り出している。埋土は、黄色土粒、軽石を含む黒色系の土を主

SKO４土坑



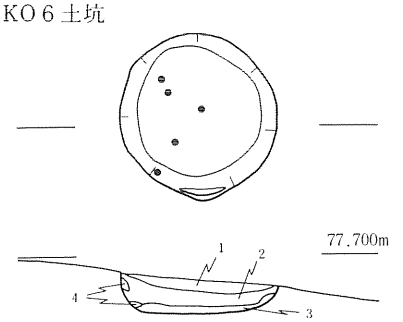
１．暗黄褐色土　黒色土粒，黄褐色砂質土，黄色土混入
２．黒褐色土　やや多目の黄色土混入
３．黒褐色土　黒色土粒，多量の黄褐色砂質土混入
４．黒色土　黄褐色粒，少量の黄色土ブロック混入
５．暗黄褐色土　黄褐色砂質土多量混入

SKO５土坑



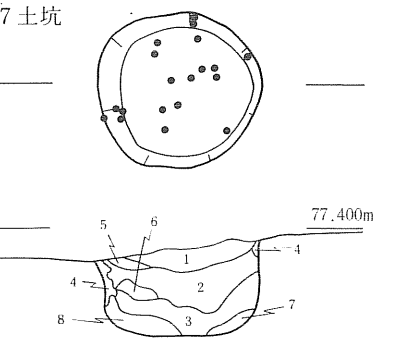
１．黒色土　黄色土粒少量混入
２．黒色土　やや多目の黄色土粒，少量の同ブロック混入
３．黒色土　黄色土粒(大)，少量の軽石混入
４．黒褐色土　やや多目の黄色土粒，軽石混入

SKO６土坑



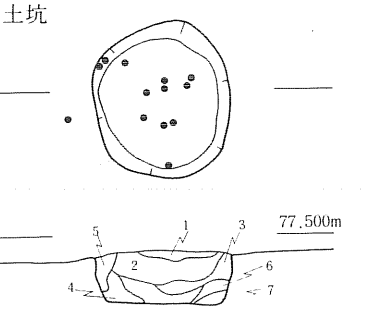
１．黒色土　軽石，少量の黄褐色土粒混入
２．黒色土　軽石，黄褐色土粒，同小ブロック混入
３．黒色土　暗黄褐色砂粒(細)，少量の黄褐色土粒，軽石混入
４．灰褐色土　サラサラした感じの微細粒

SKO７土坑



１．黒褐色土　黄色土粒(細)，黄褐色土粒，少量の軽石混入
２．黒色土　黄色土粒，やや多目の軽石(大小)混入
３．黒色土　やや多目の黄褐色土粒，少量の黄色土粒，軽石混入
４．暗黄褐色土　黄色土粒やや多目に混入
５．黒褐色土　黄色土粒(細)混入
６．黒色土　黄色土，軽石をほとんど含まない
７．黒色土　少量の黄色土(大)混入
８．黒色土　少量の黄色土(中)混入

SKO８土坑



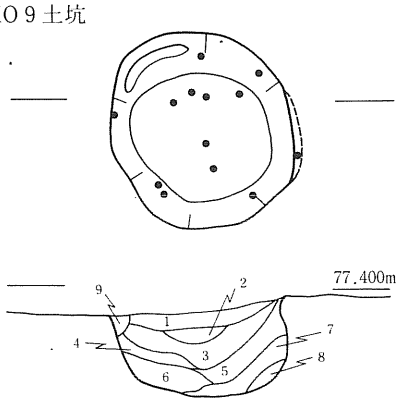
１．黒色土　少量の黄褐色土粒，軽石混入
２．黒褐色土　少量の黄色土粒，少量の黄橙色土小ブロック，軽混入
３．黒色土　少量の黄色土粒混入
４．黒色土　やや多量の黄色土粒，軽石混入
５．暗黄褐色土　多量の黄褐色土(細)混入
６．黒色土　少量の黄褐色土が混入。ハサハサしている
７．黒色土　少量の黄褐色土粒，軽石混入

● …土器　▲ …石器

0　2 m

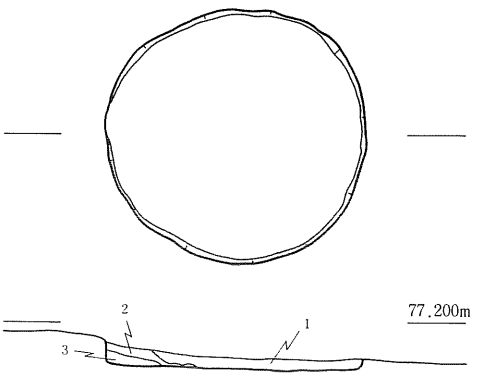
第78図　土坑実測図（１）

SKO９土坑



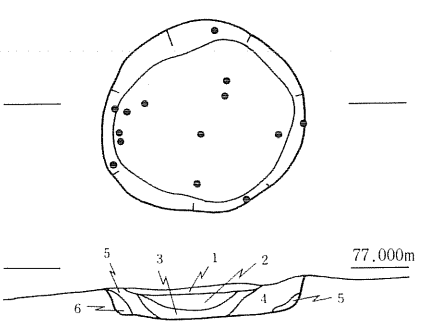
1．黒色土　黄色土粒，軽石土粒
2．黒褐色土　やや多量の黄色土粒(細小)混入
3．黒色土　少量の軽石，黄褐色土粒，黄色土粒(細)混入
4．黒褐色土　やや多量の黄色土粒(細)混入
5．黒色土　少量の黄色土粒混入
6．黒褐色土　黄色土粒，軽石(大)混入
7．黒褐色土　黄色土粒，黄褐色土粒混入
8．黒褐色土　黄色土粒(細)混入
9．暗黄褐色土　黄色土粒，軽石多量に混入

SK12土坑



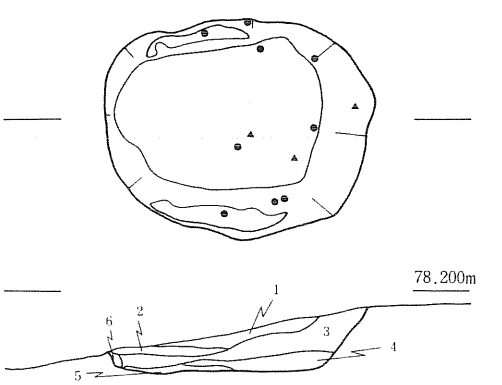
1．黒色土　やや多量の黄橙色土粒，軽石混入
2．黒色土　黄褐色土粒，軽石混入
3．黒色土　少量の暗黄褐色土粒混入

SK10土坑



1．黒色土　黄色土粒，軽石少量混入
2．黒褐色土　多量の黄色土(細)，黄褐色土粒(大)，軽石混入
3．黒色土　やや多量の黄色土粒(細)混入
4．黒褐色土　やや多量の黄色土粒(小)混入
5．黒色土　黄色土粒(細)混入
6．黒褐色土　黄橙色土粒(大小)，軽石混入

SK15土坑



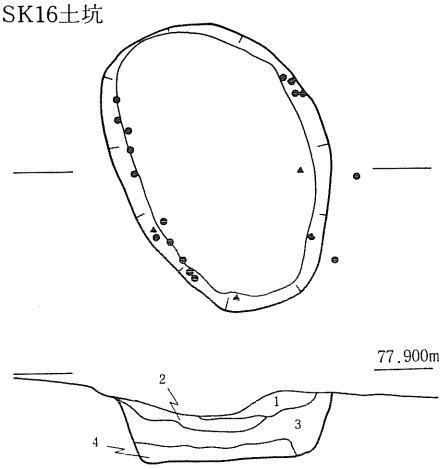
1．黒色土　少量の黄褐色土粒(細)混入
2．黒色土　黄褐色土粒の混入なし
3．黒色土　少量の黄褐色土粒(細)，軽石混入
4．黒色土　３層より黄褐色土粒，軽石の混入量減少
5．黒色土　少量の黄色土粒混入
6．黒褐色土　黒褐色砂質土，黄褐色土粒混入

● …土器
▲ …石器

0　2 m

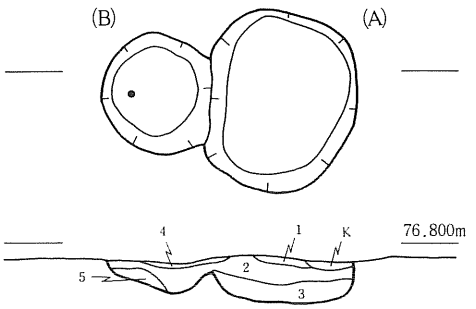
第79図　土坑実測図（２）

SK16土坑



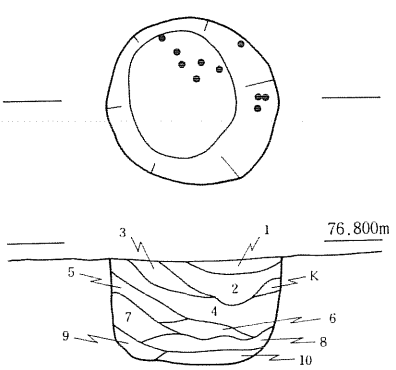
1．黒色土　黄褐色土粒，軽石やや多量に混入
2．黒褐色土　暗黄褐色土粒やや多量に混入
3．黒褐色土　軽石(大)，暗黄褐色土ブロック混入
4．黒色土　少量の黄褐色土粒，砂粒混入

SK18(A)(B)土坑



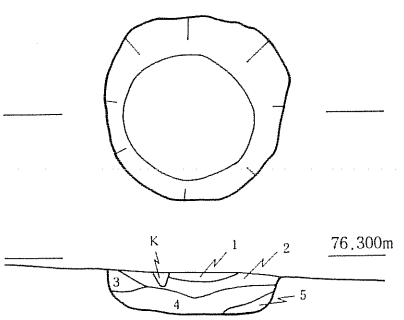
1．黒色土　黄褐色土粒少量混入
2．黒色土　黄褐色土粒(細)，黄色土粒(小)やや多量に混入
3．黒色土　黄褐色土粒(中～小)，少量の黄褐色土ブロック混入
4．黒色土　黄色土粒(小)，少量混入
5．黒褐色土　やや多量の黄褐色土粒(細)混入

SK17土坑



1．黒色土　少量の黄褐色土粒(小)混入
2．黒褐色土　多量の黄褐色土粒(細)，軽石混入
3．黒色土　少量の黄褐色土粒(細)混入
4．黒色土　少量の黄色土粒(小)，黄褐色土粒(小)混入
5．黒色土　暗黄褐色砂質土粒混入
6．黒褐色土　黄橙色土粒(小)，軽石混入
7．黒色土　少量の黄橙色土(中～小)混入
8．黒褐色土　黄褐色土粒(細)，黄色土粒(小)混入，粘性を帯る
9．黒褐色土　少量の黄褐色土粒(中～小)混入
10．黒色土　黄褐色土粒(小)混入，粘性を帯る

SK19土坑

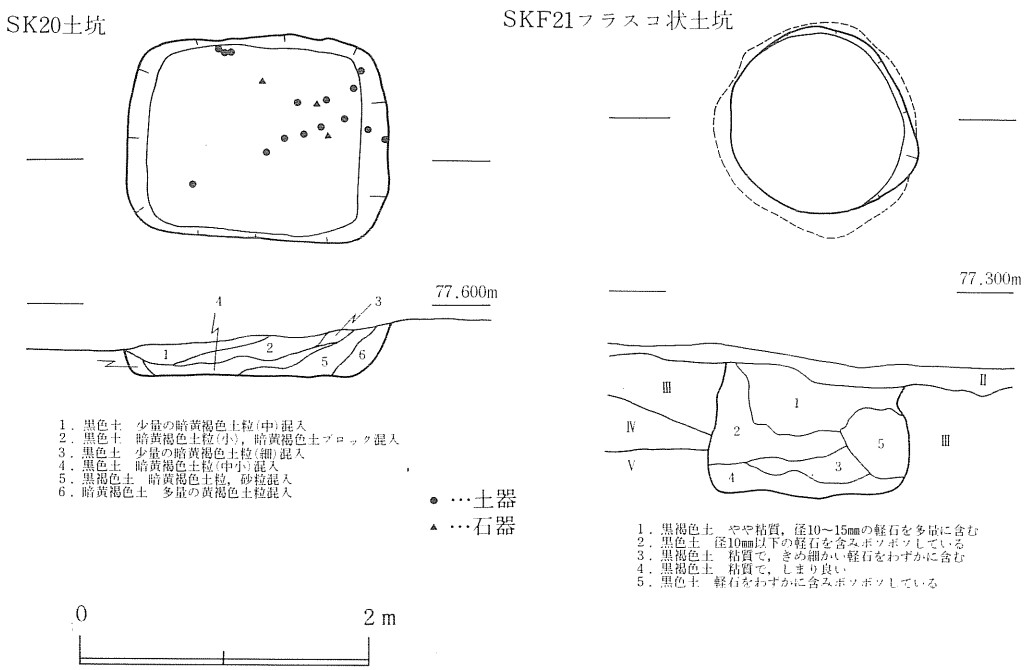


1．黒色土　黄色土粒(細)少量混入
2．黒褐色土　黄色土粒(中～小)混入
3．黒色土　黄褐色土粒(小)混入
4．黒色土　黄色土粒(中小)，黄褐色土粒(中)混入
5．黒色土　黄褐色土粒(小)少量混入

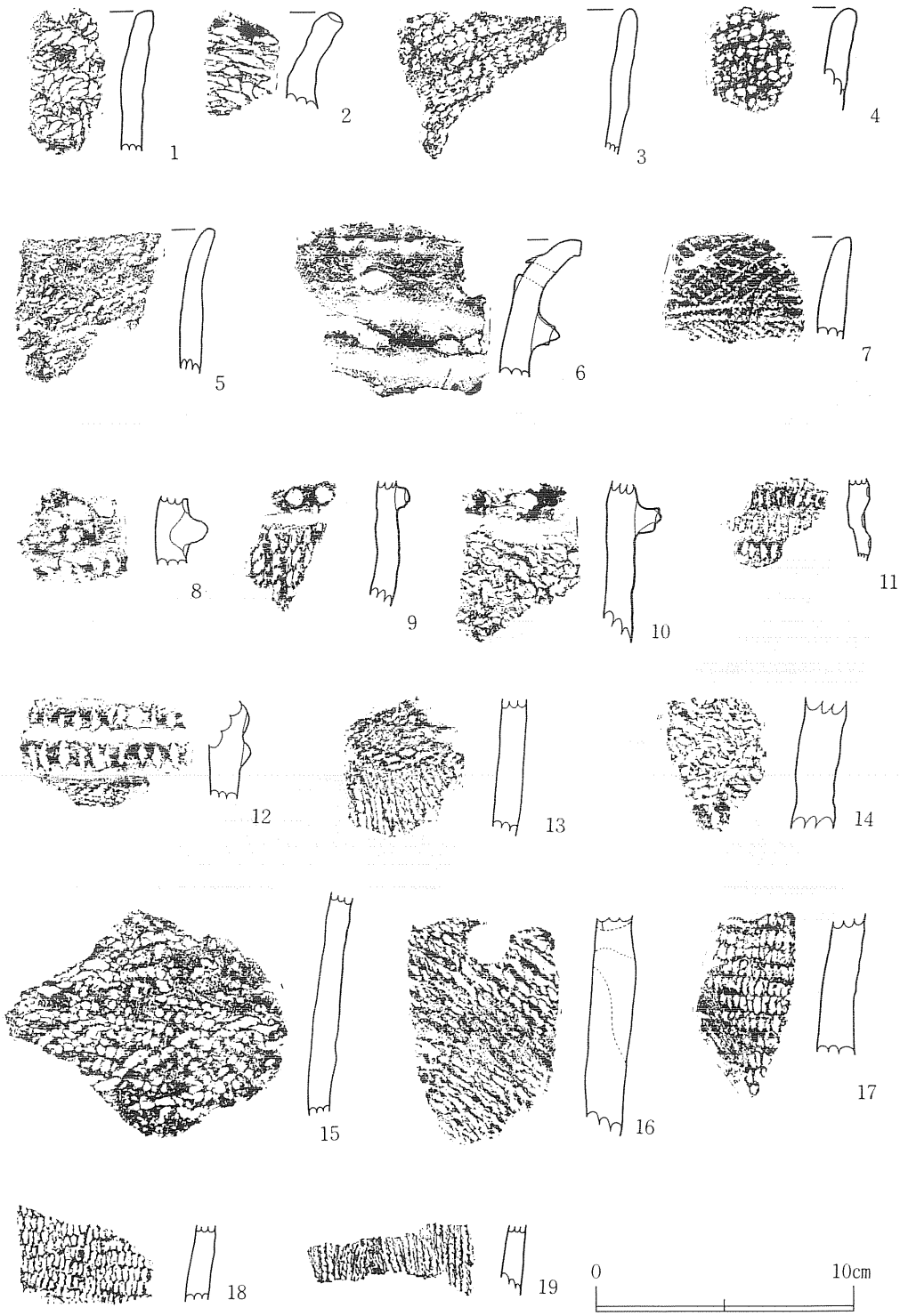
● …土器
▲ …石器

0　2 m

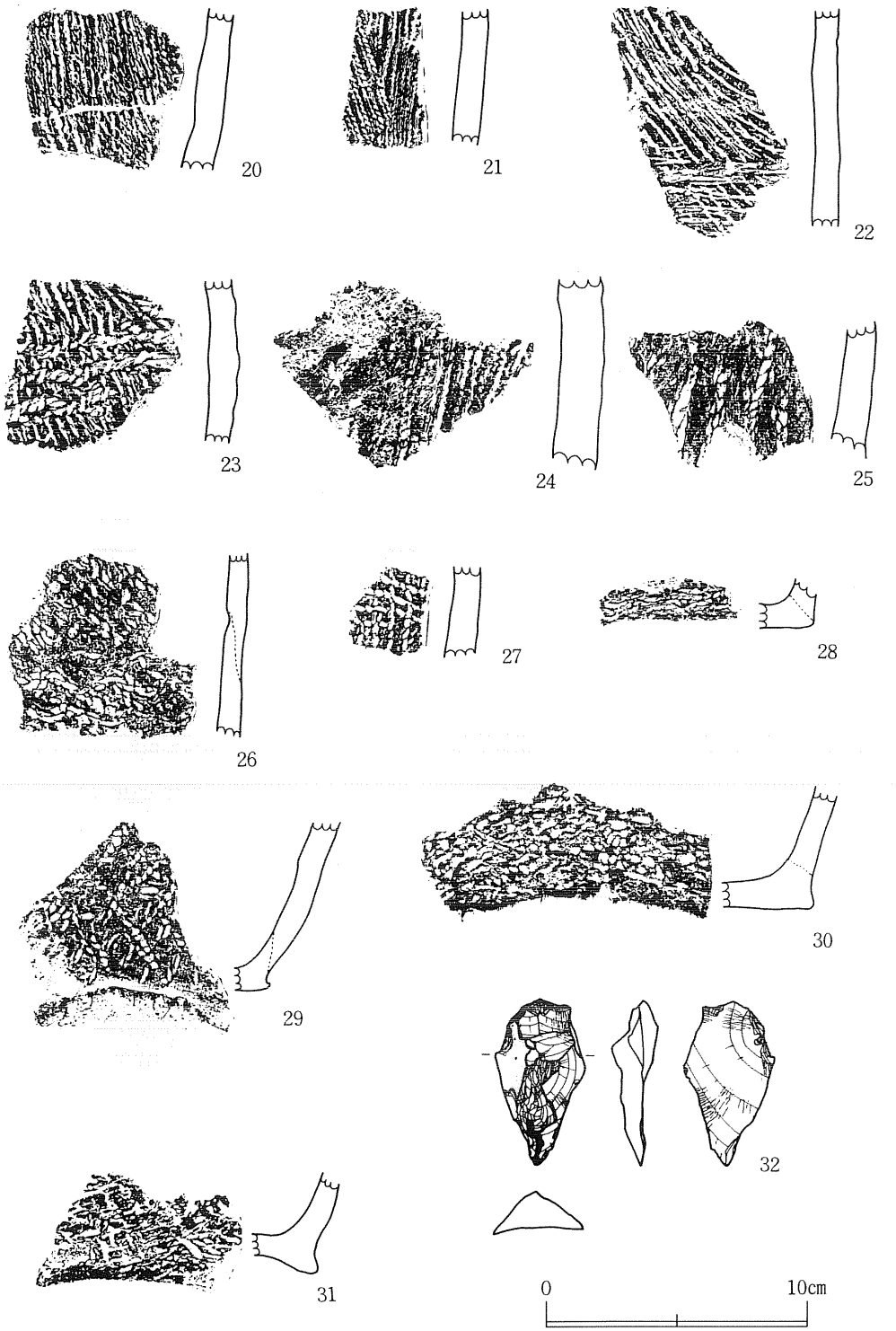
第80図　土坑実測図（３）


SK20土坑
SKF21フラスコ状土坑
77.600m
77.300m
1．黒色土　少量の暗黄褐色土粒(中)混入
2．黒色土　暗黄褐色土粒(小)，暗黄褐色土ブロック混入
3．黒色土　少量の暗黄褐色土粒(細)混入
4．黒色土　暗黄褐色土粒(中小)混入
5．黒褐色土　暗黄褐色土粒，砂粒混入
6．暗黄褐色土　多量の黄褐色土粒混入
●…土器
▲…石器
1．黒褐色土　やや粘質，径10～15mmの軽石を多量に含む
2．黒色土　径10mm以下の軽石を含みボソボソしている
3．黒褐色土　粘質で，きめ細かい軽石をわずかに含む
4．黒褐色土　粘質で，しまり良い
5．黒色土　軽石をわずかに含みボソボソしている
0
2m

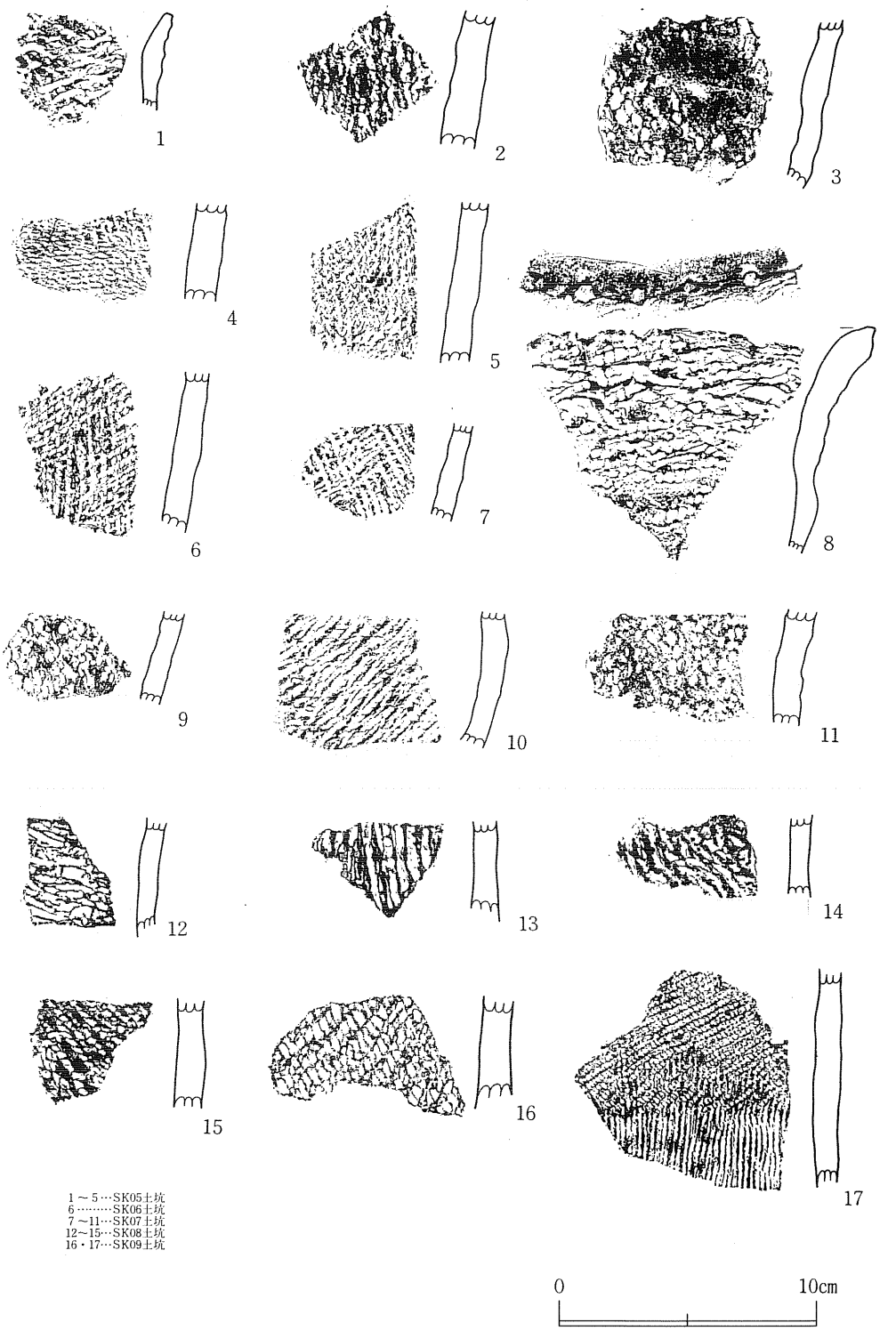
第81図　土坑実測図(4)



第82図　SK04土坑出土土器拓影図（１）



第83図　SK04土坑出土土器拓影図（２）・出土石器実測図



第84図　SK05土坑～SK09土坑出土土器拓影図

体とする。遺物は、LR の縄文を地文とする土器片で、17 は下半に撚糸文が施文されている。

SK10 土坑（第 79 図、第 85 図、図版 19）

SK 08 の南側約 3 m に位置する。平面形は、直径 135 ～ 140 ㎝の円形である。深さは 19 ～ 22 ㎝を測る。埋土は、黄色土粒、軽石を含む黒色系の土を主体とし、レンズ状の自然堆積を示す。遺物は、綾絡文を施文した土器片が出土した。

SK12 土坑（第 79 図）

MA 51、52 グリッドにまたがった位置にあり、円形の平面プランを呈する。規模は、直径 175 ㎝、深さ 7 ～ 15 ㎝を測る。底面は平坦である。埋土は、黄褐色土粒、軽石を含む黒色系で占められる。

SK15 土坑（第 79 図、第 85 図）

LP 50 グリッド内に位置し、平面形は方形に近い。規模は 152 × 184 ㎝、深さは 18 ～ 36 ㎝を測る。東側と西側に 1 箇所ずつ小さな段を有する。底面は平坦で、壁は上方に大きくひらいて立ち上がる。埋土は、黄褐色土粒を含む黒色系の土で占められる。遺物は、20 の口縁部破片が出土した。文様は綾絡文が施され、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。

SK16 土坑（第 80 図）

SK 土坑の東側約 5.5 m の LO 49 グリッド内に位置する。平面形は楕円形を呈し、145 × 206 ㎝を測る。深さは、44 ～ 46 ㎝であった。埋土は、黄褐色土粒、砂粒、軽石を含む黒色系の土で占められる。遺物は、土器片とと石器剥片が出土した。

SK17 土坑（第 80 図、第 85 図、図版 19）

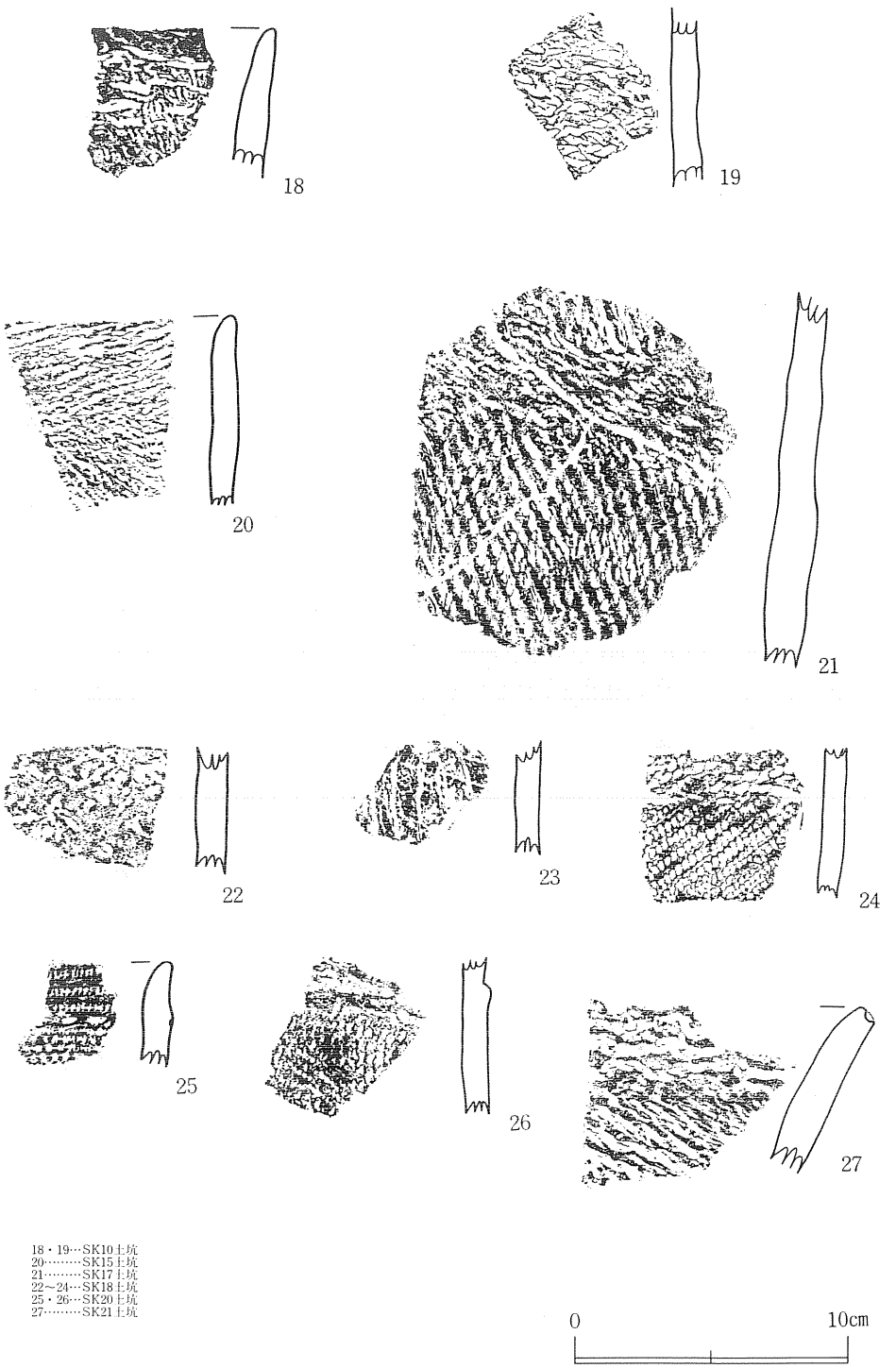
MD 51 グリッド内に位置する。平面は円形を呈する。規模は、直径 116 ～ 119 ㎝、深さ 72 ㎝を測る。埋土は、黄褐色土粒、黄橙色土粒を含む黒色系の土が主体をなす。遺物は、撚糸文が施された土器片（21）が出土した。

SK18(A)(B)土坑（第 80 図、第 85 図、図版 19）

MD 51 グリッド内に位置する。SK 18 (A)土坑は楕円形プランを呈し、長軸 124 ㎝、短軸（推定）105 ㎝、深さ 29 ～ 33 ㎝を測る。SK 18 (B)坑は円形プランを呈し、直径約 85 ㎝、深さ 12 ～ 20 ㎝を測る。底面は平坦ではない。埋土は、(A)(B)とも黄褐色土粒を含む黒色系の土で占められ、新旧関係は土層断面では判別できなかった。つくられてから使用後廃絶されるまでの時間が非常に近接していたものと思われる。ただ、SK 18 (B)土坑の埋土上面の 4 層の堆積状況からみると、(B)のほうの土があとから堆積したものと一応推定される。遺物は、SK 18 (B)から土器片が出土している。

SK19 土坑（第 80 図）

調査区前端近くの MC 47 グリッド内に位置する。ほぼ円形の平面プランをもつ。直径 125 ～



第85図　SK10・15・17・18・20・21土坑出土土器拓影図

127 ㎝、深さ 27 ～ 30 ㎝を測る。埋土は、黄色土粒、黄褐色土粒を含む黒色系の土が主体をなす。遺物は、自然石のほか出土しなかった。

SK20 土坑 （第 81 図、第 85 図、図版 19）

MB 52 グリッド内に位置する。平面形は、140 × 180 ㎝の長方形を呈する。深さは、21 ～ 32 ㎝をはかる。埋土は、黄褐色土の混入量や粒子の大きさにより分けられたが、黒色系の土で占められている。遺物は、縄文土器片と石器剝片が出土した。

SKF21 フラスコ状土坑 （第 81 図、第 85 図）

ME 51 グリッド杭を中心とする位置にある。平面形は円形を呈し、直径 124 ～ 129 ㎝をはかる。底径は 140 ～ 150 ㎝で、底部から上方にややすぼまるように立ち上がる。東側上部に小さなくびれを有する。埋土は、軽石を含む黒色系の土が主体をなす。遺物は、27 の口縁部破片でやや外側にひらく。口唇部に指頭圧痕がみられ、口縁部は綾絡文を施文した下に撚糸文が施される。

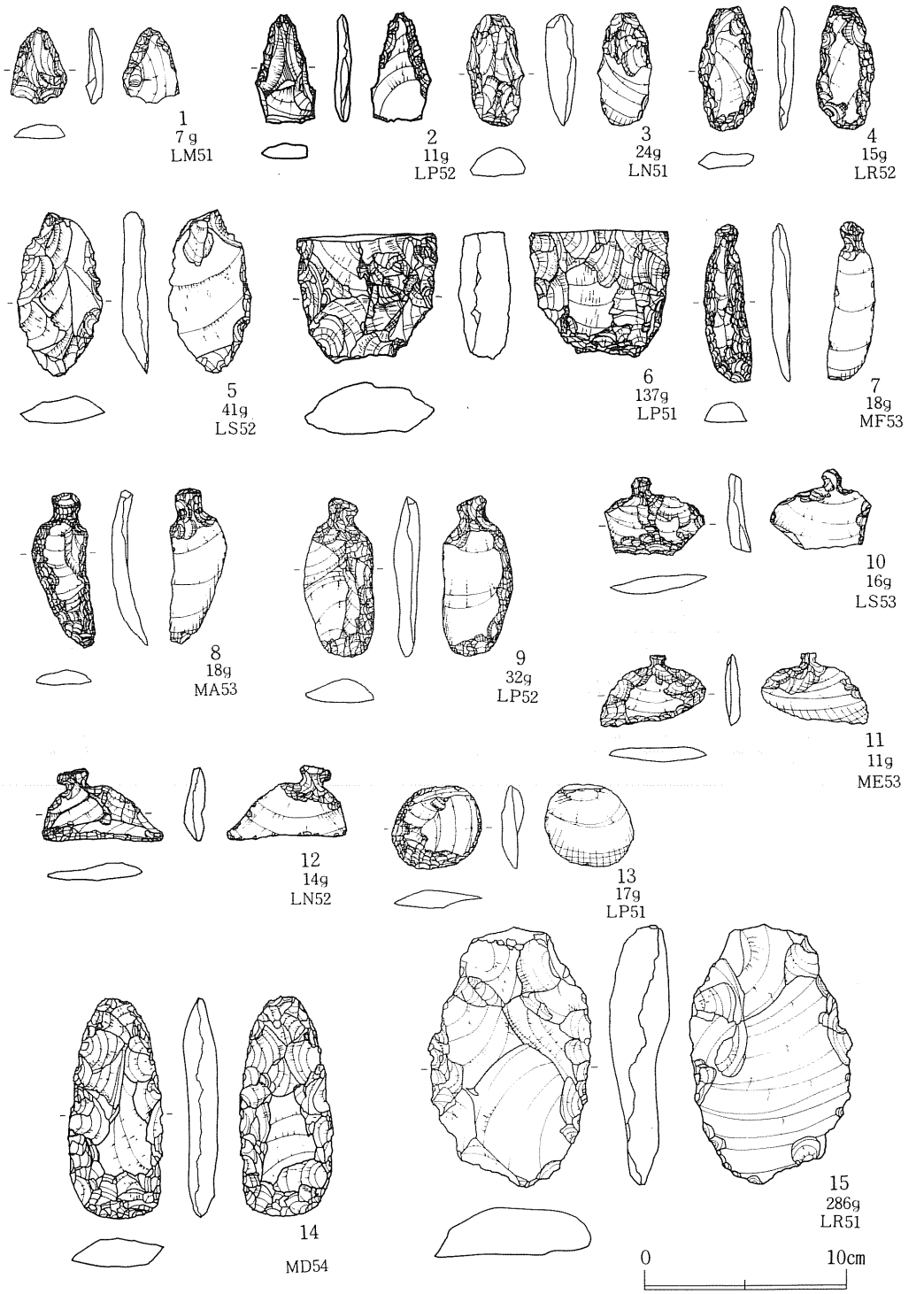
④捨て場（第 8 図、第 86 図～第 88 図、図版 20、63 ～ 66）

調査区は、地形のうえから上位面と下位面に分けられるが、上位面から下位面に移る急斜面とその下方からは、土器片と共に、石器、自然石が多数検出された。これらは、沢 №.1 から沢 №.3 が開折後に捨てられた遺物が流れ込んだものも含むであろう。ただ、その分布は、沢と沢の間の斜面とその下方に確認されたことから、沢とは別個の捨て場として把えられるものである。その平面的な広がりは、第 8 図のスクリーントーンによって表わされる範囲であるが、その垂直分布は第Ⅱ層から第Ⅴ層までおよぶ。また遺物が含まれるものは黒色の単一土層中であり、長期にわたって堆積した土が層をなしあそれにより、遺物の投棄の前後関係がある程度推定できるという状況にはなかった。

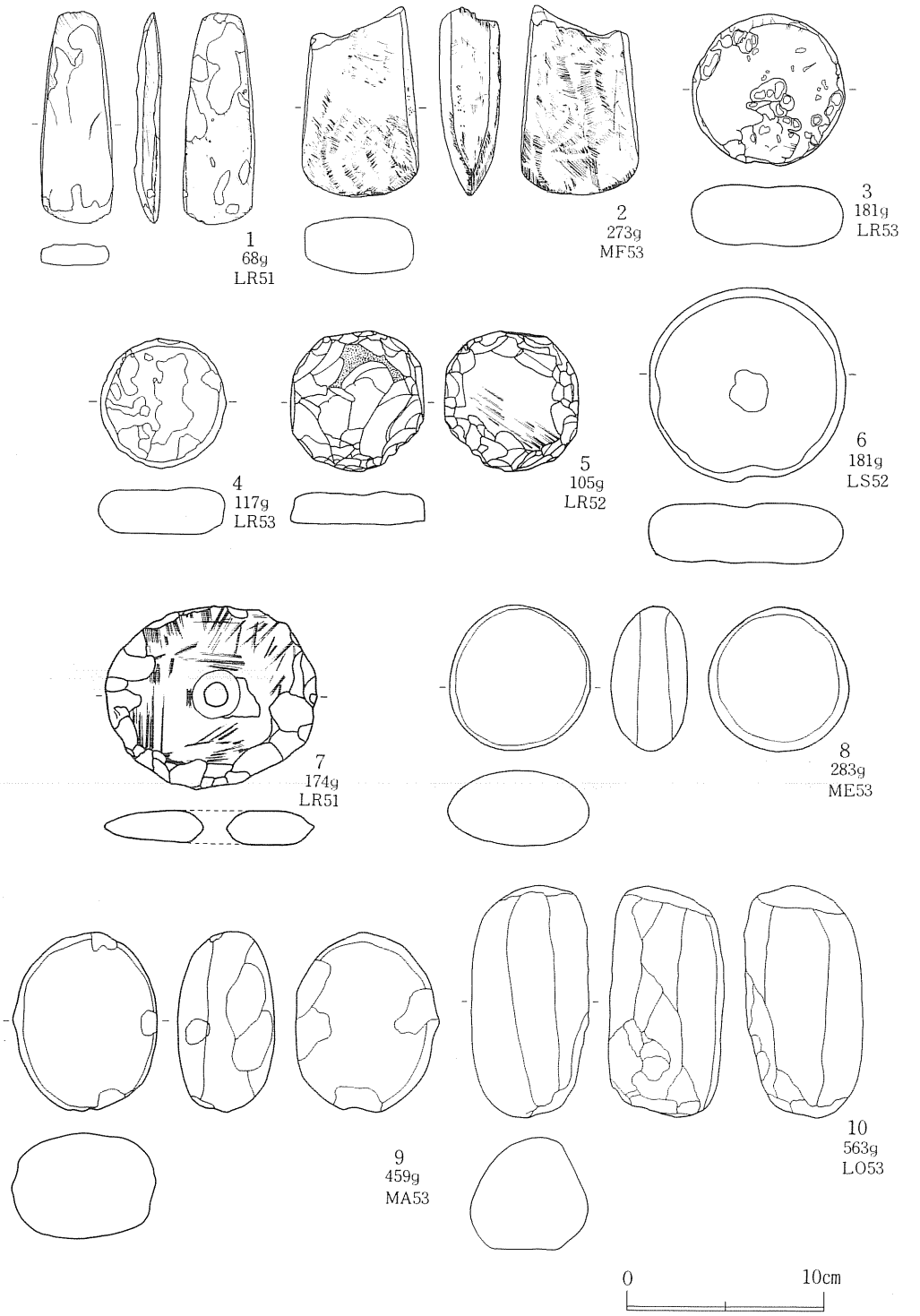
⑤各層出土の遺物（第 89 図～第 109 図、第 154 図、第 155 図、図版 39、図版 41 ～図版 47）

第Ⅰ層出土の遺物の中で目につくのは、口縁部に細い粘土紐を波状に貼り付けたもの（第 89 図 8 ）、RL の縄文を地文とし細い沈線の施文されたもの（第 89 図 6 ）、口唇部と口縁部に撚糸の押圧文が施されたもの（第 89 図 7 ）などである。石器・石製品では、石錐、石匙のほか円盤状石製品などが出土している。

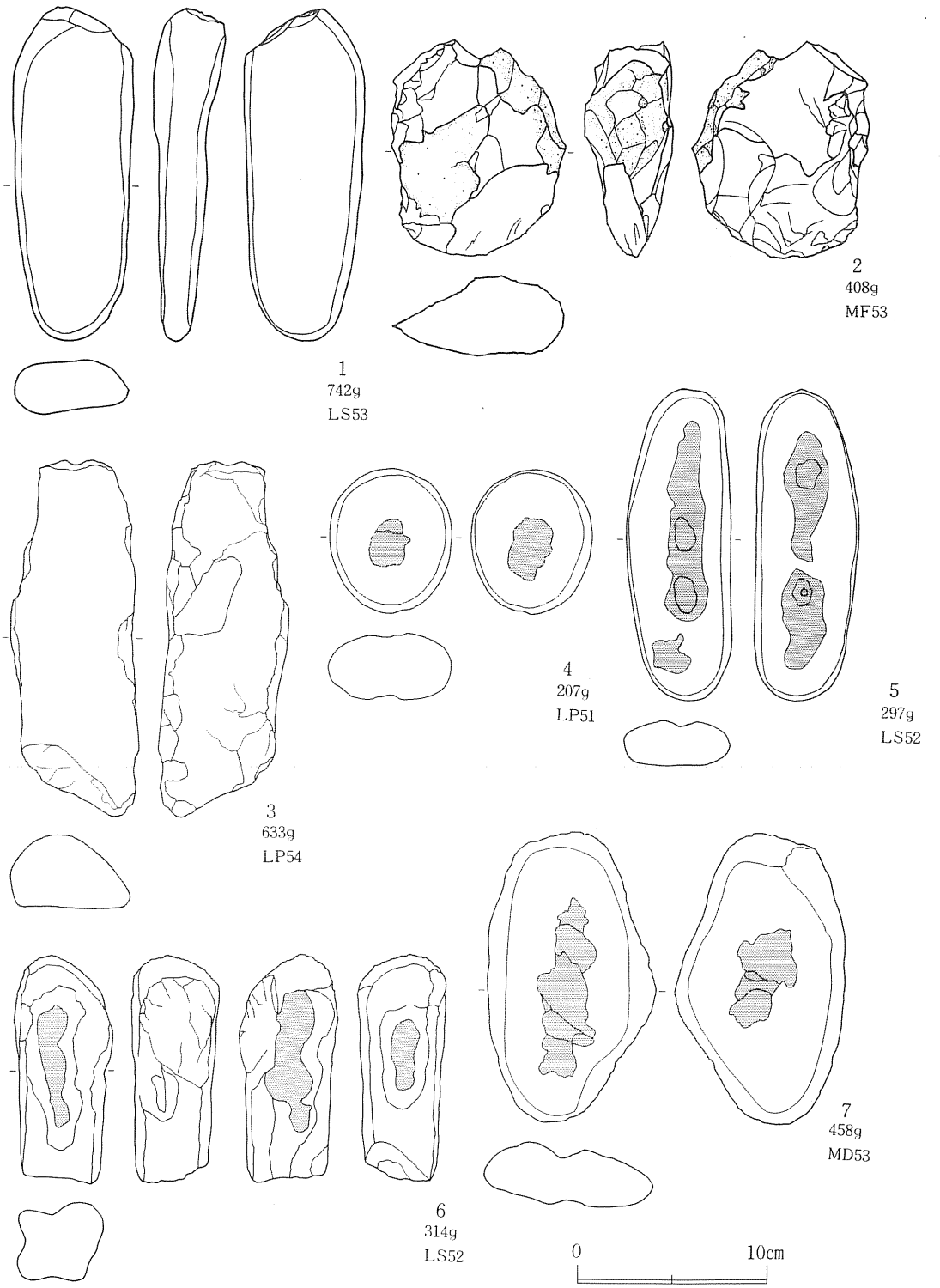
第Ⅱ層出土の遺物（第 91 図～第 98 図、図版 39）では、口縁部文様帯が狭く胴部に木目状撚糸文が施文されるもの（ 3 ）、口縁部に綾絡文、胴部に縦位または斜位の撚糸文が施文されるもの（ 4 、 6 ～ 9 ）、内面に条痕文が施されるもの（14）、付加条のある縄文の施されたもの（16）、口唇部に刻目文が施され、口縁部に山形の押型文が施文されたもの（42、43）、口唇部と隆帯上



第86図　捨て場出土石器実測図（１）



第87図　捨て場出土石器実測図（２）

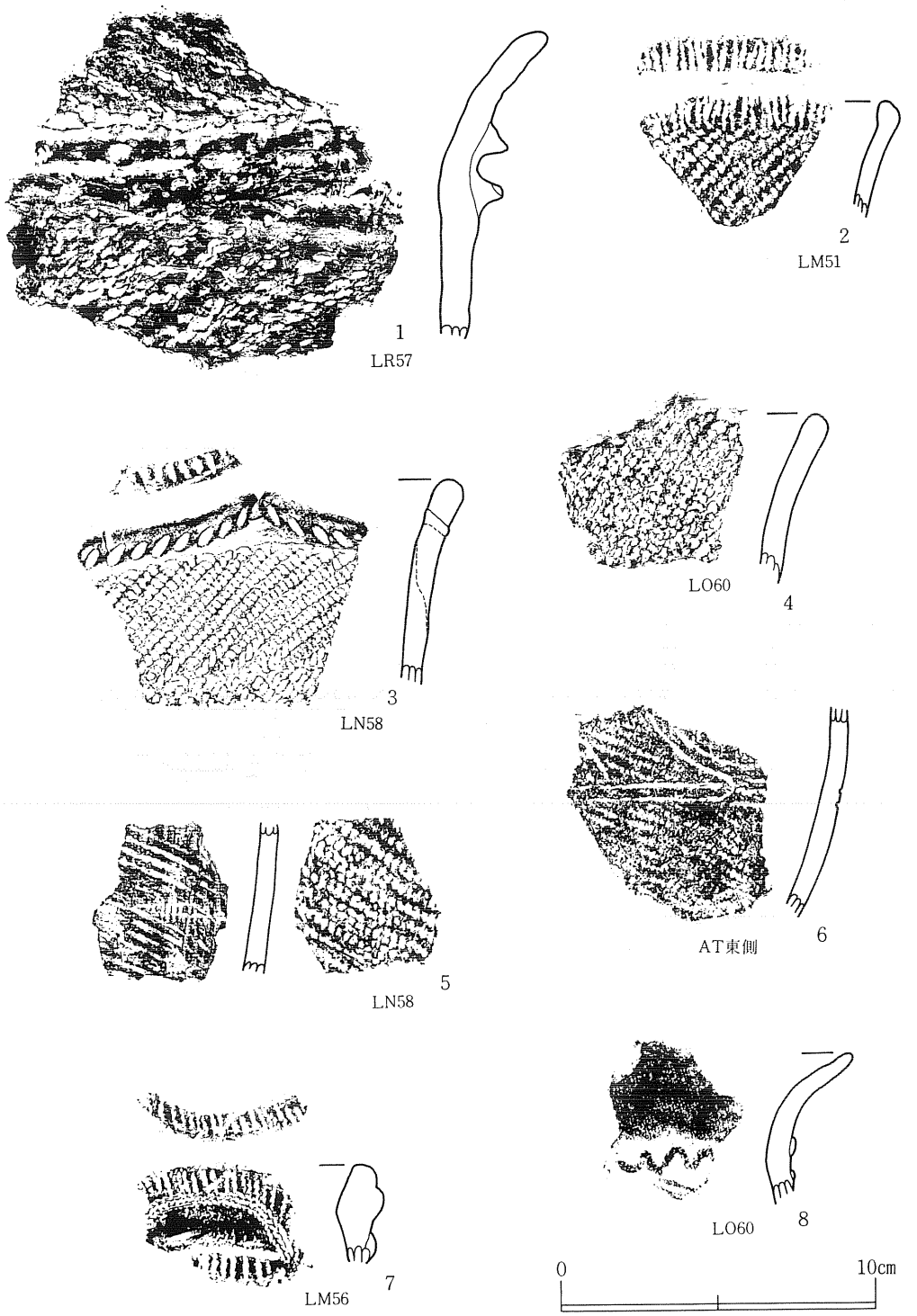


第88図　捨て場出土石器実測図（３）

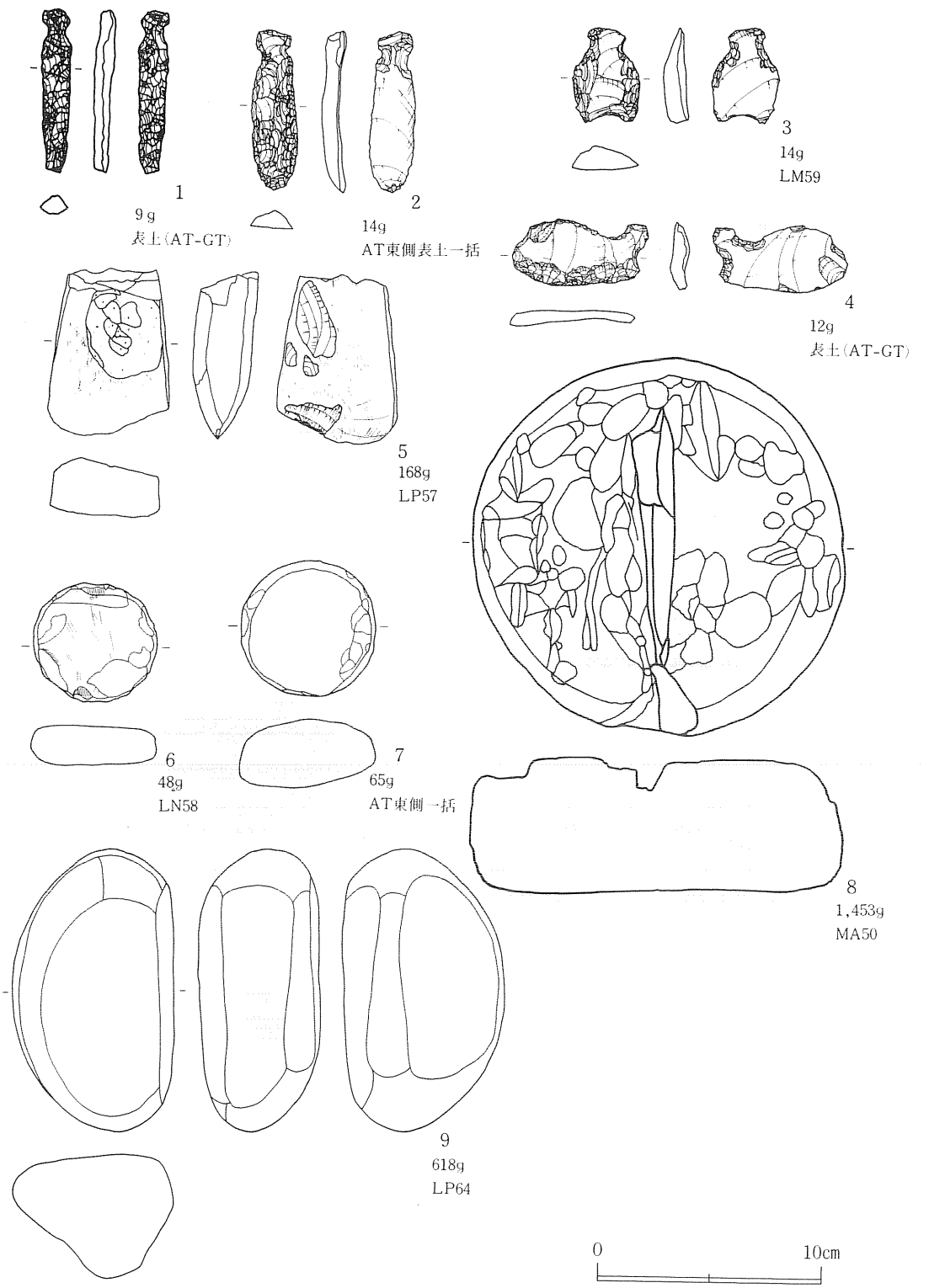
に指頭圧痕文が施されたもの（24、25）などバラエティーに富む。石製品では、穿孔された円盤状石製品（第97図7、8）、有溝石製品（第98図23）、岩偶（第98図24）が出土している。

第Ⅱ層～第Ⅲ層出土の遺物（第99図、第107図）では、大木7a式と思われる土器片（9、12）が検出されている。

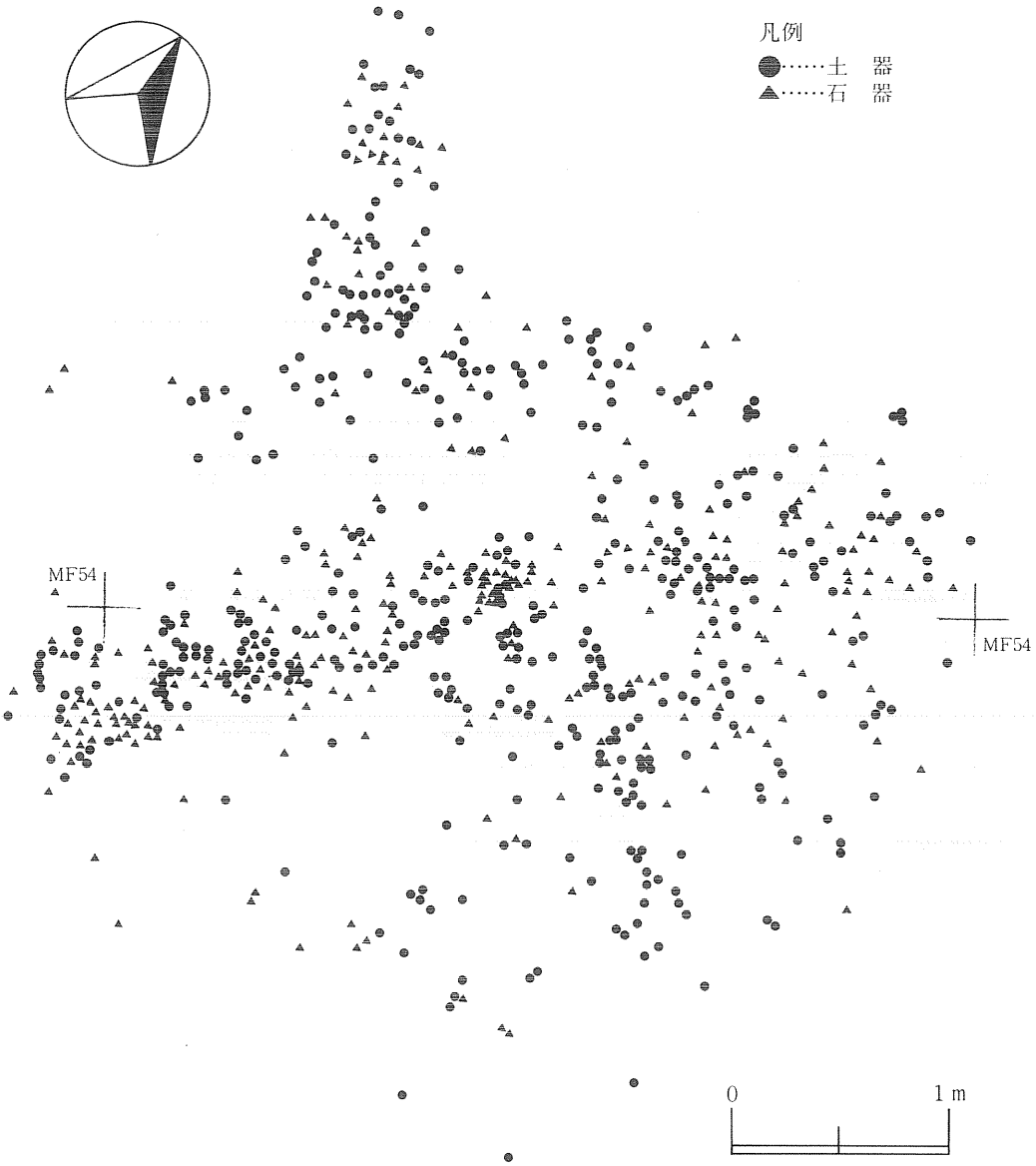
第Ⅲ層出土の遺物（第100図～第109図）では、口縁部に綾絡文を施し、その下の2条の隆帯上とその上下に指頭と爪によって縦位に施文されているもの（1）、口唇部と隆帯上に指頭圧痕文を施すもの（23～26）、隆帯の上下にも指頭圧痕文を施すもの（17、18、20、22）、内外面に撚糸文が施されるもの（36）、羽状縄文施文後、口縁部と胴部を区画するように撚糸を押圧施文したもの（29、30、31）などがある。石器・石製品では、豆粒状に加工した垂飾と思われるもの（25）のほか、石匙、掻器、石箆、磨製石斧、円盤状石製品、すり石などが出土している。



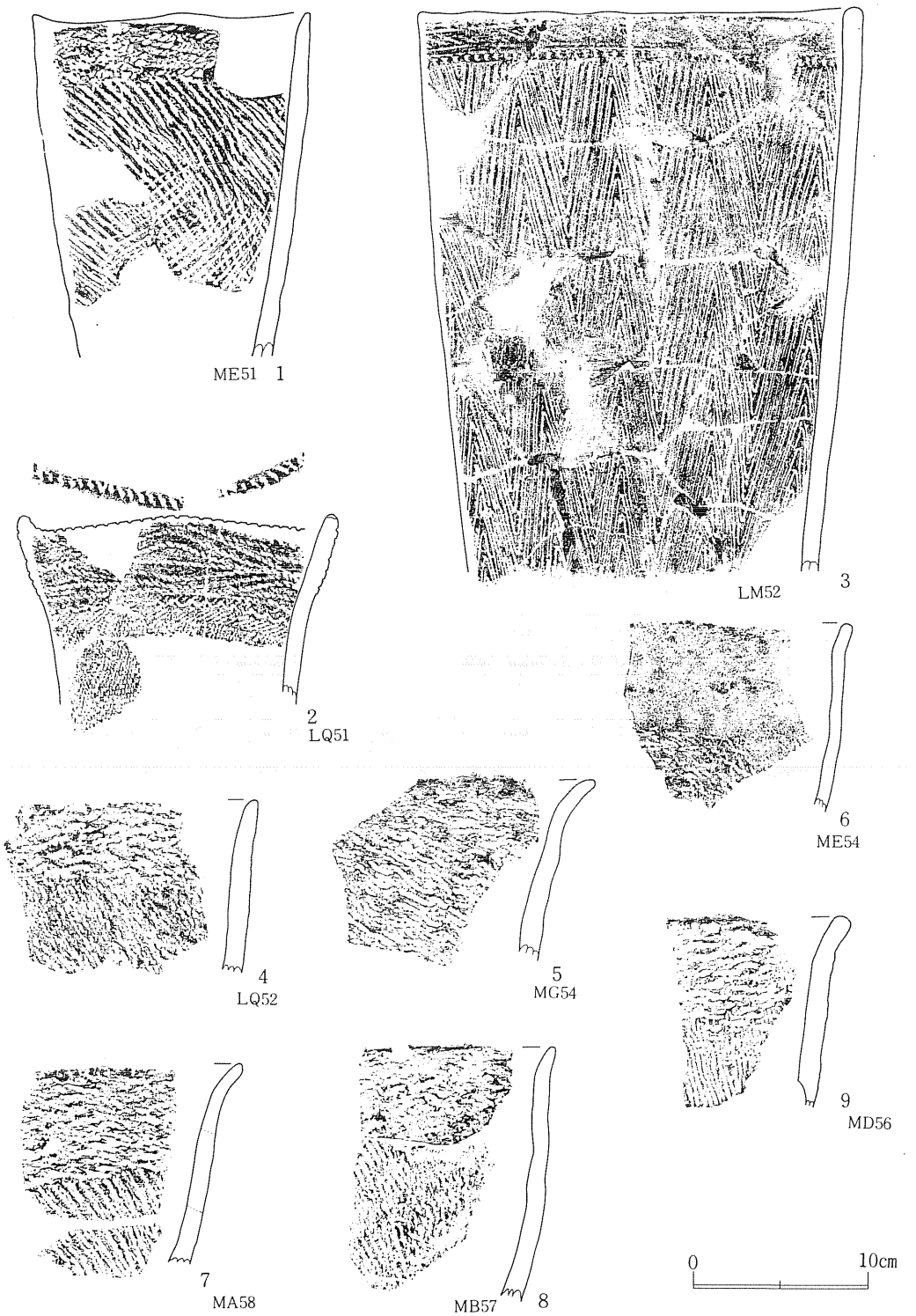
第89図　第Ⅰ層出土土器拓影図



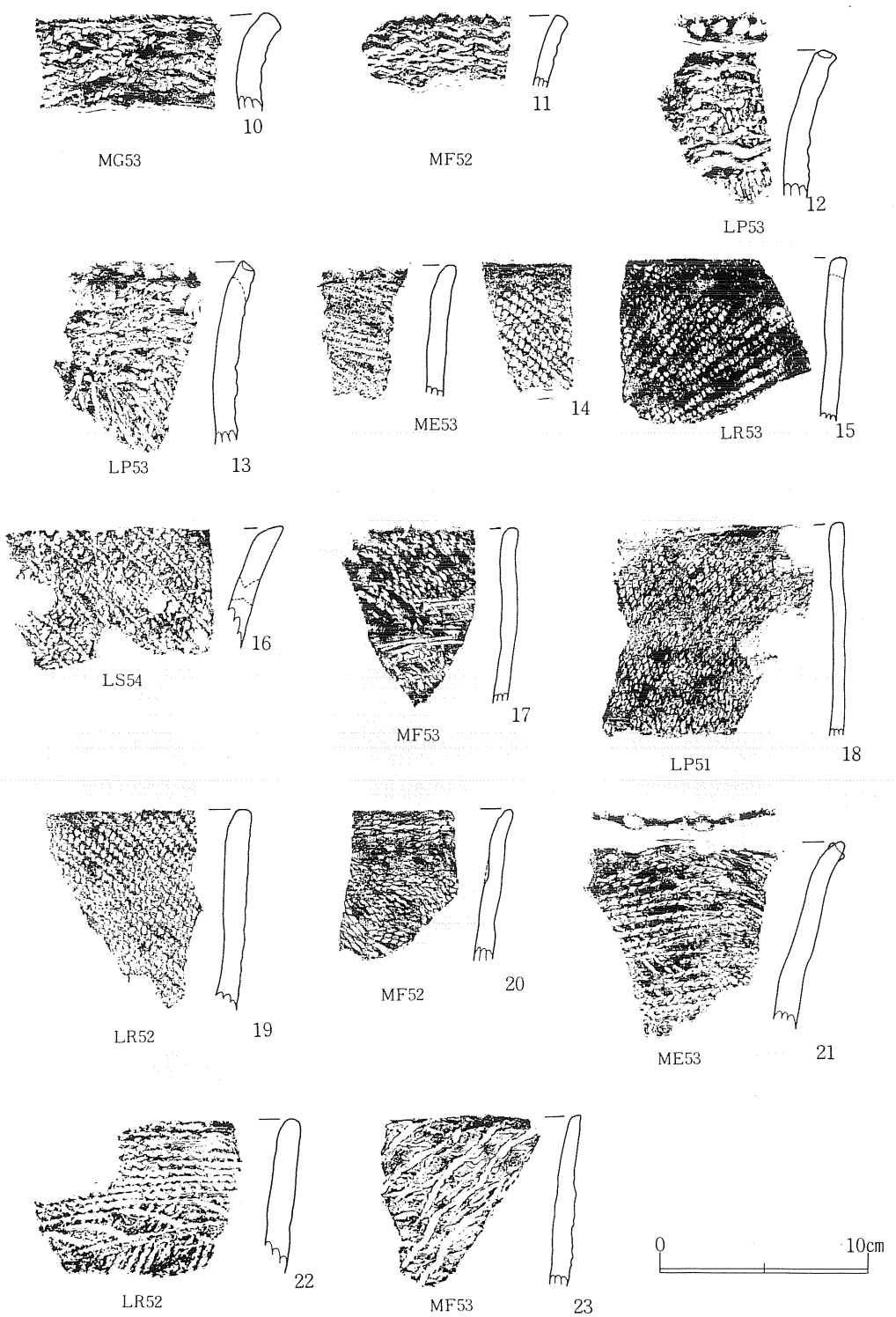
第90図　第Ⅰ層出土石器実測図



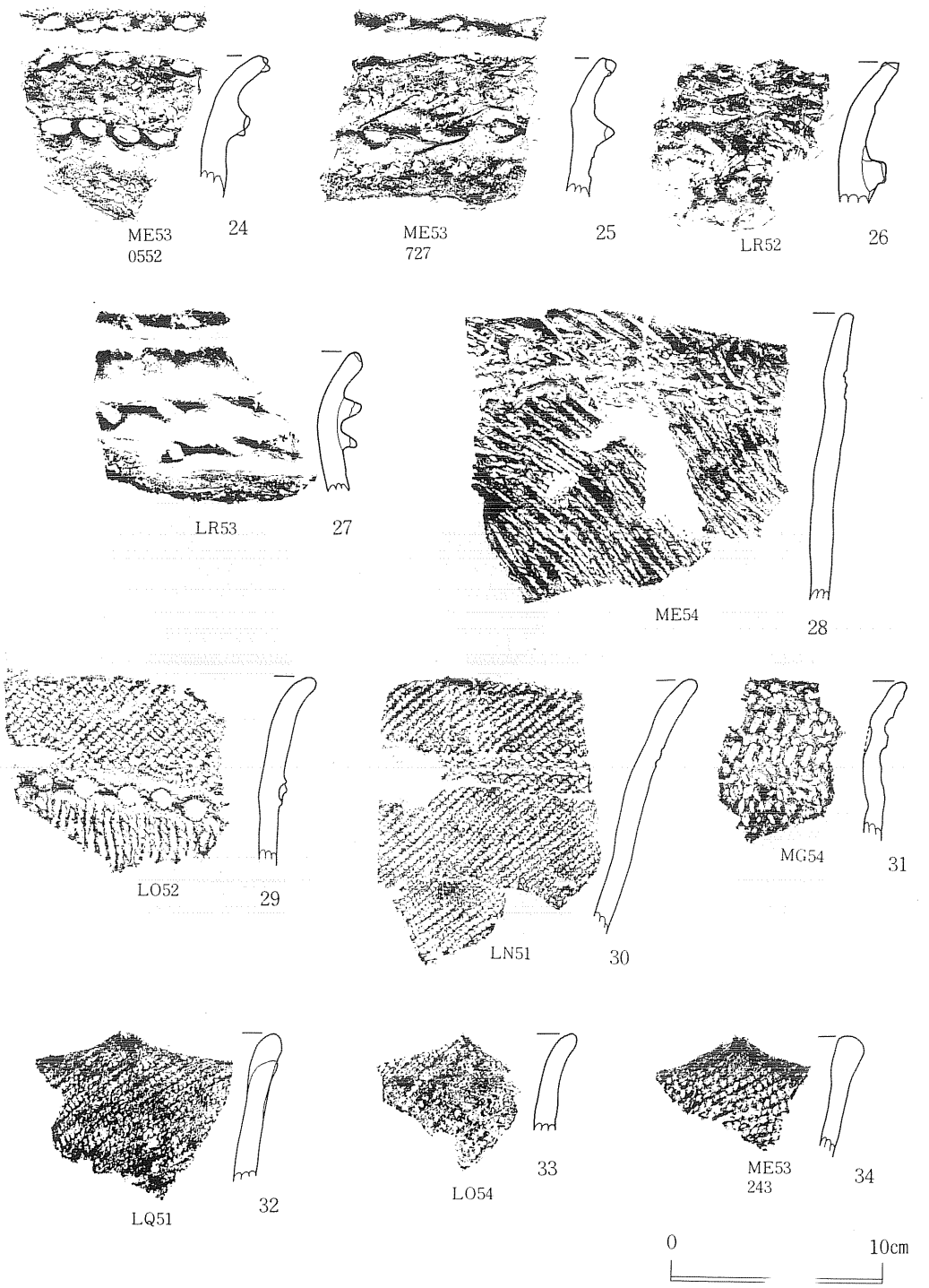
第91図　Ⅱ層遺物集中地点実測図



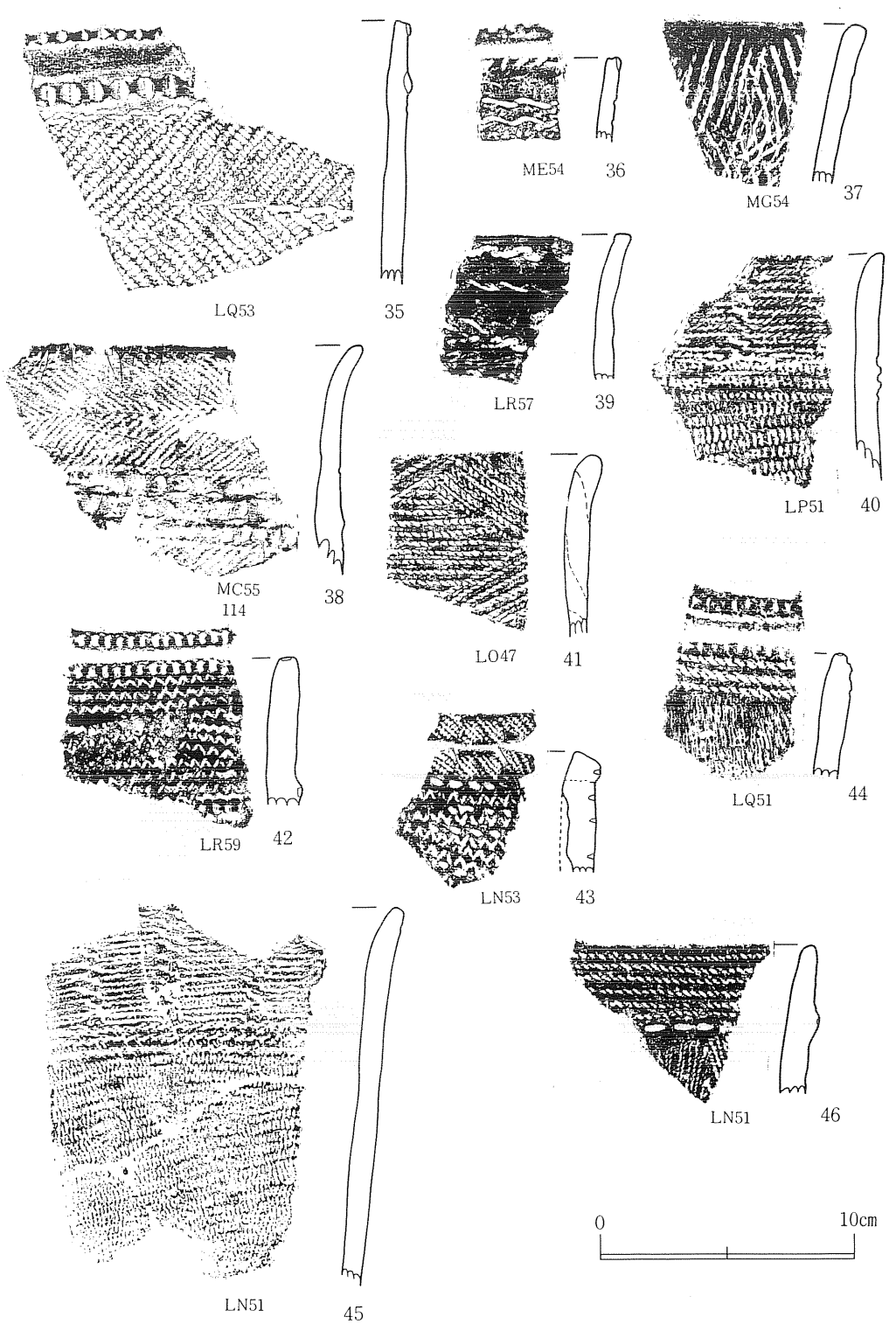
第92図　第Ⅱ層出土土器拓影図（1）



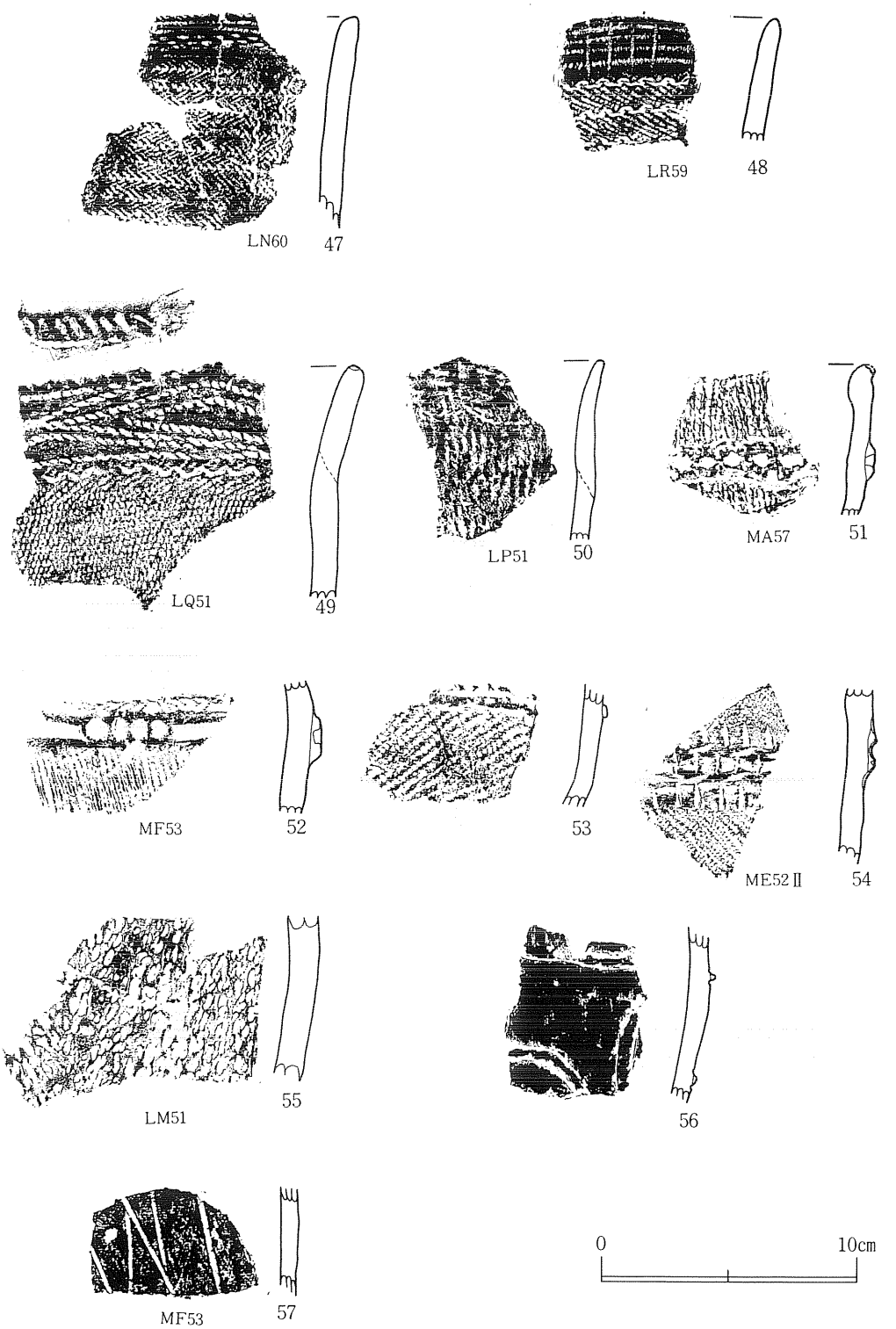
第93図　第Ⅱ層出土土器拓影図（２）



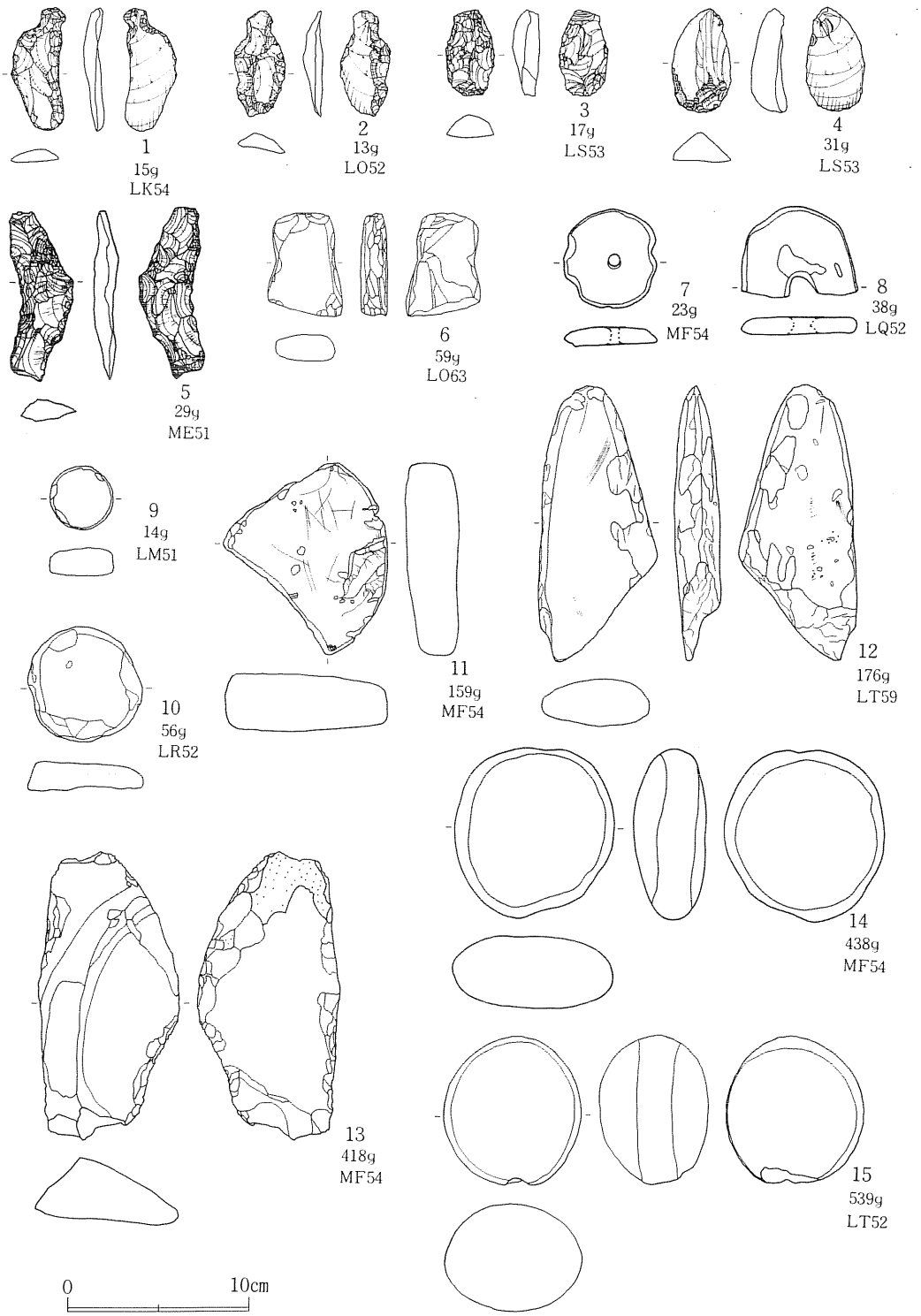
第94図　第Ⅱ層出土土器拓影図（3）



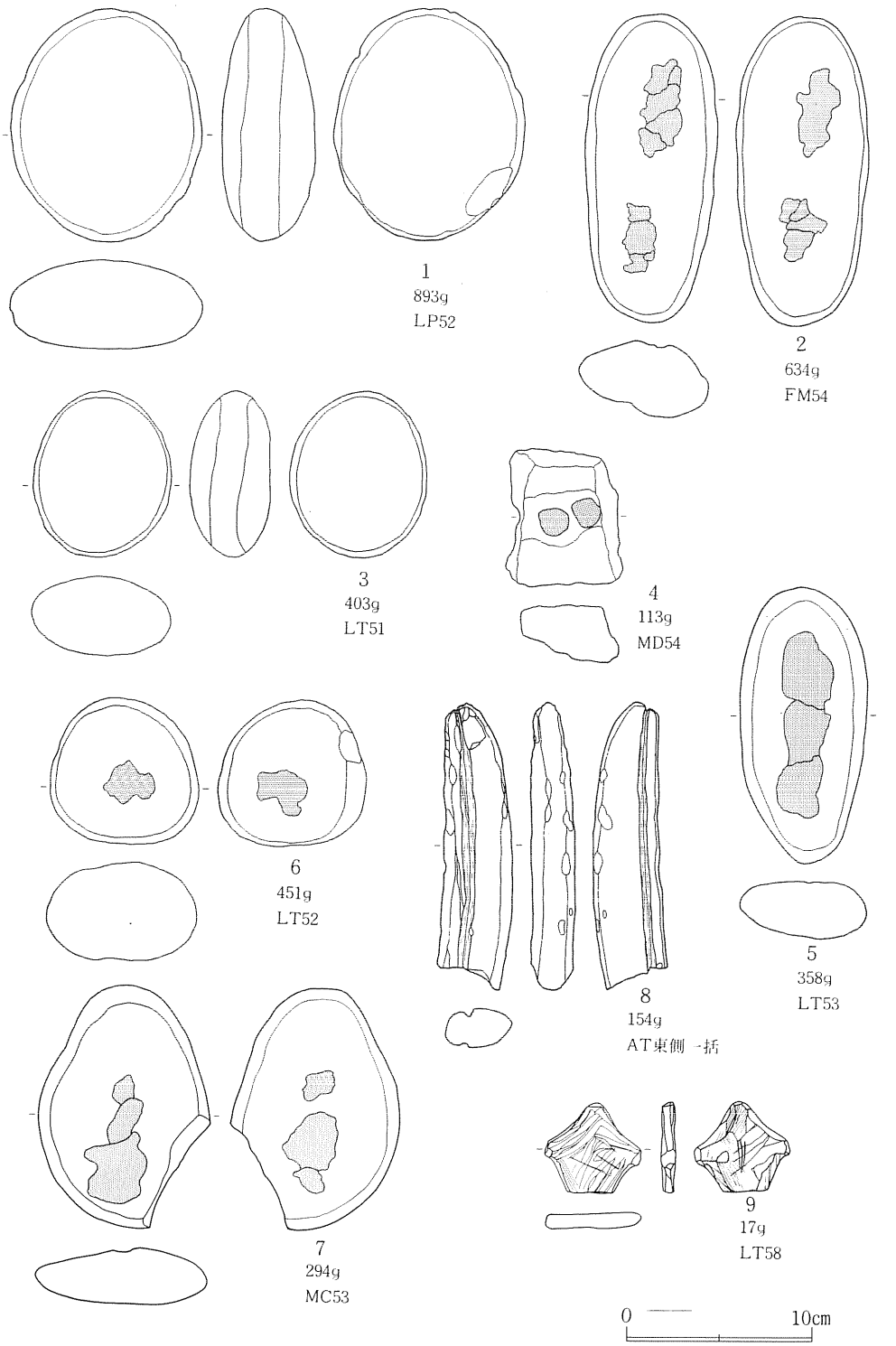
第95図　第Ⅱ層出土土器拓影図（４）



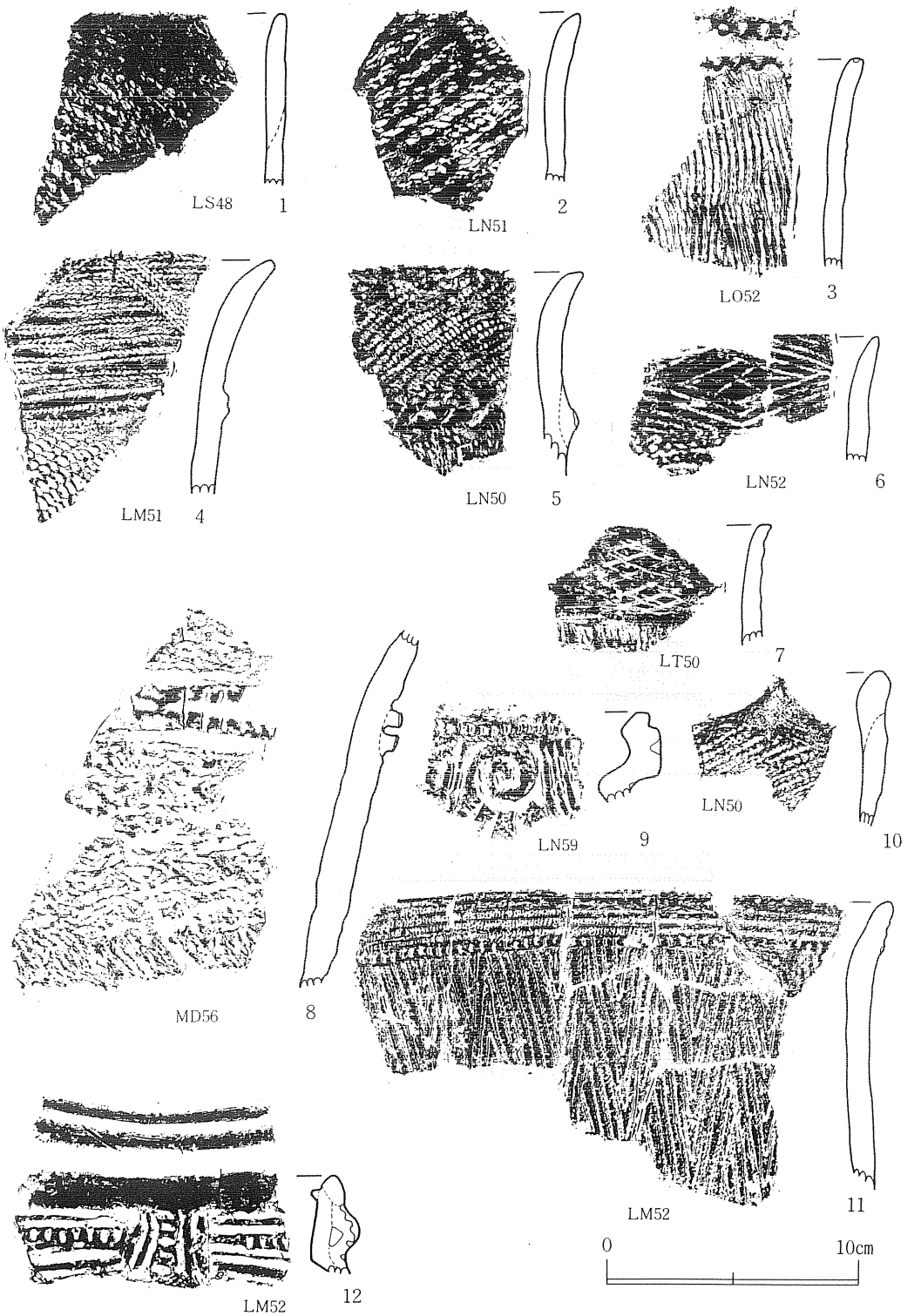
第96図　第Ⅱ層出土土器拓影図（5）



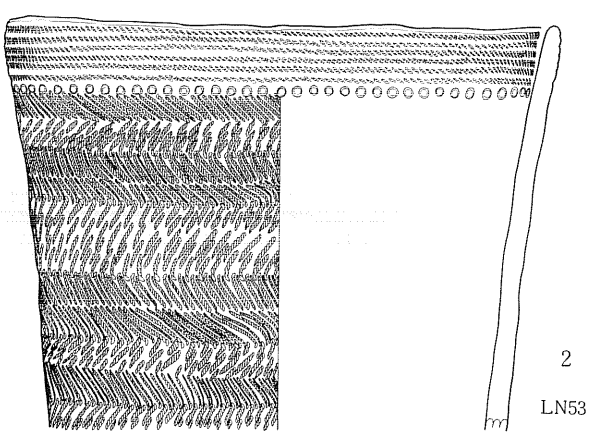
第97図　第Ⅱ層出土石器実測図（１）



第98図　第Ⅱ層出土石器実測図（2）

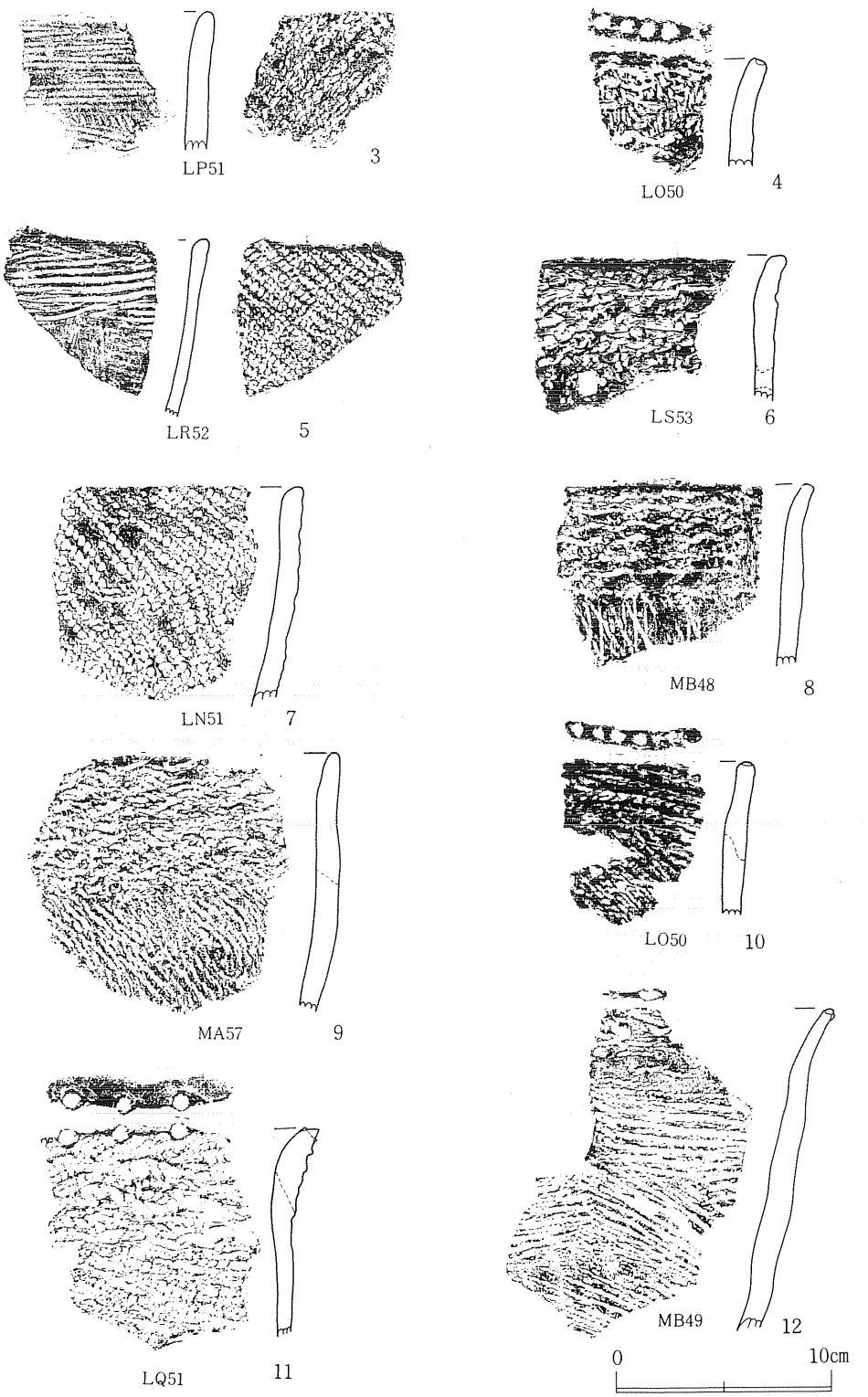


第99図　第Ⅱ～Ⅲ層出土土器拓影図

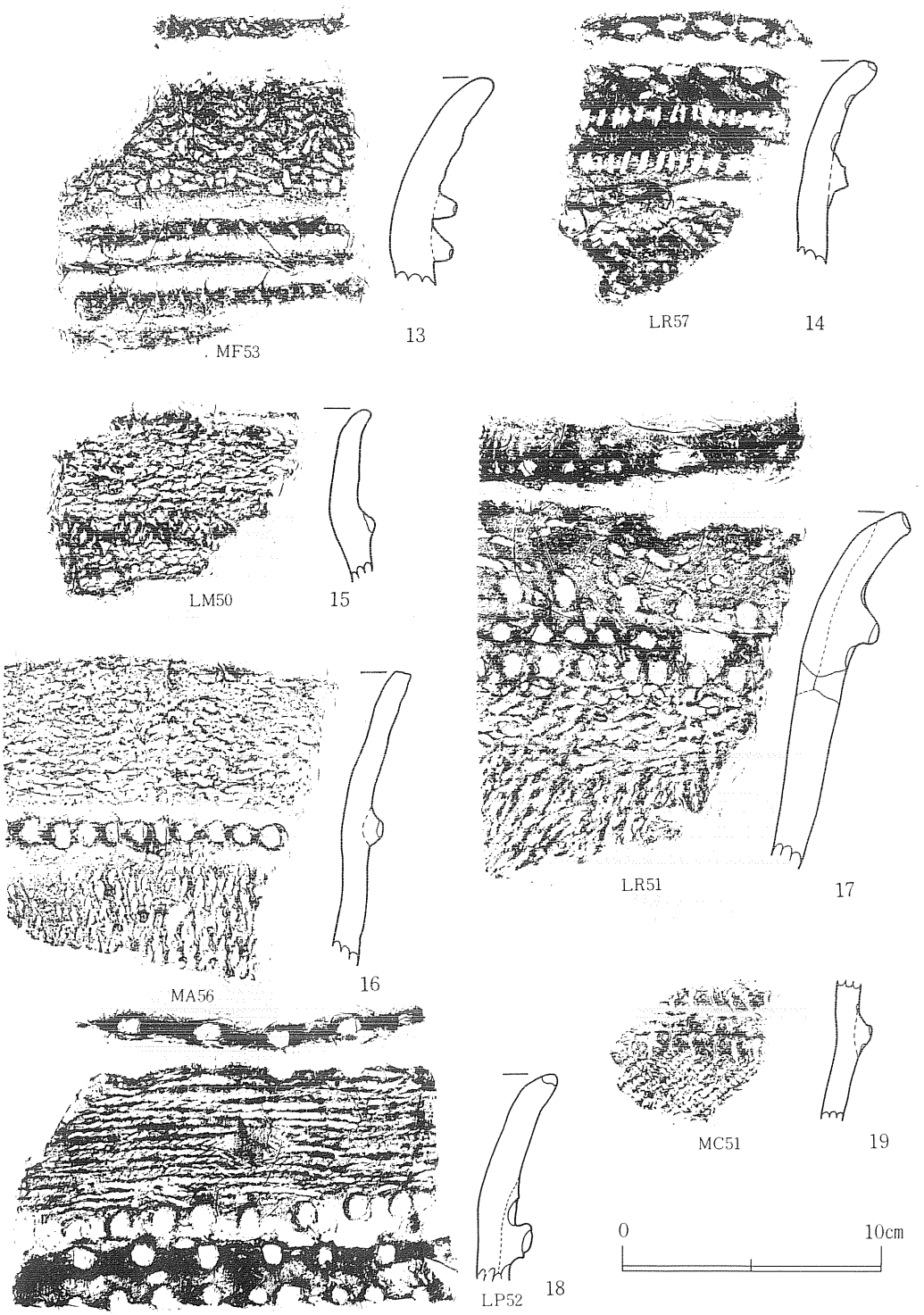


0　10cm

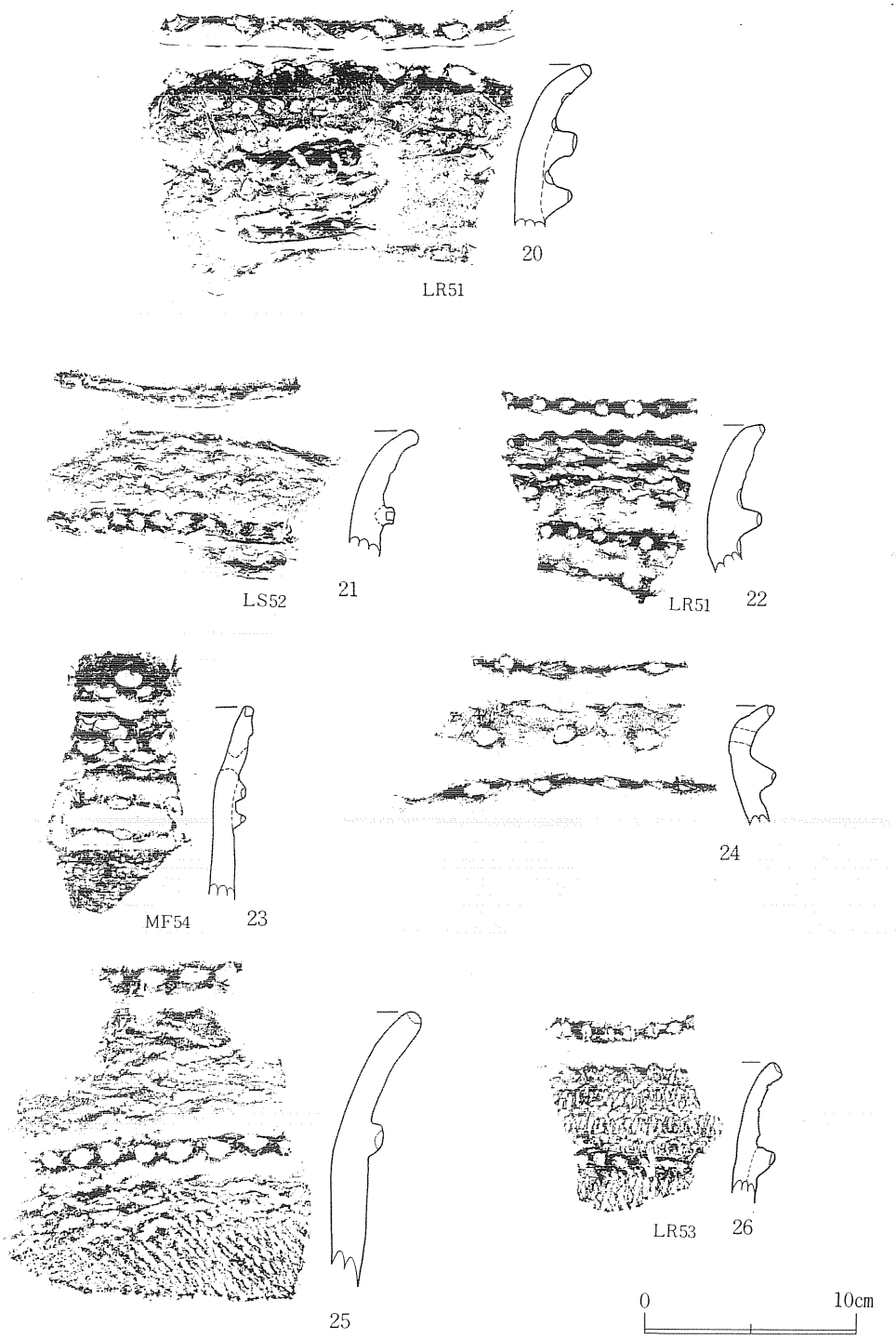
第100図　第Ⅲ層出土土器実測・拓影図（1）



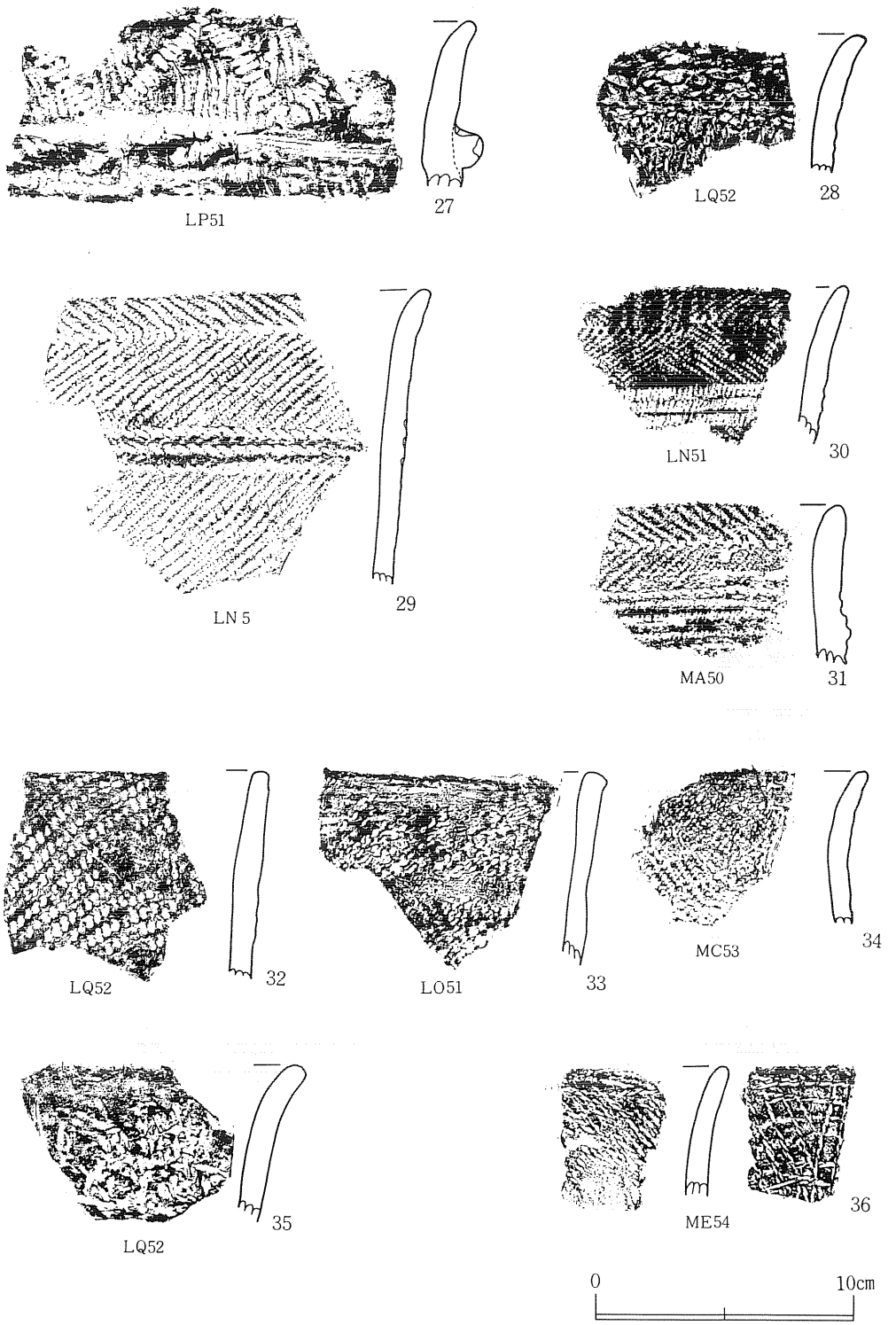
第101図　第Ⅲ層出土土器拓影図（２）



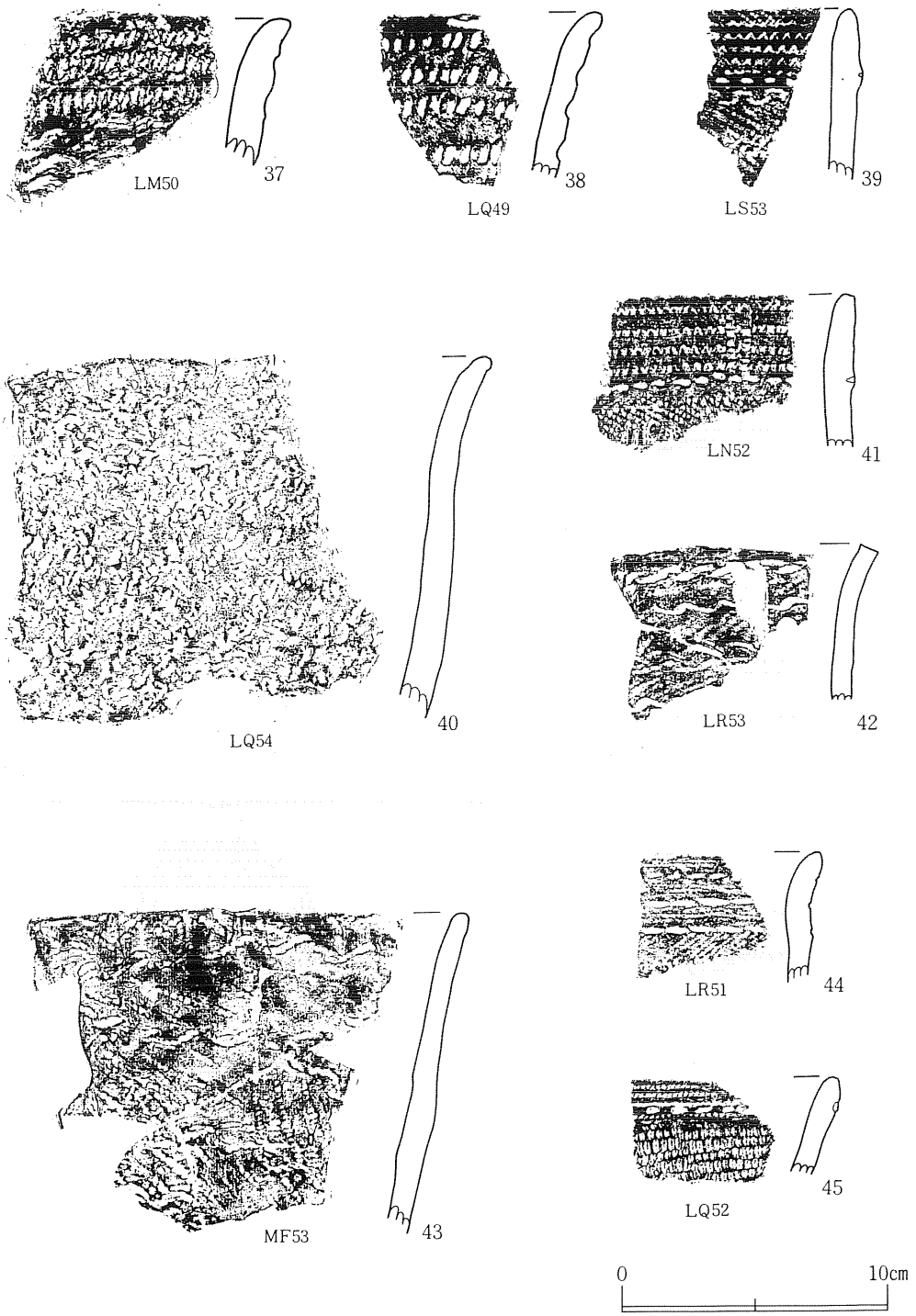
第102図　第Ⅲ層出土土器拓影図（３）



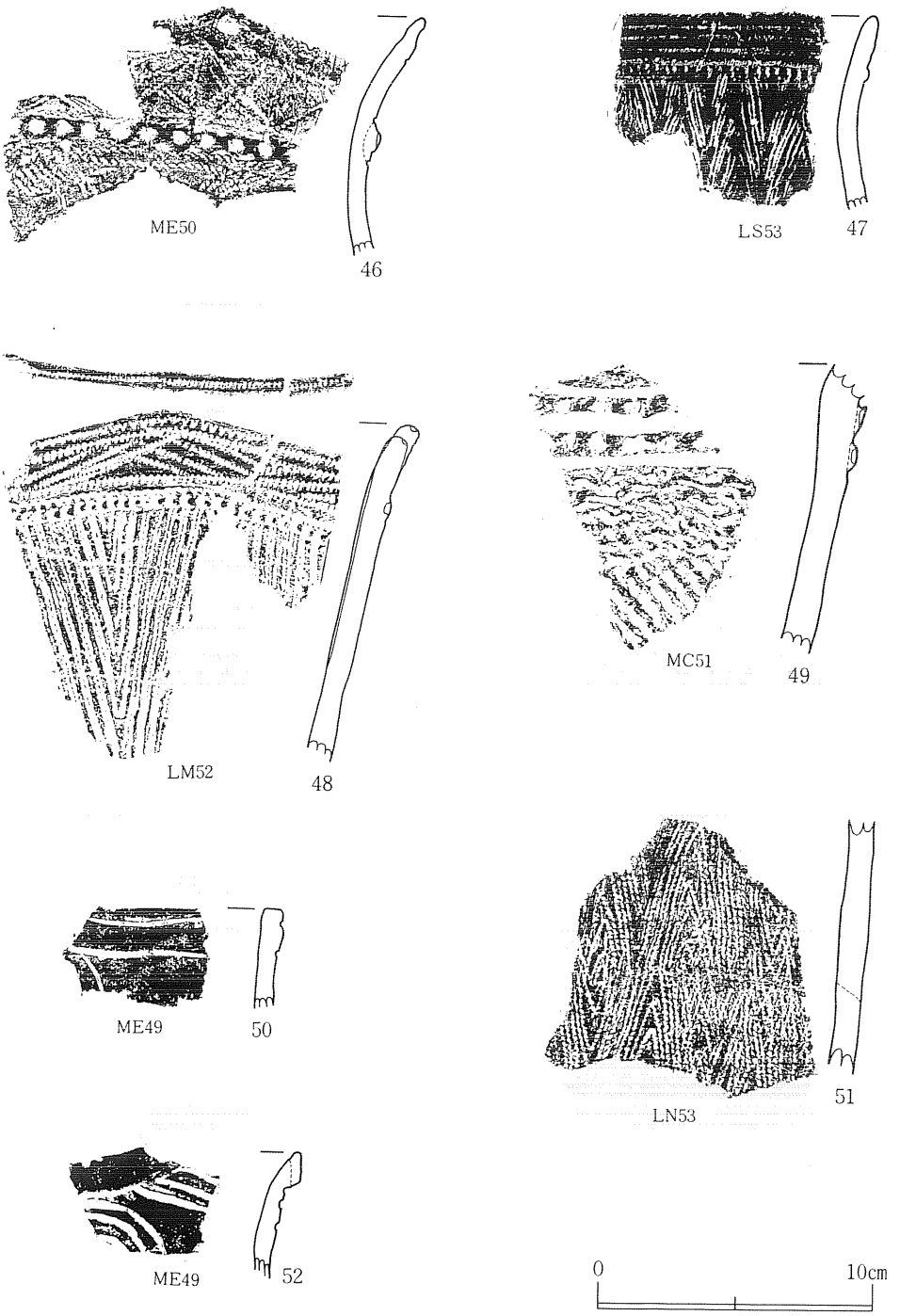
第103図　第Ⅲ層出土土器拓影図（４）



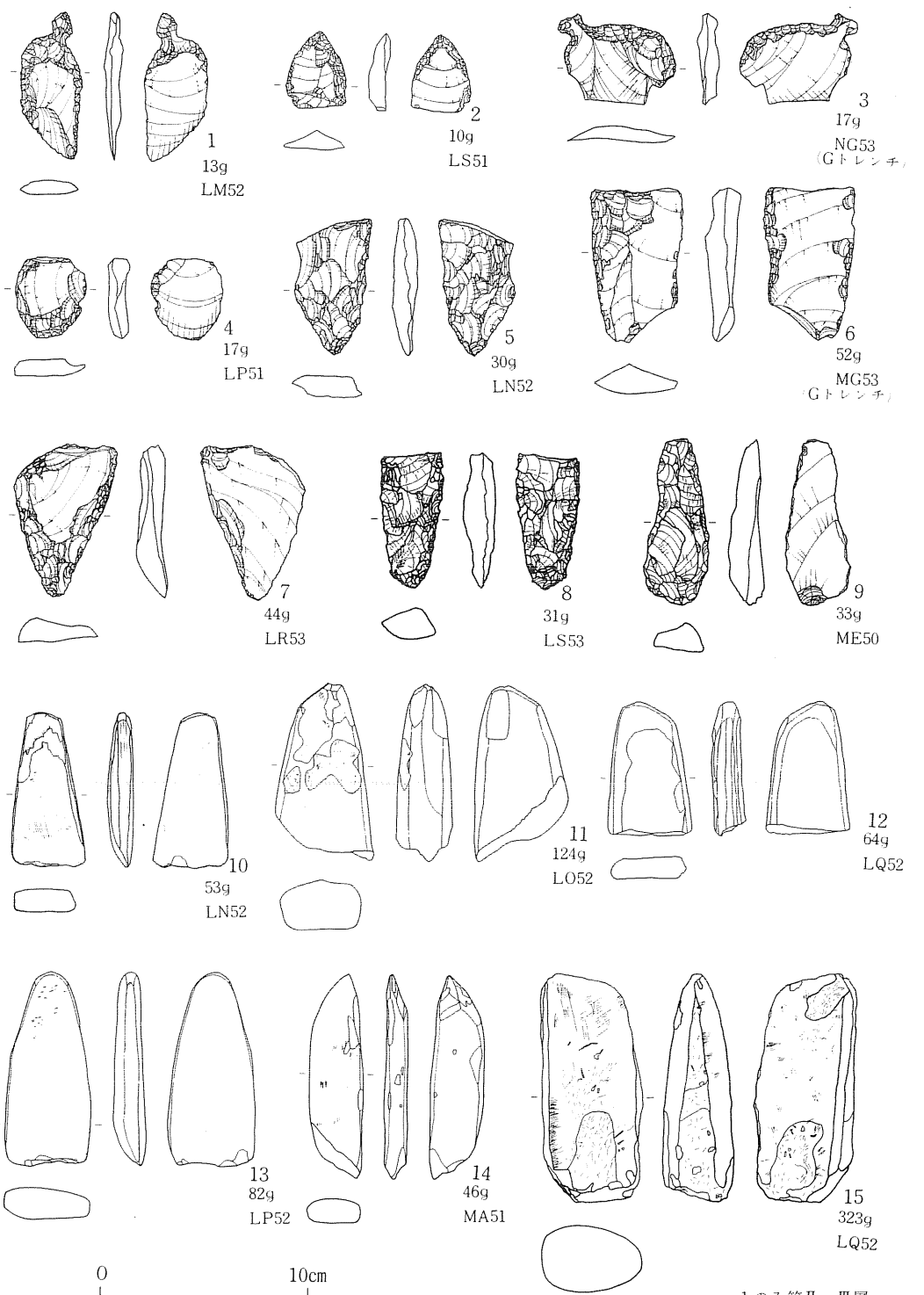
第104図　第Ⅲ層出土土器拓影図（5）



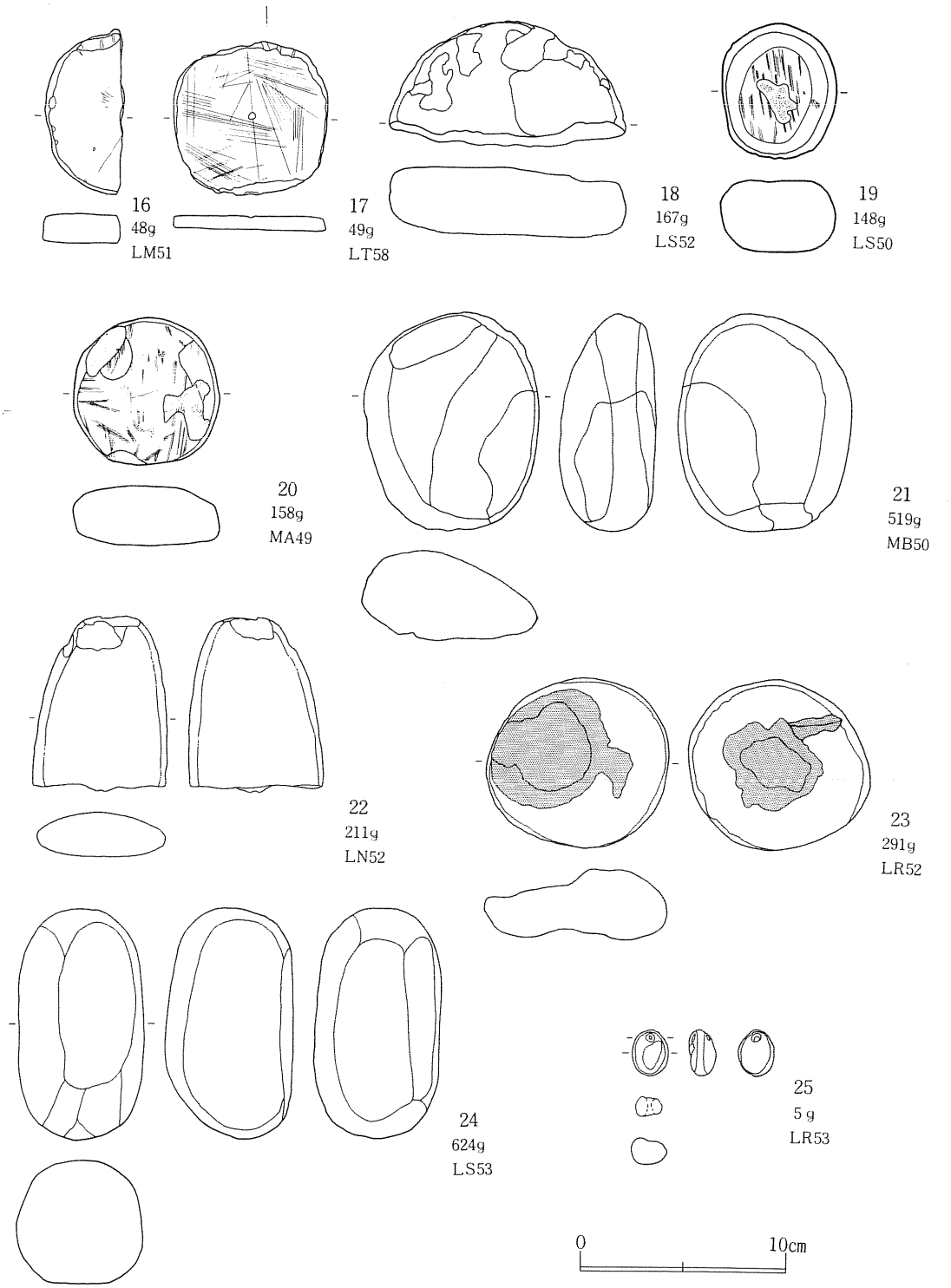
第105図　第Ⅲ層出土土器拓影図（６）



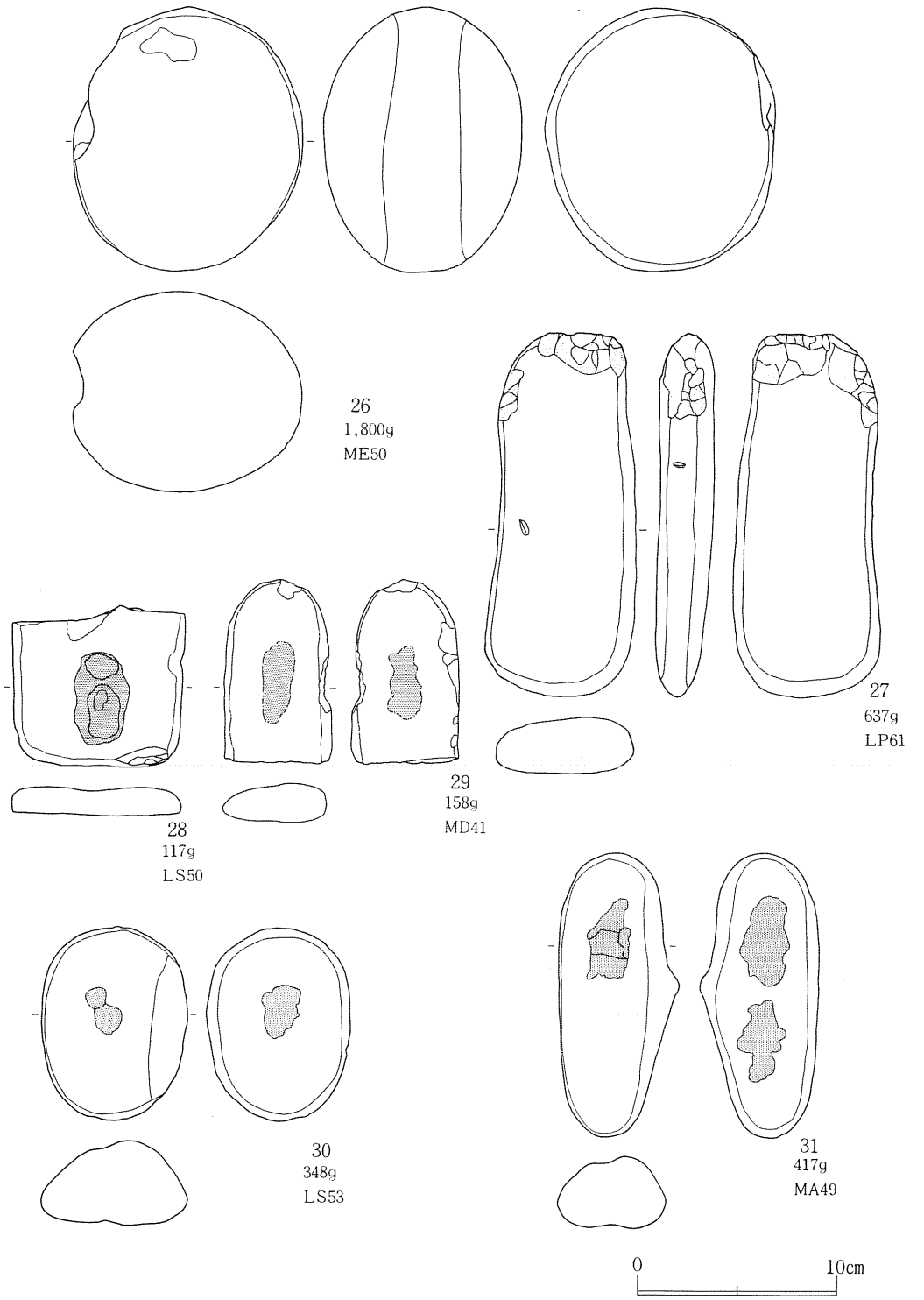
第106図　第Ⅲ層出土土器拓影図（７）



第107図　第Ⅱ～Ⅲ層出土石器実測図，第Ⅲ層出土石器実測図（1）



第108図　第Ⅲ層出土石器実測図（２）



第109図　第Ⅲ層出土石器実測図（３）

(2) 第Ⅳ層～第Ⅷ層検出の遺構と遺物

① 竪穴住居跡

SI05 竪穴住居跡 （第110図～第112図、図版21）

MD 47～49、ME 47～49の第Ⅴ層上面においてプラン確認中、径2～4㎝の軽石を混入する暗褐色土が楕円形に落ち込むプランとして検出された。

プラン確認面から床面までは35～52㎝をはかる。住居跡内の土層は、7層に分層されたが、住居廃棄後の埋土である1～3層には、軽石粒・塊が混入している。

本住居跡は、3回の改築（拡張）が行われており、当初のプランから1回目に30～50㎝、2回目に北側部分を約120㎝、3回目に北側を更に30㎝拡張している。当初プランをSI 05—A、1回目の改築プランをSI 05—B、2回目の改築プランをSI 05—C、3回目の改築プランをSI 05—Dとして記述する。

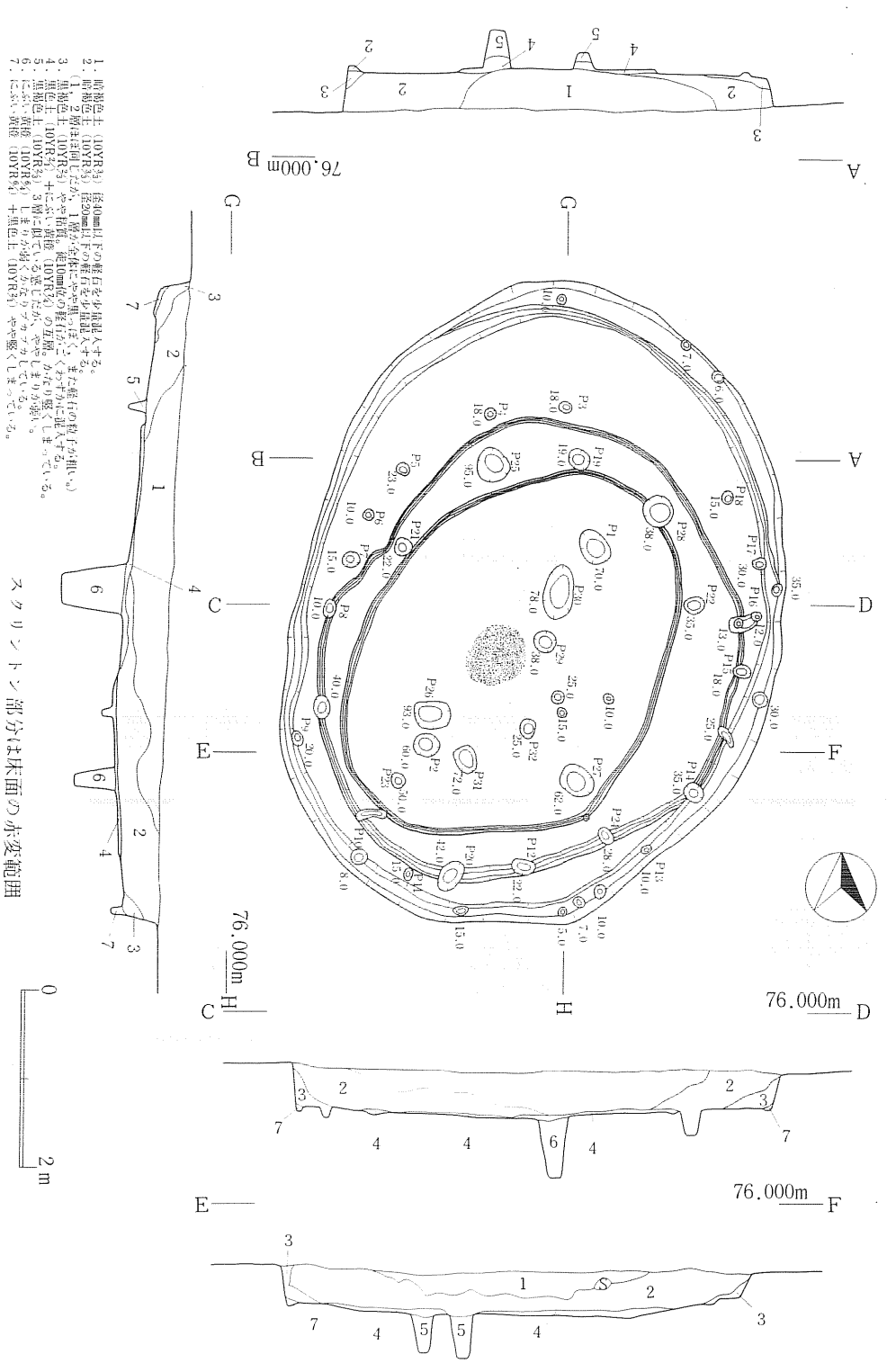
SI 05—A 竪穴住居跡　壁面は後の拡張のため欠失するが、壁溝が一巡しており、規模をうかがい知ることができる。長軸方位N—39°—E、長軸451㎝、短軸320㎝の楕円形プランを呈し、プラン確認面から床面までは40～52㎝の深さをはかる。主柱穴は、長軸線上のP_1とP_2が考えられる。一巡する壁溝は幅3～5㎝、深さ3～6㎝をはかる。また、壁溝の外側に30～60㎝離れて存在する柱穴P_3～P_{18}は、本住居跡壁外に穿たれた柱穴とも考えられる。

SI 05—B 竪穴住居跡　壁面は後の拡張のため欠失するが、一巡する壁溝から規模を推測できる。長軸方位N—15°—E、長軸540㎝、短軸450㎝の楕円形プランを呈する。SI 05—Aの床面より2～4㎝本プランの床面が高いため、Aの床面と柱穴P_1・P_2に貼床している。柱穴は、長軸方向にP_{19}とP_{20}を配し、直交するようにP_{21}とP_{22}、P_{23}とP_{24}を配置している。

SI 05—C 竪穴住居跡　壁面は、南半分を除いて後の拡張のため欠失するが、壁溝が一巡しており、規模を推測することができる。長軸方位N—14°—E、長軸700㎝、短軸530㎝の楕円形プランを呈する。SI 05—Bの床面より2～6㎝本プランの床面が高いため、BプランとAプランの壁外柱穴を貼床している。柱穴は、P_{25}～P_{28}が、長方形に配置される。壁溝は、幅6～10㎝、深さ2～6㎝で一巡する。

SI 05—D 竪穴住居跡　長軸方位N—13°—E、長軸740㎝、短軸549㎝の楕円形プランを呈する。主柱穴配置は、Cプランをそのまま踏襲するが、壁下方に小径の柱穴が穿たれている。

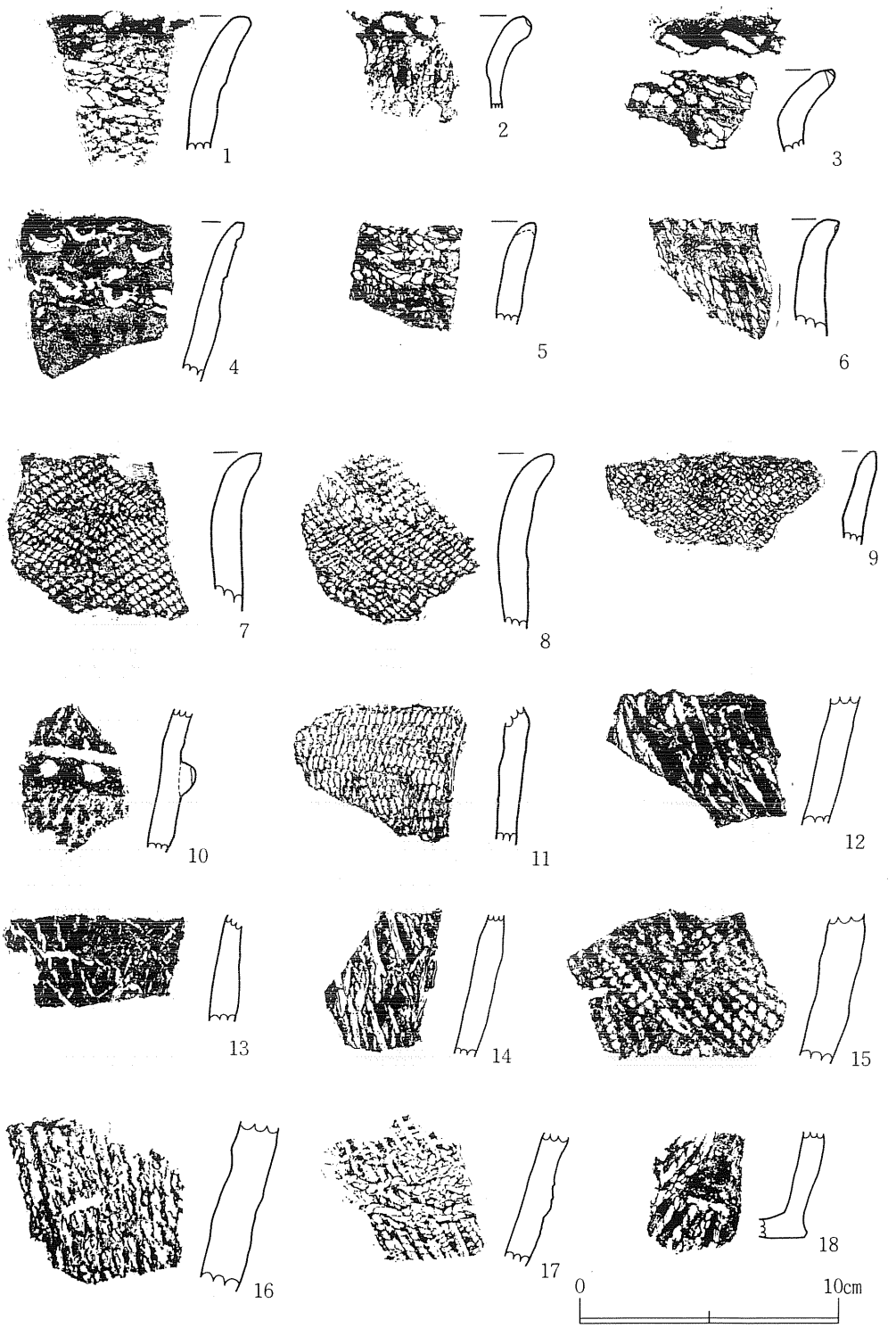
以上、各プランについて述べたが、いずれにも炉・焼土は検出できなかった。遺物は、埋土中から少量の円筒下層式土器の破片と、横型石匙1点（1）、縦型石匙1点（2）、円形岩板1点（3）、磨製石斧2点（4・5）、石錘2点（6・8）、半円状扁平打製石器破片1点(7)が出土した。



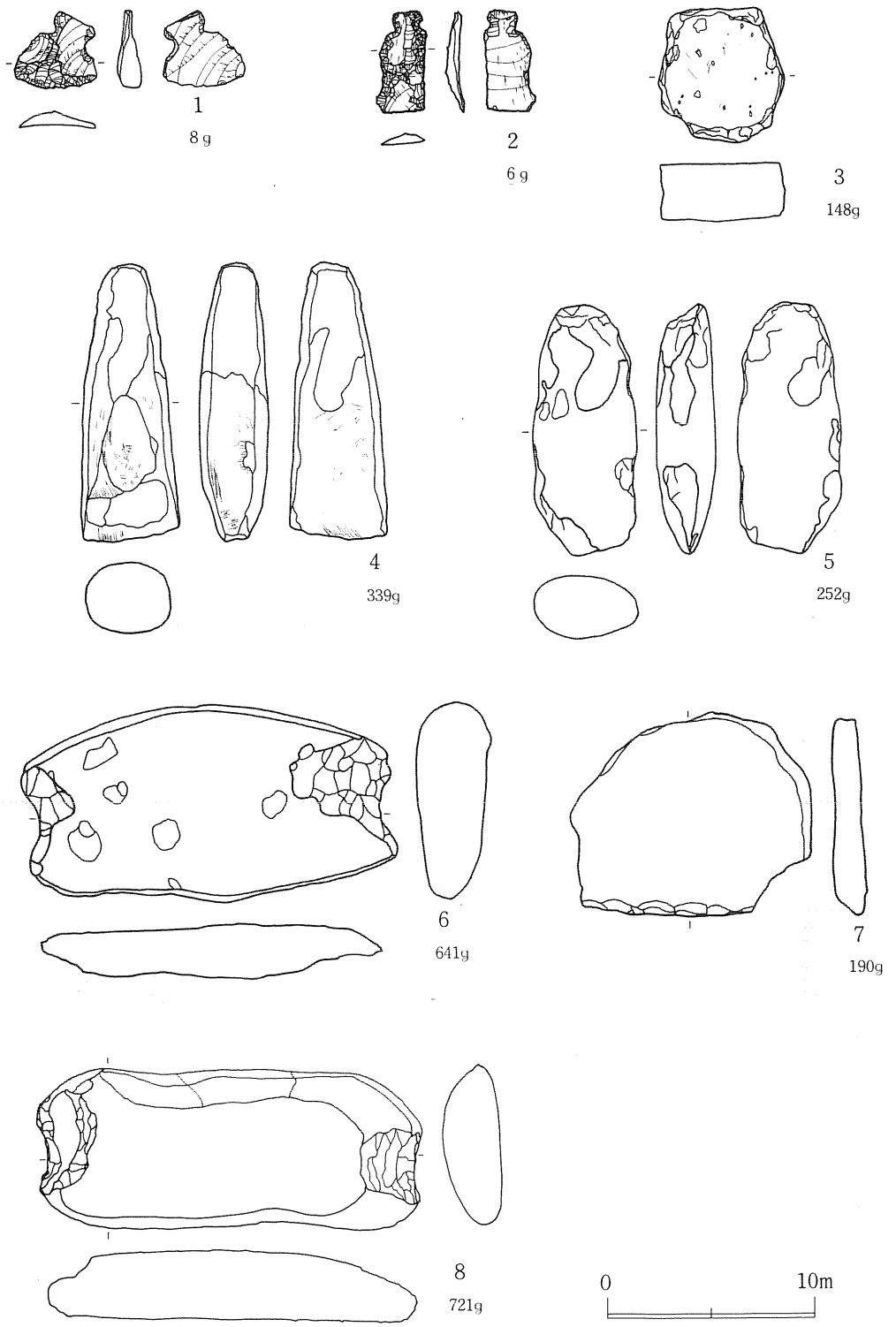
1．暗褐色土（10YR3/3）（径40mm以下の礫石を少量混入する。）
2．暗褐色2層（径同じだが、やや粘質。径10mm以下の礫（白っぽい。）を少量混入する。）
3．黒色土（10YR2/1）＋にぶい黄褐（10YR6/3）の互層。（ブロックに混入する。）
4．黒褐色土（10YR3/2）＋にぶい黄褐（10YR6/3）の互層に近いが、やや粘質。
5．黒褐色土（10YR3/1）＋3層に似ているが、しまりが強い。
6．にぶい黄褐（10YR6/3）＋黒色土（10YR2/1）やや暗くしまっている。
7．にぶい黄褐（10YR6/3）

スクリントン部分は床面の赤変範囲

第110図　SI05竪穴住居跡実測図



第111図　SI05竪穴住居跡出土土器拓影図



第112図　SI05竪穴住居跡出土石器・石製品実測図

SI06 竪穴住居跡　（第113図～第116図、図版22）

ME 48 ～ 50、MF 48 ～ 50 の第Ⅴ層上面で検出し、西側で SI 13 竪穴住居跡と重複するが、本住居跡が古い。長軸方位 N— 25° —W、長軸 745 ㎝、推定短軸 600 ㎝の楕円形あるいは隅丸長方形プランを呈する竪穴住居跡である。プラン確認時には、住居プランの中央部がにぶい黄橙色を呈するシラス分解砂と軽石粒を多量に混入する黒褐色土で円形を呈し、周囲をリング状に黒褐色土が巡る状況であった。プラン確認面から床面までは 22 ～ 42 ㎝をはかり、埋土は 9 層に分層されたが、軽石粒の混入が多い。

柱穴は、床面中央部に方形に配置される P_1～P_8 が主柱穴、壁下に沿うように穿たれている P_{10}～P_{22} が副（支）柱穴と考えられる。P_9 は、直径 70 ㎝、深さ 28 ㎝の円筒状を呈するピットで、貯蔵等の用途が考えられる。床面は堅く踏み固められている。東側壁下方に、長さ 40 ～ 50 ㎝、幅 20 ㎝、厚さ 20 ～ 25 ㎝の自然石などが階段状に積み重ねられていた。また、中央部の柱穴 P_5 近くの床面に長さ 40 ㎝、幅 30 ㎝の不整方形を呈し、厚さ 5 ～ 8 ㎝の扁平な自然石が出土しており、台石と思われる。炉・焼土は検出されなかった。

遺物は、埋土中から円筒下層式土器の破片多数と、石錐 1 点（20）、箆状石器 1 点（21）、磨製石斧刃部破片 1 点（22）、半円状扁平打製石器 1 点、たたき石 1 点が、また床面上から石錘 1 点（23）が出土した。

SI07 竪穴住居跡　（第17図、図版23）

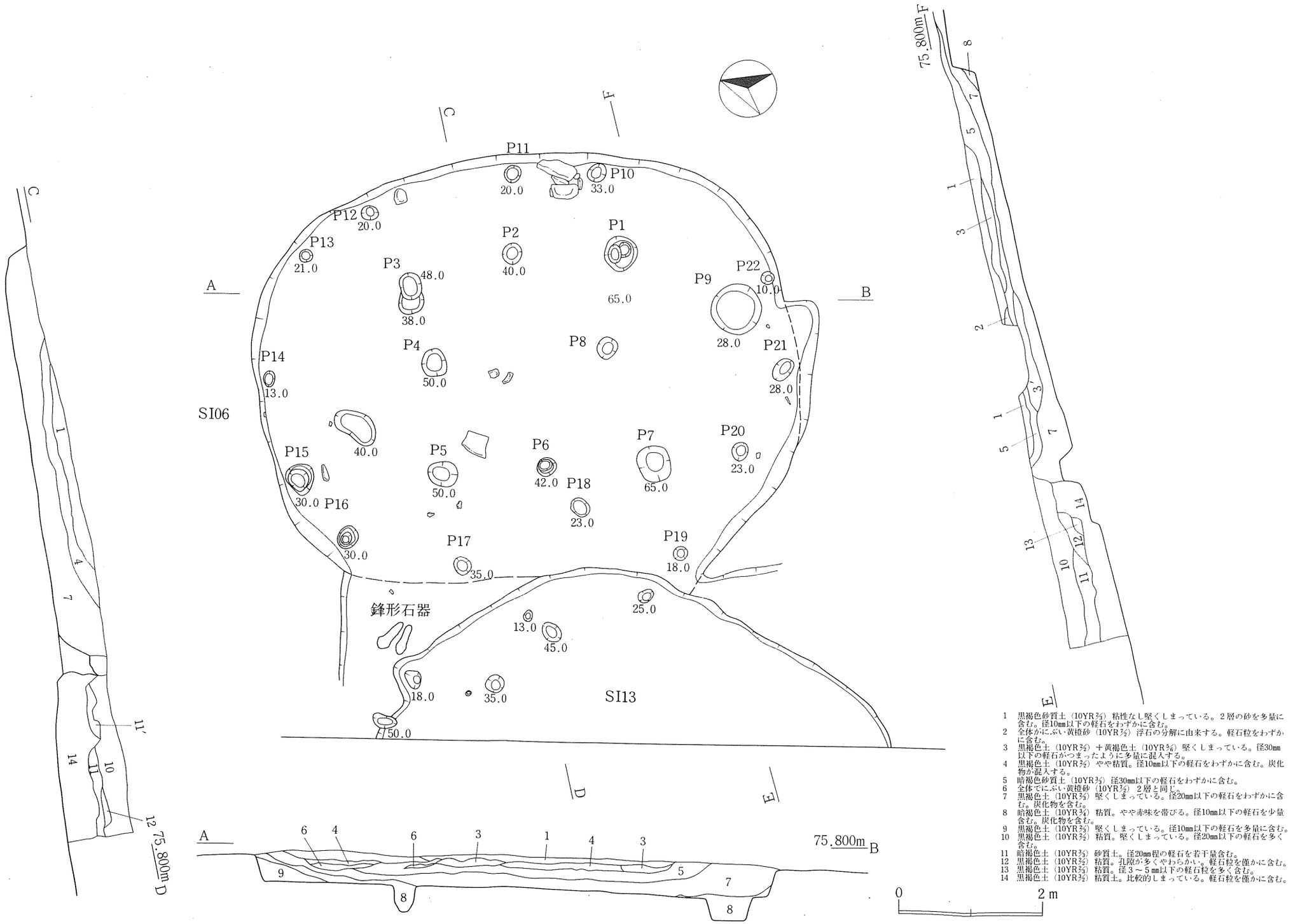
MB 47、MC 47 ・ 48 の第Ⅴ層中でプランを検出したが、掘りすぎのため南側壁面を欠失した。住居跡の規模は、南側壁面欠失のため若干誤差を生じるが、長軸方位 N— 7° —E、長軸 480 ㎝、短軸 420 ㎝の楕円形プランを呈し、壁高は 8 ～ 14 ㎝をはかる。床面は、非常によく踏み固められて平坦である。柱穴及び柱穴様ピットは 11 カ所検出した。P_1、P_3～P_5、P_9～P_{11} の 7 カ所は深く穿たれているものの、P_1・P_9～P_{11}、P_3～P_5 の 2 つの区域に集中し、規則性は認められない。

また、北東側の床面で長軸 70 ㎝、短軸 44 ㎝の卵形プランを呈する深さ 18 ㎝の掘り込みを検出した。その東側壁面寄りに、台石あるいは出入口用踏台と思われる長さ 50 ㎝、幅 38 ㎝の楕円形を呈し厚さ 8 ～ 15 ㎝の自然石が出土した。

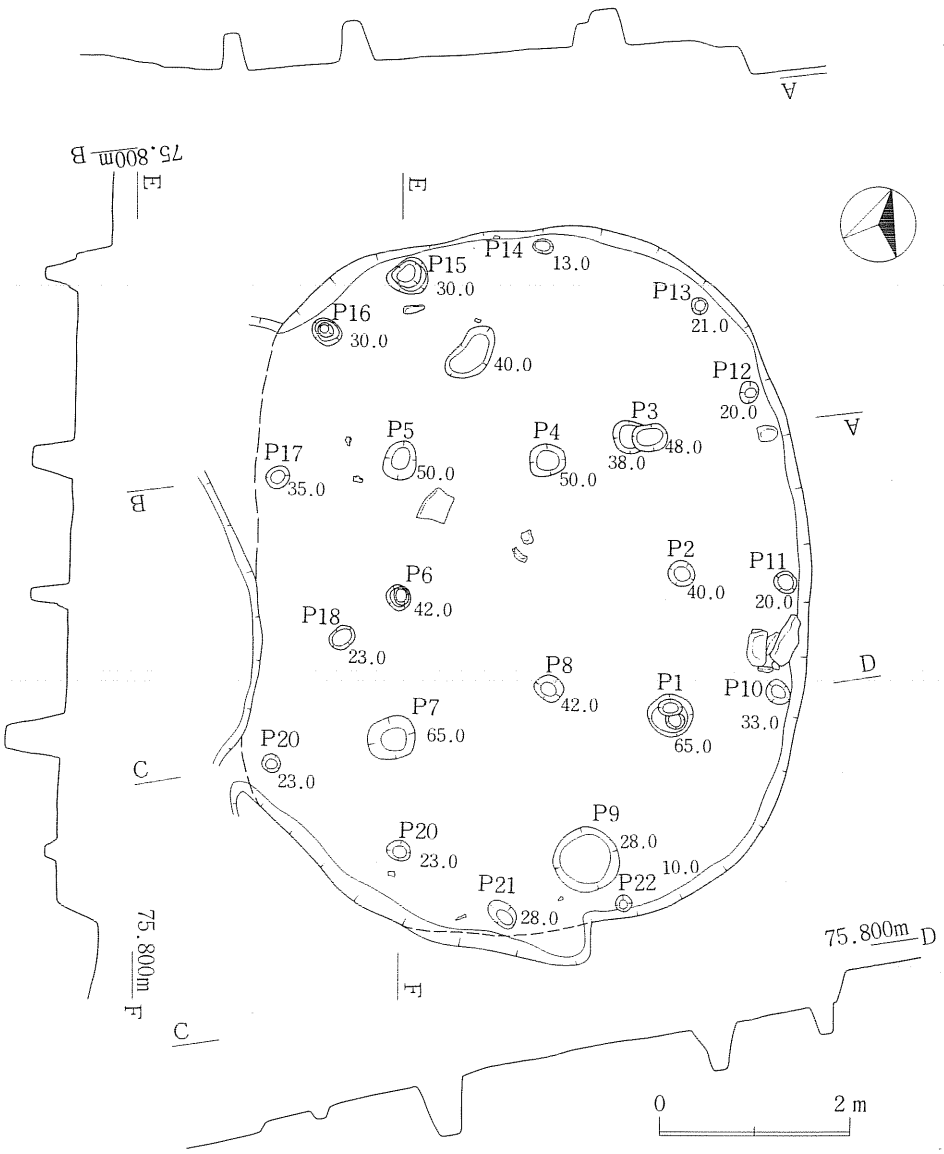
遺物は前述の自然石 1 点のみである。

SI08 竪穴住居跡　（第118図～第122図、図版24）

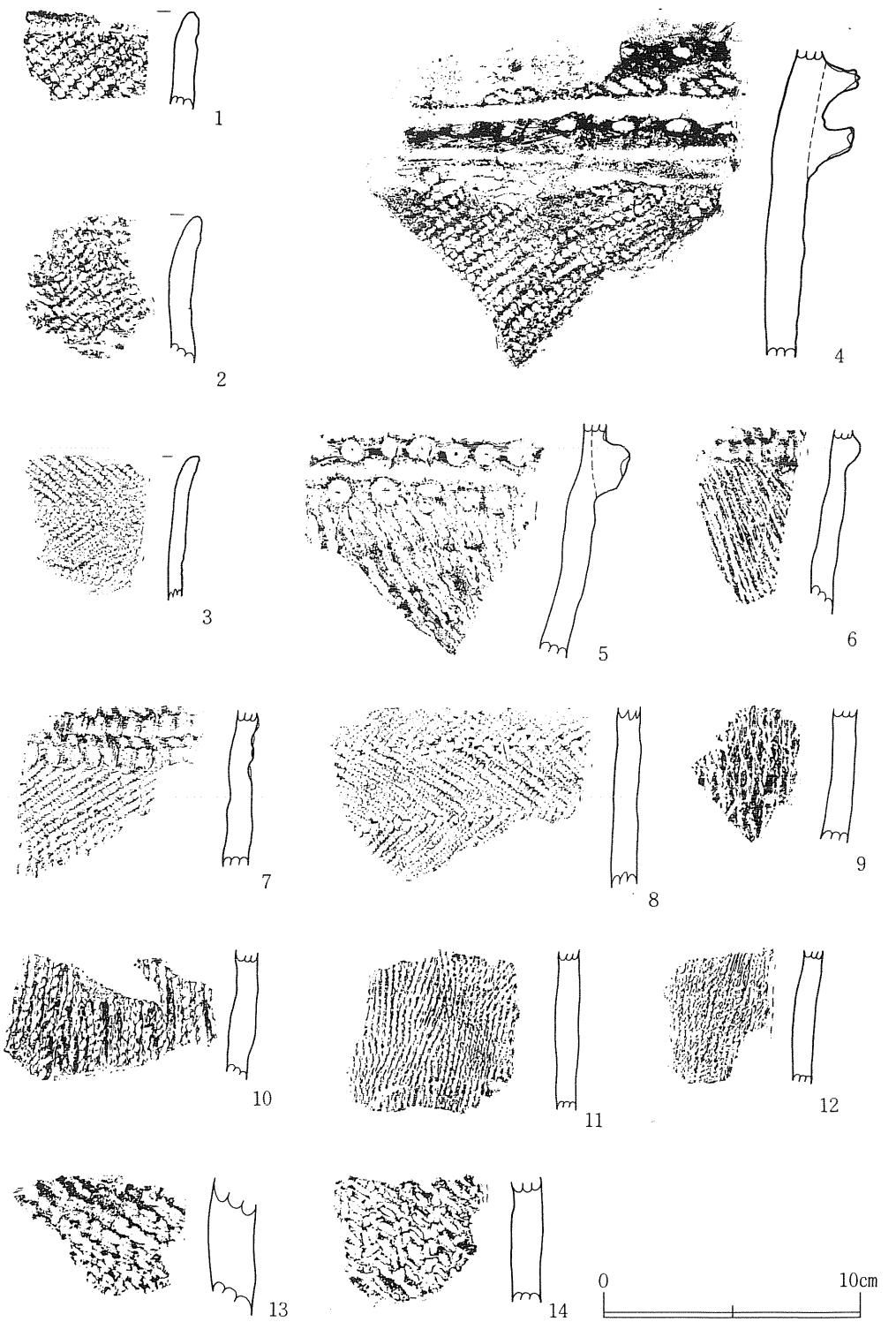
MC 50 ・ 51、MD 50 ・ 51、ME 50 ・ 51 の第Ⅴ層上面で、SI 14 竪穴住居跡と重複して検出されたが SI 14 竪穴住居跡の埋没後に本住居跡が掘り込まれたことが平面プランと土層断面観察で確認された。しかし、SI 14 竪穴住居跡の埋土も本住居跡の埋土も、ともに再堆積したシラスであったため、必ずしも個々のプランを把えることができず、規模・形状を推定せざるを得ない。



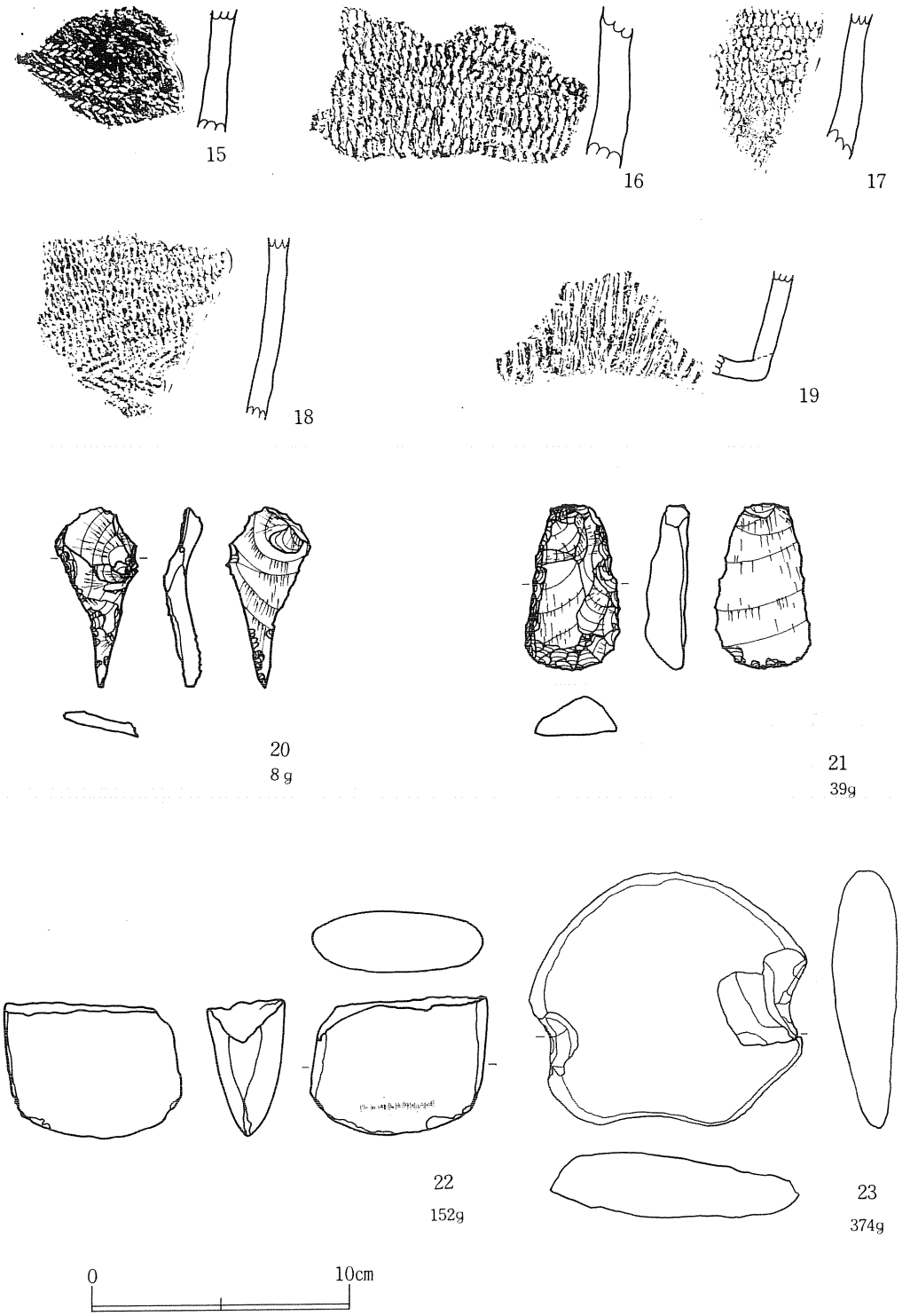
第113図　SI06・13竪穴住居跡実測図



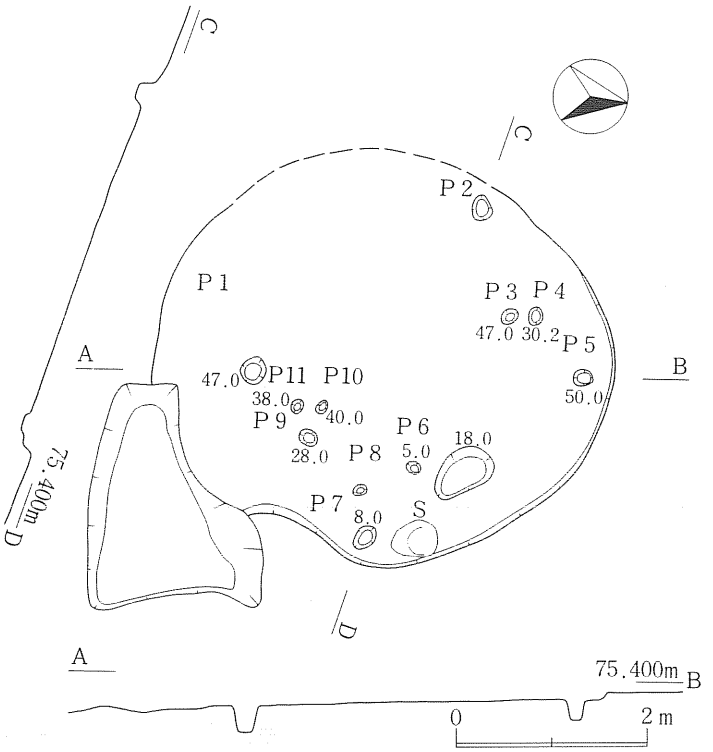
第114図　SI06竪穴住居跡実測図



第115図　SI06竪穴住居跡出土土器拓影図（1）



第116図　SI06竪穴住居跡出土土器拓影図（２）・出土石器実測図



第117図　SI07竪穴住居跡実測図

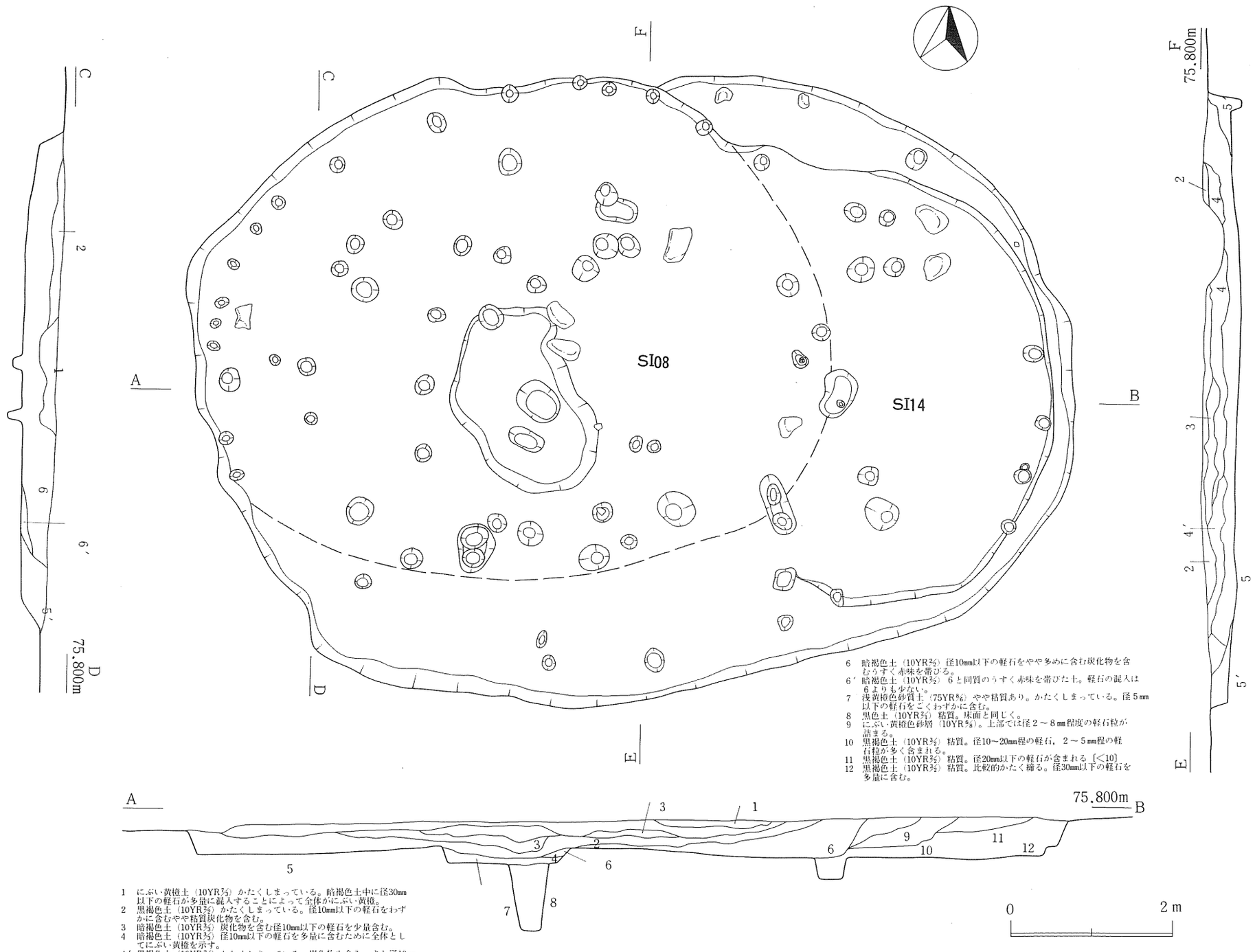
長軸方位N—80°—E、推定長軸800㎝、推定短軸610㎝の楕円形プランを呈し、プラン確認面から床面までの深さは28～38㎝である。第Ⅶ層を床面としているため、他の竪穴住居跡の床面よりも軟かい。柱穴及び柱穴様ピットは多数検出されているが、中央部のP_1が主柱穴、壁下方に存在するP_2～P_{17}は側柱穴と思われる。炉・焼土は検出されなかった。

遺物は、埋土中から多数の円筒下層式土器の破片の他、箆状石器1点（30）、石錘2点（35・36）、くぼみ石1点（38）、半円状扁平打製石器2点（39・40）、すり石（41）の他、円形岩版（33）、鋒形石器の破片かとも考えられる打割・研磨した石器破片（34）が出土している。また、サイドスクレーパーもしくは他の石器の破片2点（31・32）も出土した。

SI11 竪穴住居跡　（第123図～第127図、図版25）

SI 11竪穴住居跡は、Aトレンチ掘り下げの際に壁面の一部が確認されていたが、SI 12竪穴住居跡と重複し、LT 46・47、MA 46～49、MB 46～49の第Ⅴ層上面でプラン確認できた。南側を農道開削のため削平されているが、SI 12との新旧関係は、SI 11竪穴住居跡がSI 12竪穴住居跡の東側壁面を削平し、かつ柱穴に貼床していることから本住居跡が新しい。

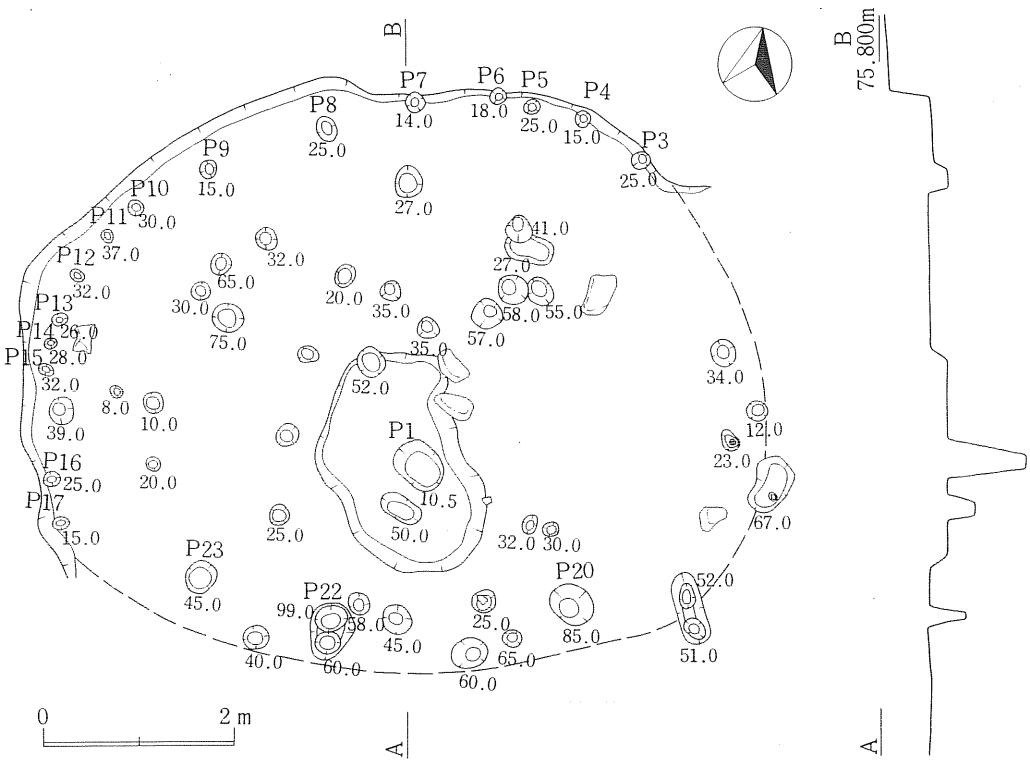
また、SI 11竪穴住居跡は、改築が行われており、当初位置から北西側に約280㎝移動させている。当初構築されたプランをSI 11—A、改築されたプランをSI 11—Bとして記述する。



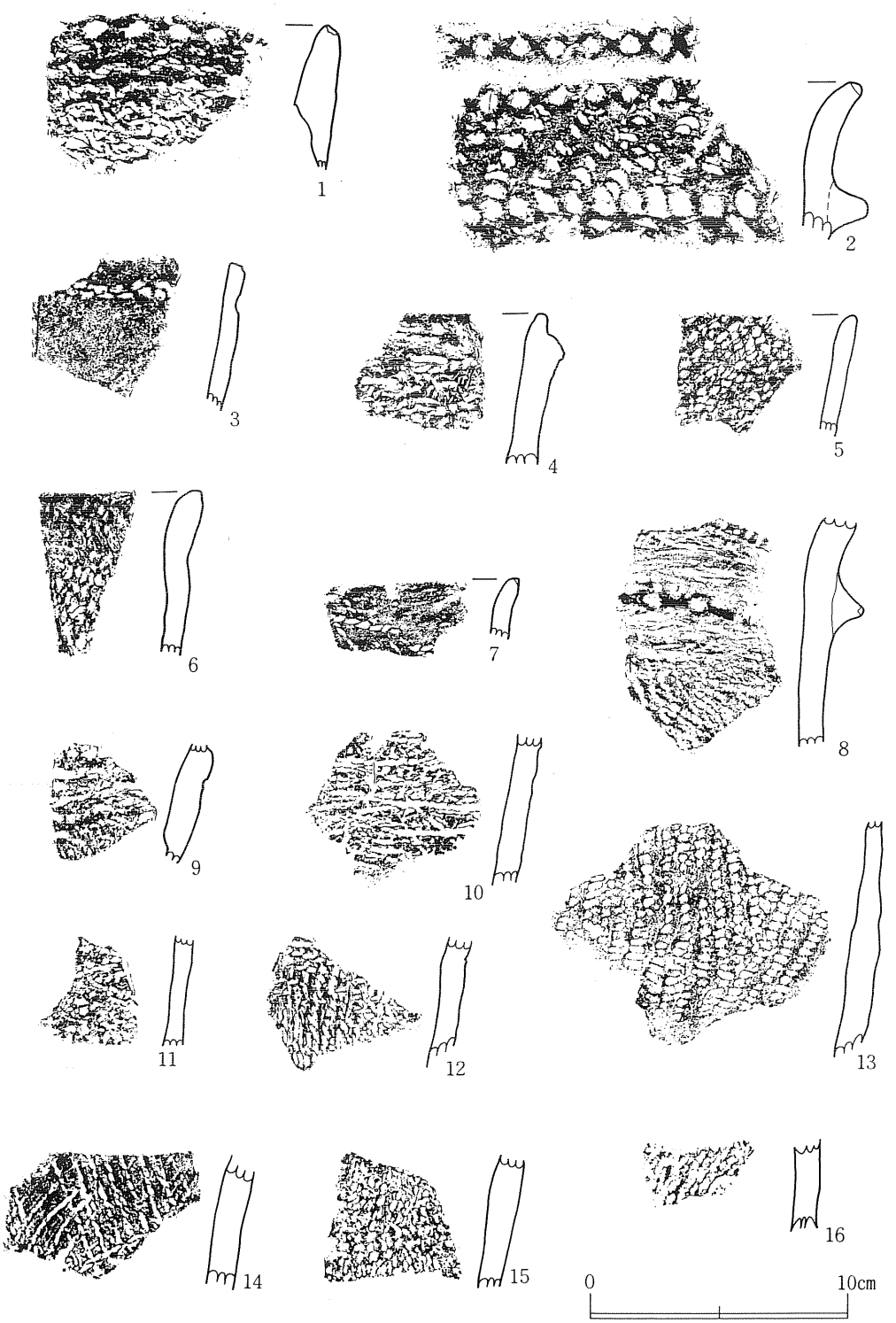
6　暗褐色土（10YR3/3）径10mm以下の軽石をやや多めに含む炭化物を含むうすく赤味を帯びる。
6′ 暗褐色土（10YR3/2）６と同質のうすく赤味を帯びた土。軽石の混入は６よりも少ない。
7　浅黄橙色砂質土（75YR8/6）やや粘質あり。かたくしまっている。径５mm以下の軽石をごくわずかに含む。
8　黒色土（10YR2/1）粘質。床面と同じく。
9　にぶい黄橙色砂層（10YR6/4）。上部では径２～８mm程度の軽石粒が詰まる。
10　黒褐色土（10YR3/2）粘質。径10～20mm程の軽石，２～５mm程の軽石粒が多く含まれる。
11　黒褐色土（10YR3/2）粘質。径20mm以下の軽石が含まれる（<10）
12　黒褐色土（10YR3/2）粘質。比較的かたく締る。径30mm以下の軽石を多量に含む。

1　にぶい黄橙土（10YR7/3）かたくしまっている。暗褐色土中に径30mm以下の軽石が多量に混入することによって全体がにぶい黄橙。
2　黒褐色土（10YR3/2）かたくしまっている。径10mm以下の軽石をわずかに含むやや粘質炭化物を含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）炭化物を含む径10mm以下の軽石を少量含む。
4　暗褐色土（10YR3/3）径10mm以下の軽石を多量に含むために全体としてにぶい黄橙を示す。
4′ 黒褐色土（10YR2/2）かたくしまっている。炭化物を含み，また径10mm以下の軽石を少量含む。
5　黒色土（10YR2/1）かたくしまっている。径20mm以下の軽石を少量含む炭化物を含む。
5′ 黒褐色土（10YR3/2）しまりやや弱い。径10mm以下の軽石をごくわずかに含む。

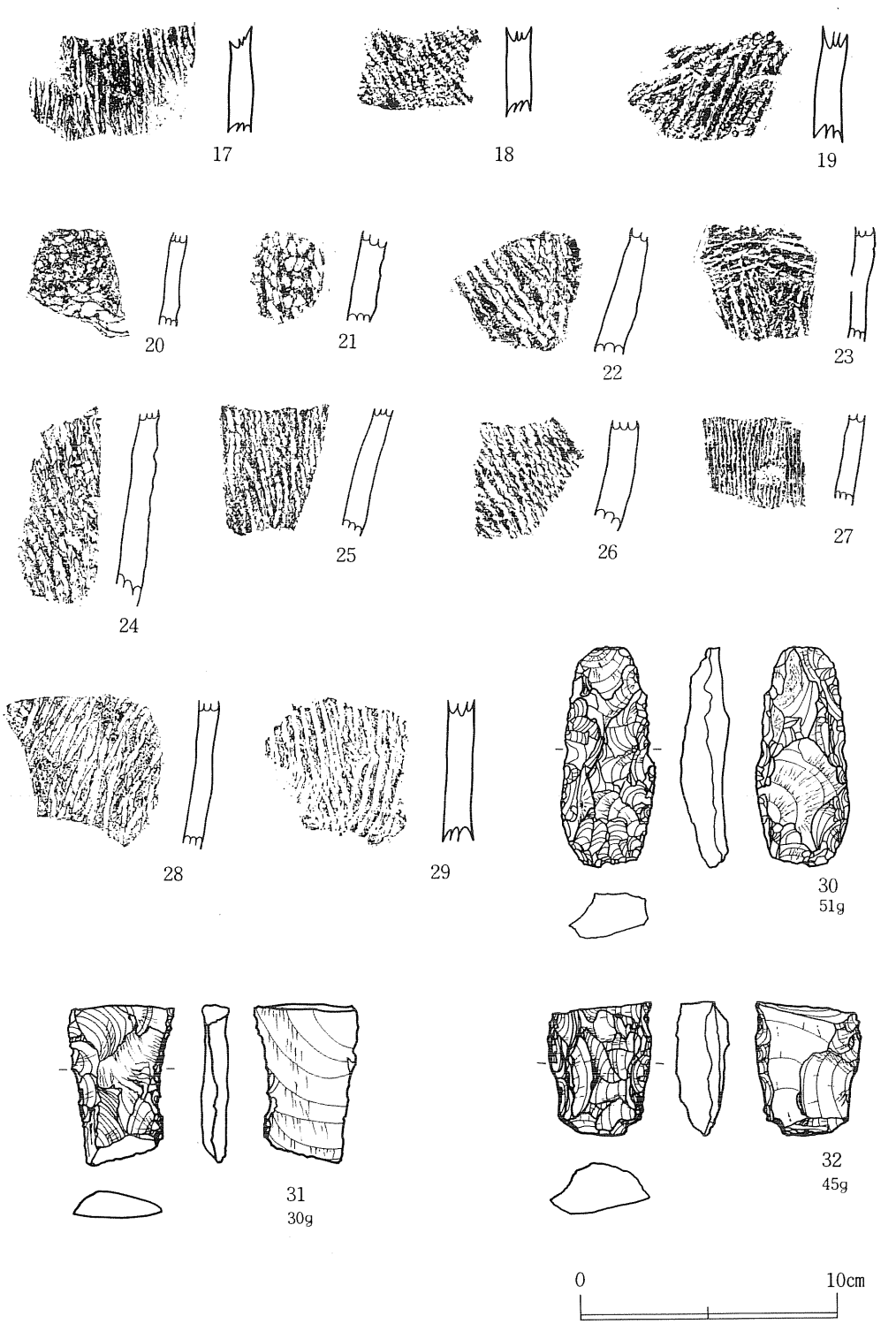
第118図　SI08・14竪穴住居跡実測図



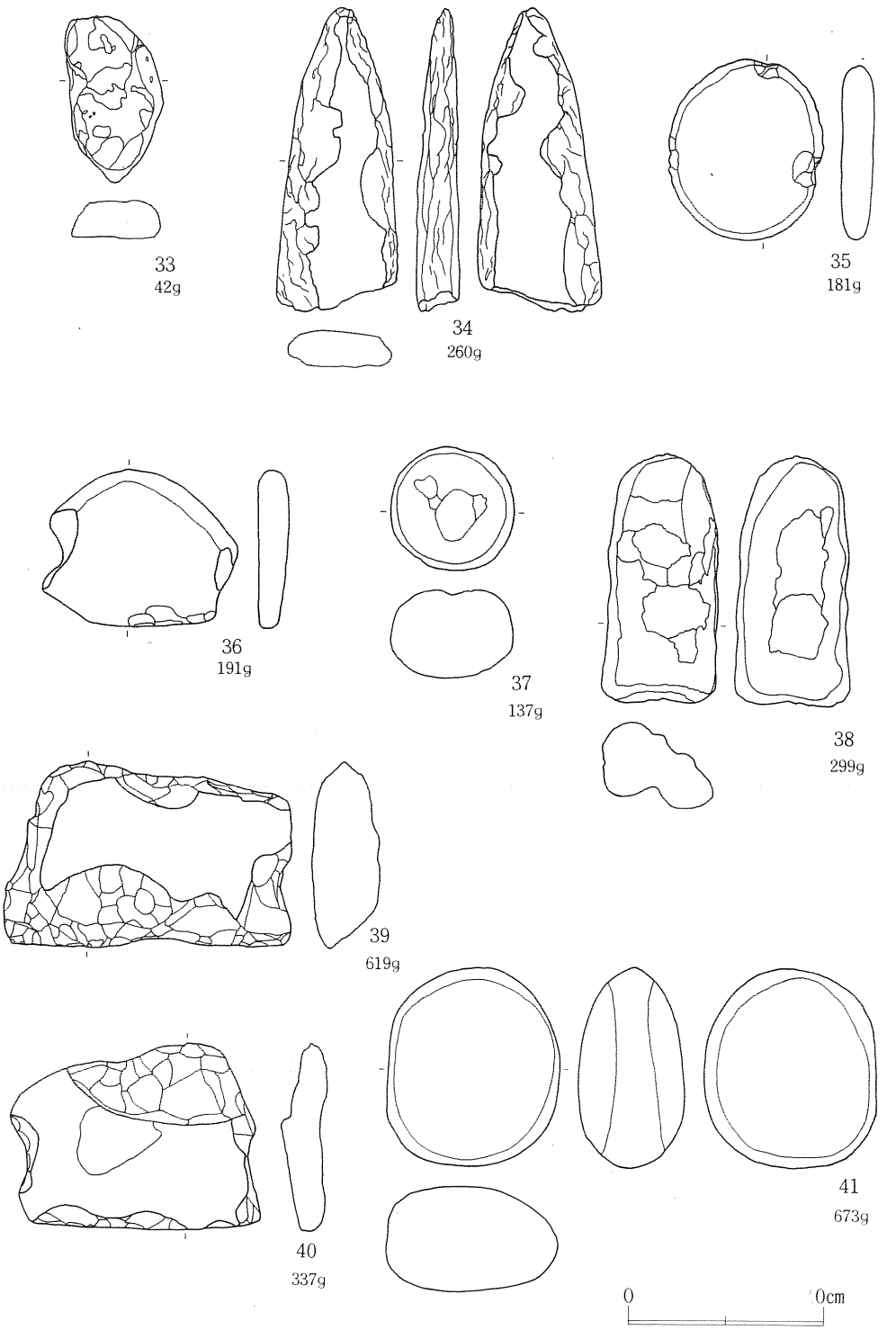
第119図　SI08竪穴住居跡実測図



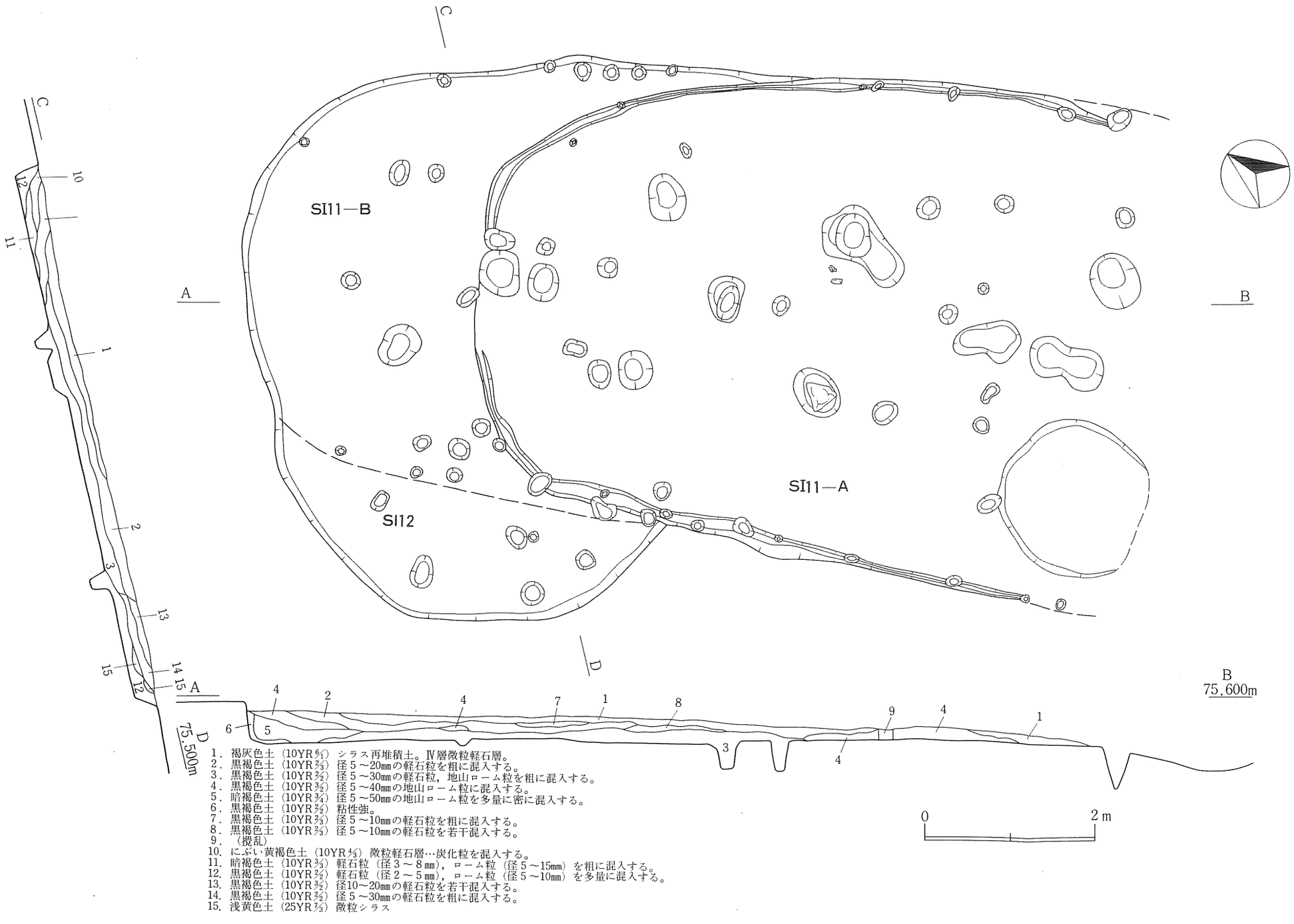
第120図　SI08竪穴住居跡出土土器拓影図（1）



第121図　SI08竪穴住居跡出土土器拓影図（２）・石器実測図（１）



第122図　SI08竪穴住居跡出土石器・石製品実測図（2）



第123図　SI11・12竪穴住居跡実測図

SI 11 —A 竪穴住居跡　　南側が削平されているので規模は明確ではないが、長軸方位 N—30° —W、現長 750 ㎝、最大幅 580 ㎝の長楕円形あるいは胴張りのある長辺をもつ長方形プランを呈する。柱穴は、長軸方向に 3 列（東側に P_1～P_5、西側に P_6～P_8、中央に P_9～P_{13}）並んでおり、中央の P_9～P_{13} が主柱穴列、その東西 2 列が副（支）柱穴列と考えられる。柱穴内の埋土は人為的に埋められた地山土の再堆積土で間隙が大きいが、上部を 1 ～ 2 ㎝の厚さで堅く踏み固められた地山土で貼床されていた。

プラン確認面から床面までの深さは 15 ～ 50 ㎝であるが、A トレンチ壁面での計測では 47 ～ 55 ㎝である。

壁下には、幅 6 ～ 22 ㎝、床面からの深さ 3 ～ 12 ㎝の壁溝が、北西側短辺部分の 120 ㎝を除き巡らされている。壁溝内には、径の小さい柱穴様ピットが多く検出されたが、11 —A に属するか 11 —B に属するか判断できなかった。拡張部分に掘り込まれている壁溝部分には柱穴同様貼床がなされていた。炉その他の付属施設は検出できなかった。また遺物も出土しなかった。

SI 11 —B 竪穴住居跡　　SI 11 —A 竪穴住居跡の長軸を約 280 ㎝北西側に拡張しており、現長 1030 ㎝の長楕円形あるいは隅丸長方形プランを呈する。柱穴は、長軸方向に 2 列（東側柱列 P_{14}～P_{17}、西側柱列 P_{18}～P_{20}）7 本（1 個は円形の攪乱部分に存在したと思われる。）が検出され、2 個 1 対となって配置されている。SI 11 —A の柱穴に比較して直径・深さとも大きい。

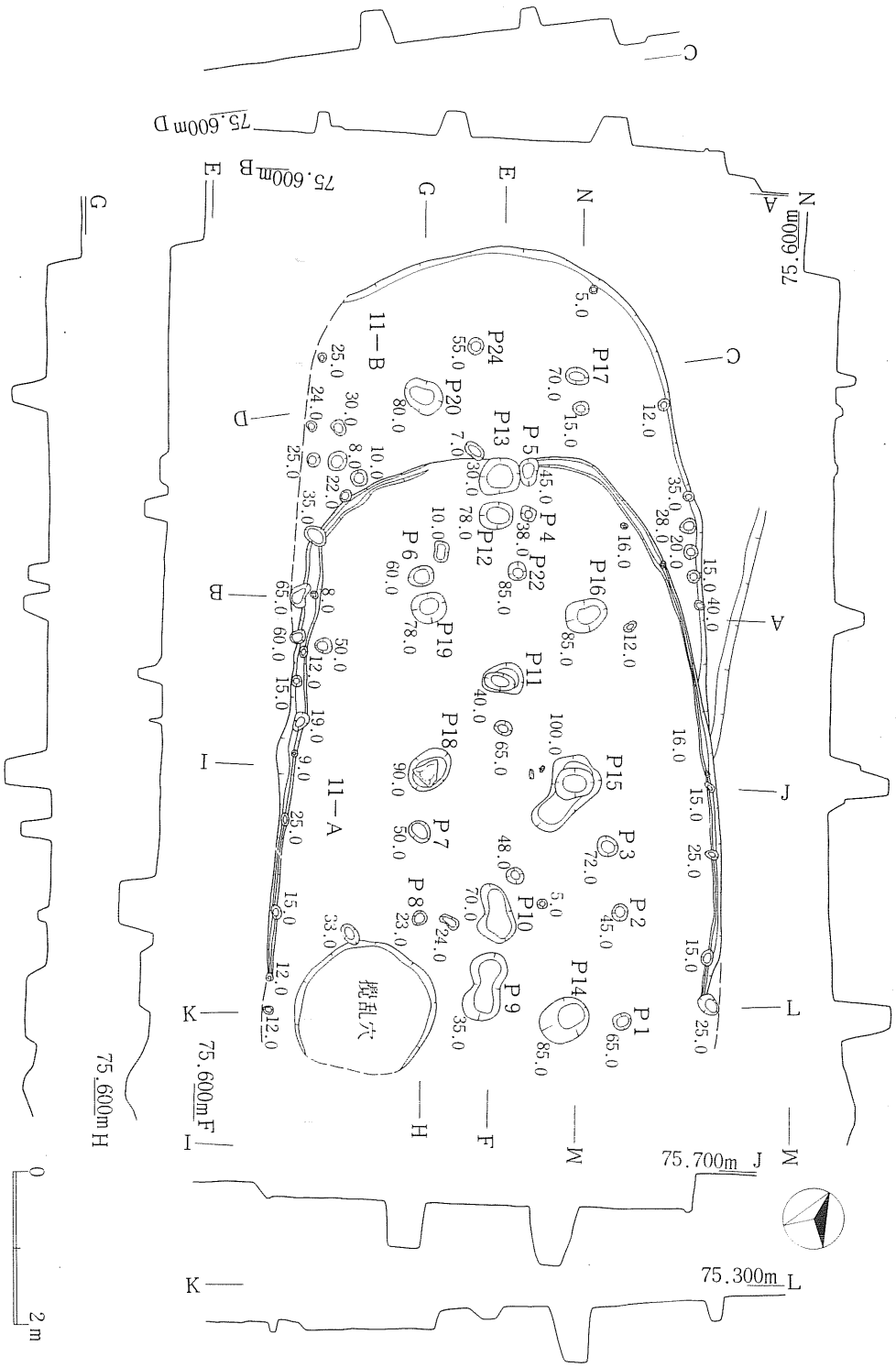
壁下の床面には、径の小さい柱穴様ピットが穿たれているが、配列に規則性を認めない。床面は堅く踏み固められて平坦である。炉その他の付属施設は検出できなかった。

埋土中から円筒下層式土器の破片多数と石器〔横型石匙 1 点（1）、縦型石匙 2 点（2,3）、箆状石器破片 1 点（5）、半円状扁平打製石器 2 点（6,7）、剥片 1 点（4）〕が出土しているが、床面上からの遺物出土はない。

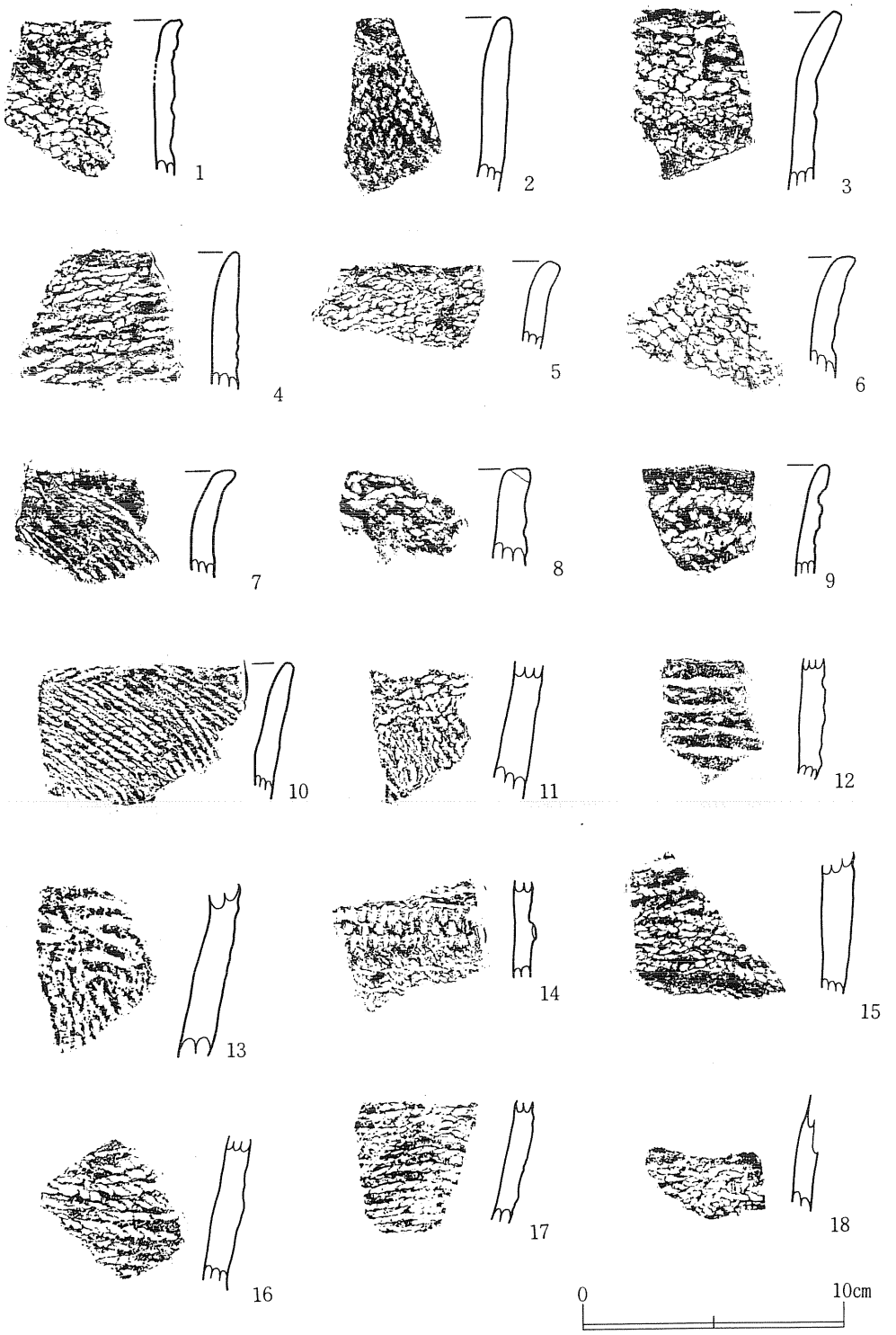
SI12 竪穴住居跡　（第 128 図、図版 25）

東側の大部分を SI 11 竪穴住居跡に削平されているため、正確なプラン、規模は不明であるが、残存する壁面と柱穴配列から長軸方位 N— 44° —E、長径 490 ㎝、短径 470 ㎝の略円形プランと思われる。柱穴は、P_{21}～P_{24} が主柱穴と思われるが、P_{22}、P_{24} は SI 11 —B 竪穴住居構築時に上部を貼床されている。西側にわずかに残る床面は、凹凸が認められるが踏み固められて堅い。炉その他の施設は検出できなかった。プラン確認面から床面までの深さは、22 ～ 32 ㎝である。

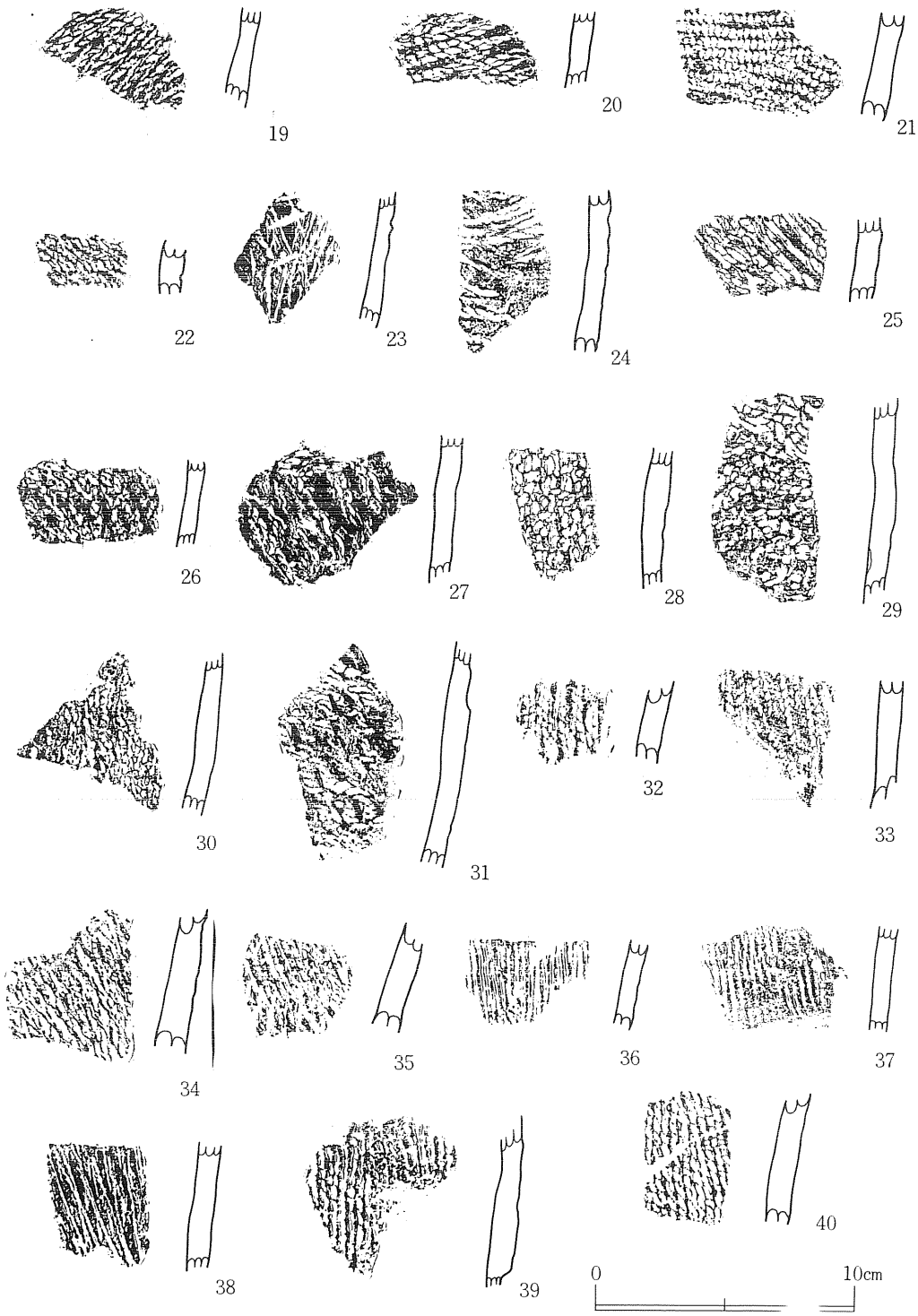
残存部分の埋土は、3 層に分けられ、微粒軽石を疎に混入している。遺物は出土しなかった。



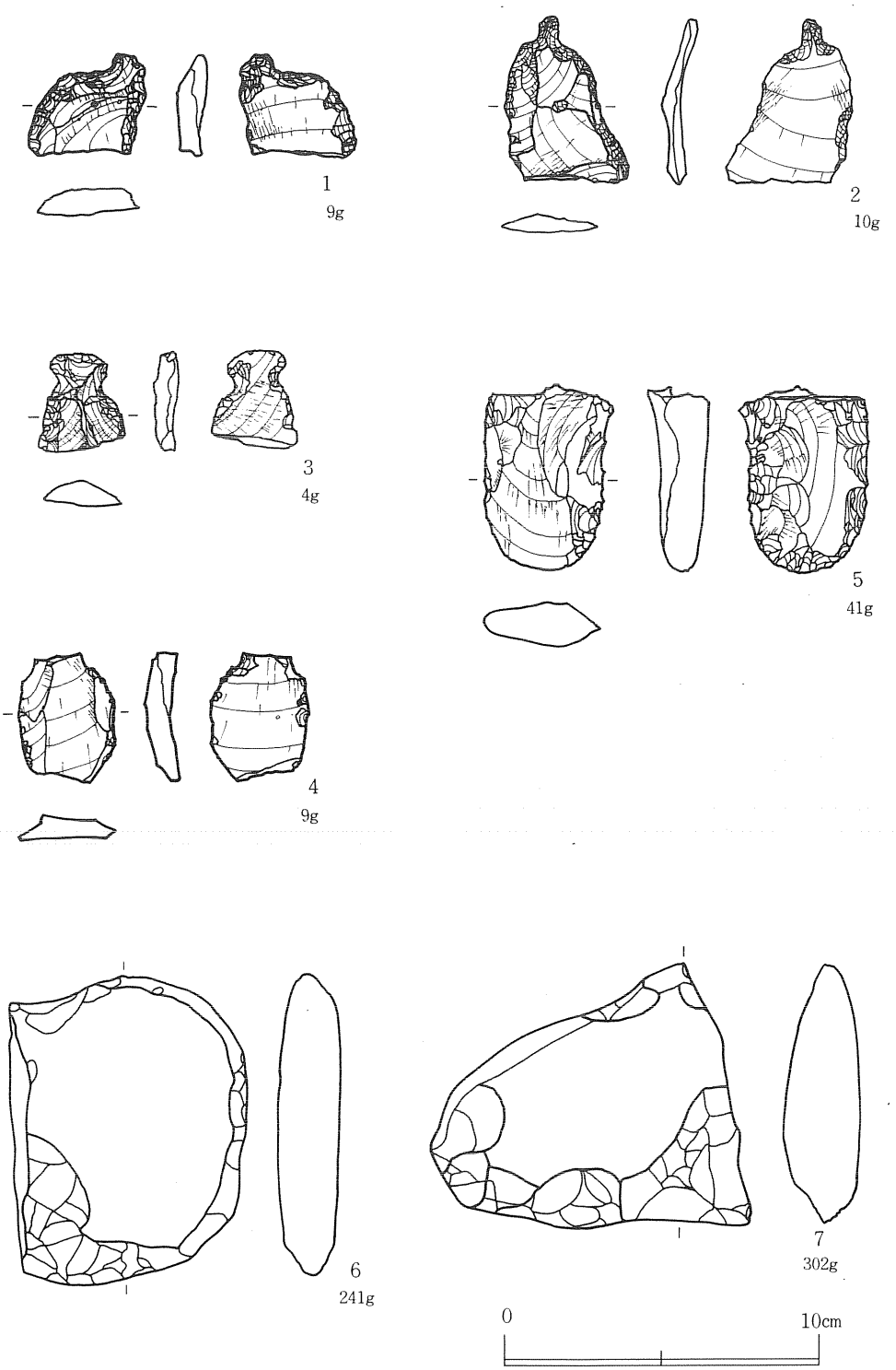
第124図　SI11竪穴住居跡実測図



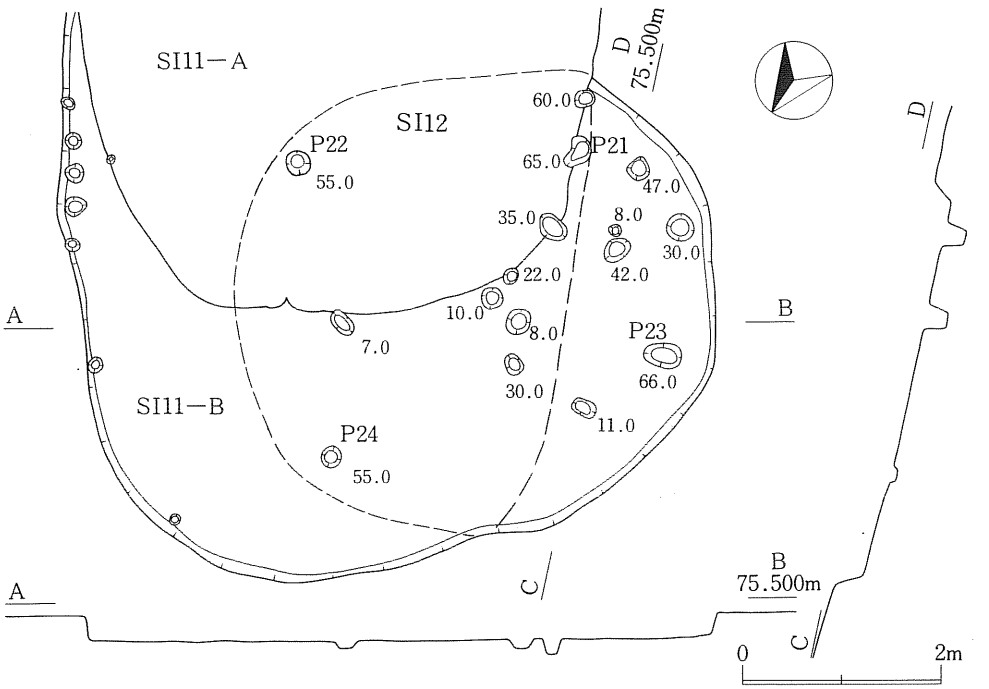
第125図　SI11竪穴住居跡出土土器拓影図（１）



第126図　SI11竪穴住居跡出土土器拓影図（2）



第127図　SI11竪穴住居跡出土石器実測図



第128図　SI12竪穴住居跡実測図

SI13 竪穴住居跡　（第 113 図・第 129 図、図版 23）

本調査で設定したＧトレンチの南側区域、MF 48 ～ 50、MG 48 ～ 50 で検出した。不法な土砂採取のため、西側の大部分が消滅し、東側のごく一部が長さ 714 ㎝、幅 244 ㎝の半円形に残るのみであるが、本来は東側に重複する SI 06 竪穴住居跡と同規模で、北東―南西に長軸方向をもつ楕円形あるいは隅丸長方形プランを呈するものと思われる。

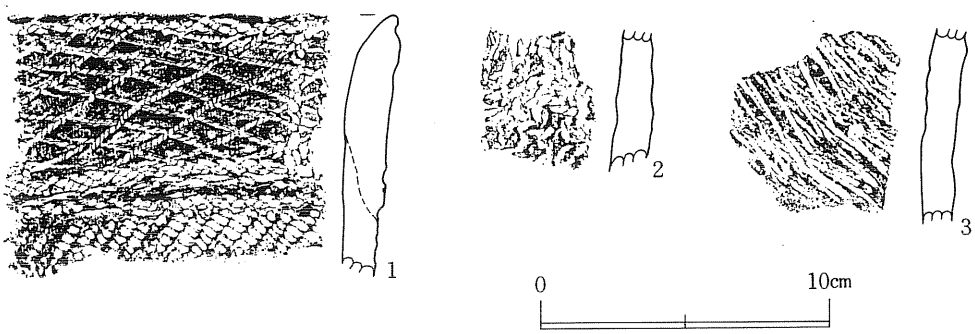
土層断面では、プラン確認面から床面まで 68 ㎝の壁高を記録しているが、降雪と凍結のため平面プラン検出が困難であったため掘りすぎ、壁面は 6 ～ 14 ㎝の高さに残るにすぎないが、第Ⅴ層から地山面まで掘りくぼめて構築している。

柱穴様ピットは、6 か所検出したが、主柱穴かどうか不明である。炉その他の付属施設は検出されなかった。埋土は、5 層に分けられたが微粒～細粒の軽石が全層に混入している。

遺物は、埋土中から円筒下層式土器の破片が 3 点出土したのみである。

SI14 竪穴住居跡　（第 130 図、図版 24）

MB 49 ～ 51、MC 49 ～ 51、MD 49 ～ 51 の第Ⅴ層上面では SI 08 竪穴住居跡と重複して検出したが、本住居跡が古い。長軸方位 N― 80° ―E、長軸 1,000 ㎝、短軸 755 ㎝の楕円形プランを呈する。プラン確認面から床面までの深さは、32 ～ 42 ㎝であるが、東側壁下方に幅 14 ～ 50



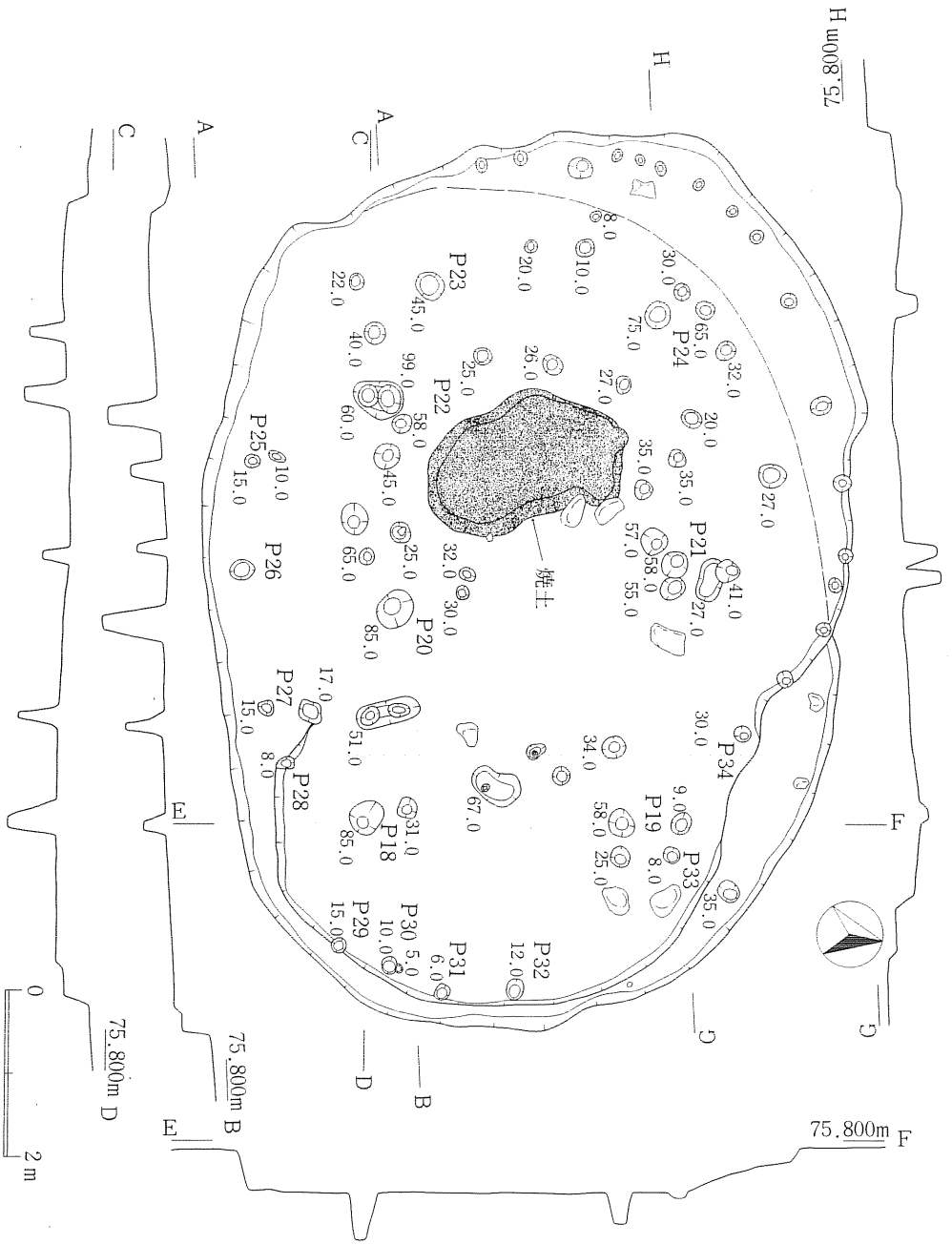
第129図　SI13竪穴住居跡出土土器拓影図

cm、高さ４～23 cmのテラスが巡っている。柱穴は、長軸方向に２列７本（P_{18}～P_{24}）の主柱穴の他、壁面に沿うようにP_{25}～P_{32}の側柱穴が穿たれている。炉は、地山面を長軸250 cm、短軸145 cmの楕円形に５cm程掘り込み、白色粘土を貼りつけていた。遺物は出土しなかった。

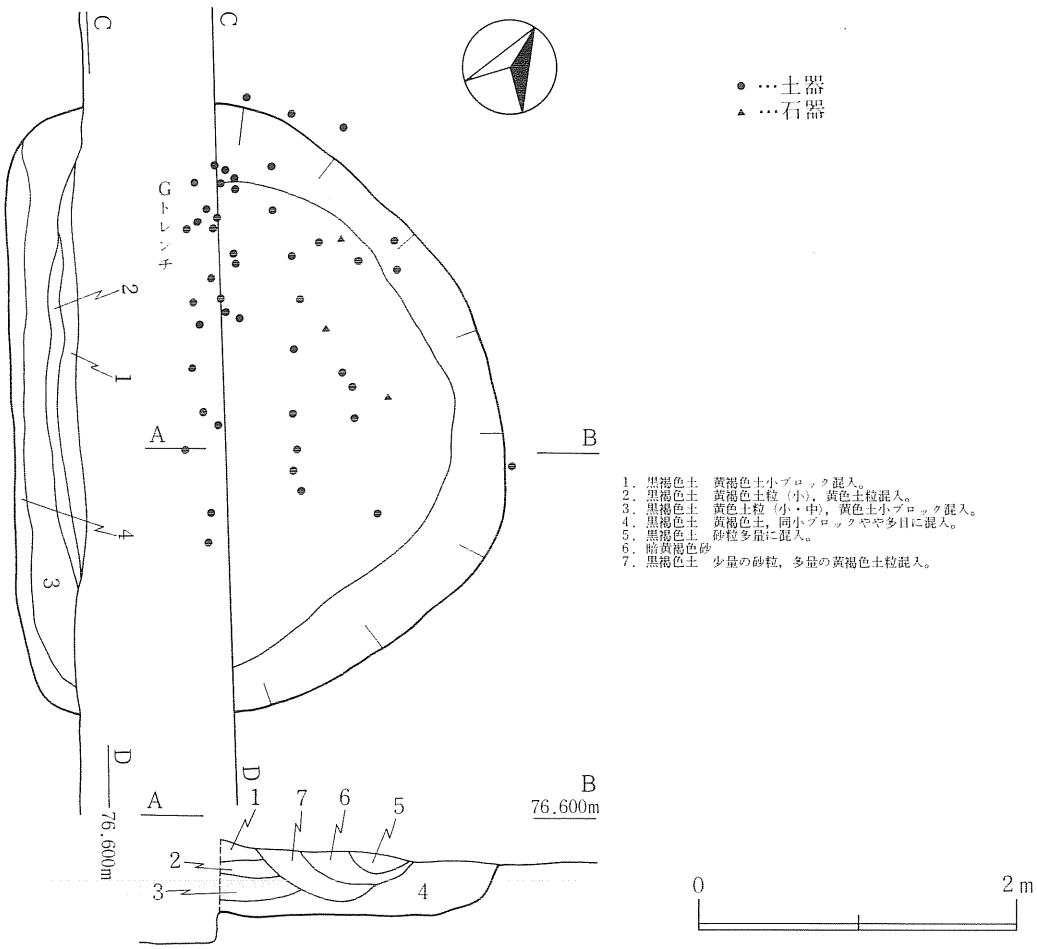
② 竪穴遺構

SKI04 竪穴遺構（第131図、第132図）

MG 51 グリッド杭を中心とする調査区西端に位置する。崖のため調査区西端に位置する。崖のため調査不能部分とＧトレンチにより掘り抜かれている部分があるため、調査範囲は全体の半分以下と推定される。プランが確認できたのは第Ⅳ層中であった。プランは、円形か、東西方向に長軸をもつ楕円形と推定される。調査部分の規模は、Ｇトレンチにより切られている部分が386 cm、それと直交する方向が196 cmを測る。床面は、Ⅴ層の黒褐色土で、踏み固められたような堅い面は観察されなかった。精査を行なったものの、柱穴、炉跡は検出されなかった。埋土は、黄色土粒、同小ブロックを含む黒褐色土を主体とする。出土遺物は、綾絡文、撚糸文が施文された土器片である。１は、口唇部に竹管状の工具による刻目文が施される。



第130図　SI14竪穴住居跡実測図



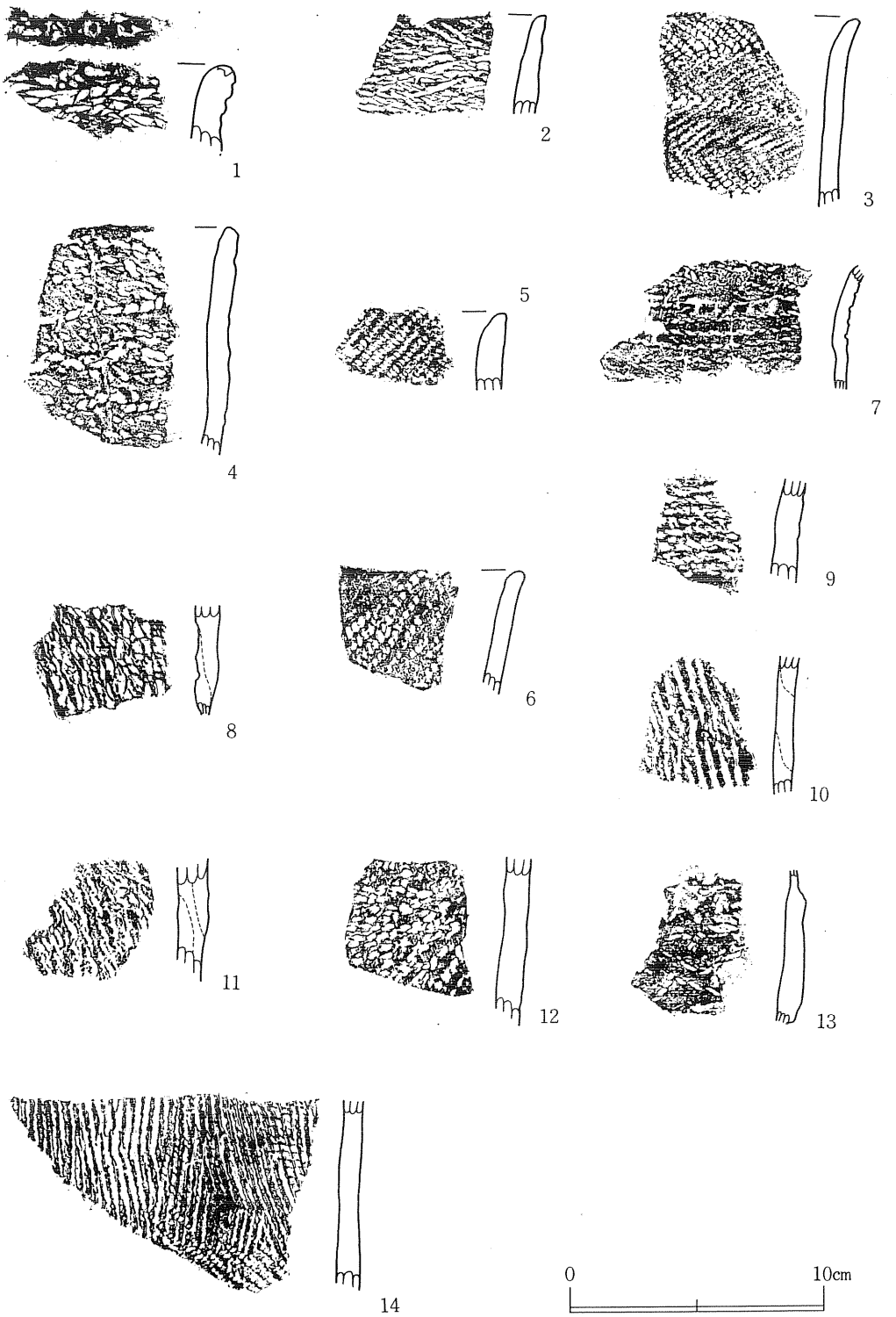
第131図　SKI04竪穴遺構実測図

③　各層出土の遺物　（第133図～第152図、第154図～第156図、図版39、図版40、図版47～図版54）

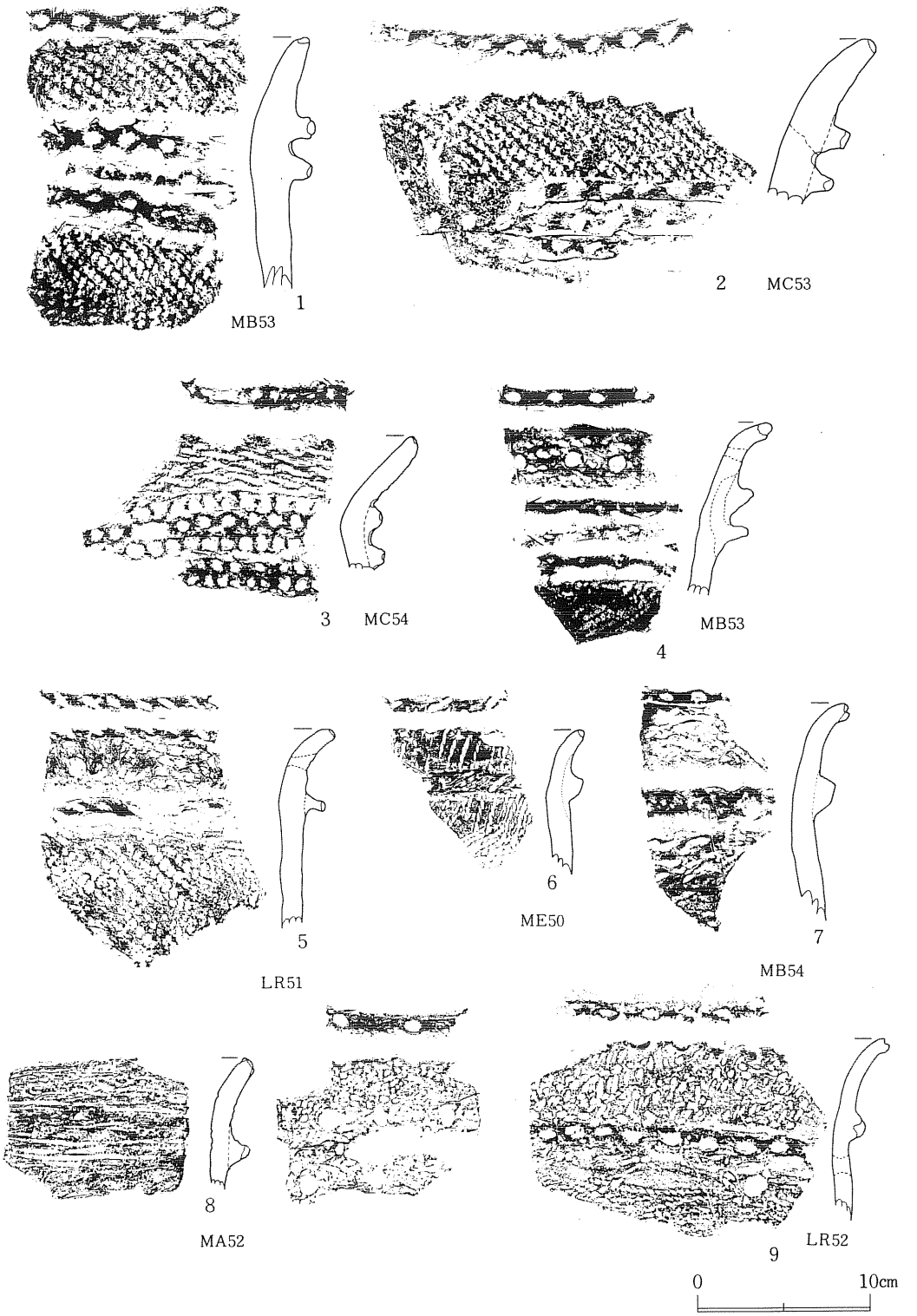
第Ⅳ層から第Ⅷ層までのうち、遺物が出土しているのは、第Ⅳ層、第Ⅴ層、第Ⅵ層の３層である。第Ⅳ層は、上位面の地山層である鳥越軽石質火山灰層が侵食、開析作用を受けて崩落・流出した所謂シラスの再堆積層であり、遺物はこのシラスの流出と共に移動しているものが多い。また第Ⅴ層、第Ⅵ層は、上位面から続く斜面下という地形的要因と、住居構築、土坑構築という人為的要因のために、移動、逆転等が考えられる。

各層とも円筒下層ａ式、ｂ式土器が出土しているが、ａ式土器の出土量が多い。

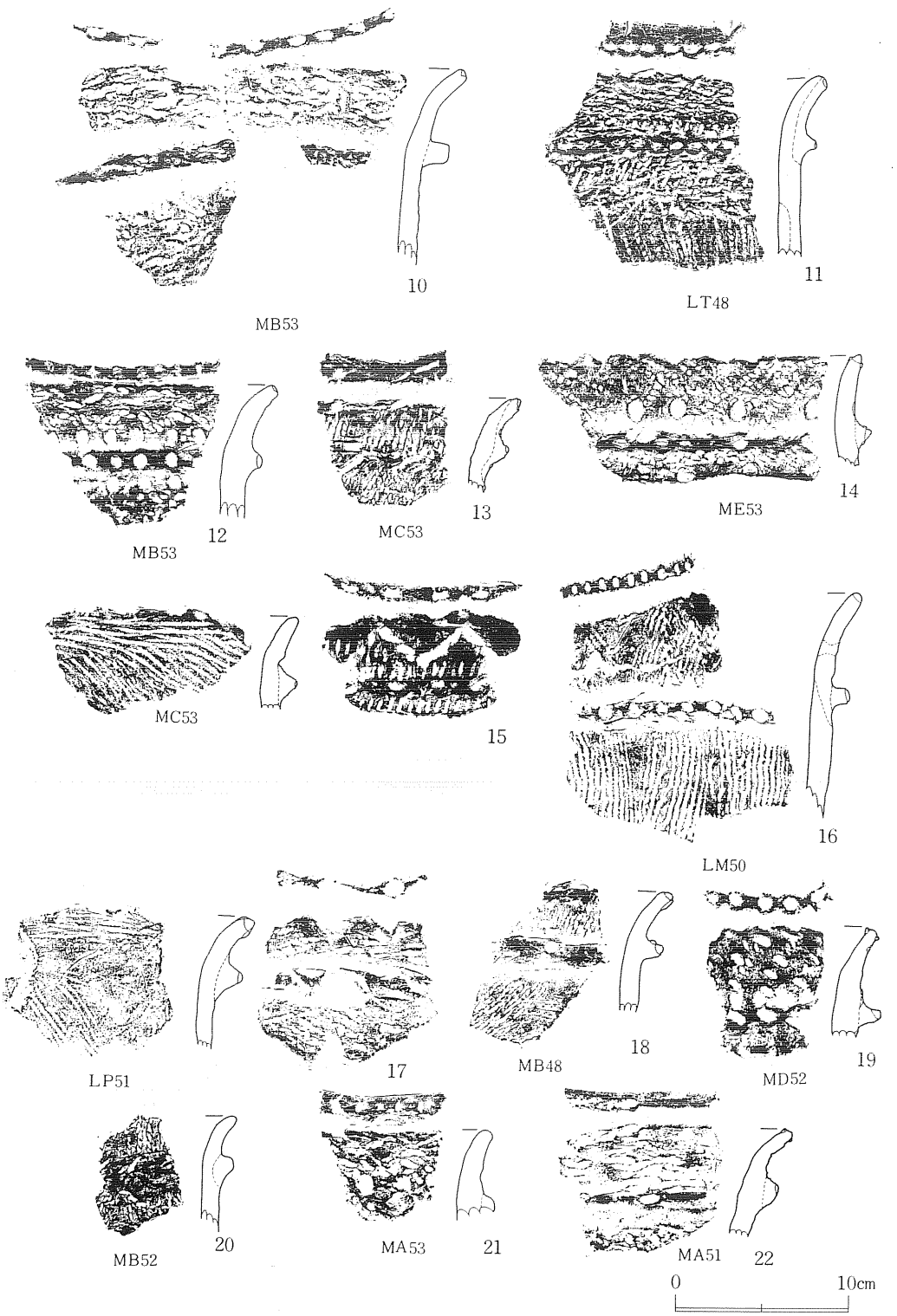
石器では、埋納された可能性が強いが、MF 50の第Ⅵ層中から鋒形石器２点（第152図）が出土している。



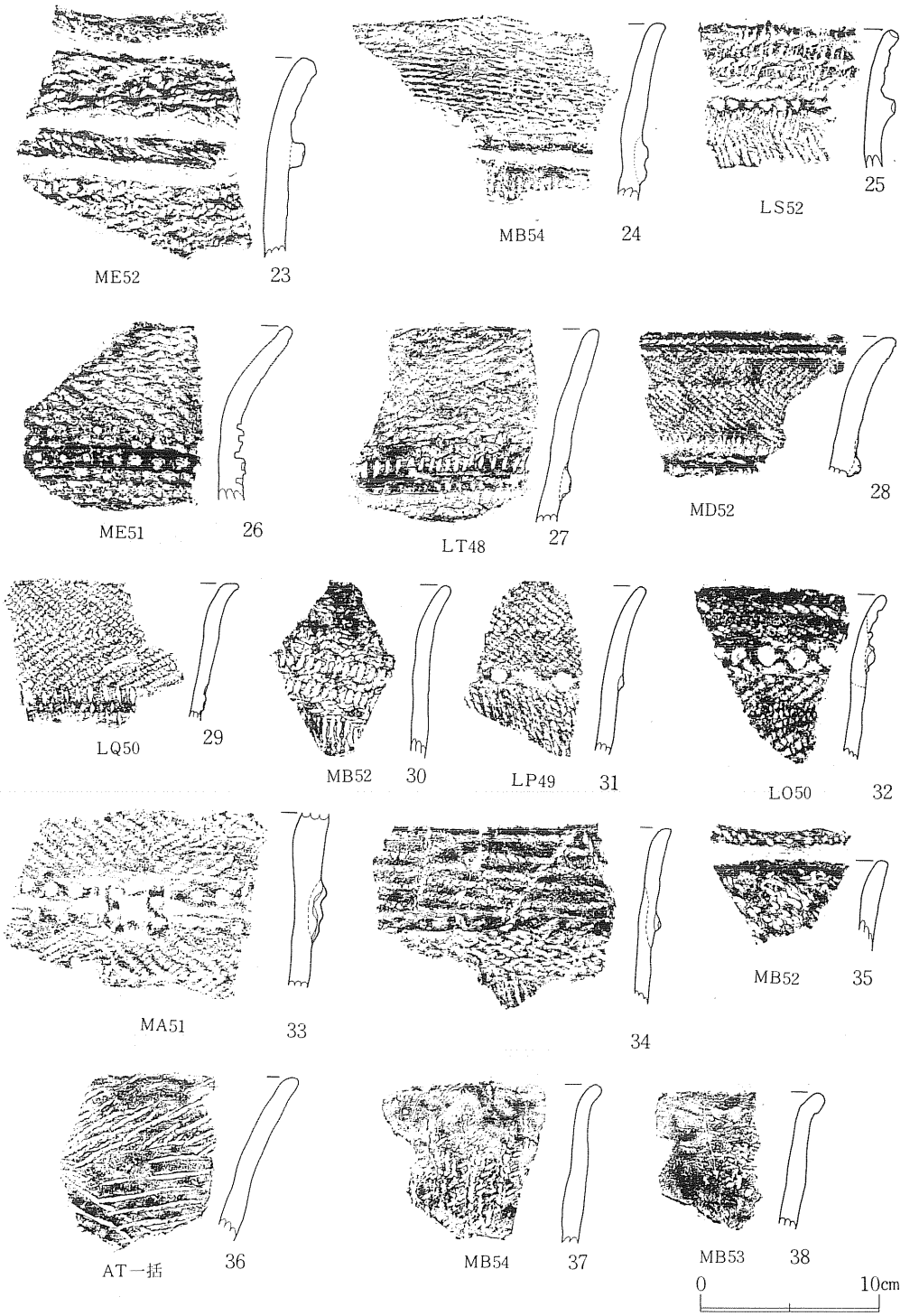
第132図　SKI04竪穴遺構出土土器拓影図



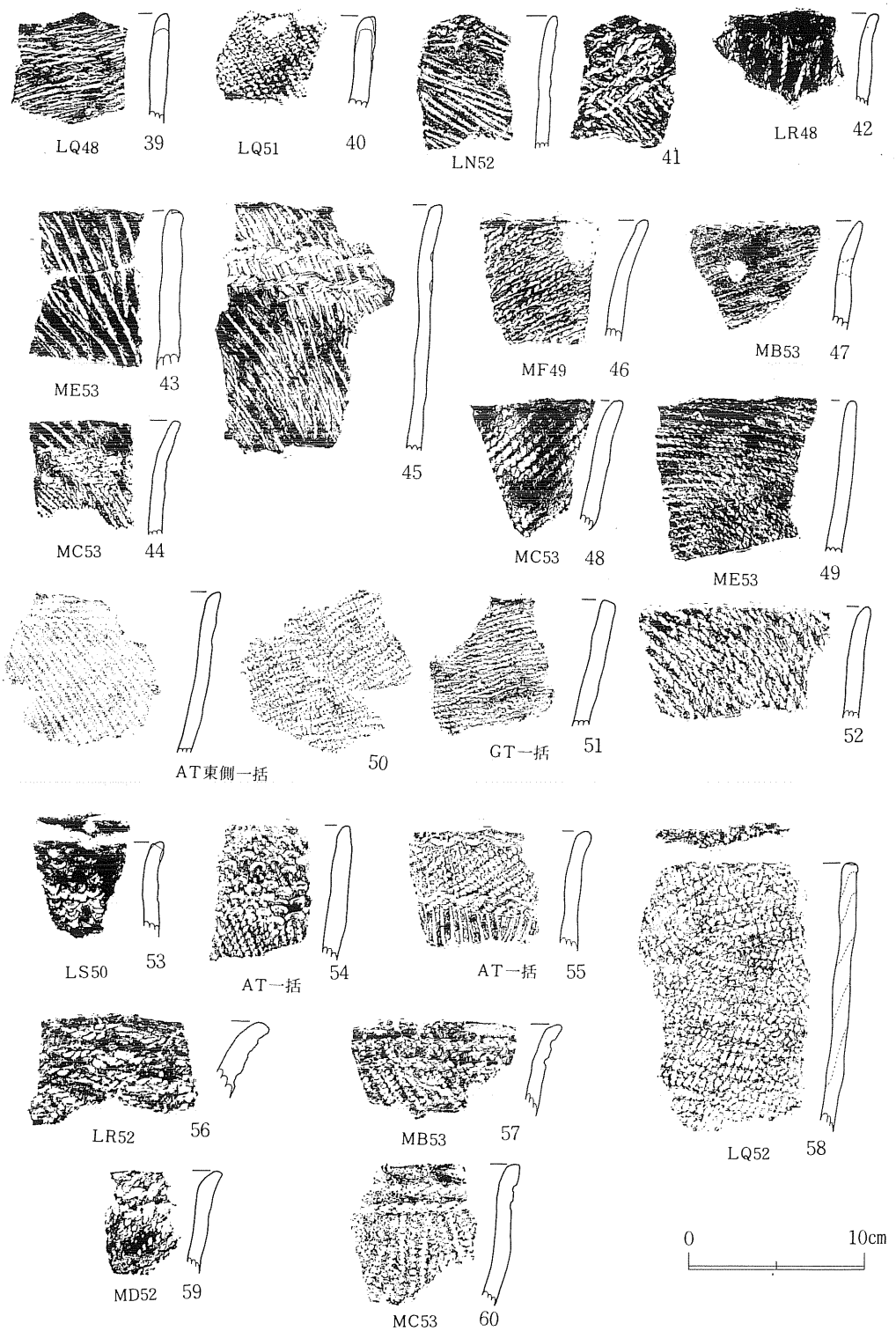
第133図　第Ⅳ層出土土器拓影図（１）



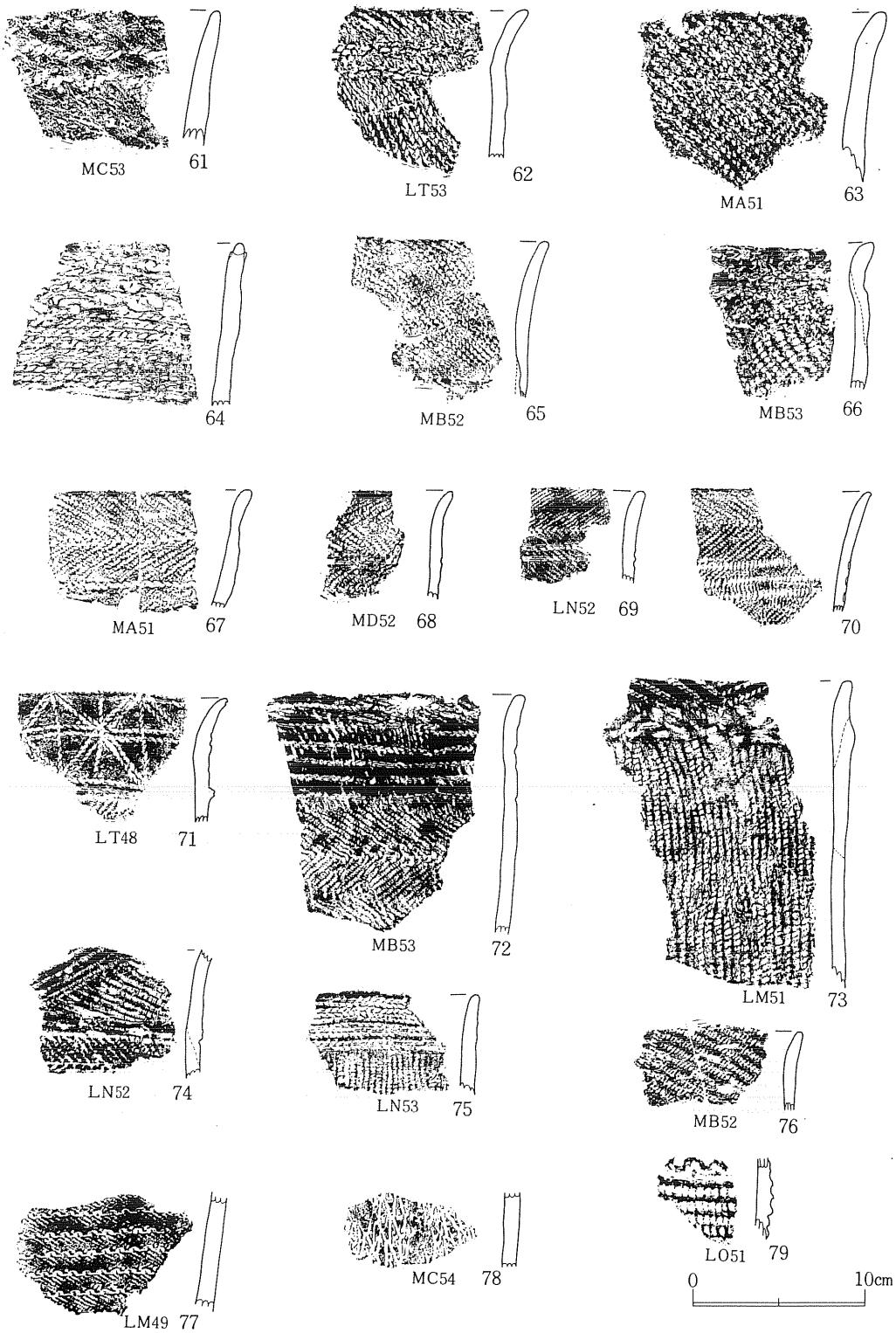
第134図　第Ⅳ層出土土器拓影図（2）



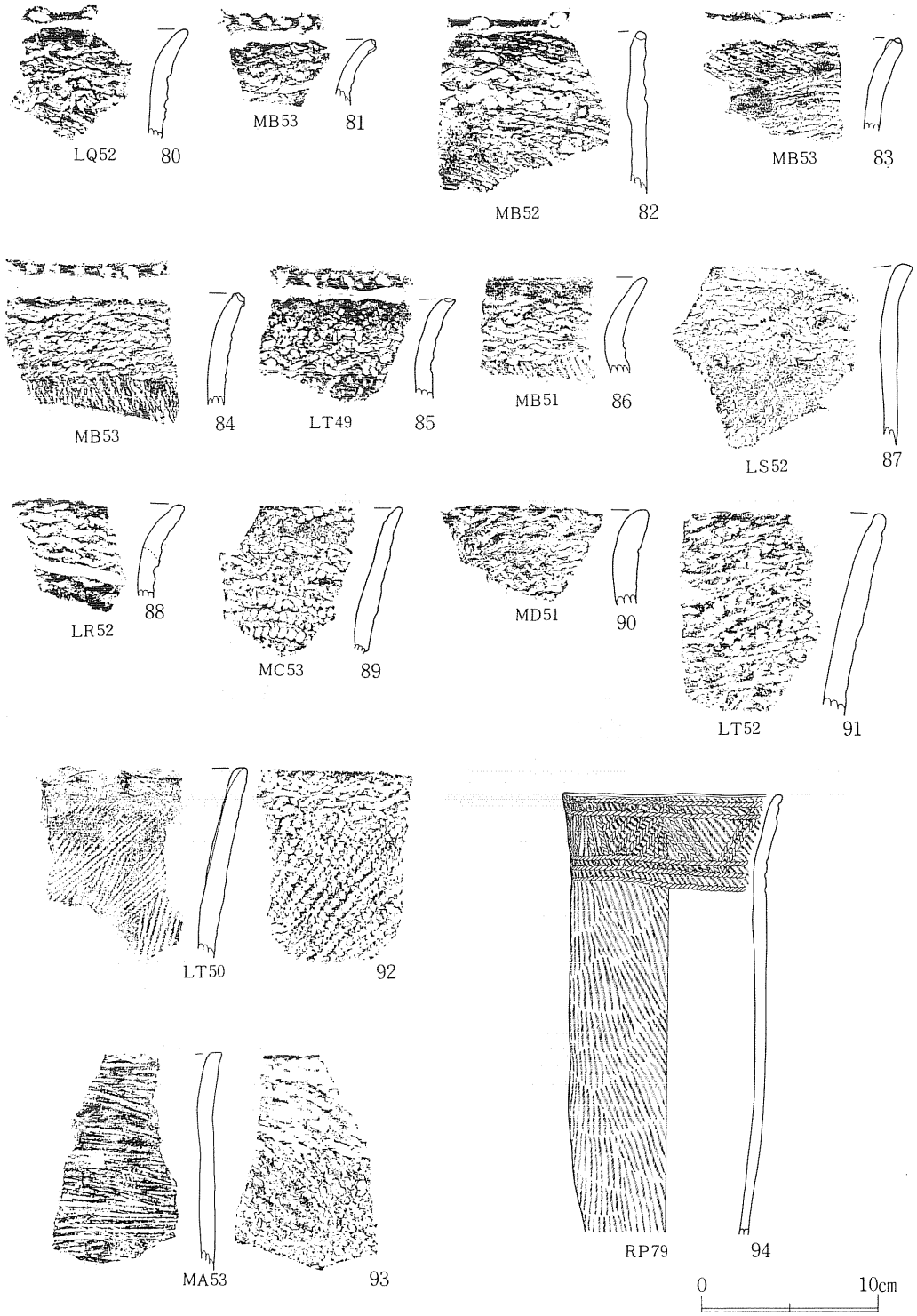
第135図　第Ⅳ層出土土器拓影図（３）



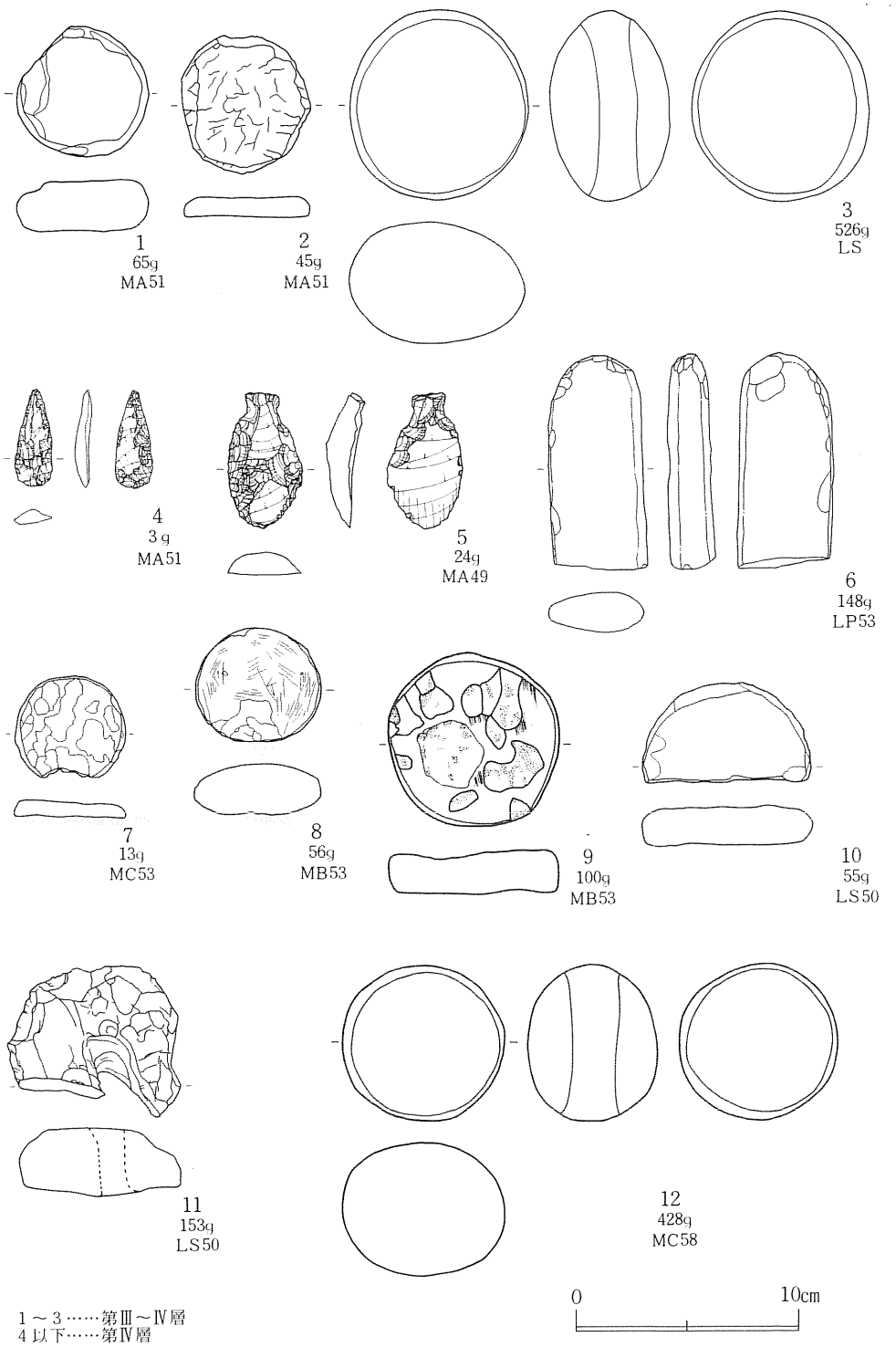
第136図　第Ⅳ層出土土器拓影図（4）



第137図　第Ⅳ層出土土器拓影図（５）

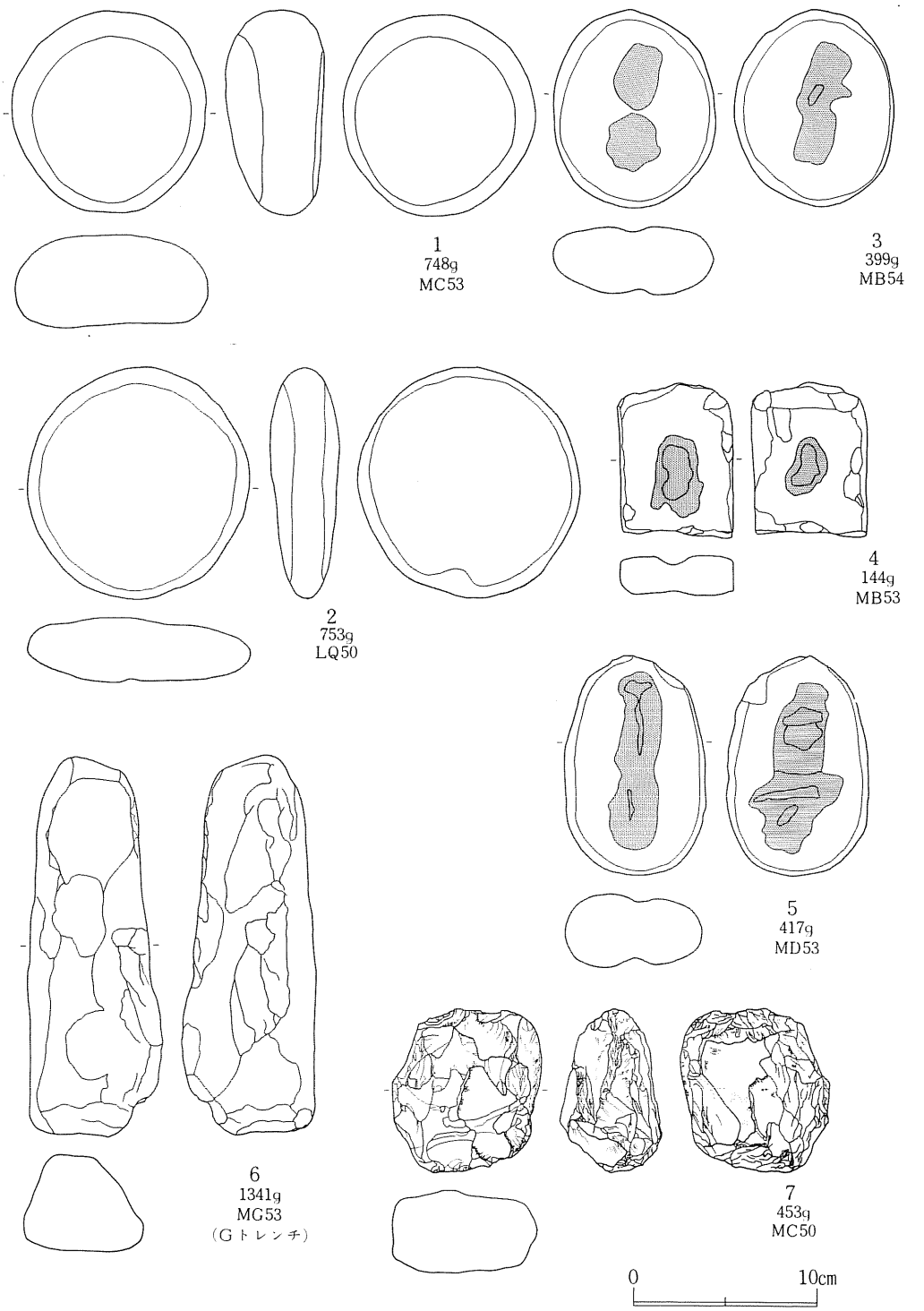


第138図　第Ⅳ層出土土器拓影図（6）

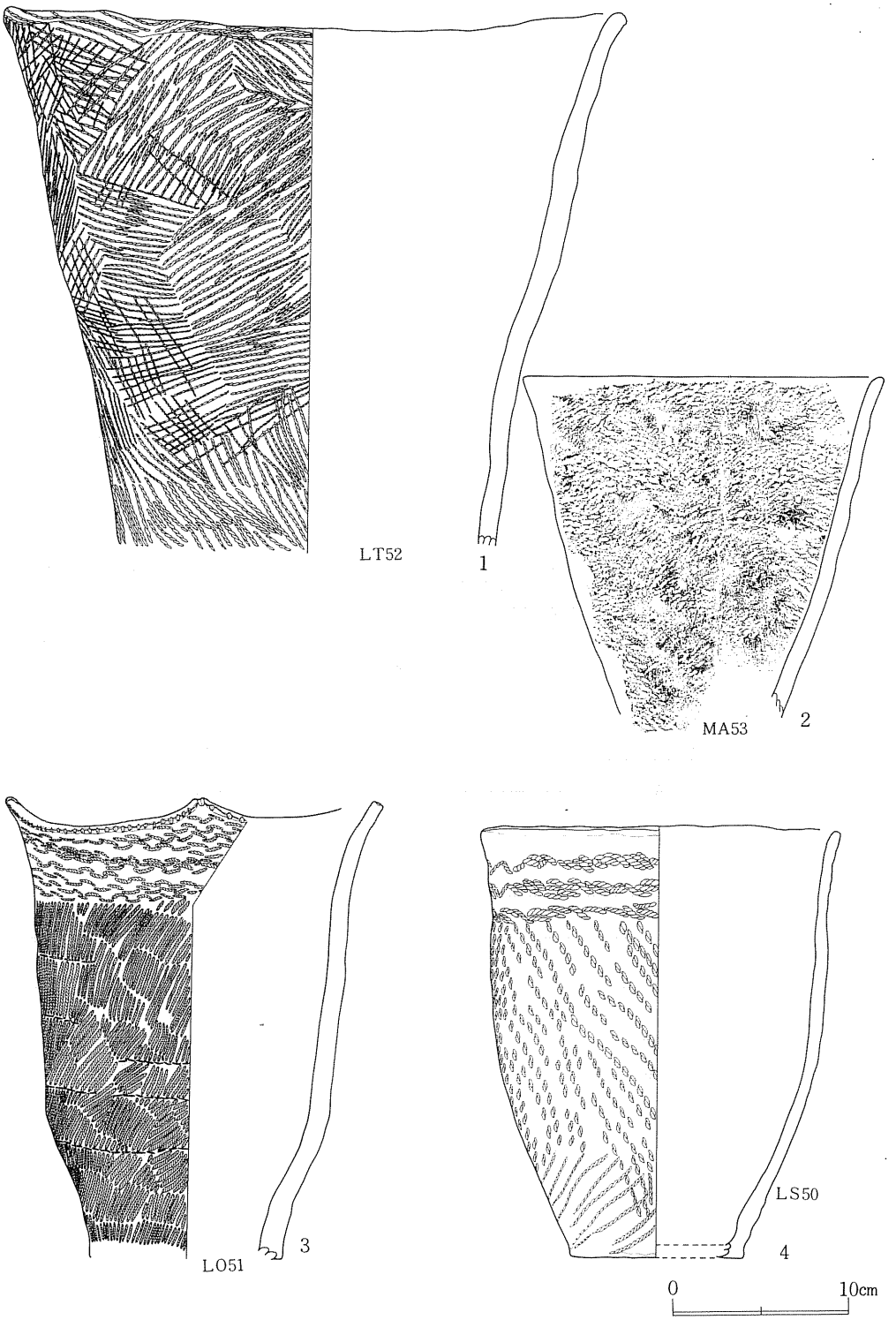


1～3……第Ⅲ～Ⅳ層
4以下……第Ⅳ層

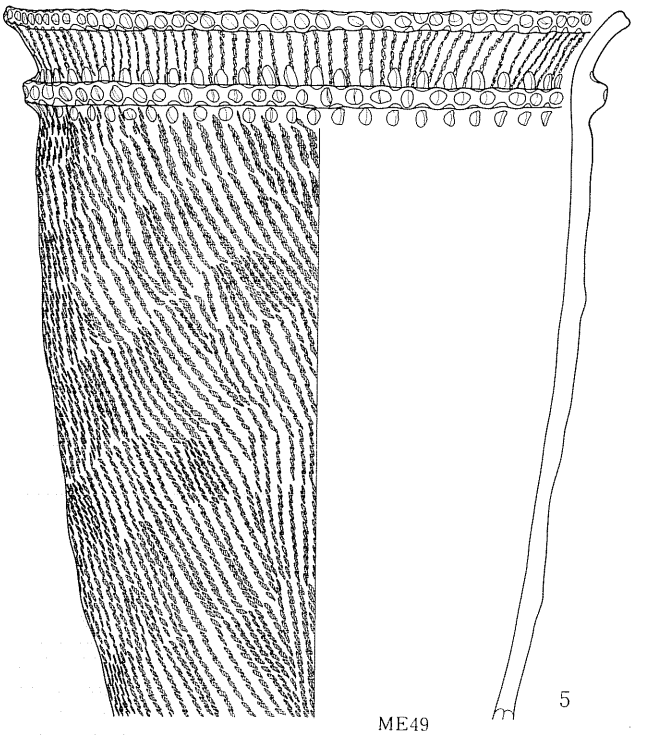
第139図　第Ⅲ～Ⅳ層出土石器実測図，第Ⅳ層出土石器実測図（１）

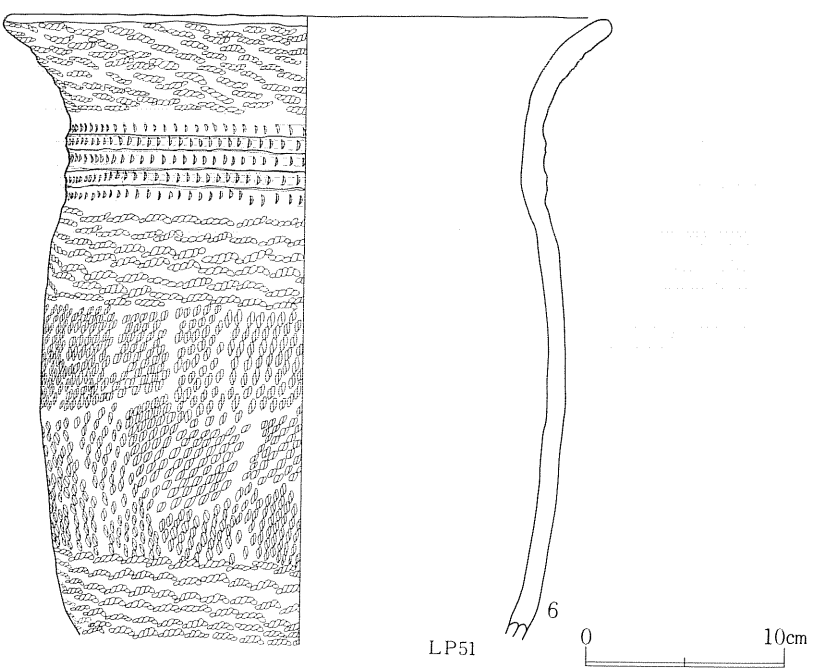


第140図　第Ⅳ層出土石器実測図(2)

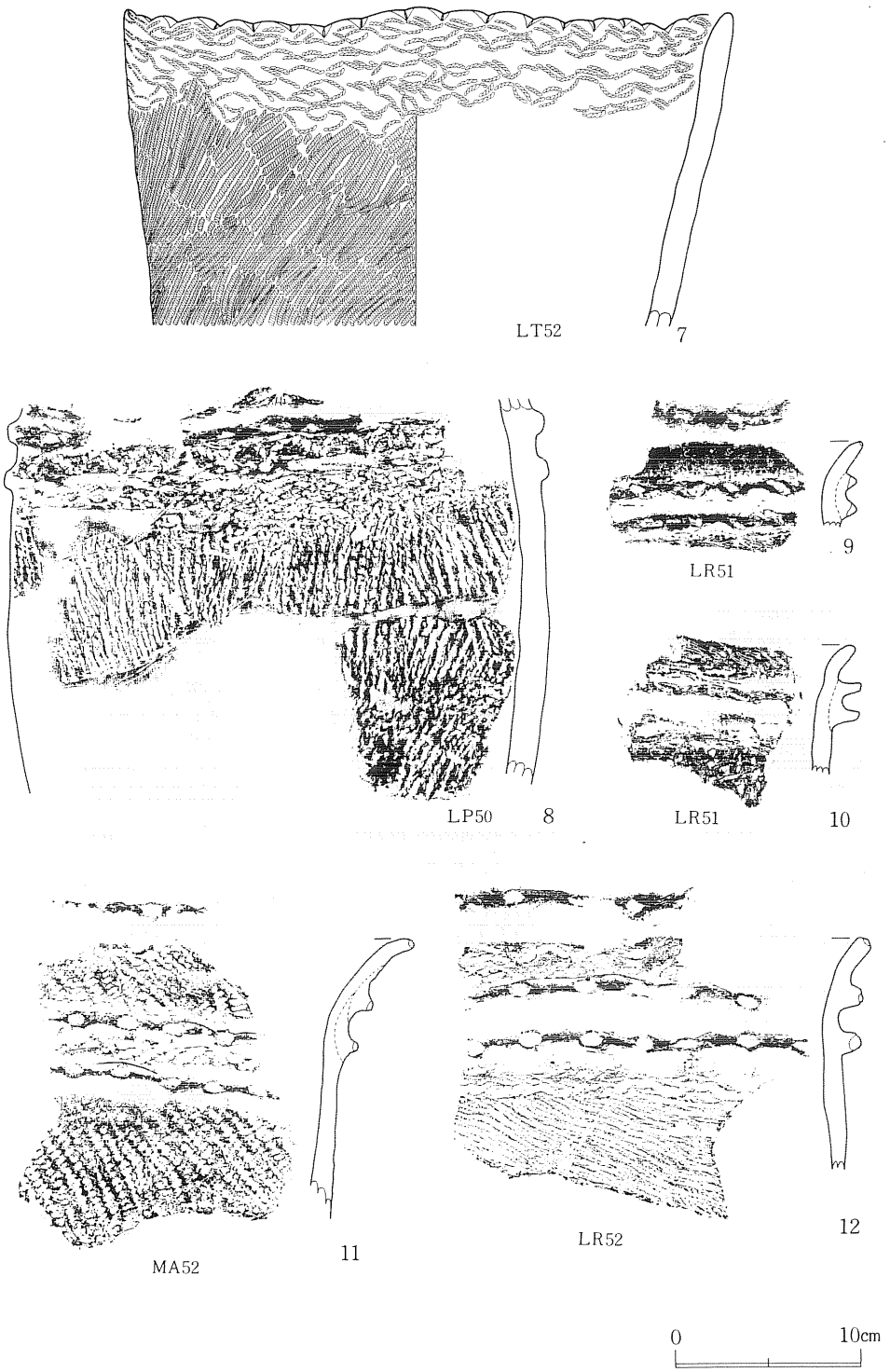


第141図　第Ⅴ層出土土器実測・拓影図（１）

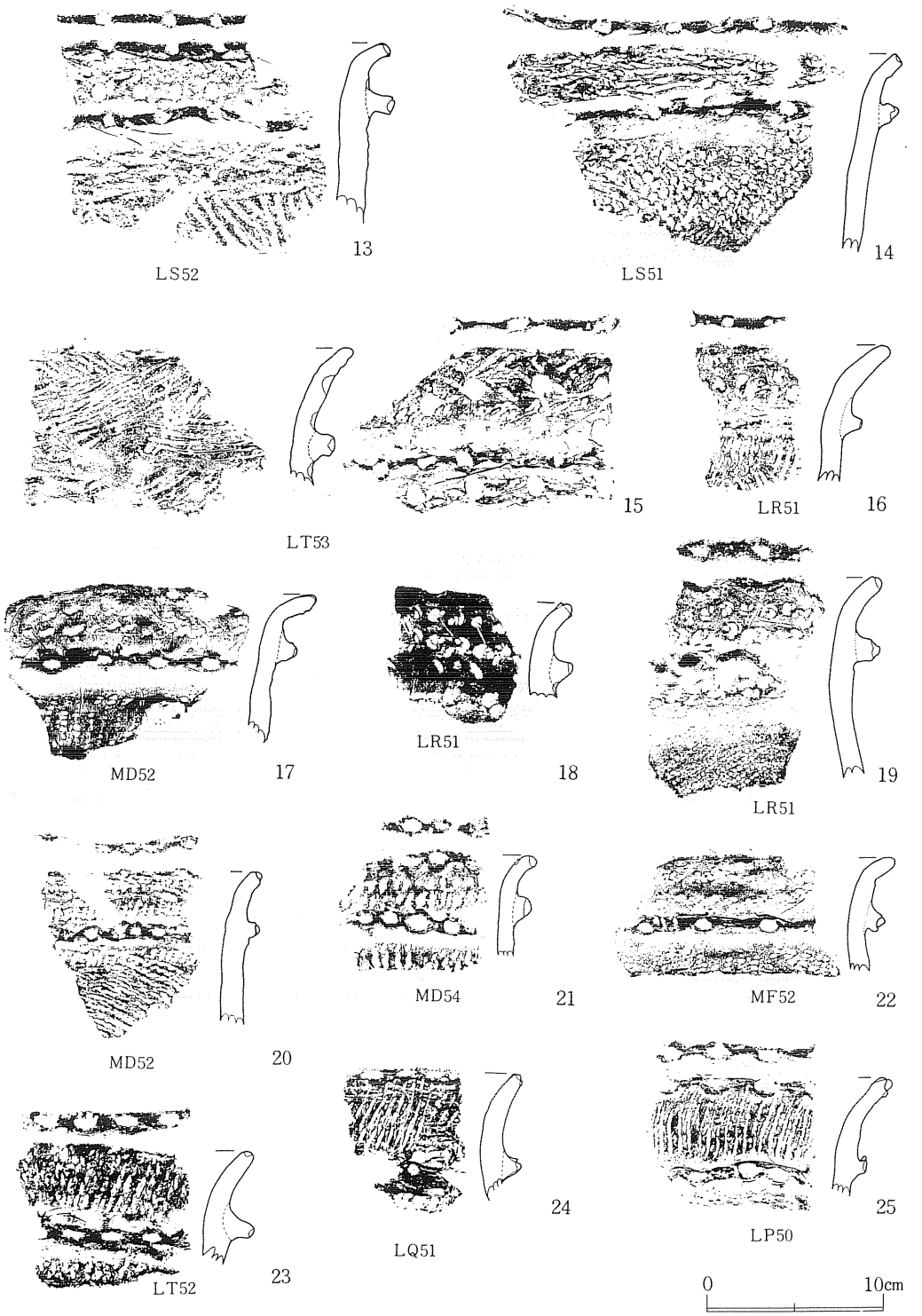




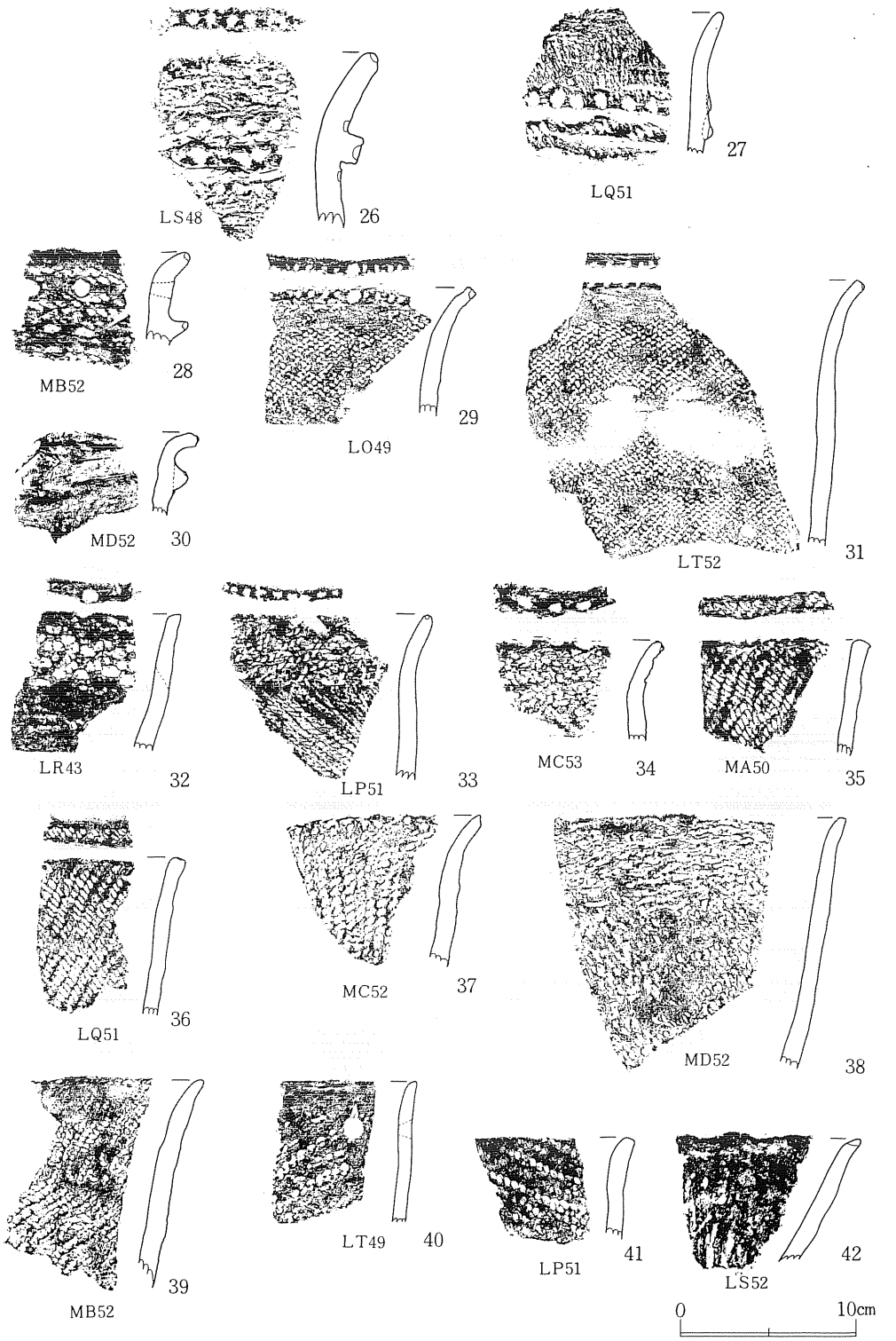
第142図　第Ⅴ層出土土器実測図（2）



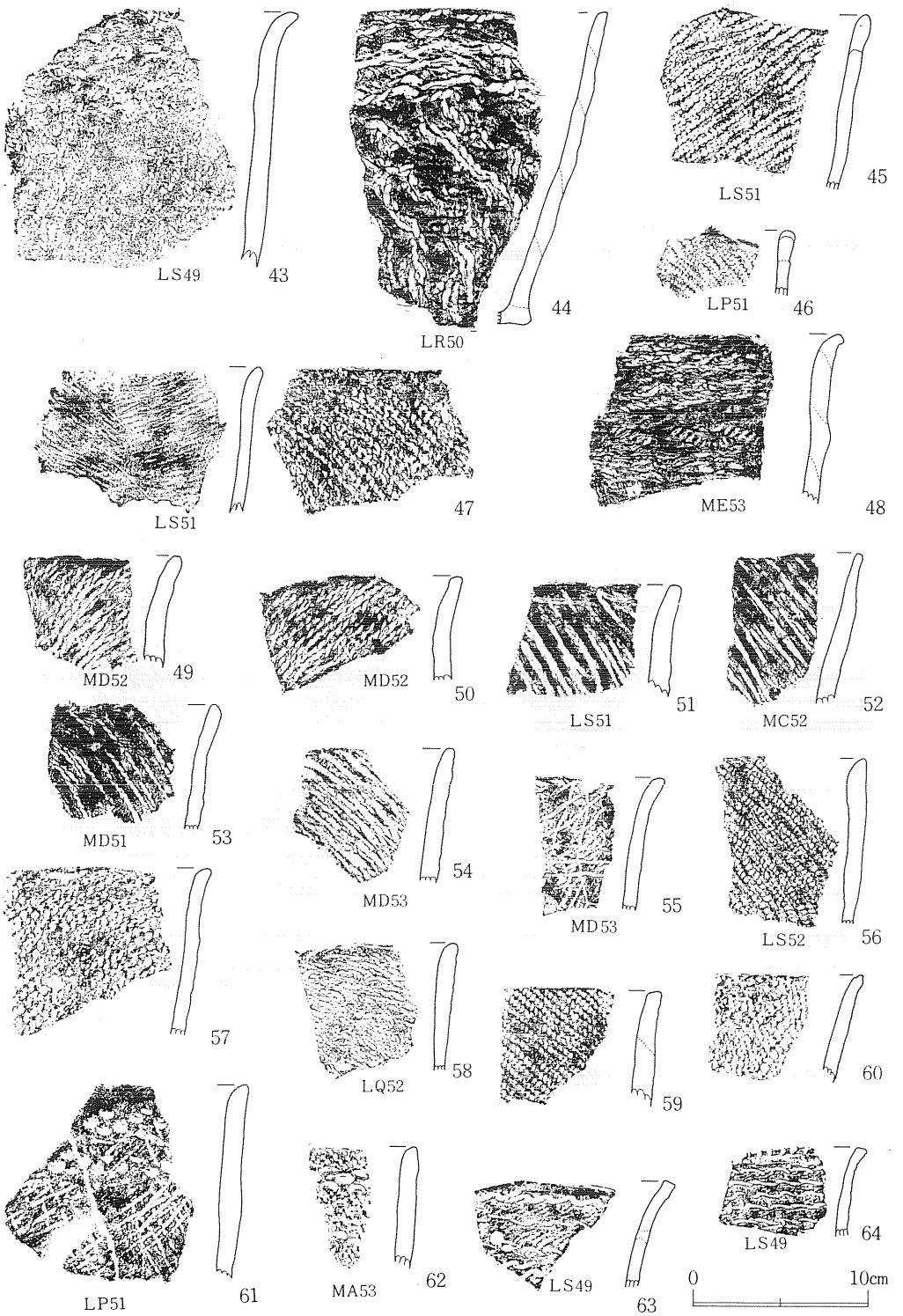
第143図　第Ⅴ層出土土器実測・拓影図（３）



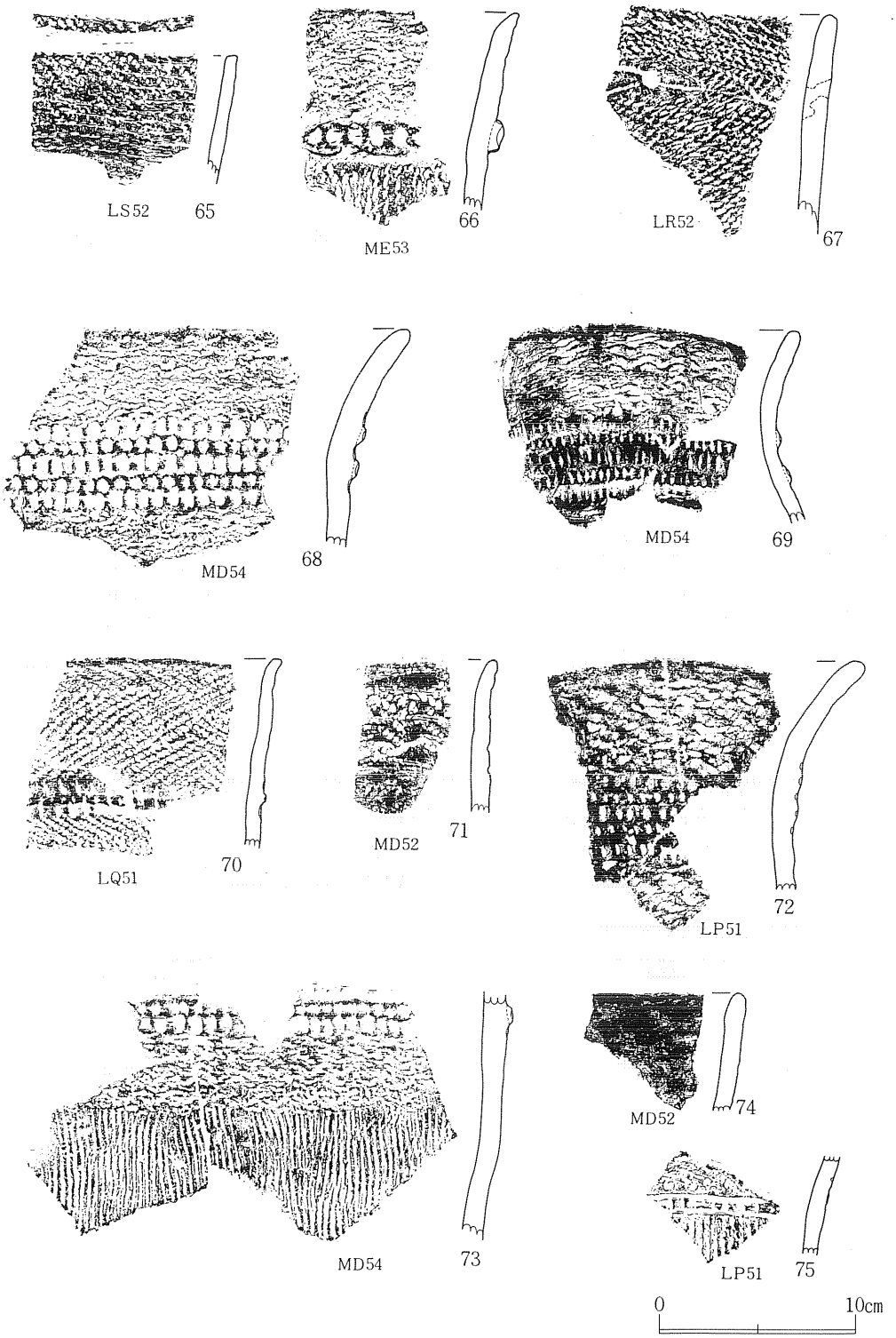
第144図　第Ⅴ層出土土器拓影図（４）



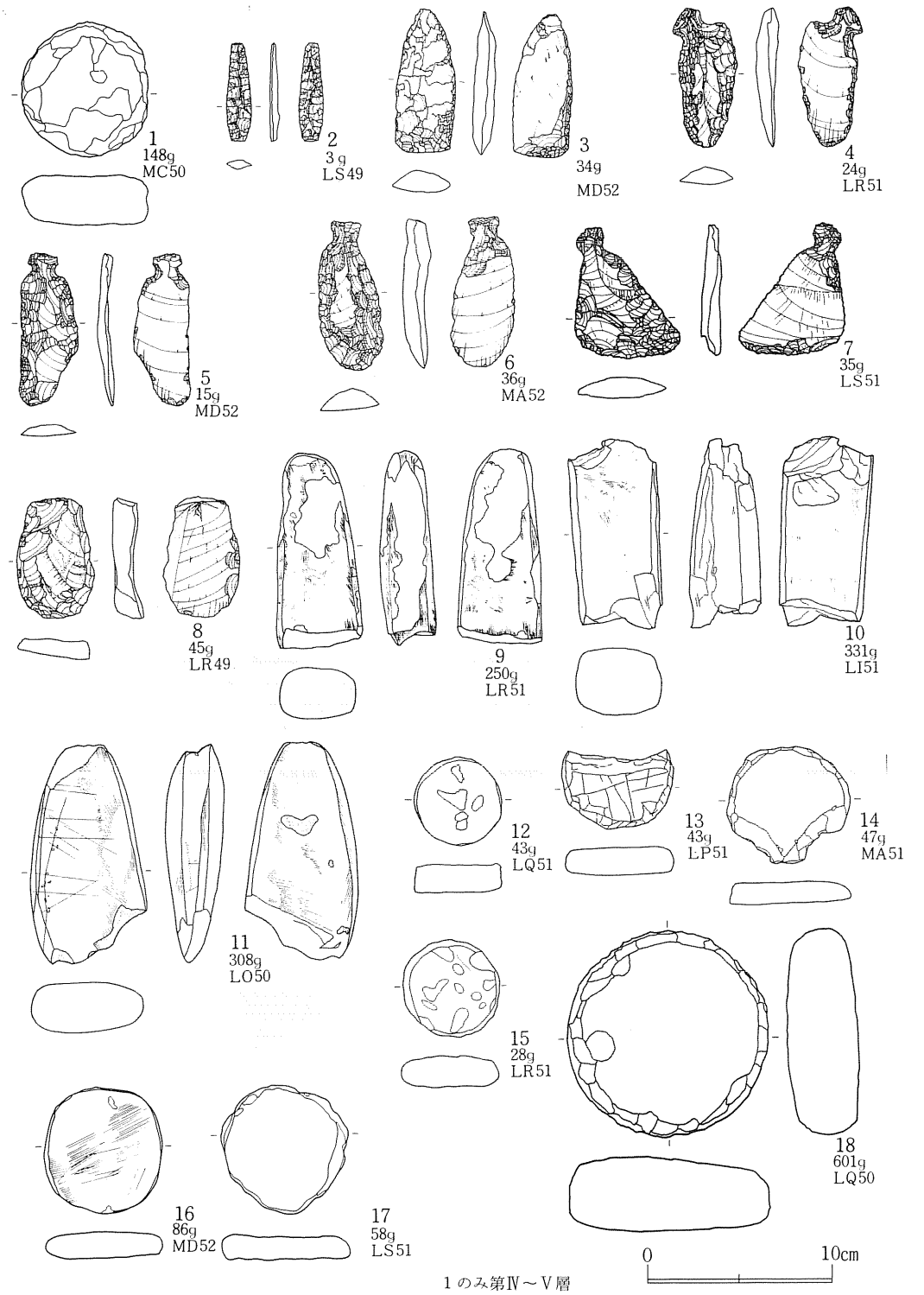
第145図　第Ⅴ層出土土器拓影図（５）



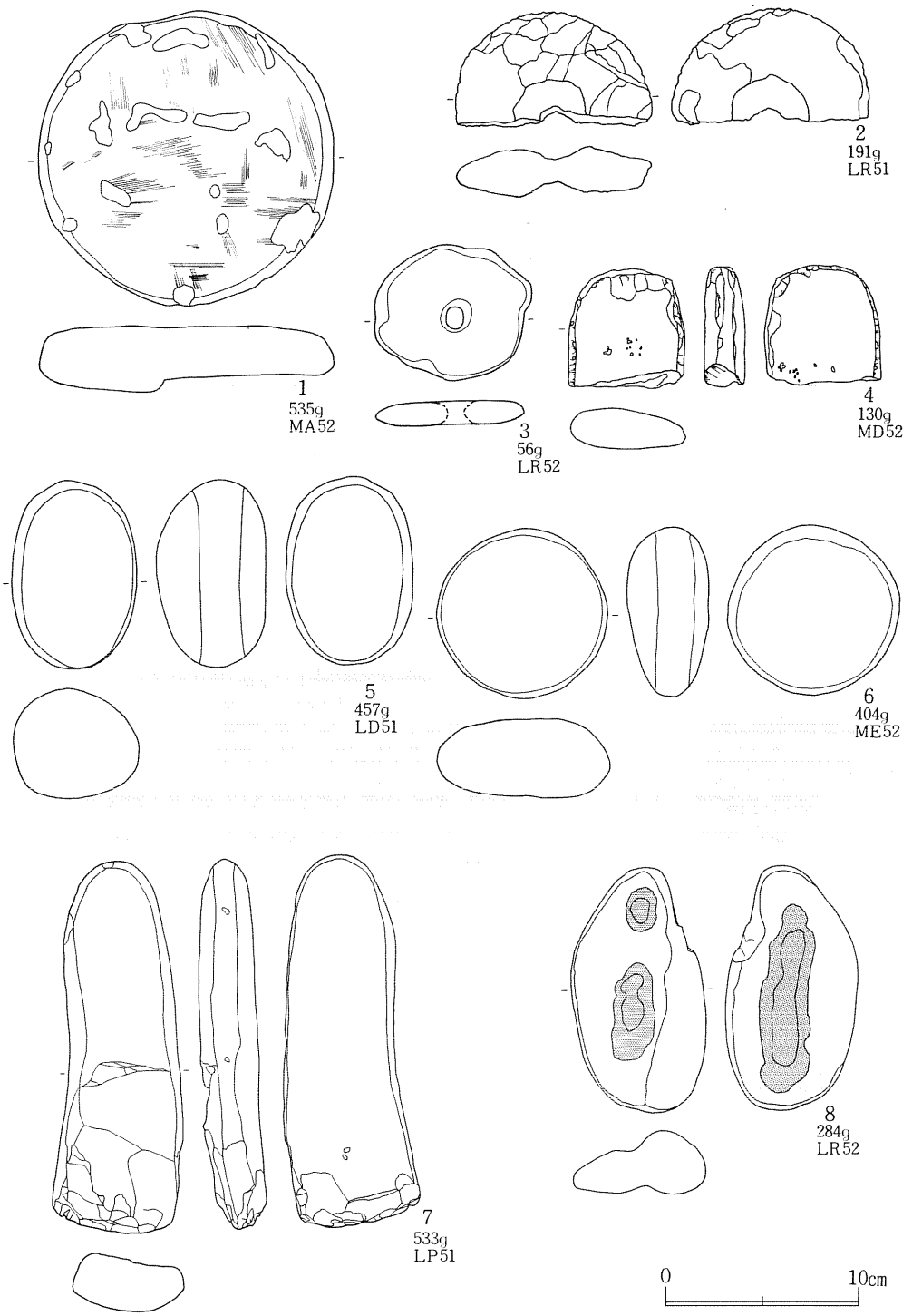
第146図　第Ⅴ層出土土器拓影図（6）



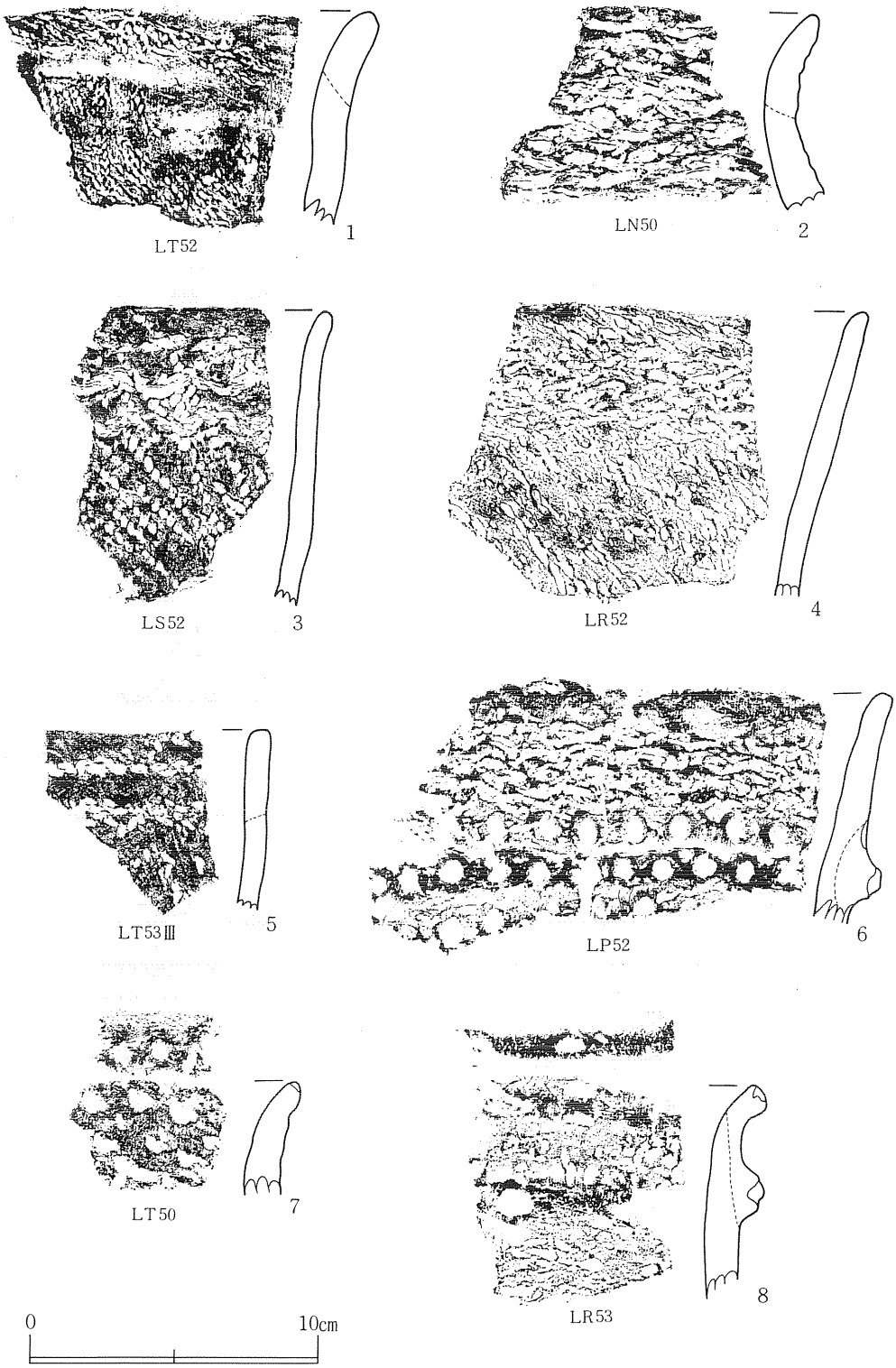
第147図　第Ⅴ層出土土器拓影図（７）



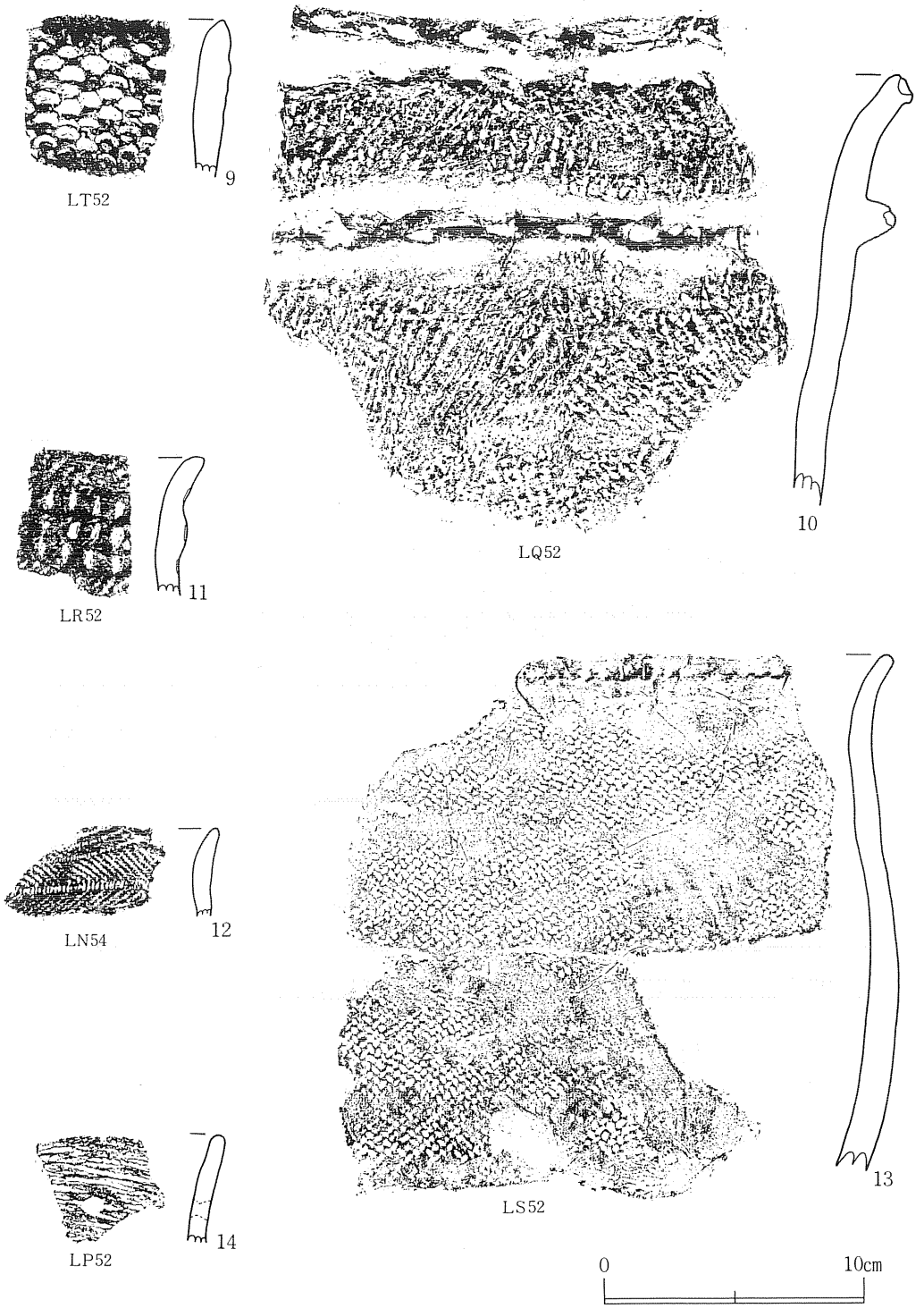
第148図　第Ⅳ層～Ⅴ層出土石器実測図・第Ⅴ層出土石器実測図（1）



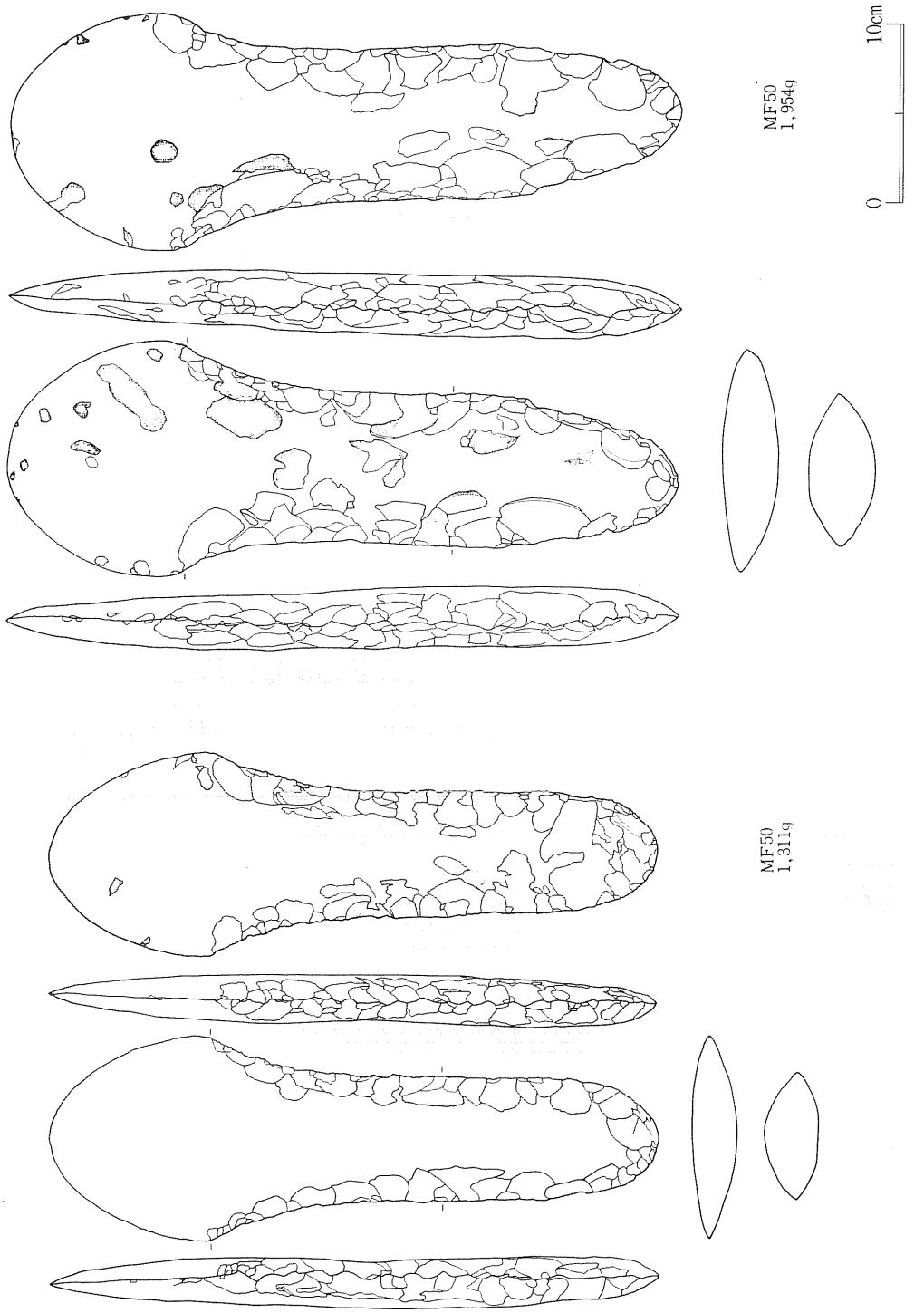
第149図　第Ⅴ層出土石器実測図（２）



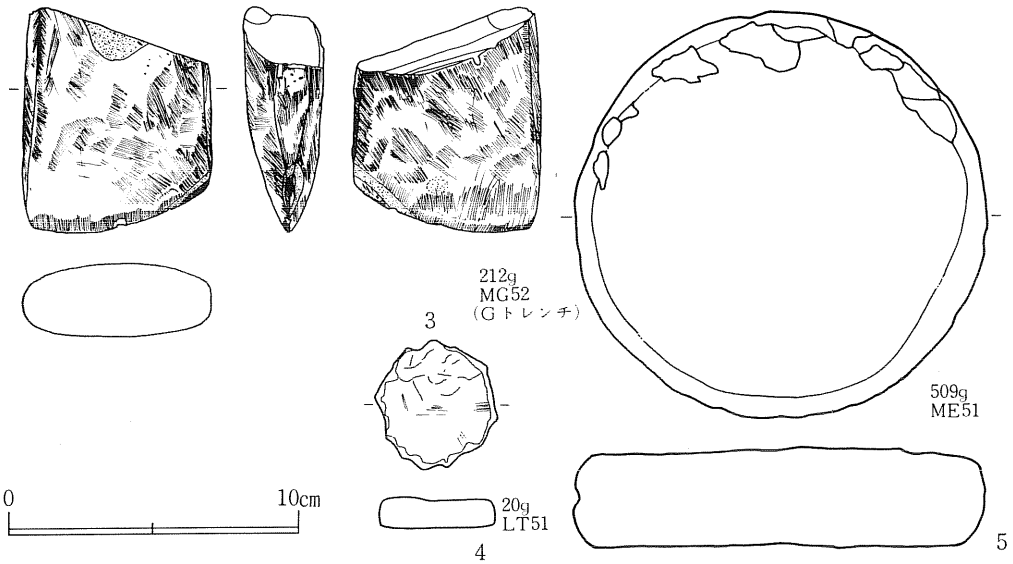
第150図　第Ⅵ層出土土器拓影図（1）



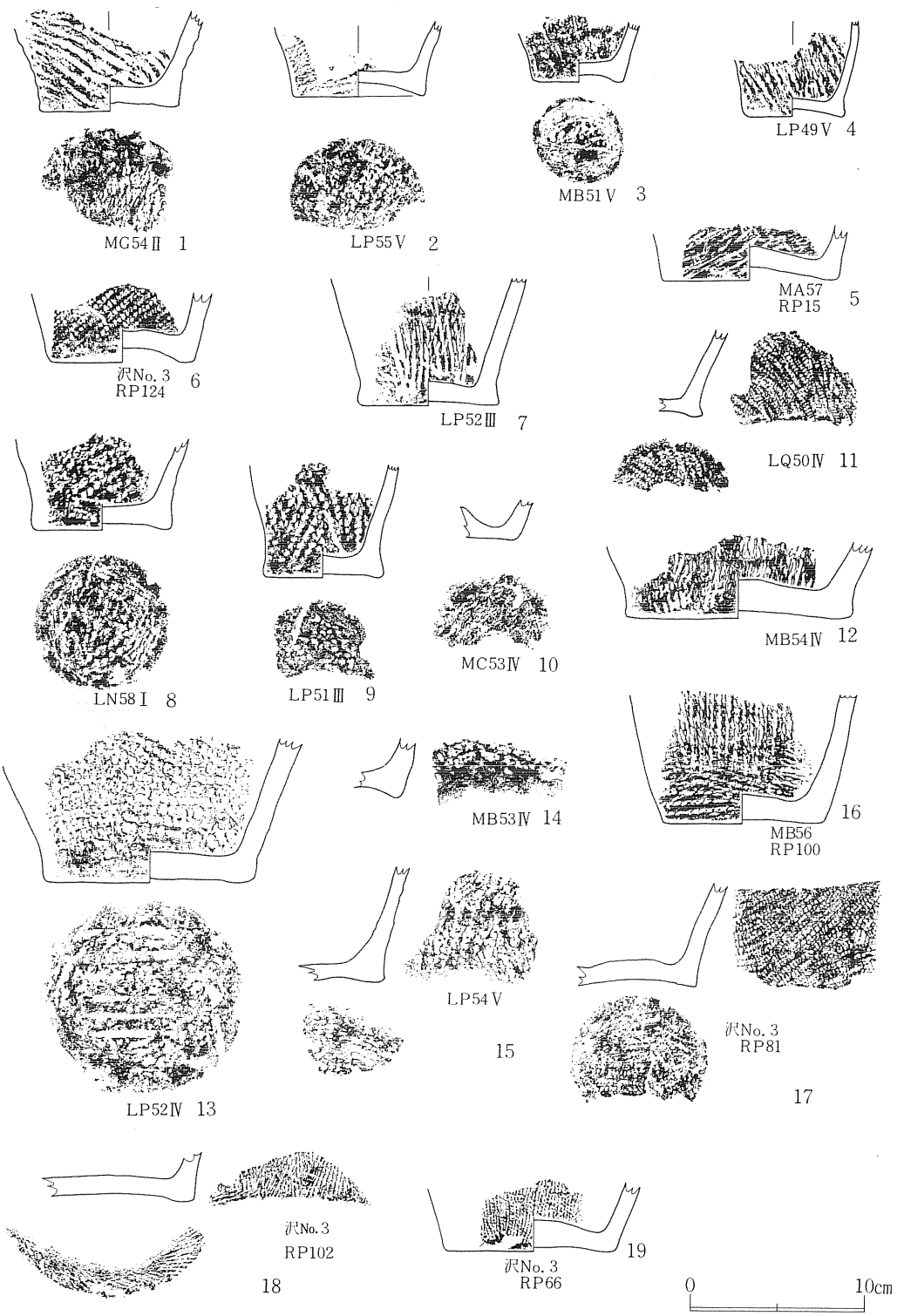
第151図　第Ⅵ層出土土器拓影図（２）



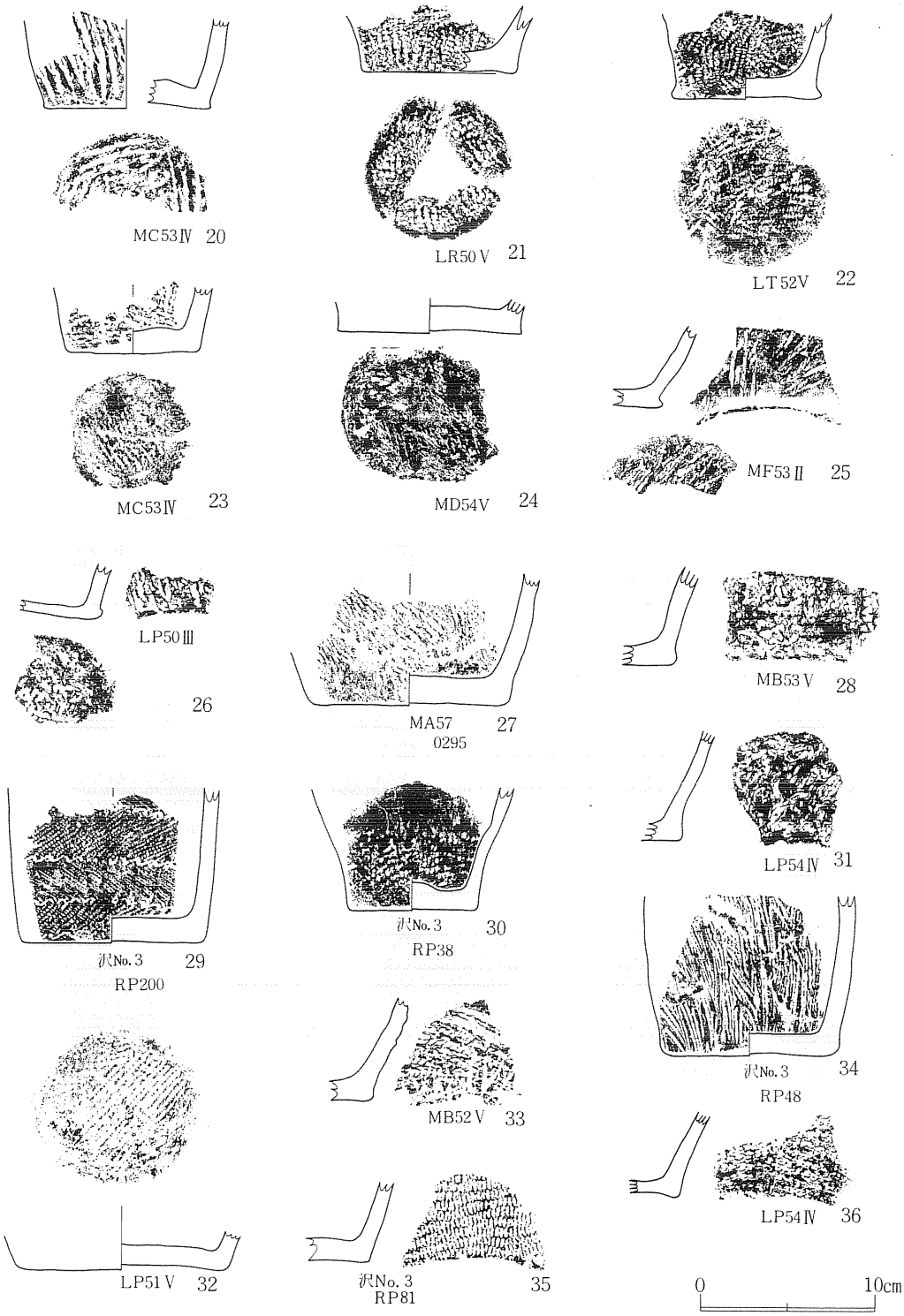
第152図　第Ⅵ層出土石器実測図（1）



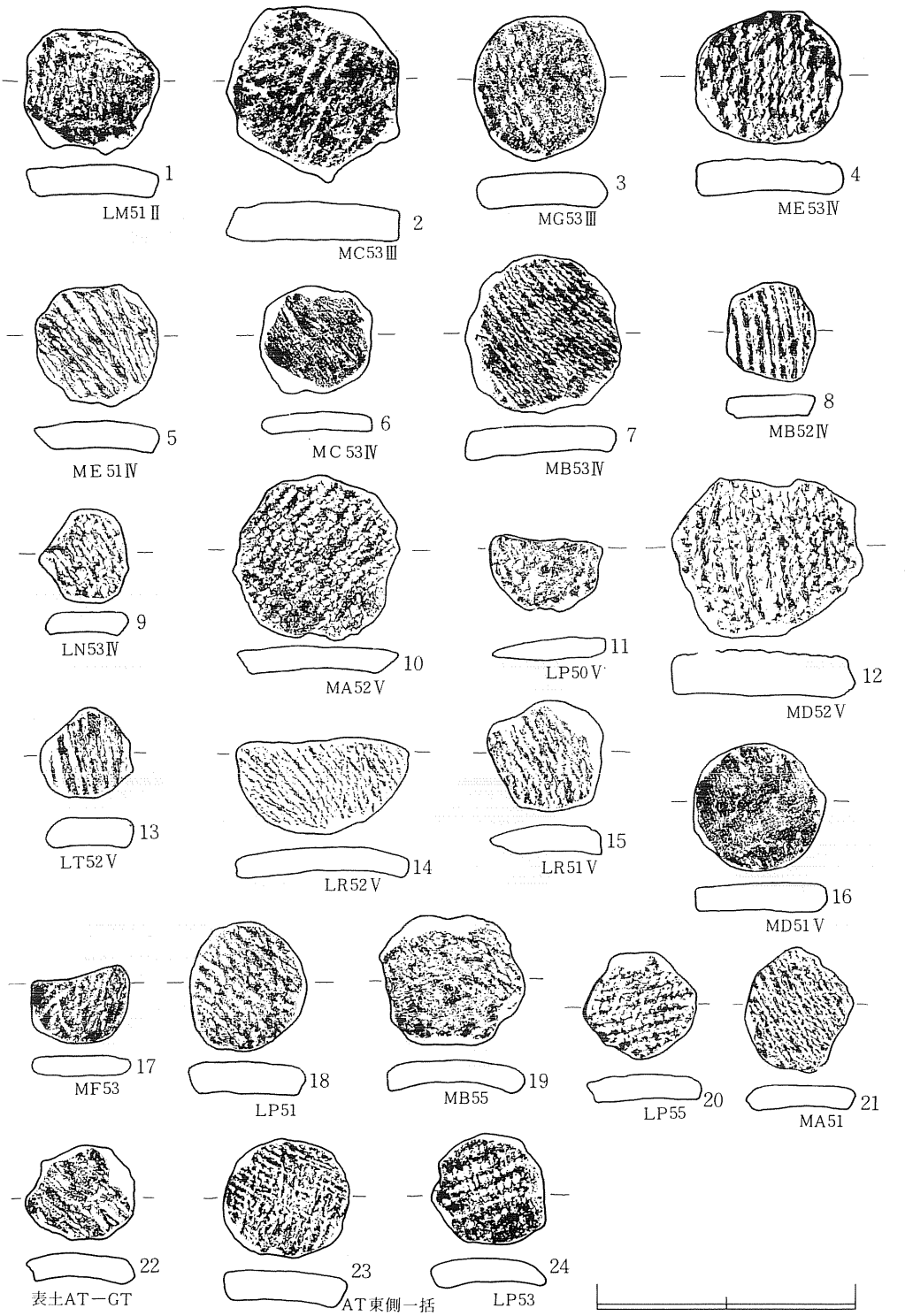
第153図　第Ⅵ層出土石器実測図（２）



第154図　土器底部破片拓影図（1）



第155図　土器底部破片拓影図（２）



第156図　円盤状土製品実測図

第3章　まとめ

遺跡と遺構について

本遺跡の成り立ちと変遷を考える場合、遺跡の地形を無視しては考えられない面がある。すなわち、シラス台地の上位面に大小3つの沢が開析され、その沢の運ぶ黒色土やシラスによって住居跡等が埋設し、その後再び生活が営まれるということを数度にわたって繰り返しているからである。ここでは、人間の営みと自然の営みを通して、遺跡の変遷を追ってみたいと思う。本遺跡の営まれた時期は、遺構プランが確認される面と出土遺物から大きく4つの時期に分けられる（第157図）。

第Ⅰ期

この時期は、下位面中央部から南寄りの部分が住居区域として利用される。時期は、縄文前期前半に比定される。当期の竪穴住居跡の特徴は、その平面形のほとんどが楕円形または長楕円形を呈する。規模でいうと、長軸7m前後のものが大半を占めるが、SI 14は長軸10mをこうる。SI 11—Aも現存部分は7mぐらいであるが、本来は10mをこえる規模を有していたものと推定される。柱穴は、2本ないし4本もつものが主流であるが、6本のものもある。SI 08は、住居中央部に主柱穴1本を有し、壁際に側柱穴が穿たれている。炉を有するものは、SI 05、SI 14であった。壁溝をもつものは、SI 05とSI 11—Aの2軒に限られる。当期における竪穴住居跡同士の切り合い関係と拡張は以下の通りである。

SI 14竪穴住居跡⟶SI 08竪穴住居跡

SI 12竪穴住居跡⟶SI 11—A竪穴住居跡⟶SI 11—B竪穴住居跡

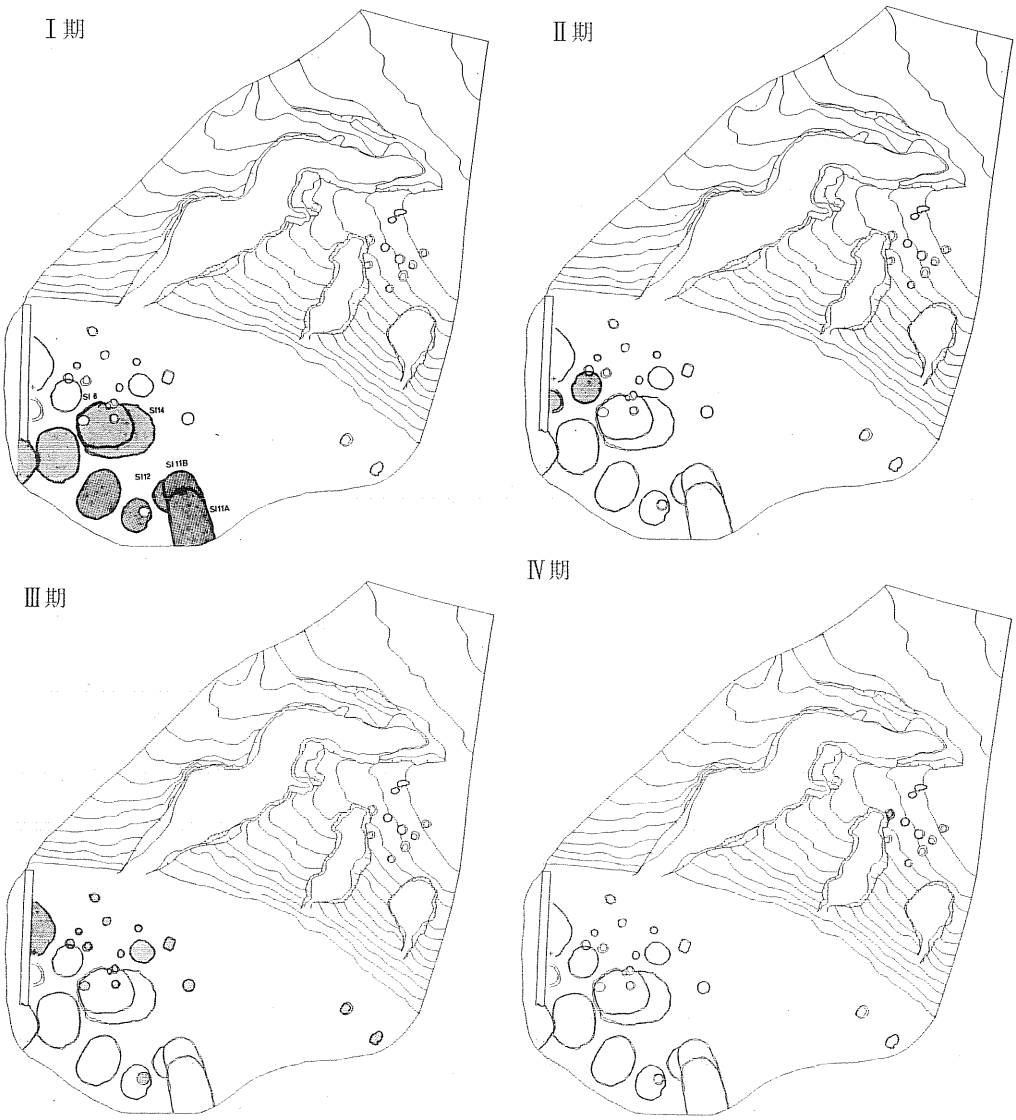
SI 05竪穴住居跡　A→B→C→D

Ⅱ期

Ⅰ期の生活面が黒色土に覆われ、その上をさらにシラス層が覆った時点で、SI 03竪穴住居跡、SKI 04竪穴遺構が営まれる。その後当期の生活面は、再びシラスで覆われてしまう。

Ⅲ期

この時期には、SKI 01、SKI 02の竪穴遺構と下位面のすべての土坑が営まれる。利用される区域は、上位面から下位面に下る斜面側すなわち北側に寄っている。時期的には、縄文前期後



第157図　占地状況の変遷

半であろう。やがてⅢ期の生活面も黒色土に完全に覆われてしまうのである。

Ⅳ期

この時期になると、下位面の利用の痕跡はなくなり、上位面にフラスコ状土坑が営まれる。SKF 101 フラスコ状土坑覆土中より縄文晩期大洞 C_2 式に比定される小形の鉢の出土をみている。他のフラスコ状土坑からは時期を特定できる遺物の出土はなかったが、SKF 101 フラスコ状土坑と立地・形態を同じくすることから、ほぼ同時期に営まれたものであろう。

以上のように本遺跡の変遷を概観してみると、苛酷な環境すなわち上位面からの土砂の流入の著しい下位面に生活の痕跡が見られるという特徴に気がつくであろう。

一方、上位面には沢 No.1 ～沢 No.3、さらに下位面に傾斜する斜面上にも土器や石器等が廃棄されているという状況がある。沢 No.1 の LS 56、LT 56 ～ 58、MA 57 ・ 58、MB 55 ～ 57 の各グリッドからは、縄文前期前半の遺物がまとまって出土しており、沢 No.2 では縄文前期末から中期にかけての遺物が出土している。また沢 No.3 からは、縄文前期後半期の遺物がまとまって出土している。これらの遺物は、下位面に生活した人々が残したと考えるよりは、上位面に生活した人々が上から投棄あるいは廃棄したと考えるほうが合理的であろう。このように考えてくると、下位面に生活の痕跡を残した人々の存在あるいはこの集団の性格等の輪郭の一部が明らかになってくるように思われる。

遺物について

本遺跡の出土土器は、縄文時代早期の槻木Ⅰ式、縄文時代前期の深郷田式、円筒下層 a～d 式、大木系の土器、縄文時代中期の円筒上層 a～b 式、縄文時代後期の土器、縄文時代晩期の大洞 BC、C_1 式土器、弥生時代の土器等であるが、主体をなすのは円筒下層 a～d 式土器である。

発掘調査後わずかな日数で、膨大な遺物の整理作業と報告書作成を行わざるを得ない状況では、土器資料の分類を行う時間的余裕もなく、出土地区・層位毎に資料提示をするにとどまったが、円筒下層 a～d 式土器、茂屋下岱式土器群の関係を知る手がかりを得ることができた。

また、早期の槻木Ⅰ式土器と、前・中期の大木系土器の出土は、彼地との交流を示すものである。

調査区から出土した石器・石製品の総数は、1,500 点をこえる。主なものでは、石槍 105 点、石匙 100 点、掻器 39 点、石箆 65 点、半円状偏平打製石器 247 点、石錘 240 点、円盤状石製品 113 点、剥片 313 点などである。層位別に見ると、第Ⅲ層と第Ⅴ層が多く、第Ⅱ層、第Ⅳ層と続く。捨て場からの出土点数では、沢 No.3 が最も多い。

器種別に概観すると、石錐は剥片素材に若干の調整を加えているものと、全面にわたって調整を加えつまみを作出しているものがある。石匙に近い形態のもので、先端を鋭利にしているものが若干みられ、石匙からの転用の可能性も考えられるであろう。掻器については、円形のもの、楕円形のものそして不定形のものがある。石箆については、第一次剥離面を残すものと全面を調整しているものに大別される。半円状偏平打製石器については、縁辺の一部に調整を加えているものと、全縁にわたって調整を加えているもの、そして両端に抉りのあるものに分類される。

MF 50 グリッド第Ⅵ層中から出土した鋒形石器については、岩手県気仙郡住田町上有住二度成木沢所在の二度成木（ふたなぎ）遺跡に出土例がある。それを柴田常恵が大正 13 年の史跡指定調査の際にスケッチしたものが残されている。それによると、全長は 10 寸 6 分、約 32 ㎝余りと推定される。大正 13 年の史跡指定調査の際に柴田常恵を案内した小田島禄郎（史跡調査会委員）の執筆による新聞記事（註 1）には、『緑泥片岩製の鋒形石器』とある。

土製品は、1 種類のみの出土である。土器の胴部破片の縁辺部を研磨し、円盤状にしたものであり、大きさにバラエティーがみられる。

石製品は、2 点の岩偶と 113 点の円形岩版があげられる。2 点の岩偶は、沢 №3 と LS 58 の第Ⅱ層から出土したものである。沢 №3 から出土した岩偶と同様のものは、田代町下茂屋遺跡から 1 点出土しているが、本遺跡のものは肉厚である。また LS 58 の第Ⅱ層から出土した岩偶は、一見、青森県寅平貝塚出土の鈷形石製品に形状が似ているが、先端部に線刻されるなど加工されており、沢 №3 出土の岩偶と同じ形態のものと見なすことができる。

円形岩板は、円盤状石製品などと呼ばれているものであるが、本遺跡では、形状、大きさがバラエティーに富んでいる。岩偶同様凝灰岩で製作されている。

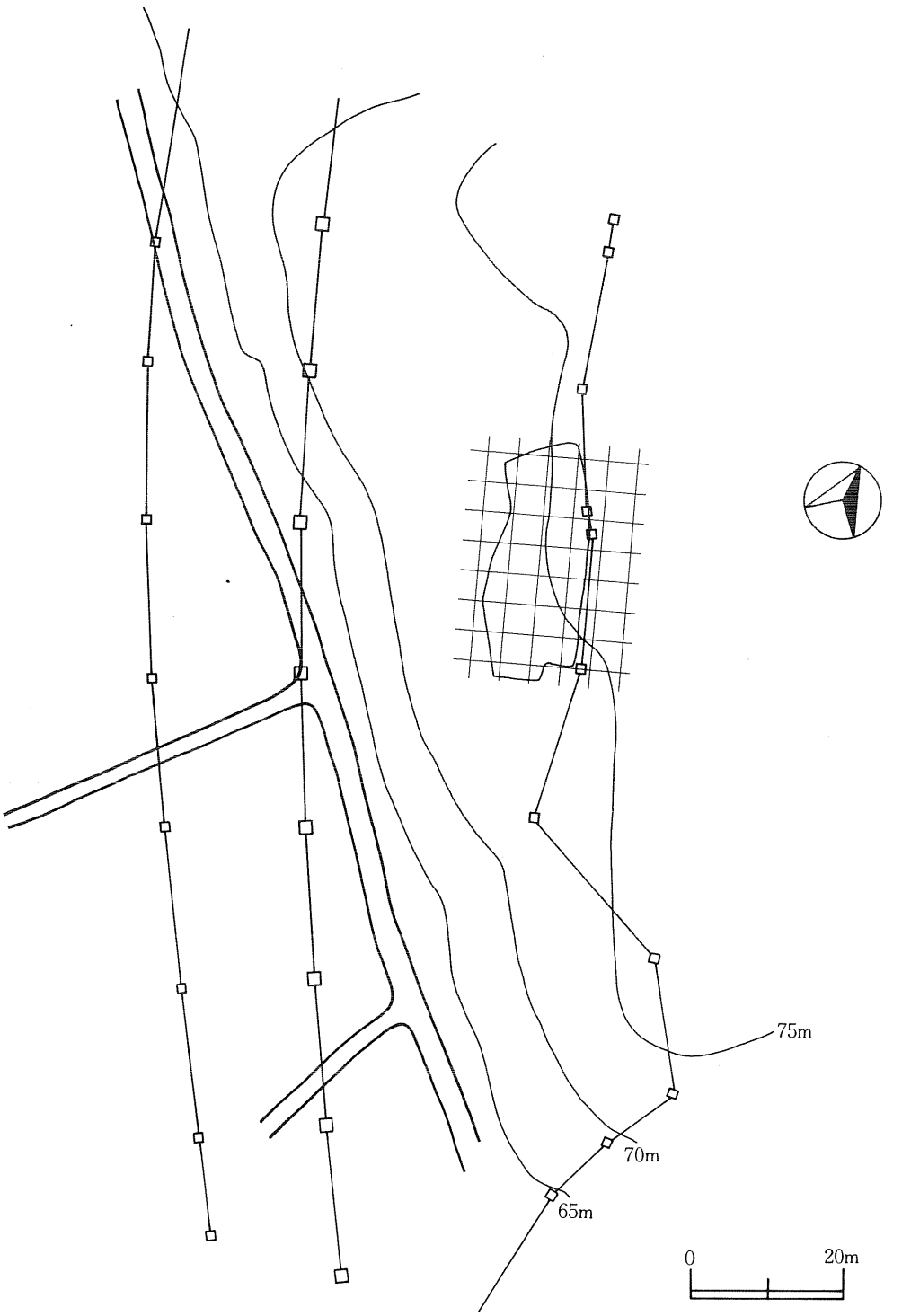
註 1　「気仙の史蹟踏査」　『岩手日報』　1924（大正 13）年 9 月 20 日～ 12 月 1 日

参考文献

熊谷常正　「1920 年代の文化財保護運動」『岩手県立博物館研究報告』 第 3 号　1985（昭和 60 年）

上ノ山Ⅱ遺跡（かみのやまにいせき）

遺跡番号　2KNYⅡ
所在地　秋田県大館市山館字上ノ山15　外
調査期間　昭和62年7月6日～8月24日
調査面積　420㎡
調査担当者　小畑　巌　桜田　隆



第1図　遺跡地形図

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査の方法

１　調査区の設定（第１図、第２図）

４ｍ×４ｍのグリッド法によることとし、基準線を路線に沿って設けることにした。調査区は、道路予定地内のセンターからはずれた部分に当たるため、基準となるセンター杭がなく、基準点を任意に設定しグリッド杭を打設した。基準線は、N―24°―W を計測する。グリッド名は、アルファベットと数字を組み合わせて呼称することにした。

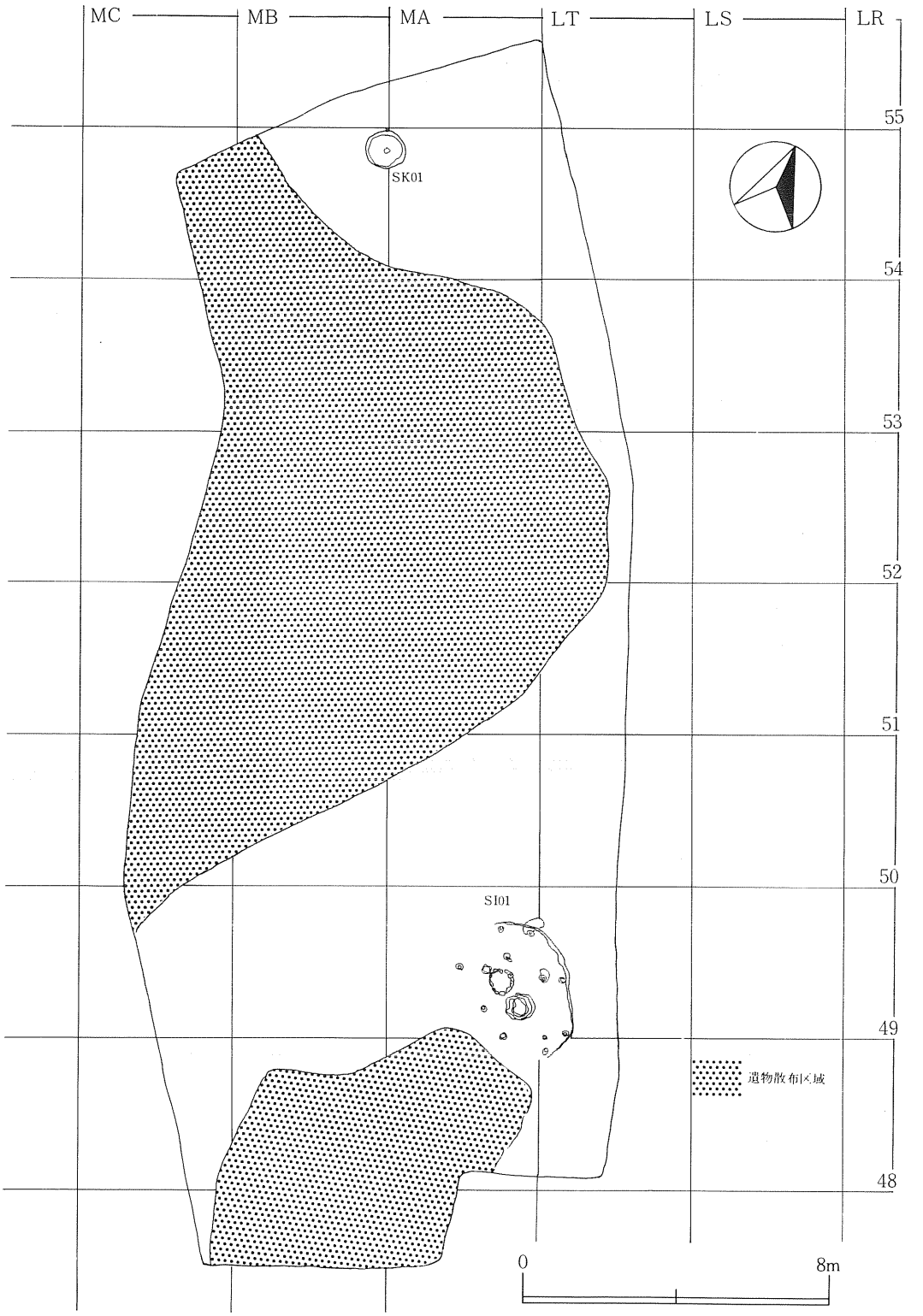
２　発掘調査方法

大館市等が行った上ノ山遺跡の調査から、本遺跡においても遺構の検出が十分に予想された。その検出にあたっては、比内町袖ノ沢遺跡例のように遺構の埋土に軽石を含み、プラン確認が黒土中でできる場合があったことに留意し、地山面まで一度に掘り下げず、黒土中でプラン確認を行うこととした。

遺構の実測は、遣り方測量によった。実測の縮尺は、土層断面図、遺物出土状況図、平面図等は１／20、炉跡は１／10とした。遺物の取り上げは、出土位置、レベルを図面に記録することとした。

第２節　調査経過

７月６日プレハブを設置し、発掘器材を搬入した。調査区は、一部畑の耕作が行なわれていたため、調査は畑を除いた部分について着手し、草刈り作業をまず行った。後日、畑部分が調査可能との確認がとれ、調査は全面に及んだ。７月14日第１回目のプラン確認を行った。その結果、遺構と断定できるものは検出できなかった。ただし、LT 49 グリッド内で炭化物のまとまりがある範囲があり、何らかの遺構ではないかと予想された。また、LT 51、LT 52、MA 50、MA 51、MA 52 グリッドを中心に縄文土器がやや集中して出土しており、黒色土の堆積がやや厚いとみられることから、この地点を含む大規模な遺構の存在も予想された。同じような状況はLT 48、MA 48 グリッドを中心とする範囲でも観察された。レベル原点の移動を行ない、７月20日グリッド杭打設作業を行なった。再度のプラン確認作業の結果、LS 49、LT 49 グリッド内で楕円形のプランを確認し、LS 53、LS 54 グリッド内で土坑または柱穴様の円形プラン、



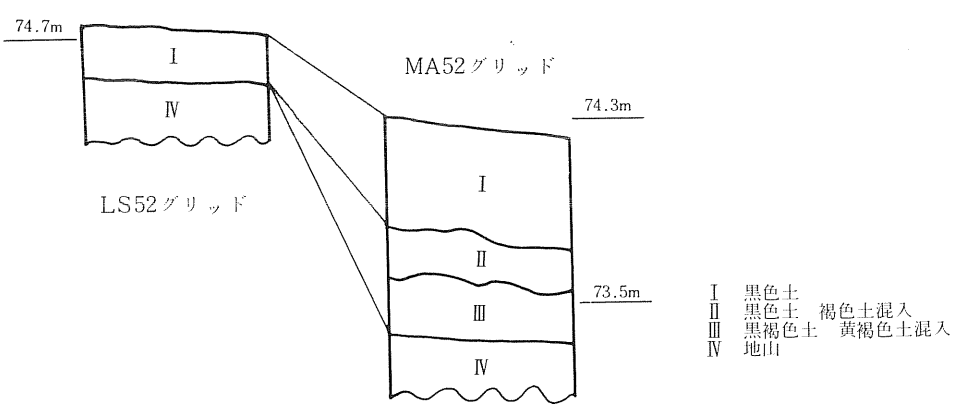
第２図　遺跡全体図

不整形プランを検出した。また縄文土器の集中範囲は、西側と南側から入っている谷ということが判明した。遺物は流れ込みあるいは投棄されたものと思われたが、何らかの遺構に関連する場合も考えられたため、出土位置とレベルを記録することにした。7月30日調査区全景写真の撮影を行なった後、LS 49、LT 49 グリッド内で確認された楕円形プランの調査と、遺物散布区域の遺物取り上げに着手。楕円形プランのほうは、石囲炉をもつ竪穴住居跡であることが判明。土層断面を実測し、8月4日床面精査を行なった。梅雨前線の活動が活発で、調査の未消化部分が目につく。LS 53、LS 54 グリッド内で検出した土坑、柱穴様プランは、後世の攪乱ということがわかった。8月17日調査区の南側に盛り上げた排土が、雨で崩壊流出しないよう、土止めを打つ作業を行なった。8月18日、LT 55 グリッド内で土坑を検出し、SK 01 とする。8月20日竪穴住居跡の平面実測、炉跡の調査後完掘写真を撮影した。遺物散布区域内 LT 52 グリッド、MA 48 グリッド内で焼土を検出した。8月24日遺物の収納を行なって調査を終了した。

第2章　調査の記録

第1節　遺跡の土層（第3図）

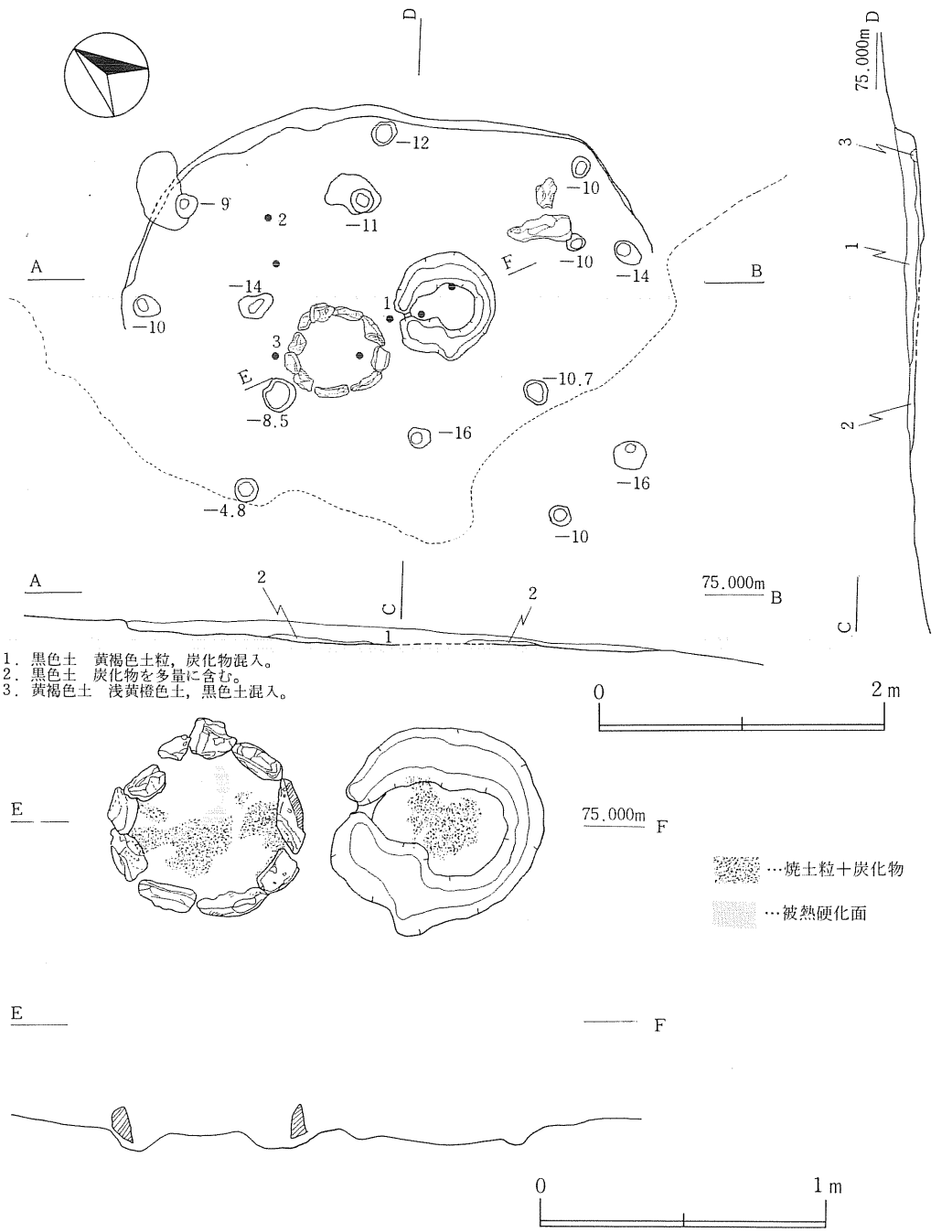
調査区は、東から西に緩やかに傾斜しており、南側と西側から入っている谷を除く部分は、20～30㎝の厚さで黒色土が堆積している。谷の部分は地山まで3層に分層される。埋土は、黒色土を主体とし、褐色土、黄褐色土が混入しているものである。



第3図　遺跡土層模式図

第2節　検出遺構と遺物

1　遺構について

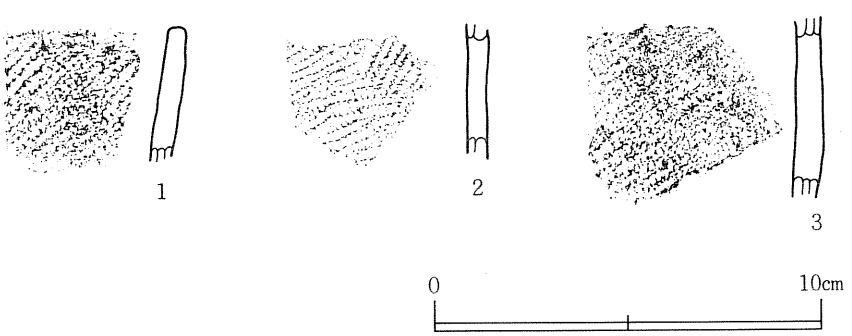


第4図　SI01竪穴住居跡実測図・炉跡実測図

検出遺構は、SI 01 竪穴住居跡１軒、SK 01 土坑１基である。

SI 01 竪穴住居跡　（第４図、第５図、図版１）

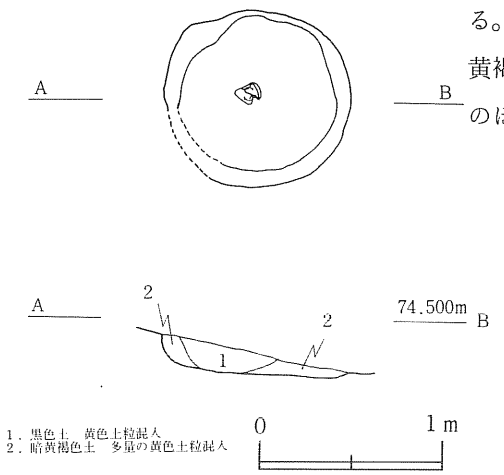
LS 48、49、LT 48、49 グリッドに位置し、地山まで黒土を除去した段階で確認された。黒土中でプラン確認ができる場合があることを想定して、数度にわたりプラン確認を行なったが、第１回目のプラン確認の時に LT 49 グリッド内で炭化物の出土が観察された。結局その時にはプランをつかむことができなかったが、炭化物が出土した範囲と石囲炉の位置がほぼ同じであった。地山が東から西へ傾斜しているため、本遺構を確認した時には、西側の床の一部と壁は失なわれてしまっていた。その下半が残存した柱穴によって、竪穴住居の規模が推定できる程度であった。平面形は楕円形を呈し、推定規模は長軸 384 ㎝、短軸 310 ㎝を測る。地山を５～ 20 ㎝程度掘り下げて床面としている。床面は、よく踏み固められている。柱穴は、壁際に８本、石囲炉を取り囲むように５本穿たれる。東側の２本を除き床面から 10 ～ 15 ㎝前後の深さをはかる。埋土は、黒色土を主体とし、炭化物と黄褐色土を含む。竪穴住居中央部やや北西側に寄った位置に、石囲炉を検出した。石囲炉は、床面をドーナツ状に掘りくぼめ、黒色土を充塡しながら河原石を固定している。石は、形の異なったものが巧みに配置されており、内外面に火熱を受けた痕跡が観察された。炉床面も火熱を受けた痕跡が明らかで、一部分は焼土化していた。石囲炉は直径 70 ㎝のほぼ円形を呈する。さらに石囲炉の南東側にドーナツ状のくぼみが検出された。規模は、直径 70 ㎝のほぼ円形で、その内側の床面に被熱硬化面が観察された。石囲炉と同規模の作りかえ前の石囲炉跡であると思われる。遺物は、床面からやや浮いた状態で縄文土器破片７点が出土した。７点とも縄文の施文のみで、本遺構の営まれた時期を特定する資料になり得なかった。



第５図　SI01竪穴住居跡出土遺物拓影図

SK 01 土坑　（第６図、図版１）

MA 55 グリッド杭の北西に位置し、地山面まで黒土を除去した段階で検出した。平面形は円形を呈し、規模は直径約 100 ㎝をはかる。南側の壁と底部の一部は、攪乱を受け失なわれてい

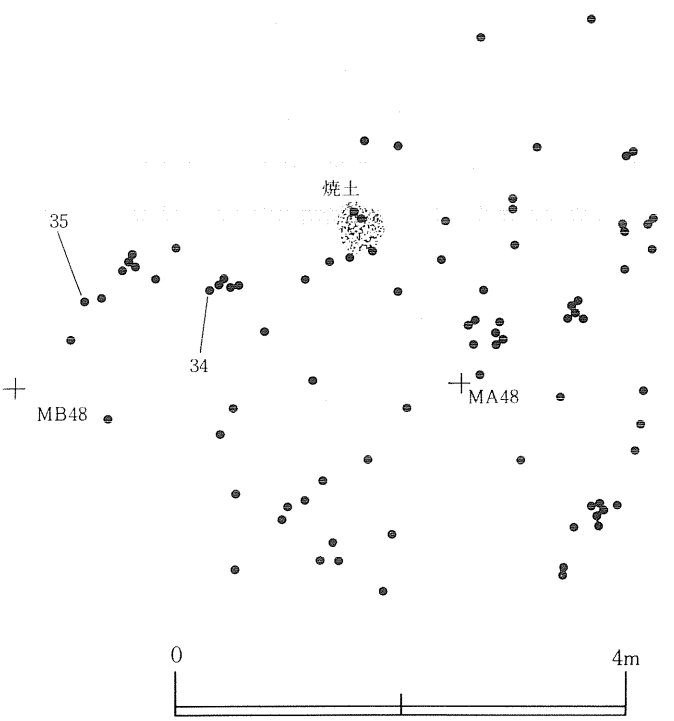


第６図　SK01土坑実測図

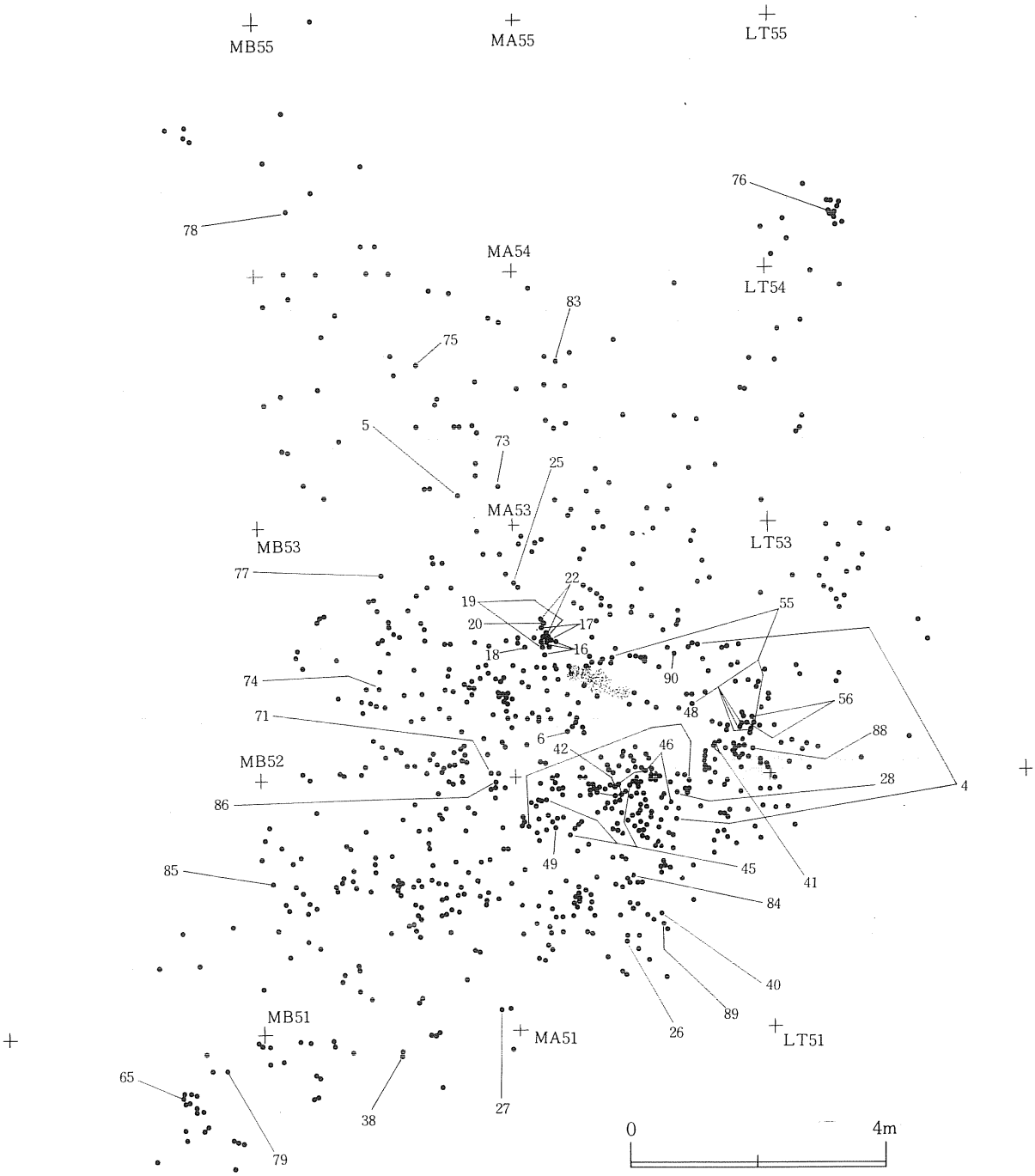
る。深さは、５～20㎝をはかる。埋土は黒色土、暗黄褐色土がレンズ状に堆積していた。遺物は自然石のほか出土せず、時期の特定はできなかった。

２　遺物散布区域と遺物について　（第７図～第13図、図版２～４）

LT 51、52、MA 51、52 グリッドを中心とする区域と、MA 48 グリッドを中心とする区域からは、縄文時代後期と晩期の土器片と石器、古銭などが出土している。LT 52 と MA 48 グリッド内からは焼土が検出されている。LT 52 グリッド内で検出された焼土は、黒色土中に浮いた状況を示し、流れ込んだものと推定される。MA 48 グリッド内で検出された焼土は、地山面が火熱を受け焼土化した様相を呈していた。後者については住居跡等の遺構に伴うことも考えられ、周辺を精査してみたものの遺構と推定しうるものは検出されず、焼土のみであった。古銭については、４枚出土し、１枚は寛永通宝、残りは腐蝕が著しく判別できなかった。遺物散布区域から出土した土器と石器については、以下の通りである。



第８図　遺物散布区域遺物出土状況図（２）



第７図　遺物散布区域遺物出土状況図（１）

土　器

出土土器総数は、500 点をこえる。そのほとんどが縄文のみのものでしかも小破片が多い。出

土点数をグリッドごとにみると、MA 51 グリッドが最も多く、以下 LT 51、MA 52 と続く。ここでは、第Ⅰ群と第Ⅱ群に分け、文様の有無によりそれぞれを数類に分類した。

第Ⅰ群土器　縄文時代後期の土器を本群とした。

第 1 類　（第 9 図 4 ～ 15）

地文に縄文を施した後、直線または曲線の沈線を描くもの。4、5 は同一個体の浅鉢で RL の縄文を地文として、半截竹管による沈線を施す。

第 2 類　（第 9 図 16 ～ 26）

撚糸文を地文とし直線または曲線の沈線を施すもの。16 ～ 22 は同一個体で、胴部に単軸絡条体を回転施文後、二条の平行沈線で口縁部文様帯と胴部を区画している。口縁部文様帯は、口唇部下に二条の平行沈線を施し、その下を山型と S 字状の沈線で構成される。器形は、深鉢である。24 ～ 26 は、網目状撚糸文を地文に施し、同一個体である。

第 3 類　（第 11 図 55 ～ 63）

地文のみのものを一括した。55 は RL の縄文を施し、口縁部に幅 1 ～ 1.5 ㎝の粘土紐を貼り付けている。56 は、55 と同一個体で胴部破片である。58 ～ 60 は、同一個体で、L の撚糸文が施文されている。

第Ⅱ群土器　縄文時代晩期の土器を本群とし、5 類に分類した。

第 1 類　（第 10 図 27）

口唇部に刻みを有し、地文に比較的細い縄で撚った RL の縄文を施した後、半円と直線を組み合わせた沈線が施文されるもの。

第 2 類　（第 10 図 28 ～ 40）

三叉文や刺突文などにより口縁部文様帯を構成するもの。38 ～ 40 は、二条の平行沈線間に刺突文が充填されている。

第 3 類　（第 10 図 41 ～ 44）

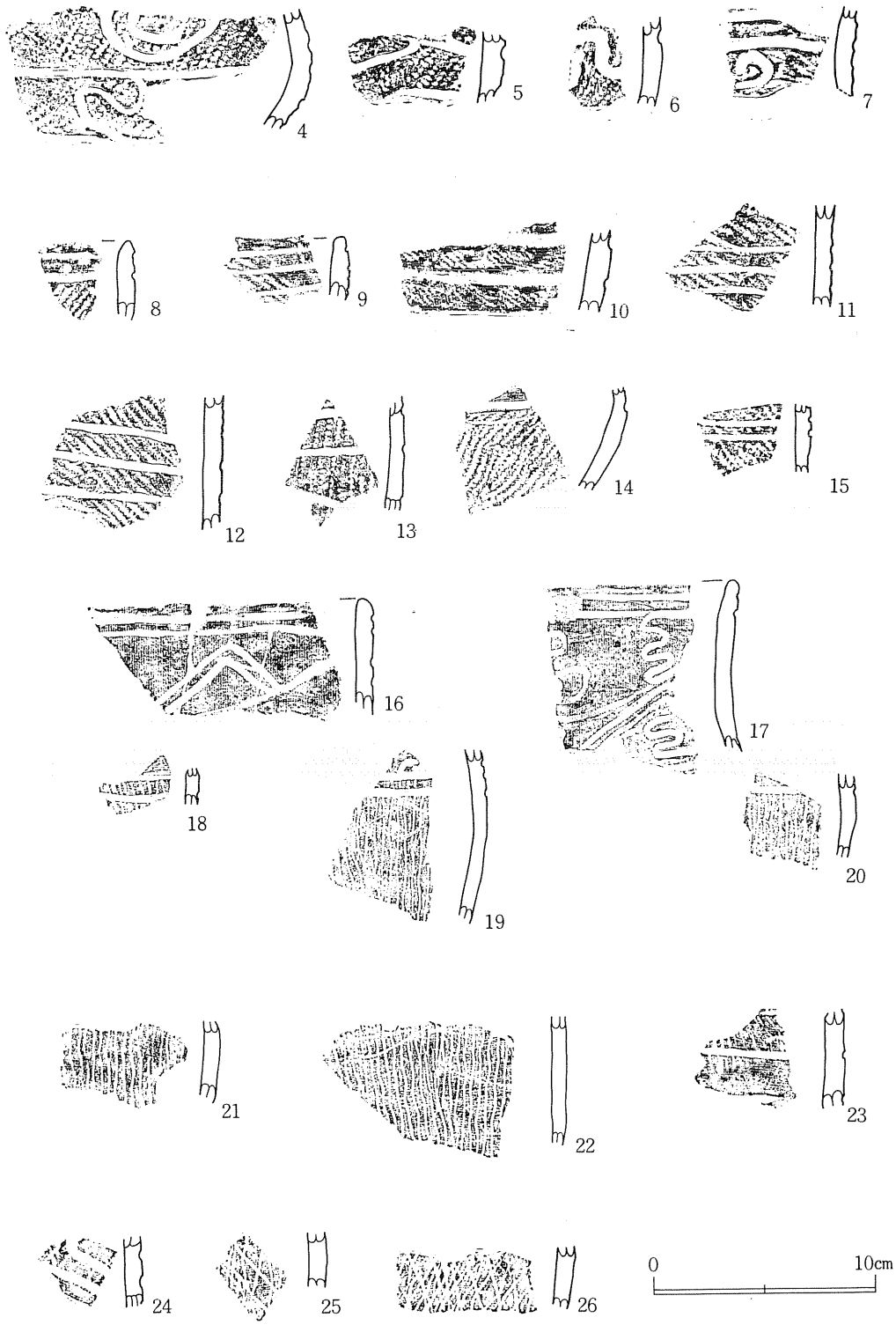
主に平行沈線によって口縁部文様帯が構成されるもの。42 ～ 44 は、口縁部上端に半截竹管状の工具による刺突がめぐる。また口縁部内面に一条の沈線がまわっている。

第 4 類　（第 10 図 45 ～ 54）

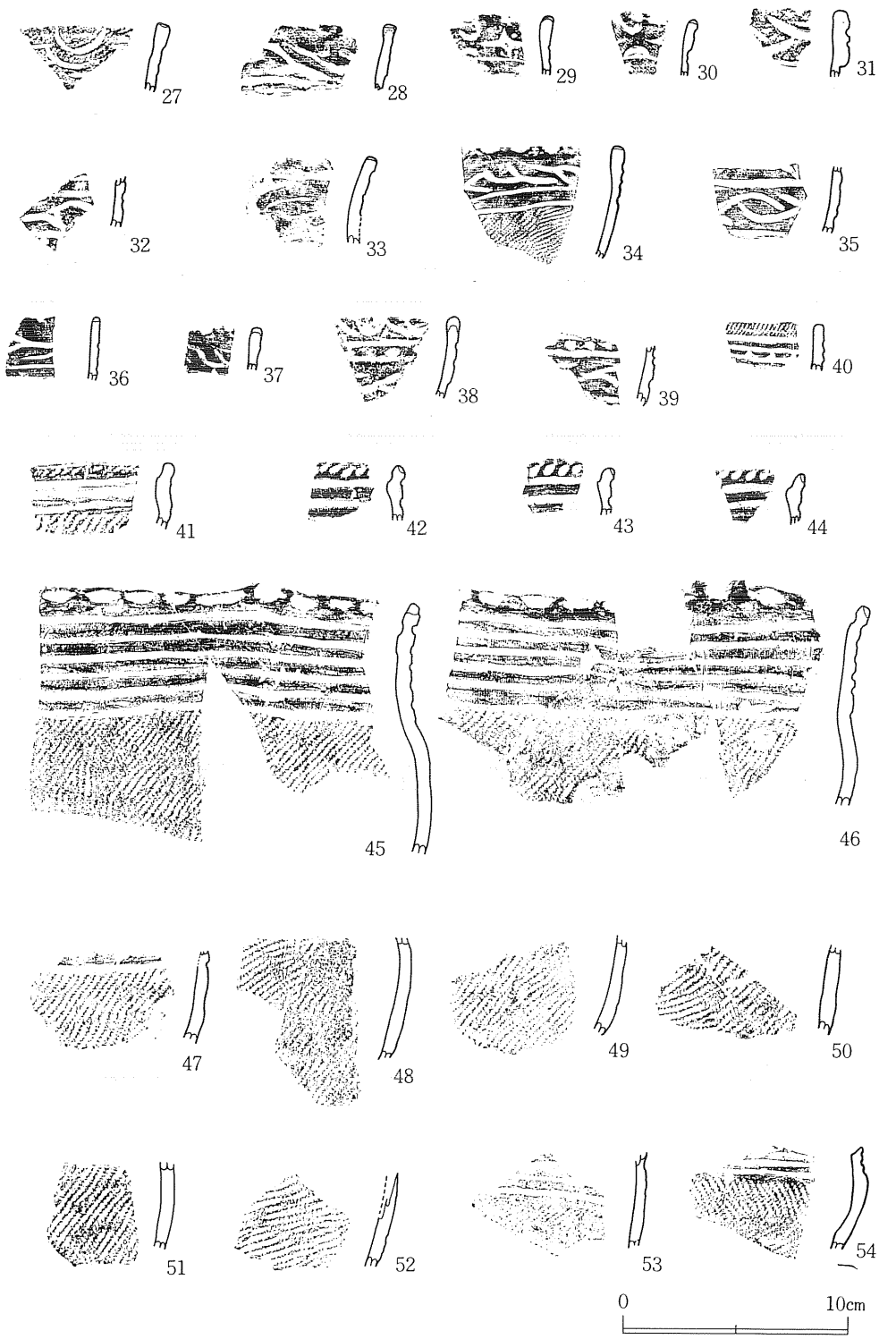
第 3 類土器に伴うと思われる半精製土器を本類とした。45 ～ 49 は同一個体の深鉢で、胴部上方がやや外側にふくらみ加減のカーブを描く。口縁端部に刻みが施され、口縁部文様帯は、六条の平行沈線が施文される。また、口縁部内面には、一条の沈線が施される。内外面に、煤が付着している。

第 5 類　（第 11 図 64 ～ 71）

地文のみの土器を一括した。65 ～ 70 は、細い縄で撚った縄文が施されている。71 は、土器

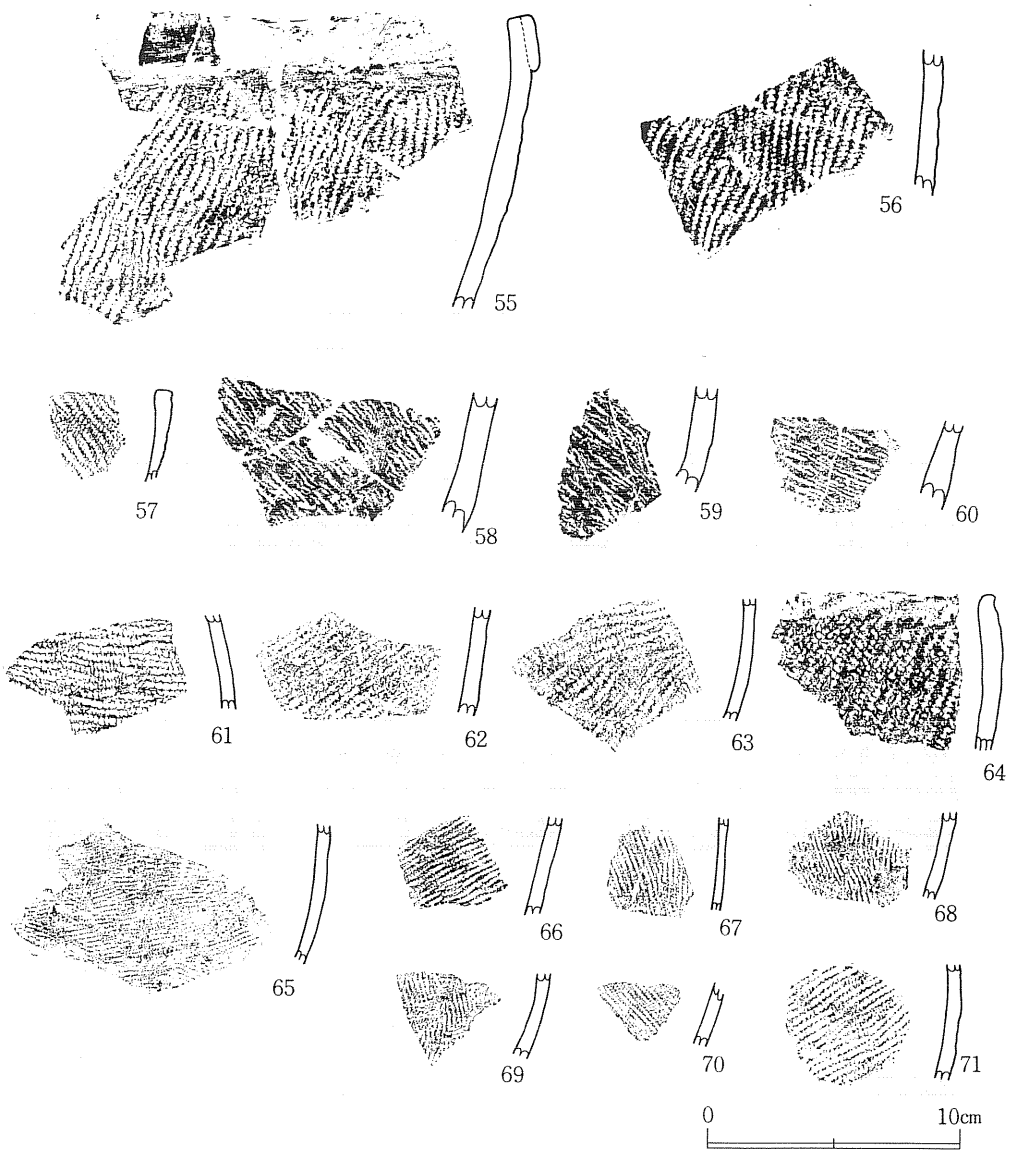


第９図　遺物散布区域出土遺物拓影図（１）



第10図　遺物散布区域出土遺物拓影図（２）

破片を円盤状に加工したものどある。



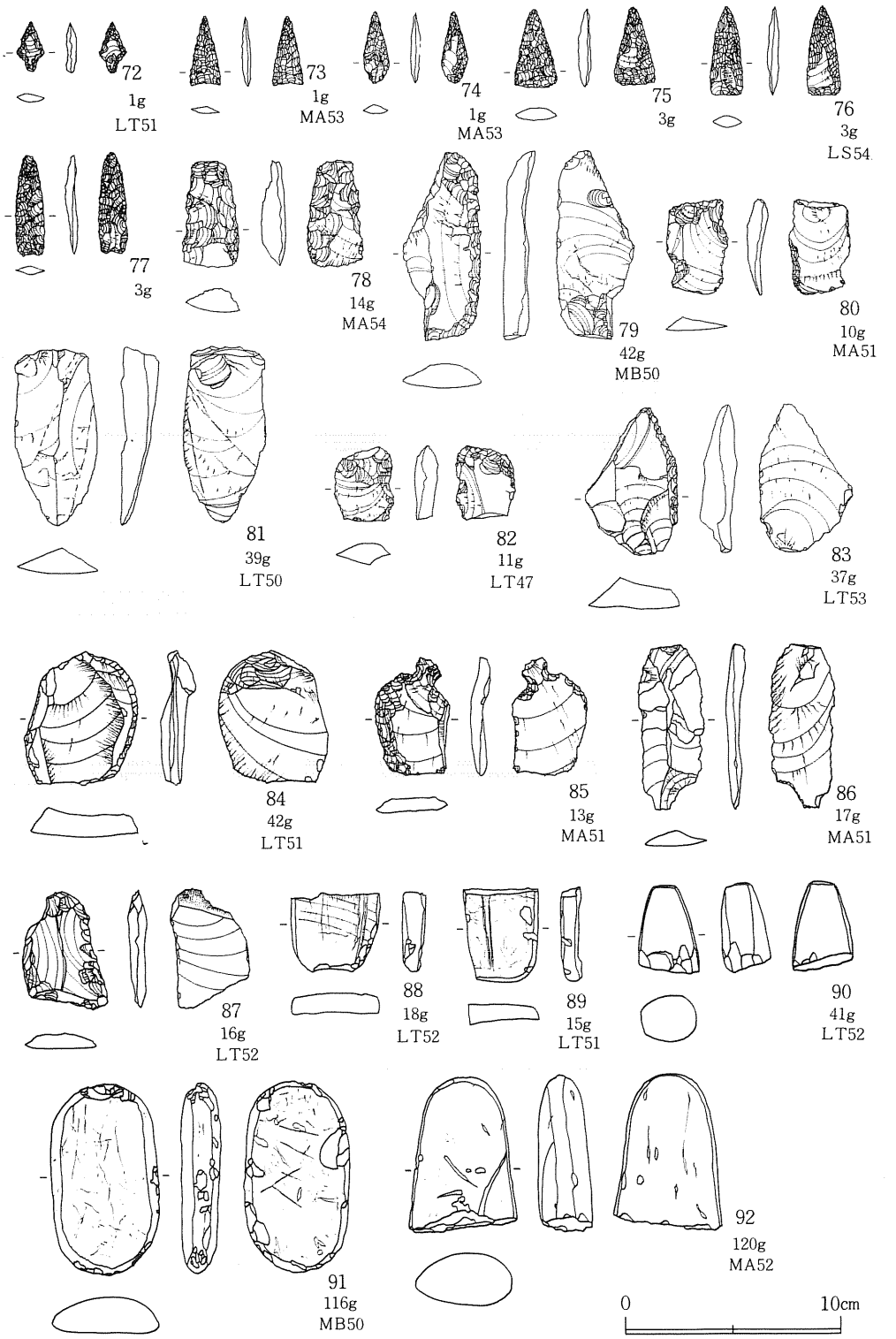
第11図　遺物散布地出土遺物拓影図（3）

石　器

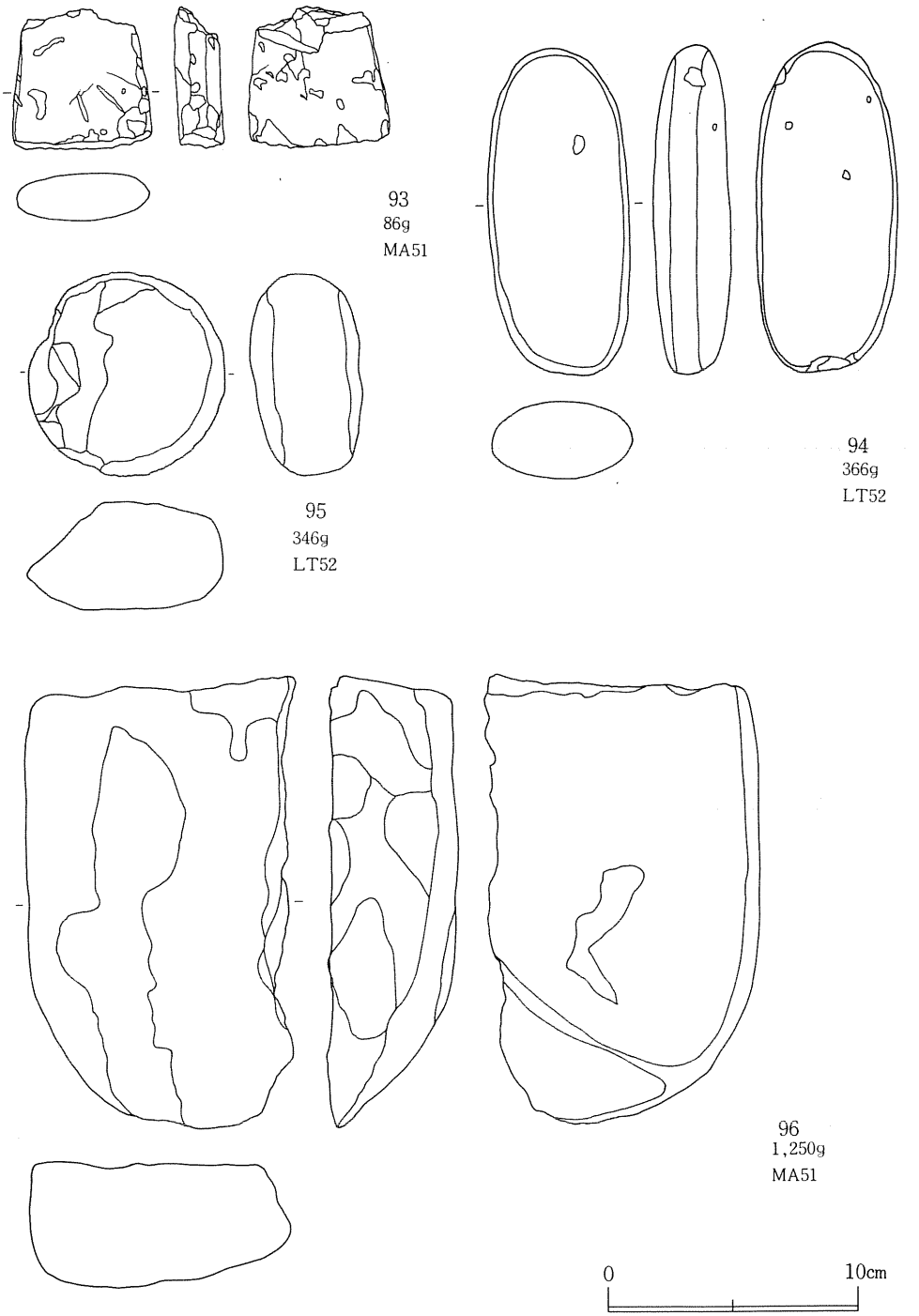
剝片または剝片を素材に用いた石器、礫石器に大別される。石材は、凝灰岩、泥岩、安山岩などが用いられている。

石鏃　（第12図72～77）

有茎のもの4点、基部の作出しが不明確なもの1点である。両面から丹念な調整が施される。石材は、珪質泥岩、頁岩などである。



第12図　遺物散布区域出土石器実測図（1）



第13図　遺物散布区域出土石器　実測図（２）

石匙　（第 12 図 85）

縦形のもの1点である。つまみ部を含む約5㎝の残存資料で刃部は半分近く欠損している。主要剥離面への調整はつまみ部の作出しのために加えられたものがほとんである。表面は、基部から左側縁にかけて細かい調整剥離が行なわれている。

スクレーパー　(第12図78～80、82～84、87)

8点出土している。78は、両面ともやや大雑把な調整が加えられている。79は、主要剥離面に若干の調整を加えている。表面は、刃部作出のため細かい調整が加えられている。80は、第1次剥離面を残し、側縁に若干の調整を施している。84の石材は、珪質泥岩を用いている。先端部を欠損し、切断面に再度の調整を加えている。

剥片　(第12図81、86)

出土石器を数量の面からすれば、その大部分が剥片で占められる。86は、先端が欠失しているが、使用痕のある剥片である。石材は、凝灰質シルト岩である。

石斧　(第12図90～92、第13図93、94)

7点出土している。うち全面にわたり研磨されたもの2点、自然礫を若干研磨したもの5点を数える。90は、石材に安山岩を用いて、各面とも丁寧に研磨されている。91も両面がよく研磨され、扁平に近い形状を示す。

石皿　(第13図96)

1点出土した。石材は安山岩である。大部分が欠失してしまっているが、片面の中央部が凹んでいるのが観察される。

すり石　(第13図95)

4点出土した。扁平な円礫で、側面に敲打痕を残す。

線刻石　(第12図88、89)

2点出土した。88、89とも石材は凝灰岩である。

第3章　まとめ

本遺跡からは、石囲炉を有する竪穴住居跡1軒と土坑1基が検出された。これら遺構については、出土遺物、特に土器が皆無であったり、出土したものの縄文のみであったりで時期決定の決め手になり得なかった。ただ、竪穴住居跡については、石囲炉をもつという点から、ある程度まで時期をしぼることができるのではないかということで検討してみた。『大館市史』によれば、石囲炉をもつ竪穴住居の出現について、大館地方において、縄文時代中期後葉を遡る時期のものはない(註1)、とされている。周辺の遺跡で石囲炉をもつ竪穴住居が検出されているのは、

上ノ山遺跡第3次調査、本道端遺跡、福館・橋桁野遺跡、萩峠B遺跡、鳶ケ長根Ⅲ遺跡などを数えるのみである。上ノ山遺跡第3次調査では、円筒上層e式期の竪穴住居跡に石囲炉がみられたとされる。本道端遺跡では、大木10式期を3期に分け、第1期に複式炉をもつ竪穴住居が営まれ、第2期に住居中央寄りの「奥壁部」に特に大きな石を配する複式炉の流れをくむ石囲炉が付設される。第3期では、石囲炉の形態に「奥壁部」という意識が希薄になるという変遷がとらえられている。福館・橋桁野遺跡では、橋桁野調査区で長方形プランの石囲炉をもつ竪穴住居跡が検出され、時期を縄文時代中期末葉としている。萩峠B遺跡では、後期初頭に位置づけられる住居跡に石囲炉が設置されている。鳶ケ長根Ⅲ遺跡では、晩期前半とされる住居跡に石囲炉が伴うとされるが、その詳細についてはやや不明である。このように見てくると、SI 01竪穴住居跡の営なまれた時期は、中期最終末から晩期のあいだに限定されてくる。調査区から出土している遺物をみると、SI 01竪穴住居跡が位置するLT 49、LS 49グリッド出土遺物は皆無である。ただし、MA 48、MA 52の各グリッドを中心とする遺物散布区域からは、後期と晩期の土器が出土していることから、本遺構の時期は後期または晩期と推定できる。石囲炉の形態からする時期の特定は、大館地方の資料の僅少さから困難と言わざるを得ない。今後の資料の増加に期待したい。

註1　大館市史編さん委員会『大館市史』第1巻　1979（昭和54年）P 138

参考文献

比内町教育委員会『本道端遺跡』1986（昭和61年）

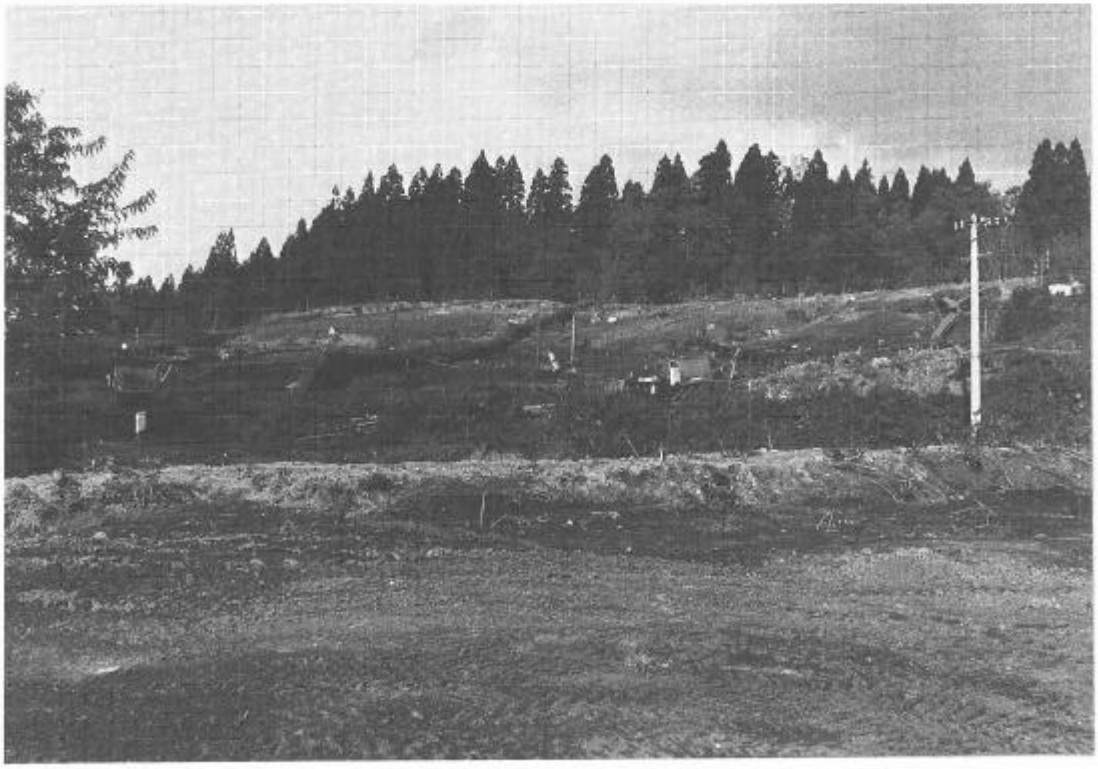
秋田県教育委員会　『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第84集1981（昭和56年）

上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡

図版1　遺跡付近の航空写真（昭和55年5月14日撮影）

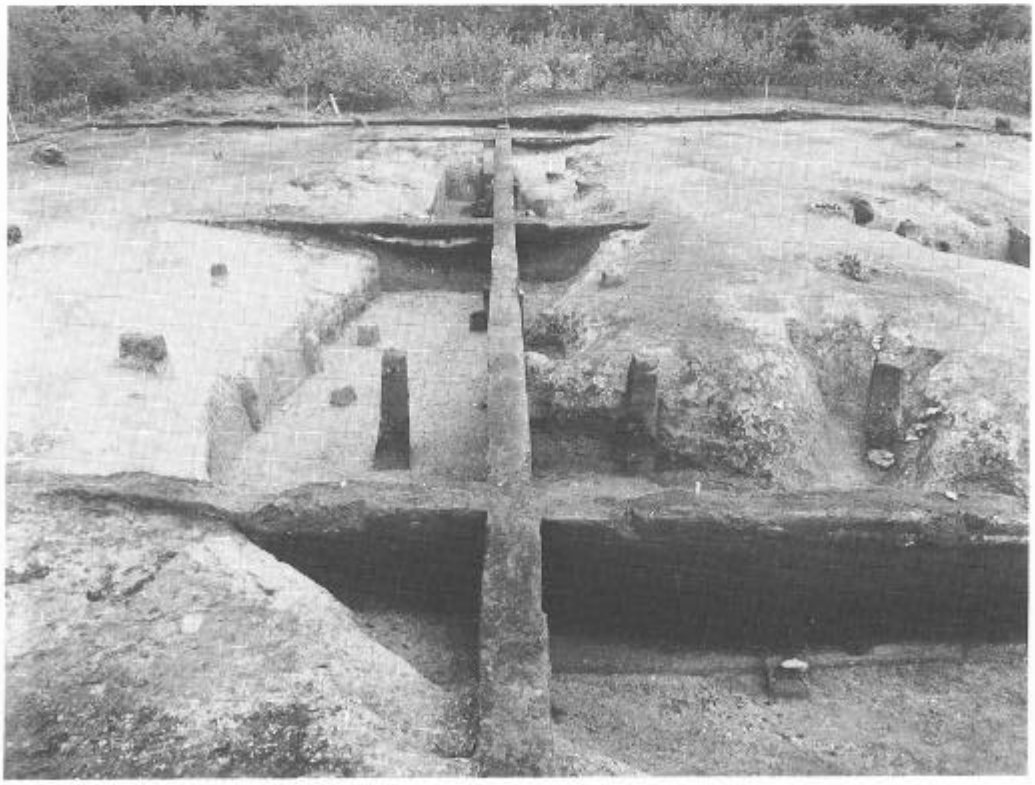
上ノ山Ⅰ遺跡

（上）西側から撮影　（下）上ノ山Ⅱ遺跡側から撮影



図版２　遺跡全景

(上)プラン確認状況　(下)掘り下げ状況



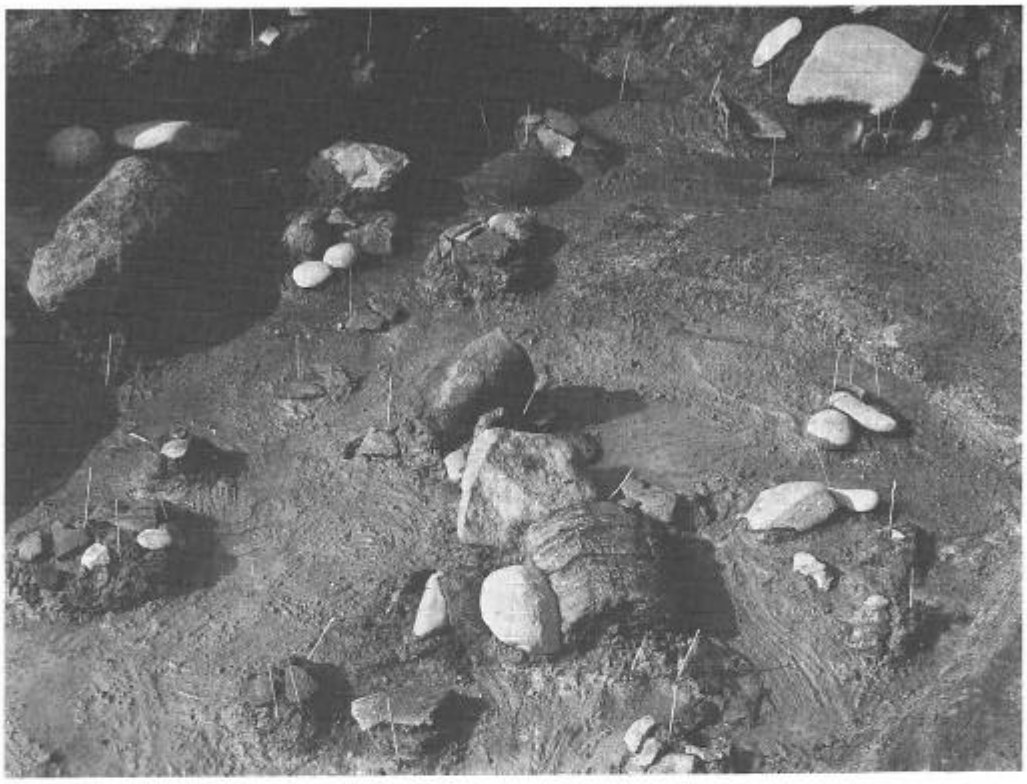
図版3　沢No. 1　検出状況

(上)沢頭部検出状況(土層断面の白色の層は大湯浮石層)
(下)沢頭部シラス層遺物出土状況

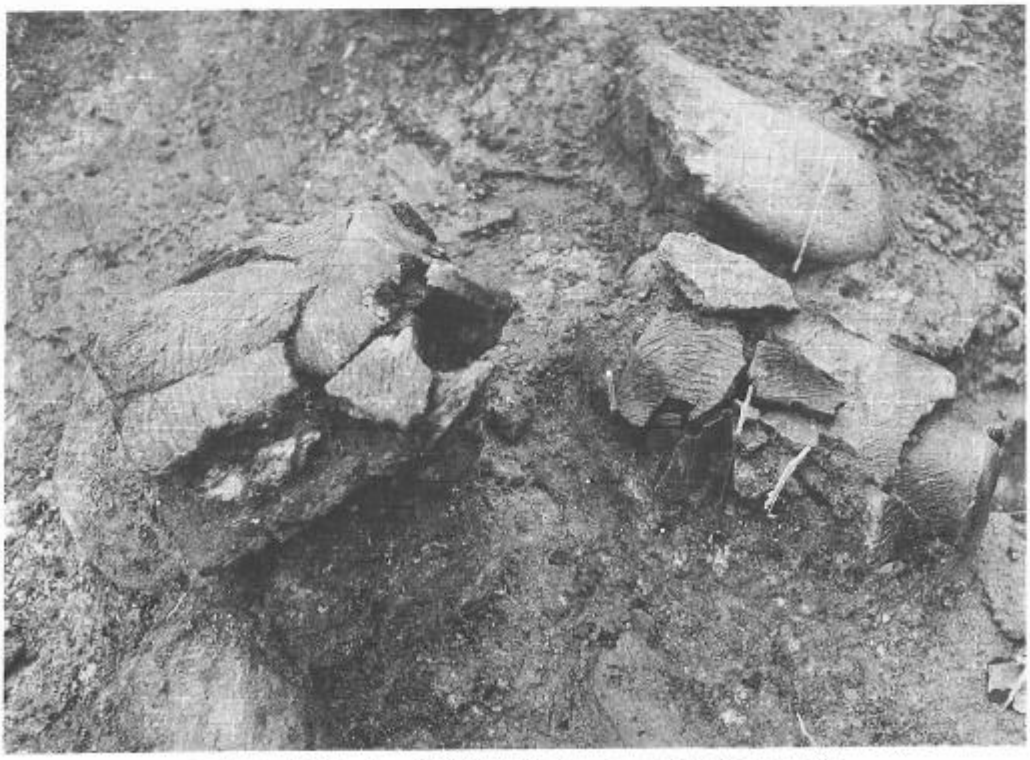
図版4　沢No.1　検出状況

(下)LT56・LS56　シラス層遺物出土状況
(上)LT58・MA58　シラス層遺物出土状況

図版5　沢No.1　シラス層遺物出土状況

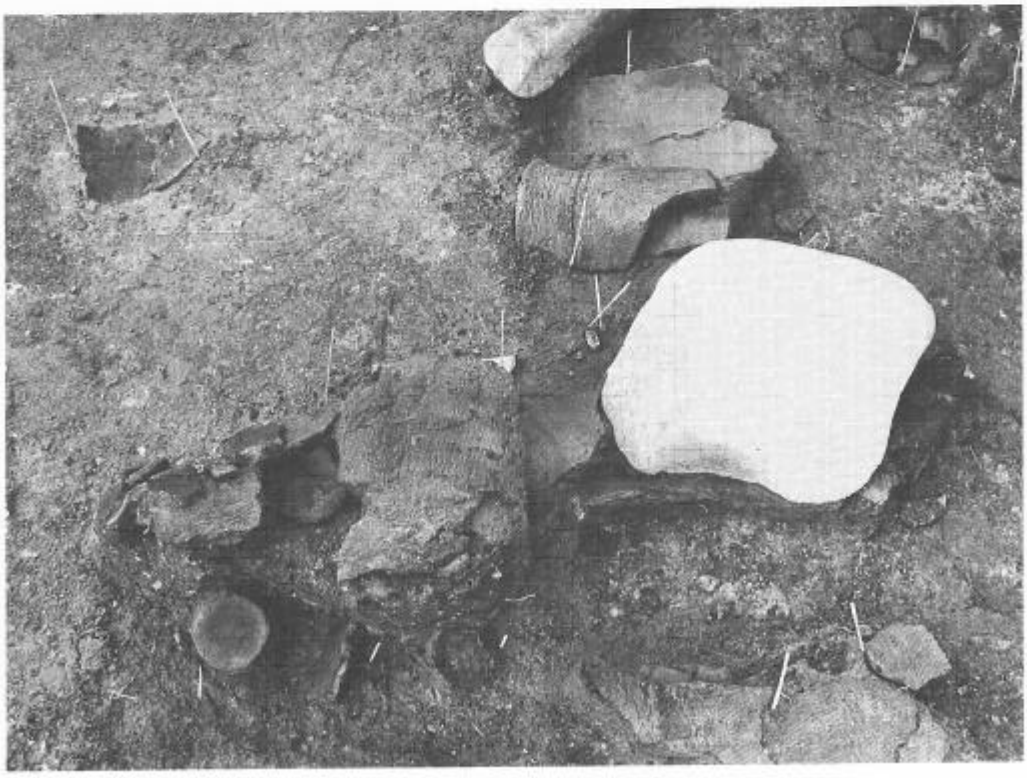


(上) MA56・57，MB56　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況
(下) MA57・58　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況



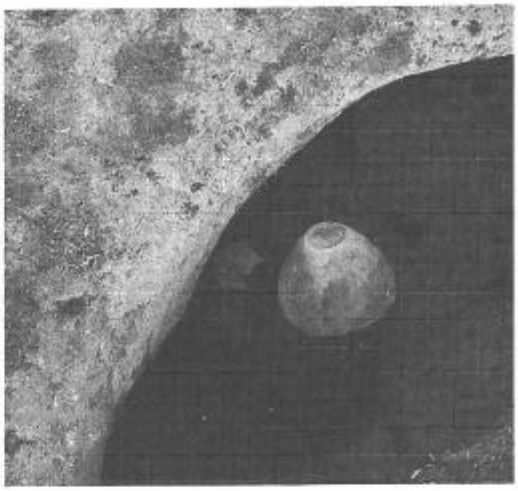
図版6　沢No. 1　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況

(上)MA57・58　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況
(下)MA58　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況

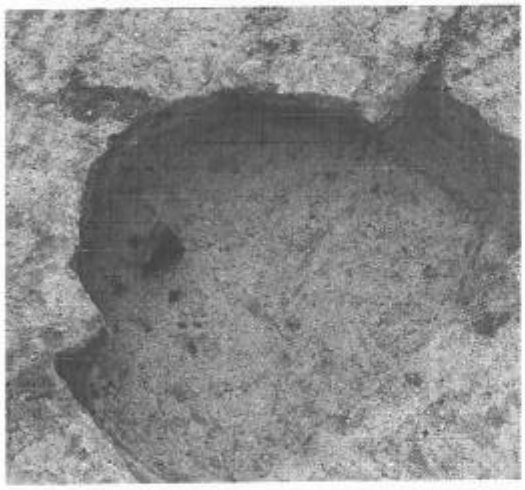


図版7　沢No.1　酸化鉄分含有シラス層遺物出土状況

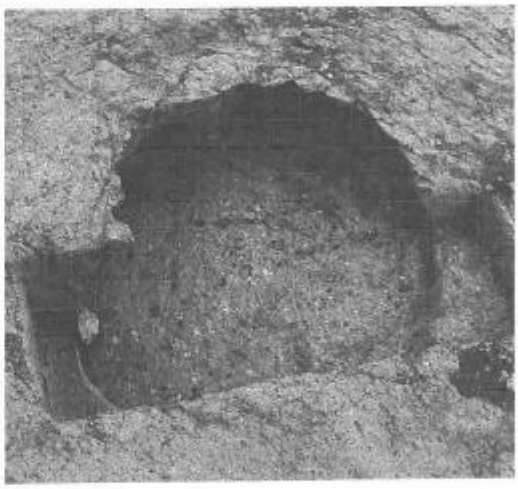
SKF101



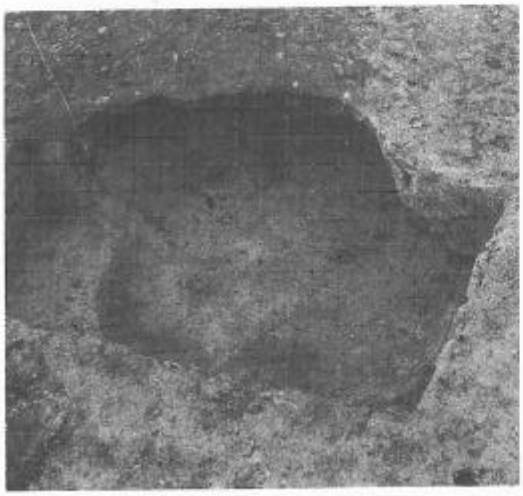
SKF101土器出土状況



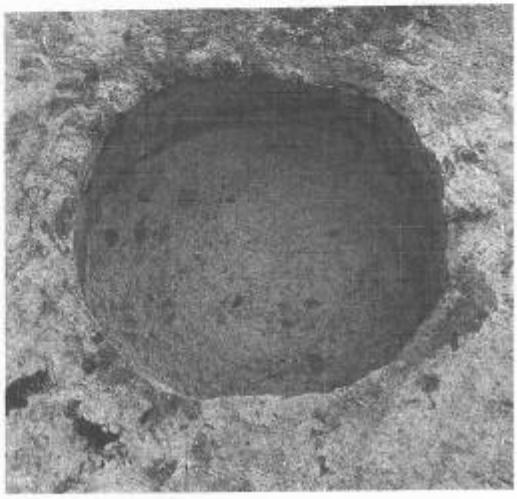
SKF103



SKF106



SKF104

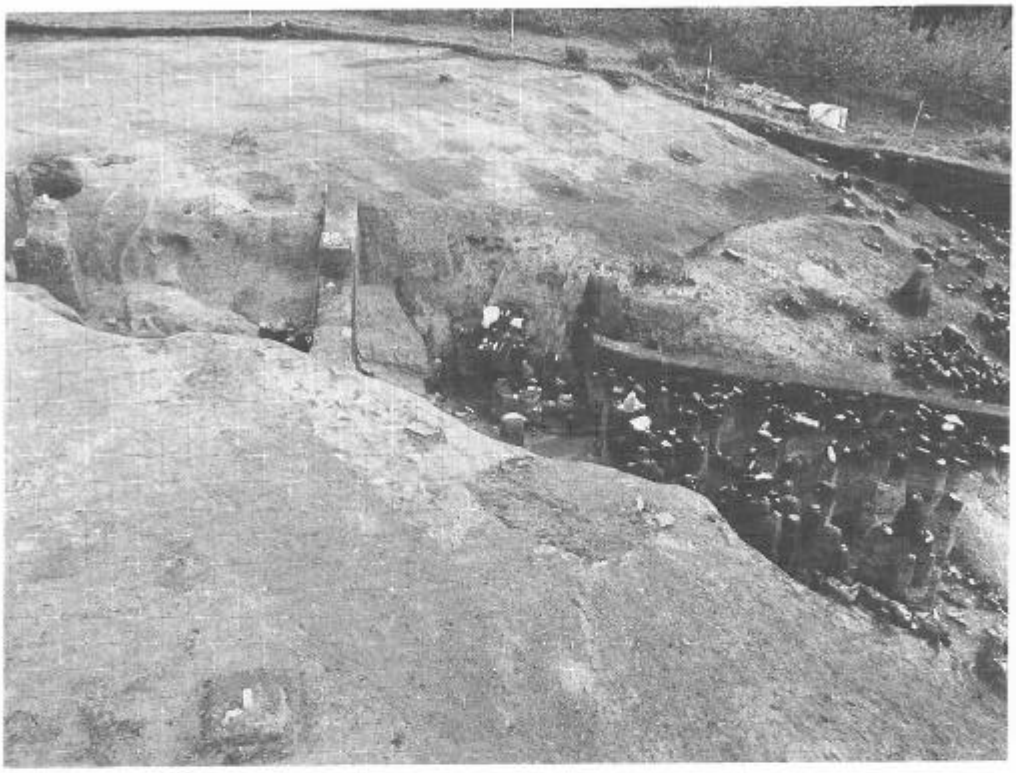


SKF108

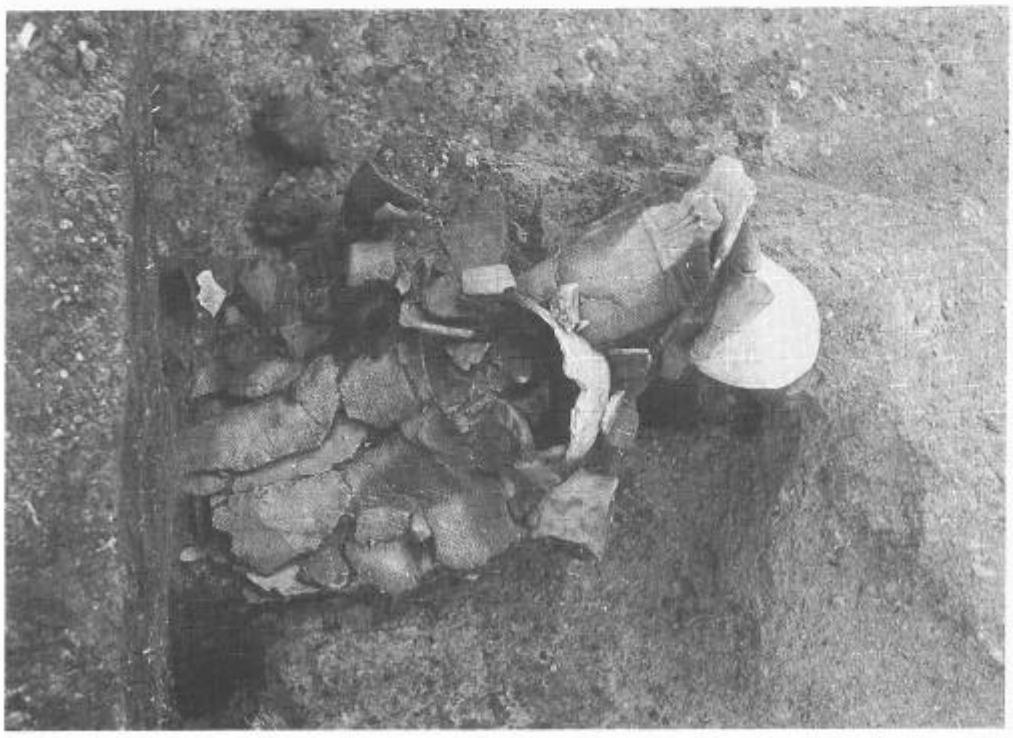
図版8　上位面検出のフラスコ状(袋状)土坑完掘状況

(上)沢No. 2(左側)・沢No. 3(右側)の位置関係
(下)沢No. 2　完掘状況

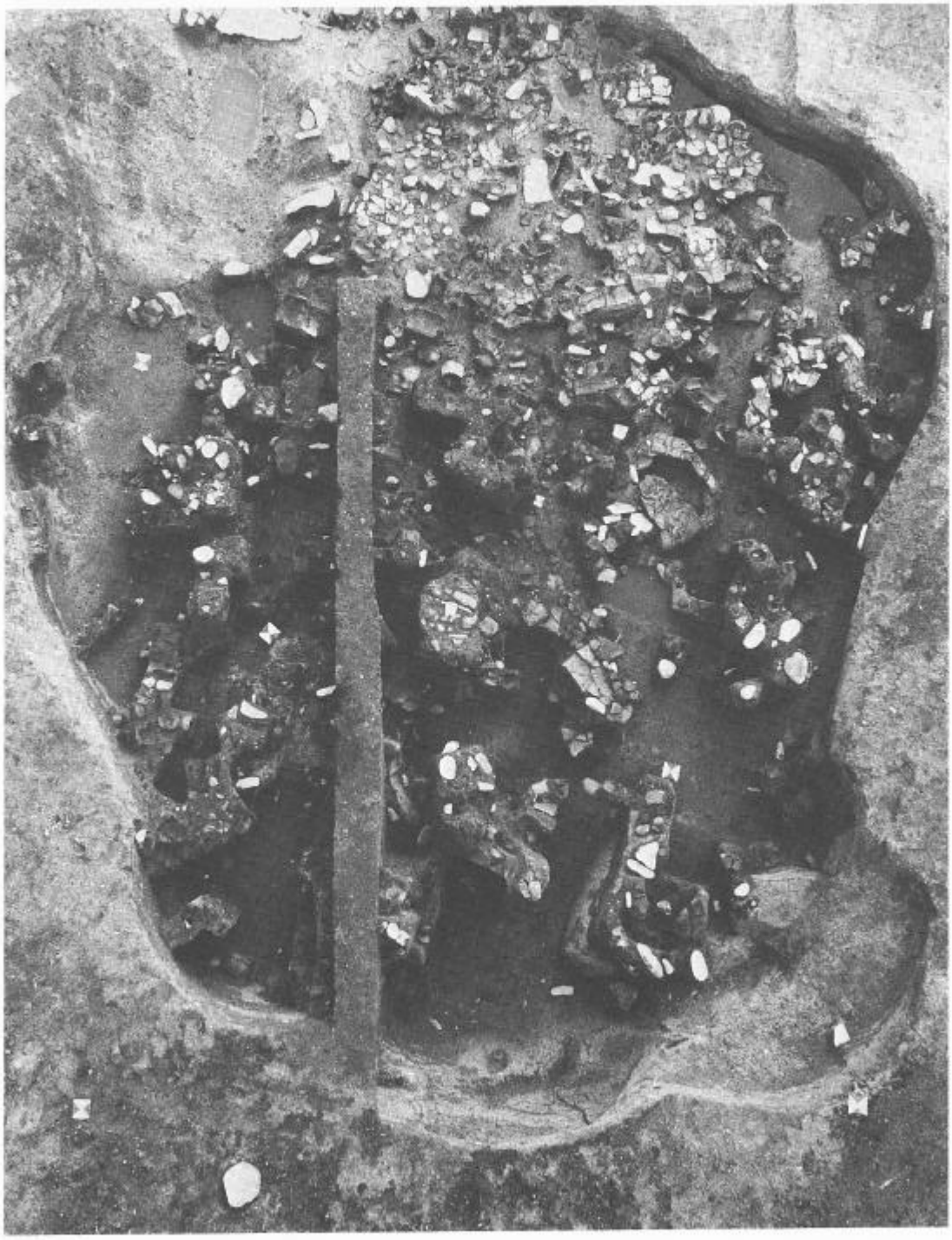
図版9　沢No. 2　検出状況



（上）沢No. 2　遺物出土状況
（下）シラス層上，円筒上層式土器出土状況



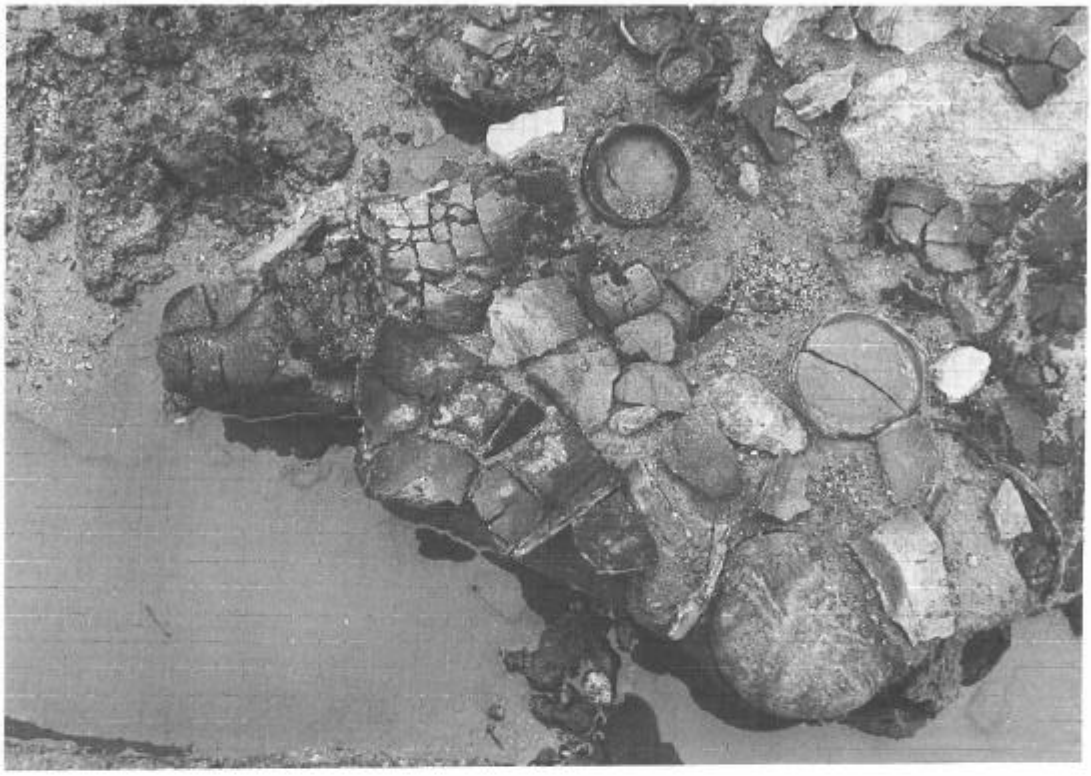
図版10　沢No. 2　遺物出土状況

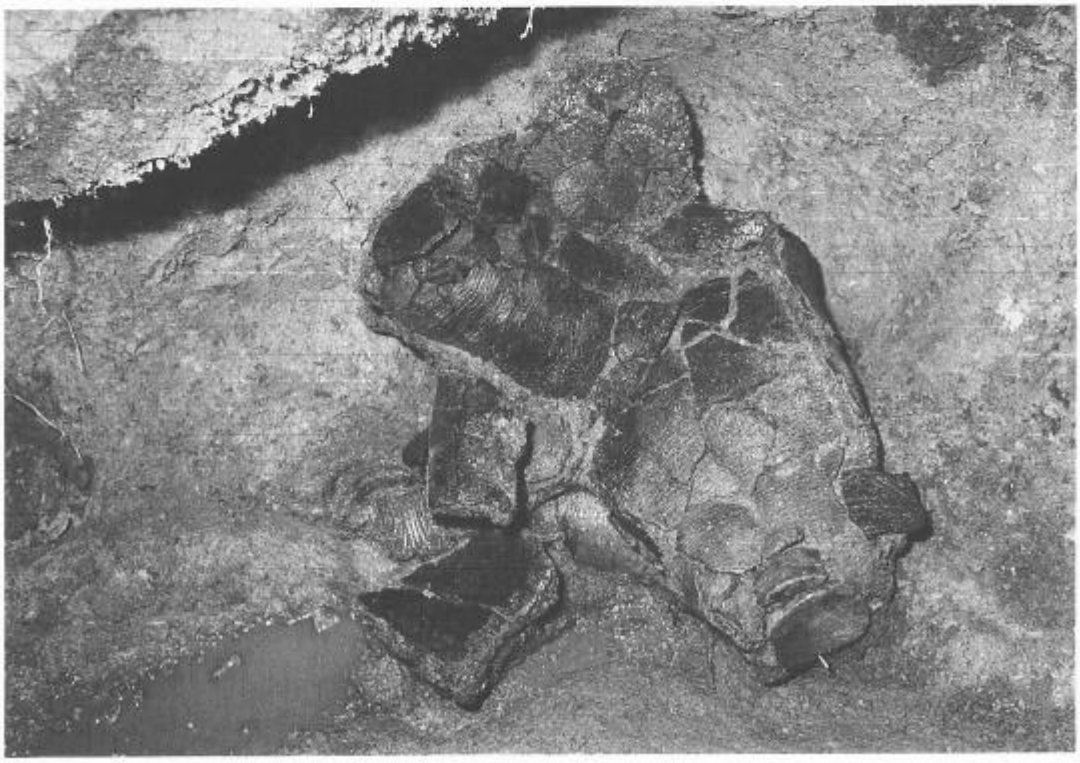


図版11　沢No. 3　遺物出土状況（北西側から空中撮影）

図版12　沢No. 3　遺物出土状況(近接撮影)

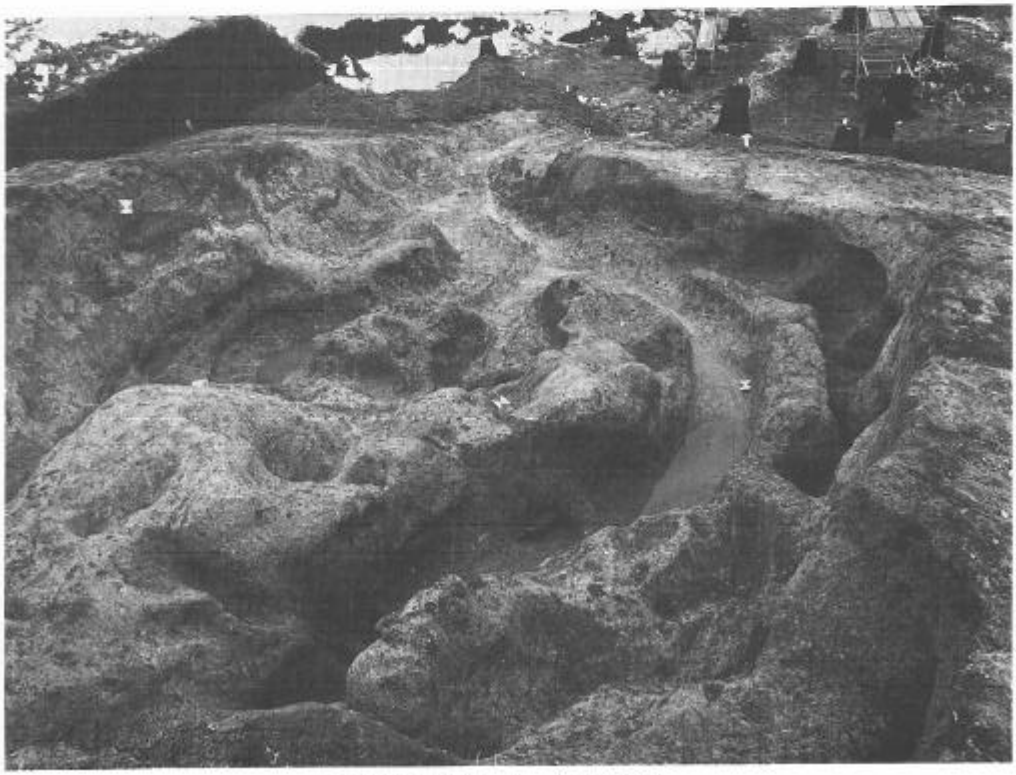
図版13　沢No. 3　遺物出土状況





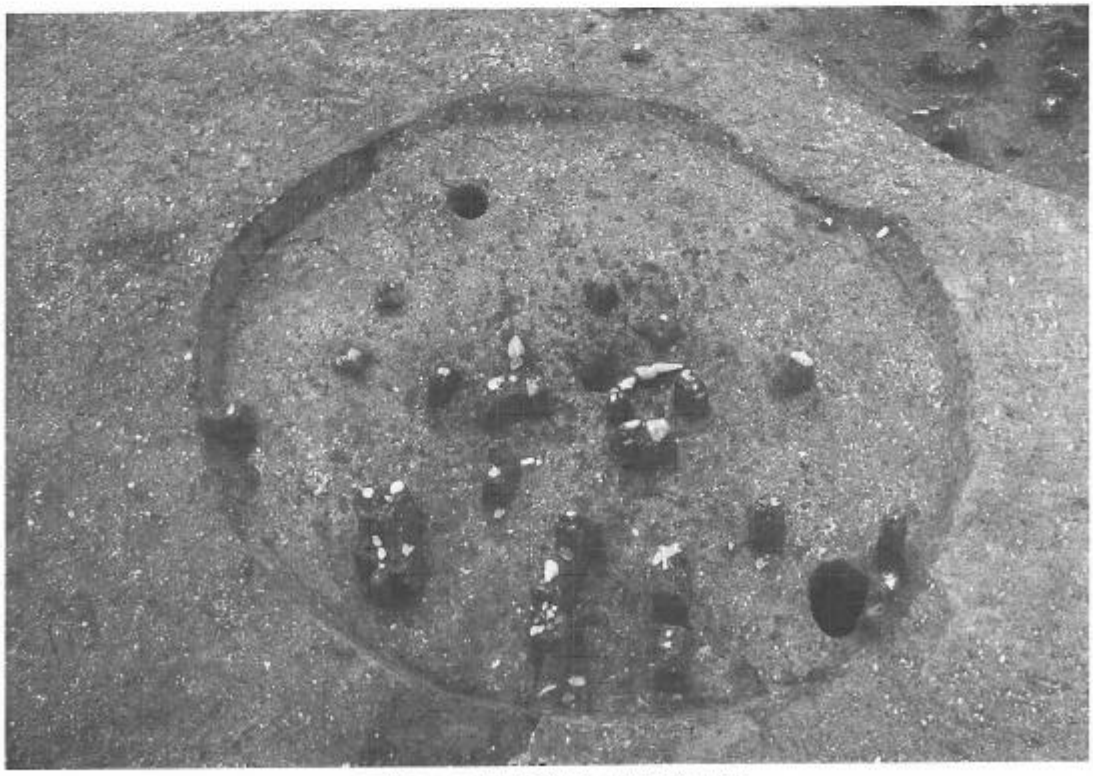
図版14　沢No. 3　遺物出土状況　RP42　RP43　RP48

（上）南東から撮影
（下）北西から撮影

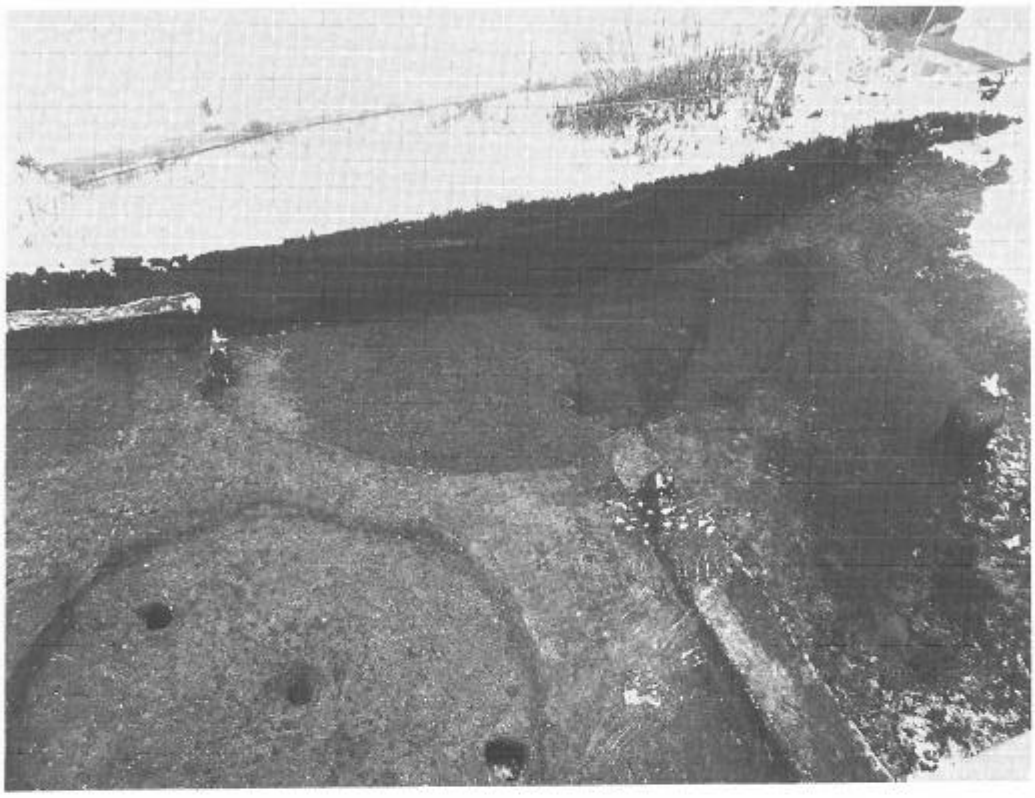


図版15　沢No. 3　完掘状況

(上) SI03竪穴住居跡プラン確認状況
(下) SI03竪穴住居跡遺物出土状況

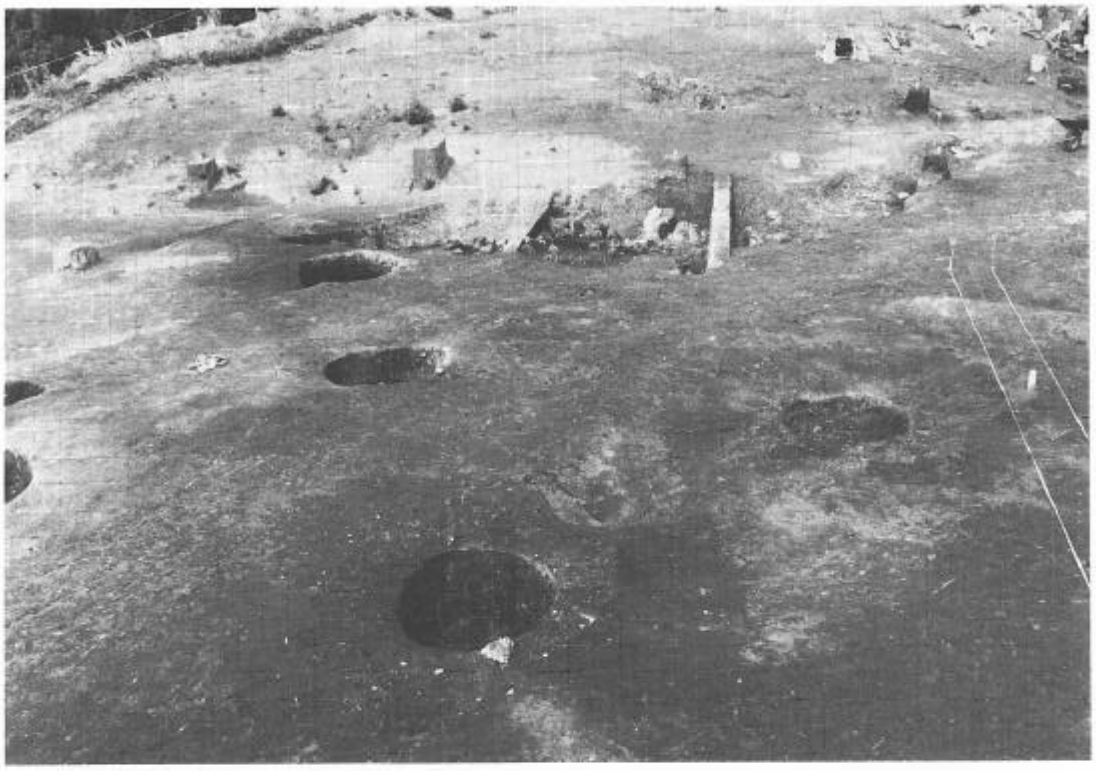


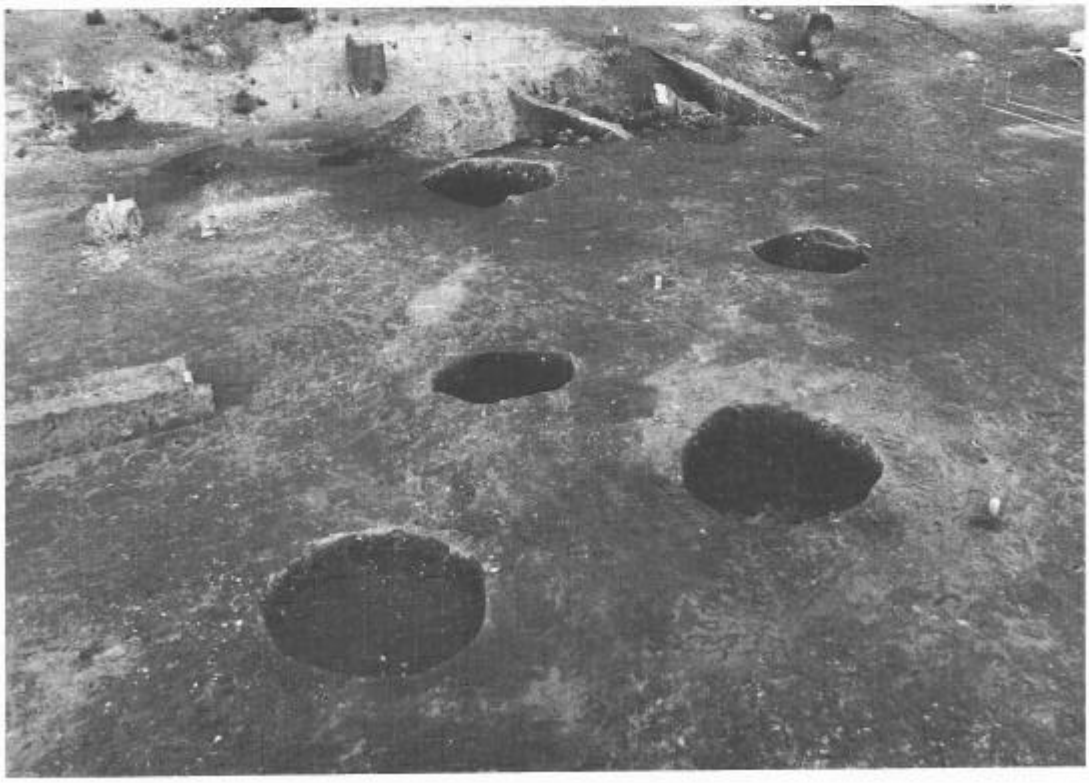
図版16　下位面検出の竪穴住居跡



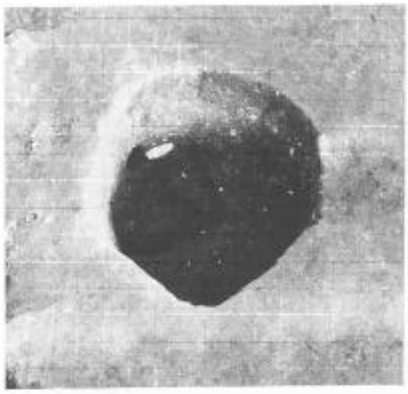
(上)SKI01竪穴遺構(奥)，SI03竪穴住居跡(手前)
(下)SKI02竪穴遺構

図版17　下位面検出の竪穴遺構

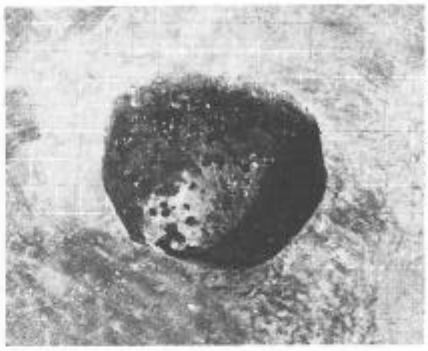




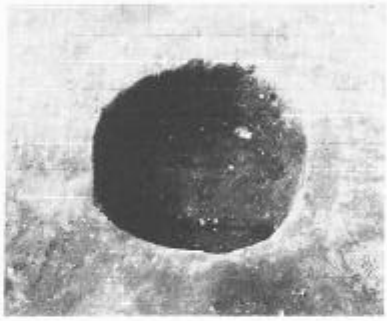
図版18　下位面第Ⅲ層上面検出土坑群



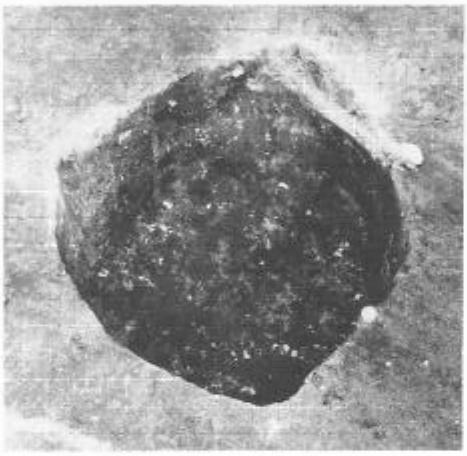
(左)SK04



(右)SK09

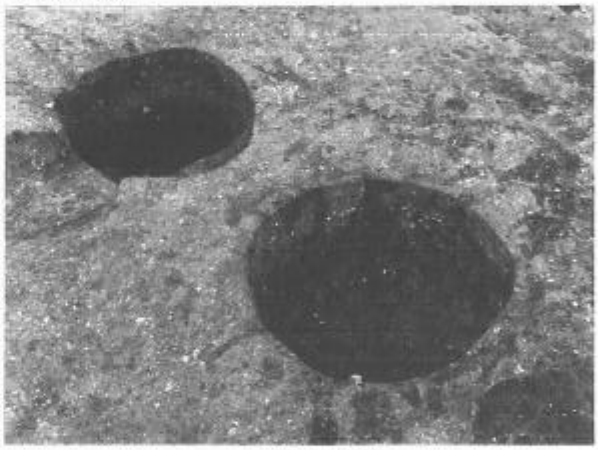


(右)SK10

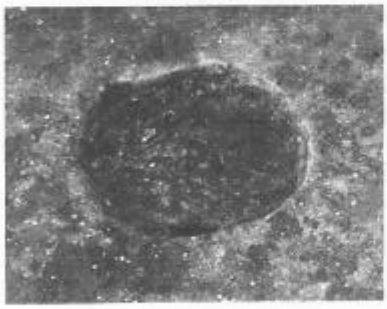


(上)SK05

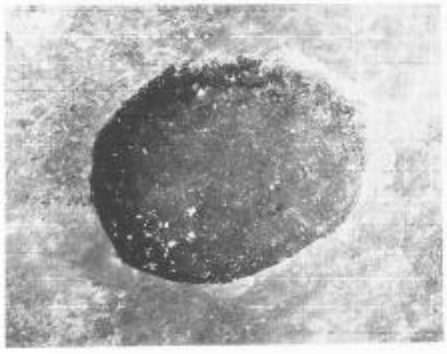
(下)SK18



(上)SK17

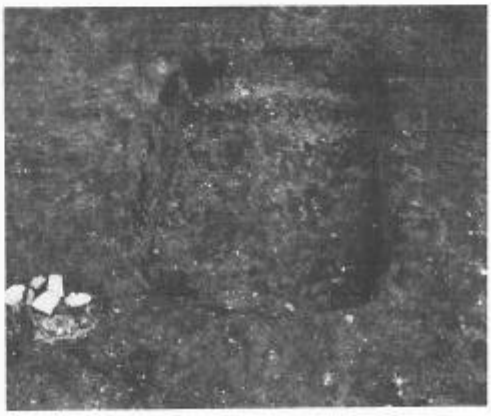


(左)SK07



(左)SK08

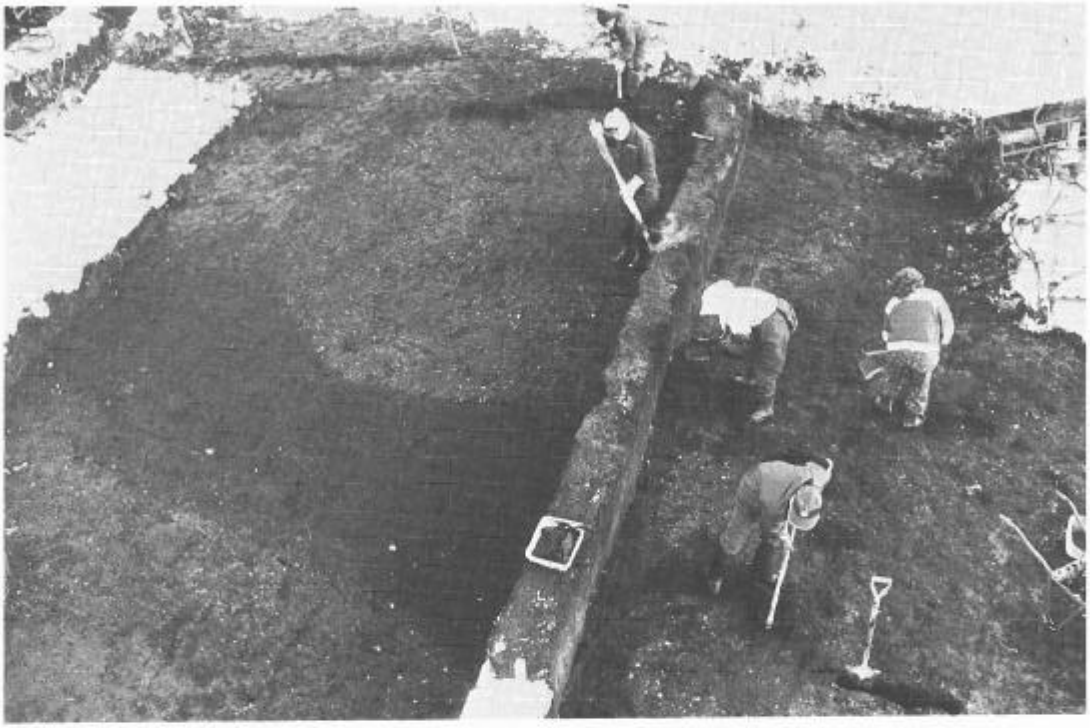
(右)SK20



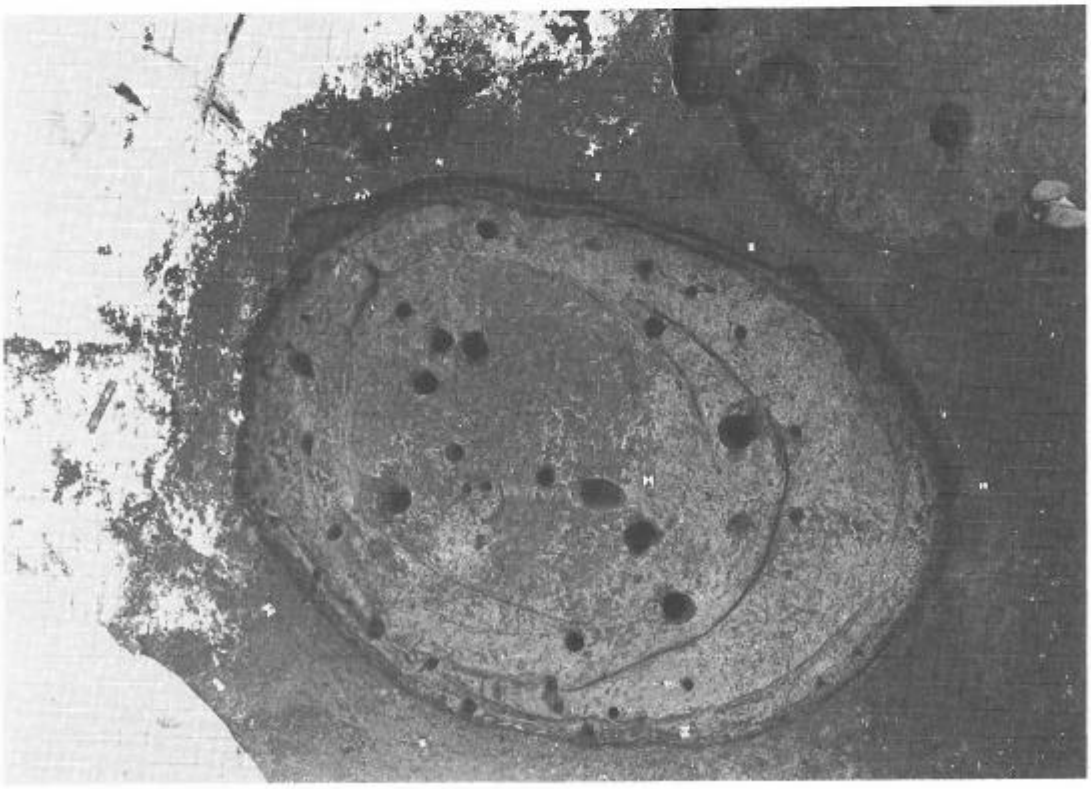
図版19　下位面検出の土坑完掘状況

(上)土器収納後の石器・礫の出土状況(南から)
(下)同上(東側から)

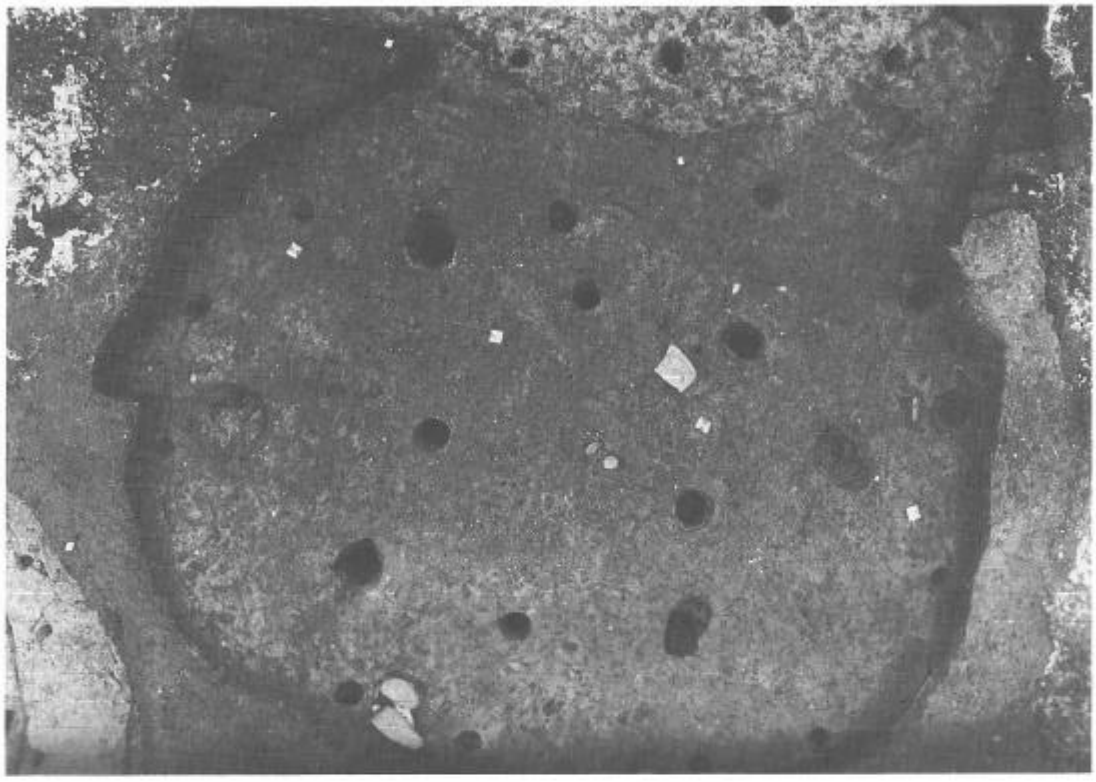
図版20　斜面下方の捨て場遺物出土状況



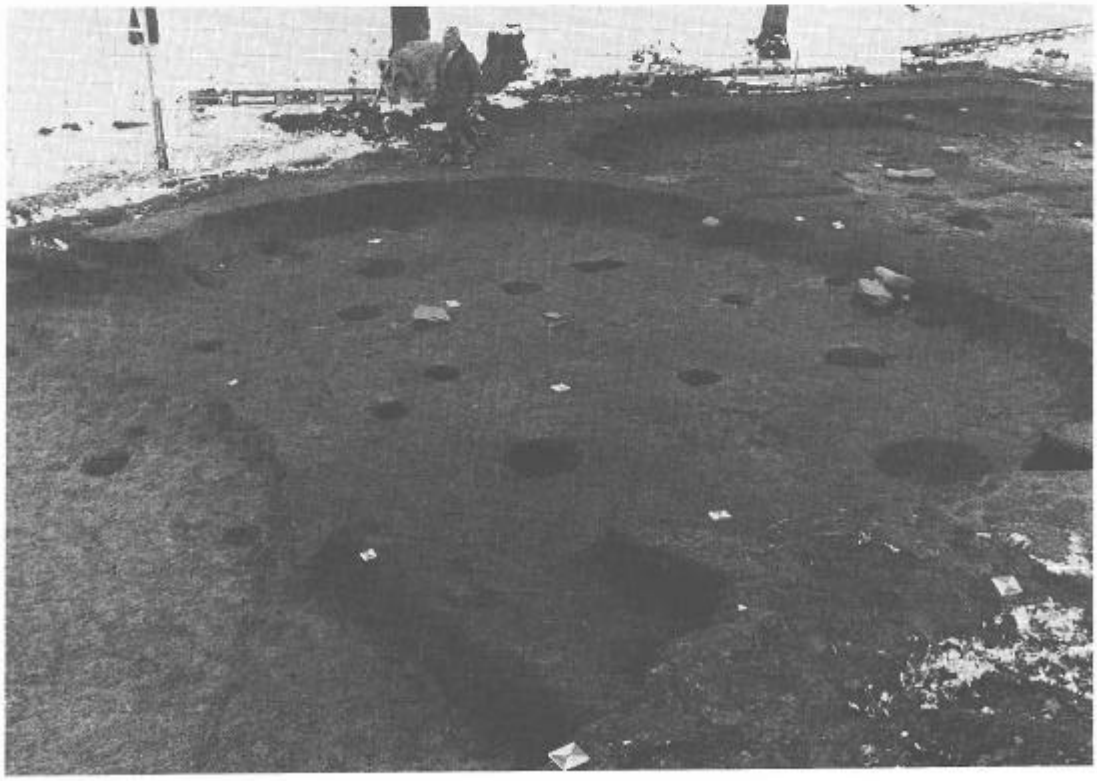
(上)プラン確認状況
(下)完掘状況(空中撮影)



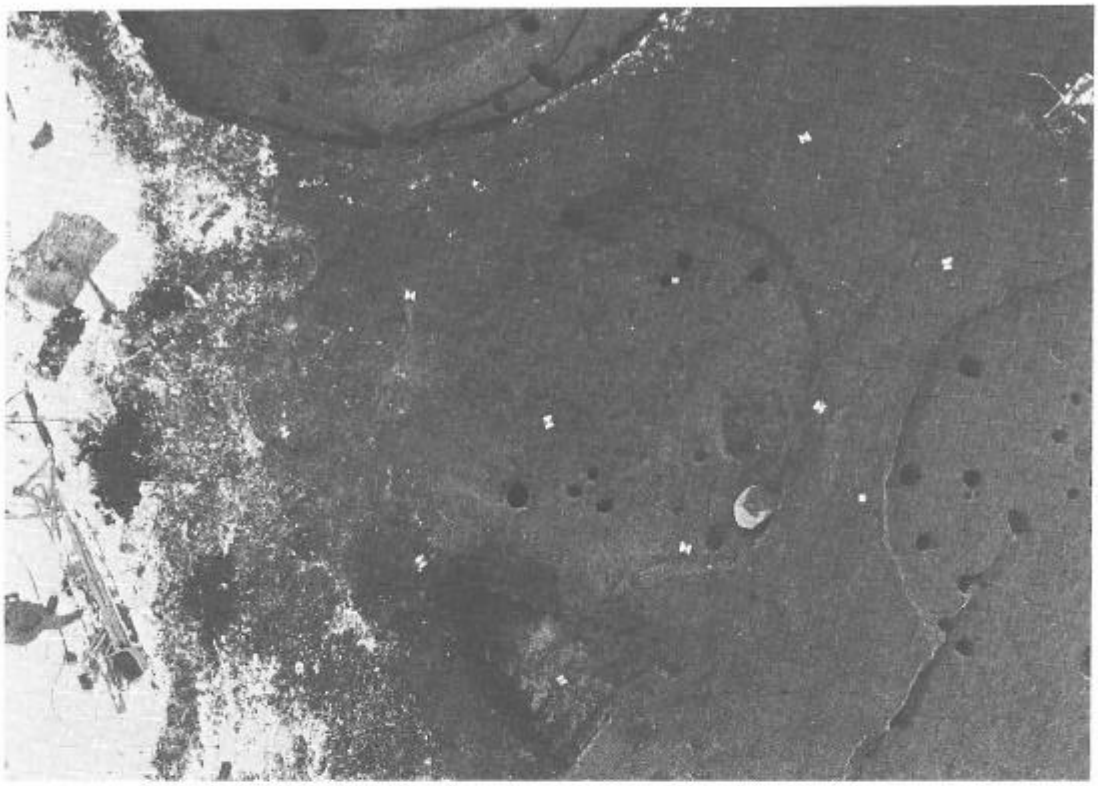
図版21　SI05竪穴住居跡



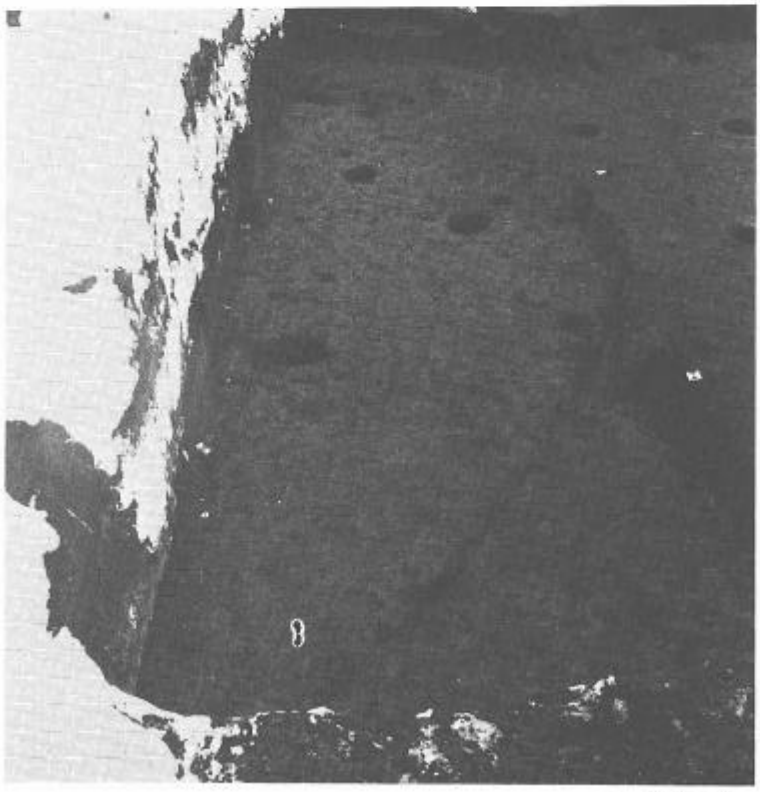
(上)完掘状況(空中撮影)
(下)完掘状況(南側から撮影)



図版22　SI06竪穴住居跡



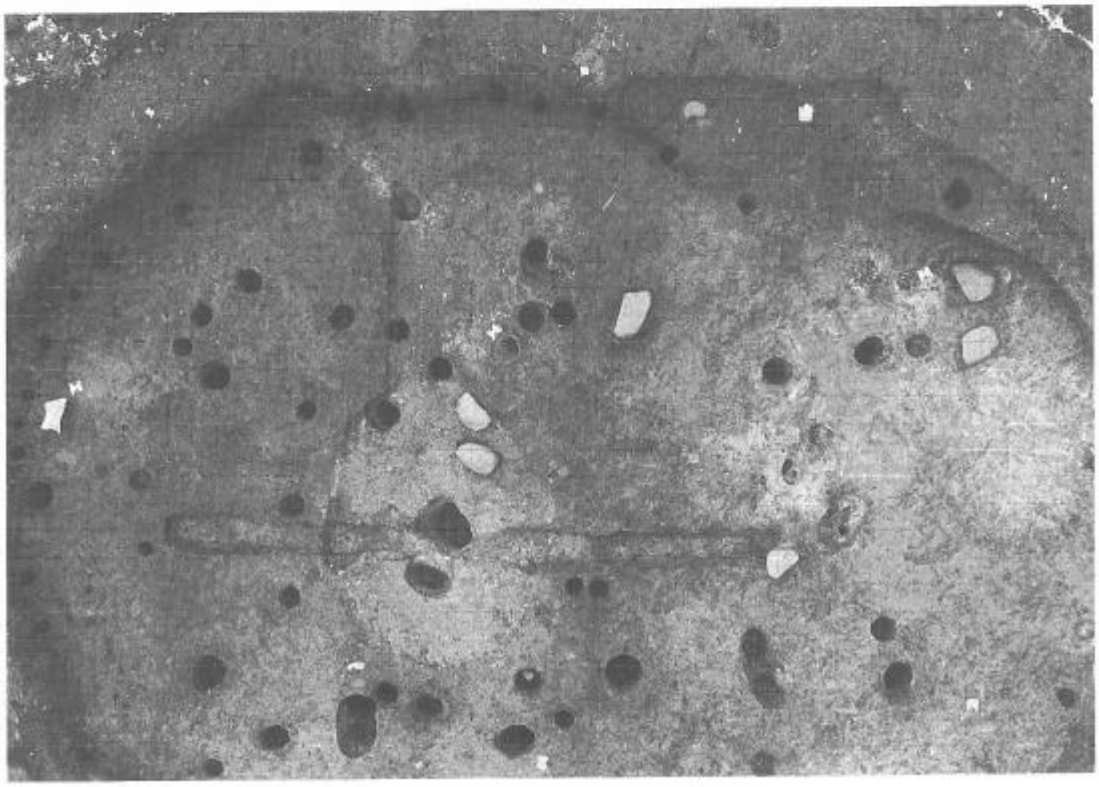
（上）SI07竪穴住居跡完掘状況（空中撮影）



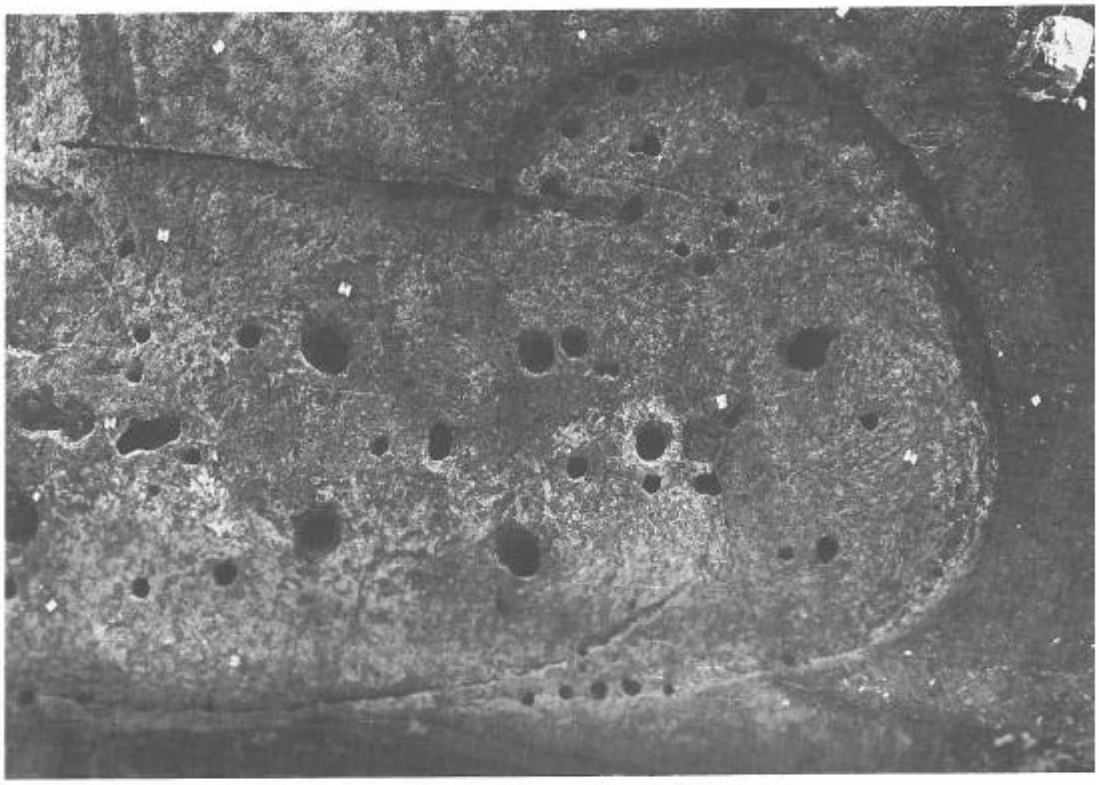
SI13竪穴住居跡完掘状況
（南東から撮影）

図版23　SI07・SI13竪穴住居跡

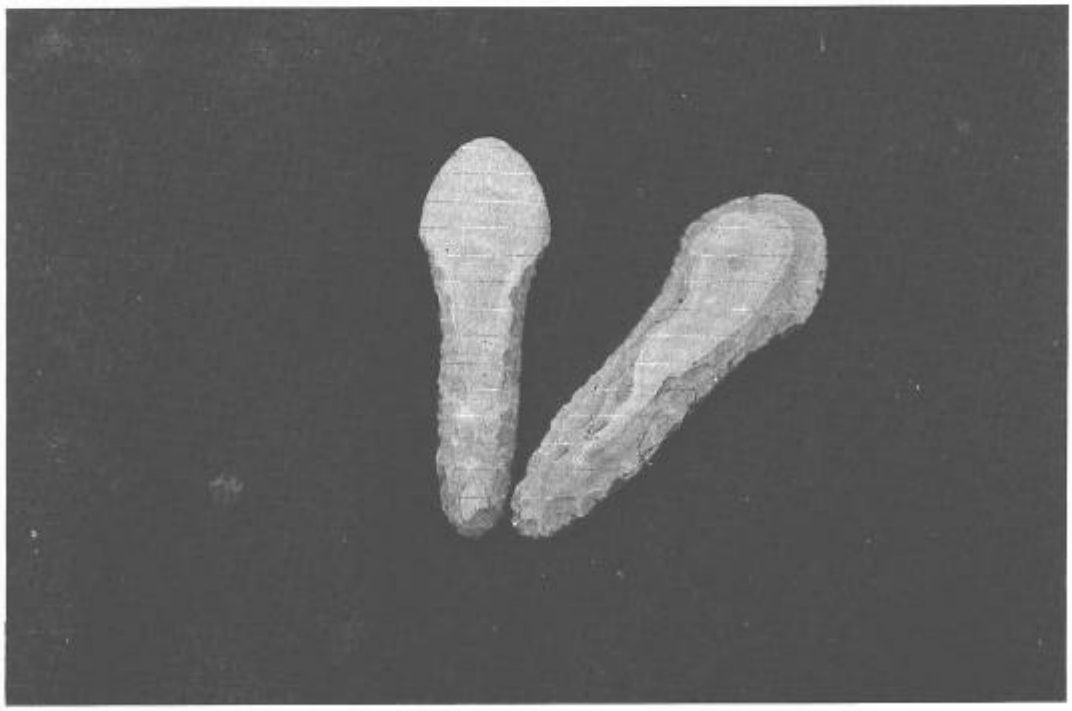
(上)SI08・14竪穴住居プラン確認状況(後方左SI05，後方右SI06)
(下)SI08・14竪穴住居跡完掘状況(空中撮影)



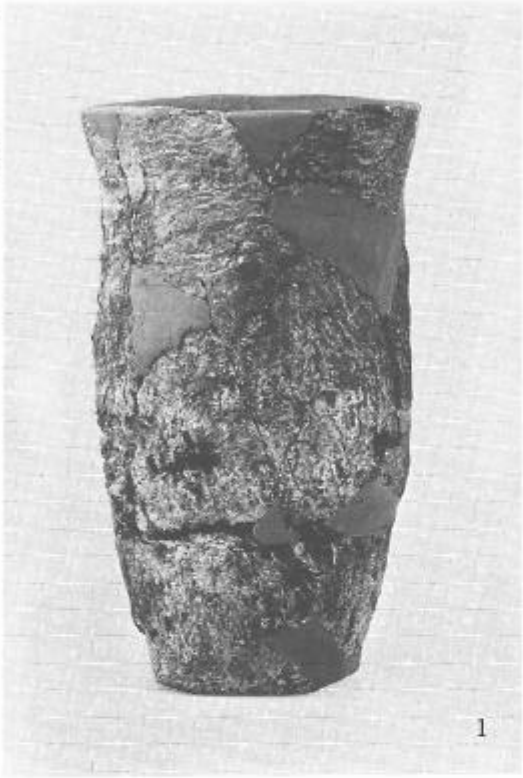
図版24　SI08・14竪穴住居跡



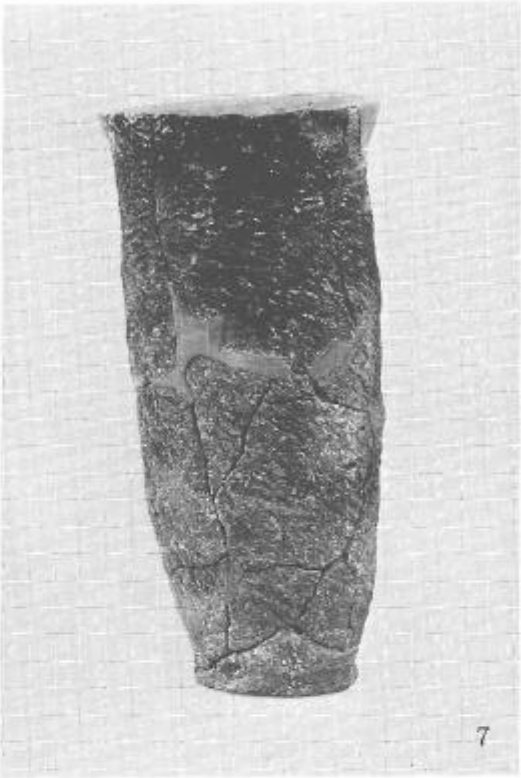
(上) SI11・12竪穴住居跡完掘状況(空中撮影)
(下) MF50第Ⅵ層　鋒形石器出土状況(東側から撮影)

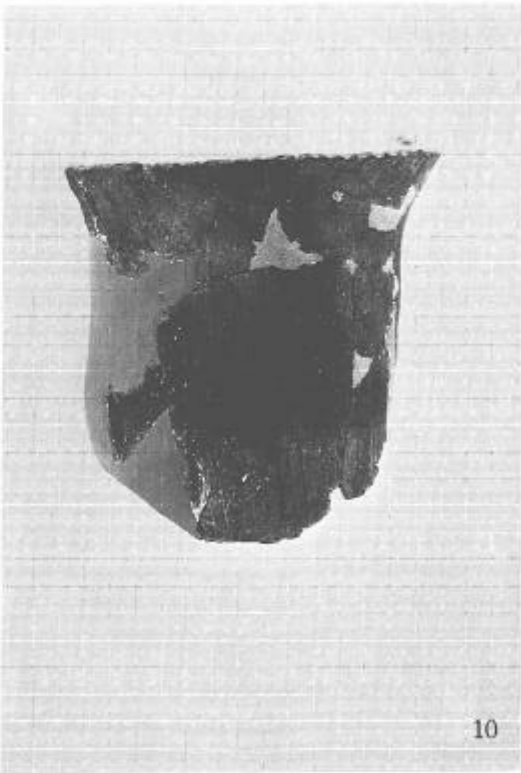


図版25　SI11・12竪穴住居跡・鋒形石器出土状況

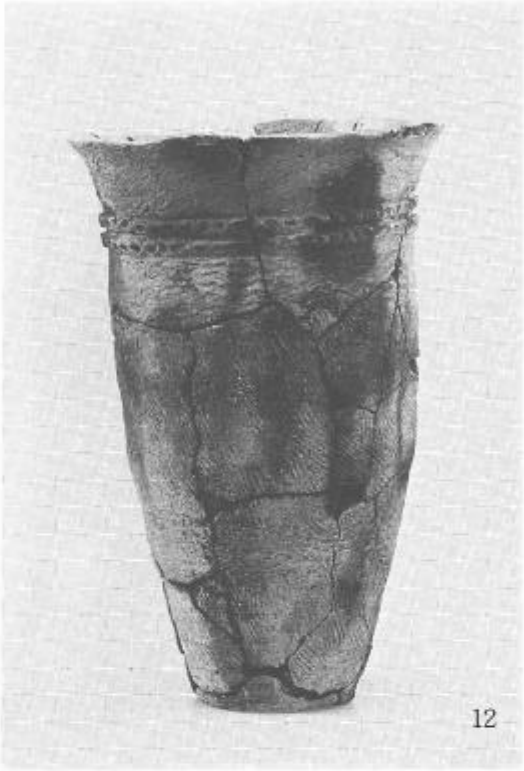


図版26　沢No. 1 出土土器



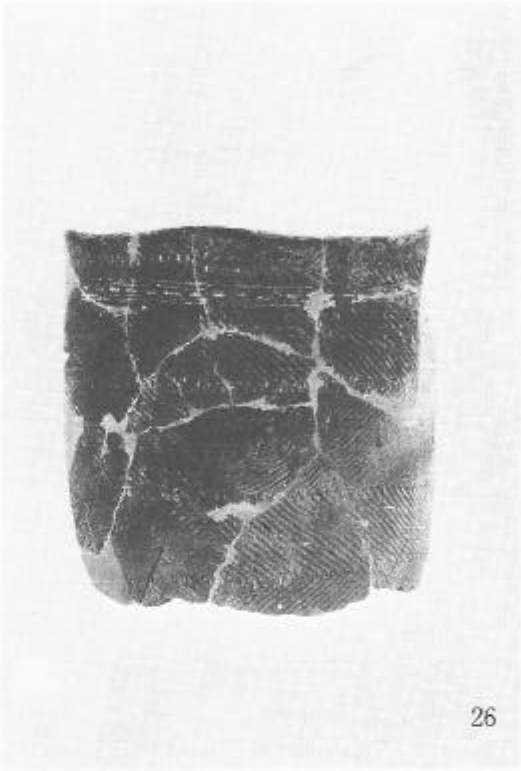


図版27　沢No. 1 出土土器



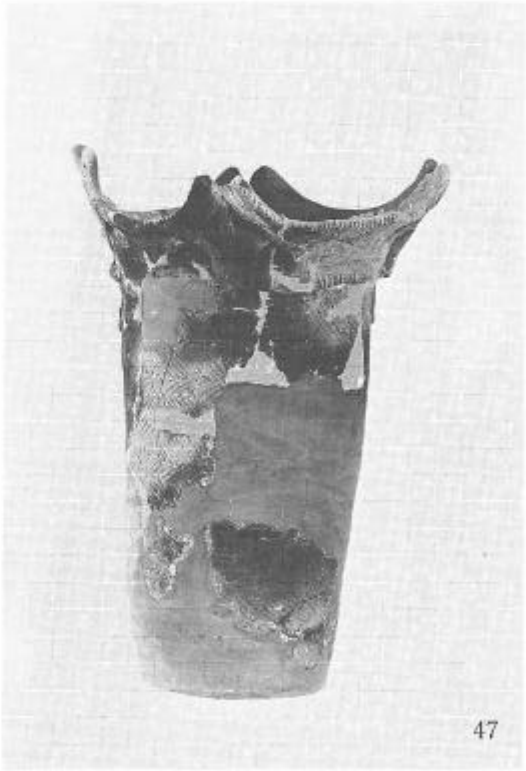
図版28　沢No. 1 出土土器

図版29　沢No. 1 出土土器



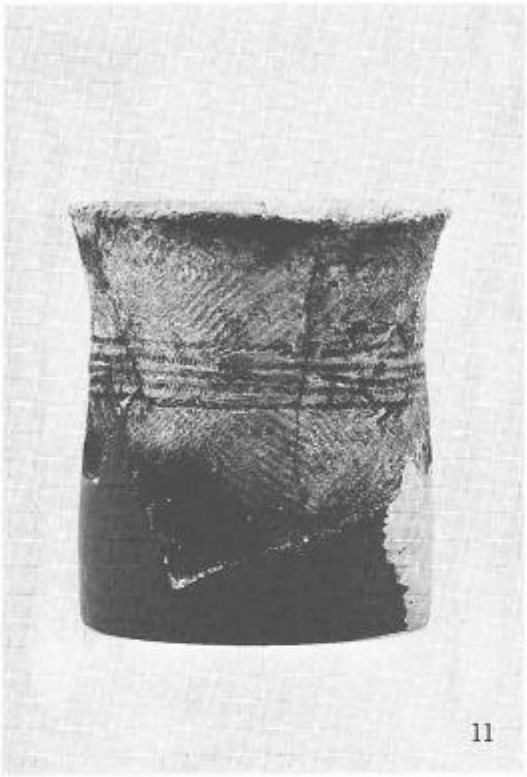
図版30　沢No. 1 出土土器

図版31　沢No. 1 出土土器(29～31)，沢No. 2 出土土器(1)

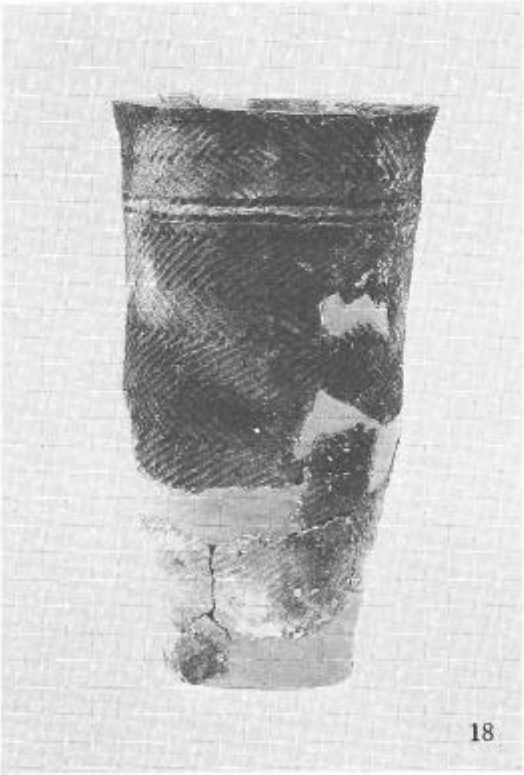


図版32　沢No. 2 出土土器

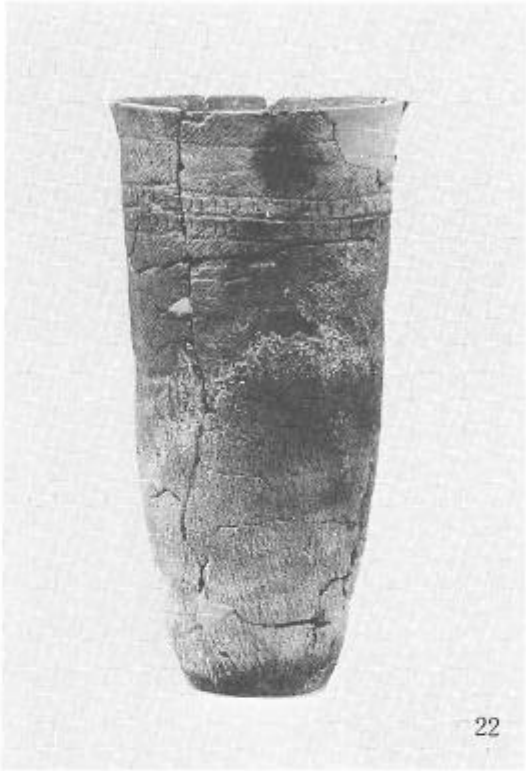
図版33　沢No. 3 出土土器

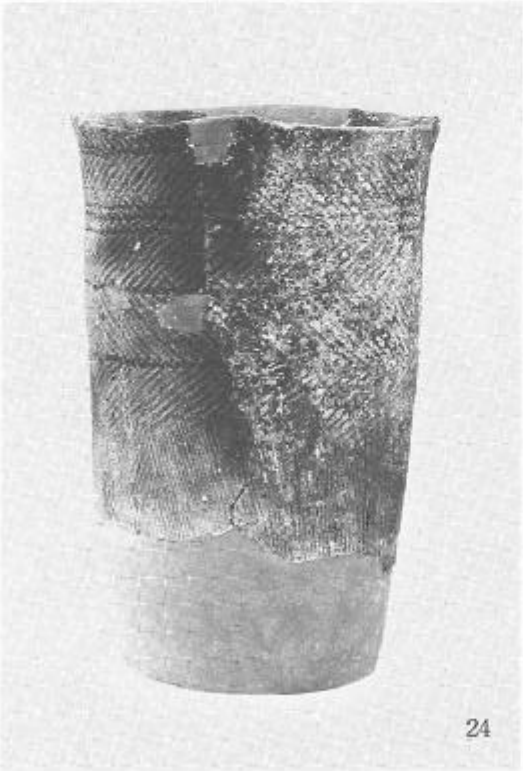


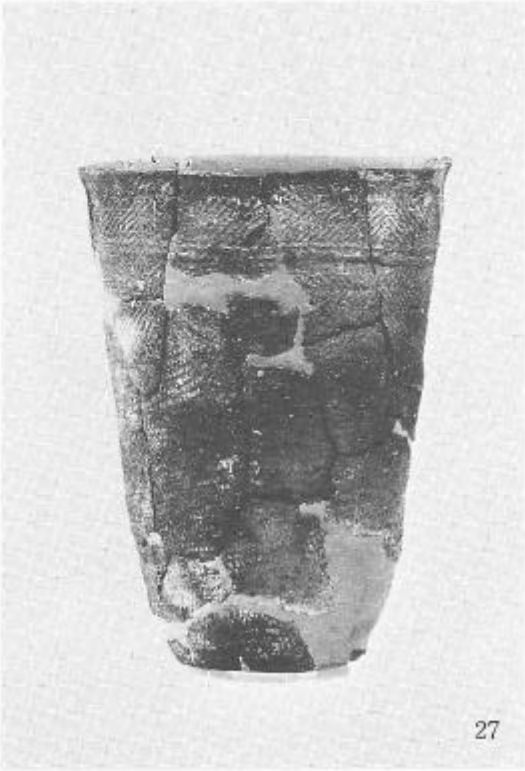
図版34　沢No. 3 出土土器



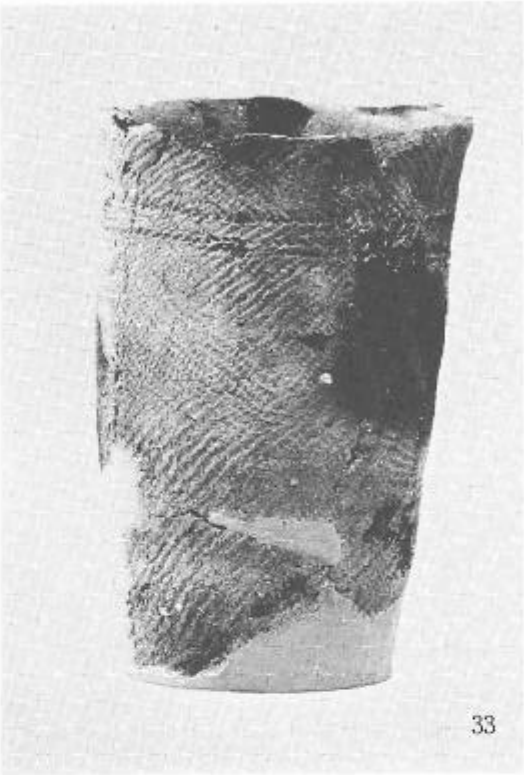
図版35　沢No. 3 出土土器



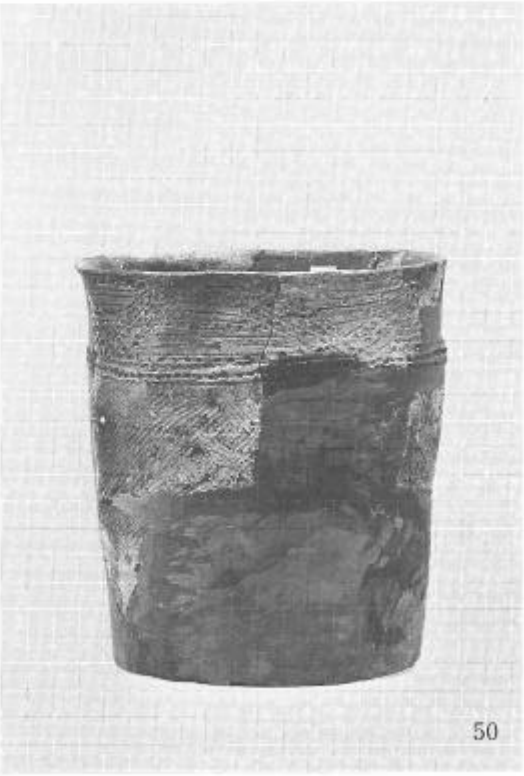




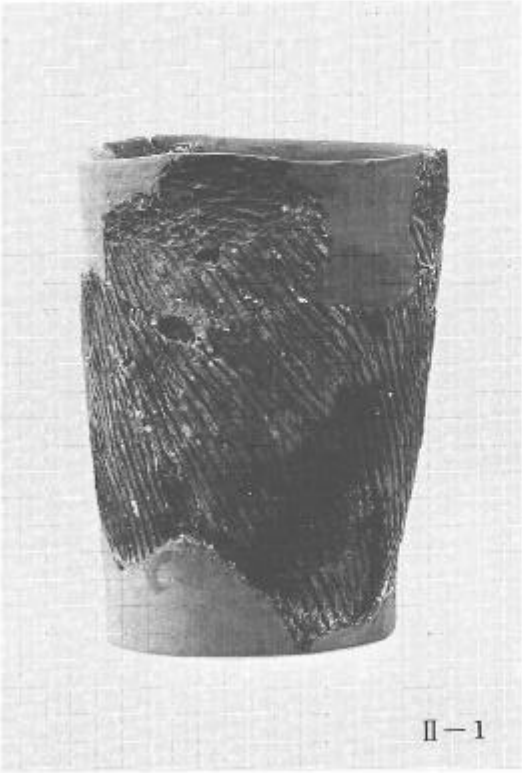
図版36　沢No. 3 出土土器

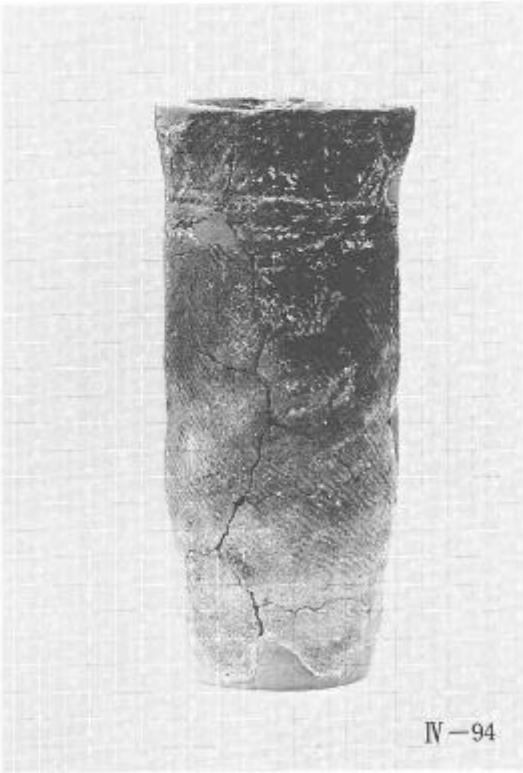


図版37　沢No. 3 出土土器



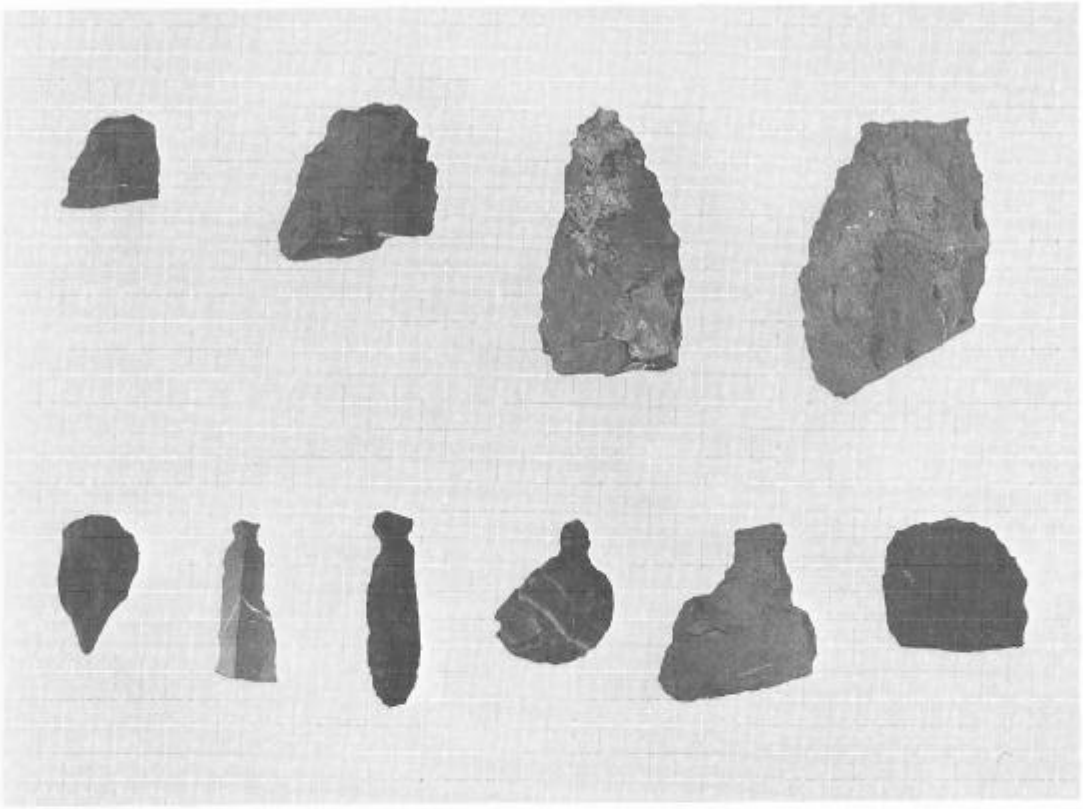
図版38　沢No. 3 出土土器

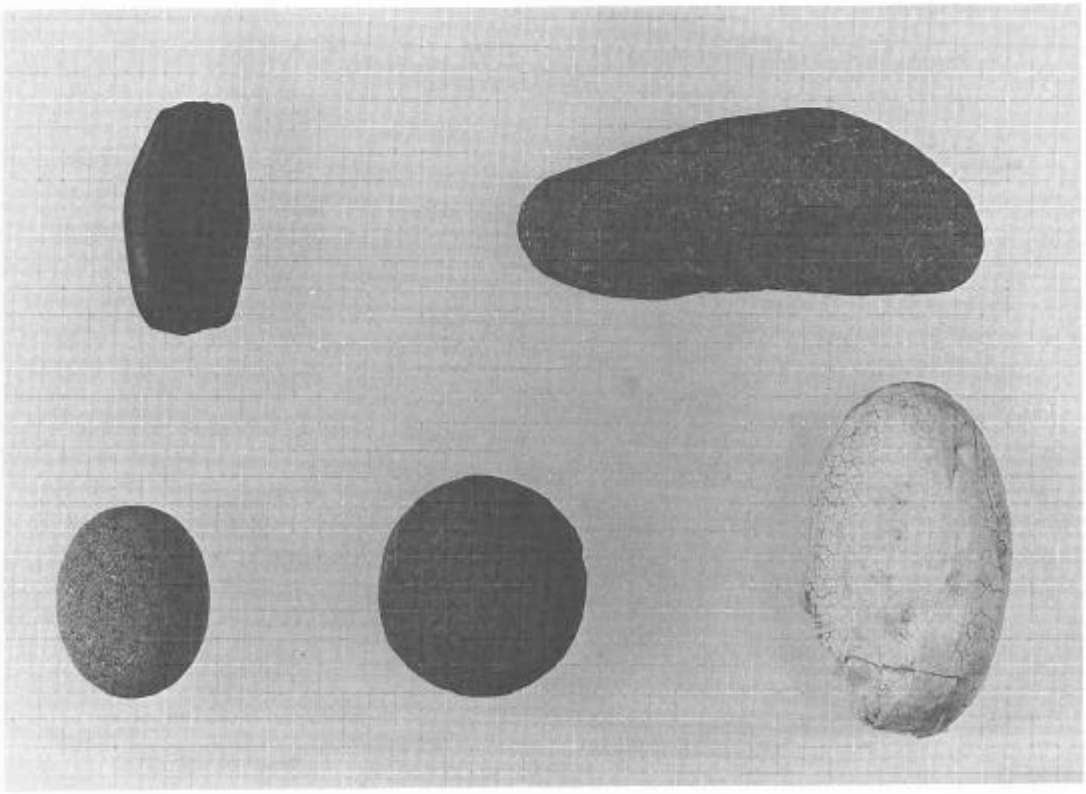




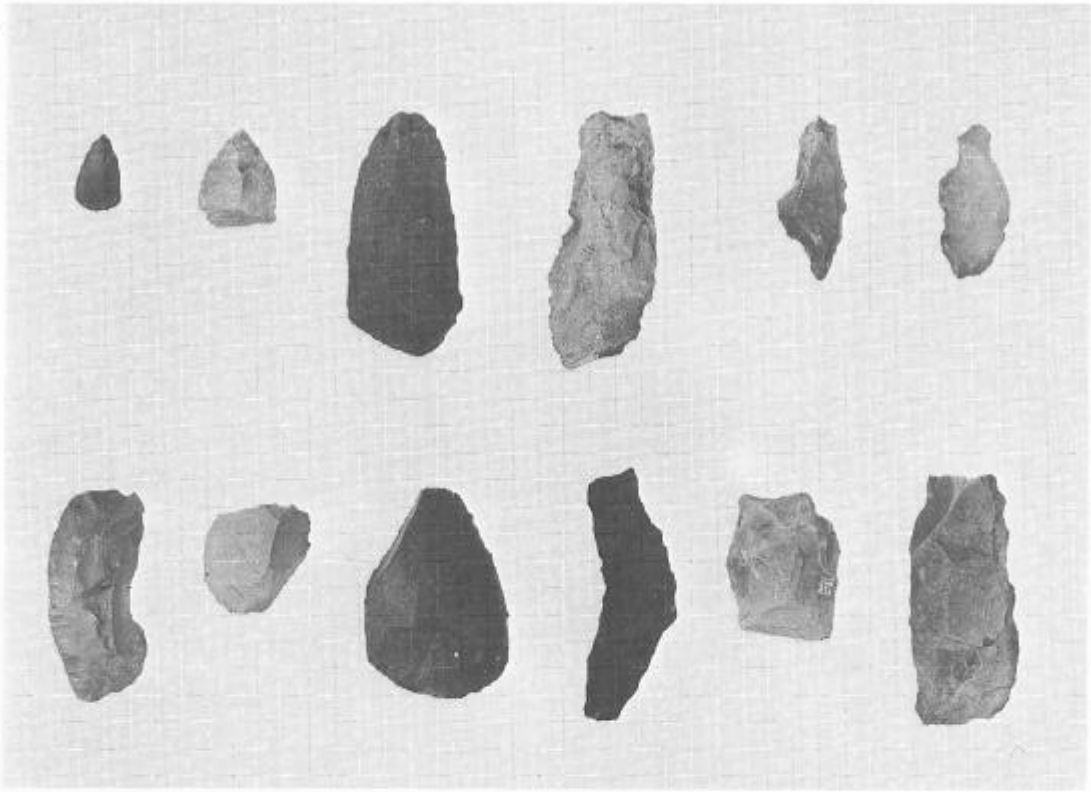
図版39　沢No. 3出土土器(51・56)，Ⅱ層・Ⅲ層出土土器

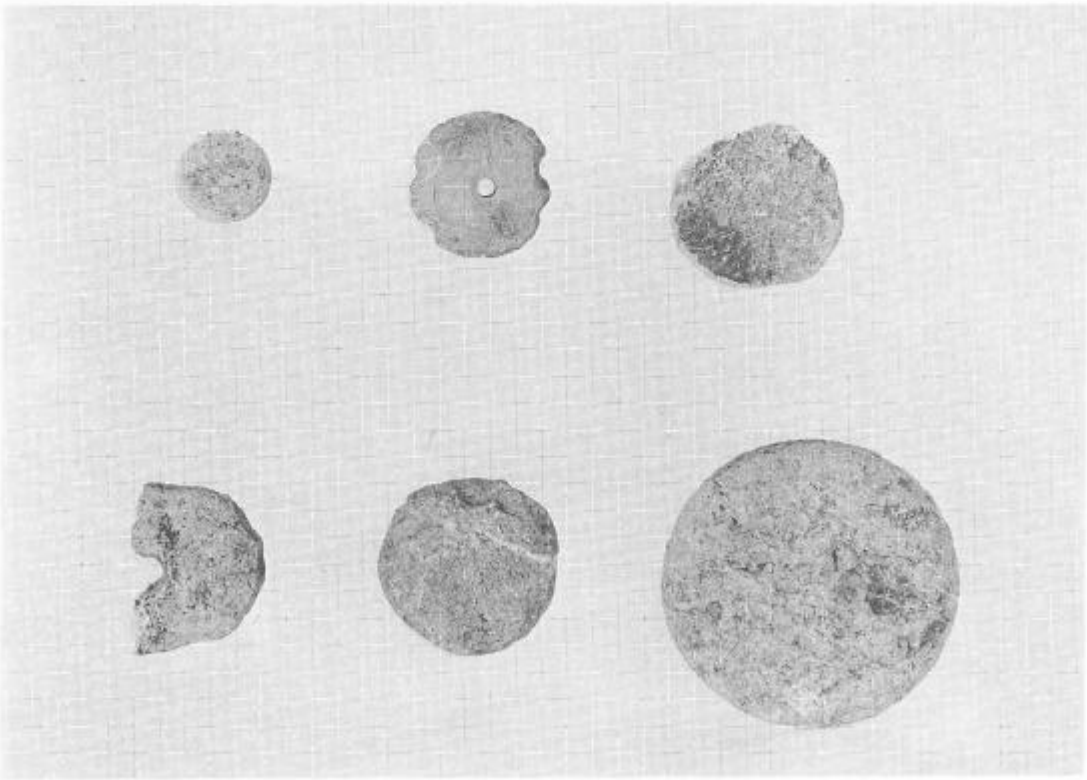
図版40　第Ⅴ層出土土器（4～6）・SKF101出土土器



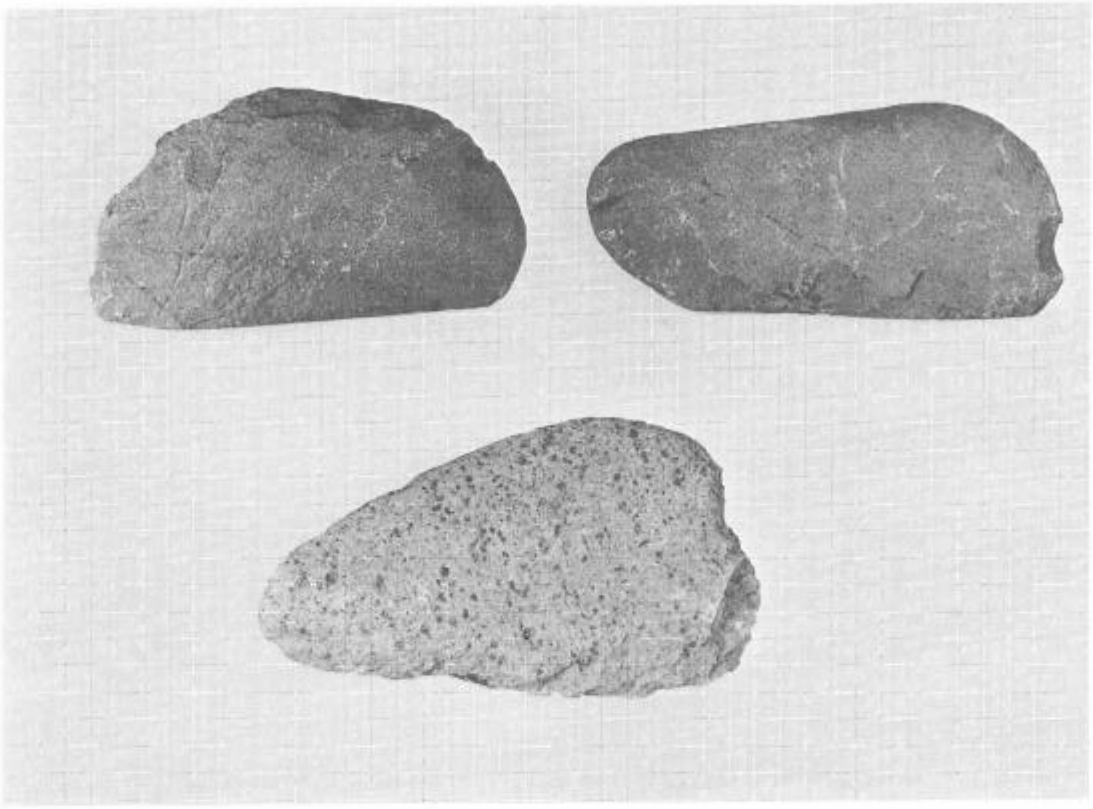


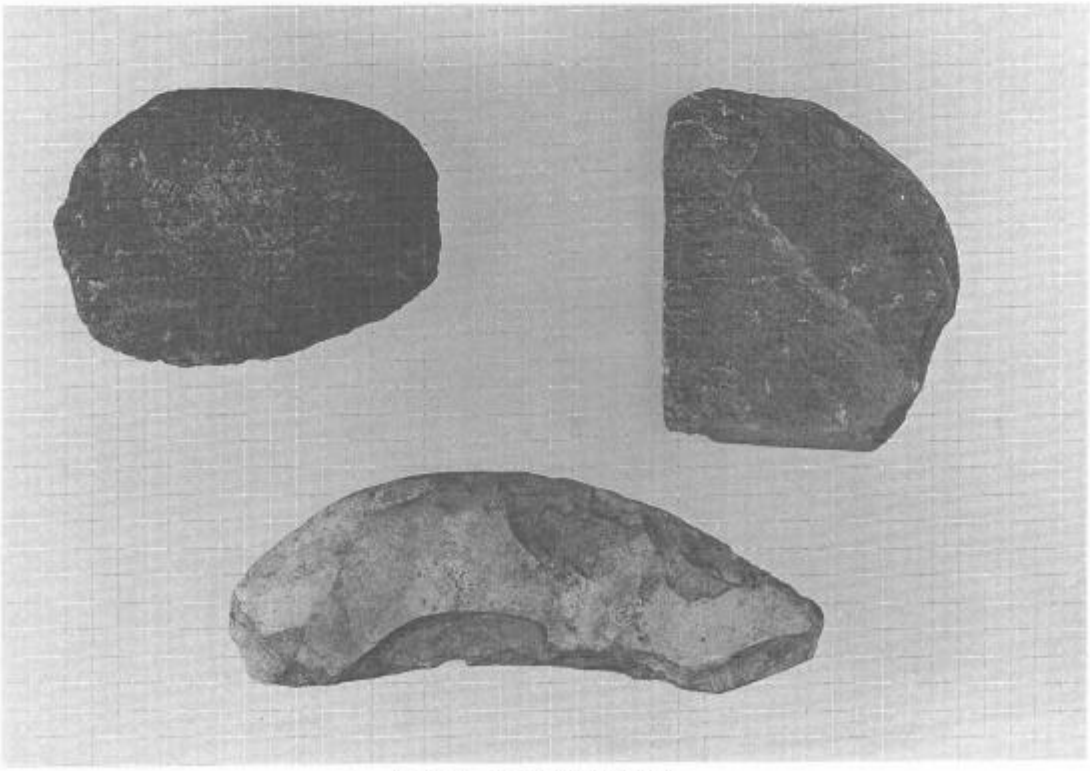
図版41　第Ⅰ層出土石器



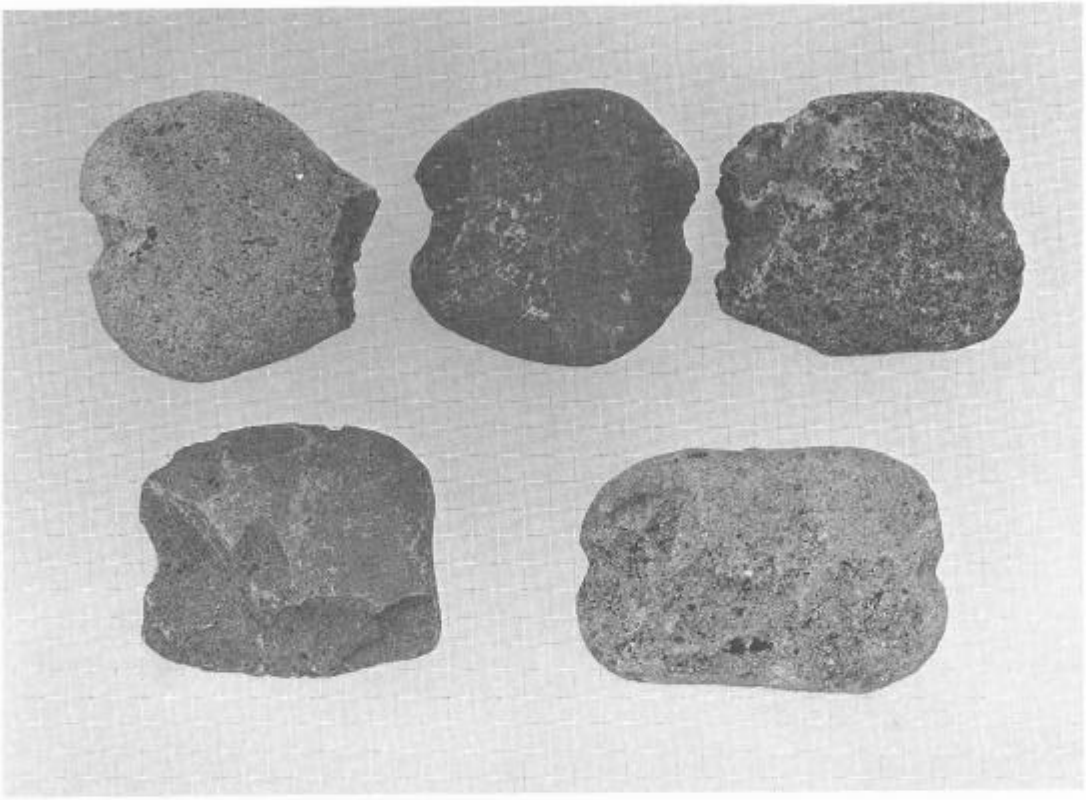


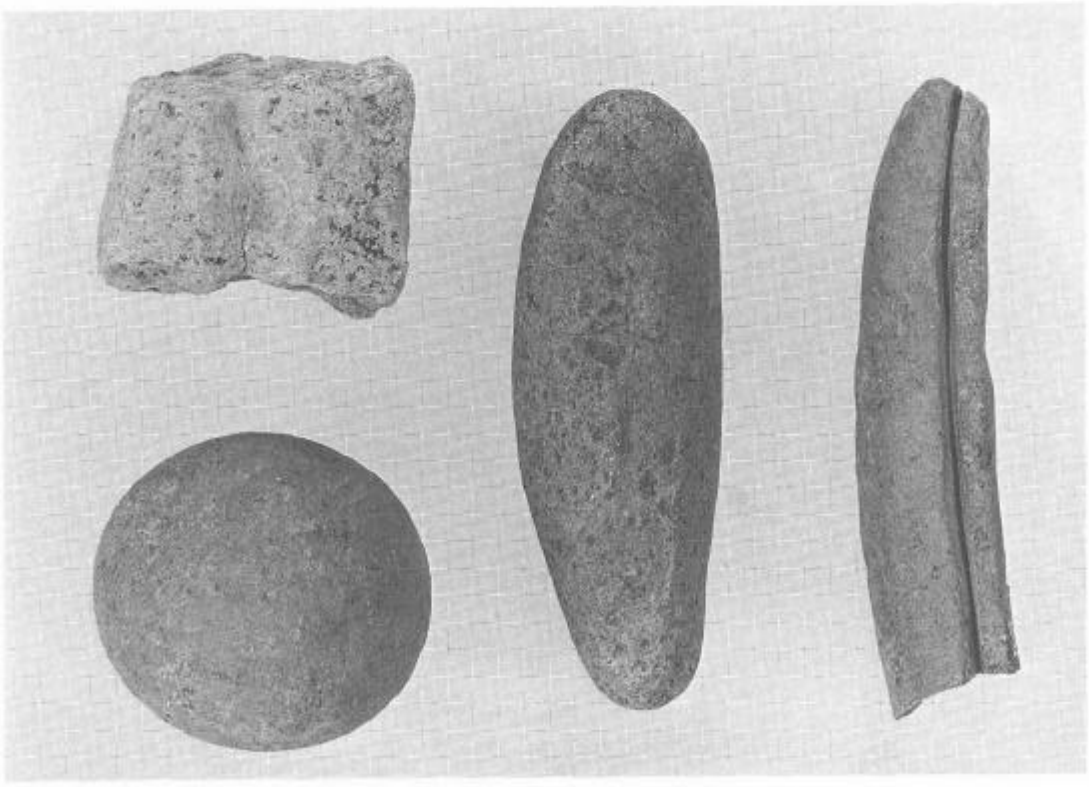
図版42　第Ⅱ層出土石器・石製品



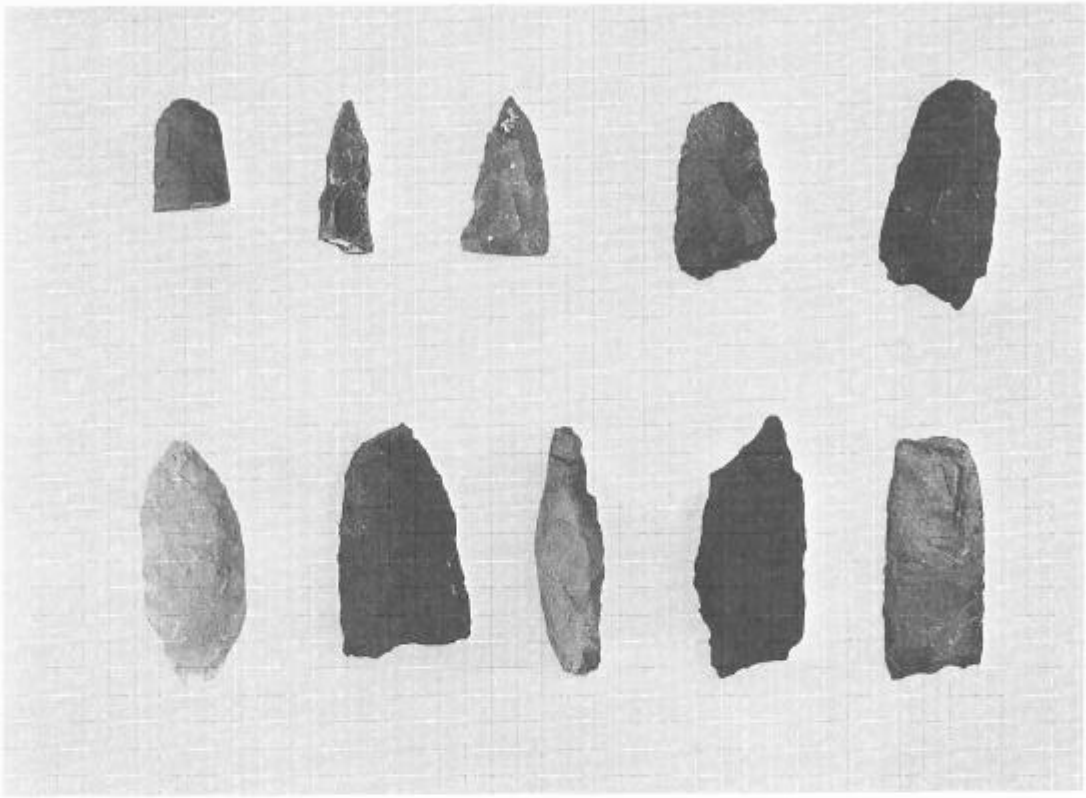


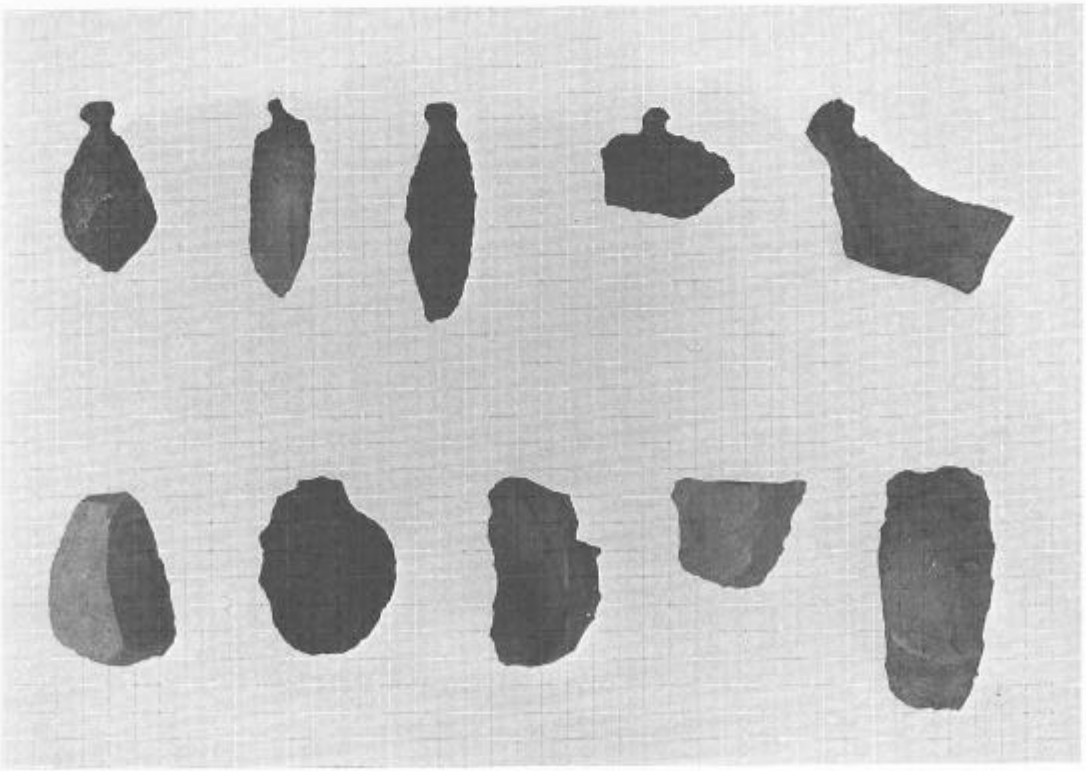
図版43　第Ⅱ層出土石器



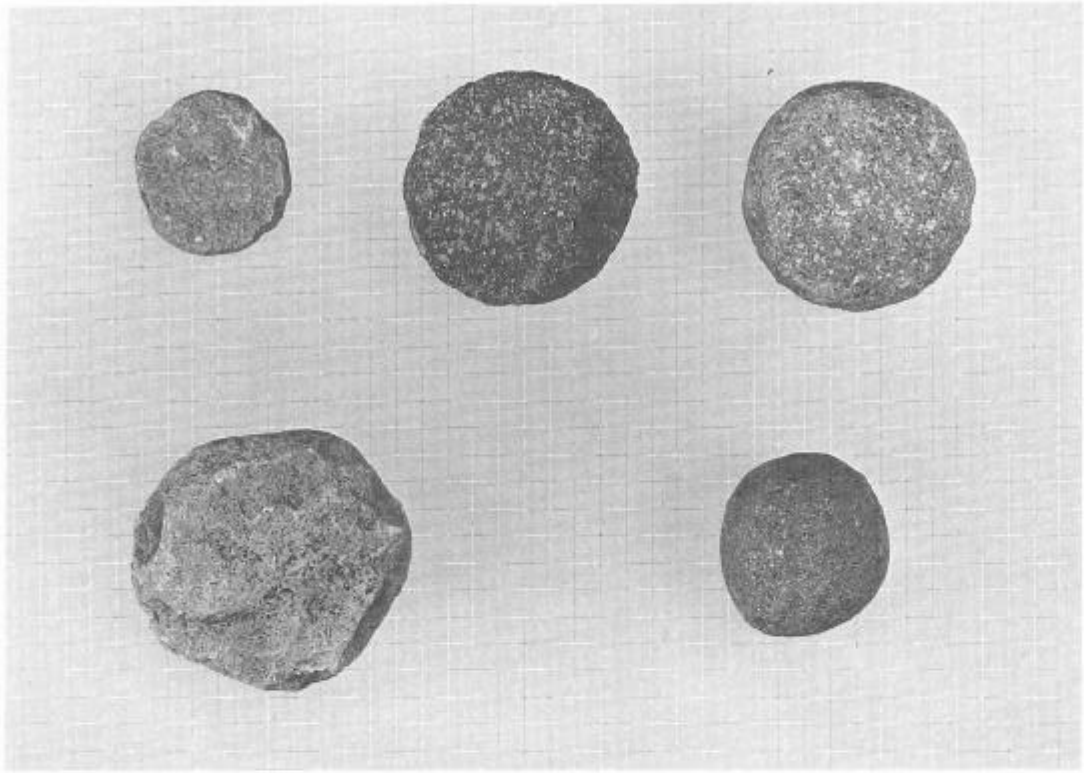


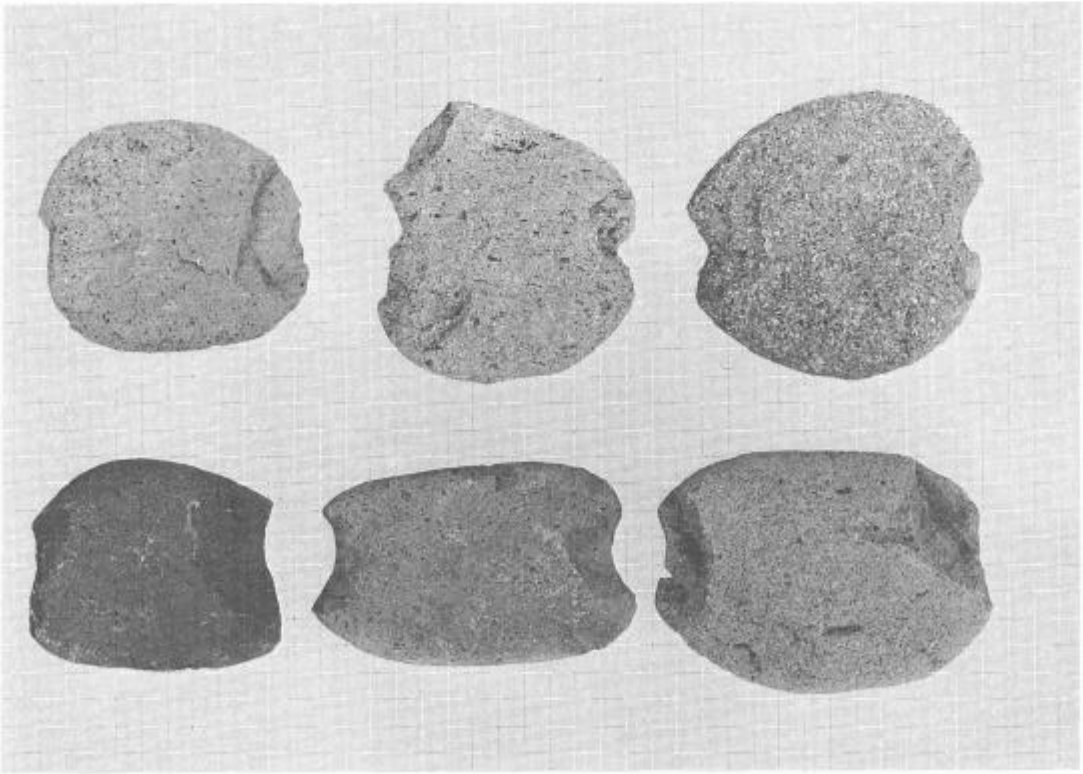
図版44　第Ⅱ層出土石器・石製品



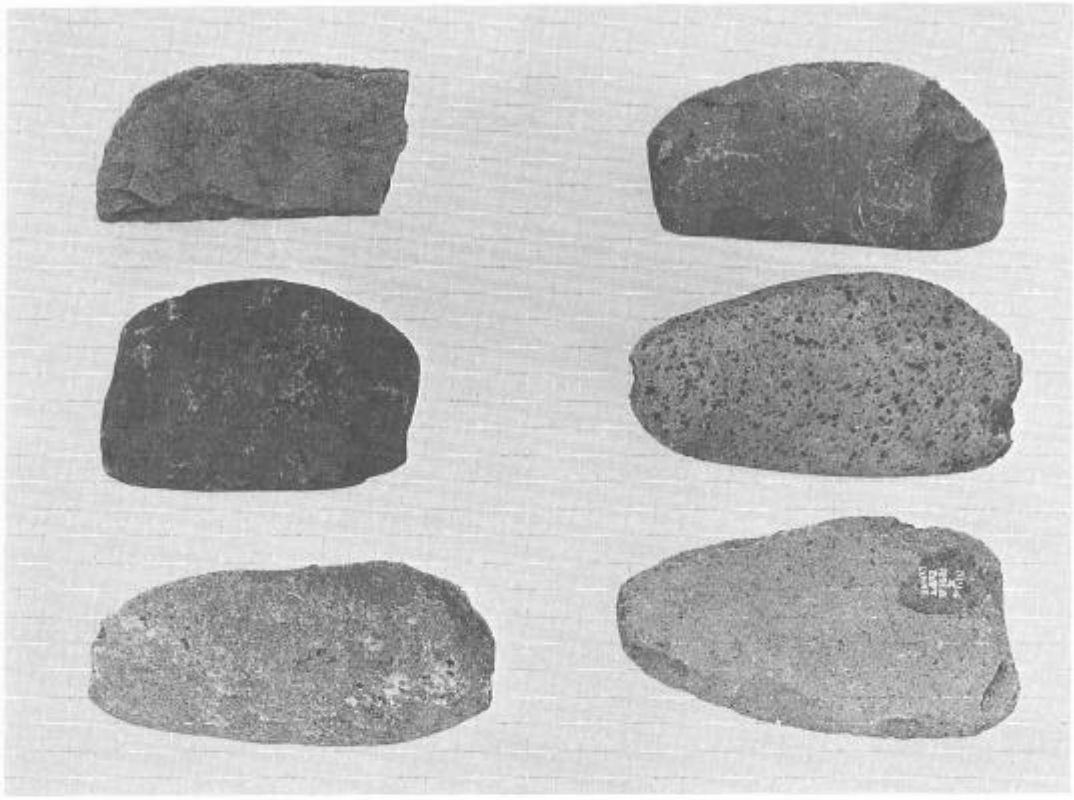


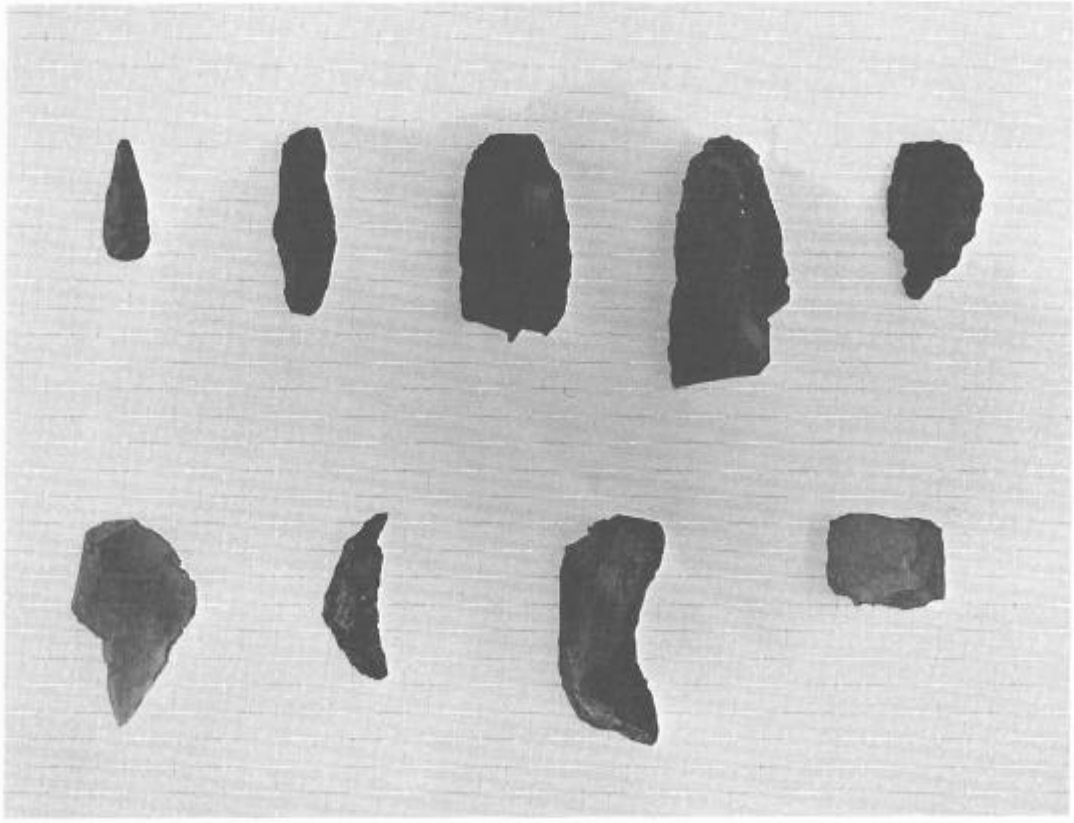
図版45　第Ⅲ層出土石器



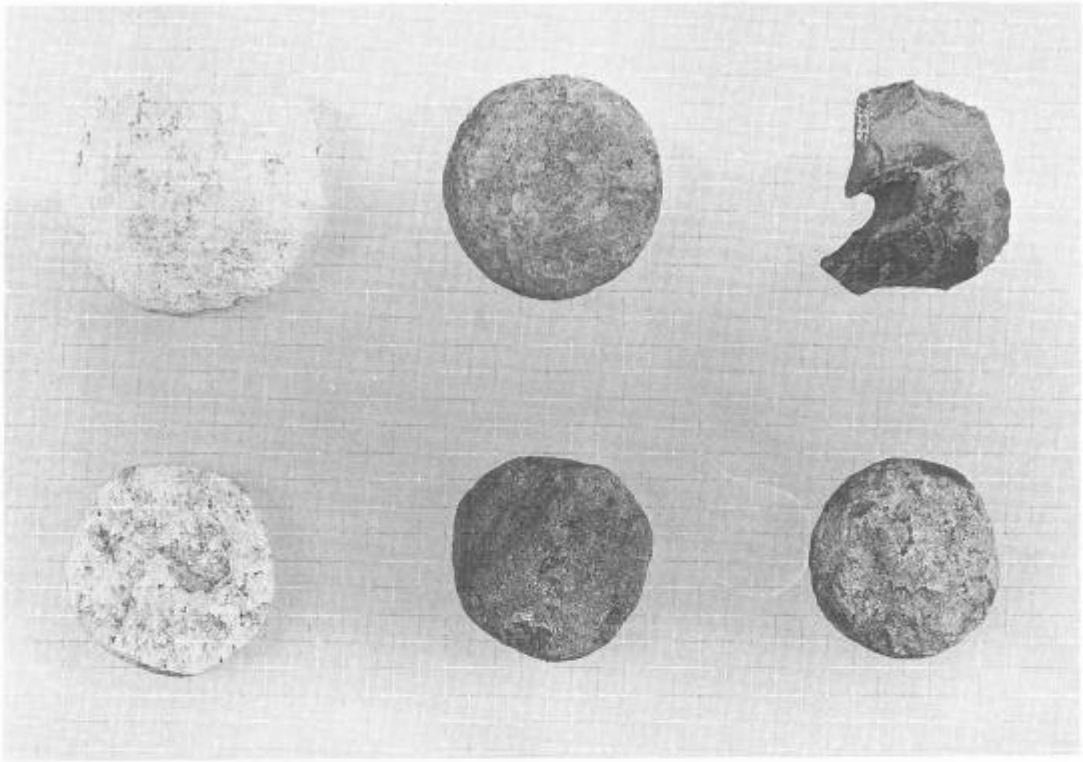


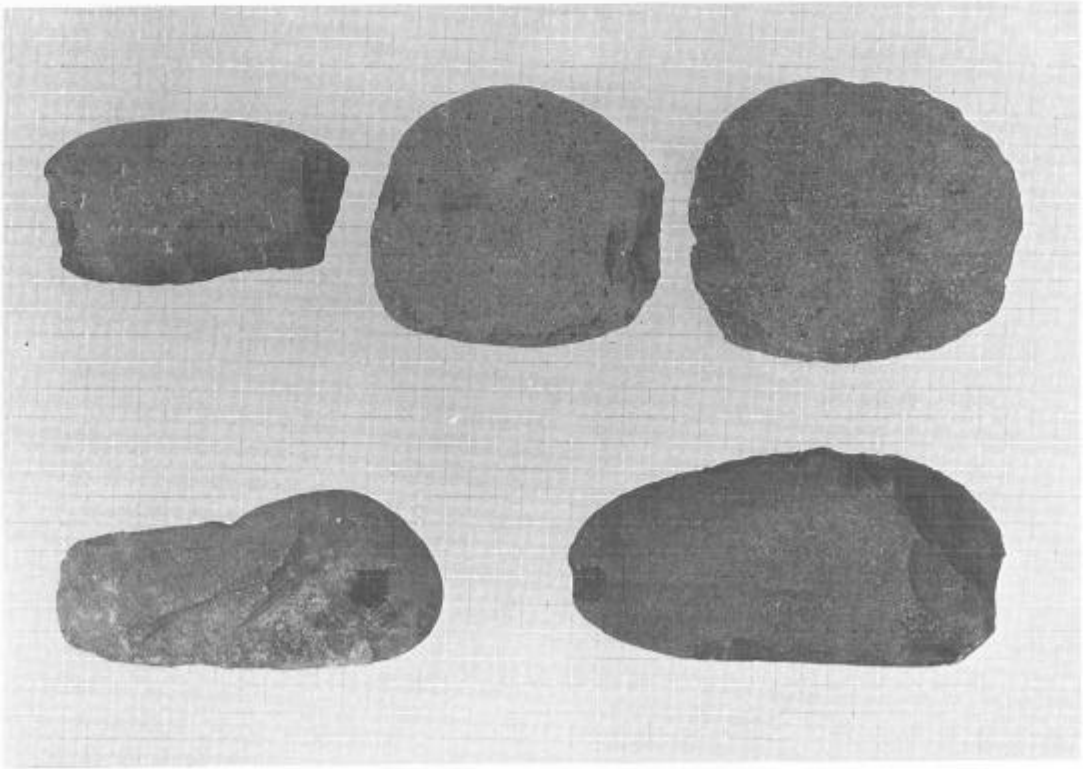
図版46　第Ⅲ層出土石器・石製品



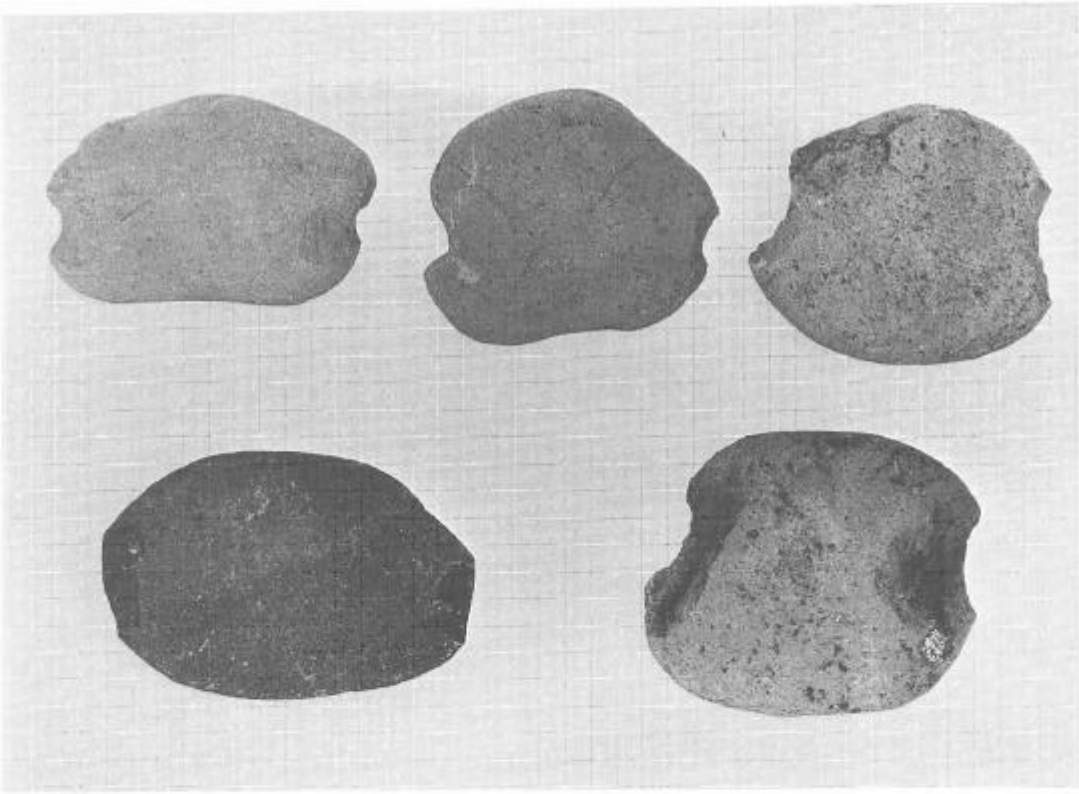


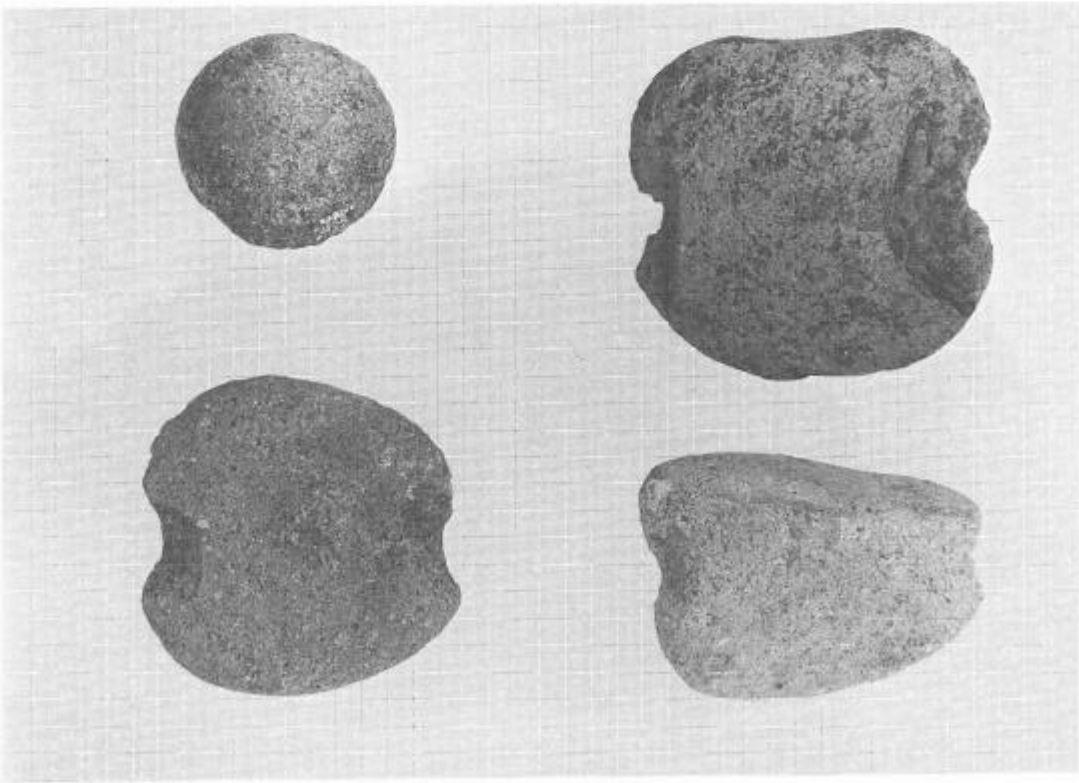
図版47　第Ⅲ層出土石器(上)，第Ⅳ層出土石器(下)



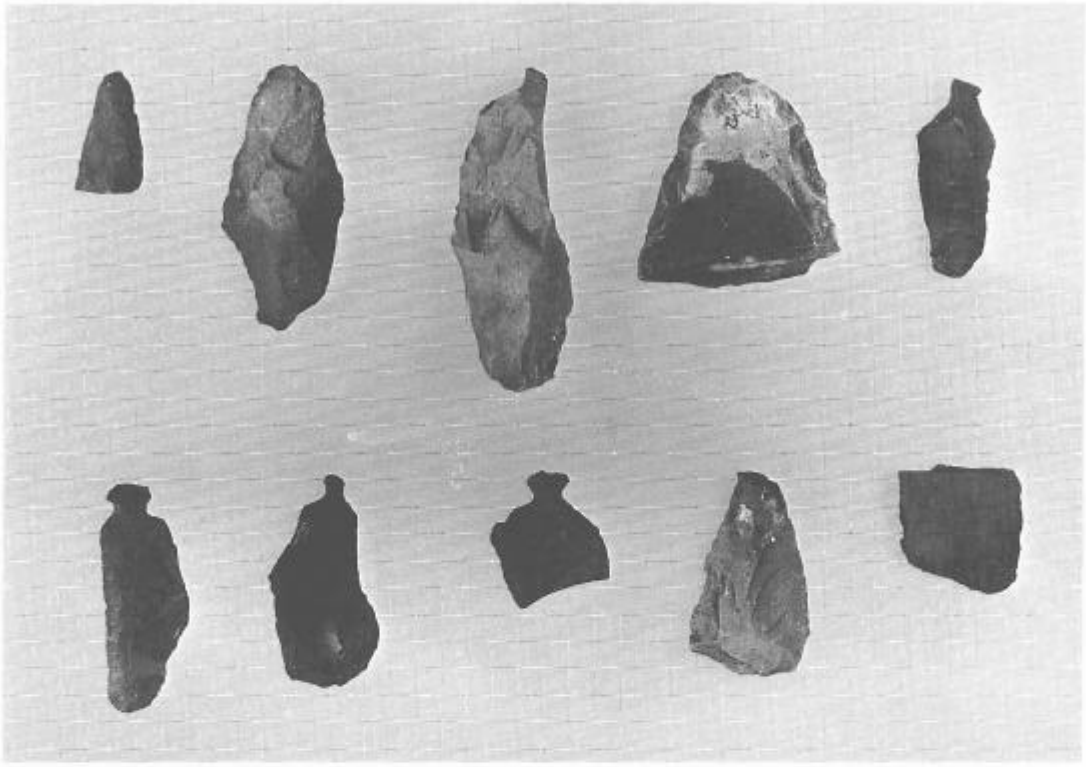


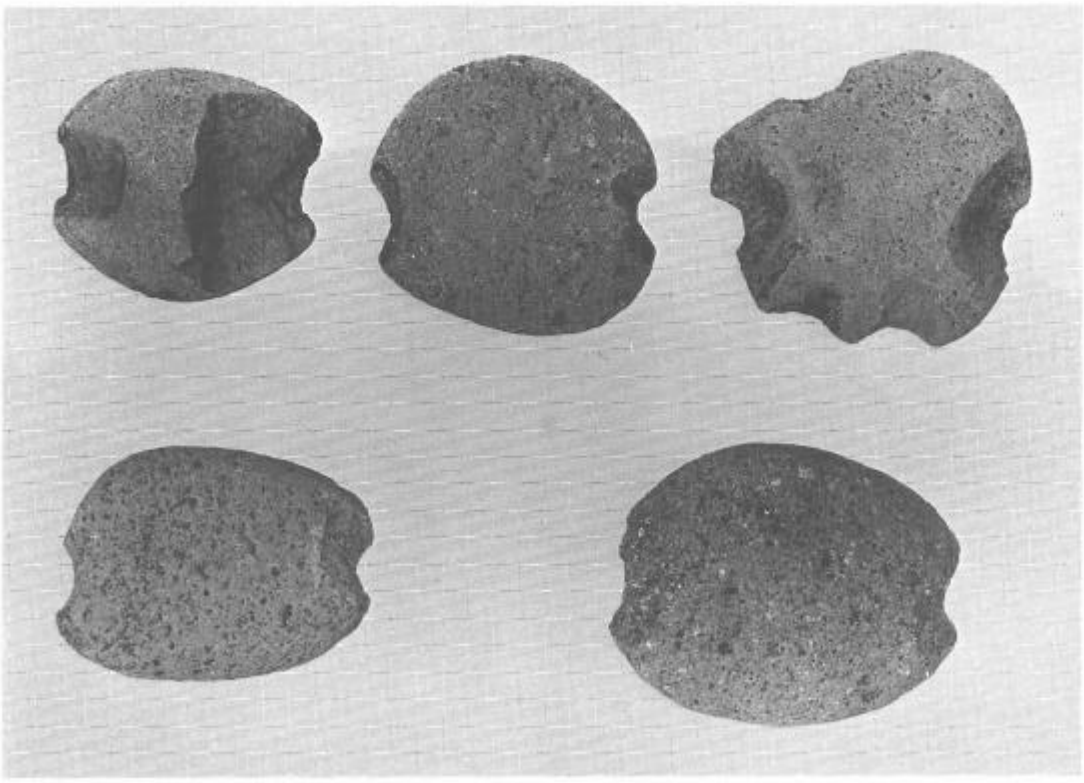
図版48　第Ⅳ層出土石器・石製品



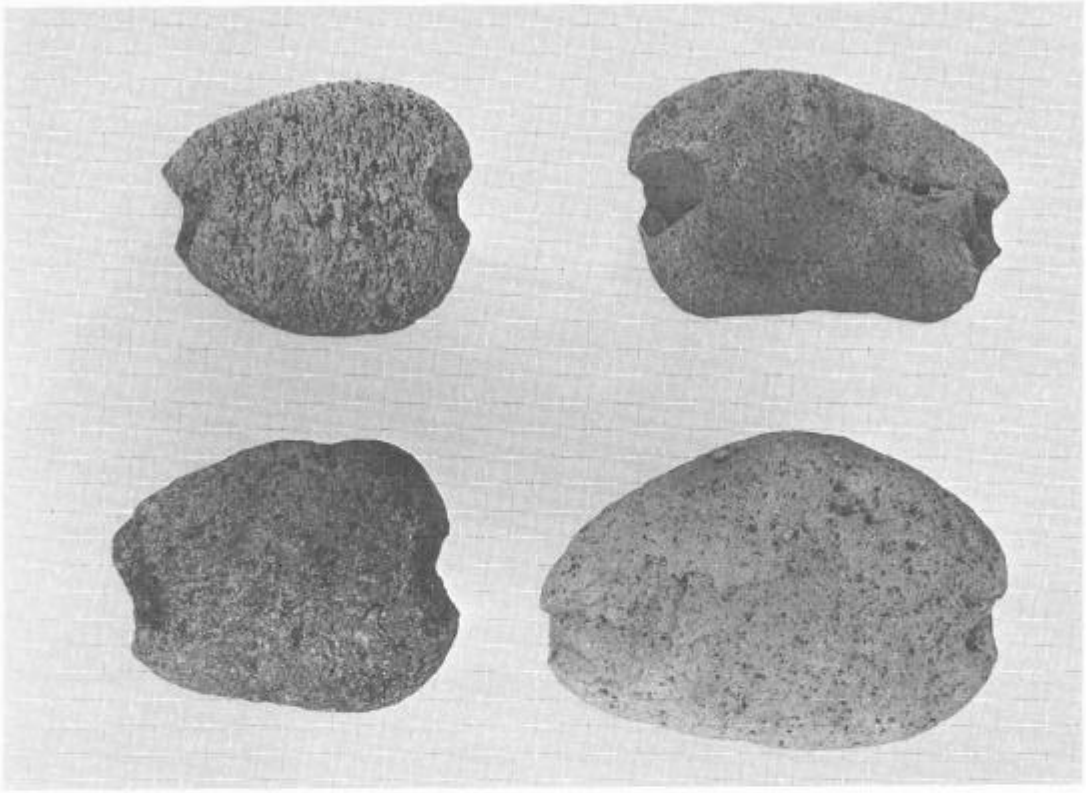


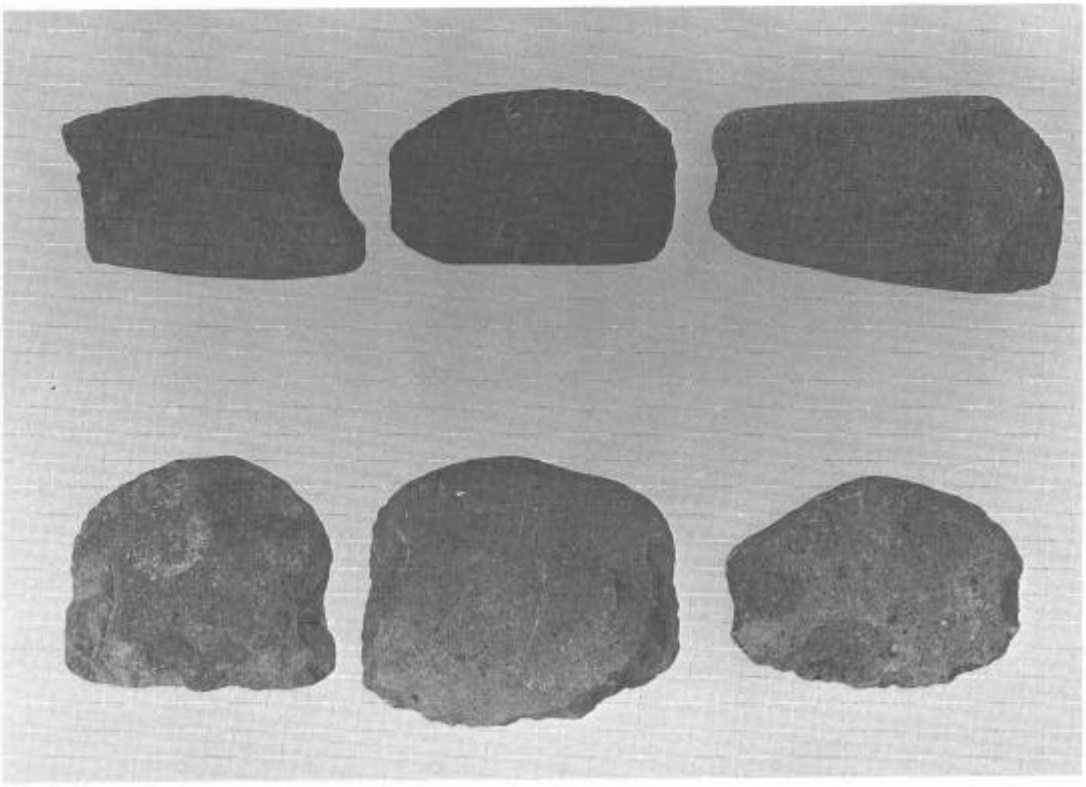
図版49　第Ⅳ層出土石器



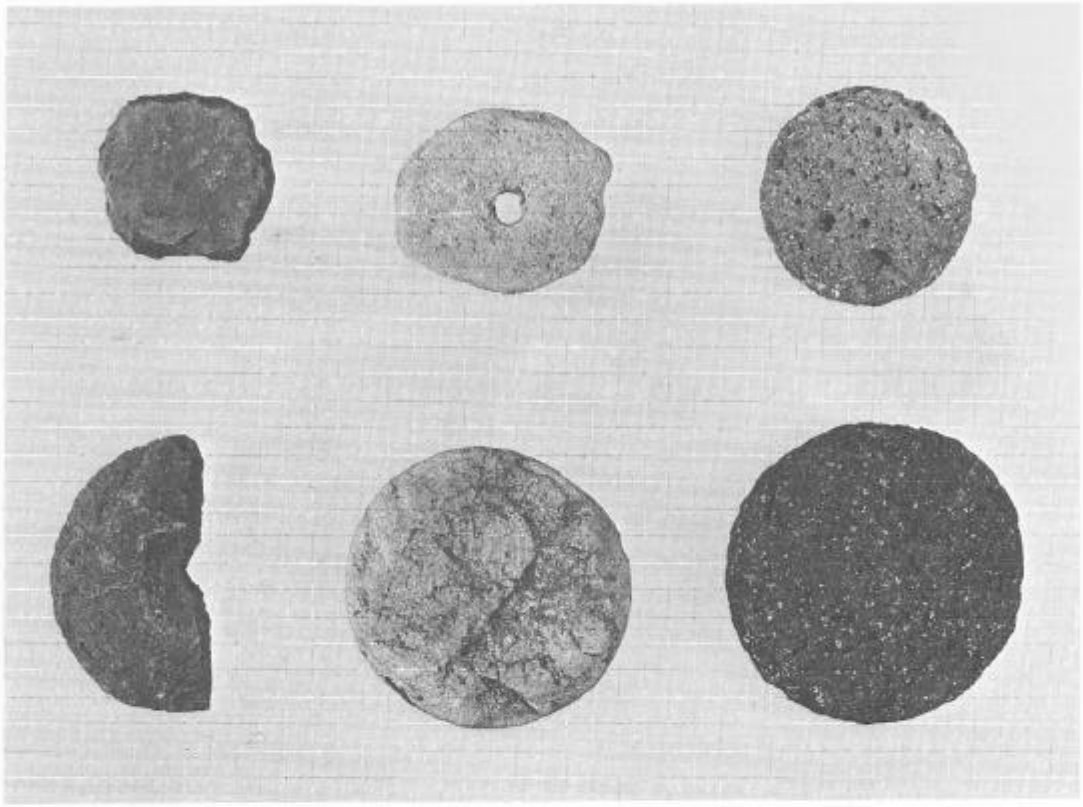


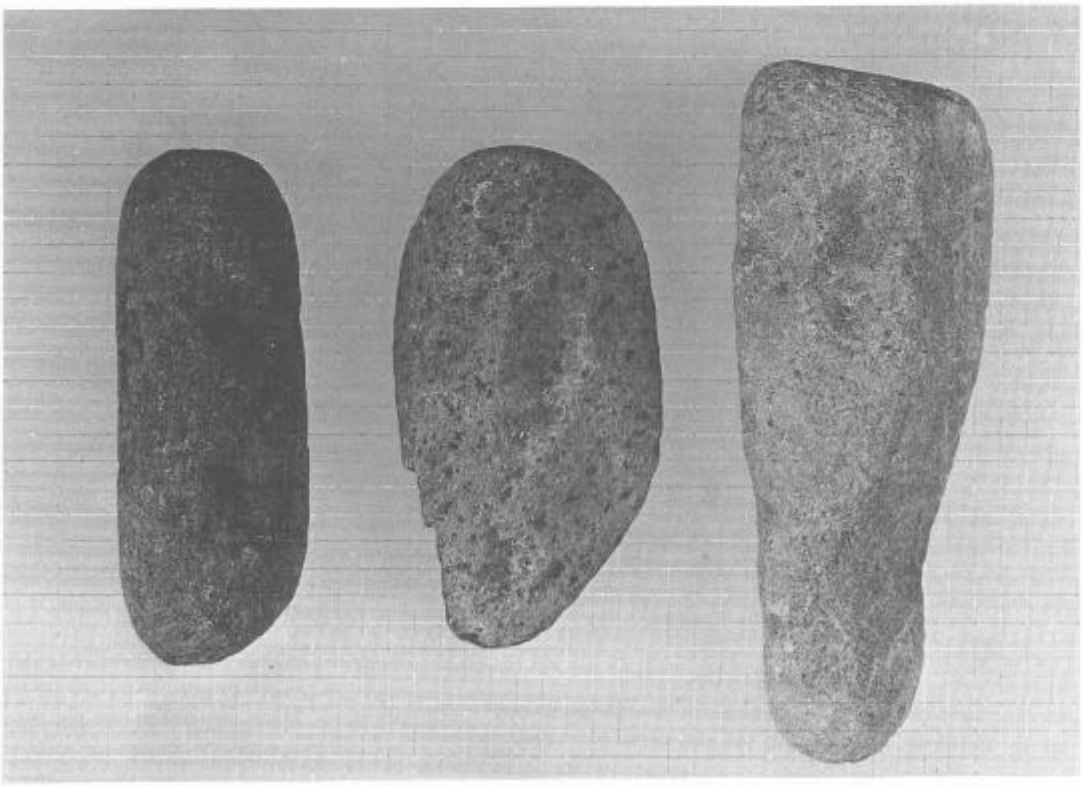
図版50　第Ⅴ層出土石器



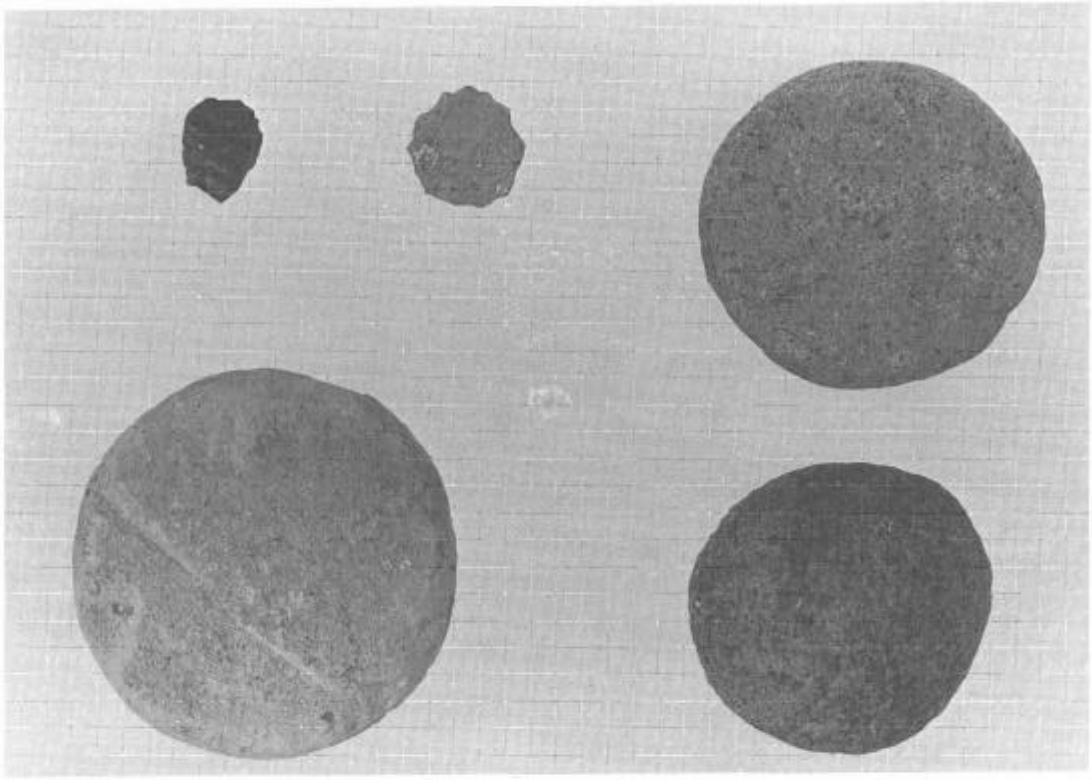


図版51　第Ⅴ層出土石器

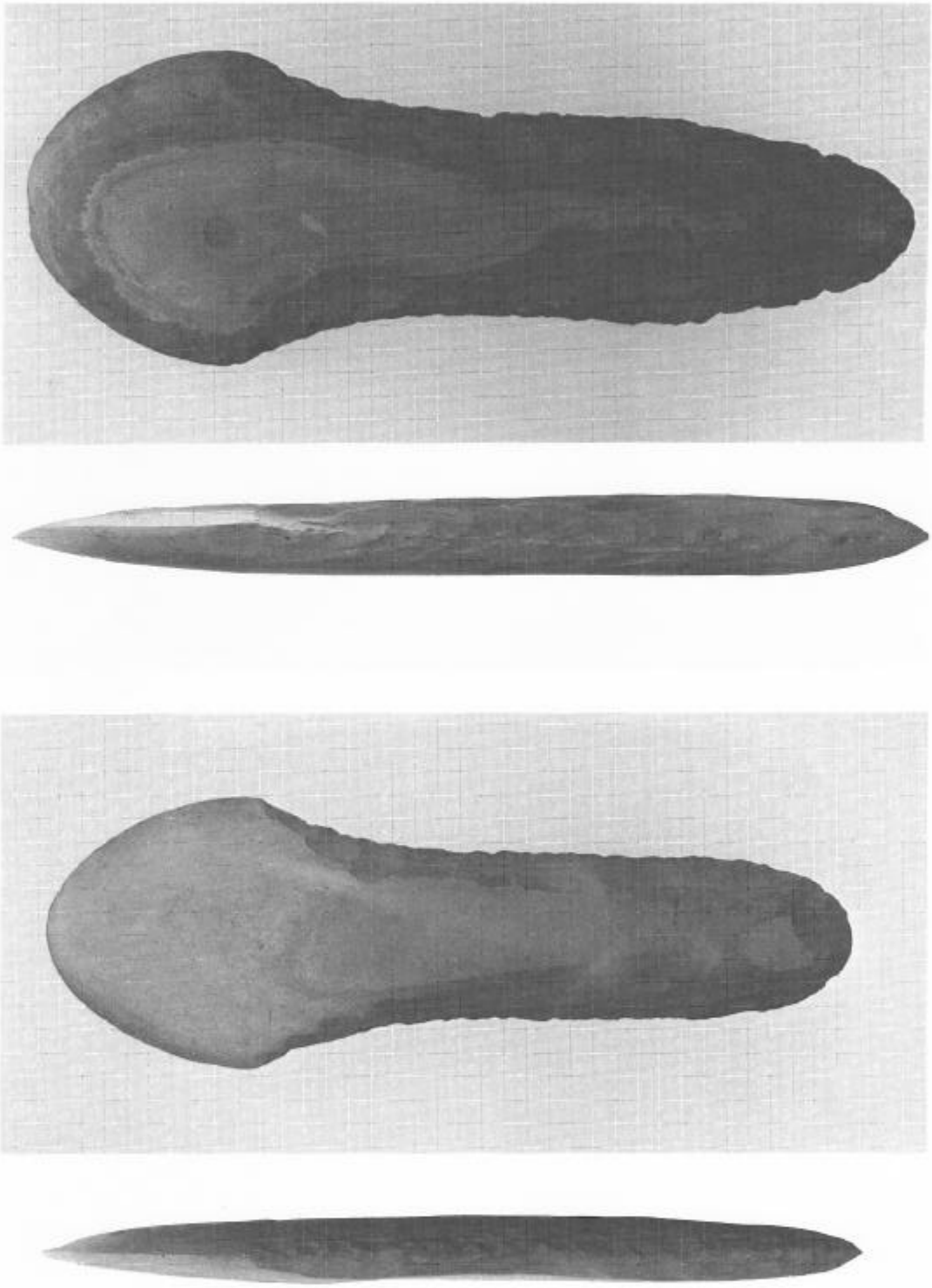




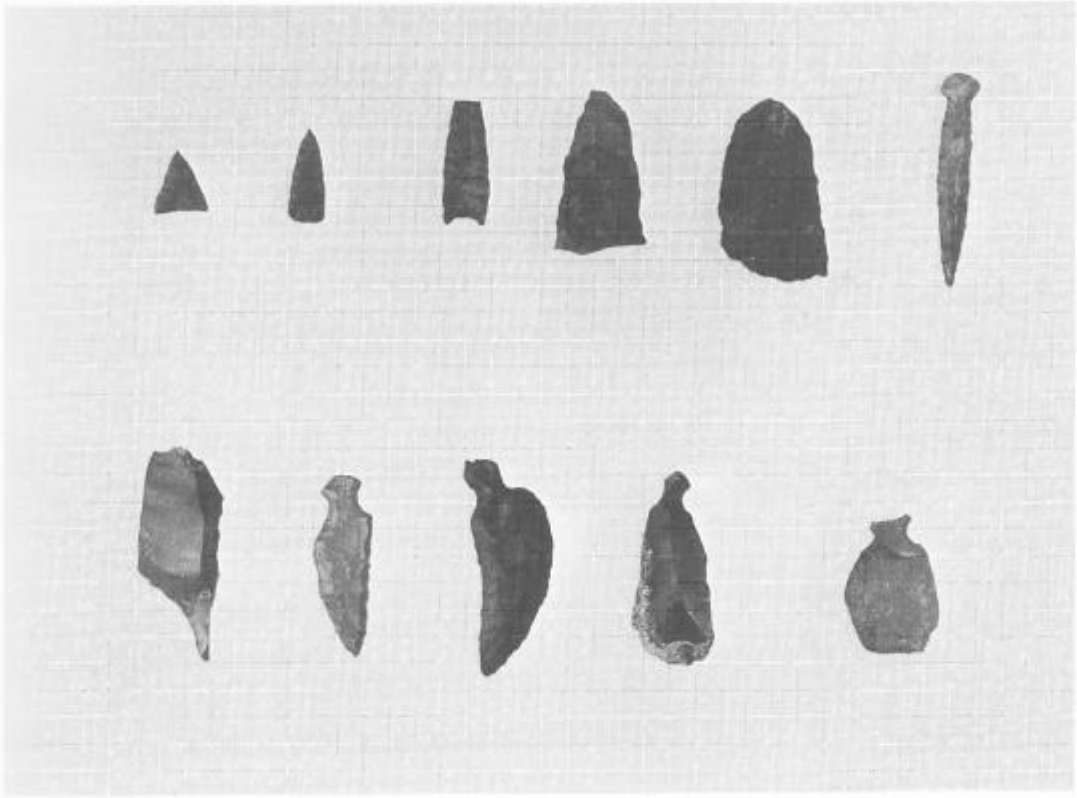
図版52　第Ⅴ層出土石器・石製品

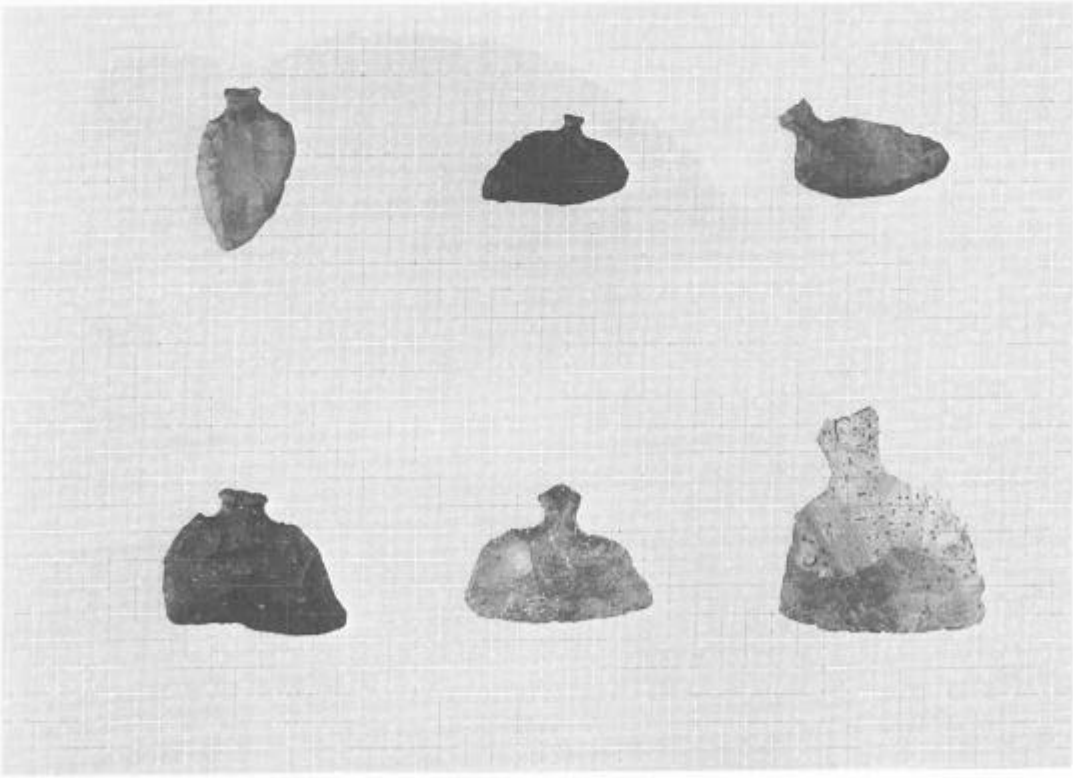


図版53　第Ⅵ層出土石器(上)

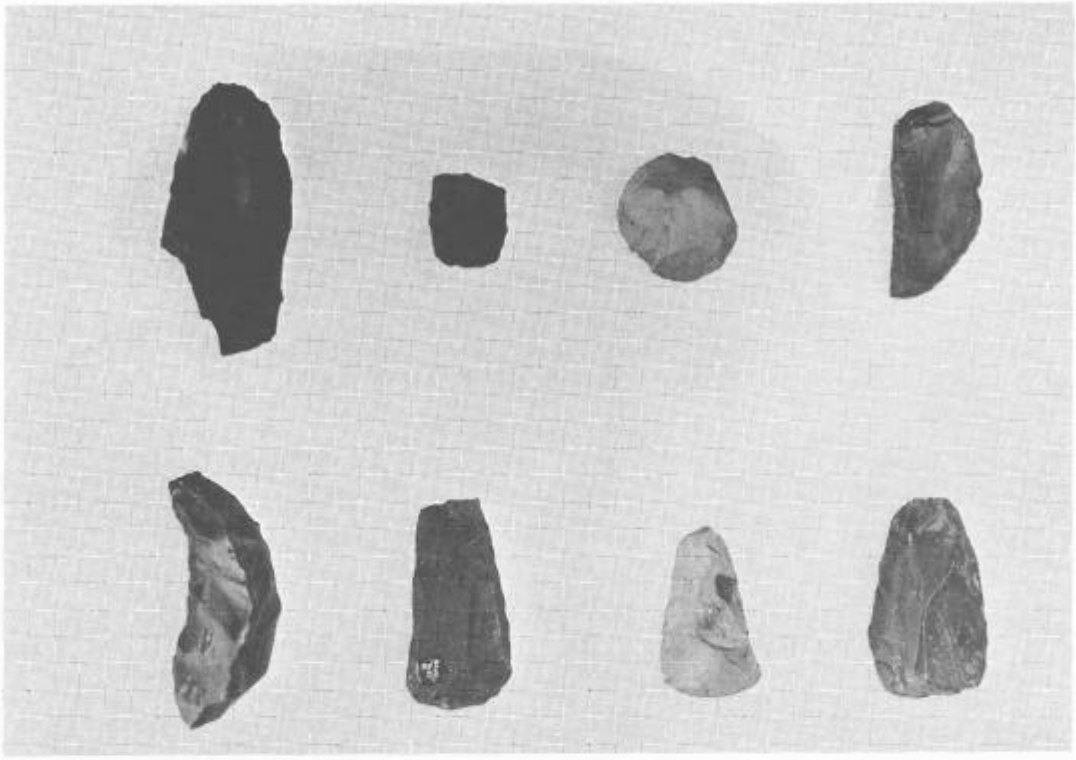


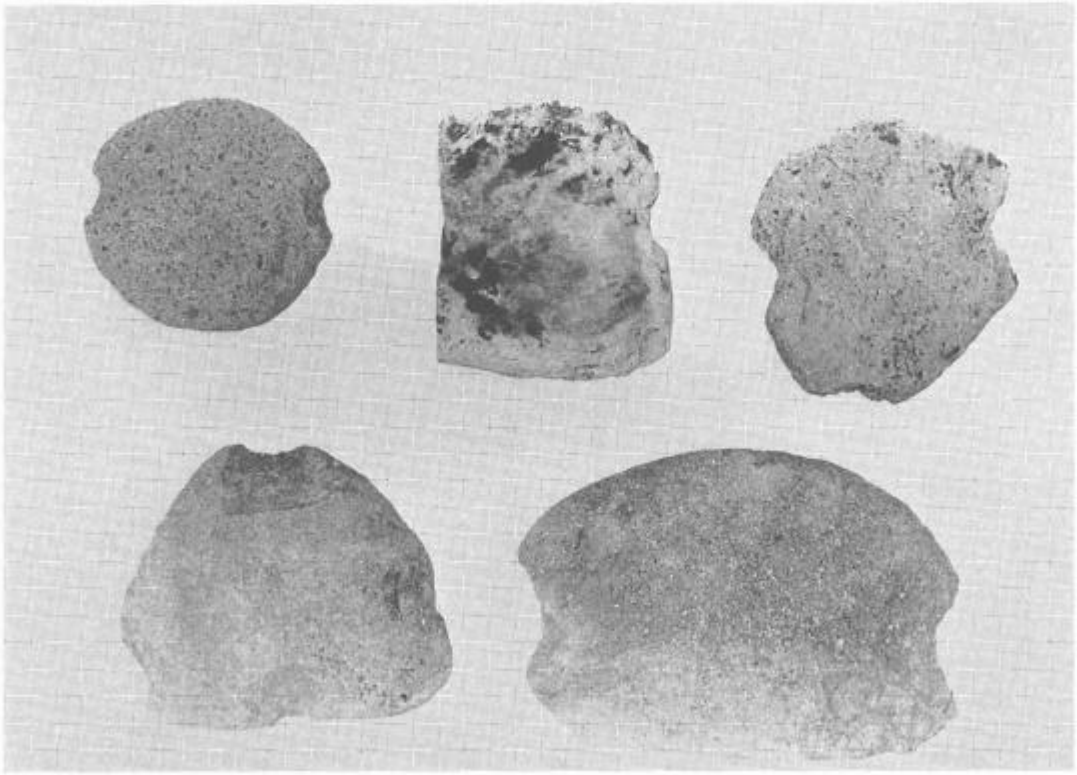
図版54　第Ⅵ層出土石器（鋒形石器）



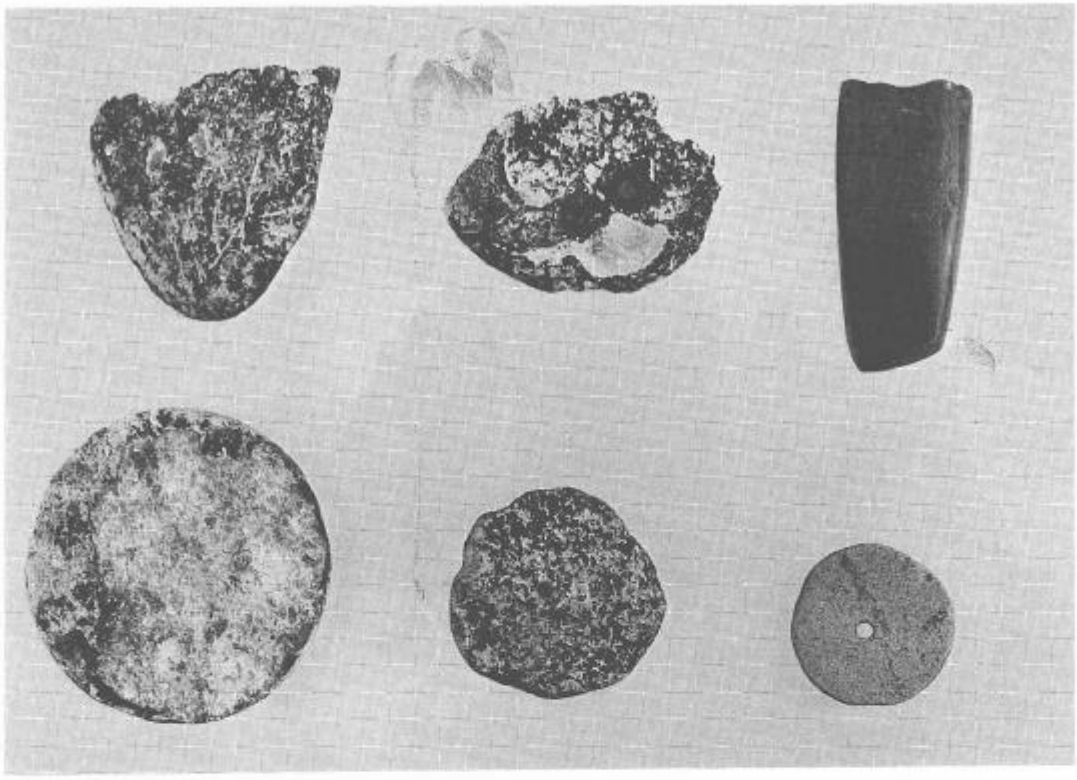


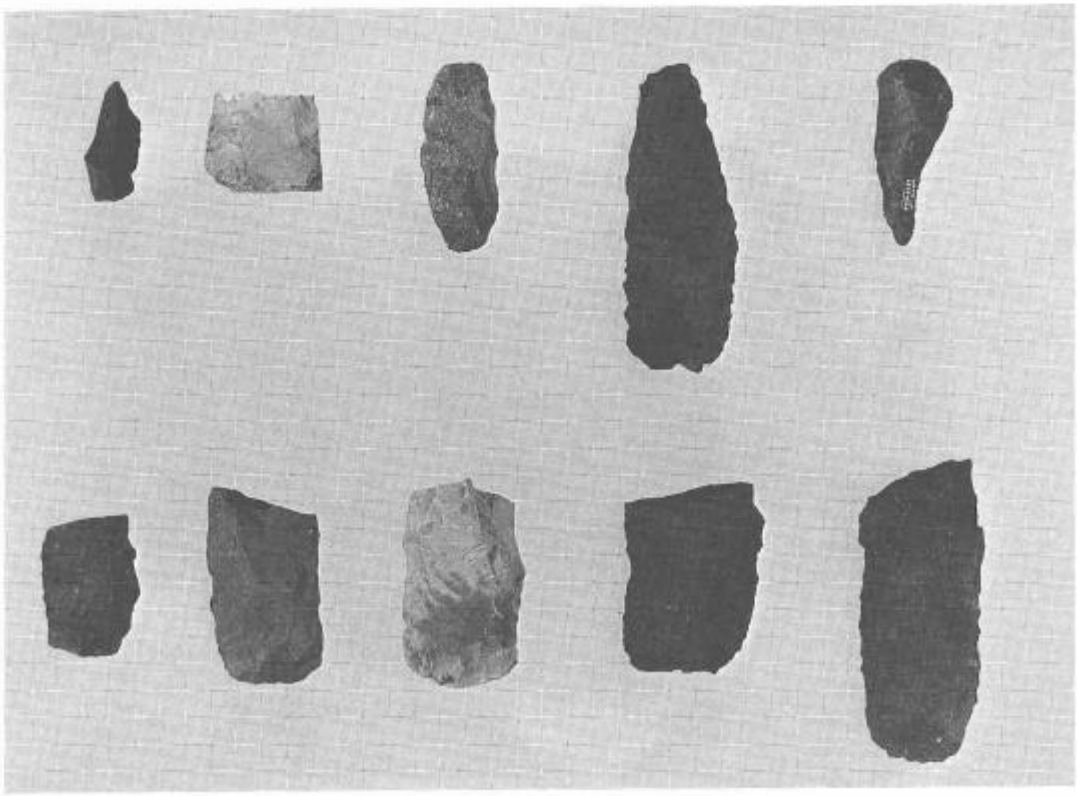
図版55　沢No.1出土石器



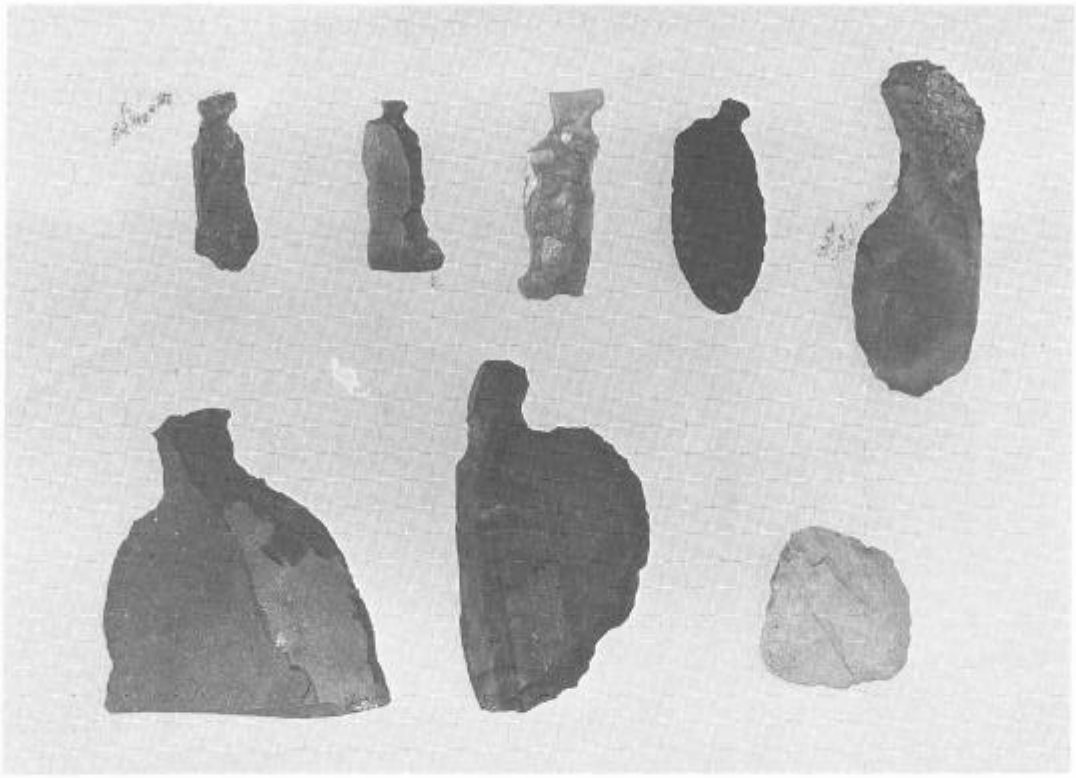


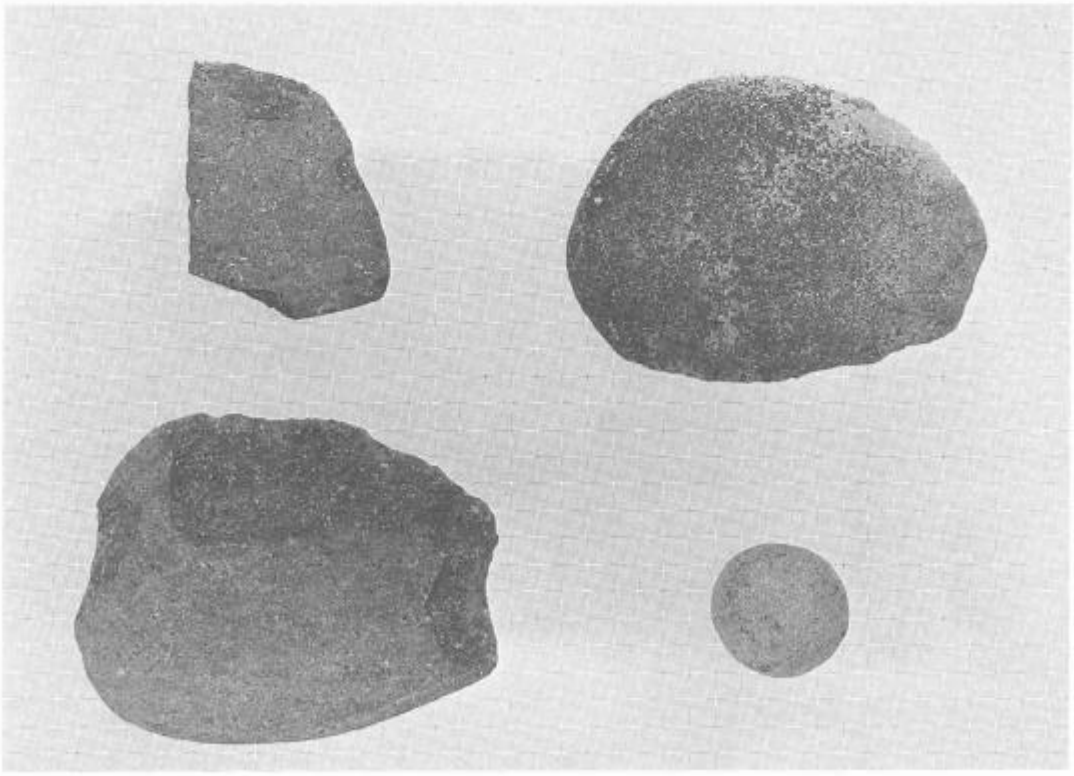
図版56　沢No. 1 出土石器



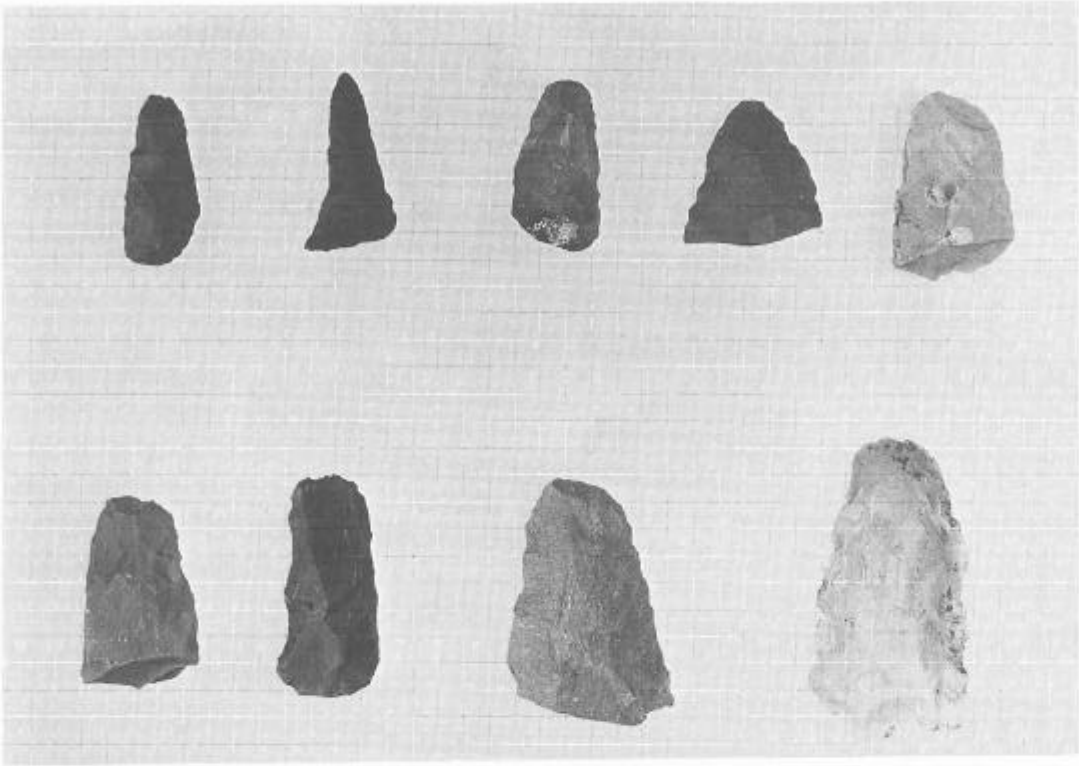


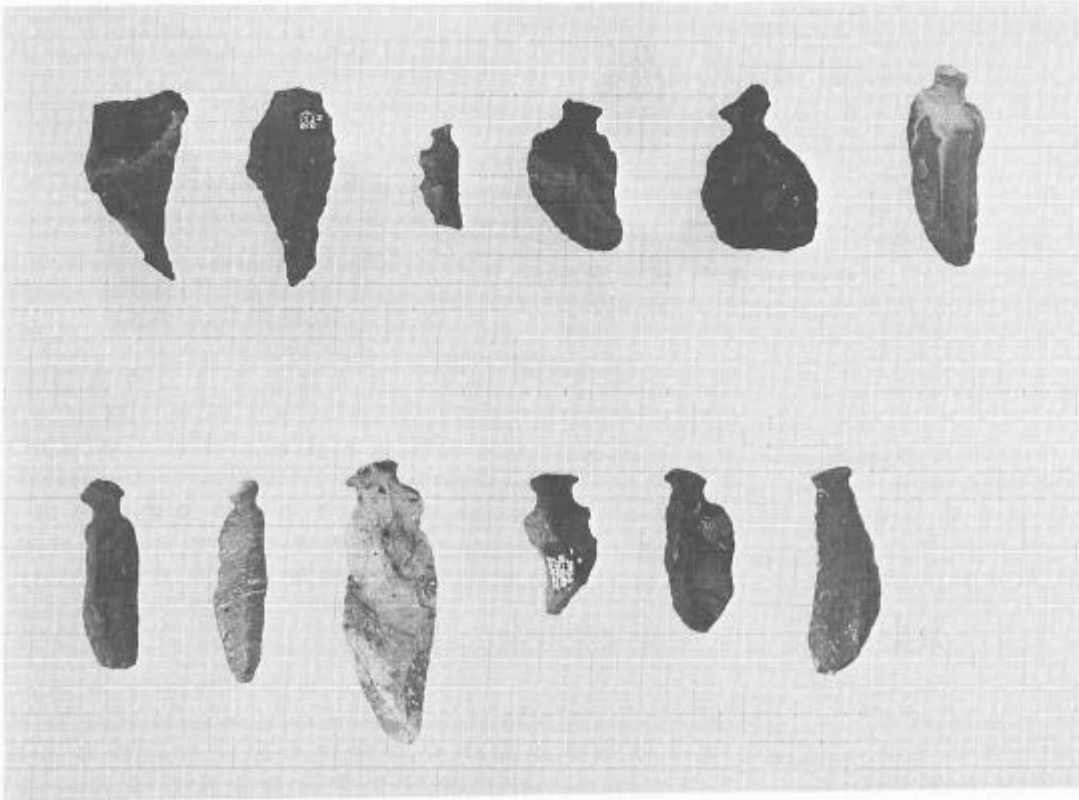
図版57　沢No. 1 出土石製品(上)，沢No. 2 出土石器(下)



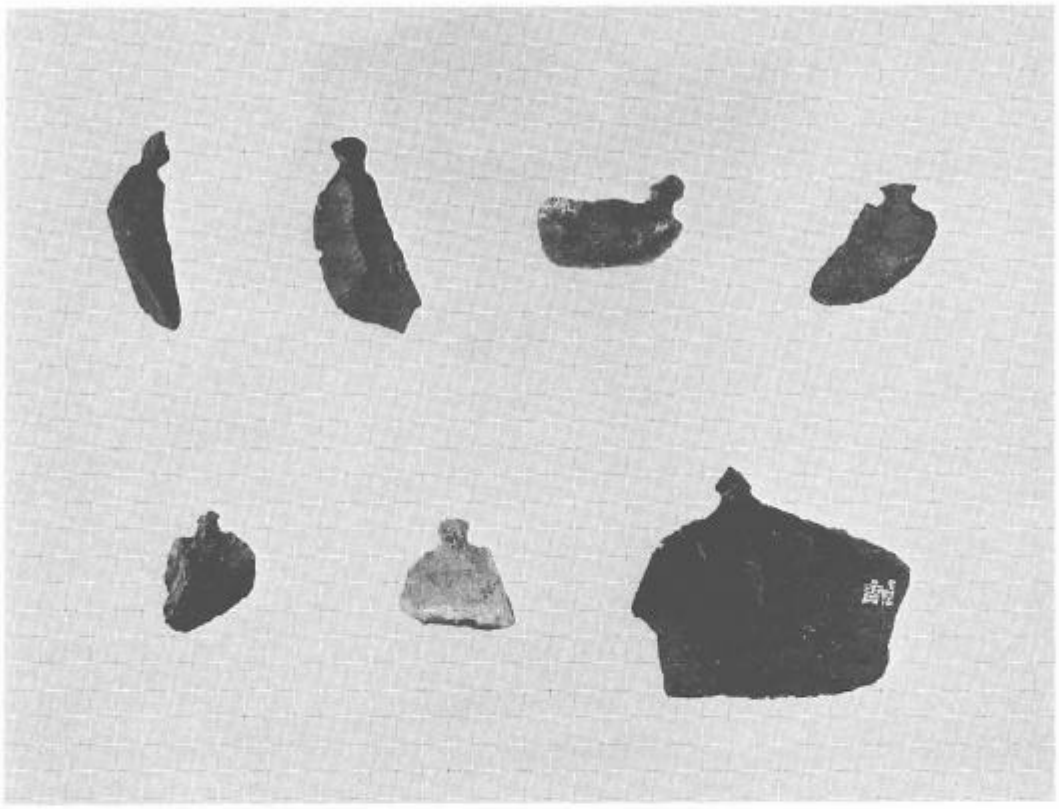


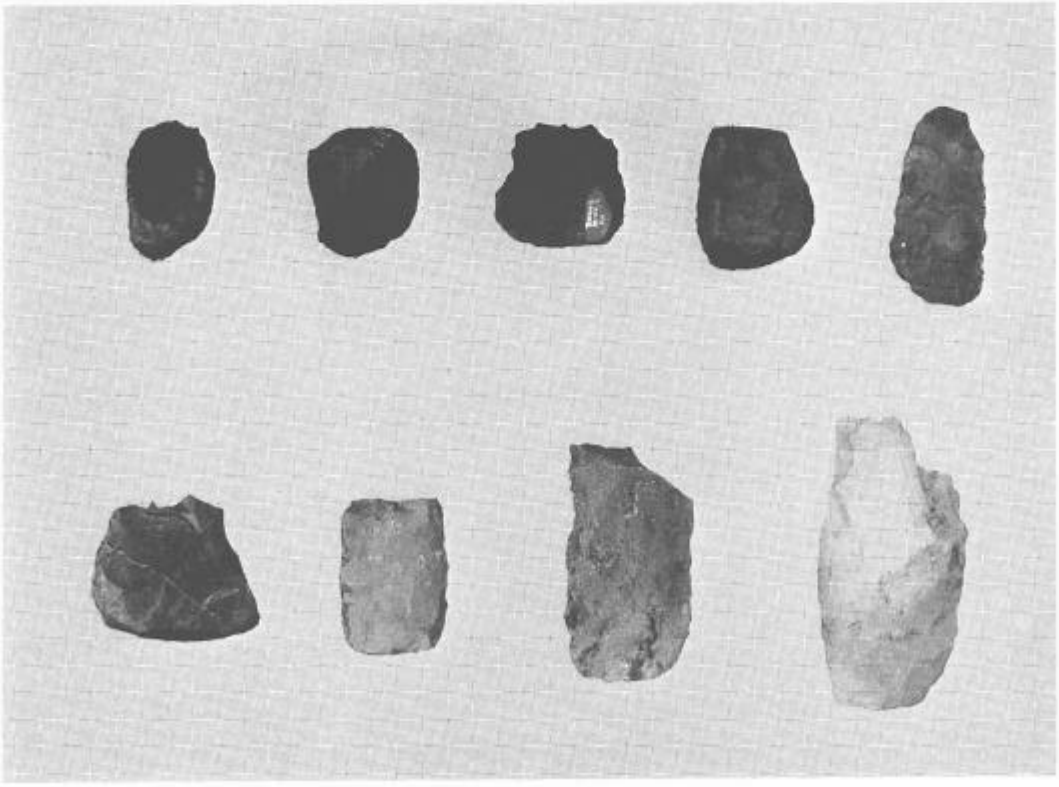
図版58　沢No. 2 出土石器



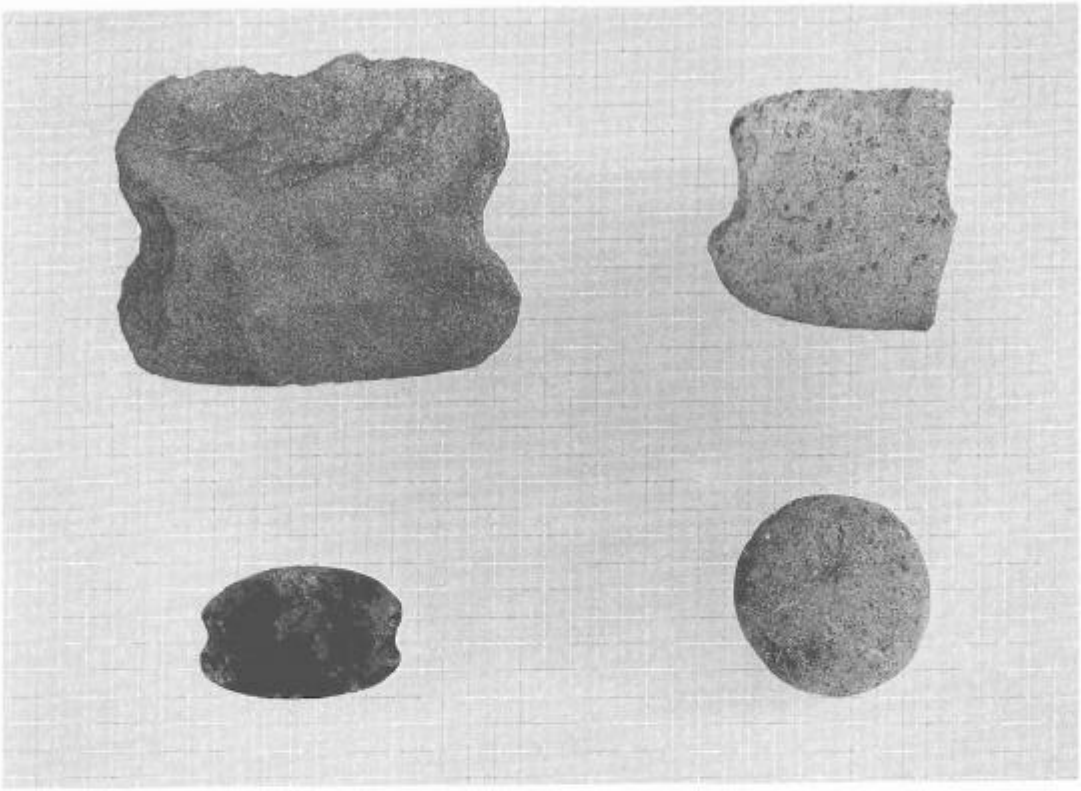


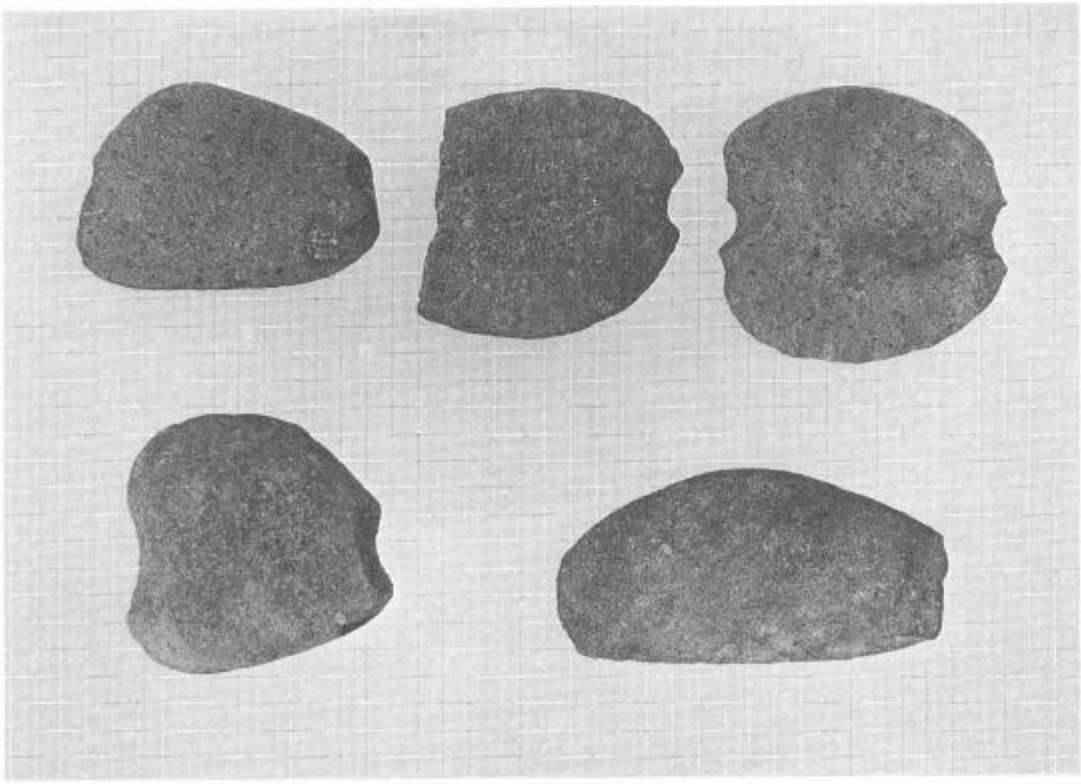
図版59　沢No. 3 出土石器



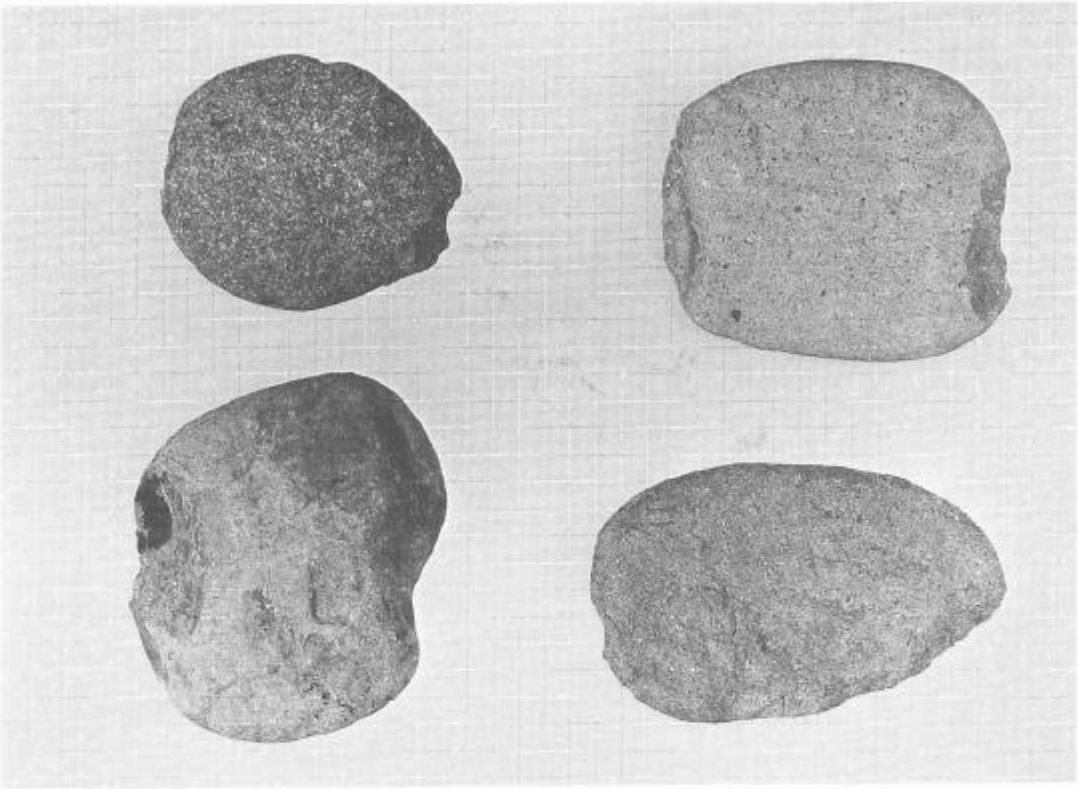


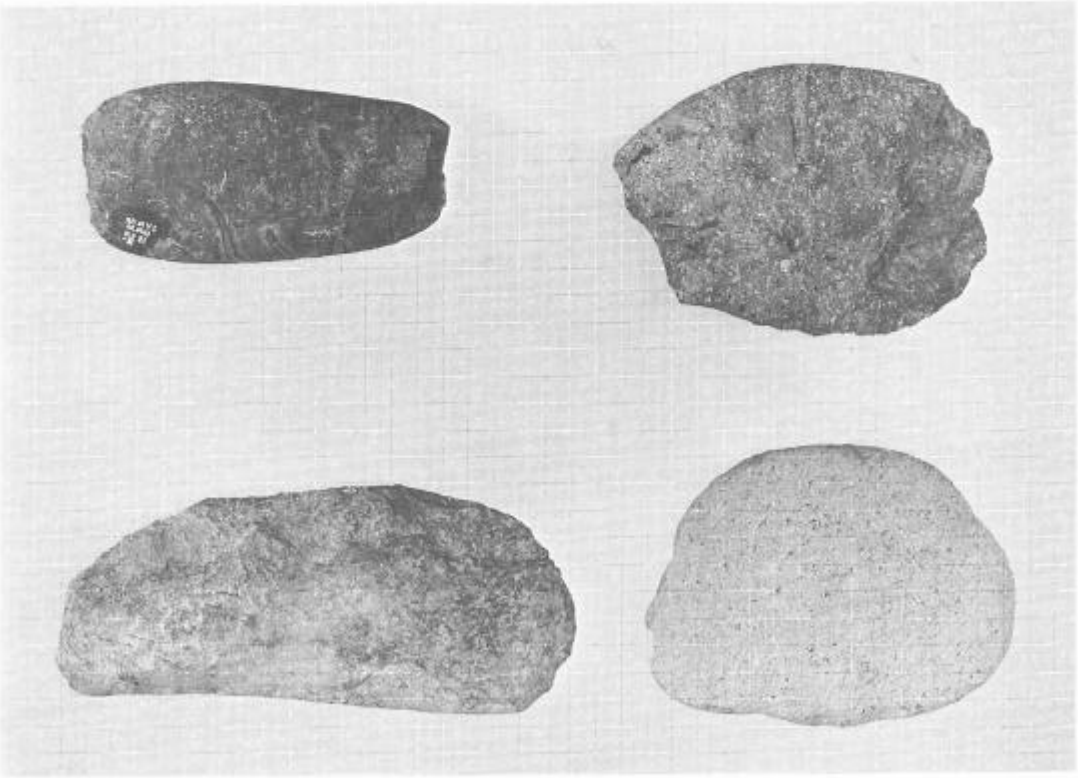
図版60　沢No. 3 出土石器



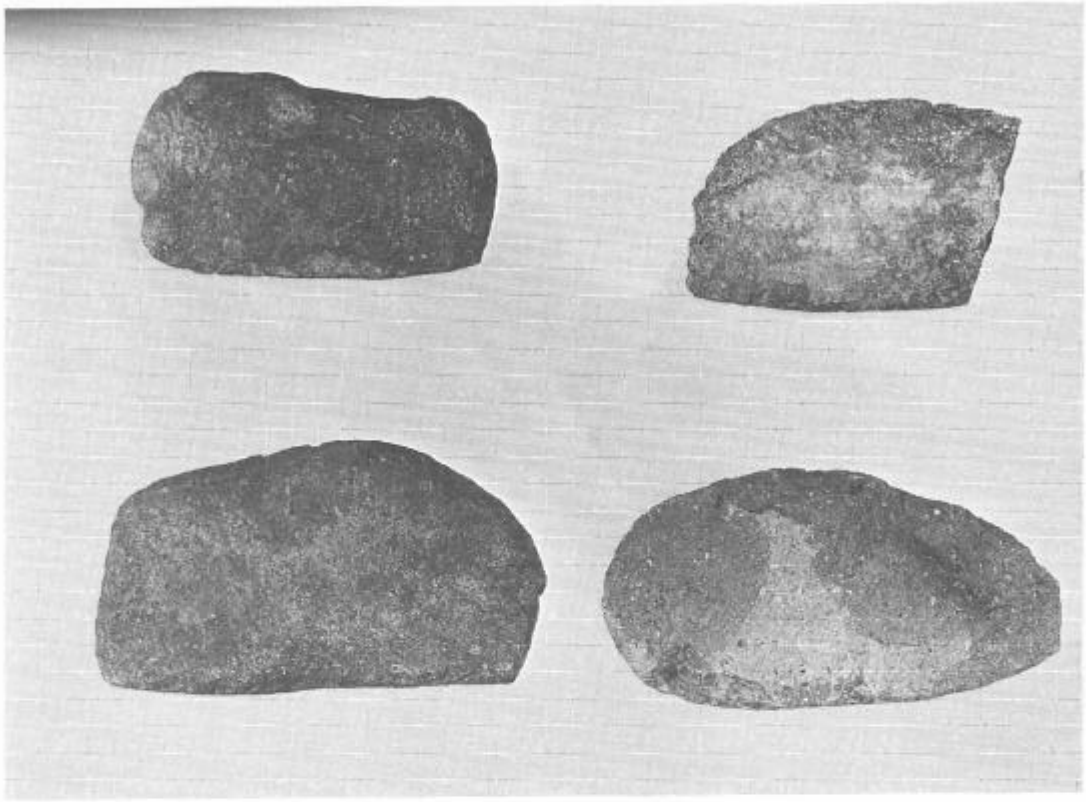


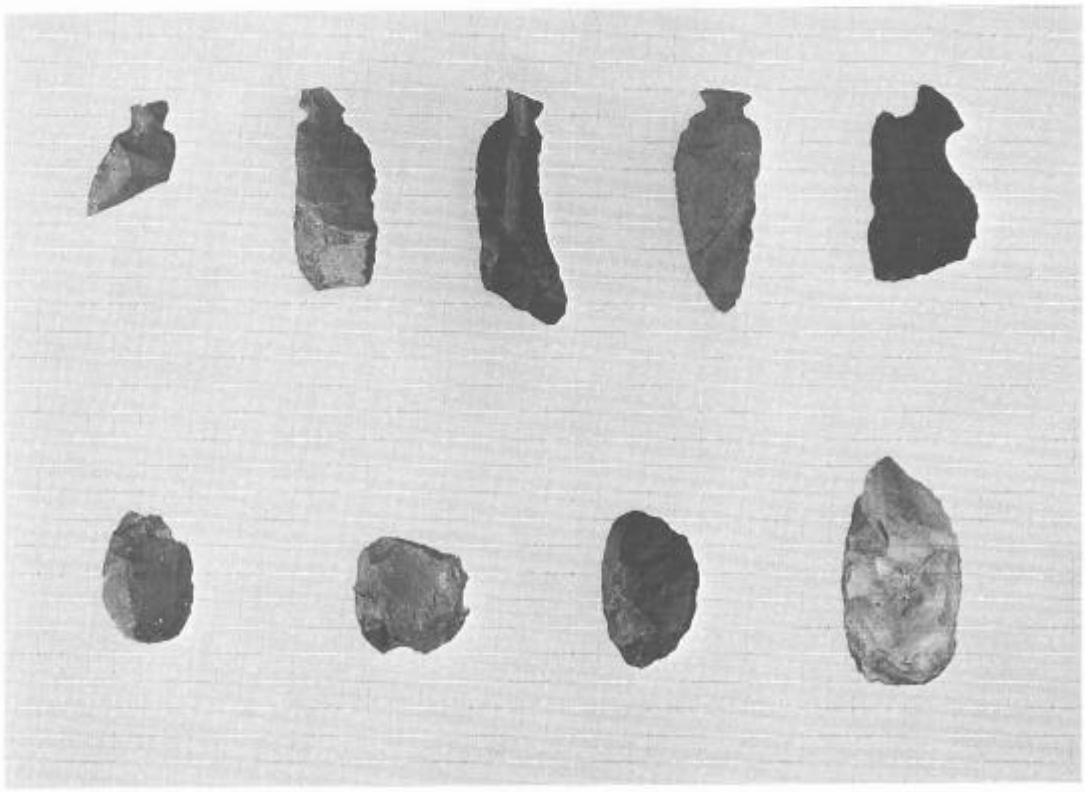
図版61　沢No. 3 出土石器



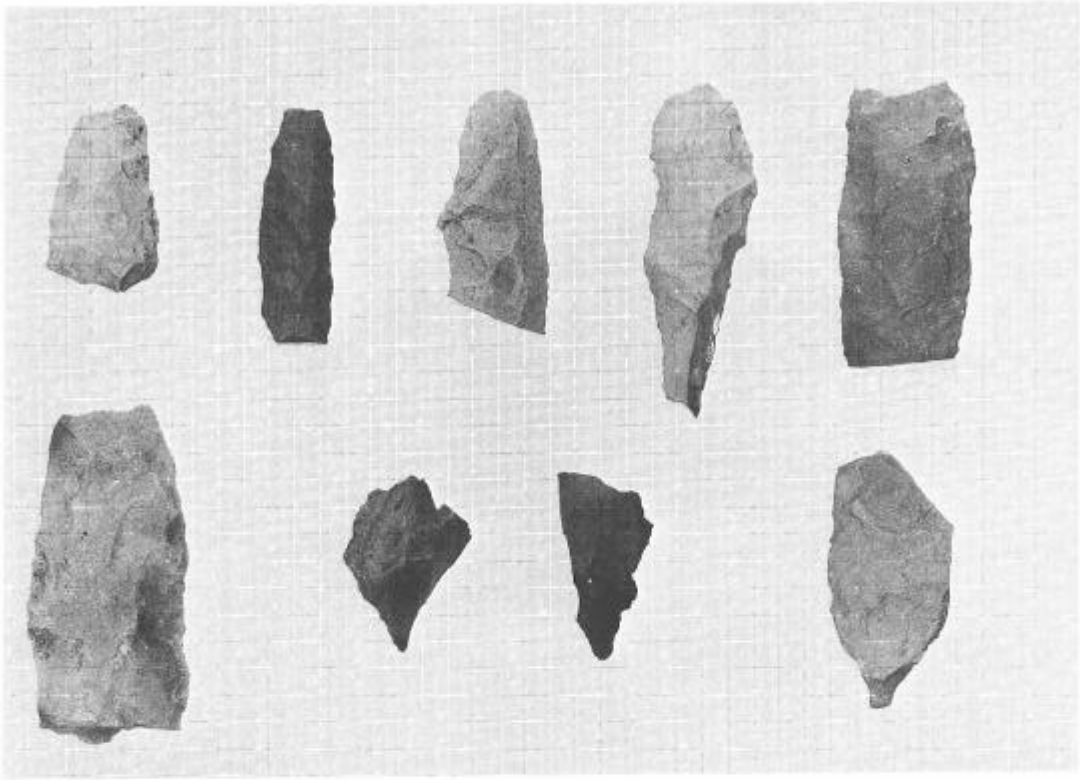


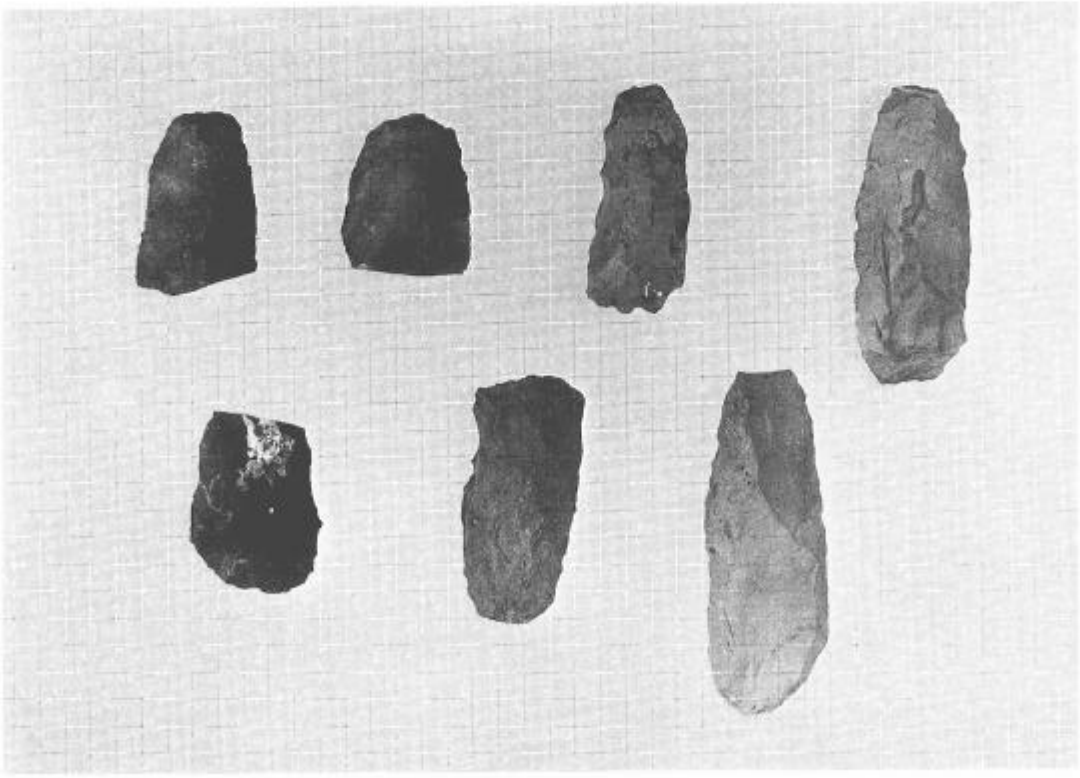
図版62　沢No. 3 出土石器



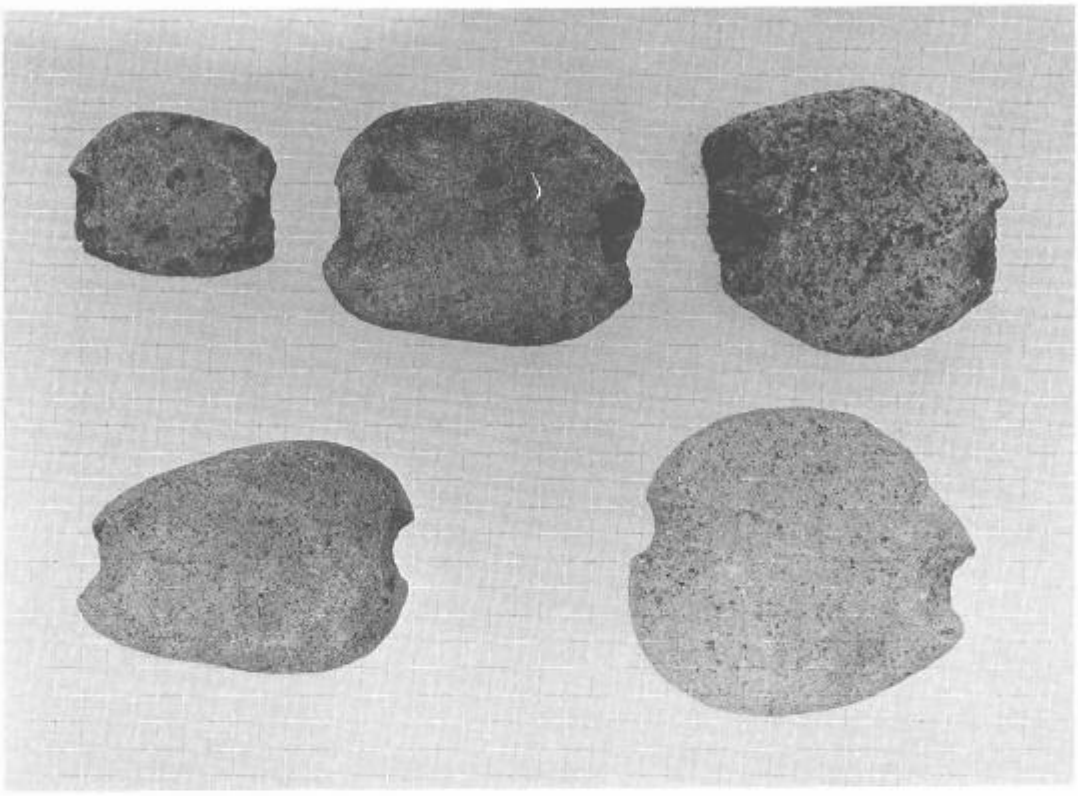


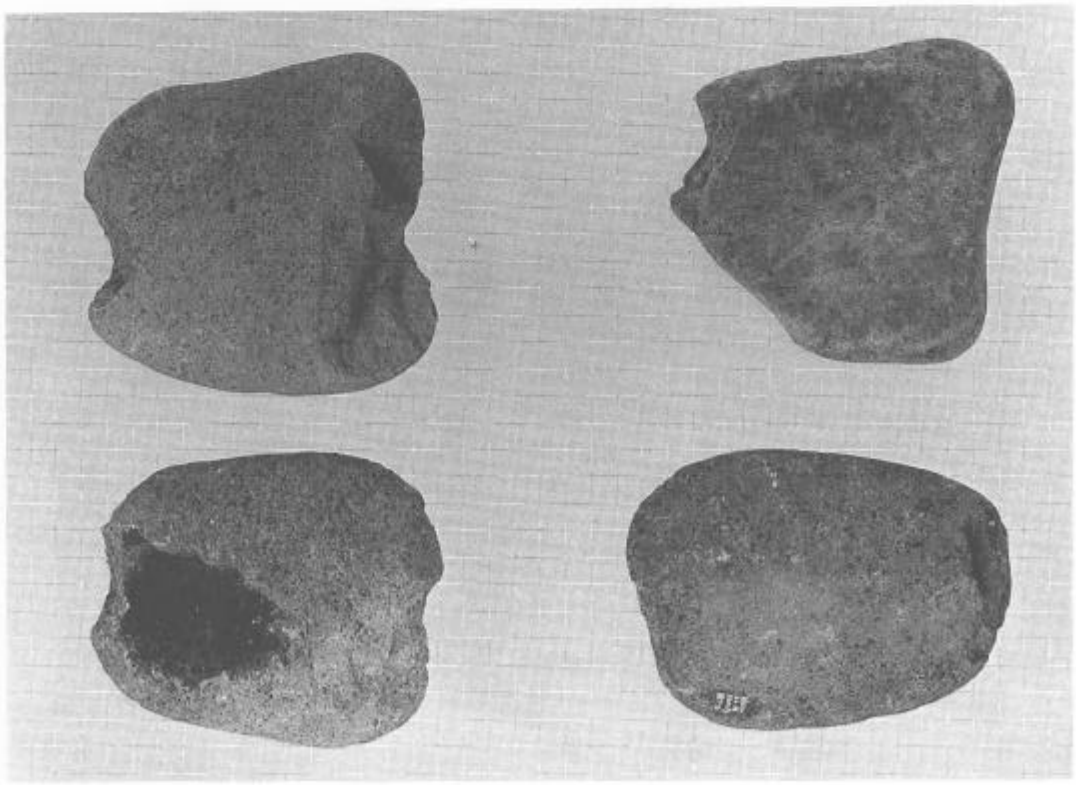
図版63　沢No. 3 出土石器(上)，捨て場出土石器(下)



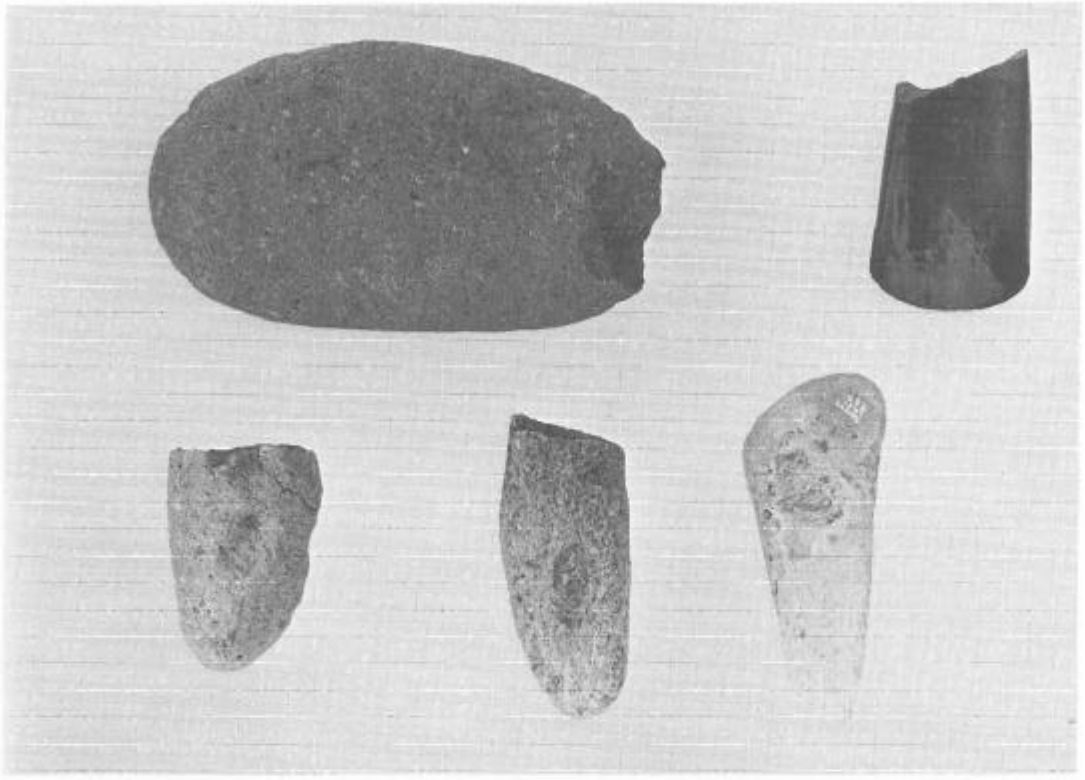


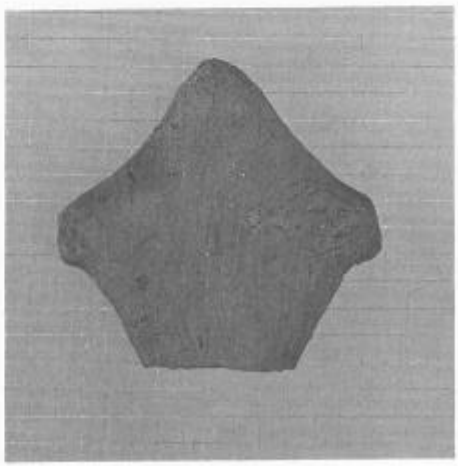
図版64　捨て場出土石器



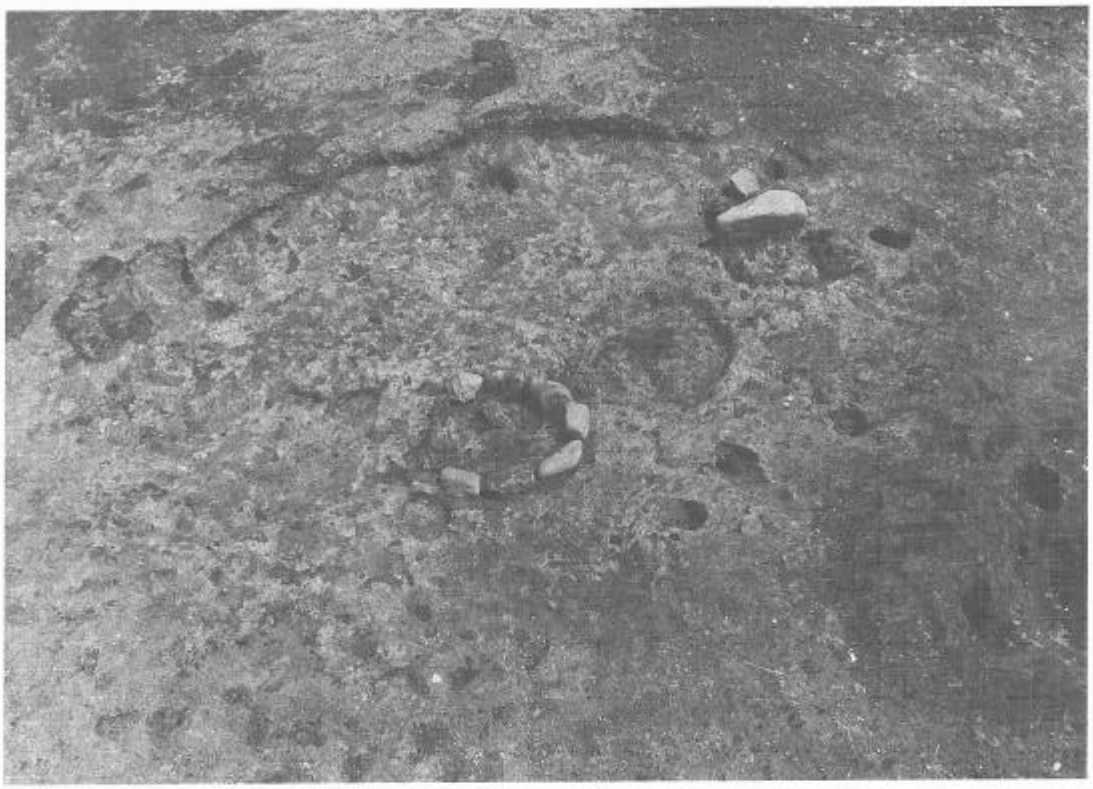


図版65　捨て場出土石器

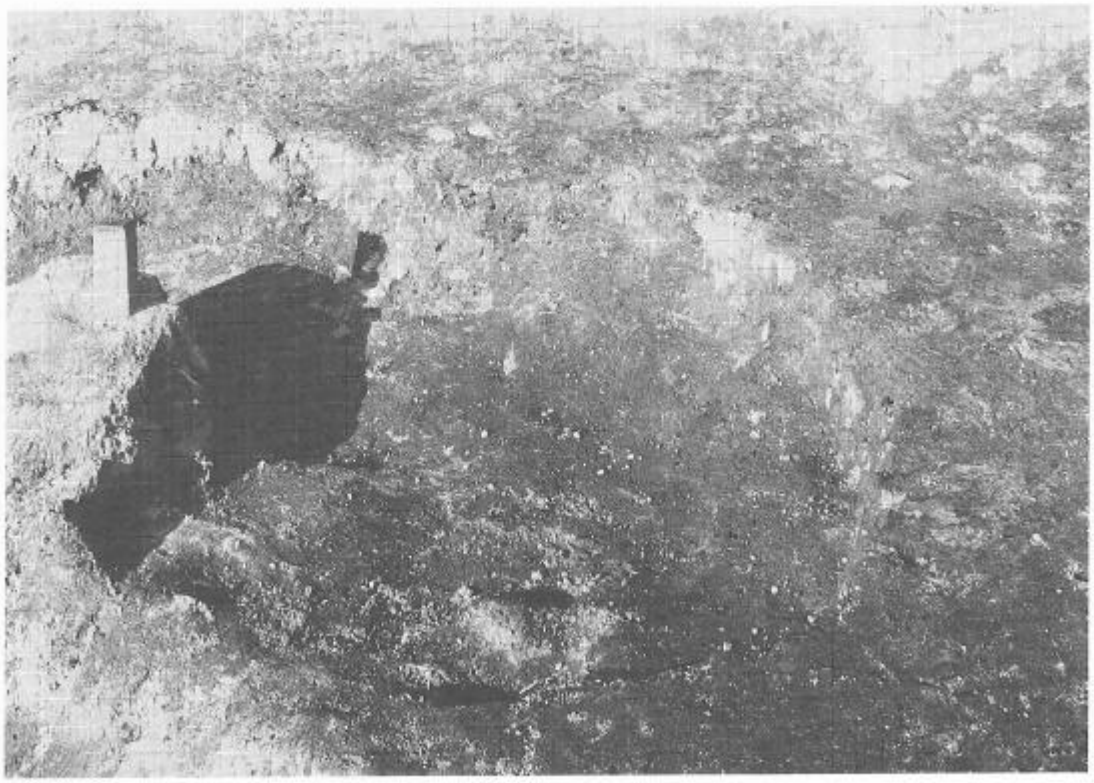




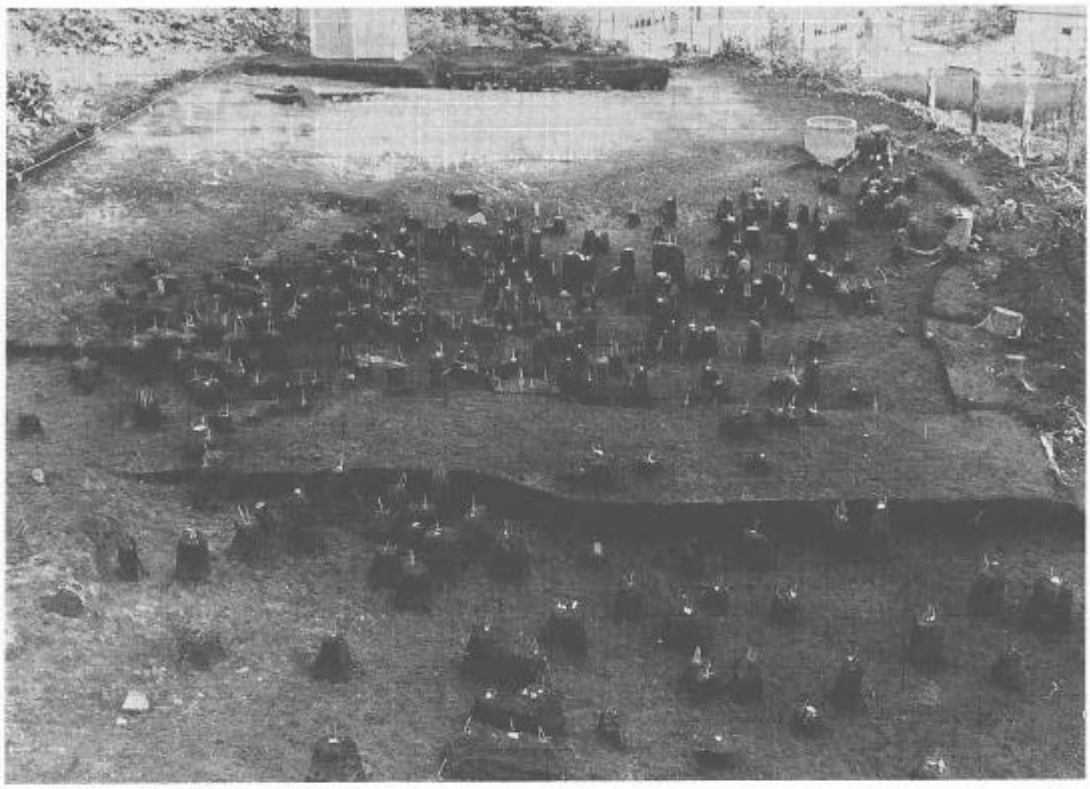
図版66　捨て場出土石器(上)，石製品(下)



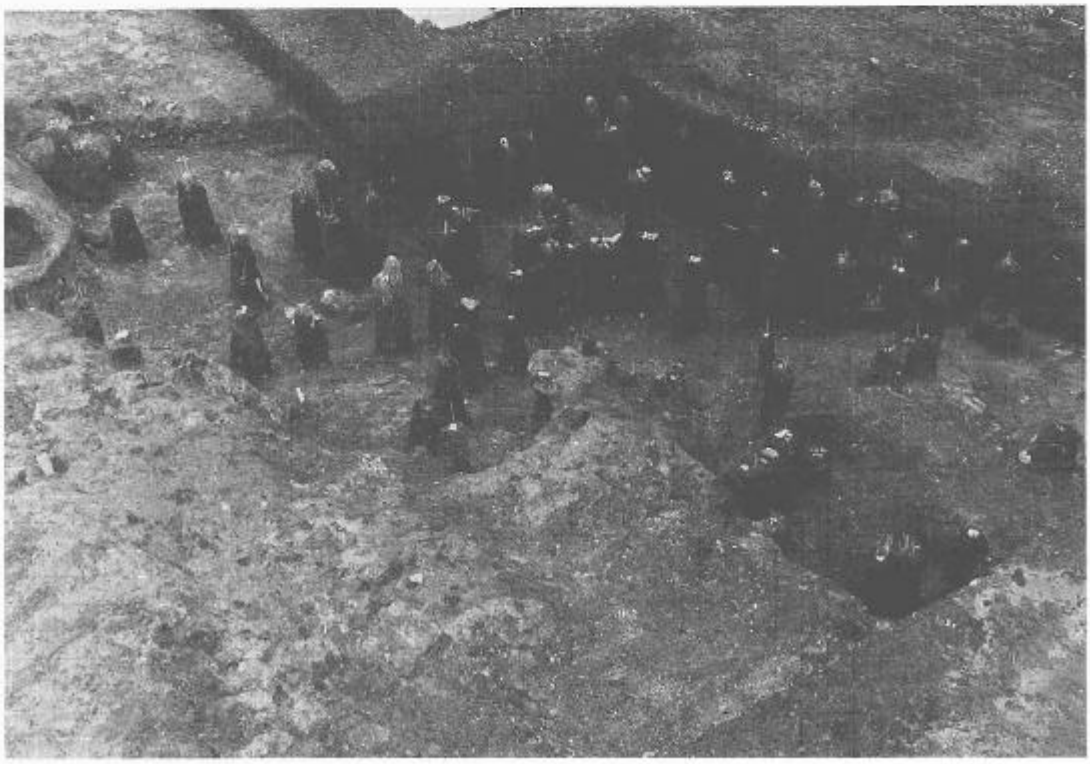
(上)SI01竪穴住居跡完掘状況
(下)SK01土坑完掘状況



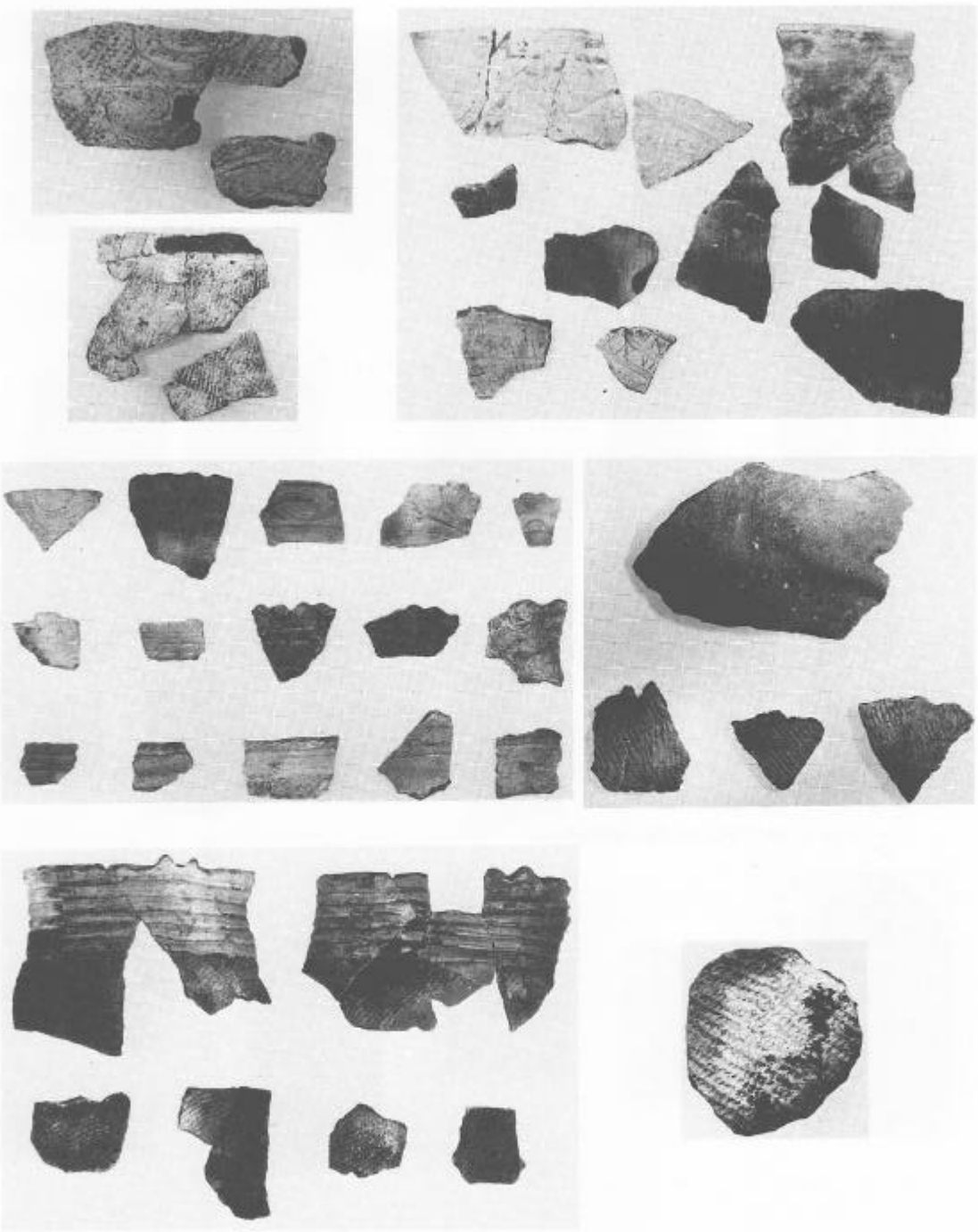
図版1　遺構完掘状況



(上)遺物散布区域(調査区中央部)
(下)遺物散布区域(調査区南端)

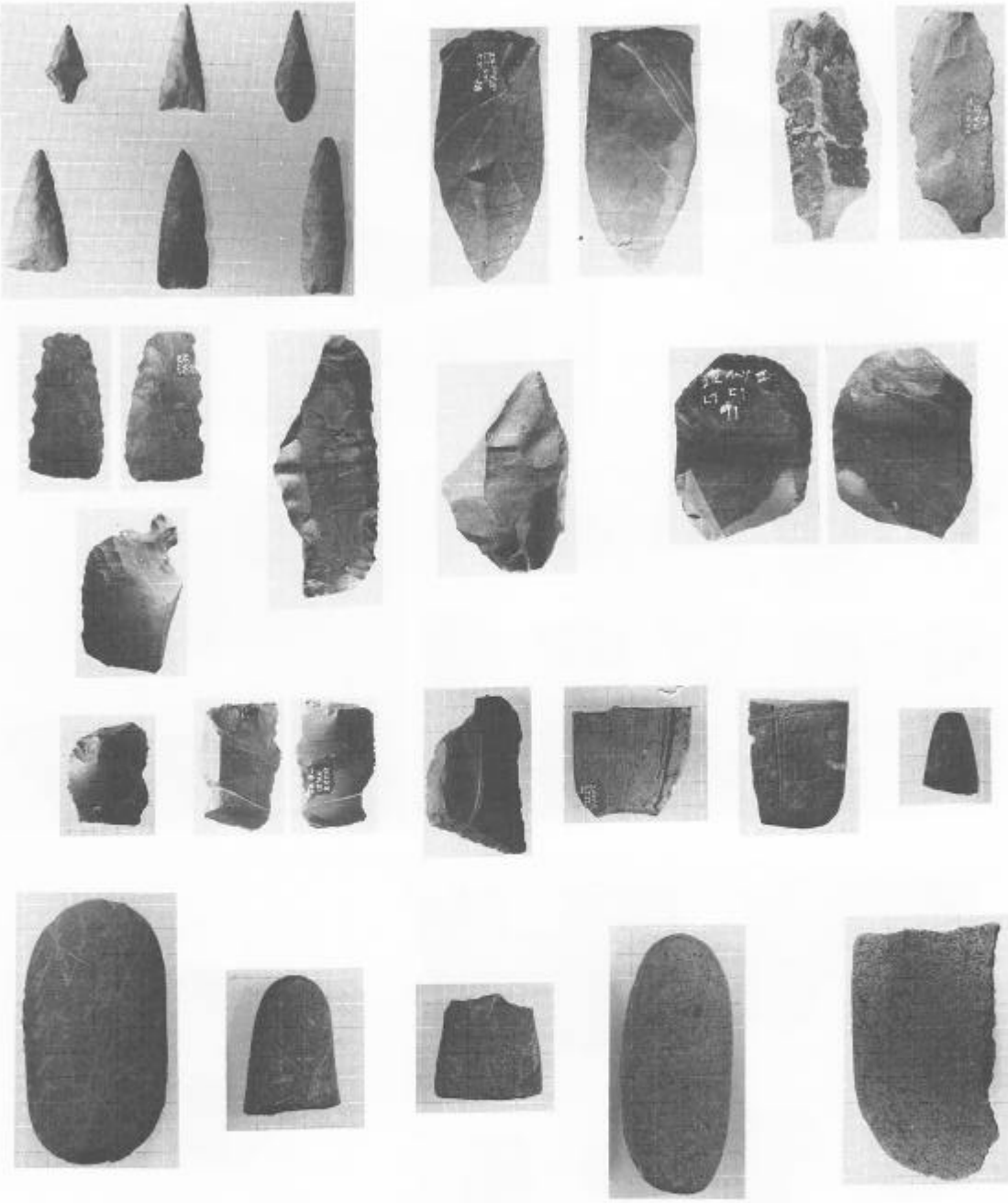


図版2　遺物散布区域



図版 3　遺物散布区域出土土器

上ノ山Ⅱ遺跡



図版４　遺物散布区域出土石器